
仮面ライダー剣&キバ 青く輝く炎

黒服

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー剣&キバ 青く輝く炎

【Nコード】

N3207L

【作者名】

黒服

【あらすじ】

これは、アンデッドを封印するために仮面ライダーブレイドとして戦う少女と、その仲間達の物語。その旅の果てに、少女はその瞳に何を見て、その手で何を掴み取るのか。

プロローグ（前書き）

どうも皆さん、黒服です。まだ今書いてるカブトの小説が終わってないのに新しい小説に手を出してしまいましたorzこちらはほとんどオリジナルのストーリーになる上に、カブトの方を重点的に更新していく予定です。こちらの更新速度は遅いかもかもしれません（汗）

プロローグ

そこにいたのは見上げるほどの巨体だった。白い蛇のような体、4本の腕、彼女はその姿を満身創痍になりながら見上げている。周りには倒れている彼女の仲間達、皆ダメージが大きいのかなかなか立ち上がらない。

「くそ、こんな・・・ところで・・・。」

あまりにも絶望的な状況、はっきり言って勝ち目がない。それでも・・・

「それでも、あたしは諦めない・・・絶対に、諦めるもんか!!！」

そう言いつつ彼女は自身が持つ切り札を切るべく左腕に取り付けられている装置――ラウズアブゾーバーから二枚のカードを取り出す。取り出したのはランプの様なカードで絵柄はスピードのQ^{クイーン}とK^{キング}だった。

《ABSORB QUEEN》

Qのカードをアブゾーバーに挿入し、

《EVOLUTION KING》

Kのカードを装置のスリットに通すと、彼女の体を金色の光が包み込む。それと同時に巨大な化け物が火球を彼女に向け吐き出した。火球は彼女目掛けて一直線に飛んでいき・・・

「……ん、んうう……。」

とある部屋にあるベッドの上、そこで少女は目を覚ました。早起きにしても早すぎる時間であるが、これが彼女にとっての日常である。

「うー、何か朝っぱらから変な夢見ちゃった。……あれ、どんな夢だっけ？ えーっと……。ま、いいか。」

そう言うと彼女は日課のトレーニングを行うために、何時もの服装に着替え始める。

「さて！ 今日からあたしも本当の意味での仮面ライダーデビューが始まるんだから、気を引き締めていかないとね！」

そう言う少女ー桐沢 青羽ーはまだ知らない。今日この日、彼女が仮面ライダーとして旅を始めるこの日から物語が動き出すことを……。

プロローグ（後書き）

というわけでまずはプロローグでした。前書きにも書きましたがカブトの方を優先させる関係上こちらは更新が遅くなると思います。とりあえず次回は登場人物設定などです。

登場人物紹介・その他（前書き）

どうも、黒服です。というわけでまずは登場人物と、この作品内での設定の紹介です。

登場人物紹介・その他

登場人物

桐沢 きりさわ 青羽 あおば／仮面ライダーブレイド…18歳・女

背中の中ほどまである青髪をポニーテールにした、モデル並みのスタイルを持った少女。性格は明るくさっぱりとしており、目の前で困っている者を見過ごせない優しさを持っている。ライダーとして戦っているのは、父がかつてライダーとして戦っていることに憧れを抱いており、そんな父を超えたいと思ったのがきっかけ。言うまでもなく夢は父を超えるライダーになることで、そのために日夜修業に明け暮れている。

トレードマークは何時も着ている白いジャケットの背中にアップリケされた、剣を構えた戦乙女。母に付けてもらったもので、彼女の宝物でもある。

ノーマ・イクス／仮面ライダーカリス…外見年齢18歳・女

外見はセミショートの銀髪に赤い瞳の美少女だが、その正体はアンドッドを封印するために作られた人造人間の試作体『トライアルX』。その為身体能力はアンドッド並みで、アンドッドを感知する能力も持っているが、それ以外は普通の人間と特別な違いは無い。常に赤いサングラスで顔の半分ほどを隠している。

感情の起伏に乏しく、話しているとまるで機械の様な受け答えしかしない。だが決してただの機械と言うわけではなく、時には自身の意見を主張したりと人間らしい一面も見せることもある。試作体である上にライダーシステムが完成してからは無用の長物と化していたが、何らかの理由で起動。その後は自身の中にある『アンドッドを封印する』という命令に従って行動している。

【仮面ライダーカリス】

ジョーカーの能力を解析して作られた零号ライダーシステム。カリスラウザーを腰に当てると、ラウザーが自動的に装着されて、ハートのAをスリットにスラッシュすることで変身する。変身できるのはAのカードのみで他のカードでは変身できない。

桐沢 きりさわ 信司 しんじ／仮面ライダーブレイド・レジェンド…40歳・男

青羽の父で、かつては仮面ライダーとして戦ってきた人物。過去に戦いで傷を負い、現在はほとんど引退の身となっている。彼の家の収入は時たま彼が行うダークローチの討伐などからなっている。

【仮面ライダーブレイド・レジェンド】

性能的にはノーマルのブレイドと大差ないが、ライダースーツ部分の色が灰色になっている。

桐沢 きりさわ 明日香 あすか…40歳・女

青羽の母、優しく温厚な性格。過去に何か罪を犯しているようだがそのことを知っているのは、彼女の家族しかない。もう結構な年齢の筈なのに見た目は全く衰えを見せていない。

桐沢 きりさわ 紅羽 くれは／仮面ライダークリムゾンブレイド…18歳・女

青羽の双子の姉妹で、青羽よりも早くにライダーとして戦っている。青羽と同様父を超えることを目標としており、そのために一人で武者修行すると言って現在は家にいない。外見は髪と瞳の色が赤い以外は、青羽と違いはない。性格は青羽とは対照的にドライで、かなり冷めている。

【仮面ライダークリムゾンブレイド】

ブレイド・レジェンドと同じく性能に違いは無いが、ライダースーツの色が赤く、アーマーも黒い。

この世界のアンデッド

この世界ではアンデッドは53体以上いて、同一のアンデッドで

もスーツが違ふことがある。またスーツなしのアンデッド『ダークローチ』もジョーカーから生まれるわけではなく、同種の『クインローチ』から発生している。

それ以外にも通常のアンデッドとは違い幻獣種の始祖であるアンデッドも存在している。

ラウズカード設定

先に述べた通り同じアンデッドでもスーツが違ふことがあるため、例えばスピードの6『ディアー・サンダー』にもハートやダイヤのバージョンがあったりする。その関係で本来はコンボに加えることが出来ない【キック】と【ファイア】をコンボさせることなどが出来る。逆にスーツが違ふとコンボが成立しない。

この世界での仮面ライダー

この世界では仮面ライダーは一般に認知されており、アンデッド封印協会？ボードに登録することで誰でもライダーになることが可能。通常は市販のライダーシステム【ダガー】などを使用するが、中には青羽のように自前のライダーシステムを使用する者もいる。また、使用しないカードは協会に持っていけばカテゴリーに応じた金額で買い取ってもらえる。

【仮面ライダーダガー】

協会が開発した汎用性の高い量産型ライダーシステム。外見は【ランス】【ラルク】が黒くなり、頭部の左右に付いている【A】を模した突起が無くなったモノになっている。武装はグレイブラウザーが黒くなったような外見の【ダガーラウザー】。

登場人物紹介・その他（後書き）

というわけで登場人物の紹介でした。ちなみに作品タイトルが【剣&キバ】となっておりますが、キバ自体はそんなに前には出てこないかものです。この作品内ではファンガイアは出て来ますがその程度と考えてください。これにはある理由があるのですが、それは今はまだ内緒と言うことで・・・。

次回から本編が始まりますので、どうかお楽しみに。それでは。

第1話 旅立ち（前書き）

どうも、黒服です。今回から本編が始まります、全く新しい世界での新しいブレイドの物語、どうかお楽しみに。

第1話 旅立ち

森の中

まだ夜が明けて間もない時間、そこに青い髪をポニーテールにした少女――桐沢 青羽――はいた。彼女はここで毎朝訓練を行っていた。最初は軽く体を動かすところから始め、次に徒手空拳と木刀による素振り。そして・・・

「よし、ウォーミングアップは十分かな。それじゃ・・・。」

そう言いながら青羽は手の平よりも少し大きい金属製の箱――ブレイバックルー―に、カブトムシの絵柄が書かれたスペードのAのカードを装填して腰に当てる。するとバックルが腰に装着された。

「変身！」

《Turn up》

バックルが装着されたのを確認した青羽は、掛け声と共にバックルに付いているハンドルーターンアップハンドルーを引く。するとバックルから電子音声がり、彼女の目の前に光のゲート――オリハルコンエレメント――が現れた。青羽がそれをくぐると、一瞬にして彼女の姿は鎧を纏った青い戦士【仮面ライダーブレイド】になった。

「さーてと、今日の相手は・・・こいつにしようかな！」

そう言いながら彼女が手に持っていた剣【ブレイラウザー】のオーブントレイから取り出したのは、スペードの3とクローバーの10・

・『ビート・ライオン』と『リモート・テイピア』のカードであった。ブレイドは『ビート・ライオン』のカードを放ると、『リモート・テイピア』のカードをブレイラウザーのスリット部分一スラッシュ・リーダーにスラッシュする。

《Remote》

ラウザーから電子音声になると同時にラウザーから放ったカードに向けてレーザーのような光が飛んでいき、光があたったカードは緑色に光り出し次の瞬間にはそこには、まるでライオンのような怪物がいた。

「よし、今日も相手よろしくね！」

ブレイドがそう言うと、怪物ーライオンアンデッドーは頷き、戦闘態勢に入る。それを見てブレイドもブレイラウザーを構え、しばしの静寂の後、一人と一体は同時に駆けだした。

「デヤアー！」

ブレイドは力強く、かつ正確にラウザーを振るい、ライオンアンデッドに斬撃を喰らわせていく。ライオンアンデッドの方も反撃しようとするが、攻撃はすべてかわされ、捌かれる。ある程度攻撃すると、ブレイドはトドメの一撃を加えるべくオープントレイから新たなカードを取り出す。取り出したカードはスペードの2・・・『スラッシュ・リザード』だった。

《Slash》

カードをラウザーにラウズすると、カードと同じ絵柄が投影されブ

レイドに吸収される。その状態で斬撃の威力が上がったラウザーでライオンアンデッドに斬りかかるブレイド、斬撃を受けたライオンアンデッドの腹部のバックルが開く。ブレイドはライオンアンデッドに一枚のカードーコモンブランクーを投げる、するとカードから緑の光が出てライオンアンデッドは元のカードへと戻っていった。カードをオープントレイの中に戻すと、ブレイドはもう一度ハンドルを引いて変身を解いた。

「ふう……。さて、そろそろ家に戻ろうかな。」

そう言って青羽は、森の中を歩いて自宅へ戻っていった。

青羽の自宅

青羽が自宅に戻ると、既に父の信司と母の明日香が起きていた。信司は椅子に座って新聞を読み、明日香はキッチンで朝食の準備をしている。

「父さん、母さん、おはよう。」

「おはよう、青羽。」

「鍛錬で汗をかいただろうから、まずはシャワーでも浴びて来なさい。」

「うん。」

そう言うとき青羽は浴室へと向かって行った、後には信司と明日香のみが残される。明日香の顔にはどこか不安の色が伺える。

「あの子が心配かい？」

「ええ……。これがあの子の夢だってことは分かっているんだけど

ど、どうしても・・・ね。」

そう言うとき明日香は顔をうつ向かせる、それに対して信司は微笑を浮かべながら口を開く。

「大丈夫だよ、あの子は強い。僕らが思ってる以上にね。それにあの子には僕が教えられることは全て教えた、ここからはあの子が自分で見つけなければいけないことだ。」

そこで信司は一旦言葉を切って、改めて笑みを浮かべる。

「笑顔で送り出してあげよう、あの子の為にも。」
「・・・・・・・・うん。」

明日香の顔にはまだ若干の不安が見られるが、それでもその顔には笑みが浮かんでいた。

「あゝさっぱりした！」

しばらくすると、青羽が浴室からあがって来た。彼女はそのまま椅子に座り、明日香が青羽の前に朝食を置いた。

「いっただっきまーす！」

「はい、召し上がれ。」

何時ものように元気のいい青羽の様子に微笑みながら、信司と明日香も朝食に手をつける。しばらく皆テレビを見ながら食事を続けていたが、ある程度食べ終わると信司が口を開く。

「今日から・・・だね。」

「うん！ 食べ終わったら行くつもり。」

「本当に行くつもり？」

「当然！ だってあたしの夢への第一歩だもん！」

今日、青羽は家を出る。決して家出などではなく、仮面ライダーとしてアンデッドを封印する旅に出るためである。

「紅羽なんてあたしよりも早くに出てっちゃって、なんだかいろいろ活躍してるみたいだし。あたしも負けてらんないよ、何時までもここにいても、父さんを超えられないしね！」

そう言うとき青羽は活発そうな笑みを見せた。その笑みに明日香も思わずつられて笑う。

「その意気だよ、青羽。僕もほとんど引退した様なものだけど、まだまだ現役に負けるつもりはないからね。もっと上に行きたいんだったら、もっと広い世界を見て回らないと、井の中の蛙になってしまう。」

その言葉に青羽は頷くと、食べ終わった食器を片付けて自分の部屋に向かって行った。

桐沢家・青羽の部屋

既に片付けられている部屋の中で、青羽は旅に必要なモノのチェックをしていた。寝袋や飯盒など野宿することを想定したものもしっかりと準備している、アンデッドは人里離れた山奥などにいることも多いのだ、むしろこちらの世話になることの方が多いだろう。

「えーと、これで全部かな？ あっ！ 忘れちゃいけない、これこれ。」

そう言って木刀の入った袋も用意した。旅に出ている最中も何時もの鍛錬を欠かすつもりはない、ならばこれは必需品と言えるだろう。青羽は最後にブレイバックルとカードケースを懐に入れ、忘れている物がないことを確認した。

「よし……そろそろ行こうっと。」

そう言って青羽は扉の方に進み、部屋を出たところで一旦部屋の中を振り返った。

「………行ってきます。」

若干名残惜しそうな表情でそう言うと、扉を閉めて玄関の方に向かった。玄関のところには既に信司と明日香が来ていて、青羽が来るのを待っていた。

「それじゃ、行ってくるね。」

「……気をつけてね、青羽……。」

「風邪を引かないように、気をつけるんだよ。」

「うん、分かってる。大丈夫だって！」

青羽はそう言うと、自身のバイク【ブルースペイダー】の下へ向かい、キーを差し込む。その時、後ろから明日香が抱きしめてきた。

「ちよっ!？ 母さん……。」

「青羽……本当に、気をつけてね。」

そう言う明日香の目尻には涙が浮かんでいた。それを見て青羽は、紅羽の時も同じような状況だったことを思い出し、苦笑する。

「大丈夫だって、あたしだって何時までも子供じゃないんだから。偶には手紙出したり電話したりするから、ね。」

そう言いながら青羽は明日香の背中を撫でる、それに明日香は落ち着いたのか青羽から離れる。

「ごめんね青羽、見つともないところを見せちゃって・・・。」

「ううん、あたしも気持ちはちよっと分かるからさ・・・。」

「旅に出るのか怖いのかい？」

「不安がないって言ったらウソになるけどね、でも自分で決めたことだもん、泣き言は言ってられないでしょ！」

そう言うとき青羽は今度こそキーを捻り、エンジンをかける。ヘルメットを被りバイクに跨る青羽に、明日香が最後に言葉をかける。

「辛くなったら、何時でも戻ってきていいからね。あなたの家は・・・ここなんだから。」

「・・・うん。それじゃあ、行ってきます！」

明日香の言葉に一瞬動きを止めた青羽は、一度少し沈んだような声を出しながら頷くと、次の瞬間には何時もの明るい声でそう言うとそのまま走っていった。その後ろ姿が見えなくなるまで、信司と明日香はその場に立っていた。

「行ってらっしゃい・・・。」

「頑張るんだぞ、青羽。」

二人はもう見えなくなった青羽にそう言うと、家に入ってしまった。

とある山奥

『それ』は今、ある不幸な登山者を始末したところだった。アンデッドの存在が一般に認知されて既に30年以上が経っている。そんな中でアンデッドの有無を調べずに人里離れたところへ行くのはハッキリ言って彼らの不注意から来るものだが、何にしても彼らはそのラクダのような存在――キャメルアンデッド――の餌食になってしまった。アンデッドが登山者を始末して満足しながらその場を去ろうとした時、新たな気配が近付いてくるのを感じた。アンデッドがそちらに視線を向けると、一人の少女が近付いてきた。歳は十代後半だろうか、輝くような銀髪に顔の半分ほどの大きさの赤いサングラスをつけている。アンデッドはその少女に襲いかかるが、少女は軽い身のこなしでアンデッドの攻撃を避けると逆にアンデッドに対して蹴りを浴びせて弾き飛ばした。その細身からは考えられないようなパワーである、アンデッドも少なからず驚いた様な素振りを見せる。

「キャメルアンデッドですか・・・封印します。」

少女はそう言うと、ハートの形をした装置――カリスラウザー――を取り出し、それを腹部に付けた。するとラウザーが自動的に腰に装着され、一枚のカード――ハートのA『チェンジ・マンティス』――を取り出した。

「変身…。」

《Change》

少女はそう言うのと、カードをラウザーのスリットにスラッシュさせ
る。するとラウザーから電子音声が響き、同時に少女の姿が揺らい
だかと思うとその場に一人の黒い戦士【仮面ライダーカリス】がい
た。カリスは手に持った弓のような武器【カリスアロー】でアンデ
ッドに斬りかかる。

「ハッ、フッ、セイッ！」

カリスがアローを振るうたびにアンデッドから緑色の血飛沫が上が
り、堪らずアンデッドが距離をとると今度はカリスアローから光の
弓矢が飛んできて、アンデッドにさらにダメージを与える。次第に
ダメージが大きくなり動きが鈍ってきたアンデッドを見て、カリス
は腰に取り付けられているカードケースから一枚のカード、ハート
の6——『トルネード・ホーク』——を取り出し、腰から外してカ
リスアローに取り付けられたラウザーにスラッシュした。

《T o r n a d o》

ラウザーから電子音声になると、カリスの目の前にカードと同じ絵
柄が投影されカリスに吸収される。そしてカリスは風の力が込めら
れた必殺の矢を放つ。矢に貫かれたアンデッドはその場に倒れ、腹
部のバツクルが開く。それを確認したカリスはアンデッドにコモン
ブランクを投げ、封印を行った。

「・・・ハートの9、キャメル・リカバーですか。これはなかなか
に使いそうですね。」

そう言うときカリスはカードケースにハートの9をしまい、代わりに
ハートの2——『スピリット』——のカードを取り出し再び腰に付
けたラウザーにスラッシュした。

《Split》

電子音声と共にカリスの目の前に光のゲートが現れ、それをくぐる
とカリスは元の少女の姿に戻る。元の姿に戻った少女は、そのまま
山の木々の中に消えていった。

第1話 旅立ち（後書き）

と言うわけで、第1話でした。青羽が持っているカードは青羽自身
が手に入れた物ではなく、父の信司がかつて手に入れていたモノを
使っています。ですので彼女は本当の意味での対アンデッド戦はま
だ経験したことはありません。次回は早速ブレイド対アンデッド、
そして青羽とノーマの出会いがある予定です。どうかお楽しみに。
それでは。

第2話 ファーストコンタクト（前書き）

どうも皆さん、黒服です。今回第2話を投稿しました。今回は青羽が本格的に対アンデッド戦を行います、ついでにもう一人の登場人物とも出会いますので、お楽しみに。

第2話 ファーストコンタクト

アンデッド封印協会ボード・アリーウォ支部

青羽はバイクで故郷を離れ次の都市『アリーウォ』に着くと、早速協会に向かって行った。アンデッドを封印するのにも闇雲に動き回っても見つからない、まずは協会でその街の周辺のアンデッドの情報を集めねばならないのだ。通常アンデッドの情報を知るためには協会に情報料を払う必要があるのだが、仮面ライダーとして協会に登録されている者は別で無料で情報を手に入れることが出来るのである。

「バックルとライダーカードを見せていただいても宜しいですか？」

受付の女性に言われ、青羽はブレイバックルと仮面ライダーであることの証明書である【ライダーカード】を見せる。女性はそれを確認するとどちらも青羽に返し、現在のアンデッドの情報を見せる。サーチャーの結果は、この街から少し離れた森の中にアンデッドの反応が複数あったらしい。反応からカテゴリーはそこまで高くは無いとのこと、青羽の最初の相手としては十分だろう。

青羽は協会を出ると、まず最初に宿を手配しに行った。幸いなことに森は街からそう離れてはいないが、アンデッドは複数いるようなので場合によっては数日かかる可能性もある。その場合全てのアンデッドを封印するためにはしばらく街に滞在する必要がある、その際の拠点となる宿が必要だったのだ。青羽が宿の扉を開けると、同時に中から一人の少女が出てきて青羽とぶつかってしまう。

「あったた・・・・あ！　ごめんなさい、大丈夫？」

「いえ、お気になさらず。」

青羽とぶつかってしまった銀髪の少女は、それだけ言うとそのまま宿から出ていった。青羽はその少女の動きを見て、あることを思う。

「あの人もライダーなのかな？」

パツと見は特に変わったところは無いが動きに無駄が無く、隙も無い。仮に自分が彼女に不意打ちをしても恐らく余裕でかわされるだろう。

「ちょっと戦ってみたかった・・・かな？」

青羽は決して戦闘狂と言うわけではない、ただ他人と剣を交えてお互いの實力を見せ合い、お互いの魂を感じ合う。そんな戦いを青羽はしてみたいのである。

「あつと、何時までもこんな所で突っ立ってる場合じゃなかった。」

そう言うとき青羽は宿に入り、部屋を一つ借りると荷物を置いて早速アンデッドが居る森に向かうことにした。と言っても今回は別にアンデッドを封印するつもりはない、地形などからアンデッドがどのあたりに出没するのかなどを予め調べておくことが目的である。勿論万が一アンデッドに遭遇した時の事も考えてブレイバックスは忘れずに持っていく。

「さて、それじゃあ早速「きゃあああああ!？」ッ!？」

宿から出て早速森にでも行こうとしていた青羽の耳に悲鳴が聞こえる、女性の悲鳴が聞こえてきたかと思うとすぐに男性のモノも含めた複数の人の悲鳴などが聞こえてきた。急いで青羽が悲鳴が聞こえ

てきた方に向かうと、そこには広場にいる複数の黒い異形の姿、ダークローチの姿があった。

「やっば、もしかして森から出てきたのかな。」

そんなことを考えていると街の他のところからも何人か人が来て、彼らは皆バックルを取り出すと各々仮面ライダーに変身してダークローチと戦い始めた。出遅れてはいかと青羽もブレイバックルを取り出してスペードのAのカードを装填して装着する。

「変身！」

《Turn up》

青羽はブレイドに変身すると、他のライダーと共にダークローチと戦う。他のライダー達は協会が作った量産型ライダーシステム【ダガー】を使っているが、その中で抜きん出ている者が何名か居た。銃を持ったクワガタムシがモチーフになっているらしい赤いライダーと、弓の様な武器を振るっている黒いライダー。その二人は他のライダー達以上の実力で複数のダークローチを相手に有利に戦っている。

「あの二人凄いな。よし！ あたしも負けてらんない！」

気合を入れなおしたブレイドは、ダークローチの群れに突っ込んでいき次々とダークローチに斬りかかっていく。ダークローチ自身決して動きが俊敏と言うわけではないのだが、それを差し引いてもブレイドのスピードはかなりのモノだった。中には苦戦しているダガーもいる中でブレイドは寄ってくるダークローチを薙ぎ払い、全く接近を許してはいない。ある程度ダークローチ達にダメージを与えたことを確認すると、ブレイドはオープントレイからスペードの2

を取り出した。

《Slash》

「ハアアアアアアアアア！」

『スラッシュ・リザード』のカードをラウズすると、斬撃力の上があったブレイラウザーで次々とダークローチ達を切り払って行くブレイド。切りつけられたダークローチはその場で消滅していき、カードの効果が切れた時には目に見える範囲でダークローチの姿はいなくなっていた。どうやら他のダークローチはあの二人がほとんど始末したらしい、ブレイドは二人の姿を探すが既にその場を離れてしまったのか見当たらなかった。若干残念そうにしながらもブレイドは変身を解除して青羽の姿に戻った。

「あゝあ、残念だったなあ。あの二人とも話とかしてみたかったのに……。」

とりあえず青羽はもう一度協会に行ってみることにした、今倒したダークローチ達で森から反応があったアンデッドは全てなのか、それとも連中とは別にアンデッドが居るのか。それと今回青羽は複数のダークローチを倒したので、それに対する報奨（ダークローチは封印できないが倒せばその分協会から倒した数に応じて報奨が支払われる）をもらうことも協会に向かう理由の一つである。青羽が持っているバトル計測器には今回15体のダークローチを倒したということが表示されていた、これだけのダークローチを倒していればそれなりの金額になっているだろう。

「あ！　もしかして……。」

そこまで考えて青羽はある可能性に行きつく。もしあの場にいた赤と黒のライダーも協会に報奨を貰いに向かっていれば、運が良ければ出会えるかもしれない。最悪どんな人物だったのかを聞くことは出来るだろう。そんなことを考えながら青羽は再び協会に足を踏み入れていた。

協会の受付で再び情報を確認すると、森にはまだ3体のアンデッドの反応があった。と言うことはダーククローチとは別に3体のスート持ちのアンデッドが居ると言うことである。そのことを確認すると次にダーククローチを倒した報奨を受け取る、案の定それなりに良い金額だったのでこの街でこれからの旅に必要なモノをある程度そろえておくのもいいかもしれない。

「あ、すいません、それと……。」

青羽は受け付けの人に自分の他にダーククローチを倒してそれなりに高い金額の報奨を受け取った人物が来なかったか尋ねた。すると既に二人が報奨を受け取ったらしい、一人は黒髪の青年、もう一人は銀髪に赤いサングラスの青羽と同じくらいの少女らしいとのこと。

（あの人だったんだ……。）

あの時の二人のライダーの内どちらかがあの時宿で自分とぶつかった少女であることを確信した青羽。

（だったら、もしかしたらまた会えるかもね……。）

勿論単なる偶然かもしれないが、青羽は近い内に再びあの少女に、そして今はまだ見ぬ黒髪の青年に会えるような気がしていた。

街近くの森

あの後青羽は予定通り森に来ていた。主に木によって周りからある程度視界が隔離されるようなところを重点的に捜して回っていると、森の中から何かを叩き付けるような音と男性の悲鳴が聞こえてきた。

「ッ!？」

現在この森にアンデッドが居ることは街の人間だったら既に知っているだろう、と言うことはこの悲鳴は恐らく自分と同じくアンデッドを封印しにきたライダーのモノである可能性が高い。青羽が悲鳴が聞こえた方に走っていくと、そこには一人の男性とイナゴの様なアンデッドローカストアンデッドの姿が見えた。男性の方はアンデッドからの逃げようとしているが、ダメージと恐怖で体と思うように動かないのかその場からほとんど動かない。近くを見るとバックルが落ちている、恐らくアンデッドからの攻撃で変身が解けてしまったのだろう。

「こんのお!」

青羽はアンデッドに飛び蹴りを喰らわせて怯ませると、男性を立ちあがらせて逃がす。男性は何とか立ち上がりバックルを回収すると、一目散にその場から逃げだした。男性が逃げた後、そこには青羽とアンデッドだけが残されていた。青羽はアンデッドの前に立ち懷からブレイバックルを取り出すと『チェンジ・ビートル』のカードを装填して、腰に装着する。

「今回は偵察程度で済ませるつもりだったんだけど、まさかいきなりスート持ちと出会えるなんてね……変身!」

《Turn up》

アンデッドが走り寄ってくると同時に青羽がターンアップハンドルを引き、青羽の前にオリハルコンエレメントが生成される。アンデッドはその光のゲートに弾かれ、ゲートをくぐった青羽は仮面ライダーブレイドとなった。

「ハアッ！」

ブレイドはブレイラウザーをを構えてアンデッドに斬りかかるが、アンデッドはいとも簡単にかわしてしまう。

「クソッ！ 結構すばしっこいわね、こいつ。」

思いの外素早いローカストアンデッドの動きに翻弄されつつも、次第にその動きに慣れてきたブレイドの攻撃がアンデッドに当たり始める。これを好機とみてブレイドは攻撃をたたみかけ、アンデッドは次々と切りつけられていく。

「よし！」

《Tackle》

ある程度アンデッドに斬りつけると、トドメを指すべくスペードの4『タックル？ボア』のカードをラウズするブレイド。アンデッドに向けて強化された体当たりを放つが、放つまでのモーションが長過ぎたのか簡単にかわされてしまった。

「ダアッ、こいつ単体だと使い勝手悪ッ！？」

あまりの結果に集中が途切れたブレイドに、ローカストアンデッドのキックがきまる。その威力に弾き飛ばされるも何とか体勢を立て

直すと、今度はスピードの2『スラッシュ・リザード』をラウズする。

「やっぱあたしにはこいつの方がいいや。」

アンデッドは脚部を巨大化させブレイドに突っ込んでいき、ブレイドは斬撃の威力が上がったブレイラウザーを構えて正面から迎え撃つ。アンデッドがブレイドに体当たりする瞬間ブレイドがラウザーを振り抜き、切りつけられたアンデッドは体勢を崩してブレイドの後ろに転がりながら倒れる。ブレイドが後ろを向くとアンデッドが倒れており、そのバックルが開いていることを確認するとコモンブランクを投げて封印する。封印が完了したカードはそのままブレイドに手に飛んでいく、カードのスイートはスピード、カテゴリーナンバー5『キック・ローカスト』だった。

「よっしゃ、スピードの5『キック』ゲット！」

幸先のいい結果に満足しつつカードをしまつて変身を解こうとする、後ろから新たなアンデッドープラントアンデッドーが襲いかかってきた。集中を解いていたこともあり完全に不意打ちを受けてしまうブレイド。

「グッ!? やってくれんじゃない!」

アンデッドに反撃するブレイドだが、先程の攻撃で完全にペースを乱されたブレイドの攻撃はかわされ、逆にブレイラウザーを弾かれ一方的に攻撃を受けてしまう。

「グッ・・・ゲホッ、アグッ!? (ちょ、ちょっとこれはヤバイ・・・かな。)」

遂に気に叩き付けられ、その場に座り込んでしまう。まさに絶体絶命の時、森の中から走ってきたバイクがアンデッドを弾き飛ばした。

「あ、あれは!？」

それはあの広場で見た黒いライダーであった、黒いライダーはバイクから降りるとアンデッドと戦い始める。

「フッ、ハッ、フッ!」

何度もアンデッドに殴りかかり、アンデッドが反撃してくるとその腕を足場にアンデッドを飛び越え、その際にどこから取り出した弓矢でアンデッドに斬りつける。

「す、凄い……。」

その戦い方には一切の無駄がなく、思わずブレイドも見とれてしまう。そうこうしているとアンデッドがライダーに蹴り飛ばされ、ライダーはそれを見ると腰に取り付けられたハート型の機械を弓にセットする。

《Tornado》

セットした機械に一枚のカードをラウズすると、ライダーは弓のレバーを引いてアンデッドに向けて構える。それを見たアンデッドはライダーの行動を阻止しようとツタを伸ばして攻撃するが、それより早くライダーが強化された矢を放つ。放たれた矢がアンデッドに炸裂し、アンデッドのバックルが開く。それを見たライダーは腰の

カードケースからコモンブランクを投げて、アンデッドを封印した。

「ハートの7・・・『バイオ・プラント』、封印完了。」

それだけ言うと黒いライダーは青羽には目もくれず、その場を去ろうとする。その瞬間我に返ったブレイドがそのライダーを引き留める。

「ちょ、ちょっと待って！」

「何か・・・？」

若干エコーが掛かっているが、その声には聞き覚えがある。宿の入り口で出会ったあの少女である。ブレイドはそれを確信すると、変身を解いて青羽の姿に戻る。

「覚えてる？ あたしのこと・・・。」

「あなたは・・・確か宿の入り口で私とぶつかった・・・。」

どうやら向こうも覚えていたらしい、それに青羽は笑みを浮かべる。

「ねえ、良かったらちょっと話さない？ 広場で見たときからちょっと話したいなと思ってたんだけど。」

「残念ですがお断りします、私にはまだやらねばならないことがあるので。」

「アンデッドの封印？ だったら一緒に行こうよ、二人でやればもつとうまくいくだろうし。」

「先程の戦いを見る限り、私があなたと行動してもメリットがないような気がするのですが。」

痛いところを突かれて言葉に詰まる青羽、青羽が何かを言う前に少

女の方が行動を起こす。

「それでは、これにて失礼します。恐らくもう会うことも無いでしょう。」

そう言って少女はバイクに跨り、そのまま街の方へ行ってしまった。青羽はそれに肩を落とす。

「あゝあ、情けないところ見られちゃったなあ。」

だが青羽はすぐに気を取り直す、今回は情けないところを見られてしまったがこの次はそうはいかない。次に会ったときに少しは出来るところを見せれば、少しは向こうも自分を認めてくれるかもしれない。

「さて、とりあえず一旦街に戻ろう。色々疲れたし、協会で残りのアンデッドの情報を貰ってこなくちゃ。」

アンデッド封印協会ボード・アリーウォ支部

「え！？　もういない？」

「はい、もうこの近辺の森にはアンデッドの反応はありません。恐らく封印されたモノと思いますが……。」

青羽は街に戻ると早速協会に足を踏み入れ、アンデッドの情報を仕入れようとした。自分とあの少女がそれぞれ一体ずつ封印したので、残りは一体となった筈である。そのつの具体的な場所を聞こうとしたのだが、返ってきたのはもうアンデッドはいないというモノだった。青羽はその情報に意気消沈しながらも協会を後にし、宿へと向

かって行った。

「あの人が先に封印しちゃってたのかなあ、あたしよりも結構強かったし。」

そんなことを考えながら青羽は宿へ戻り、そのまま部屋へ行くと戦いの疲れからかすぐにベッドで眠りについてしまった。

街はずれの街道

銀髪の少女は青羽と別れた後、すぐに宿を出て次の街へ向かって行った。彼女の今回の収穫は、ハートの7『バイオ・プラント』だけである。

（一体誰でしょう、あの青い髪の方とも思えませんし。そう言えば、あの時私と彼女の他にもう一人なかなか腕の立つ方が居ましたね。もしやあの方でしょうか？）

そんなことを考えるが、少女はすぐにその考えを振り払う。自分には関係ない、自分が考えるべきことはただ一つ……

「全てのアンデッドを、封印する……。」

それだけ呟くと少女はそのまま街道を走り去っていった。

街中・ショッピングモール

街の中でも一際大きなショッピングモール、そこで旅に必要な物を買っている一人の青年が居た。髪と瞳の色は黒く、背はなか

なかに高い。顔もいいので周囲の女性が時たま彼に見とれているが、彼はそれを特に気にした風も無く買い物が続けていく。

「今回の収穫はこれだけだったか。」

そう言いながら青年は、懐から一枚のカード・・・ダイヤの8『スコープ・バット』を取り出した。これは先ほど街の近くの森で封印した物である。

「協会の情報では3体はいた筈なのに、僕が1体封印してる間に残りの2体が封印されてるなんてねえ。」

そこまで考えて、青年は広場で見た二人のライダーを思い出す。自分と同じ市販のライダーではない、自前のライダーシステムを使っていた二人のライダー。一人は勢いよく剣を振るい、もう一人は冷静に弓の様な剣を振るっていた。

（あの二人に先を越されちゃったかな、こりゃ。）

そんなことを考えながら青年はカードを懐にしまい、買い物が続けていった。

第2話 ファーストコンタクト（後書き）

というわけで第2話でした。今回ブレイド、カリスの他にギャレンもチラッと登場させました。彼も今後の主要登場人物の一人ですが、本格的な登場はもう少しちょっと後になる予定です。彼がどんな人物なのか、期待しながら待っていてください。

第3話 戦う理由（前書き）

どうも、黒服です。第3話を更新しました、今回青羽とノーマが再び出会います。二人が合うことで一体どうなるのか、お楽しみに。

第3話 戦う理由

街道

アンデッドを封印した翌日、青羽は何時も通り朝の鍛錬を済ませるとすぐに街をでた。あの少女に少しでも追いつくためである。恐らくあの少女は昨日の時点ですでに街を出ている、となれば少しでも早くに街を出ていかなば何時まで経っても追いつけないだろう。幸いなことにこの街の周辺で一番近い街は一つしかない、そこを目指して全速で行けば上手くいけば追いつけるかもしれない。

「このまま弱い奴なんて思わせてられるもんですか、絶対見返してやるんだから！」

そう意気込んで青羽は次の街へ向けてバイクを走らせて行った。

ルーニオリフ・街中

あれから青羽は二日ほどかけて次の街『ルーニオリフ』に着いた。その間に結局あの少女に会うことは出来なかったが、彼女の目的は恐らく青羽とそう大して変わらないだろう。アンデッドが目的だろうからこの街の周辺にアンデッドが居れば彼女もそこに行く、その時自分の力を見せてしまえばいい。上手くいけばアンデッドを封印できてしかも興味がある相手と少しは近付けるかもしれない、これまで以上に青羽には気合が入っていた。

とりあえずこの街にある協会の支部でアンデッドに関する情報を集めると、ここでの活動の拠点となる宿を手配しに行った。

「ん？・・・あっ!？」

「おや？ 貴女は・・・。」

青羽が宿に向かっていると、その途中偶然にも少女とバッタリ出会った。この機を逃すまいと青羽は少女に話しかける。

「やっぱり貴女もここに来てたんだね！」

「……まあ、あの街から一番近い街と言えばここしかありませんからね。他に行くところありませんし。」

「ねえねえ、今「貴女と話してる暇などありませんよ。」・・・つて、いきなり一刀両断!？」

そう言う少女は踵を返してその場から去って行くとする。青羽はその少女になお話しかけようとする。

「待って！ あたし、桐沢 青羽！ 貴女は？」

「……ハア、ノーマです。ノーマ・イクス・・・。」

「イクスさん、あたし今度はあんなへましないからね！」

そう言う青羽は宿に向かって走っていき、残されたノーマは疲れたと言いたげに溜息を吐いた。

ノーマと別れて宿に荷物を置いた青羽は、街中を散策していた。この街には街中にアンデッドが出現することがある様で、出現場所も頻繁に変わるらしい。その為青羽は街の中をしらみつぶしにする必要性に駆られていた。

「だあゝ、全っ然出てこない。なんか法則性とかなかったのかなあ。」

青羽は既に3時間近く街中を歩きまわっていた。歩き回ると言っても闇雲に歩いてきたわけではない、人氣が少ないアンデッドが居そうなところである。だが結果は全て外れ、今は特に当てもなく街中を彷徨っているところである。

「うーん、別に夜にならないと出ないってわけでもなさそうなんだけどなあ。」

もう街から出ていったしまったのではないかと思い始めるが、協会のサーチャーではまだアンデッドは街中にいると言う結果だった。しかしこれほど歩き回って見つからないと言うことは、あれから街を出ていってしまった可能性が大きいような気がした。

「はあ、とりあえず一旦協会に行ってもう一度アンデッドの情報を《バヂッ》ッ何、今の音!？」

青羽がもう一度協会に行こうかと考えていると、突然どこからか奇妙な音が聞こえてきた。距離が離れていたからかハッキリとは聞こえなかったが、まるで濡れたタオルを壁に叩き付けたような音だった。周囲に注意を払っていると、再びあの音が聞こえてきた。今度はさつきよりもハッキリとしている。

「こっちね!」

青羽が音の聞こえた方に向かうと、公園に出た。そこで青羽が見たのは2体のアンデッド、そして2〜3人のライダーと複数の一般人が倒れている様子だった。

「ちょっと、大丈夫!？」

「う、うう・・・。」

ライダーの方はかろうじて生きているようだが、一般人の方は話が違った。碌な防備も持っていない彼らはどちらのアンデッドによるモノかは分からないが、酷く焼け焦げた状態で倒れている人がほとんどだった。確認するまでも無くその人たちは死んでいる。それに青羽は2体のアンデッドローモスアンデッドとディアーアンデッドローを睨みながらゆっくりと立ち上がる。

「あんた達、よくもこんな酷いことを・・・。」

怒りに震えながら青羽はブレイバツクルにスペードのAを装填して腰に装着する。

「変身！」

《Turn up》

青羽はブレイドに変身すると2体のアンデッドに斬りかかっていった。ディアーアンデッドはそのまま迎え撃ったがモスアンデッドは空へと逃げていった、恐らくどちらかが弱ったところを狙うつもりなのだろう。そのことに頭の片隅で気付いていながらブレイドはディアーアンデッドにのみ攻撃を集中させる。だがディアーアンデッドもなかなか手強く、ブレイドは苦戦を強いられていた。

「ハッ、くう、アッ!？」

ディアーアンデッドにブレイラウザーを何度も振るうが、ことごとくかわされ逆に反撃を受ける。ブレイドが体勢を立て直そうとした時、ディアーアンデッドの角が放電し始めた。それに気付き「マズイ」と思ったが時すでに遅し、ディアーアンデッドが放った雷の直

撃を受けてその場に倒れ込むブレイド。

（こ、コイツか……。）

そのやり方に焼け焦げた人たちを殺したのがディアーアンドッドである。と確信したブレイド、だが先程の攻撃で体が思うように動かない。そして……

「……遅い反応ですね、あれしきの攻撃もかわせないとは。」

少し離れた木の陰からブレイドとディアーアンドッドの戦いを見ている黒いライダー……。カリス。彼女の考えは上空に逃げたモスアンデッドと大体同じだった、ブレイドとの戦いでアンデッド達の手の中、弱点を探るのが目的である。

「先程は大した大口を叩いていましたが、所詮はこの程度ですか。」

カリスとしては別にブレイドがどうなるうが知ったことではない、だが目の前で人が死ぬのを見るのも決して気分がいいモノではないので助太刀にでも出ようとした時、彼女の目があるモノを捉える。

「アレは……。」

それは公園の花壇、地面よりも高い位置にあるその陰に隠れている一人の女の子の姿だった。ディアーアンドッドの攻撃に弾かれたブレイドにもその女の子の姿は確認できた、そしてディアーアンドッドは再び放電を開始した。

「ッ！？ 危ない！！」

このまま雷を落とされたらまず間違いなく女の子にも当たる、そう思った瞬間にはブレイドは女の子を庇うように覆いかぶさる。その結果全ての雷がブレイドの背中に命中する。

「ガアッ!?!?・・・グウウ。」

「あ、ああ・・・。」

目の前で起こった事態に女の子は完全に怯えきってしまったている。それを見たブレイドは変身を解いて、女の子に優しく微笑みかける。

「大丈夫、大丈夫だから・・・ね? 早く、逃げなさい……。」

「う・・・うん!」

その微笑みに勇気づけられ、急いで公園から逃げ去っていく女の子。それを見届けた青羽は立ち上がるとディアーアンドッドを見据える、その瞳は先程までの怒りに満ちたモノではなくなっていた。

「危ない危ない、忘れるところだったわ。あたしが戦うのは、仮面ライダーになったのは、あんた達アンドッドが憎いからじゃない。」

青羽はそう言いながらゆっくりと再びブレイバツクルを腰に当てて装着する。

「あたしが戦うのは、超えたい目標があるから。そして・・・。」

バツクルから待機音が鳴る中で青羽は右手は手の甲を前に向けた状態で左肩の前に持っていていき、左手を右腰の前に持っていく。

「そして・・・。」

両手が左肩と右腰の前に来た時、青羽の動きが止まる。その時青羽の脳裏には・・・

目の前でダークローチに無残に殺された、親しい人物の姿があった。

「そして！ 目の前で助けられる人を助ける為の力が欲しかったから！ 変身！！」

《Turn up》

掛け声と共に手の平を返して右手でターンアップハンドルを引き、左手は左上に振り上げる。青羽は再びブレイドに変身すると、まともディアーアンドッドに斬りかかっていく。だが先程のように怒りに駆られた我武者羅なモノではなく、流れる水のように緩やかで、かつ鋭い斬撃だった。

「ハッ、セイツ、イヤァ！」

何度も切りつけられ、遂には弾き飛ばされるアンドッド。その様子にディアーアンドッドだけでなく、近くから見ていたカリスも驚く。

「何故、彼女はいきなりあそこまで強くなったのですか？ 先程とはまるで違う剣捌き、一体何がこの一瞬の間に彼女にここまでの変化を？」

カリスが困惑している中、ブレイドはディアーアンドッドにトドメを指すべくオープントレイから1枚のカードを取り出す。取り出したカードはスペードの5『キック・ローカスト』。

《Kick》

「アアアアア、ハアアアッ！」

カードをラウズすると電子音声で鳴り、ブレイドにカードと同じ絵柄のスクリーンが吸収される。ブレイドはラウザーを地面に突き刺すと、大きく跳躍してディアーアンドッドに必殺技『ローカスト・キック』を叩き込む。攻撃を受けたディアーアンドッドは大きく吹き飛ばされた後爆発し、後にはバツクルが開いた状態で倒れたディアーアンドッドがいた。ブレイドはディアーアンドッドにコモンブランクを投げ封印すると、依然上空で待機しているモスアンドッドに視線を向ける。視線が合ったモスアンドッドはブレイドの前にゆっくりと降りてくる。

「へえ、あのまま逃げちゃうかと思った。案外正々堂々としてるじゃない。」

それだけ言うとブレイドはブレイラウザーを構え、モスアンドッドに斬りかかっていった。カリスはそれをじっと見つめている。

実はカリスはすでにモスアンドッドと戦っていた、いち早くモスアンドッドを見つけると即座に戦い始めていたのである。だが思いの外モスアンドッドは手強く、逃走を許してしまっていた。モスアンドッドのパワーが特別優れているというわけではないのだが……。その時ブレイドがラウザーを振りかぶりモスアンドッドに斬りかかるが、その斬撃は鱗粉のようなバリアに防がれる。

「ウッ、ウワァ!？」

あれである、あれの所為で効果的なダメージが与えられず、結果カリスはモスアンドッドを逃がしてしまったのである。その後モスアンドッドはこの公園に来て、ちょうどライダー達を倒したディアーアンドッドと対峙していた。青羽はその直後に来たのである。

「チィッ！」

《Thunder》

接近戦では埒が明かないと考えたのかスペードの6『サンダー・デ
ィアー』をラウズしてモスアンデッドに電撃を放つブレイド、だが
その電撃も弾かれ逆に反射された電撃でダメージを受ける。

「ウアアア!？」

カリスはその様子を見てもまだ動かなかった、カリスと言うライダ
ーに備わった高い分析能力、そして自身の持つ高い視力で相手の弱
点を探っているのである。

(どこに・・・全身にバリアが行き届いている筈がない。どこかに
必ず穴がある筈、それは一体……。)

その時カリスの目にモスアンデッドの口吻が映る、そこにだけ鱗粉
が舞っていなかった。

「ッ！　そこです!!！」

《Tornado》

それを確認した瞬間カリスはカリスラウザーをカリスアローに取り
付け、『トルネード・ホーク』のカードをラウズする。そして正確
無比な精度で放たれた必殺の矢がモスアンデッドの口吻に突き刺さ
り、モスアンデッドがその場で立ったままバツクルが開く。カリス
はそれを確認すると、アンデッドの封印作業に入った。

「ハートの8・・・『リフレクト・モス』、封印完了よ「ち
よっと!」・・・何か？」

カリスが封印したカードをケースにしまおうとした時、ブレイドが声をかけてきた。その姿は心なしか怒っているようにも見える。

「アンタ、今あたしをダシに使ったでしょう!？」

「・・・何故そう思うのです？」

「途中から変な視線を感じてたわ、敵意があるわけじゃないけど怯えてるわけでもない。それであのタイミングで出てきたってことはあたしとアイツが戦ってる間にアンタは近くで黙って見てたってことでしょ、あいつの弱点を知るために!」

その推理にカリスは舌を巻く、まさか途中から気付かれていただけでなくこの短時間でここまで見抜かれるとは。

「ちなみにお聞きしたいのですが・・・何時気付きました？」

「1度変身を解いて2回目に変身した時よ。」

あの時か、とカリスは思う。突然ブレイドが強くなったあの時、同時に自分に気づいていたとは・・・。

「以前、私は言外に貴女の事を弱いと言いました。」

ブレイドはそれに対して特に反論せず、カリスはそのまま言葉を続けた。

「ですが・・・それは訂正せざるを得ないようです。そして・・・」

カリスはそこで言葉を区切るとブレイドから適度に距離をとり武器を構え、ブレイドもラウザーを構える。

「私はそんな貴女に興味が湧きました、出来ればひとつ御相手願いたいのですが……。」

「ハッ……上等！」

そう言うや否やブレイドとカリスはお互いに斬りかかっていった。カリスはブレイドの斬撃をカリスアローで受け止め、カリスからのフォースアローをブレイドはラウザーで切り払っていく。

「やっぱり！ あたしが思った通り、強いわねアンタ！」

「貴女も、なかなかやりますね。」

そう言いつつお互い攻撃を止めない、カリスはカリスアローをブレイドに向け振り下ろし、ブレイドはそれをラウザーで受け止める。しかし……

「グッ！？（な、なんて馬鹿力！？ 一体あの細腕のどこにあんなパワーが？）」

変身前のノーマの細身を思い浮かべて、思わず心の中で悪態を吐く。想像以上のカリスのパワーに圧倒されながらも何とか脱出し、体勢を立て直すブレイド。ブレイドはオーブントレイを開き再び『サンダー・ディア』をラウズして電撃をカリスに喰らわせる。

「クッ！？」

「よしっ！ 今！！」

《Thunder Slash》

《Lightning Slash》

カリスがそれに怯んだ隙にブレイドは『サンダー・ディア』『ス

ラッシュ・リザード』をラウズして必殺の斬撃『ライトニング・スラッシュ』をカリスに叩き込む、しかしそれは紙一重でカリスにかわされてしまった。

「なっ!？」

「フッ!」

「グウ!？」

攻撃をかわされて大きく隙が出来たブレイドに、カリスは容赦のない斬撃を浴びせ距離をとると、カードケースから3枚のカード『チヨップ・ヘッド』『トルネード・ホーク』『バイオ・プラント』を取り出してカリスアローに取り付けたラウザーにラウズしていく。

《Bio》

《Chop Tornado》

《Spinning Wave》

ハートの7『バイオ・プラント』の効果でカリスアローから放たれた触手状のツタがブレイドを拘束する。

「グッ! しまった!？」

そのままカリスの方へ引っ張られ、風を纏った必殺の手刀がブレイドに叩き込まれる。

「ハア!」

「アアアアアッ!？」

『スピニング・ウェーブ』を受けたブレイドはその場に倒れ、変身が自動で解ける。カリスはその様子を見て、腰に取り付けたカリス

ラウザーに『スピリット』のカードをラウズして元の姿に戻る。二人とも完全に息が上がっていた。

「ハア、ハア・・・ウグッ。」

「ハア、ハア、フウ。」

息を整えたノーマは、青羽に対して口を開く。

「今回の勝負は・・・私の勝ちですね。」

「ハア・・・そう、みたいね・・・ハア。」

それだけ言葉を交わすとノーマは踵を返して青羽から離れていく、その途中一度立ち止まって振り向くと再び口を開いた。

「縁があればまた会いましょう。それと、協会にも連絡しておくので怪我の治療は心配なく。」

そう言うのと今度こそその場から離れていった。残されたのはアンデッドに殺された一般人と倒されたライダー、そして傷つき倒れた青羽だけだった。怪我と疲労でぼんやりとする中、青羽はあることに気付く。

「あれ、そう言えばイクスさん・・・また会おうって言ってた。少しはあたしの事を認めてくれたってことなのかな、へへッ・・・。」

そこまで考えて、今まで深く考えないようにしてきた事実が青羽の心に重く押し掛かってきた。

「負けたんだよね・・・あたし・・・。」

その事実を認めた時、どうしようもない悔しさが心の底から湧き起こってきた。どうしようもなく悔しくて、あまりの悔しさに涙が溢れてきた。

「こんなん泣いてどうすんのよ。止まってよ・・・止まりなさいよオ。」

そう言いながら涙を拭うが、後から後から涙が出てくる。次第に青羽の声にも嗚咽が混じり始めてきた。

「ウツ・・・グスツ・・・エグツ・・・ウウ。」

しばらく泣いて涙を流すと、おもむろに青羽は空に向かって声を上げる。

「あたし、次は負けない・・・絶対に負けないんだからね！　う、うう・・・。」

それからしばらくの間、公園には青羽の泣き声が響いていた。

公園から少し離れた遊歩道

ノーマはあの後今回の事に関して色々と考えていた。

（なんとも不思議な方でしたね。最初に見た時はそこいらのただのライダーと大して変わらないと思ってましたが、今回は私とほぼ互角に戦って・・・いえ。）

そこまで考えてノーマは胸に手を当てる、服に隠れて見えないがそ

の場所には切りつけられたような傷があった。

「まさか、かわしきれなかったとは思いませんでしたよ。」

青羽が最後に放った『ライトニング・スラッシュ』は完全にかわされてはいなかったのだ、ギリギリのところでもノーマには当たっていた。そしてその時ノーマはあることを思い出す、青羽はあの時すでにアンデッド2体と戦っていた。つまりあの時点ですでに大分消耗していたということである、ということはあれは青羽の全力ではない。その状態で自分と互角に戦ったということは、つまり……

（もし彼女が万全の状態だったら、恐らく倒れていたのは私の方。果たして次に会ったときに勝てるかどうか……。）

そこまで考えてノーマはふと気付く、何故自分はこんなことを考えている？ 自分の使命は全てのアンデッドを封印すること、それ以上の事を考える必要などない筈なのに……。

「本当に……不思議な方です。」

そう呟くとノーマは、夕日が沈む街の中を歩いていった。

第3話 戦う理由（後書き）

と言うわけで第3話でした。今回青羽がノーマに負けてしまいました、でも今回の事は双方にとって大きな収穫があったことは間違いない筈です。少なくともノーマには何かしらの影響を及ぼしています。この二人が今後どうなっていくのか、楽しみにしていってください。

あ、それと今回から街に名前を付けてみました。一応全部の街に名前を付けていく予定です（前回の小説にも街の名前を加筆しました）、名前にはある由来があるのですがわかりますか？ヒントはある作品の主人公です。それでは。

第4話 興味と決断（前書き）

どうも、黒服です。第4話を更新しました、今回ノーマがある決断をします。

第4話 興味と決断

ルーニオリフ・宿

ノーマに敗れた翌日、青羽は宿のベッドで目覚めた。あの後協会から救護の人達が来たが、青羽自身はそんなに大した怪我ではなかったので簡単な治療だけしてもらって宿に戻ってきた。恐らくノーマが加減したのであろう。そして今、青羽は何時もの鍛錬の為の支度を整えていた。

「・・・・・・・・。」

青羽の顔は決して清々しいとは言えない、それは昨日の敗北の悔しさが未だ彼女の中で後を引いている・・・・。

「ふぁゝゝあ、流石に昨日は疲れたかなあ。まだなんか眠い・・・・。」

・・・・訳ではなく、単純にまだ眠気が抜けきっていないからであった。青羽は確かにあの時負けた、だがそれは見方を変えれば新たな目標が出来たということでもある。

「最終的な目標は父さんだけど、まずはイクスさんから・・・ね。何時までもうじうじしてるなんてあたしらしくないし、昨日思いきり泣いたんだから、今日から気持ちを入れ替えていかないかね！」

そう言うのと鍛錬をしに宿を出ていった、向かう先は昨日の公園である。

公園

公園に着いた青羽は、鍛錬の前に軽く体を動かして準備をした。まずは腕立てなどを行い、体を温める。その後は徒手空拳を行い木刀による素振り、だがその素振りは何時ものただ何度も振り下ろすモノではなかった。まるで目の前に相手が居るかのように木刀を振っていた。青羽の目に映るのは昨日のカリスの姿、戦った時の動きを思い出し頭の中でカリスを動かしながら自身も木刀を振るう。

「フツ、ハツ、セイッ！」

もう何度剣を打ち合わせたのかも分からないが、ある程度木刀を振るうと青羽はそれを腰だめに構える。そして幾分か時間が経つと、一気にその場から駆けだした。

「イヤアアアアアッ！」

雄叫びを上げながら一気に木刀を振り上げる青羽、そしてそのまましばらく動きを止めてからゆっくりと構えを解いた。

「ふう・・・こんなもんかな。」

そう言うとき青羽は鍛錬道具を片付けて宿に戻っていった、今回の鍛錬では変身してからのモノを行っていない。いや、これからすることも無いだろう、なぜなら・・・

「まずは自分の体から鍛えていかないとね、ライダーの力に頼る様じゃイクスさんには絶対に勝てないし。」

そう言うことである。

宿・食堂

宿に戻ってきた青羽は、部屋でシャワーを浴びた後食堂で朝食をとっていた。その最中、テレビから気になるニュースが聞こえてくる。

『それでは次のニュースです。昨晚未明、ルーコス近くの森で散策をしていた若者のグループの一人が救助されました。若者は『宙に浮く牙に仲間が殺された』と言っており、これがアンデッドによるモノなのかどうか協会の方でも調査が進められています。』

「宙に浮く牙・・・ねえ、変なの。」

青羽はそう言って食事を終わらせると、再び協会に向かっていった。昨日協会から情報を得た段階ではアンデッドは2体だけだったが、あの後新たにアンデッドが来た可能性もある。

アンデッド封印協会ボード・ルーニオリフ支部

協会に来た青羽は早速アンデッドに関する情報を仕入れていた、結果は街の外に1体アンデッドの反応があると言うモノだった。場所は街近くの森の中心に位置する湖、どうやら昨日の内にそこに住み着き始めたらしい。それを確認すると青羽は早速バイクに跨り、さっそく街の外に行こうとする。その時・・・

「あっ！ お姉ちゃん！」

「ん？・・・あ、あなたは・・・。」

青羽に声をかけてきたのは、昨日アンデッドの攻撃から庇ったあの少女であった。少女は元気よく手を振ると、青羽に走り寄ってきた。

「大丈夫だったみたいね、良かった。」

「うん！ お姉ちゃんのおかげだよ。お姉ちゃんの方こそ、大丈夫？」

「大丈夫大丈夫、これでも結構丈夫だから！」

そう言って青羽は軽く腕を振って見せ、少女はその様子に目を輝かせる。その時少女の両親が二人の下に近付いてくる。

「あなたですか、昨日娘を助けてくださった仮面ライダーというのは。」

「娘を助けていただき、本当にありがとうございました。」

そう言って深々と頭を下げる少女の両親、それに青羽は手を振って頭を上げるように言う。

「そんな、頭を上げてください。・・・むしろ、あたしの方がこの子にお礼を言いたいくらいなんですから。」

そう言って少女の頭を撫でる青羽、思い返すのは少女をアンデッドの攻撃から庇ったあの時。

（あの時、あの子があそこにいなかったら、あたしは大事なことを忘れたままだった。）

ノーマを見返すと言う思いと、無残に人々を殺されたことに対する怒りで自分を見失っていた。それを正してくれたのは助けを求めて震えていたこの少女だった。

「それじゃあ、あたしはそろそろ。」

「ええ、御引き留めしてすみません。」

「じゃあねー、お姉ちゃん！」

そう言って少女は手を振り、青羽もそれに手を振って返しながらバイクを街の外に走らせて行った。

そして……

「あれが仮面ライダーブレイドか……なかなか面白そうだな。」

協会の近くに停めてある車の窓から、青羽の事を見つめる一人の男。サングラスとコートを身につけている、怪しい雰囲気醸し出した男だった。

「……あいつにも、俺の実験のサンプルになってもらおうか……」

そう言いつつエンジンをかけて、青羽を追いかけてようとした男の前に、一人の青年が現れた。

「これはこれは、伊坂さんじゃありませんか。」

「貴様……大神 戒……」

そう呼ばれた青年は、笑顔のまま伊坂と呼んだ男に口を開く。

「また何かやらかそうと言うのなら、僕が全力で止めさせてもらいますよ。もっとも、僕もこんな所で派手なことはあまりしたくは無いですけどね。」

そう言いながら戒と呼ばれた青年は懐から一枚のカード・・・ダイヤのA『チェンジ・スタッグ』をチラつかせた。それを見た伊坂は忌々しげに顔を歪めながら、降参の意思を表す。

「やめておこう、お前の実力はよく知っているからな。今回は退かせてもらうとする・・・だが覚えておけよ、いつか必ずお前を始末してやる。」

そう言うのと伊坂は車を走らせその場から去っていき、戒はそれを見送っていた。

街道

ノーマはシャドーチェイサーを走らせて次の街に向かったが、突然何かを感じてバイクを止めて振り返る。

「ッ!？ まさか、街に新たなアンデッドが？」

そう言うのとノーマはバイクをUターンさせ、街の方へバイクを走らせて行った。

ルーニオリフ近くの森

青羽は森の中心に位置する湖まで来ていた、協会からの情報ではこのあたりにアンデッドが居るとのことなのだが・・・。

「うーん、今日もなかなか見つからないなあ。」

状況は昨日と大して変わらなかった、湖の周りを当ても無く歩き回る青羽。その時、岩場の陰に隠れた洞窟を見つける。

「お？　もしかしてあそこかな？」

青羽が洞窟に入って見るとそこは思いの外広く、何かが潜むなら持つてこいの空間だった。青羽が洞窟内を調べてみるとアンデッドはいなかったが、何かが居た形跡はあった。青羽はアンデッドが今は洞窟から出て今は森の中かと考える。

「入れ違いになっちゃったか、とりあえずいったん外に出ようかな……。」

そんなことを考えて洞窟から出た青羽の耳に、聞いたことのある少女の悲鳴が聞こえてきた。

「ッ！？　い、今のってまさか！？」

青羽は急いで悲鳴が聞こえた方向に向かう、するとそこには……

倒れている少女と少女に必死に呼びかけている彼女の両親、そしてアンデッドと戦っているカリスの姿があった。

「イ、イクスさん！　あ、どうしたんですか！？　だいじょッ！？　！？」

カリスが居たことに驚きつつも、青羽は少女の方に近寄っていく。そして少女の顔を見て青羽は愕然とした、少女の顔にはよく分からない青白い粘液が付着していた。だが青羽にはそれがなんなのかすぐに分かった。

「マズイ、この子アンデッドの毒に侵されてる!？」

「そ、そんな!？」

「どうすればいいんですか？」

「とりあえず、協会が支援してる病院へ向かってください。一先ずそこで治療を!」

青羽はそれだけ言うと少女と家族をその場から逃がし、ムカデの様なアンデッドーセンチピードアンデッドーと戦うカリスに叫ぶように言う。

「待って! そいつを封印しないで!？」

「お断りします。」

「なっ!？ 何で!」

「私の使命は、全てのアンデッドを封印すること。それ以外の事など私には関係ありません。」

「こんのお・・・石頭!」

青羽はブレイバツクルを取り出し、スペードのAを装填して装着する。

「変身!」

《Turn up》

ブレイドは変身するとカリスを止めるべく立ち塞がる。

「アンデッドは個体それぞれで別々の毒を持ってる。コイツを封印されたら、あの子の毒を解毒する手段が無くなっちゃう!」

「言った筈です、私には関係ないと。」

「待って! お願いだから待っ、アグウツ!？」

必死になってカリスを止めようとするブレイド、その背中にアンデッドからの容赦のない攻撃が当たる。ブレイドが怯むと同時にカリスが再びアンデッドに攻撃を加えようとする、しかしそれはなおも掴みかかってくるブレイドによって阻止されてしまう。

「ま、待って・・・お願い、待って・・・。」

「クッ！ 邪魔です！」

「ガハッ!?」

いい加減に痺れを切らしたカリスがブレイドに一撃を加え、再びアンデッドを攻撃しようとするが、一瞬の隙を吐いてアンデッドはその場から逃走してしまう。それを見てカリスは舌打ちしながら変身を解いた。

《Split》

「ハア・・・全くなんてことをしてくれるんですか、貴女は。」

「ハア・・・ハア・・・、クッ。」

何とか立ち上がったブレイドも変身を解いて、ノーマに再び懇願する。

「お願い、あいつを封印するのはもう少しだけ待って。あいつが居ないと、解毒剤が作れないの。」

毒を持ったアンデッドは、必ず自身の中に毒に対する抗体を持っている。そしてそれは封印する前でなければ取り出す事は出来ないのだ。だがノーマの方はそんな事情などどこ吹く風と言った感じに言葉を紡ぐ。

「何度も言わせないでください、私にとって重要なのはアンデッドを封印すること。それ以外は私には関係の無いことです。それに、仮に私があのだアンデッドを封印しなかったとして、貴女にあのだアンデッドから抗体を取り出す事が出来るのですか？」

その言葉に青羽は悔しそうに唇を噛む、アンデッドの身体には微妙に法則性が無いため、同一のアンデッドであっても身体の内部構造が異なる場合が多い。だから抗体を手に入れる場合も、一度アンデッドが完全に動けなくなるまで弱らせてから短時間で解剖する必要があった。だがその場合複数人で取りかからなければすぐに復活したアンデッドに作業を妨害されてしまう、ノーマはそのことを言っていた。ノーマであれば一発で抗体だけを取り出すことは可能かもしれないが、勿論彼女はそんなことに協力するつもりなどさらさらなかった。

「……ところでイクスさん、協会には登録してある？」

「何を藪から棒に・・・当然です。協会に登録しなければ、ダークローチの報奨が貰えませんからね。」

「そう・・・だったら・・・。」

そう言うとき青羽はカードケースから自身が持っているカードケースペードのAを除いた全てーをノーマに差し出す、それにノーマは怪訝な顔をする。

「一体何のつもりですか？」

「これであたしがアンタを雇うわ、協会に登録されたライダーは等価交換で雇うことが出来る。」

青羽の言う通り、協会に登録されたライダーはそのライダーが満足するだけの報酬を用意すれば一般人が雇うこともできる。

「……分かりませんねえ。何故そこまで必死になるのです？ 彼女は貴女とはさして縁もゆかりも無い方たちでしょう、それなのに……」

「確かにあの子とはこの街で初めて会っただけの、まだ名前も知らない関係だけだね。それでも、目の前で苦しんでるあの子を放って置くことなんて、あたしには出来ない！」

そう言って青羽は声を張り上げ、ノーマは頭に手を当てて溜息を吐く。そして顔を上げると、青羽の手からカードを受け取った。

「仕方がないですねえ。」

「そ、それじゃあ！」

「まずはアンデッドの住処に向かいます。」

「それならこっち、さっきそれっぽいところを見つけたの！」

そう言って青羽はノーマを引っ張っていき、湖の岩場にある洞窟の近くまで来た。

「あれですか……。」

そう呟き立ち上がったノーマに、突然先程のアンデッドが飛びかかってきた。どうやら待ち伏せされていたらしい。何とかアンデッドを振り払ったノーマは、カリスラウザーを腰に装着すると『チェンジ・マンティス』のカードをラウズした。

「変身！」

《Change》

変身したカリスはアンデッドに殴りかかりながらも、抗体の場所を

探していた。その優れた分析能力でアンデッドの体内を走査する。

（どこです？ 一体どこに抗体が・・・。）

抗体を探しつつもカリスは攻撃の手を緩めない、だが同時に二つの作業をしているためイマイチ集中力が続かず、結果アンデッドからの攻撃を受けてしまう。

「グッ!?（一体、一体どこに・・・?）」

アンデッドの攻撃を受けながらも抗体を探すカリス、するとその時アンデッドにブレイドが飛びかかった。

「あ、貴女何を!？」

「あたしがコイツを抑えるから、イクスさんは早く抗体を!」

そう言うブレイドはアンデッドを後ろから羽交い絞めにする、だがアンデッドはしぶとく抵抗し徐々にブレイドから体力を奪っていく。

「ウッ・・・グッ!? は、早く・・・。」

「クッ!（抗体、抗体は一体どこに・・・!）」

その時カリスの目にアンデッドの右肩にあるムカデの頭のようなところ、そこに違和感を感じた。

「ッ!? そこです!」

それを見てからのカリスの行動は早かった、カリスアローを取り出してアンデッドに一気に接近し抗体がある部分を切り落とすと、ブ

レイドを引き剥がし『バイオ・プラント』『チョップ・ヘッド』を
ラウズする。

《Bio》

《Chop》

「ハァ！」

昨日ブレイドに対して使ったようにツタでアンデッドを拘束し、自身の方へ引き摺りながら強化された手刀をアンデッドに突き刺す。カリスの攻撃を受けたアンデッドのバツクルが開き、カリスに封印される。カリスはアンデッドを封印すると、抗体がある部分をブレイドに手渡した。

「これが抗体です、これであの子の命は助かるでしょう。」

「うん、ありがとう！」

そう言うのとブレイドは変身を解いて即座に街に戻っていった。

「……本当に、興味深い人です……。」

カリスは青羽の姿を何時までも見ていた。

ルーニオリフ・病院

あの後青羽が持って行った抗体によって、少女は一命と取り留めた。そして青羽は今その少女の前に立っていた。

「良かったわね、何とか助かって。」

「うん！　ありがとう、お姉ちゃん！」

少女からお礼の言葉を受けるが、青羽はそれに静かに首を振る。

「あなたを本当の意味で助けたのはあたしじゃないわ、あたしはただ抗体を持ってきただけだったし。」

「じゃあ、誰が助けてくれたの？」

「今はここにいない、もう一人の仮面ライダーよ。」

少女はそれに「そっか」と言うと、満面の笑みで青羽にあることを頼む。

「それじゃあ、お姉ちゃんからその仮面ライダーさんにお礼言ってくれない？あたしその人の事何にも知らないし、何にもお返しできないけど・・・。」

「うん、分かったわ。」

青羽からの答えに満足そうにした少女は、さらに言葉を続けた。

「あたしね、大きくなったらお姉ちゃんみたいな仮面ライダーになる！」

「そっか・・・頑張ってね。」

青羽はその言葉に微笑みながら少女の頭を撫でた。

街道

あの後青羽は街を出て、次の街に向かうつもりだった。その時、予想外の人物が彼女を待っていた。

「イクスさん？ どうしたの。」

「これを返しておこうかと思ひまして。」

「これって……。」

それは青羽がノーマを雇うために渡したラウズカードだった、返されたそれに青羽は困惑する。

「えっと、これって……どういうこと？」

「あなたのカード……ほとんどスピードばかりでハートが1枚も無いじゃないですか。私が戦闘用に集めてるのはハートのスートなんです、これではコンボに加えることもできませんし持っています邪魔になるだけです。だからこれはお返しします。」

「あ、ありがとう……。」

そう言ってカードを返すと、ノーマは踵を返すと青羽に声をかける。

「それでは行きますか。」

「はえ!？」

突然の言葉に青羽は対応できなかった、それを見てノーマが口を開く。

「私は貴女に非常に興味が出ました、ですので今後は貴女と行動を共にすることにします。宜しいですね？」

「へ？ あ、ああ……うん。よ、よろしくね!」

「こちらこそ。」

そう言うとノーマはバイクを走らせようとし、青羽は少女からの伝言を思い出しそれを引きとめた。

「そうだ、あの子から伝言よ。『助けてくれて、ありがとう。』だって。」

「・・・別に私に助けるつもりはありませんでした。」

「でも抗体をあのアンドレッドから取り出したのはあなたよ。」

「それはあなたが・・・。」

「まあいいからいいから！　じゃあ行こっか、ノーマ！」

青羽はそう言うのとバイクで走りだし、ノーマがそれに続く。その時ノーマがあることに気付く。

「貴女、今私の事を・・・。」

「え？　だってもうあたしたち仲間でしょ、だったら別にいいじゃん！」

「・・・ハア。」

ノーマはその答えに、自分の考えは少々早計だったかと思いながらも青羽と共に次の街へとバイクを走らせて言った。

おまけ

「ん？」

「どしたの、ノーマ？」

「今思ったんですが・・・貴女『リモート』のカードを持ってたよね？」

「うん、それがどうかしたの？」

「別にあの場で封印しても、リモートで操れる状態で解放してからの方が苦労が無かったのでは？」

「・・・・・・・・あっ!？」

「ハア・・・・・・・・。」

そんな他愛のない会話をしながら、二人は次の街へ向かって言った。

第4話 興味と決断（後書き）

というわけで第4話でした。ノーマが仲間になりましたね、今後も仲間は増えていく予定ですのでどんなキャラが仲間になるのかお楽しみに。

今回ギャレンの中の人の名前が判明、次回遂に青羽達と出会いますのでどうかお楽しみに。

それでは。

登場人物紹介 2 (前書き)

今回は今後新たに登場するキャラを新たに紹介します。2名ほど既に登場してるキャラがありますが、それ以外は今後登場する予定です。

登場人物紹介 2

登場人物紹介

大神 戒／仮面ライダーギャレン…19歳・男

仮面ライダーギャレンとして戦っている、黒髪・黒目の青年。基本的にいつも人当たりのいい笑みを浮かべていて、礼儀も正しい。ただしその見た目に反して実力は高く、ギャレンのスペックを最大限に生かした戦いをする。

伊坂と言う上級アンデッドの男と面識があるようだが、詳しいことは不明。ただ伊坂と対峙した時の彼は普段の温厚さからは考えられない気迫を見せる。利香と言う名前の彼女がいたらしいが……。

伊坂／ピーコックアンデッド

サングラスにコートを着ている謎の男性、その正体は上級アンデッドのピーコックアンデッド。青羽に興味を持ち彼が行っている何らかの実験のサンプルにしようとするが、戒の介入によって一時は諦めている。戒とは何らかの因縁があるらしい。

黒木 恭司／仮面ライダーグレイブ…19歳・男

政府の暗部『隠密調査部』に所属する、黒髪・碧眼の青年。仮面ライダーとして戦うことに正義などは一切持っておらず、ただ上からの命令だからという理由で戦う。ただ自身が『隠密調査部』のメンバーであるということにはある種の誇りを持っており、与えられた任務は確実に実行する。

性格は明るくどこか斜めに構えた感じで、大抵の事はのりくりとかかわす事が出来る。また以外にも仲間思いの一面も持っている。

奄美 怜奈／仮面ライダーランス…18歳・女

恭司と同じく『隠密調査部』に所属する少女で、恭司の恋人でもある。性格はノーマ以上に感情の起伏に乏しく、会話もほとんど片言に等しいモノになっている。恭司に深く依存しており、彼と離れることを何より嫌う。

普段はぼんやりしている印象を受けるが戦闘になるとそれが一変、野獣を思わせるような戦いぶりを見せる。外見は外跳ねの赤髪に赤い瞳、普段はスレンダーな体型だが実は着やせしていてモデル顔負けのスタイルを持っている。

赤沢 晃／仮面ライダーラルク…22歳・男

『隠密調査部』のメンバーの一人で、恭司・怜奈とチームを組んで任務に当たることが多い。口調は常に礼儀正しいが実際は一切他人を敬ったりするつもりはなく、逆に他人を小馬鹿にしていることが多い。ただでさえ他人の神経を逆撫でする様なことをさらに敬語で言うため、初対面ではまず確実に悪印象を持たれる。

外見はグレーの髪にグレーの瞳、そして長身が特徴。

櫻羽 弘貴／仮面ライダーアクス…16歳・男

仮面ライダーとして活躍しヒーローとなる事を夢見る、茶髪の少年。活発な性格で、時折考えなしに物事に突っ込んで行くことがある。その一方で非常に家族思いで、ライダーとして戦って得た報奨などは家族に仕送りしている。

ライダーとしての自分に誇りを持っており、その誇りを傷つけられると周りが見えなくなるほどの怒りを見せる。

【仮面ライダーアクス】

ブレイドと同じタイプのライダーシステムで、ブレイドがカブトムシをモチーフにしているのに対しアクスはサイをモチーフにしている。変身の際にはブレイバックルと同系の『アクスバックル』にスペードのA『チェンジ・ライノセラス』を装填し、ターンアップ

させることで変身が完了する。武装は『醒斧』の異名を持つ手斧型
ラウザー『アクスラウザー』、ただラウザーにはラウズカードが収
納されておらず右腰のカードケースにカードが収納されている。

音無^{おとなし} 利香^{りか}…18歳・女

戒の幼馴染の少女。琥珀色の瞳に緑色の髪をショートカットにし
ていて、性格は大人しくてどこか控え目の少女。それでも親しい間
柄の人物とはそれなりに明るく接することが出来る。現在は行方不
明となっているらしい。

現在の所持カード

青羽

- ・スピードのA『チェンジ・ビートル』
- ・スピードの2『スラッシュ・リザード』
- ・スピードの3『ビート・ライオン』
- ・スピードの4『タックル・ボア』
- ・スピードの5『キック・ローカスト』
- ・スピードの6『サンダー・デИАー』
- ・クラブの10『リモート・テイピア』

ノーマ

- ・ハートのA『チェンジ・マンティス』
- ・ハートの2『スピリット』
- ・ハートの3『チョップ・ヘッド』
- ・ハートの6『トルネード・ホーク』
- ・ハートの7『バイオ・プラント』
- ・ハートの8『リフレクト・モス』
- ・ハートの9『リカバー・キャメル』
- ・ハートの10『シャッフル・センチピード』

登場人物紹介 2 (後書き)

と言うわけで登場人物紹介その2でした。伊坂は原作と大した違いはありません、っと言うか上級アンデッドは基本原作と大した違いが無いと思います。原作で登場した上級アンデッド達って、ライダー達主要人物以上に魅力を感じることがあるんですよ。主に嶋さんとか、虎の姐さんとか……。それでは。

第5話 困惑する二人（前書き）

どうも皆さん、黒服です。今回第5話を更新しました。今回漸く戒と青羽達が出会います、この3人がどう出会うのか楽しみにしてください。

第5話 困惑する二人

夜・街道近くの森

青羽は飯盒で夕飯を作りながら頭を抱えていた、普段は何事もポジティブに考える彼女らしからぬ事態である。と言うのも……

「何でアンタ旅の道具何も持っていないのよ。」

ノーマの所持品があまりにも少なかったのである、所持金とライダ―関係以外は携帯食料のみといった具合に。確かに青羽もノーマのバイクにほとんど物が乗って無かったことに違和感を感じたが、ここまで少なかったとは思わず愕然とした。

「特に必要とは感じなかったの……。」

「寝る時はどうしてんの？」

「木に寄り掛かったり、草の上にそのまま寝たり……。」

「……アンタって意外とワイルドだったのね……はい、出来たわよ。」

「どうも。」

そうこうしていると食事が出来たらしく、青羽は自分とノーマに飯盒の中のシチューを取り分ける。ノーマは受け取ったそれに黙って口をつけ淡々と口に運んでいき、その様子に青羽は声をかける。

「ノーマってさあ、物を食べて美味しいとか思ったことってないの？」

「味覚として味を感じてはいますが……。」

「そう言うことじゃなくて……。」

その機械の様な対応にまたしても頭を抱える青羽、どうにも調子が狂ってしまう。

「じゃあ、アンタにとって食事って何なの？」

「ただの栄養源の摂取ですが、何か？」

ある程度答えを予想していたが、思っていた通りの答えが返ってきた時は流石に落胆した。こうして行動を共にするまでは分からなかったが、どうやらノーマは感性が低いらしい。

「私も一つ聞きたいんですが。」

「ん？ 何、ノーマ。」

青羽が今後のノーマとの接し方について色々考えていると、唐突にノーマの方から声をかけてきた。少々意外に思いつつも、これはノーマとの距離を縮めるチャンスかと思い彼女の質問に答える。

「ディアーアンデッドと戦った時、何故貴女は突然強くなったのですか？ それまではハッキリ言って苦戦していたのに。」

「何でって、うーん。」

青羽は答えに困ってしまった、何故と聞かれても何と答えていいか分からないのである。ただあの時は意識を切り替えたら感覚がクリアーになった様な感じで、青羽自身何がどうなっていたのか良く分かっているはいなかった。なので青羽はそれを正直に言うことにした。

「正直よく分かんないんだよねえ、ただ気持ちを切り替えたら頭の中がスッキリした感じがして。」

「そうですか……。」

ノーマはそれだけ言うと、食事を済ませて食器を洗うと木に寄りかかった。そして先程の青羽の解答について考える。

（いまいち要領を得ない答えでしたねえ、特別なことをしたというわけでもなさそうでしたが。気持ちを切り替えて？ 精神と能力に何か関係でもあるのですか？）

一方の青羽もノーマとの接し方に少々困惑していた、どうも普通の接し方ではうまくいかない感じがする。かといって他に何か接し方があるかと言えば特に思いつかない。

（参ったなあ、どんな会話したらいいのか全っ然思いつかない。なんか話してても何処かズレてる感じがするし、旅の道具の事とか意外と常識が無かったりするのかな？）

などとある意味失礼なことを考えながら、青羽も眠りにつくことにした。持っている寝袋を使わないで。それを見てノーマが疑問の声を上げる。

「あの、何故寝袋を使わないのですか？」

「え？ あゝその、なんか持っていないノーマの目の前で自分だけ寝袋に入って寝るって言うのも何か気が引けちゃってさあ。」

「別に私は気にしませんが・・・。」

「あたしが気にするの！ それじゃ、おやすみ。」

そう言って今度こそ眠りにつく青羽、ノーマはそんな青羽を見て小さい声で呟いた。

「やはり、どこか理解に苦しむことが多いですね、人間の思考と言

うのは。感情に始まる合理的でない判断……私にはよく分かりません。」

それだけ眩くと、ノーマも眠りについていった。

森から少し離れた草原

青羽達がお互いに少々困惑しながらも穏やかな時を過ごしていた頃、草原でギャレン・・・大神 戒が1体のアンデッドースパイダーアンデッドーと激しい戦いを繰り広げていた。

「ハッ、クッ、フッ！」

ギャレンは基本的にギャレンラウザーからの銃撃でアンデッドを寄せ付けず、巧みに相手の急所に攻撃を当てていく。時にはアンデッドも銃撃を振り切ってギャレンに突撃してくるが、彼は体術も決して弱い訳ではなくむしろ体術だけでもアンデッドと互角以上に渡り合っていた。

「よし、もらった！」

《Drop》

《Fire》

《Burning Smash》

度重なる銃撃でアンデッドが怯んだ隙を突いて、ギャレンが2枚のカード『ドロップ・ホエール』と『ファイア・フライ』をラウズする。するとギャレンはその場でジャンプして宙返りし、アンデッドの頭上から炎を纏った足による二段爪先蹴りを叩き込む。攻撃を受けたアンデッドは吹き飛ばされながら爆発、そして後にはバツクル

が開いた状態で倒れているアンデッドだけがいた。ギャレンはアンデッドにコモンブランクを投げて封印すると、変身を解いて元の姿に戻った。

「カテゴリーA、『チェンジ・スパイダー』か。正直僕にはあまり必要のないカードかな？」

とはいえ相手がカテゴリーAであったことはある意味大きな収穫ではあった。カテゴリーAは上級アンデッド並みに強い、自分はその相手と戦いそして勝つことが出来たのである。そんな彼の脳裏に、一人の少女の姿が浮かんだ。

「利香……。」

戒はそう呟くと、夜の草原を歩いて行った。

翌朝・森の中

青羽はいつも通りに朝日が昇るとともに目覚めると、鍛錬を始めた。

「フツ、ハツ、セイッ！」

何度も木刀を振るい、ある程度時間が経つと最期に大きく振りかぶり袈裟懸けに振り下ろした。そのまましばらく経ってから構えを解いた青葉は、いつの間にか後ろに来ていたノーマに声をかける。

「ゴメン、起こしちゃった？」

「いえ、偶々目が覚めただけですでお気になさらず。」

本当は青羽が動いた気配に気付いて起きてしまったのだが、それと言うと彼女が気にする事は目に見えているのであえて言わないでいた。

「そんな事よりも、毎朝続けているのですか？」

「うん、まあね。こうして自分自身を強くしていくの、今じゃもう習慣になっちゃって、やらないと落ち着かなくなってるんだけどね。」

そう言って青羽は「アハハ」と笑う、それを見てノーマは青羽の強さに関して彼女なりに答えを出す。

「なるほど、あなたの強さの源はその日々の鍛錬から来るものなのですね。」

「うーん、多分違うと思うけど。」

「違う……のですか？」

ノーマの言葉を青羽は唸りながらも否定した。それにノーマの困惑は更に強くなる、てっきりこの鍛錬が青羽の力の秘訣だと思っていただけに。

「では、その鍛錬には何か意味があるのですか？」

「勿論あるわよ、自分の動きを忘れない様にもする為だし、これをするだけでも戦いに必要な筋肉が鍛えられるしね。」

青羽はそこで「それに」と言葉を区切ると、少し間を置いてから再び口を開く。

「そう言うのを抜きにしてこれには心を鍛える意味もある訳だし、ね。」

「心を・・・鍛える、ですか？」

またしても出て来た『心』というキーワードにノーマは再び訳が分からなくなる、一体心が力にどう作用するのか彼女には理解出来なかったのだ。

「さてと！　ちょうどいい時間になって来た事だし、そろそろ朝ご飯にしようか。」

そう言って青羽は荷物が置いてあるところに戻って行き、ノーマはそれを黙って見送っていた。

（また心ですか、彼女の強さの秘密は心。ですが心と力に一体どんな関係が・・・今後も彼女をじっくり見てみる事にしますか。）

そんな事を考えながらノーマは青羽の後に付いて行った。

それから二人は朝食を終え、焚き火の始末をしてから森を抜けて次の街へと向かってバイクを走らせていた。その時・・・

「ッ！？　アンデッドです、それもかなり近い！」

「えっ！？　何で分かるのそんなこと？」

突然のノーマの言葉に困惑する青羽、その時彼女の近くの草むらから1体のアンデッドローゼブラアンデッドローが青羽に向けて飛びかかって来た。ノーマがそれに飛び蹴りを叩き込みカリスラウザーを腰に装着し、一瞬遅れて青羽もブレイラウザーを腰に装着した。

「「変身！」」

《Turn up》

《Change》

二人はそれぞれブレイド・カリスに変身すると、アンデッドに攻撃を加え始めた。アンデッドも馬蹄形のブーメランを取り出して、二人に攻撃を仕掛けて行く。だがやはり多勢に無勢、しかも二人ともそれなりの実力者の為アンデッドが圧される形となる。二人に同時に蹴りつけられて吹き飛ぶアンデッド、するとその時吹き飛ばされたアンデッドが2体に分身した。

「ちよっ、何それ!？」

「面倒な能力ですね、これで数の優位が崩れました。」

二人が以外な能力を発揮するアンデッドに少なからず驚いていると、突然2体に分身したアンデッドに銃撃があたる。ブレイドとカリスがそちらを向くと、大型の拳銃型ラウザー【ギャレンラウザー】を構えた仮面ライダーギャレンがいた。

「あ、貴方は……。」

「あっ!？」

二人が突然現れたギャレンに驚いていると、ギャレンは2体になったアンデッドに突撃しながら銃撃を浴びせていく。アンデッドの方も反撃しようとするがギャレンの銃撃に阻まれ、また巧みにフェイントを織り交ぜて攻撃してくるギャレンに完全に翻弄されていた。

「フッ!」

前方にいるアンデッドの方にギャレンが狙いを定めると、後ろにいた方のアンデッドがギャレンに攻撃を仕掛けようとする。だがギャレンは引き金を引く寸前に標的を前方のアンデッドから後方のアン

デッドに切り替え、連続で引き金を引く。すると堪らず後方にいたアンデッドは消滅してしまった、どうやらこちらが偽物だったらしい。残った本物に向けてギャレンはトドメを刺しに入る。

《Drop》

《Fire》

《Burning Smash》

「ハアッ！」

ギャレンの必殺技を受けたアンデッドは爆発し、バツクルが開いたのを確認したギャレンがそのアンデッドを封印した。

「ダイヤの9『ジェミニ・ゼブラ』か、なかなかいいカードが手に入ったね。」

そう言うギャレンはブレイド達に向き直って声をかけて来た。

「大丈夫だったかい？」

「ええ、何とか。」

「久しぶり！……つっても覚えてないよね？」

「アリーウォの広場でダークローチを相手に戦っていた二人だろ？それなら良く覚えてるよ、僕も含めてあの場では結構目立ってたしね。」

そう言うギャレンは変身を解いて二人に素顔を見せると、右手を差し出した。

「僕は大神 戒って言うんだ、よろしくね。」

戒が自己紹介すると青羽とノーマも変身を解き、それに答えていく。

「あたし青羽、桐沢 青羽ね。」

「ノーマです、ノーマ・イクス。」

「宜しく、二人とも。」

そう言って戒はにこやかに二人と握手し、二人もそれに答えた。

「ねえ、ここで会ったのも何かの縁かもしれないしさ、もし良かったら一緒に次の街まで行かない？」

青羽はそう戒に尋ねるが、戒はそれに静かに首を振った。

「悪いけど、僕結構急いでるんだ。まあ縁があればまた会うかもね、それじゃ。」

そう言って戒はその場を去っていき、後に残された青羽は残念そうな顔をした。

「うーん、残念だなあ。もっといろいろ話したかったのに……。」

「予定は人それぞれです、何か彼にも理由があるのでしょう。」

その後青羽達も次の街にバイクを走らせた。二人が目指す次の街は『オンニオ』、そして戒が向かっているのは……

「次はとりあえず……オンニオに行くとするかな、伊坂が次に行くとするば多分そこだ。その時は、必ず……。」

どうやら再会は案外近いかもしれない。

第5話 困惑する二人（後書き）

と言うわけで第5話でした。戒が青羽達と出会いましたが彼には目的があったので、あっさりと別れてしまいました。とはいえ再会はめっちゃめっちゃ近いんですけどね（笑）。

次回、青羽とノーマの関係に進展が！それでは。

第6話 歩み寄り（前書き）

どうも、黒服です。今回第6話を更新しました。今回はプロローグなどを除くと初めての戦闘なしの話になりました。

第6話 歩み寄り

アンデッド封印協会ボード・オンニオ支部

あの後数日経ってから、青羽達は道中特に問題もなく次の街「オンニオ」に到着した。街に着くと青羽は早速協会に行き、アンデッドの情報を集めた。すると驚くべき情報を入手することになる。

「上級アンデッドが！？ ホントに？」

「はい、つい最近の話ですがサーチャーに一瞬だけ反応がありました。反応から考えて上級アンデッドの確率が高いものと思われます。」

思いもよらない大物の情報に青羽は舞い上がるが、ノーマがそれに待ったをかける。

「それは確かな情報なのですか？」

「どういうこと、ノーマ？」

「簡単なことです、反応が一瞬だけということはサーチャーの誤作動という可能性があるということです。」

ノーマの至極もつともな指摘に青羽が感心していると、受付のスタッフがそれに答える。

「その点は心配ありません、念のためサーチャーをチェックしましたがアンデッドの反応は本物でした。おそらく何らかの理由で一度アンデッドの姿に戻ったものと思われます。」

スタッフからの答えに満足したノーマと青羽は、協会を出て一先ず

宿を探すことにした。上級アンデッドの他にも何体かアンデッドの反応があったので、それらを封印することも考えて拠点とする宿を探しているのである。

「あゝ上級アンデッドかあ、どんな奴なのかなあ。」

青羽はまるで子供のように期待に胸を膨らませているが、ノーマの方は対照的に非常に冷めていた。

「勝てると思ってるのですか？ 相手は上級アンデッド、一筋縄ではいきませんよ。」

「そんな事分かってるわよ！ でもやっぱり強い奴と戦えるかもしれないって思うとさ、なんだかこう・・・腕が鳴ってこない？」

ノーマは青羽の言葉に両手を肩のあたりに上げることで応え、再び上級アンデッドと戦うことへのリスクを口にする。

「上級アンデッドはただ強いだけではありません。頭もよく、人間の姿になって人間社会に紛れ込んでいることが多いんです。それに他の下級アンデッドを従えていることもある、それを踏まえて勝てると思ってるんですか？」

そのノーマの言葉に青羽はノーマの目を真っ直ぐ見て、自分の考えを口にした。

「相手が強いってことは重々承知してるわ。でもねノーマ・・・勝てるかどうかじゃないの、勝つのよ！ 頭がいい？ 人間に化ける？ そんなこと関係ないわ！ ただ自分が持てる力全てで立ち向かう、それで十分よ！！」

力強く自分の考えを口にする青羽、ノーマはそれに頭を抱えつつ気になることを聞く。

「ちなみに・・・相手が勝てないほど強かったらどうするんですか？ 実際に戦って、いざ負けるかもしれないと思った時は？」

「あたしだってね、引き際はわきまえてるわ。それでも父さんいろいろなと鍛えられたからね、ヤバいと思ったら逃げるほどの判断力はあるつもりよ。」

そこまで言って青羽は「もっとも」と言葉を区切ると、いつもの笑みを浮かべて・・・

「最終的にはノーマをあてにさせてもらうけどね！」

とノーマに言った。ノーマはそれにもはや何度目になるかわからない頭を抱えての溜め息を吐くと、とりあえず上級アンデッドに関する情報を収集することにした。

BAR

ノーマは少々困惑していた、自分は確か上級アンデッドに関する情報を仕入れようとしていた筈である。それが何故こんな所にいるのか・・・。

「一体どういうことですか？ 私は上級アンデッドに関する情報を集めようと・・・。」

「だからここに来たのよ、上級アンデッドって普段は人間の姿してるんでしょ？ だったら人がよく集まって、しかも街の外から来た人の情報がよくわかるBARの方がいいのよ。」

「なるほど・・・そういうことですか。」

（もっとも、こういう所ってゴロツキとかガラの悪い連中も集まりやすいから、正直気乗りはしないんだけどね。）

実際すでに何人かのガラの悪い連中は二人に視線を向けていた、しかも中には明らかにヤバイ視線を向けているものもある。これは早急に目的を果たすべきだと判断した青羽は、マスターに声をかける。

「そいつ一杯。」

「はいよ。」

青羽は適当に一杯（勿論アルコールの弱いやつ）を頼むと、受け取りながらおもむろにマスターに最近この街に変わった奴が来なかったか尋ねる。

「ああ、あんたもライダーかい？」

「そうだけど・・・何で分かったの？」

「ハッ、ここ最近同じようなことを聞いてくる奴が多いんでね。大方この街に来たって言う上級アンドッドの情報が欲しいんだろう？」

「分かってるんなら話は早いわ、なんか耳寄りな情報はない？」

マスターはそこで一旦言葉を区切ると、青羽に重苦しく言った。

「お譲ちゃん、悪いことは言わん。止めといた方がいい。今まで何人もそいつに挑んでいったが全員生きては帰らなかった。そいつの強さは尋常じゃないはずだぜ。」

だが青羽はマスターからの警告などどこ吹く風といった感じで笑いながら言葉を返した。

「相手が強いことは覚悟の内よ、それに相手が強いからって引き下がってばかりじゃちっとも前になんて進めないわ。あたしには超えたい目標があるんだから。それに、頼りになる相棒もいるしね!」
「フフッ、随分と強気だな。余程その相棒とやらが頼もしいんだろうな。」

「当然よ、なんたつて「んだとこのガキ!」?・・・ッ!? な、何?」

青羽とマスターが話していると突然男性の怒鳴り声と、グラスが割れる音がした。何事かとそちらを見ようとして、青羽はノーマがいないことに気付く。

「ま、まさか・・・。」

一方のノーマは何が何だか分からなかった、なぜ自分が怒鳴られているのか? 自分はただ事実を指摘しただけだというのに。

「こいつ、ガキだからって調子に乗りやがって!」

「別に調子に乗ったつもりはありません、ただ私は事実を「ノーマ! ストップ、ストローップ!」って何ですかあなたまで。」

ノーマがさらに男の怒りの火に油を注ごうとしたところで、青羽がノーマを止めに入る。流石のノーマも若干面倒くさそうな表情をしながら青羽の方を見る。

「あ、あんた一体何やらかしたの!」?

「だから私は事実を指摘したまででして・・・。」

「何があったのよ一体?」

青羽がノーマに尋ねると、ノーマが事の顛末を話し始めた。彼女に

よると、初めて入るB A Rの内部を物珍しそうに見て回っていると、突然この目の前の男が声をかけてきたらしい。どうやらナンパをしたつもりのようなだが、ノーマはそれに一切耳を貸さず、挙句の果てには・・・

『こんなことをしているくらいなら少しは働いたらどうなんですか？ いい歳してみっともないですよ。』

等という言葉をかけ、これに男が怒りだし今の状況になっているというこたらしい。これには今度は青羽の方が頭を抱えた、彼女を一人で行動させてしまった自分のミスも含めて。

「あんたは・・・もうちょつと言葉を選ぶなりしなさいよね。」

「言葉を選んだところで内容は特に変わらないでしょう。」

「いや、そうかもしれないけどさあ……。」

「てめえら何ゴチャゴチャ言っやがるんだ!？」

二人が話していると、今まで黙っていた男が声を張り上げた。どうやら無視された形になったことに怒りのボルテージが上がってしまったらしい、なお悪いことに目の前の男は仮面ライダーらしく怒りに任せてバックルを腰に装着し始めた。いよいよマズイ、と青羽が思った時に男に後ろから声をかける人物がいた。

「まあまあ、そうカッコしないで。」

「あ！ 戒!？」

そこにいたのはつい先日別れた大神 戒であった。彼は男の肩に手を置くと、人当たりのいい笑みを浮かべながら宥めるように男に声をかける。

「何があつたかは知らないですけど、まずは落ち着きましょう。僕が一杯奢りますよ。」

「ッこのガキが《Turn up》ッうわぁ!？」

戒の笑みが気に入らなかったのか男は戒に殴りかかろうとするが、その瞬間にいつの間にか腰にバックルを装着していた戒がターンアップハンドルを引いてオリハルコンエレメントを生成する。それに吹き飛ばされて男は店の外まで弾き出されてしまう。

「ツクソが、このガキィ……ってその姿は!？」

「おや、ギャレンのことをご存じで？」

「ギャレン!?!? や、やっぱり……てめえが……ヒ、ヒエエエエ!？」

ギャレンの姿を見た途端男はそれまでの威勢が嘘のように怯えまくり、そのまま脱兎の如く逃げ出してしまった。残されたギャレンは変身を解くと、店に入って行きカウンターに多めにお金を置く。

「すみません、騒ぎを起こしてしまつて。これは迷惑料ということ
で。」

「あ、ああ……。」

マスターは呆然としながらお金を受け取り、マスターがお金を受け取ったのを確認した戒がマスターに改めてあることを尋ねる。

「ところで……この街に最近現れた上級アンデッドに関する情報が欲しいんですけど。」

「ッ! あ、ああそれだったら……。」

戒に尋ねられマスターは慌てて上級アンデッドに関わる情報を話し

ていく、それを見ながら青羽はノーマに気になったことを聞く。

「ねえ、戒ってそんなに凄い人なの？」

「昨日の戦いを見た限りでは確かに腕は立つでしょうね、恐らくそれなりに名が売れているのではないかと。」

そんな話を話していると、戒がBARから出て行った。それを見て青羽はマスターに戒について訊ねた。

「ねえ、あいつってそんなに凄いやつなの？」

「お譲ちゃん、ギャレンについて何も知らねえのかい!？」

青羽がそれに頷くと、マスターが戒について事細かに説明していく。それによると、戒は僅か数か月の間に数え切れないほどのダークローチを倒し、多くのアンデッドを封印してきたらしい。その強さはすでに多くのライダーの耳に入っているとのこと、現代の仮面ライダーの代名詞の一人と言われるほどらしい。早い話が彼のことを知らないなど潜りもいいところだったのである。

「あたし父さん以外のライダーなんて興味なかったからなあ。」

「なににせよ、上級アンデッドは諦めな譲ちゃん。あの男なら確実に今回の上級アンデッドを封印しちまうだろうさ。」

青羽はその言葉にムツとした顔を見ると、ノーマを引っ張ってそそくさとその場を去っていく。店から出てしばらくして青羽はノーマに向かって言った。

「ノーマ、あたし決めたわ。絶対に戒よりも先に上級アンデッドを封印するわよ!」

「何を藪から棒に・・・。」

「戒が凄いのなんてあたしたちだって十分知ってる、でもだからってここで引き下がっちゃ父さんを超えるなんて夢のまた夢！ それに相手が手強い方がこっちも燃えてくるってもんよ！」

「私は別に貴女の父を超えるようななどと思っていないのですが……。」

ノーマの突っ込みなど何処吹く風、青羽はどんどんヒートアップしていく。どうやら同時に複数の強者がいるという事態に彼女の中の闘争心に火が付いてしまったらしい。

「少し前から気になっていたのですが、貴女の父とはどういった方なのですか？」

「え？」

「貴女は度々父を超えって言ってますが、私は貴女の父がどんな方なのか知らなかったので……。」

そこまで言われて青羽は落ち着きを取り戻すと、父・信司について話していく。

「凄い人だよ、あたしの父さんは。父さんも昔はライダーとして戦ってきたて、沢山の人を助けてきたんだって。」

「……………」

「あたしは母さんから父さんのことをいろいろ聞かされてね、本当に凄いつて思ったんだ。いつかあたしも父さんみたいな仮面ライダーになるって、絶対に超えてみせるって心に誓って今まで鍛えてきたんだ。」

青羽はそこまで言うところ「まだまだ先は長いけどね」と笑いながら歩き出す。ノーマはそれを見て、青羽がとても眩しく見えた。彼女自身なぜそう見えたのかは分からなかったが、ノーマは知らず知らずの内に青羽に横に並んで歩くと口を開く。

「なら、とにかく精進あるのみですね、“青羽”。」

「うん！……ってあれ？ ノーマ、今初めてあたしの事名前で呼んでくれた？」

「あ……。」

どうやらノーマ自身無自覚に行ったことの様で、呼ばれた青羽以上に驚いているようだった。

「どうしたの急に、今まで“貴女”とかでしか呼んでなかったのに……。」

「さあ、どうしてでしょうね？ 私にも分かりません……ですが、悪い気はしないですね。」

「ま、なんだっていいか！ 改めて宜しくね、ノーマ！」

「こちらこそ、青羽。」

改めてお互いに挨拶すると、二人はともに街を歩いていった。目指すべきは、上級アンデッド。
そして……

「間違いない、伊坂がいる。待ってろよ、今度こそ必ず……！」

第6話 歩み寄り（後書き）

というわけで第6話でした。今回初めてノーマが青羽の事を名前で呼びました、今後は二人の距離も少しは近付くことになると思います。

戒は何気にかんりの実力者です、多分現在登場しているメインキャラクターの中でも1，2を争う実力者だと思っています。

次回は初っ端から戦闘シーンの予定です、しかも相手はカテゴリーJ！一体どんな戦いになるのかお楽しみに。
それでは。

第7話 戒と伊坂（前書き）

どうも、黒服です。今回は序盤から戦闘が始まります。青羽達がカテゴリーJとどう戦うのか、お楽しみに。

第7話 戒と伊坂

オンニオ・倉庫街

青羽とノーマは上級アンデッドを探して街の中をあちこち探していた。幸いなことにBARのマスターが戒に言っていたアンデッドに関する情報はノーマの耳にも入っていたので、それをもとに捜している最中だった。その特徴とは・・・

「サングラスにコート、20代後半から30代前半の男ねえ。」

「はい、その男がつい最近になってこの街で時たま見かけられます。おそらくその男が上級アンデッドでしょう。」

それからというモノすでに3時間近くも捜しまわっていたが、未だに見つかってはいなかった。それこそ下級アンデッドの姿も無いほどである。

「もう街から出ちゃったのかなあ？」

「どうでしょうね？ 相手は上級アンデッド、案外街の方に潜んでいるのかもしれないですよ。」

二人が他愛のない話をしていると、突然二人に2体のアンデッドージャガーアンデッドとシェルアンデッドーが襲いかかってきた。二人はアンデッドの攻撃を避けると、バックルとラウザーを腰に装着して変身する。

「変身！」

《Turn up》

《Change》

二人は変身するとブレイドはジャガーに、カリスはシェルアンデッドと戦い始める。

「本命じゃないのが残念だけど、一気に決めるわよノーマ！」
「了解です。」

そう言ってブレイドは『キック・ローカスト』『サンダー・ディア』を、カリスは『チョップ・ヘッド』『トルネード・ホーク』を取り出しラウズしようとする。その時、二人に複数の何かが炸裂して行動が中断される。

「クウ!？」

「グアッ・・・な、何!？」

二人が攻撃が来た方を向くと、そこには孔雀のようなアンデッドーピーコックアンデッドーがいた。ピーコックアンデッドは二人に近付きながら、突然人間の言葉で話しかけてきた。

「漸く会えたな、ブレイド。」

「じゃ、しゃべった!？・・・と言うことは……。」

「上級……アンデッド……!」

この事態にブレイドとカリスは自分達が危機に陥っていることを感じた。数の上でも負けているし、先程の攻撃で少くないダメージを受けてしまった。どう考えても状況は悪すぎる。

「青羽! この場は退きましよう、いくらなんでも状況が悪すぎです!」

「んなこと分かつちやいるけど、こいつ等離れない!」

二人が撤退しようとするが、2体の下級アンデッドが邪魔をしようように逃げられない。おまけにピーコックアンデッドが巨大剣でブレイドに斬りかかってきて、二人を分断してしまった。

「青羽！ クッ・・・。」

「お前達、カリスの足止めをしろ。」

「ノーマー!!」

カリスは慌ててブレイドの援護をしようとするが、2体のアンデッドが邪魔をする。ブレイドはピーコックアンデッドからの攻撃で確実に追い込まれていった。

「ハッ！ グッ・・・ガハッ!？」

「クッ、邪魔です!」

度重なる羽手裏剣による攻撃と、巨大剣の攻撃でブレイドは既にボロボロになっている。カリスもブレイドほどではないが2体を同時に相手にしていることと、ブレイドの方に注意が向いている所為で苦戦を強いられていた。そんな時、ピーコックアンデッドが斬り上げた巨大剣にブレイドが弾き飛ばされ、地面に倒れた衝撃で変身が解けてしまった。

「グハッ!・・・あ・・・ああ・・・。」

既に青羽はボロボロで、碌に動くことも出来ない状況だった。ピーコックアンデッドはそんな青羽に近付いていく。

「さて、お前も俺の実験のサンプルになってもらうぞ。」

「青羽! 《Turn up》・・・え?」

あと少しでピーコックアンデッドが青羽に触れると言う時、電子音声が鳴り響くと同時に生成されたオリハルコンエレメントに吹き飛ばされるピーコックアンデッド。カリスがそちらに視線を向けると、今まさにゲートをくぐろうとしている戒の姿があった。

「伊坂あ!!」

「クッ! 大神か!」

「ハアアアアアアアア!」

ギャレンはラウザーで銃撃しながら突っ込んでいき、ピーコックアンデッドは火炎弾で迎え撃つ。双方お互いの攻撃を避けつつ距離をとった。

「今日こそ利香を返してもらおうぞ!」

「チィ、そうそう上手くいくかな?」

ギャレンは至近距離からの銃撃とキックなどでピーコックアンデッドに攻撃していき、ピーコックアンデッドは巨大剣でギャレンを引き剥がそうとする。だがギャレンは巨大剣からの攻撃を執念で耐えきると、ピーコックアンデッドの腹部に零距离射撃を喰らわせる。

「グウッ!」

「今だ!」

《U p p e r》

「ハアッ!」

相手が怯んだ隙を突いてギャレンはダイヤの3『アッパ・フロッグ』をラウズして、強化したアッパパンチを放つ。ピーコックアンデッドはまともに食らって吹き飛ばされる。

「さあ、観念しろ。利香は何処にいる？」

「フツ、そう簡単に言うと思うのか？」

その瞬間カリスを足止めしていた2体のアンデッドがギャレンに飛びかってくる。ギャレンは咄嗟にそちらに視線を向け、その隙にピーコックアンデッドは空中に逃げる。

「ッ！ 待て、逃がす・・・チッ、邪魔だ!？」

「悪いが俺は忙しい、お前の相手はまた今度してやる。」

そう言うときピーコックアンデッドは何処かへと飛んでいき、2体のアンデッドもその場から離れて行った。それを見たギャレンは変身を解き、苛立たしげに近くの壁を殴った。

「クソッ!! 伊坂あ…………。」

《Split》

「青羽、大丈夫ですか？」

「な・・・なんとか、生きてる…………。」

戒の様子を横目で見つつ、ノーマは変身を解きながら青羽に近付いていく。青羽はボロボロで至るところに痣や傷がある様だったが、見た目に反して重症ではなかったらしい。何とかといった感じだが上半身を起こしている。ノーマは青羽に肩を貸しながら、戒に声をかける。

「私達はこれから病院に行きます、出来れば一緒に来ていただけますか？」

「・・・どうしてだい？」

「先程のアンデッドと貴方の関係について気になるもので。」

病院・待合室

青羽は病院につくと念のために精密検査を受け、その後切り傷などの治療を受けてノーマ達のところへ戻ってきた。青羽の怪我は見た目に反して大きい物はなく、2〜3日安静にしていればすぐ良くなるとのこと。そして二人は戒の口から彼とあのアンデッドとの間にある因縁を聞くことになった。

「あのアンデッドは人間の姿では伊坂と名乗っている、あいつはアンデッドだけでなく人間も従えて何かをしようとしているらしい。」

「何か？」

「それって何なの？」

「そこまでは……。」

ノーマはその言葉に伊坂が何をしようとしているかを保留にし、戒本人と伊坂との因縁に話を移す。

「貴方は伊坂と随分親しい間柄のようでしたね、一体何があったんですか？」

「……僕はあいつから、助け出したい人がいるんだ……。」

そう言うと戒は伊坂との間に何があったのかを話し始めた。

数ヶ月前・首都ミッドガルド

戒はショッピングモールに急いでいた、彼にとって非常に大切な人との約束の時間が近付いていたのである。

「ちょっと服選びに気合入れすぎたかなあ、早くしないと。」

こうして会うこと自体は決して1回や2回ではないので、別段そこまで服装に気追う必要も無かったのだが、どうもこの日は気合が入ってしまった。そんな事を考えていると、目的のショッピングモールが近付いてきた。約束の場所に近付いていくと目的の人物、音無利香が待っているのが見えた。戒は声をかけつつ利香に近付いていく。

「おい、利香！」

「あ、戒い！」

「ごめんごめん、待った？」

「ううん、大丈夫だよ。」

利香のその言葉に、戒は苦笑しつつ言葉を返す。

「そこ、普通は『今来たところ』って返すんじゃないかな？」

「だって、今日はちょっと早めに来ちゃったから……。」

「ほら、やっぱり待ってた。」

「もう！」

利香は一瞬そっぽを向くが、すぐに戒と向き直るとお互いに笑い合った。

「行こっか？」

「うん！」

利香は戒の腕に自分の腕をからめて、戒はそれに微笑みながらショッピングモールに入っていた。

いくつかの店を転々とした後、二人は一つの店で戒の服を選んでいた。

「こっちの方が似合うんじゃないかな？」

「うーん、僕としては黒い色の方が好きなんだけど・・・。」

「黒も似合うけど、戒には他の色も良く似合ってるよ。」

二人がそんな他愛のない会話を続けていると、突然外から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃあああああっ!？」

「うわあああっ!？ アンデッドだーっ!？」

戒が慌てて店の外に行くと、そこには1体のアンデッドローフロツグアンデッドローが人々を襲っていた。

「戒!？」

「大丈夫。すぐに終わるから、利香はそこに隠れててね。」

不安そうな顔をする利香にそう言うと、戒はギャレンバックルにダイヤのAを装填して腰に装着した。

「変身!」

《Turn up》

戒はギャレンに変身すると、即座にアンデッドにギャレンラウザーによる銃撃を喰らわせる。突然の攻撃に怯みながらもアンデッドはギャレンに反撃しようとするが、ギャレンは的確に距離を置きながらなおも銃撃を加えていく。

「そろそろ決めようかな。」

《Bullet》

《Fire》

ギャレンはオープントレイから『バレット・アルマジロ』と『ファイア・フライ』のカードをラウズすると、ラウザーから炎の弾丸をアンデッドに発射する。それを受けたアンデッドは耐えきれず爆発し、ギャレンによって封印された。

「ふう、こんなものかn「きゃあああああつ!?!」・・・ッ!?!? 利香!」

ギャレンが気を抜いた瞬間、彼の耳に利香の悲鳴が聞こえてきた。まさかもう1体いたのかと急いで利香の下へ向かうと、二人の男性に連れ去られようとしている利香と、それを見ている一人の男性の姿があった。ギャレンはそれにラウザーを向けながら利香を離すように言う。

「何だ君達は? 今すぐ利香を離してもらおうか、さもないと流石の僕も・・・。」

「残念だが、この娘には俺の実験のサンプルになってもらう。邪魔をしないでもらおう。」

「何!?!」

そう言うのと男性の姿が揺らぎ、孔雀の様な姿のアンデッドーピーコックアンデッドーになった。

「ッ!?! 上級アンデッド・・・。」

「お前達は早くそいつを連れて行け。」

「分かりました、伊坂さん。」

ギャレンが男性の正体に驚いていると、アンデッドが男達に指示を出す。それを聞いて利香を連れて行こうとする男達を見てギャレンが止めようとするが、アンデッドがそれを阻止する。

「クッ、邪魔をするな！」

「悪いが行かせる訳にはいかん、行きたければ俺を倒していくんだな。もつとも、たかが人間のライダー如きで俺に勝てるわけがないがな。」

そう言った瞬間、アンデッドは複数の羽型の手裏剣をギャレンに飛ばしてきた。突然の攻撃にギャレンは対応しきれず、何発か攻撃を受けてしまう。

「グッ!? クソォ、させるか！」

負けじとギャレンもラウザーから銃撃をアンデッドに放った、アンデッドはそれを巨大剣で弾くとギャレンに切りかかっていく。今度はギャレンもそれを完全にかわし、かわした瞬間にラウザーで銃撃する。銃撃を受けたアンデッドは思わず後ずさる。

「グッ、貴様あ！」

「利香は返してもらう！」

ギャレンはそう言いながらアンデッドに銃撃しながら突っ込んで行き、アンデッドは羽手裏剣や手から放つ火炎弾等に対抗する。

「ハッ、セイッ、ヤアッ！」

「クッ、ヌンッ！」

ギャレンとピーコックアンデッドの実力は互角だった、ギャレンの至近距離からの銃撃を受けながらもアンデッドは巨大剣でギャレンに攻撃し、アンデッドが巨大剣を振るうとギャレンがラウザーでそれを防ぐ。そんな攻防を続けて何時しかどちらもボロボロになっていた。

「ハア、ハア、ハア……。」

「ゼイ、ゼイ、ゼイ……フフツ。」

「?…何が可笑しいんだい？」

「この勝負、俺の勝ちだ。あの娘は貰ったぞ。」

「ッ!? しまった!」

アンデッドとの戦いに気を取られて、利香をまんまと連れて行かれてしまったことにギャレンは気付き、己のミスを悔やむ。すぐに追おうにも体力は無く、そもそもどこに逃げたのかも分からない。

「俺はこれで失礼するよ、もう会う事も無いだろう。」

「ま、待て!…クソオ、クソオオオオオオオオッ!」

そう言うとアンデッドは空中に浮かんでそのまま何処かへ飛んで行ってしまった。ギャレンはそれを見て天に向かって叫び声を挙げ、その叫びはそのまま空へと消えて行った。

現在

戒の話を聞いた青羽は、しばらく何かを考え込むように黙ると、唐突に戒の手を握り締める。

「あたし達も協力するわ!」

「えっ!？」

戒は驚いて青羽の顔を見る、その目には情熱の炎が見える。

「そんな話聞いて、じゃあ頑張ってるなんて言えるわけないでしょ！
その伊坂ってのはあたしもお目当てみたいだし、一緒にいれば向
こうから来てくれるって。」

「まあ、乗りかかった船と言う奴ですか。」

戒はそう言って協力を申し出てくる二人を見て、少し考えた後にそ
の申し出を断った。

「悪いけど、それは遠慮させてもらおうよ。」

「えっ!？ な、何で？」

「共に行動した方がより確実だと思うのですが……。」

ノーマの言葉に戒はしばらく考える様な素振りを見せると……

「これは僕の問題だ、自分の問題は自分で始末する。君達の手助け
入らないよ。」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！ それに「それに……
」……ッ?」

「僕はすぐにでも伊坂を追う、恐らくもうこの街から離れているだ
ろう。だが君はしばらく安静にする必要がある、僕にはそんなに悠
長に待つことなんてできない。」

「……ッ。」

戒の言葉に青羽はなにとも言えなくなってしまう。確かに今の自分は
ハッキリ言って足手まといでしかない、そんな自分が今ついでに言っ
ても邪魔にしかならないだろう。

「でも、手助けを申し出てくれたことは嬉しかったよ……それじゃ、また。」

そう言って戒はその場を去っていき、後には戒の後姿を見つめるノーマと俯いた青羽が残された。ノーマは俯いている青羽に顔を向け、声をかける。

「それで……どうするんですか？」

「……行くに決まってんじゃない！」

そう言って顔を上げた青羽の顔は既に何時もの明るいものに戻っていた。

「確か、2、3日は安静にしていなければいけなかったのでは？」

「ダイジョブダイジョブ、派手なことしなけりや何とかなるって。」

そう言うのと早速病院の外に向かっていき、戒の後を追おうとする。戒は多分既に街を出ているだろうが、聞き込みをすれば彼がどこに行くつもりなのかは大体分かるだろう。ノーマはそんな青羽の様子に苦笑しながら、彼女の後についていった。

第7話 戒と伊坂（後書き）

と言うわけで第7話でした。青羽はピーコック相手にボロ負けでしたね（^^;）、と言うか青羽結構負けてるシーン多いですね、プラントアンデッドやカリスにも負けてましたし。ただ何度も負けを経験して強くなっていくのが青羽なので、今後の彼女の成長具合に期待しててください。

それと今回戒と伊坂の間の因縁が明かされました、なんか書いといてんですけど戒の方が主人公っぽいなんか（汗）。果たして今後彼が利香を取り戻せるのかも楽しみにしててください。それでは。

第8話 取引（前書き）

どうも、黒服です。今回青羽がピンチになります、一体彼女に何が起こるのか、お楽しみに。

第8話 取引

ルシセ近くの森

オンニオを離れて数日後、ルシセ近くの森の中で戒は伊坂を見つけることが出来た。というよりも向こうから戒の方に攻撃を仕掛けてきたのである。突然の事に戒は驚いたが、飛んで火に入る夏の虫とばかりに戒はギャレンに変身し、ピーコックアンデッドを追いこんでいった。

「さあ、観念してもらおうよ。利香を返してもらおうか。」

「フツ・・・フフフフフツ。」

「?・・・何がおかしい?」

状況はどう考えてもピーコックアンデッドが不利である、にも拘らず相手は余裕と言った感じの雰囲気を出している。戒はそれに訝しげな顔をする。

「フツ、いいのか俺を封印して。俺が封印されれば、もうあの娘を取り戻す事は出来ないぞ。」

「ッ!!??」

どうやら戒が恐れていた事態が現実になってしまったらしい。戒は伊坂の組織に関しては何も知らない、となると伊坂が居なくなってしまうと利香を助け出す手掛かりが無くなってしまうことになるのである。今まではそれを悟られないようにしながらギリギリのところで何時も脅してきたが、向こうがそれに気づいてしまう。戒が大きく動揺していると、アンデッドの方が声をかけてきた。

「だがもう正直俺はあの娘に興味が無い、だから条件次第ではあの娘を解放してやってもいい。」

「・・・何が望みなんだい？」

「そうだなあ……。」

アンデッドはそこで言葉を区切ると、ギャレンに向かって条件を言う。

「まずはブレイドを捕獲してもらおうか。」

「ッ!？ な、何!？」

「簡単なことだ、俺の実験のサンプルとしてブレイドが必要なのだ。お前にはそれを手伝ってもらう。」

「そんな条件飲むとでも「じゃああの娘は諦めるのか?」・・・!？」

アンデッドからの条件を拒否しようとしたが、利香の事を話に出されて何も言えなくなってしまう。戒にとって利香は掛け替えのない存在だ、だが青羽と言う人物も決して悪人なのではなく寧ろこれでもかと言うくらいの善人である。戒はどちらを取るかで何時までも悩んでいた。

アンデッド封印協会ボード・ルシセ支部

戒が伊坂に話を持ち掛けられてから2日後、青羽達もルシセに到着した。オンニオで聞き込みをした結果、ここルシセに来た可能性が高かったのである。ルシセに到着した青羽達はまず協会へ向かい、アンデッドに関する情報を仕入れる。流石に以前であったピーコックアンデッドに関する情報はなかったが、2〜3体のアンデッドの反応があるということが分かった。

「さてと、それじゃあここでも聞き込みしよっか。」

「そうですね、と言うかそれ以外に戒の下へ行く手掛かりもありませんしね。」

そう言うや否や二人は早速戒を見なかったかと街の人々に聞き込みを行った、すると見事に戒の特徴と合致する人物が先日街にやってきたことを知る。青羽はすぐさま戒と合流しようとするが、現在戒がどこにいるかまでは分からなかった。その時、ノーマがある提案をする。

「まずはこの街で確認されている複数のアンデッドの方へ向ってみましょう、あの上級アンデッドは少なくとも2体のアンデッドを従えていました。と言うことはこの街で確認されたアンデッドの内2体が以前見た奴と同じなら、あの上級アンデッドがいると言うことになります。つまり・・・。」

「そいつを狙う戒もまだこの街にいてることね！」

「そう言うことです。」

そうと決まれば、早速青羽はノーマと共に行動に移す。アンデッドの反応があったのは街の外れの方にある廃工場の辺り、二人のいる場所から一番近い場所だったここに二人は行くことにした。

ルシセ・廃工場

廃工場についた二人は、工場周辺をくまなく探索した後、工場内部に入る。だが目的のアンデッドは見つからなかった。

「ねえ、もう場所移しちゃったのかな？」

「その可能性はありますね、もしかしたらすでにッ!？」

「ん? どしたの?」

「近くにいますよ、それも2体!」

「え・・・それって「きゃあああああああ!？」っと、お出ましね!」

二人が悲鳴の聞こえてきた方に向かうと、2体のアンデッドに一組のカップルが殺されていたところだった。しかもそのアンデッドは先日ピーコックアンデッドが従えていた奴らだった。

「ビンゴね。行くわよ、ノーマ!」

「はい。」

「「変身!」」

《Turn up》

《Change》

二人が変身したブレイド・カリスは先日と同じアンデッドを相手に戦っていた。だが二人とも先日とは打って変わって少なからず苦戦していた。

「こいつら前より強くない!？」

「おそらく前回は手を抜いていたんでしょう、上級アンデッドにとって有利な状況を作り出すために。」

「またトドメを刺そうとした時に出てくるの?」

「確証はありませんが、決めるからにはさっさと決めた方が邪魔されずに済むかもしれません。」

ピーコックアンデッドが何を考えているかは分からないが、とにかく今は目の前のアンデッド達を何とかしなくてはならない。だがジャガーアンデッドは素早い動きでブレイドを翻弄し、シエルアンデ

ツドは小型の手裏剣と右腕の槍状の武器でカリスに攻撃を仕掛けてくる。カリスはカリスアローを使ってシェルアンデッドと対等に渡り合っているが、ブレイドの方はジャガーアンデッドの俊足に思うように攻撃出来ていない。

「チィッ、この！」

すでに何度目になるか分からないほどラウザーをジャガーアンデッドに振るうが、攻撃はかわされ逆に鉤爪やナイフによる攻撃でダメージを受けていく。

「クッ！（ダメ、速過ぎて攻撃が当たらない。こうなったら……。）」

ブレイドは自分から攻撃するのを止めてラウザーを腰だめに構え、仮面の下で目を閉じてじっと待った。ジャガーアンデッドは隙アリとばかりにブレイドに飛びかかっていく。

「ッ！そこお！！」

ジャガーアンデッドが飛びかかってきた際の一瞬の隙を突いて、ブレイラウザーが振るわれる。ラウザーはジャガーアンデッドの腹部に直撃し、大きなダメージを与える。ジャガーアンデッドの動きが鈍ったところに攻撃をたたみかけて行き、その猛攻にジャガーアンデッドは弾き飛ばされる。

「もらった！」

《Kick》

《Thunder》

《Lightning Blast》

「ハアアアアア、デリヤアアアアア！」

ブレイドは『キック・ローカスト』と『サンダー・ディアー』をラウズして必殺のキック『ライトニング・ブラスト』を放つ。それを喰らったアンデッドは吹き飛ばされた後爆発し、バツクルが開いたところをブレイドに封印された。

一方カリスとシェルアンデッドの方は、カリスが圧倒的に有利だった。俊敏性でも勝っているカリスはシェルアンデッドの攻撃を悉くかわし、逆にカリスアローによる斬撃やフォースアローを打ち込んで確実に相手の体力を削っていく。

「そろそろ決めます。」

《Chop》

《Tornado》

《Spinning Wave》

「ハア！」

カリスは現時点で最高の威力を持つコンボ技『スピニング・ウェーブ』でシェルアンデッドにトドメを刺し、コモンブランクで封印した。その後周囲にアンデッドの反応が無いことを確認したカリスは、変身を解いて元の姿に戻っていった。

《Split》

「ふう、こんなもんですか。」

「そっちも終わった？」

「ええ、そちらも問題ないようです。」

二人がお互いに戦果を報告し合って一旦宿の方に戻ろうとした時、二人の前に戒が姿を現す。戒の顔は何かを思いつめているような顔で、その様子を訝しく思った青羽は再会のあいさつの意味も込めて

戒に声をかける。

「どうしたの、戒？　なんか何時もと雰囲気違うけど。」

「……すまない。」

「え？」

突然謝罪して頭を下げてくる戒に困惑する二人、戒はそんな二人にお構いなしに言葉を続けた。

「でも、これも利香を助けるためなんだ。恨まないでくれとは言わないけど、僕も彼女をどうしても助けたいんだ……だから……」

戒はそう言いながらギャレンバックルに『チェンジ・スタッグ』を装填して、腰に装着する。

「変身！」

《Turn up》

戒はギャレンに変身すると、ラウザーで二人に銃撃しながら突っ込んでいく。青羽とノーマは突然の事に驚きながらも何とか攻撃をかわすと、戒を止めようとする。

「ちょ、ちょっと待ってよ！　どうしたのよいきなり！？」

「一体どういうつもりなのか、説明していただけませんか？」

「悪いけど、そんな余裕はない。」

なおも二人に攻撃を仕掛けてくるギャレンに、二人もとにかく変身して応戦することにする。

「「変身！」」

《Turn up》

《Change》

変身した二人は同時にギャレンを止めるために彼に掴みかかろうとするが、そこにピーコックアンデッドからの羽手裏剣が飛んできて二人の行動の邪魔をする。

「クッ、あんた！？」

「戒、あなたまさか・・・。」

ギャレンをピーコックアンデッドが援護すると言う状況に、二人の中にある予測が浮かぶ。だがそれを口にする前にギャレンの方が口を開いた。

「言っただろ、利香を助けるためだって。」

「だからって、そんな奴と手を組むなんて！？」

「青羽、今は彼を止めることが先決です。もつとも、あちらの方がそれをさせてはくれないでしょうけど。」

ピーコックアンデッドはカリスの相手をし、ギャレンはブレイドに攻撃する。カリスは持ち前の高い能力でアンデッドの羽手裏剣を防ぐが、ギャレンの相手をしているブレイドは苦戦を強いられていた。ただでさえギャレンとブレイドの間には実力の面で差があるのに、それに加えてブレイドは先程のジャガーアンデッドとの戦いで消耗している。

「待って！ 止めてってば！？」

「悪いけど聞く耳持つ気はないよ、お喋りはお終いだ！」

そう言うとき、ギャレンはブレイドにパンチやキックで牽制を行った、ブレイドも必死に反撃するが相手は相手であるためどうしても何時ものように強く出ることが出来ない。おまけに武器の相性も悪かった。ブレイドは剣型のラウザーであるため、どうしても近距離で戦う必要があったし、あまり近過ぎると今度は十分な威力が与えられない。逆にギャレンの方は中々遠距離でも十分にダメージを与えられるし、至近距離でも相手に銃口を向けられさえすれば問題はなかった。そうこうしているとブレイドがギャレンに背後から組み付かれて、背中に零距离射撃を受ける。

「グッ！ ガア、ハッ！？」

「……ごめんね。」

《Drop》

《Fire》

《Gemini》

《Burning Divide》

「ハッ！」

あまりにも大きなダメージを受けて動くことが出来ないブレイドにトドメの一撃を加えるべく、ギャレンは3枚コンボ技の『バーニング・ディバイド』を発動させる。ギャレンはその場でジャンプすると宙返りすると、空中でギャレンが二人に分身した。その瞬間、ブレイドが何とか立ち上がりギャレンの方を見ると今まさにギャレンの必殺技が炸裂するところだった。

「あ……。」

「セリヤアアア！」

「ウアアアアアアッ！？」

ギャレンの必殺技を受けたブレイドはその場で倒れ、自動的に変身

が解除されてしまう。元の姿に戻った青羽の状態は先日ピーコックアンデッドにボロボロにされた時の比ではなく、出血している箇所も多かった。

「青羽!？」

「大神、ブレイドを例の場所まで連れて行け。俺もすぐに後を追う。」

「……分かった。」

ギャレンはアンデッドの指示に躊躇いながら頷くと、青羽を横抱きにして連れていく。その際に青羽はピクリとも動かず、カリスには青羽が尋常でない怪我を負っていると言うことが手に取るように分かった。

「クッ、そこを退いてください。青羽は今危険な状態の筈です、すぐに治療しなければ……。」

「治療なら俺のところで作ってやるさ、流石に死なれると実験が出来んからな。」

「青羽を使って何を!？」

「それはお前が知るべきことじゃない、悪いがこれで失礼する。」

そう言うとピーコックアンデッドは無数の羽手裏剣でカリスの視界を塞ぎ、彼女が何とかやり過ぎた後には青羽もギャレンも、勿論ピーコックアンデッドも見当たらなかった。

「青羽……クッ!」

カリスはその場でいつまでも悔しそうに拳を握りしめていた。

第8話 取引（後書き）

と言うわけで第8話でした。青羽主人公の筈なのに最近負けまくってますね（汗）、いや本当はそれなりに強いんですよ！ただ状況が彼女に実力を発揮させてくれなくて・・・。次回は戒に衝撃的な展開が訪れます。どんな展開になるのか楽しみにしていてください。それでは。

第9話 サイズ（前書き）

どうも、黒服です。今回は衝撃的な展開を用意しています。前回の戦いから一体どうなったのか、楽しみにしていてください。

第9話 サイズ

ルシセ郊外・廃墟

ルシセの郊外にある森の中にある廃墟、ここに伊坂の研究所があった。そこには多くの研究員が居て、毎日様々なデータから何かを作り出そうとしていた。

「さあ、約束だ。利香を返してもらおう。」

「まあ慌てるな、俺は『まずは』ブレイドを捕獲してもらおうかと言ったんだ。まだあの娘を解放するとは言っていないぞ。」

「ッ！？ 貴様あ！」

「おっと、いいのか？」

「クッ・・・うう。」

伊坂の発言に彼に掴みかかろうとする戒だが、伊坂の言葉に動きを止めざるを得なくなる。その戒の様子を見て、伊坂は戒に次の指示を出す。

「お前にしてもらいたいことはあと二つ。次はこのアンデッドを封印してもらいたい、この『カテゴリーA』をな。」

「カテゴリーA？」

そう言って伊坂は戒に一体のアンデッドの写真を見せる、そのアンデッドはまるでカブトガニの様な姿をしていた。伊坂の言う次の条件とは、このカテゴリーAを封印すること。それに戒は一瞬訝しげな視線を向けるが、すぐにそれが意味するところを理解する。

「ま、まさかお前は！」

「そうだ、俺の研究の目的は、新たなる最強のライダーを作り出すことだ。」

「その為に利香や青羽を……。」

「フツ、ブレイドはライダーのデータを得る為に欲しかったただけだ。実際にライダーとして戦っている者の融合係数がどれほどのモノか、データを取る為にな。」

そう言って伊坂は部屋にある大きなガラス窓から隣の部屋の様子を覗き見る、そこには椅子に固定されて、何かの機械と繋がられた青羽の姿があった。すでに怪我は治療されているようだったが、その表情は苦悶に歪んでいる。

「グッ……うあっ……が、うぐっ！……。」

その痛々しい様子に、戒は顔を反らしながら伊坂に声をかける。

「アレは一体何をしているんだ？」

「な〜に、単にあの娘の融合係数がどこまで上がるのかのデータを取ってるだけさ。今まではそこら辺に居たダガーを使う連中からデータを取ってたが、やはり安物を使うような連中のデータなどたかが知れてたよ。その分、あの娘からは有力なデータが取れそうだ。」

二人が話している間にも、青羽の苦悶は続く。研究員はさらにデータを取る為に、機械のダイヤルを操作した。

「ぐうう……うあ、ああ！　ガハッ……ゲホッ、ゲホッ……
・オエッ、う……。。」

機械から流し込まれるエネルギーに耐えきれなかったのか、さらに顔を苦悶に歪めると嘔吐した後失神してしまったのか何の反応も

示さなくなった。

「これまでか、だがなかなかいいデータが取れたんじゃないか？」

「はい、これまでに見られなかった数値です。」

「よし・・・お前も、何時までもそうしていないで早くアンデッドを封印しに行け。あの娘を解放したいのだろう？」

「クッ！」

伊坂はその言葉に頷くと、戒の方を向いてアンデッドを封印するように言い放ち、戒はそれに忌々しいと言った感じの顔をする。その場からすぐに立ち去って行った。後に残された伊坂は、青羽がいる部屋とは別の部屋の前に立ち、窓から中を覗き込む。

「あいつもバカな奴だ、お前如きの為にここまでするとはな。精々あいつには働いてもらうさ。」

伊坂がそう言った部屋の中には、鎖で壁と繋がれている一人の少女の姿があった。その顔には生気がなく、目も虚ろで何も映していないようだったが、しきりに何かを呟いていた。

「う・・・・・・・・か、戒・・・・・・・・。」

少女はそれだけ呟くと、意識を失ったのかぐりと頭を下げてそのまま動かなくなった。

ルシセ郊外

ノーマは先日アンデッドとの戦いで消耗した体力を回復させると、すぐに青羽の探索に乗り出した。すでに協会や街の人々への聞き込

みで、街を出た車両などが無いことは確認済みだった。と言うことは伊坂達はこの街からそう遠くに離れていないところにいる、と考え郊外をくまなく探索していた。

「青羽、私はまだ貴女の強さの秘訣を完全に理解していません。それなのにこんな所でお別れなんてのは絶対にごめんですからね、必ず助けて見せます。」

ノーマはそう呟くと、郊外の森の中へと入っていった。

ルシセ・工場地区

戒は伊坂に指示されて、カテゴリーAを封印する為に反応があった工場地区に来ていた。正直彼は気乗りしなかったのだが、これも利香を助けるためと考えとにかくアンデッドを封印する為に行動することにしたのである。

「このあたりの筈だけど・・・。」

戒がそう呟いた瞬間、突然何かの気配を感じた戒は咄嗟にその場から離れる。するとそこには、目当てにしていたカテゴリーAーカッスアンデッドドーがいて、戒がいたところに右手についた剣状の武器を振り下ろしていたところだった。

「現れたか、変身！」

《Turn up》

戒は即座にギャレンに変身すると、カテゴリーAに殴りかかっている。だがカテゴリーAの全身を覆う甲殻の所為で攻撃は弾かれ、逆

に右手についた剣状の武器による攻撃を受けてしまう。

「グアッ!? くう、流石カテゴリーA・・・手強いな。」

ギャレン自身先日別のカテゴリーAを封印したが、目の前にいるアンデッドはそれ以上に強かった。だが彼は決してあきらめることなくアンデッドに攻撃を続けていく。その執念が感じられるほどの攻撃にアンデッドは徐々にダメージを受けて行ったらしく、次第に防戦一方になっていく。そして遂にギャレンのパンチがアンデッドを大きく吹き飛ばした。

「今だ!」

《Drop Fire Gemini》

《Burning Divide》

「セリヤアアア!」

ギャレンの必殺技が炸裂したアンデッドは爆発し、爆炎が晴れるとそこにはバックルが開いたアンデッドの姿があった。ギャレンはアンデッドにコモンブランクを投げて封印すると、すぐに伊坂の研究所へと戻っていった。利香を解放するために・・・。

伊坂の研究所

戒は伊坂にカテゴリーAのカードを渡した後もう一体のアンデッド、カラスの始祖ークロウアンデッドを5日かけて封印した。その後伊坂にクロウアンデッドを封印したハートの6『ダーク・クロウ』を渡すと、早速伊坂に利香を解放するように言った。

「さあ、今度こそ利香を返してもらおう。これ以上何か条件を「いい

だろう。」……。」

「ここまでやってくれば十分だ、あの娘は解放するでしょう。」

そう言いながら伊坂は利香がいる部屋の前に立つ。戒はその後にく際に一瞬青羽のいる部屋を覗く、そこには未だぐったりとしている青羽の姿があった。あれから何度か実験を繰り返されたのか、その瞳からは光が消えていた。

（すまない、利香を取り戻したら必ず君も助けるから。）

戒は心の中で青羽に謝罪すると、利香がいる部屋の前に立つ。伊坂は戒が来たのを見計らって部屋のロックを解除して、扉を開いて戒を部屋の中に入れる。戒は扉が開くと急いで中へと入っていき、利香の姿を確認すると安堵の表情で利香に近付こうとする。

「利香、もうだいじょ……な、何!？」

だが近付いてふと利香の腹部を見て戒は愕然とした、そこにあったのは腰に装着されたバックル―サイズバックル―だった。それを確認した戒はすぐさま伊坂の方に向き直る。

「これはどういうことだ! 伊坂!？」

「どうもこうも、俺はあの娘を『解放する』と言ったんだ。誰もお前に返すなんて言った覚えはないぞ。」

「き、貴様あ!！」

《Turn up》

激情した戒はギャレンに変身して伊坂に殴りかかろうとするが、ギャレンと伊坂の間に利香が立ち塞がる……。伊坂を守るようにして。

「り、利香!？ どうして・・・。」
「フンッ、今やこいつは俺の操り人形、俺の意のままに動く忠実な駒だ。」

戒は伊坂の言葉にさらに怒りを増すが、間に利香がいる為にそれ以上前に出ることが出来ない。その時伊坂が利香に『チェンジ・カッシス』のカードを手渡す。

「丁度いい。サイズ、ギャレンを倒せ。」

「……変身……。」

《Open up》

伊坂の命令を受けた利香は黙って頷くと、バックルにカードを装填して【仮面ライダーサイズ】に変身する。サイズは変身すると何も言わずに死神が使う様な巨大な鎌型の武器、醒鎌【サイズラウザー】を構えギャレンに近付いていく。

「り、利香・・・止めてくれ!」

「……………」

「利香!」

サイズはギャレンの言葉など聞こえていないかのように近付いていき、サイズラウザーでギャレンを斬り付ける。咄嗟に避けるギャレンだが、次いで振り上げるように振るわれるラウザーの攻撃を受け吹き飛ばされてしまう。

「グアッ!？ ……り、利香・・・頼む、止めてくれえ。」

ギャレンは必死にサイズに声をかけるがやはり反応はなく、無言で

ギャレンを攻撃していく。ギャレンは何かかわしていくが、利香が敵になったと言うことに動揺して何時もの力が出せていなかった。

「うわぁ！？ クッ・・・こうなったら！」

何度目かのサイズからの攻撃を受けたギャレンは、意を決して部屋から出ると青羽がいる部屋に入り彼女を拘束から解き放つとそのまま青羽を抱えてその場から離れて行った。

一方ノーマの方も伊坂の研究所に潜入することに成功していた。森の中を彼女の中に備わっている能力を全開にして捜しまわった結果、廃墟の中に研究所を見つけたと言うわけである。

「青羽はここにいる筈、後は彼女を助け出せば・・・ッ!？」

研究所内に潜入していざ青羽を探そうと言う時、ノーマの目の前に青羽を抱えたギャレンが現れた。その姿はどこかボロボロになっているような気がするが、とにかく早々に目的を達成しようというラウザーを腰に装着する。するとギャレンの方が青羽をノーマに渡した。

「早く彼女を連れて逃げるんだ！」

「・・・一体どういうことですか？」

「事情を説明してる暇はない！ 今は、グワァッ!？」

青羽を受け取ったノーマはギャレンに事情を聞こうとするが、ギャレンがノーマに逃げるよう警告している最中に突然ギャレンがノーマの方に倒れ込んできた。あまりの事態に驚いていると、ギャレンの後ろに見たことも無いライダーがいることに気付く。

「?・・・何ですか、貴方は・・・。」

ノーマはギャレンを攻撃したライダーに尋ねるが、向こうは何も言わずに巨大な鎌を構えてきた。どう考えても友好的とは思えないその様子に、ノーマは即座に撤退を決意する。どの道今は青羽を連れて病院まで行くことが最優先なのである。

「（一体何をされたのか分かりませんが、酷く衰弱しています。一刻も早く治療しなければ。）変身！」

《Change》

とりあえずノーマは腰に装着したままだったラウザーに『チェンジ・マンティス』のカードをラウズしてカリスに変身する。だがそれは戦う為ではなく、あくまでその場から逃げる為の変身だった。彼女は生身でもかなりの身体能力を発揮できるが、それでもやはり変身した方がこの状況はいいと判断したのである。

「戒、貴方も早く来てください！この状況を説明してもらわなければならぬのですから。」

「でも・・・僕は「誰のせいで青羽がこんな目に遭ったと思っているんですか、少しでも悪いと思っているのなら早く来てください！」・・・ッ！？わ、分かった。」

何時もの彼女らしからぬ強めの発言でギャレンを説き伏せると、再び目の前のライダーを見据えるカリス。向こうは今にも斬りかかってきそうだった。

「残念ですが、今は貴女の相手をしている暇はありません。なのでこの場は早々に退かせてもらいます。」

カリスはそう言って踵を返してその場から立ち去ろうとするが、ラ

ライダーはそれを許すつもりはないらしく鎌を振りおろそうとする。だがギャレンからの射撃がそれを妨害する、射撃は一発も命中しなかったがライダーの足を止め、さらに銃撃が命中したパイプから蒸気が噴き出してきてライダーの視界を塞いでしまう。急いでその場から離れたライダーが後を追おうとするが、そこには既に誰もいなかった。ライダーが出口に向かって走り出そうとすると、伊坂がそれを止める。

「サイズ、構わん。今回はこの程度で十分だ。」

伊坂の言葉にサイズは構えを解くと、変身を解除して利香の姿に戻った。利香は変身を解くとまるで糸が切れた人形のようにその場に倒れてしまった。

「流石に疲労が残っていたか、まあいい……これで最強のライダーが誕生した。フッフ、フッハハハハハハハハハ！」

利香が倒れているすぐそばで、伊坂の笑い声が何時までも響きわたっていた。

ルシセ・病院

何とかあの場から逃げだした3人は、急いで青羽を病院へ連れて行った。青羽の衰弱加減があまりにも酷く、一刻も早く治療を受けさせる必要があったからである。今は何とか一命を取り留めているが医師曰く、「非常に危険な状態だった」とのこと。現在ノーマと戒は青羽が眠っている病室にいた。

「さて、話してもらいましょうか？ 何故あんなことになっていた

のかを。」

「……僕が青羽を伊坂に渡した後、新たに二つの要求をしてきたんだ。カテゴリーAと、もう1体のアンデッドを封印しろと。」

「カテゴリーA？　なるほど、そう言うことですか。大方あの男の目的は新たなライダーを作り出す事、そしてあそこで見たあのライダーがその作り出されたライダーと言うわけですか。」

「流石だね、その通りだよ。」

そこまで言うと、戒は一息ついてノーマに頭を下げる。

「本当に君達には申し訳ないことをした、すまない。」

「……それは私ではなく青羽に言って「その必要はないわよ。」……ッ！　青羽！？」

「もう大丈夫なのかい？」

いつの間にか目を覚ましていた青羽が二人に声をかけてきた。痛みを顔を歪めながら上半身を起こそうとする青羽をノーマが寝かせようとするが、青羽は構わずに何とか起き上る。

「……本当にすまない！　君を辛い目に遭わせてしまっ……。」

「別にいいわよ、そんな事。あたしだって、大事な人がそう言う目に遭えば戒と同じ行動に出るかもしれないし。」

「それは……でも……。」

「ま、正直死ぬほど辛かったのは事実だけどね。それよりも……。」

青羽はそこで言葉を区切ると、戒の目をじっと見つめる。そして彼女が気になっていたことを尋ねる。

「あんた、これからどうすんの？」

「……勿論、利香を助け出す。」

「勝算はあるのですか？」

「利香は伊坂に操られてるんだ。だったら伊坂本人を倒してしまえば命令する者がいなくなる以上、利香は正気を取り戻す筈だ。」

そう言って戒は拳を握りしめる。その瞳には一切の迷いもなく、純粹に利香を助けたいという思いだけが見てとれた。青羽はそれにニツ、と笑みを浮かべると再び戒に協力を申し出る。

「だったら決まりね、あたしらも協力するわ！」

「え！　で、でも……。」

「これはもう貴方だけの問題ではありません、私達も完全に巻き込まれてるんですから。」

「それに、いくらあんたが伊坂を倒せるだけの強さを持ってたとしても、その利香ってのがなるサイズもいるんでしょ？　あんたにそのいつの相手が出来るの？」

戒は青羽のその言葉に押し黙る、恐らく彼はサイズを前にした時何も出来なくなるだろう。下手をすると利香を傷つけてしまう、と。その点青羽たちならそれなりに腕は立つし、ハッキリ言って利香に對してはそんなに大した感情はない。戒が相手にするよりはずっといいだろう。

「本当にいいのかい？　こんな……。」

「あつたり前じゃん！　あたしらもう仲間なんだから。」

「え？」

「一体何時どの様にして仲間となったのかをお聞きしたいのですが……。」

突然の青羽の仲間発言に、戒は啞然としノーマは頭を抱えながら青羽に尋ねた。すると青羽は笑いながらそれに答える。

「あたし達の目的はあの上級アンデッド・伊坂を倒す事、目的は一緒で、これからは一緒に行動するわけじゃない？ それにあたしを伊坂のところから連れ出してくれたのも戒、あんたでしょ？ 目的が同じで助けあった、それならもう仲間だって！」

「どういう理論ですか、それは。」

「全く」と言いながらノーマは溜息を吐くが、そのサングラスに隠れた表情は決してウンザリといった感じではなく寧ろ微笑んですらいた。戒はそんな二人の様子に再び申し訳なく思いながらも、強い感謝の念を抱いた。一度は青羽を伊坂に売ったと言うのに、それでも二人は戒に協力してくれると言う。二人に対して感謝と申し訳なさを込めてもう一度戒は二人に頭を下げた。

「ありがとう。本当に……ありがとう。」

「もう、いいってばそんな。それじゃ、標的は伊坂、目的は利香の奪還。二人とも、頑張るわよ！ ツい……たたた……。」

「何をしているんですか、貴女自分が絶対安静の重傷者だって分かっています？」

「クッ、あっははははははは！」

気合を入れて腕を振り上げた青羽が痛みに呻くのを見て、ノーマが呆れながら青羽に小言を言う。その二人の様子に戒は思わず声をあげて笑ってしまった。それにつられて青羽も声を上げて笑い、ノーマも微笑んでいる。そこにはまだ出来て間もないながらも、確かに絆があることが感じられた。

・新ライダー解説

【仮面ライダーサイズ】

伊坂が開発した新しいライダーシステム、その能力は現在存在する全てのライダーシステムを凌駕する正に最強のライダーシステムとなっている。外見はレンゲルの胸部や頭部のクローバーの部分がハートになり、全身の色が黒紫色になり頭部の形状が鎧兜のような形になっている。武装は鎌型ラウザーの醒鎌【サイズラウザー】で、刃の付け根にスリットにカードをスラッシュすることでラウズできる。

変身の際にはハートのA『チェンジ・カッシス』を装填して腰に装着した後、バックル部を開いてオープンアップさせるとバックルからオリハルコンエレメントが生成。それが自動的に変身者の身体を通過してサイズの変身する。

第9話 サイズ（後書き）

と言うわけで第9話でした。今回オリジナルライダーのサイズを登場させました、しかも変身者は戒の恋人の利香。このサイズが原作で言うところのレンゲルの立ち位置になります。ただ原作と違うのは、利香は伊坂の手駒になってしまった点ですね。原作だと伊坂が封印されるのに入れ替わるようにレンゲルが登場してましたから。

あとカッシスアンデッドの外見は、仮面ライダーカブトに登場したカッシスワームを思い浮かべてくれれば分かりやすいかと思います。

今回の事で戒を仲間に加えた青羽、今後この3人がどういった行動を起こすのか楽しみにしていてください。
それでは。

第10話 怒るノーマ（前書き）

どうも、黒服です。第10話を更新しました。今回ノーマにある変化が訪れます。

第10話 怒るノーマ

ルシセ郊外・街道

青羽達はあれから1ヶ月経った頃に街を出ることにした。その間にノーマと戒が伊坂の研究所に向かったが、そこは既にもぬけの殻となっていた。どうやらあの後ここを引き払ったらしい。伊坂が居なくなっていたことに戒は残念に思ったが、同時に利香と戦う必要が無くなったことに安堵した。ちなみにこの間青羽は意外なことに大人しくしていた。青羽曰く、『健全に鍛える為には完璧なコンディションから』とのことらしい。その甲斐あって今は青羽の状態も完治とまではいかないが、ほとんど治っていた。

「でさあ、次は何処に行くの？」

「戒、他に何か伊坂の目的は分からないのですか？」

「ごめん、ライダーシステムを作るってこと以外は何も……。」

正直な話3人とも伊坂の『ライダーを作る』以上の目的を知らなかった為、闇雲に捜しまわっている状況であった。ただアレだけの物を作ってそれで満足するとはどうしても考えられなかったので、恐らく何らかのアクションを起こすことは確実だろうと3人は考える。とりあえず当面はニユースなどに気を配って伊坂の影が見えるところに即座に向かうということで話がまとまり、次の街『ツツバ』へと向かっていった。

岩場

アレからしばらくして、日が大分傾いた頃を見計らって3人は岩場

で一夜を明かす事にした。途中数体のダークローチを見かけたが、3人が変身してあっという間に倒してしまった。

現在は3人で焚き火を囲んで夕飯を作っている最中であつた、ちなみに野宿する際の食事は現状青羽と戒が交代で作ることになっている。試しに青羽がノーマに料理が出来るかどうか聞いてみたところ、『今まで食事は携帯食料かすでに調理されている物しか口にしない』とのことだったので、止む無くこの二人が交代で作ることになった。

当初は青羽が、『ノーマにも何かさせて3人で作ろう』と言つたのだが戒がそれに対して、『今まで一切料理をしたことが無いような人に手伝わせると後が大変』と言つてノーマが手伝うことを止めさせた。

「何かさせて徐々にいろいろ覚えさせた方がいいと思うんだけどなあ。」

「そう言うのは余裕がある時にした方がいいよ、現状携帯食料以外は現地で捕まえる物だけだからね。こう言っちゃなんだけどせっかくの獲物を無駄にすることには、僕は賛成できないよ。」

「そりゃそうかもしれないけどさあ……。」

「別に構いませんよ青羽、事実ですし。」

そう言つて戒の発言を肯定するノーマに、青羽が正面から声をかける。

「ノーマもさあ、事実事実って何でそう簡単に割り切れるのよ。」

「?・・・事実を否定することに何か意味でもあるんですか? どんなに取り繕つても、事実が変わることはないでしょう。」

「言つてほしくない事実ってもんもあるでしょう。」

「言わなくても事実は変わりませんよ。」

「だ〜か〜ら〜・・・。」

終わりが見えるかどうか分からない問答を続ける二人を見かねて、鍋の中のスープをかき混ぜながら戒が議論に参加する。

「ノーマ、君以前BARで男を怒らせてたよね。何故だか分かるかい？」

「・・・さあ、あの時の事は全く理解できません。」

「正論って言うのはね、時として暴論より相手を怒らせるモノなさ。」

ノーマは常に正論しか口にしない。だがそれが返って相手の神経を逆撫でしたり他人の触れて欲しくない部分を爪を立てて抉ったりして、結果相手を怒らせるのである。

「やっぱり、よく分かりません。」

「ま、その内分かるようになるんじゃないの？ あんたの過去に一体何があったのかは知らないけどさ、そう言うのが分からなくても直に分かるようになるでしょ。そんなことよりも戒いゝ、まだ出来ないの？」

「すぐに出来るよ、そう慌てないで。」

「そんな事言ったってあたしもうお腹ペコペコ・・・。」

青羽が空腹に耐えきれず戒を急かし、戒がそれを宥めるのを見ながらノーマは一人思考の海に潜りこんでいた。戒との話をまとめると、正論を言うことが正しい訳ではない、と言うことになる。だが常に正論のみで行動してきた彼女にとって、それは容易に理解できることではなかった。

（正論が間違っている・・・何故ですか？ 正論は正論の筈です、それを指摘することの何がいけないのですか？）

ノーマが考えていると、無意識のうち彼女の中に言いようのない感覚が芽生えてくる。だが彼女自身はそれに気付いていなかった。

（そもそも怒りとは一体何なのか、正常な判断力を失いたただ我武者羅に行動する。人間には一体何故こんな感情などと言うモノが・・・。）

「・・・ノーマ、ノーマったら！」

思考に深く入り込み過ぎた上にもう一つの感情に飲み込まれているノーマには、青羽の声が届いていない。

（そもそも青羽の行動だって、自身の場当たりの思考に任せた行き当たりばったりの・・・。）

「お！ そうだ、ニシッ！」

そこまでノーマが考えていた時に、青羽が突然何かを思いついた様な笑みを浮かべる。ノーマは未だ考え込んでいる最中である為、青羽が起こそうとしている行動に気付いていない。そうこうしていると青羽がノーマのサングラスに手をかけた、そして・・・

「そりゃ、取ったー！」

「ッ！?!? ちょっと、何を!？」

青羽が隙を突いてノーマのサングラスを取ってしまう、結果ノーマの真紅の瞳が露わになった。

「おお、ノーマってそんな目の色してるんだ。今までずっとこれ

着けたまんまだったから全然知らなかった、こっちの方が可愛いんじゃない？」

「……ッ、いいから返してください！！」

「ッ！？ ご、ごめん……。」

青羽のからかう様な言葉にノーマが怒鳴り声を上げながらサングラスを奪い返す、その怒気に青羽のみならず戒も呆然としていた。

「それって、そんなに大事なもんだったの？」

「……何故そう思うのです？」

「だって今、普段のあんたからは考えられないくらい怒ってたけど。」

「怒ってた？ 私が？」

青羽の言葉がノーマには分からなかった、何故青羽がこんなことを言うのだろう。自分は怒ってなどいないと言うのに……。

「何を言ってるのですか、私は怒ってなどいませんよ。」

「いやいや、今のは絶対怒ってたでしょ。メツチャ怒鳴ってたし。」

「単に声が大きく出てしまっただけです。」

「顔も怒ってたわよ？」

「それは……。」

声はともかく、顔に関しては何も言うことが出来ない。そもそも何故自分はある風な風に奪い返すようにサングラスを取り返したのか？ ノーマには分からなかった。いつも通りに普通に返して貰えば良かったのに……。

「でもノーマも怒るってことがあるんだね、ちょっと新鮮だったかな。」

「だから私は怒ってなど!」

「ほら、今だってちよつと怒ったでしょ?」

「~~~~ツ、もういいです!!」

そう言つてノーマは肩を怒らせながらその場から離れて行き、青羽はしばらくその場に留まっていた。

「・・・ちよつとやり過ぎちゃったかな?」

「多分ね。彼女きつと今まで人と接するってことが無かつたんじゃないかな? だから怒りとかそういう感情が分からない。」

「うーん、やっぱりそうだね。」

「それで?」

「うん?」

「謝りにはいかないのかい? この辺り結構入り組んでるから、一度迷うとなかなか戻っては来れないよ。」

戒のその言葉に、青羽は慌ててノーマを探しに行く。流石にこんな所でアンデッドにでも襲われたりしたら、いくらノーマでも洒落にはならないだろう。

「そう言うことは早めに言つてよね!」

「冷める前には戻ってきてね。」

「分かつてる!」

それだけ言つて青羽はノーマの後を追いかけて行つた。

一方ノーマは自身の状態に困惑していた、何故こんなにも胸がムカムカするのか。何故こんなにも嫌な気分になるのか。何故こんなにも・・・

（・・・苦しいんですか？ 私のコンディションは完璧な筈、なのにこの感覚は・・・。）

ノーマは自身の状態に戸惑って、何時ものように周囲の気配に気を配ることを怠っていた。そのおかげで自身に迫っている脅威に気付いていなかった。

「ッ！？ しまった！」

暗闇から突然襲い掛かってきたアンデッドトリロバイトアンデッドローの奇襲を受け、ノーマは地面に押し倒されてしまう。何とかアンデッドの腹部を蹴りあげてその場から距離を取ると、カリスラウザーを腰に装着する。

「変身！」

《Change》

カリスに変身すると、アンデッドにカリスアローで斬りかかっている。だがざわついた精神の所為で何時もの正確さが出せず、逆に右手の手甲に攻撃を防がれて左腕の爪で反撃を受けてしまう。

「グウッ！？（おかしい、何故これしきの攻撃がかわせないんですか？ 一体私の身に何が？）」

ノーマが困惑している間にも、アンデッドの攻撃は続く。何とか避けて反撃するもその攻撃はどれもまともに当たることではなく、逆に隙を作って自身を窮地に追い込んでいく。

「グハア！・・・っう。」

遂に岩に背を預けてその場に座り込んでしまったカリスに向けて、アンデッドがトドメを刺そうとする。ノーマが自身の死を覚悟したその時、アンデッドの攻撃をブレイドがラウザーで受け止めた。

「あ、青羽……。」

「ノーマ、大丈夫！」

「え、ええ……何とか。」

ブレイドはそれだけ聞くと、アンデッドに対して蹴りを放ち距離を取った。

「あんた……よくもあたしの仲間を傷つけてくれたわね。覚悟出来てんでしょうね！」

それだけ叫ぶと、ブレイドはアンデッドに対して突っ込んでいく。その動きはあまりにも直線的だった。

「無茶です青羽！ そんな動きでは簡単に見切られて……。」
「デヤアアアアア！」

ブレイドはカリスの警告を無視してアンデッドに突っ込んでいく。アンデッドは当然のように右腕の手甲でブレイラウザーを防ごうとするが、ブレイドのラウザーは手甲を押し返してアンデッドにダメージを与えてしまった。それだけに留まらず、次々とアンデッドを斬りつけていくブレイドの様子に、カリスは半ば呆然としていた。

（おかしい、今の青羽は私を傷つけられたことでアンデッドに対して怒りを抱いている。怒りは普通正常な判断力を奪って、正確さを失わせる筈なのに……どうして？）

カリスがそんな事を考えている間に、戦いは終盤に向かっていった。
ブレイドの渾身の斬撃を浴びて弾き飛ばされたアンデッドを見て、
ブレイドはオープントレイから3枚のカード『キック・ローカスト』
『サンダー・デИАー』『マッハ・ジャガー』を取り出してラウズ
する。

《Kick Thunder Mach》

《Lightning Sonic》

「ハアアアアア、デヤアアアアアッ！」

以前新たに加わったスペードの9『マッハ・ジャガー』を加えたブレイドの必殺技『ライトニング・ブラスト』の強化版、『ライトニング・ソニック』が発動する。高速で助走をつけて繰り出される必殺技に、アンデッドは防ぐ間もなく攻撃を喰らい吹き飛ばされた後、爆発してバツクルが開く。

ブレイドがアンデッドにコモンブランクを投げて封印すると、カリスの方を向いて変身を解除する。それにならってカリスも変身を解除した。青羽はノーマに手を差し伸べて立ち上がらせると、しばしばツの悪そうな顔をした後に勢いよく頭を下げて謝罪した。

「ゴメン！ ノーマ、ちょっとあたしがふざけ過ぎてたわ。あんたの気持ち考えずに、言いたいこと言っただけであんたを怒らせちゃった。本当にゴメン！」

「……もう構いません。あれは私にも非があります、自分の感情を理解しなかった私にも……。」

そう言ってノーマは、青羽に気になったことを一つ聞く。

「ところで青羽、貴女は先程アンデッドに対して怒りを向けていま

したよね？」

「え？ うん、まあね。それがどうかしたの？」

「何故貴女は怒っていたのにもかかわらず、あそこまで力を発揮することが出来たのですか？ 普通怒りは攻撃から正確さを削ぎ落とすものなのに……。」

実際ルーニオリフの公園でディアーアンドッドと戦っていた時は、怒りで攻撃に正確さが無かった筈だ。それなのに今回はやや攻撃に粗さがあるものの、何時もとそう変わらない戦いが出来ていた。いや、寧ろいつもよりもパワーが上がっていたかもしれない。

「うーん……多分、普通に怒ってたわけじゃなくて、ノーマを助けたって思いがあったからかも。」

「私を……助けたい？」

「うん、そう。父さんから稽古をつけてもらったときに聞かされたんだけどね、単に怒っただけならそれは腕を鈍らせるけど、誰かの為に怒った時は人は何時も以上の力を発揮できるようになるんだって。さっきのあたしも多分そんな感じだったんじゃないかな？」

「怒りが力に……ですか……。」

「うん！ でも怒りで得た力って制御が難しいから、それに頼るのはやめとけて言われてるんだけどね。」

青羽の話聞きながら、ノーマは先程の自分について考える。野宿する場所では否定していたが、確かにあの時自分は怒っていたのかもしれない。そして怒っていたがゆえに先程のアンドッドに苦戦してしまった。

（まさか私にも、怒りと言う感情があったなんて……。）

それはノーマにとって衝撃的な事実であったが、不思議と悪い感じ

がするものではなかった。

「あっ!? やっぱ、早く戻らないと戒一人で待たせてるんだった!」

「野宿の場所は・・・あちらですね、急いで戻ることになりました。う。」

そう言ってノーマと青羽は一目散に來た道を戻り始めた。結果から言えば戒の作ったスープは冷めてしまっていて、二人は戒から散々小言を言われるはめになった。流石の青羽もアンデッドと戦った直後にこのような小言を言われまくるのは堪えたのか、少々ゲンナリと言った感じの顔をしていた。

戒からの小言が終わって漸く食事でありつこうとした時青羽がふとノーマの方に視線を向けると、ノーマがサングラスを取っていた。

「あれ? 外しちゃうの、それ? 今までずっと着けてたのに・・・。」

「時には外すのもいいかと思っただけです。それとも、どこかおかしいですか?」

そう言ったノーマは相変わらずの無表情だったが、青羽にはノーマが微笑んでいるように見えた。サングラスを掛けている時にも口元を笑みの形にしていることはあるが、今のノーマからはその時以上の笑顔が見てとれるような気がした。無表情の笑顔とも言えないのだろうか。

「ううん、いいんじゃない! むしろずっと外してたら? その方が絶対可愛いつて!」

「それは遠慮しておきます、どうもあれが無いとどこか落ち着かな

いものでして。」

スープ自体は冷めていたが、その夜の食事はどこか温かいモノが漂っているのを3人は感じ取っていた。

翌日

青羽が何時もの早朝鍛錬を終えて3人で朝食を済ませると、3人とも寝袋を片付けて（ちなみにノーマの寝袋はオンニオで他のノーマ個人の分の旅道具と一緒に即行で購入した）次の街へとバイクを走らせていった。

「次の街ってどんなところ？」

「街の名前はツツバ、交易の盛んな街だよ。いろんなものが集まるから、そこでいろいろ足りないものを買えろえるのもいいかもしれないね。」

「そう言うところには情報も良く集まります、伊坂と利香に関する情報も何か得られるかもしれませんね。」

3人はそんな話を話しながら走らせて行った。

同時刻・ツツバ

街にある一人の青年がやってきた。黒い髪に青い瞳、そして前をフアスナーで閉じる特徴的な黒いスーツに包んだ人物である。

「さてと、この街かぁ。たった一人での任務だし、こんなつまらない仕事はさっさと終わらせるに限るな。」

青年――黒木 恭司――はそう言いながら人ごみの中に消えて行った。

第10話 怒るノーマ（後書き）

と言う訳で第10話でした。今回はノーマが怒りを覚える回です、これも青羽と接してきた影響ですね。これでノーマと青羽の絆も大分深まったかと思います。

次回遂に黒木 恭司が登場します、お楽しみに。それでは。

第11話 暗躍する者（前書き）

どうも、黒服です。今回ついに恭司が登場します、まだ青羽とは直接出会いませんが、彼がどう行動するのかお楽しみに。

第11話 暗躍する者

ツツバ

青羽達はあれから3日かけて『ツツバ』に到着していた。戒の言う通り交易が盛んだからか、街は活気にあふれていた。そんな街中を、青羽は目を輝かせながら見て回った。

「うわああ、すごい人！ あたしこんなに沢山人がいるところなんて初めて来たかも、凄いね！」

「私も、こんなに凄い人ごみは初めて見ました。」

青羽とノーマは、今まで経験したことなかった程の数の人ごみに圧倒されていた。とりあえず3人はガイドの地図に従って街の中の宿に行き、バイクと適当な荷物を置いてから街の中を散策し始めた。とはいえ一先ずアレッジドに関する情報を得る為に、協会まで行くと言うことになったのだが……。

「どわっ！ ちょっと、前に進めないんだけど！？」

「こ、これは流石の私もキツイものがありますね……。」

青羽とノーマは初めて経験する人ごみになかなか前に進めずに、立ち往生していた。対照的に戒は、慣れた感じで人ごみの中をスイスイと進んでいく。

「ちよっ、ちよっと戒待ってよ！ あたしはまだこの人ごみに慣れてないんだからさ……！」

「と言うよりも、何で貴方はそんなにスイスイ進んでいけるんですか？」

「ん？ああ、ごめんごめん！ 僕出身が首都のミドガルドだったからさ、こういう人ごみは慣れっこなんだよね。」

そう言っただけで二人と合流した戒は、一先ず人の流れの緩やかなところに向かった後で改めて協会へ向けて足を進めて行った。青羽とノーマの二人はこの時点ですでにクタクタになっている、どうやら人ごみが相当堪えたらしい。

「ま、まさか人ごみがこれほどにシンドイもんだったとは……。」

「どうやら甘く見過ぎていたようです、流石にこれは……。」

「二人とも、大丈夫かい？」

戒が心配そうに二人に声をかけるが、二人は何とか気を取り直したようで、戒に対して頷いて応えると再び協会へ向かっていった。

アンデッド封印協会ボード・ツツバ支部

青羽達は協会にてアンデッドの情報を集めるが、残念なことにこの街には現在アンデッドが出現していないらしい。青羽は一瞬肩を落とすがすぐに気を取り直すと、受付のスタッフにもう一つ尋ねた。

「すいません、それともう一つ。最近この辺でおかしなライダーが出ませんでした？」

「おかしなライダー……ですか？」

「外見は全体的に黒紫色、カブトガニをモチーフにしています。武装は大鎌型のラウザーです。」

「少々お待ちを……特に該当する様なライダーは報告されていませんね。」

「そうですか・・・ありがとうございました。」

3人は少し肩を落としながらその場を後にしていった。

公園

あの後3人は公園にて休憩しながら今後の事を話しあっていた。

「どうしよっか？ 今のところ伊坂に関してもあのライダーに関しても情報ゼロ、どうやって捜そうか・・・。」

「協会は言ってしまうえば表の組織だからね、場合によっては情報が伝わるのが遅いかもしれないよ。」

「ではどうします？」

「BARに行って聞くってのは？」

戒の提案に、青羽とノーマが若干顔を顰める。前回二人はBARで情報を集めようとして面倒事に巻き込まれたからである（主にノーマの所為で）。だが背に腹は代えられない、他に頼れそうなところも無いと言うことで3人はBARに向かっていった。

遊歩道

3人は伊坂と利香に関する情報を集める為に、BARに向かっていった。ガイドの地図によるとこの街のBARは3人がいた所から少し離れたところにあるらしく、一番の最短ルートとしてこの遊歩道を歩いているのである。とその時・・・

「ッ！？ アンデッド？」

「えっ？ ノーマ、今「きゃあああああ！？」・・・ッ！？ 今のって！」

「急ごう！」

3人は悲鳴が聞こえてきた方へ走って行った、するとそこには母親と娘の一组の親子と、今まさにその二人を襲おうとしている複数のダークローチがいた。3人はそれぞれ適当なダークローチに飛び蹴りを喰らわせて親子から引き剥がすと、変身の準備をした。

「なんでダークローチがいるのよ！ この街にはアンデッドがいないんじゃないの？」

「おそらく私たちが協会を出た後になって街に入り込んだんでしょ、よくあることです。」

「持ち運びできるサーチャーでもあればいいんだけどねえ。」

そんな話をしながらも、3人は油断なくダークローチ達を見据えていた。

「とりあえずこいつ等片付けるわよ、変身！」

《Turn up》

青羽が変身するのに合わせて、ノーマと戒も変身した。3人はそれぞれ複数のダークローチを相手に戦いだした。

「ハッ、セイツ、ヤアッ！」

ブレイドは近付いてくるダークローチ相手に只管ラウザーを振るっていた。ダークローチ達も何とかブレイドに組み付こうとするが、それらは全てブレイドによって斬り伏せられていった。

「よし、これで！」

《Kick Thunder Mach》

《Lightning Sonic》

「ハアアアア、デヤアアアアアアッ！」

ブレイドが必殺の3枚コンボ『ライトニング・ソニック』を発動させる。高速で走り複数のダークローチを跳ね飛ばした後Uターンし、ダークローチが体勢を崩しているところに雷を纏ったキックが炸裂し、ダークローチ達を次々と消滅させていった。

一方ギャレンの方もダークローチ達を圧倒していた。ギャレンラウザーから放たれる銃撃でダークローチ達は近付くことすらままならない。

「そろそろ決めさせてもらうよ。」

《Bullet Fire》

ギャレンは『バレット・アルマジロ』と『ファイア・フライ』のカードをラウズして、炎属性を付加させてさらに強化した銃弾を次々にダークローチ達に叩き込んでいった。そして銃撃を受けたダークローチは消滅していった。

「フッ、ハッ、フッ！」

3人の中でも攻撃範囲が一番広いカリスは、二人よりも多くのダークローチを相手取っていた。近くにいた奴にはカリスアローで斬り付け、距離がある奴にはフォースアローを叩き込んでいく。そんな彼女の目にあるものが映る。

「ん？ あ、あれは！？」

それは今まさに親子に襲いかかろうとしているダークローチの姿だった、どうやらこの乱戦のドサクサに紛れて二人を襲うつもりらしい。それを見てからのカリスの行動は迅速だった。たった今まで相手取っていたダークローチを強引に引き剥がすと、二人の方へ走り寄りダークローチを斬りつけてその場から引き離すと、二人を守るようにしてダークローチ達に立ち塞がる。

そしてカリスはダークローチ達を片っ端から切り払っていった、ダークローチ達を攻撃しつつ二人を守ることを忘れない。そうしてある程度ダークローチ達に攻撃すると、カードケースから2枚のカード『ドリル・シェル』『トルネード・ホーク』を取り出してラウズする。

《Drill Tornado》

《Spinning Attack》

「ハアアッ！」

カリスは2枚コンボの必殺技『スピニング・アタック』を発動させ、錐揉みキックの射線上にいたダークローチ達を次々と消滅させていった。カリスの攻撃が終わった頃にはブレイドとギャレンの戦いも終わっており、辺りにはダークローチの姿は見当たらなくなっていた。周囲に脅威が無くなったことを確認したカリスは、親子の方を向き二人に近付いて行った。

「大丈夫ですか？ もう安心ですよ。」

「あ、ああ……。」

「?……ああ、なるほど。」

《Split》

少女の方はアンデッドが居なくなったのに未だに怯えた目をしていたので、一体どうしたのかと考えていたがすぐに理由が分かった。この年の少女からしてみたら仮面ライダーの姿も十分に怖いかもしれない、そこでカリスは変身を解くことにした。ノーマの姿に戻ると改めて少女に安心するように言葉をかける。

「安心してください、もうあたりにアンデッドはいませんから。」

「う……うん。」

「ノーマ！ その人たち大丈夫？」

「ええ、特に怪我もしてませんし、問題はないでしょう。」

青羽はノーマの言葉に安堵の息を吐く、その時青羽がふと少女の母親の方に視線を向けると母親の方は何やら座り込んだまま立ち上がれなくなっている。どうやら腰が抜けてしまったらしい。その様子を見た青羽は、母親に肩を貸すことにした。

「大丈夫ですか？ よっと！」

「あ……あの、ありがとうございます。本当に何とお礼を言ったらいいか……。」

「ああ、気にしないでください。そんな大したことをした訳じゃないですから。それよりも、貴女の家はどこですか？ ついでに送っていきますよ。」

「そ、そんな悪いですよ！」

「いいですから、気にしないでください。」

母親の方はなおも遠慮しようとするが、ノーマの「青羽は一度決めたらそうそう意見は曲げない」と言う言葉に折れてそのまま肩を貸りたまま家まで案内していった。

青羽が母親の方に肩を貸している間、少女の方はノーマが手をつな

いで歩くことになった。当初は戒がおぶって連れていくつもりだったのだが、少女の方がノーマと手をつないで歩くことを選んだのだ。5人が親子の家に向かって歩いていると、少女の方がしきりにノーマの方を見てくる。流石に気になったノーマは、少女に声をかけることにした。

「どうしたんです、私の顔に何かついてますか？」

「え！？ う、ううん！ えっと・・・その・・・。」

少女はしばしモゴモゴと口を動かしていたが、意を決してノーマに先程の事に対してお礼の言葉を口にした。

「あ、ありがとう、お姉ちゃん！」

「ッ！？ い、いえ・・・その・・・えと・・・ど、どうも。」

それに対してノーマは彼女にしては珍しく言い淀みながらそう返し、青羽はノーマのそんな様子に思わず微笑んだ。

（へえ、ノーマもあんな顔することがあるんだ。可愛い！）

青羽はそんな事を考えながら、女性に話しかける。

「そう言えば、まだ自己紹介をしてませんでしたね。あたしは青羽、桐沢 青羽って言います。後ろで貴女の娘さんと手をつないでるのがノーマ・イクスで、もう一人が大神 戒です。」

「あ、えっと・・・私は赤城 涼子あかぎ りょうこです。あの子は私の娘で、理帆りほ子こって言います。」

5人はお互いに自己紹介をしつつ、涼子の家へと向かっていった。

赤城家

青羽達3人は、涼子の好意でリビングに案内されていた。先程の事に対してちゃんとお礼がしたいとのこと。涼子がキッチンで茶を用意している間に3人はリビングにいたのだが、理帆子の方はリビングでノーマと色々と話していた。と言っても基本的に理帆子の方が一方的に話しかけ、ノーマがそれに答えるだけと言った感じだが。

「ねえねえ、ノーマお姉ちゃん！」

「あの、えっと……。」

ノーマは今までまともに接したことが無い子供の相手に四苦八苦し、思わず青羽と戒に助けを求める様な視線を向ける。だが青羽は面白いモノを見る様な目を向けるだけで、戒の方もノーマの様子に苦笑しているだけだった。その間にも理帆子はノーマに構っていき、流石のノーマも音をあげて青羽に助けを求める。

「あ、青羽！ ちょっと助けてください、私……子供の相手なんてしたことが……。」

「あっはっはっ！ まさかノーマが子供苦手だったなんてねえ、いいモノが見れたわ。」

「青羽！？」

「はいはい。えっとね……ッ！？」

流石にノーマが可哀想になった青羽がノーマに助言をしようと立ち上がった時、突然何かを感じたかのように青羽が窓の外に顔を向ける。戒とノーマはそんな青羽の様子に首を傾げながら窓の外を見るが、特に変わった物は見られなかった。

「青羽、一体どうしたんだい？」

「特にアンドッドなどはない筈ですが。」

「いや・・・そういうんじゃない、誰かに見られてたような・・・。」

「

そう言いつつ青羽はしばらく窓の外をジッと見ていた。

赤城家近く

恭司は赤城家の中が見える場所にある塀の陰に隠れていた。彼の任務の邪魔になりそうな3人組の様子を見る為に外から様子を見ていたのだが、青髪の少女がこちらの存在に気付いたのか突然振り向いてきたのである。後一瞬反応が送れていたら恐らく自分の存在が見つかっていたかもしれない、そうならますます任務の遂行が難しくなる。

「ヒュ、危ねえ危ねえ・・・。まさかこっちに気付くなんてよお、こいつはなかなか骨が折れそうだぜ。」

恭司は口ではそう言いつつも、心の中では楽しんでた。この任務を命じられた時は正直退屈な任務だと思っていたのだ、なんの力も無い相手から物を奪うことなど彼にとっては造作も無い。だが、今その目的の近くにはなかなか腕の立つ連中がいる、その所為で任務の達成は難しくなったがその方が逆に面白い。簡単に終わる任務ほどつまらないモノは無いからだ。

「さてと・・・どうしたもんかねえ・・・。」

そんな事を呟きながら、恭司は踵を返してその場から離れて行った。

第11話 暗躍する者（後書き）

と言う訳で第11話でした。ノーマは今まで人助けの為でなく、アンデッドを封印する為に戦ってきました。当然街中で人前で戦うこともあったでしょうが、お札などを言われる前にさっさとその場を去っているのです、今回の様に正面切ってお札を言われることに慣れています。だから今回の様にお札を言われて慌てるという珍しい姿を……。

次回遂に青羽達と恭司が激突、どんな戦いを繰り広げるのかお楽しみに。

次回は早くに更新します、それでは。

第12話 強敵登場（前書き）

どうも、今回は連続投稿となりました。あれから一体どうなっているのか、お楽しみに。

第12話 強敵登場

赤城家・リビング

青羽が奇妙な気配を感じてから数分後、涼子が茶と茶菓子の乗った御盆を持ってリビングにやってきた。

「先程は本当にありがとうございます、こんなことしかできませんが……。」

「いえいえそんな、これだけの事をしてくれただけでも十分ですって。」

これは青羽の本心である。青羽は人を助ける時に見返りを求めるなどと言うことは一切ない、そこには純粹に人を助けたいという想いがあるだけである。強いて言うならば人を助けることが出来たという結果こそが青羽にとっての最大の見返りであり、彼女にとってここまでしてもらおうと言うことは逆に気まずいモノを感じてしまう事なのである。

「まあそう言わずにさ、相手の好意を無碍にするのも失礼だよ。」

「んゝまあそうかもしれないけどさあ。」

「あまりお気になさらないでください、ほんの感謝の気持ちですから。」

「えっと……それじゃあ、お言葉に甘えて。」

そんな会話をしつつ青羽達は出された茶に口をつける。

「それにしても、随分と言い家をお持ちですね。」

「ありがとうございます、この家は主人が持っていた物なんです。」

「なるほど、そのご主人は一体何を？」

戒が何気なく尋ねると、涼子は若干表情に影を落としながら答えた。

「主人は・・・考古学の学者をしておりました。」

「してました・・・てことは、まさか。」

「数年前に・・・。」

「あ・・・えと、すみません。嫌な事を聞いてしまい。」

「いえ、お気になさらず。理帆子もいますし、もう何年も前の事ですから。」

戒と涼子がそんな会話をしていると、理帆子が突然部屋を出て行った。青羽とノーマがどうしたのかと思っていると、戻ってきた理帆子は手に何かを持っていた。

「見て見て、お姉ちゃん！　これ、お父さんがお土産にくれたの！」

それは理帆子の手の平よりも少し大きい程度の大きさの、緑色の寶石だった。理帆子はそれをノーマに手渡す。

「うっわー何それ、綺麗！」

「見事な宝石ですね、一体どうしたんですか？」

「それは、数年前に主人が仕事先の遺跡から持ってきた物なんです。」

「い、いいんですか！？　そんなことして・・・。」

「何でも現地にはこれよりも大きい物も沢山あったとのことで、せっかくだから小さめの奴を一つ持ってきてしまったとのことです。」

その言葉に、青羽は随分と大胆な旦那様だと思った。いくらなんでも調査対象になるだろうモノを、沢山ある内の小さいものだからっ

て持ってきてしまうとは。だが理帆子の方はそんな事お構いなしに嬉しそうに笑いながらそれをノーマに見せている。

「なるほど、お父様の形見と言うわけですか。」

「うん、あたしの宝物なの！ あ、そうだ！お父さんの写真も見せてあげるね！！」

そう言って理帆子は部屋を出て行った、青羽達はその様子に微笑ましい物を感じる。

「元気な娘さんですね。」

「ほんと、世界が楽しくて仕方がないって感じよね。」

「ありがとうございます、主人が無くなって一時はどうなることかと思ってましたが、あの人に似て明るく真っ直ぐな子に育ってくれまして「きゃあああああっ!？」・・・ッ!？ 理帆子!。」

4人がそんな話をしていると、突然ガラスの割れる音と共に理帆子の悲鳴が聞こえてきた。4人が慌ててその場に向かうと、2階の窓ガラスが割れており理帆子の姿はどこにも無かった。

「理帆子!？ 理帆子、どこ!？」

「赤城さん、これを・・・。」

涼子が必死になって理帆子の名前を呼んでいると、ノーマが一枚の紙切れを見つけた。それにはこう書かれている。

『娘さんは預かった。返してほしければ今日の深夜、郊外近くにある廃墟にお宅が持つてゐる魔皇石を持ってこい。』

青羽達は即座に理帆子がこの手紙の差出人に攫われた事を悟るが、

同時に一つの疑問を持つ。

「魔皇石？ 一体何の事？」

「涼子さん、この魔皇石と言うのはもしかして……。」

「……理帆子が大事にしてる、あの宝石の事です。主人がそう言っていました。」

「でも、何でそれが狙われるんです？」

青羽の質問に、涼子は静かに首を横に振る。どうやら彼女も名前以上の事は知らないらしい。

「……で、どうします？」

「そんなの決まってんでしょ、助けるのよ！」

「でもどうやってだい？ この3人の誰にも気付かれずにこんなことをやってのけた、相手はかなりの腕だよ。」

青羽は即座に助けに行こうと言うが、ノーマと戒がそれに待ったをかけた。相手の実力は未知数、しかも向こうには理帆子がいる。迂闊な行動は出来ない。そんな時青羽の目に泣き崩れている涼子の姿が映る。

「理帆子……どうしよう、あの子に何かあったら、私……。」

「……涼子さん、魔皇石をあたし達に。」

「え？」

「理帆子ちゃんは、必ずあたし達が助け出しますから。」

青羽は決意の籠った眼で涼子にそう言った。

深夜・郊外近くの廃墟

恭司はこの場で魔皇石が来るのを待っていた。何度か涼子にアレを渡すように脅してきたが、余程大事なモノなのかなかなか手放そうとはしなかったのだ。だが今回は娘の命が掛かっている、あの女ならまず間違いなく魔皇石を渡すだろうと考えたのである。しばらく待っている、この場所に近づく気配を感じた。恭司がそちらに視線を向けるとそこには一人の人物・・・青羽がいた。

「へえ、お前の方が来てくれたんだ。」

「あんた・・・あたしを知ってるの？」

「いや、別に知ってるわけじゃねえさ。ただ、昼間あの家の様子を偵察しに行ったらお前らがいるのが見えたんでね。」

「ッ！ あの時感じた視線は、あんたのだったのね！」

「ハハッ、大当たりってな。それで、魔皇石は持って来たんだろうなあ？」

恭司は青羽とある程度話すと、本題を切り出した。彼としても彼女の存在は非常に気になるところだが、今は任務の方が大事である。

「それよりも理帆子ちゃんが先よ、あの子は無事なんでしょうね？」

「この建物のどっかにいるよ。さあ、魔皇石を渡しな。さもないとこの建物ふっ飛ばすぜ。」

そう言って恭司は爆弾のリモートコントロールスイッチらしき物をチラつかせた。それを見た青羽は、唇を噛みながら魔皇石を取り出した。

「これが欲しいんでしょ、持ってきたから理帆子ちゃんを解放して！」

「ガキを返した途端にそいつ持って逃げられたら意味無いんでね、

先にそいつを渡して貰おうか？」

「クッ！」

恭司の言葉に青羽は悔しそうにしながらも魔皇石を恭司に向かって投げ渡した。それを受け取った恭司は、石が本物であることを確認すると満足そうな顔をする。

「確かに、魔皇石は受け取ったぜ。それじゃあ約束通りに「その必要はないよ。」・・・お？」

恭司が理帆子を解放しようとする、彼の後ろから戒が声をかけてきた。

「戒、理帆子ちゃんは！」

「大丈夫、もう安全な場所に連れてったから。」

「・・・なぐるほど、人数が足りないと思ったたらそう言うことだった訳ね。ま、これさえ手に入れば良かったから別にいいけど。」

「悪いけど、それも返してもらおうよ。」

「ハッ、そう簡単に・・・。」

恭司がそこまで言ったところで、天井の暗がりからノーマが飛びかかっていった。彼女は理帆子を涼子の下まで連れていくと、すぐさまここへ戻ってきていたのである。そして隙を突いて魔皇石を相手の手から奪い返す、それが今回の作戦だった。だが・・・

「フッ！」

「グフッ!？」

「ノーマ!？」

恭司はノーマが飛びかかってくる直前に回し蹴りでノーマを吹き飛

ばしてしまった。

「悪いな、そう来るだろうことはお見通しだぜ。さあ、どうする？」

「クッ！　なら腕づくで奪い返すまでです。」

そう言ってノーマはカリスラウザーを取り出して腰に装着した、それを見て他の二人もバックルにカードを装填して腰に装着する。

「ほほお、俺とやろうってか！」

「随分と余裕なのね、てかあんた何者なの？」

「へっ、そう簡単に言うとしても「隠密調査部・・・だね？」・・・あん？」

青羽の質問に答えたのは、恭司ではなく戒だった。恭司は戒に対して訝しげな視線を向ける。

「お前・・・一体何もんだ？　何で俺等の事を知ってる？」

「さあね。君らお得意の力尽くで聞いてみたらどうだい？」

「・・・じゃあそうさせてもらうさ。」

そう言う恭司は懷からバックルと1枚のカード『チェンジ・ケルベロス』を取り出した。

「ッ！？　あんた、ライダーだったの！」

「しかもそのカード、通常のカードとは違いますね？」

「御名答、『ケルベロス』のカードはメチャメチャ強力だからな、3枚のワイルドベスタに変換する必要があるのさ。もっとも、3分の1になってもそんじよそこのAのカードよりは強力だな。」

そう言いつつ恭司はバックルにカードを装填して腰に装着した。

「さうて、ちったあ楽しませてくれよ？ 変身。」

《Open up》

恭司がバックルを開くと彼の前に黄色いオリハルコンエレメントが生成され、自動的に彼を通過して【仮面ライダーグレイブ】へと変身させる。

「クッ、理帆子ちゃんの宝物は返してもらおうわ。二人とも、いくわよ！」

「ええ！」

「わかった！」

「「変身！」」

《Turn up》

《Change》

恭司がグレイブに変身したのを見て、青羽達も変身する。変身が完了したブレイド・カリス・ギャレンが武器を構えたのを見て、グレイブも剣型の【グレイブラウザー】を構える。

「来いよ、遊んでやるぜ。」

「ハアアアアアッ！」

ブレイドが真っ先にグレイブにラウザーを振り下ろすが、それは軽々と受け止められる。ブレイドの攻撃を受け止めた隙を突いてカリスが斬りかかるが、ブレイドを押し戻してカリスの攻撃を捌くと、ギャレンの銃撃をラウザーで弾き返した。

「クッ、コイツ・・・。」

「強いですね、これほどとは。」

「いや、まだまだこれからさ！」

ギャレンがそう言いグレイブに銃撃しながら殴りかかっていくが、グレイブは銃撃を切り抜けるとギャレンのパンチを受け止めると逆にラウザーで斬りつけてしまった。

「グアッ!？」

「戒!？」

「クッ、ならば・・・青羽、同時攻撃です。二人同時に攻撃すれば相手も・・・。」

「よし!」

ギャレンが攻撃されたのを見てブレイドは動揺し、カリスはブレイドに同時攻撃を提案した。ブレイドもそれを承知し、カリスとブレイドは同時にグレイブに斬りかかっていった。

「デヤッ!」

「ハッ!」

「フッ、おっと!」

だがグレイブはラウザーでブレイドの攻撃を捌きつつ、キックでカリスを弾き飛ばしてしまった。ブレイドはそのままグレイブと斬り合うが、技量はグレイブの方が上らしくブレイドは圧されていく。

「くう! あんた、何で魔皇石を狙うの! それは理帆子ちゃんの・・・。」

「うちのボスが欲しがってるんでね、俺は任務を遂行してるだけさ。」

「

「あんた達のボス!? 一体誰よ!」

「そいつはトップシークレットさ!」

「グッ!？」

グレイブはブレイドに斬撃を喰らわせて引き剥がす、その時体勢を立て直したギャレンとカリスがブレイドと共にグレイブを取り囲む。

「貴方のボスが誰なのかもしれませんが、今は魔皇石を返していただきます。」

「さっきは油断したけど、今度はそうはいかないよ。」

「絶対に返してもらおうから!」

「おもしれえ、来いよ!!」

グレイブがそう言うと同時に3人が一斉に攻撃する。ブレイドとカリスが斬りかかり、ギャレンが銃撃する。グレイブは多少ダメージを受けたがほとんどの攻撃は防ぎ、捌いてしまった。

「ほ、ホントに、強い・・・。」

「確かに・・・やりますね。」

「もう終わりか? だったらこっちから行くぞ!」

3人からの攻撃が止むと、今度はグレイブが3人に攻撃を仕掛けてきた。

「ハッ、セイッ、トリャア!」

「グッ!」

「ガハッ!？」

「グウ!？」

グレイブの攻撃にブレイド達も反撃し防ごうとするが、グレイブはそれらを弾いて3人に攻撃を喰らわせていく。その猛攻に3人とも手痛いダメージを受けてしまう。

「さして、そろそろトドメといきますか。」

《M i g h t y》

「ハアッ！ デリヤッ！ セイツ！」

「ウアアアアッ！？」

「ガハアアッ！？」

「グアアアアッ！？」

グレイブが1枚のカード『マイティ・グラビティ』をラウズして発動する必殺技『グラビティ・スラッシュ』を喰らって、倒れ伏してしまうブレイド達。グレイブは倒れた3人を見下ろしながら、3人に声をかける。

「何でそこまで必死になるかねえ、お前達は。」

「あ、貴方こそ・・・何でそれを奪おうとするんですか・・・。」

「だから、言っただろ？ ウチのボスが持って来いって言うんだからさ。もつとも、あんなガキが持ってたって、ただの宝の持ち腐れになるのが関の山だろうけどなあ。だったら俺らでコイツを有効活用してやるってんだよ。」

「クッ！ ハアアアアアア！」

グレイブの言葉にカリスは叫び声を上げながら気力で立ちあがると、一気にグレイブに突撃していく。だがそれは簡単に見切られて、逆にグレイブの攻撃を受けてしまう。

「フンッ！」

「アアアアッ！？」

「ノーマ！？」

グレイブの攻撃はカリスの顔を斜めに切り裂いた、ブレイドがそ

れに悲鳴のような声を上げる。見るとカリスの頭部のアーマーが破壊され、中にあるノーマの顔が露わになっていた。幸いにも怪我はないようだったが、ノーマの顔は苦痛に歪んでいた。それを見てブレイドの……青羽の中で何かが切れた。

「あんたは間違ってる。」

「あん？」

「それは理帆子ちゃんにとって、お父さんの形見。そこにあるのはそいつの使い道諸々なんかじゃない、あの子とあの子のお父さんの大事な思い出。それを宝の持ち腐れとか言った挙句、ノーマを・・あたしの仲間を傷つけた。」

「だったらなんだよ？」

グレイブは口ではそう軽口を叩いたが、内心では動揺していた。ブレイドの纏う雰囲気が先程までと違うのだ。先程と全く違う気迫を持ったブレイドに、グレイブの心が警鐘を鳴らす。

「あたしは・・・あんたを許さない！」

「チッ、抜かせえ！」

「ハアアアアア！」

ブレイドはグレイブに向けて駆けて行き、ブレイラウザーを振り下ろす。当然グレイブはそれを受け止めるが、ブレイドの攻撃はそれだけに留まらず次々と攻撃を叩き込んでいく。

「ハッ、セイツ、デヤア！」

「チッ、ハアッ、クッ！」

グレイブは必死にブレイドの攻撃を捌くが、先程と違って反撃したりすることが出来ない。それほどまでに今のブレイドの攻撃は洗練

されていた。

（どうなってんだ?! さっきまでとは豪い違うじゃねえか、今まで手を抜いてたってのかよ!?!）

グレイブの考えを余所にブレイドはなおも攻撃を加えて行く。だがグレイブもやられてばかりではなく、次第にブレイドの動きに慣れてきたのか反撃をし始めた。

「フツ、セイツ、オラァ!」

「ハッ、フツ、セヤッ!」

ブレイドの振り下ろしたラウザーをグレイブが受け流し、グレイブの斬り払いをブレイドが受け止める。二人の実力は拮抗していると云っても良かった。

「ハァ、ハァ、ハァ。」

「フウ、フウ、フウ。」

二人とも息が上がり、お互いに次の攻撃で勝負が決まることを確信していた。ここでブレイドは一気に勝負をかける為『スラッシュ・リザード』と『サンダー・ディアー』のカードをラウズする。それを見たグレイブも再び『マイティ・グラビティ』のカードをラウズした。

《Slash Thunder》

《Lightning Slash》

「ハァァァァ……。」

《Mighty》

「フウツ……。」

お互いにカードをラウズすると、二人ともある程度距離を取った状態でラウザーを構えた。一瞬の静寂の後、二人は同時に駆け出した。

「デヤアアアアアッ！」

「オオオオオオオッ！」

そしてお互いにすれ違った瞬間どちらもラウザーを振り抜き、少し通り過ぎた所で止まった。二人ともしばらく振り抜いた姿勢で動きを止めていたが……

「クッ！」

ブレイドが呻き声をあげながら姿勢を崩した、一方のグレイブは未だに動かない。勝負はグレイブが勝ったかに思えたが……

「うっ、ガハアッ!？」

グレイブが苦しげな声を上げると同時にその場に蹲った、勝負を制したのはブレイドの方だったのだ。ブレイドはグレイブが動けなくなったのを確認すると、彼に近寄り魔皇石を返すように言う。

「さあ、もう終わりよ。魔皇石を、理帆子ちゃんの宝物を返しなさい。」

「へっ、なかなかやるじゃねえか。まさか俺がここまでやられるとはな……お前、名前は？」

「桐沢 青葉……あんたは？」

「へへっ、俺は黒木 恭司さ。お前の名前、しっかり覚えさせて貰ったぜ！」

《S m o g》

「ッ!？」

グレイブはそう言うと、隙をついてクロバーの9『スモッグ・スキッド』をラウズし煙幕を張った。ブレイドは煙幕のせいで一瞬グレイブの姿を見失ってしまう。

「クッ! 逃げんの!」

「当然だ! もう目的自体は果たしたんでね、また縁があったら会おうぜ。あばよ!」

煙幕が晴れたとき、そこにグレイブの姿はなかった。魔皇石を持っていたまま、まんまとグレイブに逃げられてしまったのである。

「く、くっそお・・・ハア。ノーマ、大丈夫?」

「ええ、何とか・・・。」

ブレイドは悔しそうな声を上げると、カリスに無事かどうか尋ねた。どうやら外から見た通りアーマーが破壊されただけでノーマ自身には怪我はないらしい。

「そう、良かった。でも・・・。」

「あの子の宝物は・・・まんまと盗まれてしまいましたね。」

「とりあえず、一旦戻ろう。その事とも涼子さん達に報告しなきゃいけないし。」

変身を解いた戒の提案で、一度赤城家に3人は戻って行った。ビルの外に出ると、すでに太陽が昇って夜が明けていた。

赤城家

沈んだ表情で赤城家に向かった3人を涼子と理帆子は温かく迎えた。3人が赤城家の前に来ると、涼子が深く頭を下げて3人に感謝の言葉を述べる。

「本当に、ありがとうございました。理帆子を助けていただいて、本当に……。」

「頭を上げてください、理帆子ちゃんは助けることができましたけど、結局……魔皇石を奪われてしまいましたし……。」

「理帆子さん、本当に……すみません。お父様の形見だったのに……。」

青羽とノーマがそう言いながら二人に謝罪するが、理帆子は笑って言った。

「ううん、いいの。宝物が無くなっちゃったのは確かに残念だけど、お父さんとの思い出はここに沢山あるもん！」

そう言って理帆子は青羽達に1冊のアルバムを見せる。そこには理帆子と理帆子の父親がともに笑っている写真がいくつもあった。本当に楽しそうな、幸せそうな笑みを浮かべて……。

「お父さんとの思い出はまだ沢山あるから、だから理帆子悲しくないよ！ だからお姉ちゃんたちも元気出して、ね！」

「理帆子ちゃん……。」

3人は理帆子が浮かべた笑みに、思わず釣られて笑みを浮かべてしまう。

「そう……だね、思い出は一つだけとは限らないよね。……」

うん、ありがとう、理帆子ちゃん。」

「えへっ！」

青羽は理帆子の頭を撫でながらお礼を言うと、二人に別れを告げた。

「それじゃ、あたし達はそろそろ行きます。」

「そんな、もう少しゆっくりされては？娘を助けていただいたお礼も……。」

涼子は3人を引きとめようとするが、青羽はそれに黙って首を振った。

「お礼ならもう、これでもかってくらい貰いましたし、これ以上何かして貰う訳にもいきません。急がなきゃいけない理由もありますし、これで失礼させていただきます。ありがとうございます。」

「それでは理帆子さん、いつかまた会いましょう。」

「うん！お姉ちゃんたちありがとう、また会おうねえ！」

青羽達がその場を離れていくと、理帆子が大きく手を振った。3人はそれに笑顔で手を振り返して応えながら、そこから去って行った。

第12話 強敵登場（後書き）

と言う訳で第12話でした。今回ちょっとキバ成分を入れました、彼らが何故魔皇石を狙うのかは今後明らかにしていきます。恭司には青羽のライバルとなっていたたく予定ですので、今後どう青羽達と絡んでいくのか楽しみにしていってください。

それでは。

第13話 牧場の泥棒（前書き）

どうも、黒服です。今回は特に話的に大きな進展はありません、ちよつとした息拔きの話になりました。

第13話 牧場の泥棒

草原

青羽達はあれからツツバである程度買い物をして、今後の旅に必要なものを買いそろえた後に街を離れていった。3人の顔には覇気があるとは言い難いが、それでも落ち込んでいるわけではなかった。確かに恭司には逃げられてしまったが、何時までも落ち込んでいては仕方がない。それよりも今は少しでも前に進み、少しでも強くなろうと3人は考えていた。

「それでさあ、次はどこに向かってんの？あたし達……。」

「とりあえず一番近い街、『ナティ』に向かっているとだよ。現状伊坂の動きがわかるまでは闇雲に動くしかないわけだし……悔しいけど。」

「戒、気持ちは分からなくもないですけど焦りは禁物ですよ。」

「分かってるさ。」

3人はそんな会話をしながら、バイクで草原を走って行った。

夜・河原

日が沈む頃、3人はこの河原で夜を明かすことにした。現在は青羽が夕飯の支度をしているところである。と、その時……

「青葉、ちょっとやらせてもらってもいいですか？」

「へっ?!」

青羽の調理風景を見ていたノーマが突然そんなことを口にした。今までノーマが自分から進んでこういうことをしようとしたことが無かったので、青羽も戒も大分驚いていた。

「ノーマ、大丈夫なのかい？」

「はい、青羽のやり方を見て大体のことは覚えました。恐らく私でも何とかできるかと・・・。」

「へえ、じゃあちよつとやって見せてよ！」

そう言って青羽は調理用のナイフと魚（近くの川で釣った）の乗った折り畳み式のまな板をノーマに差し出す。ノーマはそれを受け取ると、テキパキと魚をさばいていってしまう。その手際の良さに青羽と戒は思わず感心してしまう。

「おおー凄いじゃんノーマ！」

「確かに凄い、君ホントに今まで料理とかしたことないのかい？」

「ええ、このようなことをするのは正真正銘初めてです。ですが案外何とかなるものですね。」

その間にもノーマは魚をさばいていき、その後は青羽とともにさばいた魚と乾燥野菜でシチューを作っていた。出来栄は上々で、今後もノーマを手伝わせて最終的には3人で交替で食事を作るようにすることが決まった。

翌日

青羽は何時ものように早朝に目を覚ますと、寝ている二人を起こさないようにその場から離れていった。そして体を軽く動かすところから始め、現在は木刀を構えて頭に思い浮かべた仮想の敵と模擬戦

をすることであった。思い浮かべた相手は・・・先日戦った相手、グレイブだった。

（あいつは強い、少なくともノーマや戒と同等かそれ以上に。この間は火事場の馬鹿力みたいな感じで何とか勝てたけど、あれじゃ本当に強くなったわけじゃない。普段からあれくらいことができるようにならなくちゃ。）

そこまで考えると青葉は頭の中に思い描いたグレイブに向かって、木刀を振り下ろしていった。

草原

その後青羽が鍛錬を終えて戻ると、ちょうどノーマと戒も目を覚ましていた。寝袋などを片づけて簡単に朝食を済ませた3人は、再びナティに向けてバイクを走らせていく。すると・・・

「ん？ 何あれ？」

3人の前に柵で大きく囲われた所と、その近くに建つ1軒の家を見つけた。家の近くには塔や倉庫のような建物も見える。それは一言で言い表すと・・・

「牧場？」

「だろうね、この辺には草原が広がってるから牧場を作るのにはちよūdいいのかもしれないよ。」

柵に近付いて行くと、柵の向こう側には多くの羊などが見えた。とその時・・・

「うおおおおお！」

「ッ！？　な、何？」

突然聞こえてきた雄叫びにそちらを見ると、一人の少年が3人に向かって駆けて来ているのが見えた。少年は手に持っていた棒を振り上げてきた。

「このお！」

「おわつと！？」

少年が振り下ろしてきた棒を青羽は何とか受け止め、次いで少年に文句を言う。

「何すんのよ！？　危ないでしょ！」

「うるさい、羊泥棒め！」

「はっ？　泥棒？」

少年の言う『羊泥棒』と言う言葉に青羽達は目が点になる。

「惚けるな！　最近羊を盗んでるのはお前たちだろう、もう逃がさないぞ！」

「ちよつと待って、それ誤解よ！」

「それに逃げられない状態になっているのは貴方の方でしょう。」

少年は現在持っている棒を青羽に握られており、おまけに3人に囲まれている。少年はノーマに指摘されて初めて自分の方が逃げられない状況になっていることに気付いたが、怯まずに3人に突っかかっていく。

「それがどうした！ お前たちなんて僕一人で倒してやる！！」

「うーん、なんて言ったらいいのかn「コラッ！」・・・お？」

青羽がどうにかして誤解を解こうとしていると、牧場の方から一人の男性が駆け寄ってきた。どうやらこの少年の父親か何からしい、男性は少年に近寄ると強引に青羽から引き剥がし、青羽達に頭を下げてきた。

「本当に申し訳ありません！ ウチの息子がとんだ失礼な真似を・・・ほれ！ お前も頭を下げんか！」

「ああ、いいんですよ。何か知らないけど誤解される様なことしたあたし達も悪いんですし。」

「青羽、今回はこちらには一向に落ち度はないと思いますよ。」

「まあ普通に見たら勝手に早とちりして、僕らを羊泥棒扱いしたこの少年君の方に落ち度が・・・。」

戒が青羽に少年の落ち度を述べるが、青羽はそれを聞いたとたん戒の頭を思いつきりひっ叩いた。

「痛！？ つつつ、いきなり何するのさ、青羽。」

「そう言う言い方ってないでしょ！ この子は牧場の羊を守ろうとこの子なりに必死になってるんだから。」

そう言うとき青羽は少年に向き直り、目線を少年に合わせると彼の頭を撫でた。

「ごめんね、誤解される様なことして。あたし達は単に通りがかっただけだから安心して・・・ね？」

「う・・・うん、僕の方こそ・・・ごめんなさい。」

青羽の真摯な態度に、少年も流石に申し訳なさそうに頭を下げてきた。それを見てノーマは呆れながら呟いた。

「まったくあなたは、本当にお人好しですねえ。普通に考えたらあれはもつと文句を言ってもいい筈ですよ、それなのにあなたは。」

「まあまあいいじゃない、それよりも一体何のことなんです？　その・・・羊泥棒って。」

「あ、はい！　えっと・・・立ち話も何ですしとりあえず上がってください。」

そう言われて3人はとりあえず牧場の近くにある彼の家へと向かっていった。

牧場主の家

「えゝまずはこの度は、本当に申し訳ありませんでした。私この牧場の経営者の安達あたち 藤兵衛とうべいと言います、こちらが息子の京介きょうすけです。」

「さつきは・・・すいませんでした、皆さんを羊泥棒と勘違いしてしまつて。」

「それはもういいわよ。それで、一体何があつたんです？」

「はい、それが・・・。」

藤兵衛の話によると、1ヶ月程前から日に日に羊が少なくなっているらしい。どうもおかしいと言うことで見張っていると、夜に怪しい人影の様なモノを見たと言う。それからというもの罾などを張ったりしているが、一向に成果が上がっていないとのこと。青羽はその話を聞いて・・・

「よし！　あたしらでその犯人捕まえよう！」

「はあ、言うと思いましたよ。ですが一体どうやって捕まえるのですか？ 1ヶ月前から出ている筈なのに一向に捕まらない様な相手ですよ。」

「普通に見張って捕まらないんだったら……。」

青羽はその場にいた全員に彼女の考えを話していく、それは……

夜・羊小屋

青羽達は羊小屋の中で犯人を待ち伏せしていた、犯人の目的は羊なのだから此処にいれば必ず犯人と鉢合わせする筈、というのが青羽の考えだったのである。

「それにしても、まさか羊と一緒に夜を明かす事になるとは思いませんでしたよ。」

「まあまあそう言わずにさあ。」

「大体青羽は人が良すぎます、なんだってあんな初対面でかつ犯人呼ばわりした相手の為に……。」

「ま、青羽らしいと言えばらしいかもしれないけどね。」

3人がそんな話をしていると、ノーマが何かが小屋に近付く気配を感じた。しかもそれはアンデッドのモノだったのである。

「二人とも、どうやら犯人が来たようです。しかも相手はアンデッドですよ。」

「ま、マジで!？」

「フム……。」

3人は出来る限り気配を消し、アンデッドが小屋に入ってくるのを

待つ。すると突然小屋の扉が開いた、開いた扉から入ってくる月明かりで見えるその姿は影のみで良くは見えないが、まるでカメレオンのようだった。カメレオンアンデッドがゆっくりと羊たちに近付いて行く、3人がタイミングを見計らってアンデッドに飛びかかるうとしたその時……

「は、ハックシュン！」

青羽が大きくくしゃみをした。それに気付いたアンデッドは青羽達の方を見ると、一目散にその場から離れて行った。

「青羽！ 一体何をしてるんですか、見つかったじゃないですか！
！」

「だ、だってしょうがないじゃん！ 出ちゃったもんは出ちゃったんだもん、今更そんな事言っちゃって……」

「とにかく急いで後を追おう、今ならまだ間に合うかも。」

3人はとりあえず急いで小屋の外に出た、すると牧場から離れて行くこうとするアンデッドの姿が見える。

「逃がすか、変身！」

《Turn up》

青羽が変身するとノーマと戒も変身してそれぞれバイクに跨り、全速力でアンデッドを追いかけた。アンデッドは必死に逃げるが、やはりバイクの方が断然速い。後もうちよつとでブレイド達が追いつくと言う時、忽然とアンデッドの姿が消えた。

「ッ?! い、一体どこに？」

「恐らく姿を消したんでしょう。しかし、これは少々面倒ですね。」

「だったら僕に任せてよ。」

《Scope》

ギャレンはラウザーにダイヤの8『スコープ・バット』のカードをラウズする、そして強化された追跡能力で周囲を走査していると、暗闇の中にアンデッドの姿を確認した。

「居たぞ、あそこだ！」

《Bullet》

《Fire》

ギャレンはアンデッドに向かって炎属性を付加した強化弾を撃ち、アンデッドの姿を浮き彫りにさせる。ブレイド達はそれに目掛けて一気に攻撃をたたみかける。

「ハアッ、セイツ、ヤアッ！」

「フッ、ハッ、ハッ！」

ブレイドとカリスの攻撃でアンデッドはドンドン追い込まれていき、二人の放った蹴りで大きく吹き飛ばされる。それを見て二人はラウザーにそれぞれ2枚のカードをラウズしていった。

《Kick Thunder》

《Drill Tornado》

《Lightning Blast》

《Spinning Attack》

「ハアアア、デヤアアア！」

「フウ・・・ハアアアア！」

ブレイドの必殺技『ライトニング・ブラスト』とカリスの必殺技『

スピニング・アタック』が炸裂し、アンデッドは吹き飛ばされながら爆発する。そしてバツクルが開いたアンデッドにブレイドがコモンブランクを投げて封印した。

「ふう、これで羊泥棒もいなくなるでしょ。新しいカードも手に入ったし・・・てこれ、ダイヤスートのカードじゃん！ しかも効果を手札を奪うって、あたしこんなの使わないわよ！？ 戒、これあげる。」

青羽は変身を解きながら同じく変身を解いた戒にカードを差し出す。

「いや、封印したのは青羽なんだし、青羽が持ってるべきなんじゃ・・・。」

「でもあたしこんなの使わないもん、スートも違うからコンボに組み込むことも出来ないし、だからあげるわ。」

「んまあ、そこまで言うんだったら。」

戒が渋々カードを受け取ると、ノーマも変身を解除しながら二人に近付いて行く。

《Split》

「さて、牧場に戻りましょうか。犯人を捕まえたことも報告しなければなりませんし。」

ノーマの言葉に二人が頷くと、3人とも牧場に向かって歩いて行った。

牧場

「本当にこの度は、ありがとうございます！」

「いえいえ、そんな大したことは何も……。」

あの後3人が牧場に帰ると、藤兵衛から豪く感謝された。今後は羊が盗まれる可能性が無くなったのだから、牧場主としては当然だろう。藤兵衛がある程度感謝すると、今度は京介が3人……と言うより青羽に感謝しに来た。

「えっと……ありがとう、犯人倒してくれて。」

「いいのよ、これくらい。」

そういうと青羽は京介に目線を合わせる、青羽と目があつた京介は思わず頬を赤く染めた。

「あなた、この牧場が好き？」

「う、うん。僕が生まれた時からずっといる所だし、お父さんとお母さんがずっと守ってきたところだから。」

「だったら、頑張って守れるような男になりなさいよ。男だったらそれくらいやって見せなきゃ、ね？」

そう言って青羽は京介の鼻先を軽く突く、その仕草に京介はさらに顔を赤く染めた。

「このままお帰りいただくのも心苦しいですし、何かお礼がしたいのですが……。」

「いえ、そんな……あ！」

青羽は藤兵衛からの申し出を一旦は断ろうとしたが、すぐに思い直して彼に一つある事を尋ねた。

「それじゃあ一つだけ聞きたいんですけど、ここ最近の間に怪しい人物を見ませんでしたか？　それか、変わったライダーとか・・・」

「怪しい人物・・・あ、そう言えば。」

「見たの！」

「ええ、丁度一昨日の夕暮れ時に、湿原から鉦山に向かう方向に男と女の二人組が歩いて行くのを見ましたよ。」

その情報に、戒が思わず藤兵衛に詰め寄る。

「そ、その二人って、一体どんな人物でしたか！？」

「いえその、かなり遠かったのでもうくは見る事が・・・すみません。ただあの方向は今危ないんですけどねえ。」

「危ない・・・と言うと？」

「最近鉦山の近くにクイーンローチが出現するようになったんですよ、おかげで鉦山からこの牧場までの間に対アンデッド用のバリケードを作る羽目になりました。」

対アンデッド用バリケードとは、鋼鉄の板にスピーカーを付けて、アンデッドが嫌う特定の波長の超音波を発するものである。

「一応あの方向は危ないと二人に向かって叫んだんですが、聞こえなかったのかそのまま行ってしまいました。」

「・・・分かりました、ありがとうございます。それじゃ、あたし達はこれで。」

「ええ、色々ありがとうございます。」

「またね、お姉ちゃん！」

青羽達は藤兵衛達に別れを告げてその場を去ると、バイクに乗って走っていく。目的地は西の鉦山、そこに伊坂と利香の手掛かりがあ

ると信じて。

第13話 牧場の泥棒（後書き）

と言う訳で第13話でした。青羽は基本的にそうそう怒る事はありません、特に自分が馬鹿にされると言った事などでは。でも特定条件では烈火のごとく怒り出します、自分の誇りや仲間を傷つけられた時なんか特に。

次回、青羽達と隠密調査部が再び激突、そして・・・・・・。
次回の更新も楽しみにしてください。それでは。

第14話 隠密調査部（前書き）

どうも、黒服です。今回再び青羽達が隠密調査部と激突します。

第14話 隠密調査部

湿原

青羽達3人は牧場で得た情報をもとに、鉱山へと続く湿原を走っていた。藤兵衛によるとこの辺りにクイーンローチが出現するようになったとのことだが、クイーンローチどころかダークローチすら出現しないこの状況に皆首を傾げていた。

「なんも出ないわね。」

「そうですね、特にそれらしい気配も感じませんし。」

「どうも妙だねえ。」

3人がそんな話を話しながら湿原を進んでいき、いよいよ鉱山の入り口が見えると言う時、ノーマの目にあるものが飛び込んできた。

「ッ!?!? 二人とも、ちょっと待ってください!」

「ど、どうしたの?」

「まさか、遂にダークローチが?」

「いえ、そう言うのではないのですが……。」

3人はそのままノーマに促されて鉱山の入り口に進んでいく、するとそこには……

「な……なにこれ?」

「こ、これは……!?!?」

そこにはクイーンローチがいた、だがそいつはもはや虫の息と言っ

てもいい状態だった。鉱山の入り口近くに岩壁から突き出るように生えた大木、そこにモズのはやにえよろしくクイーンローチが突き刺さっていた。

「これ・・・伊坂が？」

「わからない・・・。」

「違うんじゃないですか。」

「なんで、そう思うんだい？」

「今の彼にはサイズがついてます、それなのにトドメを刺さずにこのような状態で放置しておくことが理解できません。仮にサイズで始末できなかったとしても、伊坂本人がトドメを刺せばいいだけの事。」

ノーマの推理に二人は思わず納得してしまう。確かに今の伊坂だったら障害は全て完全に排除しようとするだろう、このように生かさず殺さずの状態で放置しておくなどどう考えてもおかしい。では一体・・・

「考えてもしょうがないわ、とりあえず行きましょう。」

青羽の言葉に、ノーマと戒はとりあえずこのことについて考えるのを止めて鉱山の中へと入っていった。

クイーンローチは通常のダークローチの3倍以上の大きさがある、だから3人は気付かなかった。3人が鉱山へと入っていったから少しして息絶えたクイーンローチが静かに消滅し、後に残ったそいつが突き刺さっていた大木と・・・

それを中心に岩壁に刻まれたコウモリを思わせる紋章の様なモノに。

鉦山

戒が予め得ておいた情報によると、数年前までは鉦山として機能していたらしいがもはや採掘できる鉦物は全て採掘しきってしまったらしく、今は廃鉦となっているらしい。その時にはこの山を越えたところにも物資を搬出する関係で、入り組んだ地形になりながらも山を横断することが可能であるらしい。その為3人はこのまま山を越えて次の街に向かう為にバイクを転がしながら、坑道の中を進んでいた。しばらく3人が特に何も話さずに進んでいると、突然青羽が戒に話しかけた。

「そう言えばさあ戒、あんたなんであいつの事知ってたの？」

「あいつの事って？」

「ほら、あの恭司って奴の所属してる、えっと……隠密調査部……だっけ？ 何処で知ったのそれ。」

「それは私も気になりますね、一体何故貴方がその事を知っているのですか？」

青羽とノーマの質問に、戒はなかなか答えなかった。

「まあ、色々あったんだよ。色々だね。」

「色々……ですか。」

「そうだよ、それに僕からしてみればノーマの方が気になるけどなあ。」

「……どういう意味です？」

しばらく黙った後、戒は当たり障りのない事を口にする、話題を変える為にノーマの事を話に出す。

「どうして君はアンデッドの存在が分かるんだい？ 君、タイミン
グ的にどう考えても早過ぎる時からアンデッドの存在に気づいてた
よね、何故なんだい？」

「それは……。」

ノーマは戒の質問に言い淀む、何時もは饒舌な彼女らしからぬ行為
である。しばしノーマがそのまま言い淀んでいると、青羽が口を開
く。

「別に何だっていいじゃん、単にノーマの勘が凄くいいってだけか
もしれないし。」

「青羽……。」

青羽は何時もの笑顔を浮かべると、そう言って二人を宥めすかした。

「人間誰にだって人に話したくないことなんてある筈だし、秘密の
一つもあった方が面白みがあるってもんでしょ。細かいことは気に
しない気にしない！」

青羽の言葉に二人も毒気を抜かれたのか、先程までのどこか刺々し
い雰囲気が無くなっていた。青羽が先頭を進み、戒、ノーマの順に
ついて行く。だがノーマの顔はどこか暗く沈んでいた。

（青羽はああ言ってくれました、ですが本当は……私は……
。）

ノーマには二人に行っていない秘密がある、だがどうしてもそれを
言うことが出来なくなっていた。青羽と出会って当初は、特に知ら
れても問題はないと思っていた。だが、今はこの二人に知られるこ
とが怖いと思っている。なぜかは分からないが、この二人、特に付

き合いの長い青羽には知られたくないと思っってしまった。

（ですが……一体何故私はこのようなことを？ 何故、青羽に……）

ノーマが心の中で自問自答していると、坑道の中でも比較的開けたところに出た。するとその時……

「どうも、やっぱりここに来ましたねえ。」

「えっ？」

「アレはッ！」

「ッ！？」

3人が入った場所から少し離れたところ、向かい側の壁の3人が立っているところより少し高いところの坑道に一人の男性が立っていた。灰色の髪と瞳、そして180cm以上はあろうかと言う長身が特徴的な男性だった。だが3人が何より注目したのは彼の服装。彼が着ているのは前をファスナーで閉じている特徴的な黒いスーツ、それは先日3人が戦った相手である恭司と同じ服装であった。

「あんた、隠密調査部の！？」

「御名答。私、隠密調査部の赤沢 晃と申す者です。以後、お見知りおきを。」

そう言って晃は3人に向かって一礼をした、だがその態度とは裏腹に彼から滲みでてる雰囲気にはこちらを馬鹿にしているのが容易に感じ取れた。

「何であんたがここにいの？ 何が目的？！」

「まあ今回の事は特に目的があった訳ではないんですけどねえ、強

いて言えば・・・恭司さんを傷つけた方達に興味があったから、
と言ったところでしょうか？　ねえ、怜奈さん。」

「「ッ！?!?」」

晃がそう言って青羽達の後ろの方に声をかける。それにつられて3
人も後ろを向くと、そこには黒いスーツ姿の女性が立っていた。

「あ、あんた何時の間に?!」

（そんな、さっきまで後ろに気配はなかった。それなのに・・・ッ
!?!）

「・・・・・・・・・・。」

3人が何時の間にか後ろに立っていた女性――奄美　怜奈――に驚
いていると、怜奈は無言で懷から1枚の緑色のカード『チェンジ・
ケルベロス』を取り出した。それを見て身構える青羽達、一方の晃
も怜奈同様に懷から赤い『チェンジ・ケルベロス』のカードを取り
出した。

「流石の怜奈さんも、恋人の恭司さんを傷つけられて怒り心頭と言
ったところですか。」

「恭司を傷つけた・・・・・・・・許さない。」

そう言いながら二人はバックルにカードを装填した、それに青羽達
もそれぞれ変身の準備をした。

「外のクイーンローチもあんた達が倒したの?」

「?　何の事やら・・・私達はこちら側から鉱山に入ってきたん
ですよ。クイーンローチなんて知りませんですよ。」

（あれは彼らじゃなかったのか?　じゃあ一体・・・。）

「戒、今は考え事をしている場合ではありません。行きますよ。」

ノーマがそう言うと同時に、その場にいた全員が変身する。

「「変身！」」

「……変身。」

「へへんしん！」

《《Turn up》》

《《Change》》

《《Open up》》

全員が変身すると青羽達はブレイド・ギャレン・カリスに、そして
怜奈は緑色の戦士【仮面ライダーランス】に、晃は赤い戦士【仮面
ライダーラルク】に変身していた。ランスはブレイド・カリスと、
ラルクはギャレンと戦い始める。

「ガアアアアアアアッ！」

「チィッ！」

「クッ！」

ランスは変身前の物静かさとは全く異なる、野獣のような叫び声を
あげて二人に突っ込んでいく。ブレイドとカリスは気押されながら
も何とかランスの攻撃をかわすと、反撃しようとする。だがランス
は素早い身のこなしで二人の攻撃をかわすと、ランスラウザーを振
るって二人に攻撃する。

「グウッ！？ クッ、さっきと雰囲気全然違うじゃん、なによこれ
！」

「おそらく刃物を握ると性格が変わるタイプの奴でしょう、何にせ
よこの相手も尋常ではない強さです。」

ノーマがそう言う間にもランスはラウザーを縦横無尽に振るって、ブレイドとカリスに攻撃を仕掛けていく。

「ハアッ、フンッ、グルアア！」

「セイッ、クッ！」

「ハッ、チィッ！」

武器のリーチが違う上に素早い動きをするランスに、ブレイドとカリスは終始翻弄されていた。

一方ギャレンとラルクの戦いは接戦だった。どちらも射撃をメインにして戦う者同士であり、さらに実力も近いからかどちらも一向に譲らない。このままでは埒が明かないとギャレンがラルクに接近戦を挑みに行く。

「ハッ、ティッ！」

「おっとっと、そう来ますか。だったら。」

そう言うラルクはラルクラウザーの弓部を折り畳んで剣状にする
と、ギャレンに斬りかかる。

「何っ?!」

「迂闊でしたねえ、貴方のラウザーと違って私のラウザーは接近戦にも十分に対応できるんですよ。」

そう言いながらもラルクは攻撃の手を緩めず、ギャレンは防戦一方になっていく。ランスとブレイド・カリスの戦いは、次第にランスの動きに二人が慣れてきたことと元々数の上でブレイド達の方に分があった為、ランスが圧される形となった。

「ノーマ、あんた戒の援護に行って！」

「そんな、大丈夫なんですか？」

「動きにも何とか慣れてきたし、あっちが片付けばこっちも楽になるってもんでしょ。」

「分かりました、私達が戻ってくるまで何とか持たせてくださいね！」

「当然！」

そう言うとかリスはギャレンの方に向かっていき、ブレイドはそのままランスと斬り合っていく。

「お前が、桐沢 青羽！」

「何で、あたしの事を！」

「お前が恭司を傷つけた。お前が、私の恭司を！！」

「チィッ！」

ランスはそう叫ぶと、先程よりも一層攻撃の激しさを増した。ブレイドはランスの気迫に圧倒されかけるが、なんとか適度に距離を保ってランスの攻撃を的確に捌いていく。距離を詰められたランスはラウザーで斬り付けるのを止め、キックでブレイドを強引に引き剥がしにかかる。

「ハアアア！」

「グウッ！？」

蹴りによって広げられた距離は、ブレイドの攻撃範囲外でありランスの攻撃範囲内であった。このチャンスを逃すまいと執拗にブレイドを追い込んでいく。
その頃ラルクとギャレン・カリスの方は完全にラルクが圧されていた。

「ハッ、セリヤッ！」

「セッ、ヤッ！」

「おっと、チィ……これは。」

元々接近戦でなんとか戦いにおけるアドバンテージを得ていたラルクである、ここにカリスが加わった事で完全に不利になっていたのである。

次第にブレイドとランス、ラルクとギヤレン・カリスがお互いに合流した時、どこからかアラームの様な音が聞こえてきた。

「？ な、何？」

「ん？」

それを聞いたとたんラルクが攻撃の構えを解いた、ブレイド達はそれに訝しげな顔をする。

「どうやらここまでの様ですね。怜奈さん、引き上げですよ。」

「……………」

「早くいきますよ、元々これは任務として来てるわけじゃないんですから。それに……恭司さんも待ってますよ？」

「ッ！！？……分かった。」

ランスは最初撤退することを渋っていたが、ラルクが放った一言が決め手となり撤退を決意する。ランスが一足跳びで坑道の出口の方に向かい、ラルクもそれに続く。そして二人は坑道から出ていく前に一度ブレイド達の方を向くと……………

「次に会った時…………必ず…………倒す。」

「あ、そうそう。恭司さんから伝言を承ってたんでした。何でも次にあなた達に会ったらお礼がしたいとのことです、新しい必殺技を

用意して待っている。」

そう言う二人は坑道から出ていき、後にはブレイド達だけが残されていた。3人はしばらくその場で二人が出ていった坑道を見つめた後、変身を解いて元の姿に戻っていた。

「あ、危なかった。もうちょっと長引いたらヤバかったかも。」
「これが相手の実力と言うことですか、どうやら厄介な敵を作ってしまったようです。」

「まあ、もうこうなったら何でも来いって気もするけどね。」

その戒らしからぬ言葉に、青羽とノーマは一瞬呆然とした。だがすぐに青羽は笑い出し、ノーマも口元を手で隠して少し笑った。

「それもそうよねえ、もうここまで来ちゃったんだもん。こうなれば何でも来いって感じよね！」

「さ、先へ進みましょう。出口は恐らくすぐそこですよ。」

ノーマの言葉に青羽と戒は頷くと、先程晃達が出ていった行動へとバイクを転がして歩いて行く。向かうは次の街……ナティ。

第14話 隠密調査部（後書き）

と言う訳で第14話でした。今回は隠密調査部との戦いの他に、再びチラッとキバの影を見せました。

現在この『剣&キバ』のキバ編を構想中です。まだ完全にまとまってはいませんが、全体的にはこの『青く輝く炎』とザッピングさせる物語にする予定です。早い話が今回の話のように、どちらかの小説の登場人物が起こした行動が、もう片方の小説の話に影響を及ぼす話にする予定です。

感想などもお待ちしております。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第15話 宙に浮く牙（前書き）

どうも皆さん、黒服です。今回は遂にキバに先駆けてファンガイアが登場します。

第15話 宙に浮く牙

街道

鉦山を抜けてから2日後、青羽達は一路ナティへと向かっていた。鉦山では残念なことに伊坂と利香に関する情報を得ることが出来なかったが、3人は諦めずに進んでいく。今度こそ伊坂と利香に関する情報を得ることが出来ると信じて。

「ん？・・・あ！？ねえアレ！」

3人がしばらくバイクを走らせていると、街道近くの川辺に人が倒れているのを青羽が見つけた。3人は急いで倒れている人に近付いて行く、が・・・

「これって・・・人？」

「少なくとも見た目は人ですね。」

「しかし、これは・・・。」

3人が人影に近付くと、おかしなことに気付いた。倒れている人は確かに服を着ている、それはいい。だが問題なのは、人の体に一切の色素が無い事だった。倒れている人はまるでガラス細工のように透き通った体をしていた、思わず青羽がそれに触れてみると、人の形をしたそれはいとも簡単に砕けてしまった。

「これ・・・アンデッドがやったのかな？」

「こんなやり方をするアンデッドなんて聞いたことが無いけど。」

「かと言って人間業とも思えませんね、一体どうやったのか・・・。」

しばらく3人が考え込んでいると、青羽が口を開いた。

「ねえ、これって『グウ~~~~』……………」

「青羽……………」

「あ、あははっ、そう言えばそろそろお昼の時間じゃない？そりやあお腹もなるってもんよ！」

青羽が神妙な顔をして口を開くと同時に、彼女の腹が盛大になった。青羽は頬を赤く染めながら笑ってその場をごまかそうとするが、ノーマと戒、二人のジトつとした視線にいたたまれなくなり素直に「ごめん」と謝った。

「ハア、まあ確かにそろそろ昼時ではありますね。軽く腹ごしらえでもしますか。」

「そうだね、それがいいかも。」

「にしても青羽にはもう少し空気を呼んでもらいたいところです。よりにもよってあの場で腹の虫を鳴らす事も無いでしょうに。」

「い、いや〜ホントごめんね、正確な体内時計で。」

そう言いつつ3人はその場を少し離れて、携帯食料で簡単な昼食を取り始める。そしてその最中に、青羽が先ほど言おうとしていた事を口にする。

「それでさっきあたしが言おうとしてた事なんだけどさあ。」

「ああ、何だったんだい？」

「あれってどう考えたってアンデッドのやり方じゃない気がするんだよねえ。」

「その意見には同感ですが、かと言ってこれと言って他にそのような殺し方をする相手に心当たりはありませんよ。」

「それなのよねえ……。」

青羽とノーマがそう議論していると、戒がそれに加わった。

「そう言えば、僕こんな話を聞いた事があるよ。『宙に浮く牙』って言うのがあって、それに刺されると体が透明になって死ぬって。今回の事とあながち無関係とも言えないかも。」

「あ！それあたしも聞いたことある。」

青羽はルーニオリフの宿の食堂のテレビで流れていたニュースを思い出していた、あの時は特に興味もなく聞き流していたが、こうして目の前でそれと関係のありそうなことが起こると流石にいろいろと考えてしまう。

「考えても仕方ありません、この事はとりあえず頭の片隅にでも置いておくとしましょう。」

ノーマがそう言うと、戒も頷いて後片付けを始めた。青羽だけは若干納得がいかなそうな顔をしていたが、すぐに食事を済ませると後片付けをしてバイクに跨っていった。

街道近くの林

青羽達がバイクに跨って街道を走りだしたとき、3人の姿をジッと見つめる者がいた。林の木々に隠れたその男は、見た感じは普通の旅人と大差はない。だが彼の纏う雰囲気は普通ではなかった。どこか不気味な雰囲気醸し出す男に、彼の周囲からは生き物がいなくなっていた。青羽達がその場を離れてしばらくして男は立ち上がると、青羽達の後について行った。普通バイクを相手に走って追いつ

くことなどできるわけがないのだが、男は走って追いかけようとする。するとその時、男の体に変化が起きた。顔の下半分にステンドグラスの様な模様が現れたと思ったら、男の姿は揺らいで次の瞬間にはそこにいたのは人間の姿をした男ではなく、羊を彷彿とさせる怪人・・・シープ・ファンガイアになっていた。男はファンガイアの姿になると、恐るべきスピードで3人を追いかけて行った。

夜・街道近くの林

青羽達は日が沈む頃に、街道近くの林にて野宿することにした。青羽が林の中で採ってきた食べられる野草と捕まえた鳥からスープを作って、それをノーマがサポートしている。その最中、青羽は奇妙なモノを感じていた。

（何だろう・・・なんか嫌な予感がする。）

試しにノーマと戒の方にも視線を向けてみると、二人も同じようなものを感じているらしい。何時もより落ち着かないといった感じの顔をしている。

「ねえ・・・。」

「貴女ですか？」

「どうやら3人とも感じてるらしいね、何かを。」

第6感とでもいう奴だろうか、3人が同じ感覚に陥っているとなればこれは気のせいでは済まされない。だが一体何があるというのか・・・。

「気にしてもしようがないわ。さ、出来たから食べよ！」

青羽の言葉に、とりあえず二人はこの違和感を無視して食事を始めることにした。

食事を始めて数分、青羽がふとある事に気付く。

「そう言えばさあ、さっきの透明になっちゃった人……。」

「あの人がどうかしたのかい？」

「あの人の服に一瞬触ったんだけどさあ……なんか暖かかった様な気がするんだよねえ。」

「それが、何か？」

「つまりさあ、もしあの人が元は生きてる人間だったとしたら……。」

青羽はそこで一瞬言葉を区切ると、重苦しい雰囲気を出しながら口を開いた。

「あれって、まだ殺されてすぐだったってことなんじゃ……。」

「と言う事は……。」

「まだ犯人が近くにいた……可能性も……。」

その事に気付いた3人の背筋に冷たいモノが流れた、もしそうであったとすれば下手をすれば自分達もアレの犯人に襲われていたかもしれないのだ。さらに悪い事は、今まさに3人が感じている違和感がそれに関することかもしれないと言うことだ。3人ともそれに気付いたとたん急に無口になり、周囲に妙な気配でもないかと辺りに気を配り始める。

「……ま、まあ、気のせい……よねえ？ あは、あはは……。」

青羽はそう言って場を和ませようとするが……

その瞬間、近くで何かが動く気配がした。

「「ッ!?!?」」

3人の近くの茂みが急に動き出した事で、青羽達は飛び上るほど驚いた。実際青羽は喉元まで悲鳴が上がってきたほどだ。

「な、何?」

「……誰かいるのですか?」

ノーマが音のした方に声をかける、するとそこから一人の男性が姿を現した。どうやら旅人らしいその人物の登場に、青羽は心から溜息を吐いた。少なくとも相手が人間であることが彼女を安心させたらしい。その為青羽は不用心に男性に近付いて声をかけようとした、だが……

「青羽、待ってください。」

「ん?どうしたのノーマ。」

「あの男性、妙だと思いませんか?」

「妙って……何が?」

「彼の持ちモノです。」

ノーマは男性の持ちモノに違和感を感じていた。この近くには街も何もない、それなのにこの男性は着ている服以外は何も持っていない。携帯食料すら持っている様子が無いこの男の様子に、青羽も次第に警戒心を露わにする。

「あんた、一体何者?」

「少なくとも、ただの旅人じゃないだろうことは確かだね。」

3人の様子に、男は気味の悪い笑みを浮かべると……

「ッ!？」

「なっ?!」

「これは……っ!」

青羽達の目の前で男はその姿を、シープファンガイアに変えた。それに3人は衝撃を受けた。

「な、何コイツ!？」

「上級アンデッドか？」

「いえ、コイツはアンデッドではありません!」

「じゃあ一体、ッ!？ノーマ、危ない!!」

3人がファンガイアに驚いていると、青羽は背筋に寒気を感じた。咄嗟にその方向に目を向けると、今まさにノーマに突き立てられようとしている、宙に浮いた1対の牙があった。それを見た瞬間、青羽はノーマを突き飛ばし、その直後に牙が一直線に飛んで地面に突き刺さった。恐らく青羽の気付くのが一瞬でも遅れていたら、あの牙がノーマの首筋に突き刺さっていただろう。そしてその後は……、そこまで考えてノーマはドツと冷や汗が吹き出てきた。

「あ、青羽……ありがとうございます。後一瞬でも遅れていたら、私は……。」

「気にしないで、それより向こうはやる気満々みたいだし、二人ともいくわよ!」

「「変身!」」

《《Turn up》》

《Change》

青羽達は同時に変身すると、即座にファンガイアを取り囲んだ。これには単に少数の敵に対する包囲殲滅を狙ったモノではなく、お互いの背後に気を配れるようにとの配慮でもある。先程の光景を見た3人は、相手がこちらの背後からノーモーションで一撃必殺級の攻撃をしてくると考えたのである。

「デエエエイ！」

「ハアアアア！」

ブレイドとカリスがファンガイアに斬りかかっていき、ギャレンが射撃で攻撃する。最初は3人の連携に圧されていたファンガイアだが、次第に慣れてきたのか反撃をしてくるようになった。しかもただ腕で殴りかかるだけではなく、何処から取り出した剣や銃で攻撃してくるようになったのである。

「チッ、結構やるじゃん。」

「やはり、アンデッドとは違いますね。あんなのは見た事がありません。」

「それでも、敵だってことはハッキリしてるけどね。」

3人がそんな事を言っていると、突然ファンガイアが戦い方を変えてきた。先程までは普通に戦っていたのだが、状況がジリ貧であると感じたのか超高速で動きまわり始めた。そしてそのまま高速で頭突きなどをされ、流石の3人もマズイと感じ始める。するとブレイドが1枚のカードを取り出した。

「そっちがスピードでくるってんなら、こっちも相手になるわよ！」
《Mach》

ブレイドは『マッハ・ジャガー』のカードをラウズして、ファンガイアを超えるスピードを発揮。そのまま何度もファンガイアに斬りつけていく。

「フッ、ハッ、デヤアッ！」

何度もブレイドの攻撃を受け、遂に通常のスピードに戻ってしまう。しかもダメージが大きいからか、動きそのものが先程よりも鈍い。それを好機とみて、3人はそれぞれ2枚カードをラウズする。

《Kick Thunder》

《Drill Tornado》

《Drop Fire》

《Lightning Blast》

《Spinning Attack》

《Burning Smash》

3人の2枚コンボ、ブレイドの『ライトニング・ブラスト』、カリスの『スピニング・アタック』、ギャレンの『バーニング・スマッシュ』が発動する。

「ハアアアア、デヤアアアア！」

「フウウウ・・・ハアアアア！」

「ハッ、セリヤアアアア！」

3人の必殺技が、同時にファンガイアに炸裂する。ファンガイアは苦しげな叫びを上げると、ステンドグラスのようになって砕け散ってしまった。相手を倒したと言うことを確認した3人は変身を解除して、警戒しながらも砕け散ったファンガイアの下へと近づいて行っ

た。

「ねえ、これ、一体何だと思う？」

「・・・・・・分からない。」

「少なくともこんなの今まで見たことも聞いたこともありません、皆目見当が付きませんね。」

3人はしばしその場で考えていたが、一向に答えが出てこないのと、とりあえずもう休むことにしてその場を立ち去っていく。後に残されたのは砕け散ったステンドグラスの様なファンガイアの残骸、そして・・・・・・

3人が立ち去った方向と、砕けたファンガイアを見つめる一人の男だけだった。

第15話 宙に浮く牙（後書き）

と言う訳で第15話でした。今回登場したシープファンガイアは、スピードが自慢のファンガイアとのことだったのでブレイドのマッハで対抗させてみました。マッハで得られる能力はあくまで高速移動だったのですが、ディケイド本編でディケイドが変身したDブレイドは攻撃なども高速化されていたのでそちらを使わせてもらいました。実際どうなんでしょうね？ ブレイド本編ではコンボに組み込む以外の使用をしてないですからねえ、一応バイクにラウズしてはいますけど。

それと最後に登場した人物、誰だか分かりますか？ あまり細かい描写をあえてしなかったのですが・・・。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第16話 風を読む女性（前書き）

どうも、黒服です。今回新たに新キャラが登場します。

第16話 風を読む女性

港町・ナティ

青羽達がファンガイアを倒してから2日後、3人は港町のナティに着いていた。海が近いだけあって街の入り口にも爽やかな海風が流れて来ている。

「ん〜、はあ、いい風!」

「とりあえず宿を取って荷物でも置いてこようか、今後の方針を決めるにしろなんにしろ、行動の拠点は必要だし。」

青羽がしばし風を全身で感じていると、戒がそう提案してきた。それに青羽とノーマが頷くと、3人はバイクを走らせてこの街の宿へと向かっていった。

宿

あれからしばらくして、青羽達は宿に部屋を借りていた。ちなみに借りた部屋は複数人用の部屋を一つ借りている、これは下手に二人部屋と一人部屋に分けるよりもかかる費用が少ないからである。当初は戒が一人だけ別に部屋を取るつもりだったのだが、青羽とノーマの二人に『無駄に金を使うな』と言われた為、今では3人以上が泊まれる部屋を借りるのが普通となっている。

「さってと、まずは協会ね。」

「もしダメだったらBARに行くと言う事で。」

「よし、それでいこう。」

これからの行動を決めると、3人は宿を後にしていった。

数時間後・飲食店

現在の時間は正午、青羽達は海辺の近くにある飲食店で昼食を取っていた。店の窓は全開になっており、潮の香りを含んだ風が店内に流れ込んでくる。その風を感じながらの食事は非常に穏やかで心安らぐ時になる……筈だったのだが……

「……………」

「ねえ戒い、頼むからその貧乏揺すり勘弁してくれない？」

「気持ちちは分かりますが落ち着きましょう、食べれば少しはイライラも治まりますよ。」

現在戒が非常に腹立たしいと言った雰囲気醸し出している為、青羽達の心が安らぐことはなかった。もともと二人も戒に怒りを収めるように言うてはいるが、彼の気持ちも分からなくはない。何せ協会・BARと伊坂やサイズに関して情報収集を行ったものの、全くと言っていいほど何も得られなかったのである。一刻も早く利香を助けたいと思っている戒からしてみれば、流石に我慢の限界であった。

「とはいえ、やはり手掛かりが何もないと言うのは何とも痛いですね。せめて伊坂の他の目的が分かればいいんですけど……」

ノーマの言葉を聞きながら、青羽は窓の外を眺める。なんとなく清々しい天気である、気温も申し分ないしこんな時でなければ思いつきり海水浴といきたいと青羽は考えていた。だが現状それが許される

筈も無く、青羽は珍しく深いため息を吐いた。とその時、青羽が今いる場所の事を考えていると、ふとある考えが浮かんだ。

「ねえ……あたし達が今いる場所ってナティって所だよねえ？」
「今更何を言ってるんです、そうに決まってるじゃないですか。」

ノーマが呆れながら青羽にそう返すと、青羽は『ナティ、ナティ・・』と呟きながら懷から一冊の手帳を取り出して、何かを探し始めた。そしてあるページで何かを探していた青羽の指が止まる。

「ああ、やっぱりかぁ〜どこかで聞いた事のある名前だと思ったら・・。確かにこの人に頼るのも手なんだけどなぁ〜、う〜んでも・・。」

青羽はそんな事をブツブツと呟きながら、戒の方に視線を向ける。戒はやや訝しげな表情をしながらも青羽の目を見つめ返した、その瞳からは青羽に最後の希望を託すかのような感情が見受けられた。ここまで収穫ゼロだったのだから、今は藁にでも縋り付きたい気分なのだろう。それを見て青羽も決意し、口を開く。

「あたしの知り合いにね、物捜しがすごく得意な人がいるの。で、その人が住んでるのが今あたし達がいるこのナティってわけ。」

「その人のところに行けば、伊坂の居場所が分かるのかい？」

「多分・・。捜す事に関しては本当に信用できる人だから。」

青羽がそこまで言うのと、ノーマが気になっていた事を質問する。

「青羽はの方が苦手なのですか？」

「うっ！ な、何でバレたの？」

「見れば分かります、どこか言い辛そうでしたし。しかし珍しいで

すね、貴女でも苦手な人がいるとは思いませんでしたよ。」

「んまあ・・・ねえ、嫌いってわけじゃないんだけど・・・どうにも苦手って言うかペースを乱されまくるっていうか。」

二人がそんな話をしていると、戒が立ちあがって青羽とノーマを促した。伊坂の、利香の居場所を知ることが出来るかもしれないのだ。彼としては急ぎたくもなるであろう、彼に急かされて青羽とノーマは席から立ち上がり、勘定を済ませてから青羽に案内されて街の中を進んでいった。

街はずれ

青羽の持つてる手帳に書いてある地図に従って進んでいくと、街はずれの小高い丘の上に来た。そこには一軒のログハウスが建っていた。

「あそこに、物捜しの得意な人が？」

「多分ね、あたしはここに来た事ないからこれに書いてある地図頼みだけど。」

そう言ってログハウスに近付いて行く青羽、戒とノーマがそれについて行くと突然青羽が立ち止まった。

「あっ！あのさあ言い忘れてたんだけど、これから会う人って放浪癖って言うかフラツとどこかに旅に出ちゃう癖があるのね。だからもし居なくても怒らないで・・・ね？」

「ふう・・・もういいよ、何でも。今はホントに藁にも縋りたい思いなんだし。」

そんな会話をしながら3人は家に近付いて行き、遂に家の前に来た。青羽がドアの近くについているインターホンを押すと、中から女性の声が聞こえてくる。

「はい！ 今行きます。」

そしてすぐにドアが開いて、中から20代半ばと思われるゴスロリ風の服装の女性が出てきた。ゆるくウェーブのかかった紫色の髪で、どこか不思議な雰囲気を纏った女性である。唯一目を引くのは、右手の人差し指に複雑に巻かれた赤い紐だろうか。その女性は青羽の事を見ると、満面の笑みを浮かべて青羽に抱きついてきた。

「あらー青羽ちゃん、お久しぶりねー！」

「ど、どうも……。」

突然の事態についていけないノーマと戒を置いて、青羽は何時になくワタワタと慌てている。だが女性の方はそれを気にすることなく青羽の顔に頬を擦り寄せてきた、それに青羽はさらに慌てる。

「最後にあったのは7年前だったかしら、大きくなったわねえ。」

「あの……寧々さん、ちょっと……。」

「おまけにこんなに美人さんになっちゃってもうー、チュ！」

「あわわわわ……。」

その後も女性……寧々のスキンシップは続き、青羽がそれに僅かながら抵抗していた。だが何時までもそうしては話が進まない、と、ノーマが言い辛そうにしながらも声をかける。

「あ、あの……貴女は青羽とどういったご関係が？」

「ああ！ ごめんなさいねえ、久しぶりに青羽ちゃんに会ったもん

だから嬉しくなっちゃって。青羽ちゃんのお父さんと知り合いで、その関係だね。」

「はぁ・・・あ、私は「仮面ライダーカリス、ノーマ・イクスちゃんね。」・・・ッ!？」

「それで、君が仮面ライダーギヤレンの大神 戒君・・・でしょ。」
「どうして・・・僕達の名前を？」

名乗ってもいないのに名前を指摘され、あまつさえ仮面ライダーとしての名前まで言い当てられた事にノーマは驚愕に目を見開く。戒も呆然としながら理由を尋ねると、寧々は答えずに・・・

「うふふ、私は神崎 寧々。宜しくね!」

そう言うとき寧々は3人を家の中に招き入れた。

寧々の自宅

「さあ、どうぞ。美味しいお茶だったら出せるから、待っててね。」

そう言うとき寧々はキッチンに引っ込んでいき、青羽はそれをなんとも言えない顔で見つめ、ノーマと戒・・・特にノーマはこれでもかと言うくらい警戒心バリバリで寧々の後姿を見ていた。青羽はそれに顔を引き攣らせながら、彼女を宥めにかかる。

「あのさノーマ、寧々さん決して悪い人じゃないからそんなに警戒する必要はないわよ？」

「信じられません。何故彼女は私の名前や、私が仮面ライダーカリスである事を知っているのですか？ 今まで彼女に会った事はなかった筈です、それなのに・・・。」

青羽とノーマがそんな会話をしていると、寧々が紅茶の入ったカップを人数分持ってきた。

「はい、どうぞ。」

「あ、どうも。」

青羽は素直に出されたカップに口をつけるが、ノーマはカップには手を付けずに寧々に質問をした。

「その前に一つ聞きたい事があります。何故貴女は私の名前と、ライダーの名前を言い当てられたのですか？ 私は一度も貴女に出会ったことはない筈です。」

「僕も気になります、一体どうやって？」

ノーマと戒が寧々に尋ねると、寧々は何も言わずに部屋の中にある大きな窓へと向かっていき、それを開け放った。部屋の中に海から流れてくる風が吹き込み、部屋の中にいた全員の髪を飛ばしていく。寧々は風で乱れた髪を軽く整えると、右手の人差し指を立てながら顔の近くまで上げていく。その指に巻かれた赤い紐は当然風で煽られている。

「風よ……。」

「風？」

「そう、風は色々な事を教えてくれる。人の欲望、悲しみ、憎悪、恐れ……、喜び、愛情、嬉しさ……色々と、ね。本当は私今頃まだ旅の途中だったのよ、でも風があなた達がこの街に近付いてるって教えてくれたからもしかしたら家に寄って行ってくれるかもって、急いで戻ってきたんだから。」

そう言って微笑みながら寧々は3人の方を向く、その笑顔はどこか慈愛を感じさせるものだった。

「一体何ですかそれは？普通の人間にそんな能力は……。」

「うふふ、むかし嶋って言う人に鍛えてもらったの。具体的に言う、脳の使われていない部分を活性化させて鍛えた、超能力みたいなものね。もっとも、嶋さんにはまだ全然及ばないけど。」

寧々はそう言ってまた軽く微笑むと、戒の方を見た。その際に寧々の雰囲気ガラッと変わった。先程はどこかほんわかとした雰囲気、を醸し出していたが、今はどこか凜としたものを感じさせる。その変わりように戒は思わず一瞬たじろぐ。

「あなた達の……と言うか貴方の聞きたい事は分かってます。あの孔雀のアンデッド……伊坂の居場所と、貴方の恋人、利香さんについてですね。」

「えっ！ あ、ああはい、そうです。何か……分かりますか？」

戒に尋ねられると、寧々は目を閉じて再び右手を上げる。そして風を感じながら彼女は口を開いた。

「伊坂が向かったのはここから北に行ったところ、山に近い街『カフケ』。」

「目的とかは、分かりますか？」

「んー、何かを倒そうとしている。その為にただでさえ強力なアンデッドをさらに強化する為に、ライダーシステムが必要だったみたいね。あれには通常のライダーシステムにはある筈のリミッターが外されているみたいだわ、だから強い、カテゴリーAの力を最大限に引き出している。」

通常のライダーシステムにはアンデッドの力を一定のところを抑える為のリミッターが取り付けられている、そうしないと装着者の体と心に多大なダメージがいく場合があるからである。だがサイズにはそれがないと言う、それが意味するところはつまり……

「利香は、利香はどうなるんです!？」

「このままいくと良くて廃人、最悪彼女自身が耐えきれなくて死亡する可能性もあるわね。」

「そ、そんな……。」

「でも大丈夫、貴方が思っているよりもずっと彼女は強いわ。現に今もカテゴリーAの力に必死に抗おうとしている。」

寧々が出した結論に一瞬絶望しかける戒だが、彼女本人の口からしばらくは大丈夫であるという言葉が聞かされる。戒がそれに安堵すると、寧々はさらに言葉を続けた。

「多分彼女が装着者に選ばれたのもそれが理由なのかも、彼女はアンデッドとの融合係数が普通の人の倍以上あるわ。だからあのカテゴリーAの力にも耐える事が出来る。」

「伊坂を倒せば、利香さんを解放することが？」

ノーマが寧々に質問すると、彼女は頷く事でそれに答えた。青羽はそれを見てガツポーズをし、戒は決意を新たにした感じに拳を握りしめた。だが……

「でも気をつけて、何かは分からないけど利香ちゃんの近くに非常に強い悪意を感じる。孔雀のアンデッドを封印しても油断しない様にね。」

寧々の言葉に首を傾げる3人だが、とりあえず頷いておいた。相手

はあの伊坂だ、何を仕込んでいてもおかしくはないだろう。

それからしばらくして、3人は寧々の家から出ていった。寧々からは『もう少しゆっくりしていけばいいのに』と言われたが、利香を助け出すには少しでも早い方がいいと言う事で明日出発する準備を整える為にお暇することにしたのである。もとより漸く掴んだ伊坂の手掛かり、しかもまだ余裕があるとはいえ利香には時間制限がある。一刻も早く助ける必要があったのだ。

「近くに來たらまた寄ってね！ もっとも、もしかしたら旅の途中でバツタリ会うかもしれないけど。」

「色々ありがとうございました寧々さん、利香を助け出せて、出会う事が出来たらその時はゆっくり。」

「楽しみにしてるわね、青羽ちゃん。」

そう言って寧々は再び青羽に抱きついてきた、だがそれは先程の抱擁とは違い、包み込むような優しさが感じられるものだった。青羽も今度は抵抗せず、黙ってそれを受けている。その後青羽達が去っていったあとを見ながら、寧々は言葉を紡いでいく。

「頑張ってね、青羽ちゃん。あなた達だったらどんな困難も自力で乗り越えるって信じてるわ。」

そう言うと寧々は懷から1枚のカードを取り出した、それにはAの文字と一頭の頭に角を生やした馬の絵が描かれていた。

（ね、そう思うでしょ？ ユニコーン。）

その時、寧々は近付いてくる人の気配を感じた。だが寧々はそれを感じても一向に慌てない、彼らが来ることも分かっていたから。

「待ってたわ。さあどうぞ上がって、美味しいお茶なら出せるわよ。」

そう言って寧々が微笑む先には二人の人物・・・純白の髪にコバルトブルーの瞳をした男性と、セミロングの黒い髪に右目を包帯で覆っている女性の姿があった。

第16話 風を読む女性（後書き）

と言う訳で第16話でした。寧々は物語の中では案内役のような役割です、時に出て来ては青羽達を導くキャラになると思いますよ。彼女の口から嶋さんの名前が出ましたが、後々登場する予定です。お楽しみに。

最後の最後でキバ編の主人公が登場しました、この後彼らがどう行動したのかはキバ編をお楽しみに！

それでは。

新キャラ設定（前書き）

今回は第16話で登場した寧々の説明と、彼女の変身するライダーの設定。そして今更ながらこの物語の大まかな世界観を説明します。

新キャラ設定

神崎 寧々（かんざき ねね）／仮面ライダージャベリン…24歳・女

ナティに住んでいるちょっと風変わりな女性。緩くウェーブのかかった紫色のロングヘアーを持ち、ゴスロリ風の服を身にまとっている。性格はのんびりマイペースで、大抵の人物は彼女と話しているとペースを乱される。

特徴は右手の人差指に複雑に巻かれた赤い紐で、嶋と言う人物に鍛えられた『風を感じて様々な事を知る』能力を持っている。普段はふわふわとした印象しかないが、風を読む時などは凜とした雰囲気気を放ち、また時に鋭い洞察力を見せて周囲を驚かす事もある。

仮面ライダージャベリン

オーダーメイドのライダーシステム。外見はランスの緑の部分が銀色になりアーマー自体の色もどちらかと言うと白に近い。ただし肩アーマーはブレイドの物と同様の形状になっており、頭部はグレイブと同系の色違いとなっている。ダイヤ型の複眼の色は赤で、武装はランスラウザーと同型のジャベリンラウザー。またラウズアブゾーバーを持っている為、ジャック・キングフォームにフォームチェンジ可能。

・高機動形態…ジャックフォーム

ジャベリンがアブゾーバーでカテゴリーJとQのカードで2段階変身を遂げた形態。全ての能力が強化されまた、グリフォンの能力が反映され背面に出現した巨大な翼『オリハルコンウイング』で自由自在に空を飛ぶ事が出来る。また武装のジャベリンラウザーも刃の部分が長くなる。

・最強重装形態…キングフォーム

ジャベリンがカテゴリーKの力で2段変身を遂げた姿。全身に金色の装甲が追加され、胸部にはカテゴリーKの絵柄・スレイプニルの紋章が描かれている。あくまでカテゴリーKと融合しているだけだが、スペックは全てのライダー・アンデッドを凌駕するほど。武装はジャベリンラウザーに刃の部分が持ち手の方向に伸びて大剣の様になった重醒槍キングラウザー。

ワイルドA『チェンジ・ユニコーン』…ジャベリンバツクルの装着者を仮面ライダージャベリンに変身させる

ワイルド2『スタツブ・ヨルムンガンド』…ジャベリンラウザーの刃の切れ味を増す

ワイルド3『ナツクル・オーガ』…パンチの威力を増す

ワイルド4『ストライク・アルミラージュ』…攻撃力を一点集中

ワイルド5『ヒール・ウロボロス』…回転力を加えて踵落しを強化

ワイルド6『シャイン・サエーナ』…光を操る

ワイルド7『コンフュ・セイレーン』…相手を混乱させる

ワイルド8『シールド・カーバンクル』…敵の攻撃を防ぐ光の障壁を発生させる

ワイルド9『ドレイン・ヴァンパイア』…相手から体力を奪う

ワイルド10『クリア・チェシャ』…透明になって姿を消す

ワイルドJ『フュージョン・グリフォン』…ラウザーのチャージ及びジャベリンのジャックフォームへの2段変身

ワイルドQ『アブゾーブ・フェニックス』…ラウザーのチャージ及びラウスアブゾーバーの起動

ワイルドK『エボリュション・スレイプニル』…ラウザーのチャージ及びジャベリンのキングフォームへの2段変身

単独カードによる技

ヨルムンガンド・スタツブ『ワイルド2』…600AP

オーガ・ナツクル「ワイルド3」…900AP
アルミラージ・ストライク「ワイルド4」…1200AP
ウロボロス・ヒール「ワイルド5」…1500AP
サエーナ・シャイン「ワイルド6」…1800AP
ヴァンパイア・ドレイン「ワイルド9」…2100AP

2枚コンボ

シャイニング・スピア「ワイルド2+6」…2400AP
シャイニング・ドロップ「ワイルド5+6」…3300AP

3枚コンボ

シャイニング・レイ「ワイルド2+4+6」…3600AP
シャイニング・リング「ワイルド5+6+8」…4400AP

カードのモチーフ

ヨルムンガンド…北欧神話に登場する、ロキの息子の大蛇
オーガ…強靱な肉体をもつ凶悪な怪物、日本では鬼と訳されることが多い

アルミラージ…頭に捻じれた角を持つ大きなウサギ
ウロボロス…自身の尾を啜えた蛇

サエーナ…フェニックスのモデルと言われる光り輝く鳥

セイレーン…歌声で人をおびき寄せる、女性の上半身に鳥の下半身を持った怪物

カーバンクル…額に赤い宝石を持ったウサギか猫の様な獣
チェシャ…『不思議の国のアリス』に登場するチェシャ猫
スレイプニル…主神オーディンが乗る8本脚の馬

寧々が持つてるカードについて

寧々が持つてるカードは全て幻獣種を封印して手に入れたカード。幻獣種を封印して得られたカードは基本的にスートが無いワイルドベスタとなる。

また幻獣種は通常のアンデッドよりも強力なので、得られるAPも通常のラウズカードより高いモノになっている。

世界観設定

1…この世界は大きく分けてエクニス共和国とダイバン連邦、そして未開拓の黒界の3つに分かれている。青羽達が住んでいるのも共和国。

2…以前は共和国と連邦は戦争をしていたが、アンデッドの存在が認知されてからはお互いに手を取り合っており交易も盛ん。

3…アンデッドの存在が一般に認知されたのは30年近く前。協会が発足したのもその頃から。

新キャラ設定（後書き）

寧々の変身するライダー・ジャベリン、出番としてはあまり多くはないと思います（汗）。扱いとしてはゲストライダーに近いモノになるかも・・・。

ちなみに寧々はキバ編にも登場します、そちらでの活躍もお楽しみに。

あと寧々が持つてるカードのモチーフの中で、ユニコーンとフェニックスの説明はあえてしませんでした。流石にこの二つは有名でしょうから。

それでは。

第17話 3局の状況（前書き）

どうも、黒服です。今回は閑話的な話ですので、ストーリー的にはそんなに進展はないと思います。でも今後のストーリーに関わる重要なシーンも・・・

第17話 3局の状況

現在青羽達はナティから出た後、カフケに向かってバイクを走らせていた。寧々から得た情報を信じて。

「それにしても、何で伊坂はよりによってカフケに向かったんだろう？」

「何で？ 何かマズイの？」

「カフケには政府軍の基地があるんですよ、協会が持っている物と同程度かそれ以上の感度を備えたサーチャーもある筈ですし。」

「そう、普通に考えたらアンデッドである彼がいけるはずが無いんだ。もし行けば即座に軍が動いて、あつという間に彼を封印してしまう。」

戒の言う通り、今彼らが向かっているカフケには政府軍の基地があるのである。そこにはダガーよりもずっと高いスペックを誇る軍用ライダー【カービン】が常駐しており、高性能サーチャーも目を光らせている。

もちろんアンデッドとしての力を使わなければ彼がアンデッドだとバレる事はないだろうが、それだと出来ることに限りがある。そんなところに伊坂が向かうのはどうにもおかしいのだが、ノーマがそれに異を唱える。

「もしかして、伊坂の狙いは軍その物なんじゃ？」

「どういう意味だい？」

「……ッ！？ まさか、伊坂の狙いは！」

「多分、サイズの性能のテストかなんかじゃないでしょうか。今まで何のアクションも起こさなかったのは、この為に無駄な消耗を抑

える為だったとか。」

確かにそれならある意味筋は通った。そうであれば伊坂が今まで大人しく、またサイズがまったく目撃されないのも分かる。

そこまで考えて3人はバイクを走らせるスピードを上げた、現状確証はないし予想が外れている可能性もあったが、少しでも急ぐに越したことはなかったからである。

その頃……

カフェ近く・森

カフェの近くにある深い森、そこを進んでいく4人のライダーの姿があった。全員同じライダーだが、協会から一般に市販されているダガーとは違う。モスグリーンの鎧に身を包み、ライフルの様なラウザーを手にしたライダー……軍用ライダー【カービン】であった。4人のカービンは森の中をひた進んでいく。

「ポイントはもうすぐだな？」

「はい！ アンデッド、それも上級のモノと思われる反応が確認されたのはこの先です。」

「よし、全員警戒を強めろ。」

彼らがここに来たのは、上級アンデッドの反応が確認されたからである。カフェには政府軍の基地があるので、この近くにアンデッドが出現した場合は彼らが対処するのが普通となっているのだ。

そうこうしていると、彼らは森の中から開けた場所に出る。周囲は

不気味なほど静かで、彼ら以外に何の生き物もないかのようにあった。

「静かだな・・・サーチャーに反応は？」

「ありません。特に感度に問題があるようには思えませんが、恐らく周囲にはいないのでは・・・。」

彼らは試験的に持ち運びできるタイプのサーチャーを装備していた、それによってアンデッドを早期発見できるようにするためである。しかし今サーチャーに反応はなかった為、彼らは敵がいらないと思い込んでいた。

今まさに死神が彼らを狙っているとも知らずに・・・

突然、最後尾を歩いていた部下が声をかけてくる、その声はどこか恐怖に震えていた。

「た・・・隊長・・・。」

「ん？　どうした？」

部下の様子に奇妙なモノを感じた隊長は、後ろに振り向いた。そこにはちょうど彼の部下が森から出てきたところで、隊長を含む3人に手を伸ばしてきた。その時・・・

彼は脳天から真っ二つに両断された。

体のど真ん中に突然一本の線が引かれると同時に、そのライダーの体は二つに分かれた。切断されたところから夥しい量の血液が噴出する。

「!?!?!? う、撃てえ!」

「敵襲?!」

「ウワアアアアッ!?!」

途端に3人が持っている【カービンライザー】からマシンガンの如く銃弾が連射される。銃撃の硝煙で周囲の視界が遮られてしまう。だが、死神には彼らの姿が手に取るように分かっていた。

「ギャアアアアッ?!」

「ひっ、うわああああ!?!」

硝煙で視界が遮られている中、隊長の耳に部下達の悲鳴が聞こえる。だが彼からは何も見る事が出来ない。

銃撃を止めてしばらくすると、風に硝煙が飛ばされて視界が元に戻っていった。

「や、やったのか?..... なっ?!」

硝煙が晴れた先、そこには最初に犠牲になった部下と同じく切り裂かれて無残な姿となった彼の部下達の姿があった。

「ど、どこだ!?!」

慌てて周囲に目を配る隊長。だが何も見えず、何の気配も感じ取れない。仮面の下で彼は恐怖による汗を大量に流していた。装備されているサーチャーで索敵を行うが、何の反応も示さず、それがさらに彼の恐怖心を掻きたてる。

「何故だ、何故サーチャーが反応しない!?!」

そのまま迂闊に動く事も出来ず、周囲に気を配っていた彼は……背後に何かの気配を感じた。すでに彼の部下は全滅している、応援を要請した覚えはない。となると今、彼の背後にいるのは……

「う……うわあああああ！」

彼は恐怖をかき消す為に叫び声を上げながらラウザーを構えて後ろを向こうとする、その先にいるであろうこの事態の犯人に対して。

だが、それが成功することはなかった。彼が後ろを振り向いてラウザーを敵に向けるよりも早くに死神の鎌が横に振り抜かれ、彼の胴体は上半身と下半身が泣き別れとなってしまう。周囲に大量の血をまきちらしながら振り向こうとした勢いそのままに明後日の方向へと飛んでいく上半身と、その場で噴水のように血液を噴き出し続ける下半身。

そしてその下半身の近くには、彼らを惨殺した死神……仮面ライダーサイズの姿があった。サイズは構えを解くと、変身を解除して利香の姿に戻る。こんな事態を起こしたと言うのに、彼女の顔には相変わらず一切の感情が無いかのようにだった。

「よくやったぞ、サイズ。」

そんな彼女に伊坂が近付いて行く。彼は非常に満足そうな顔をする、と、周囲を見渡しながら口を開く。

「ライダーであり人間でもあるサイズにサーチャーは反応しない。もっと大きなものであればライダーに対しても反応するだろうが、持ち運びできる程度のモノなど、たかが知れている。」

そう言うのと伊坂は利香を伴ってカフェへと向かっていく。今のはあくまで準備体操、本格的なテストはこれからである。

夜

青羽達は夕飯の準備を進めていた。この日は初めてノーマが一人で作ると言う事で、青羽は彼女がどのような料理を作るのか楽しみにし、戒は彼女が失敗したりしないか冷や冷やしていた。そうこうしているうちに、ノーマの作っていた料理が完成する。作ったのはシチュー、ノーマが最初に青羽と野宿した日に食べた料理である。

「どうぞ、初めて一人で作ったのであまり自信はありませんが。」

「結構美味しそうじゃん、いっただっきまうす！」

「それじゃあ僕も。」

そう言っただけで3人はシチューに口をつける。味はなかなかの出来で、とても初めて作ったとは思えないものだった。

「美味し〜、料理できるじゃんノーマ！これなら今後は3人でローステーションが組めそうね。」

「うん、確かにこれだけできるなら安心だね。」

「ありがとうございます。」

そのまましばらく3人は談笑しながら夕食を進めていたが、途中で青羽が戒に質問をしてきた。

「ねえ戒、あんた確か隠密調査部に付いて知ってたわよね？」

「確かに僕は彼らの事を知ってるけど、それがどうかした？」

「ああ、いや別にあたしはあんたが連中の事を知ってるからなんか怪しいって言うつもりはないんだけどね。ただ連中についてどれだけ知ってるのかなって思ってる。」

青羽の言葉に戒は考え込む、2度も彼らと戦った以上すでに3人とも連中に目をつけられているだろう。となれば敵に付いて知って置くことは決して悪い事ではないかもしれない、そう考えて戒は彼女らについて話していく。

「彼ら隠密調査部はね、一言で言えば政府の暗部といった組織だよ。」

「暗部？」

「そう、彼らのやってる事を具体的に言えば、政府にとって都合の悪い事を知ってしまった人間を抹殺したり、この“国”と言うモノを守る為ならどんな事でもする連中だよ。この間みたいに子供を人質に取るなんて事も日常茶飯事だろうね。」

戒の言葉に青羽は拳を握りしめる。まさかそのような非道な連中が存在していたとは思わなかったのである。

だがノーマは事の他あっさりと彼らの存在を認めてしまった。

「なるほど、そう言う目的の連中であれば確かに居てもおかしくはありませんね。」

「何で！？ どうしてそんな連中がいるのよ？」

「青羽、国家と言う大きな存在を保つためには、正攻法だけではだめなんです。」

「そう、時には汚い事をしてでも国と言うモノを守らなければならぬ事もある。それは理解できる、でも……。」

戒はそう言いながら肩を振るわせる、彼自身も連中が許せない時があるのだろう。だがその一方で彼らの存在を認めてしまう自分がいる、その事に彼は苛立っているのかもしれない。

「彼らはあくまでも裏の組織だ、そうそう積極的に僕らを攻撃してくるとは思えない。でも今後はあまり無防備になり過ぎないようにしないと、何時どんな風にこっちに牙を剥いてくるか分からないしね。」

その言葉に青羽とノーマは頷く。まだ2回しか戦っていないが、連中の強さは身に沁みて分かっている。今後彼らと戦うかもしれないという事実、青羽は一層気を引き締めていた。

首都ミドガルド・総合事務局

首都ミドガルドでも特に目を引く高い建物、この国の政治の中心とも言える『総合事務局』。その中の一画にある隠密調査部専用オフィス、その近くの彼ら専用の資料室に恭司はいた。どうやら何かの調べ物をしているらしく、パソコンのディスプレイをじっと見つめていた。その時資料室のドアが開き、晃と怜奈が入ってきた。

「何を調べているのですか、恭司さん？」

「絶対安静……」

「こんなのもうほとんど治ってるよ、ちょっとこの間の連中に関して気になる事があってな。」

そう言いながらも彼はパソコンのキーボードを叩いていく。そこにはノーマの顔写真と、彼女に関する資料が表示されている。

彼が調べているのはノーマに関するデータだった。最初彼は自分達の事を知っている戒に関して調べようとしたのだが、それ以上に何故かノーマの事が頭に引かかっていたのでこうして調べているのである。

「ノーマ・イクス、仮面ライダーカリス。年齢18歳・・・家族構成・・・ふうん、でもこれ全部偽造だな。金で経歴とか買ったのか？」

「では一体彼女は何者ですか？あの3人の中でもかなりの実力者である事は間違いないですよ。」

「あいつ・・・強い・・・。」

「んなこと分かってるよ、でもそれ以上に気になる事があってな。」

恭司のその言葉に晃は目を丸くし、怜奈は若干顔をしかめる。

「何ですか、まさか昔振った彼女とか？」

「ばーか、そんなことあるわけ・・・ん？これは・・・。」

晃の言葉に軽く言い返していると、恭司の目にある資料が映る。それはライダーシステムが本格的に採用される前の様々な対アンデッド用兵器に関する資料、その中の一つに彼の視線は釘付けとなっていた。

「はっはーん、なるほどなるほど。そう言う事だった訳ね。確かにそれならあの強さにも納得できるな。」

「どれどれ・・・なるほど、正に戦う為だけに生まれてきたと言ったところですか。」

「あの青羽って奴、このこと知ってんのかな？」

「教えて差し上げてはいかがですか？」

「そりゃ、なかなか面白そうだな。果たしてどんな反応を見せてく

れるのか……。」

恭司と晃がノーマの正体についてあれこれ話していると、突然怜奈が動き出す。恭司が座っている椅子を回転させて自分の方に向けさせると、おもむろに彼の膝に座り抱きついてきた。

「うおっ、何だ急に？」

「……。」

恭司は突然の怜奈の行動に驚いて彼女に尋ねるが、怜奈は何も答えず背中にまわした手にさらに力を加えて抱きしめてきた。その怜奈の様子に恭司は苦笑すると、子供をあやすかのように彼女の頭と背中に手をまわして優しく撫でる。

「安心しろって、コイツに関して調べたのは単純にどんな奴なのかって興味があっただけだ。それ以上でもそれ以下でもないよ。お前以外の女なんて、そうそう相手にはしないって。」

恭司のその言葉に怜奈は安堵のため息を吐く、肩に顎を乗せる形で抱きついている為恭司から怜奈の顔を見ることが出来ないが、恐らく軽く微笑んでいるだろう。

ふと恭司が晃の方に目をやると、彼はこれでもかと言うくらいにやけた顔をしていた。恭司はそれにシッシツ、と追い払う様に手を振り、晃は素直に踵を返して部屋を出ていく。部屋を出る直前に『ごゆっくり』とからかうのを忘れずに。

そして二人だけになったのを見計らってか怜奈が軽く恭司から離れると、彼の後頭部に腕をまわして顔を近付けていき、そのまま唇を重ね合わせた。恭司の方もそれを嫌がるどころかむしろ怜奈の体に

手をまわして、決して話さないとも言うように抱きしめていた。

《新ライダー解説》

・仮面ライダーカービン

政府で採用されている軍用のライダー。そのスペックは協会が一般に市販しているダガーなどよりも高く、並みのアンデッドであればまず負けることはない能力を持っている。

外見はダガーの色をモスグリーンにした様な感じで頭部の左右側面に「A」を半分に割った様な突起がついており、武装はライフル型のラウザー【カービンラウザー】。銃身下部にレーザーポインターを備え付けており、夜間であっても射程距離3km以内の敵を補足する事が出来る。

第17話 3局の状況（後書き）

と言う訳で第17話でした。青羽達は現状に関して話し合うだけでしたけど、伊坂と恭司の方は違います。特に恭司の方はノーマに関してある事に気付きました、これがどう今後響いてくるのかお楽しみに。

ちなみに今回サイズがカービンを倒しまくったシーン、あるゲームのムービーを基にしているのですが分かりましたでしょうか？ ヒントは『ガンダム』です。

しかしやっというてなんですが、凄いスプラッタなシーンになった様な気がする（汗）。

それでは。

第18話 因縁の戦い

カフェ

青羽達はカフェに到着した。道中特に何も無く、順調にここまで来る事が出来たのである。

カフェは近くに軍の施設があると言うだけあって、本来街中にもアンデッドが出現しない安全な街だった。

しかし、現在街は地獄と化していた・・・

「な、何よこれ・・・」

「どうやら一足遅かったみたいですね。伊坂は既にここに来たようです。」

彼女達がいる所は現在炎に包まれている。車は大破し、ビルは所々が崩れている。そしてそれ以上に目につくのがあちこちに倒れている仮面ライダーの姿。それも一般に市販されているダガーだけではなく、軍用のカービンまで。

「もしもし、大丈夫ですか？」

戒が比較的損傷の少ないカービンに話しかけるが、反応は全くなかった。このライダーはまだましな方で、酷いモノでは体が上半身と下半身が切り離されているモノまである。

「・・・確かサイズの武装は大鎌型のラウザーでした。これは恐らくサイズによるものでしょう。」

「クッ、酷い事するわね。」

「伊坂……ッ！」

戒は怒りに燃えていた。伊坂に操られてサイズに変身させられている利香は、本来は虫も殺せない様な優しさを持った少女である。その彼女にこのような無理やり手を汚させるような事をするなど、戒にとっては到底許せる事ではなかった。

とその時、近くのビルから一人の男性が出てきた。ところどころ汚れてはいるが、どうやら目立った傷は無いらしい。彼は青羽達の姿を見ると、一瞬警戒したがすぐに安堵の表情になる。

「ちょっと！ 大丈夫ですか！？」

「は、はい、何とか……」

「一体ここで何があったんです？ 他の街の人達は？」

戒の質問に、男性は弱々しく答えていく。

「他の人達は、何とか街の外れに避難したみたいです。私はこの場から動くに動けない状況になってまして……」

「一体何がどうしてこんなことに？」

「分かりません、いきなり爆発音が聞こえてきたと思ったら、街の入り口で一人の黒いライダーが暴れてたんです。当然協会所属の仮面ライダーや軍が動いたんですが、そのライダーがあまりに強くて、しかも1体の孔雀みたいなアンデッドも加わってあつという間に……」

男性の話に、やはり伊坂がこの街にやってきた事を確信する青羽達。

「そのライダーとアンデッドが何処に行ったか、分かりますか？」

「隠れながらチラッと見ただけでしたので、よくは分かりませんが・
・あの方向は確か軍の施設が・・・」

男性がそう言った瞬間、爆発音がしたと思って青羽達がそちらを見たら、山の近くで大きな爆炎が上がっているのが見える。

「あれって、あそこもしかして!？」

「軍の施設です、ちょうどあの辺りが・・・」

男性が呆然と呟くのを見ながら、ノーマが口を開く。

「・・・貴方はすぐに非難を。青羽、戒、準備はいいですね？」

「勿論!」

「当然さ。」

3人は互いに頷き会々と、即座にバイクに乗って爆炎が上がっている方向へと走って行った。

カフェ・政府軍駐屯基地

そこは正に地獄絵図と言うに相応しい状況だった。あちこちに倒れている軍用のライダー達・・いや、ライダーだけではない。生身で応戦しようとしたのか銃を構えた状態で息絶えている男性の兵士、逃げようとしたところを後ろから殺されたのであろう整備兵と思われる男性、負傷した者を治療しようとして首を刎ね飛ばされたらしい女性の衛生兵、様々な死体が辺りに散乱していた。

建物も無事ではなく、崩れていない施設が無い状況だった。銃弾の火薬に引火したのか、激しい火の手が上がっている倉庫もある。

そんな中に、ほとんど無傷で立っているのが二人ばかりいる。感情を感じさせない瞳をした音無 利香と、そんな彼女を操っている伊坂の二人である。

「ふむ、テストはこんなもので十分か。後は奴を見つけ出して封印すれば、今度こそ最強の力が俺のモノになる……フッフッフ……」

伊坂がそう言って不気味に笑っていると、バイクのエンジン音が近付いてくる。彼と利香がそちらに視線を向けると、バイクで近づいてくる青羽達。

「フッ、やはり来たか。思っていたよりも早かったな。」

「伊坂……貴様ッ!？」

「大神か、久しぶりだな。それにブレイドにカリスも。」

戒が憤りながら伊坂の名を呼ぶと、伊坂は余裕を感じさせながら三人の事を見る。

「あんた……よくこんなひどい事が出来るわね。」

「ふんっ、こんなのはただのテストさ。俺の目的は別にある。」

「何が目的なんです？ 一体何を倒そうとしているんですか？」

ノーマの言葉に、伊坂は訝しげな顔をする。

「ん？ 貴様何故俺が奴を倒そうとしているのを知っている？」

「奴？」

伊坂はノーマの言葉に一瞬驚いたが、ノーマには伊坂の言う『奴』

が分からない。寧々も『何か』としか言わなかった為、3人は伊坂の狙いが具体的に何であるかまでは知らなかったのだ。ノーマが訝しげな表情をした事で、伊坂もその事に気付く。

「なるほど、俺が何を目的にしているかまでは知らないと言う訳か。一体何処で俺が奴を倒そうとしているのを知ったのか気になるが、まあいい。お前達には関係の無い話だ、何せお前達はここで・・・死ぬんだからな。」

「……変身・・・」

《Open up》

伊坂からの殺気が膨れ上がった瞬間、利香がバックルを開いてサイズに変身する。それと同時に伊坂もアンデッドの姿に戻った。

「クッ！」

「お前達にも、サイズの実験台になってもらう。行けっ！」

アンデッド態になった伊坂の命令にサイズが青羽達に向かってサイズラウザーを振り下ろしてくる。青羽達はそれを回避すると、各々バックルやラウザーを腰に装着する。

「戒、貴方は予定通り伊坂を。」

「サイズはあたし達に任せて！ ノーマ、行くわよ！」

「ええ。」

「「変身！」」

《Turn up》

《Change》

戒にそう言うと同時に、青羽とノーマはブレイドとカリスに変身。サイズに立ち向かっていった。

「ありがとう、二人とも・・・伊坂！」

戒は二人に感謝すると、伊坂に向き直る。伊坂は依然として余裕な態度を崩さなかった。

「伊坂・・・決着をつけよう。」

「ふんっ、お前如きが俺に勝てるか？」

「勝つさ・・・変身！」

《Turn up》

戒はギャレンに変身すると、ラウザーでアンデッドを銃撃しながら突撃していった。

ギャレンとピーコックアンデッドが戦闘を始めた時、ブレイドとカリスはすでにサイズと戦っていた。

「フッ、セイツ、ハアッ！」

ブレイドは何度もサイズにラウザーを振るい、

「フッ、セツ、ヤッ！」

カリスはカリスアローと体術で確実にサイズを追いかけていった。対するサイズの方も負けてはおらず、大鎌型のラウザーを生かして二人を薙ぎ払おうとする。

「うわっ!?!」

「クッ！」

二人と距離をとったサイズは、ラウザーに2枚のカード、セミの様な絵柄のハートの4『ウェーブ・シカダ』とカラスの様な絵柄のハートの6『ダーク・クロウ』をラウズする。

《Wave Dark》

《Darkness Impact》

2枚のカードをラウズしてサイズの必殺技『ダークネス・インパクト』が発動、サイズがラウザーを振るうと同時に闇を纏った波動が二人に襲いかかった。

「クッ！」

「ハッ！」

ブレイドはそれを上空に跳ぶ事で、カリスは側面に逃れる事でそれぞれ攻撃を回避する。

「あつぶない危ない、でもさノーマ。」

「何です？」

「なんかさあ、思ってたよりも強くないわね。」

「そうですね・・・」

ブレイドの言葉に、ノーマは首を傾げる。これだけの事をやってのけた相手だ、自分達も相当苦戦するだろうとカリスは思っていた。だが実際にやって見ればこれだ、ブレイドもカリスも特に体力的にまだまだ余裕はある。この分だと場合によってはサイズを倒してギヤレンの支援に回ることも可能だろう。

（しかし・・・サイズの動きがどこか妙ですねえ。まるで・・・私達に攻撃することを拒んでいるかのよう・・・）

「ノーマ、来るわよ！」

「分かってます（今は考えてる暇はありませんね！）」

カリスがサイズの動きに違和感を感じていたが、ブレイドの言葉に即座に考えを振り払った。今は目の前の戦いに集中する時である。

第18話 因縁の戦い（後書き）

と言う訳で第18話でした。伊坂との因縁の戦いが始まりましたが、決着は次回に持ち越します。

次回、遂に伊坂との戦いに決着、でも・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第19話 邪悪なライダー（前書き）

どうも、黒服です。今回ついに戒と伊坂の因縁に決着が着きます。
でも話はそれで終わりでは無くて……

第19話 邪悪なライダー

カフケ・政府軍駐屯基地

ブレイド・カリスとサイズが戦っている頃、ギャレンとピーコック
アンデッドの戦いも激化していた。

「ハッ、フッ！」

ギャレンは体術を交えつつ、至近距離からアンデッドに銃撃を行い・

「フンッ、ハアッ！」

アンデッドはギャレンを引き剥がそうと大剣を振り回す。

戦いは正に一進一退となっており、どちらも互いに相手に思うようにダメージを与えられないでいた。

「伊坂あ！」

「グッ?!」

そんな中、遂にギャレンの蹴りがアンデッドの腹部にヒットする。
アンデッドは一瞬怯み、その場から数歩後ずさった。

「くっ、調子に・・・乗るな！」

アンデッドは無数の羽手裏剣を飛ばし、弾膜を張ってギャレンに攻撃を仕掛けた。

「う、ぐわああッ!? グッ!」

羽手裏剣にダメージを受けるギャレンだが、すぐに弾膜から抜け出るとギャレンラウザーで迎撃する。戦いはお互いに持てる全力を出し合っていた。

一方ブレイドとカリスは、サイズ相手に善戦していた。

「ハッ、イヤアッ!」

ブレイドの放ったラウザーによる斬撃の勢いを利用した回転蹴りが決まり、サイズが弾き飛ばされる。

「よしっ! ノーマ、いけるかもよ。」

「そうですね（やはりおかしい、いくらなんでも弱過ぎです。これは・・・もしかして）」

自分達に優勢な状況にブレイドはさらに意気込んでいる中、カリスは違和感を募らせる。どう考えてもサイズの動きが鈍すぎるのだ。勿論それはカリスだからこそ気付ける程度の鈍さでしかないが、だからこそ妙だった。

（もしかして・・・利香さんの自我がサイズの動きを抑えている?）

カリスはその事にそのような結論を出した。もしそうであったなら利香を助け出す可能性が高い事を意味しているからである。

一方、ギャレンとアンデッドの戦いも佳境に入ろうとしていた。

「ハッ、フッ、ヤアッ！」

ギャレンは銃底でアンデッドに当て身を喰らわせるとパンチ、キックと繋げていき……

「グウッ!? ええい、クソッ！」

アンデッドがギャレンを引き剥がす為に大剣を振るう。ギャレンはそれを避けて左腕で受け止めると、右手に持ったラウザーをアンデッドの腹部に押し付ける。

「ッ!? 貴様ッ！」

「こう近いと、さっきの羽手裏剣も使えないだろう！」

その状態でギャレンはラウザーの引き金を引き、至近距離からの連続射撃を浴びせる。

「グウッ! グアアアアッ?!」

アンデッドはその攻撃で大きなダメージを受け、一瞬の隙を突いて大剣を奪われる。

「フンッ、ハアッ、セイッ！」

何度も大剣を振るい、アンデッドを追い詰めるギャレン。

「グウ……フンッ！」

何とかギャレンの攻撃から抜け出だアンデッドは、再び無数の羽手

裏剣をギャレンに向かって飛ばす。

「ハッ！」

だがギャレンは即座にその場に大剣を捨てると、後方に振り返って飛び退きながら一回転。振り返りながらラウザーの連続射撃で羽手裏剣を落とし、そのままアンデッドに連続射撃を浴びせた。

「グッ・・・ガハッ。」

ギャレンの攻撃に遂に膝をつくアンデッド、そしてギャレンはトドメを刺すべくオープントレイから3枚のカードを取り出してラウズする。

《Drop Fire Jemini》
《Burning Divide》

「伊坂・・・覚悟お！」

ギャレンが3枚のカードをラウズすると、ダイヤの5『ドロップ・ホエール』、ダイヤの6『ファイア・フライ』、ダイヤの9『ジェミニ・ゼブラ』のカードに描かれている絵柄が投影されてギャレンに吸収される。そしてギャレンの3枚コンボの必殺技、『バーニング・デイバイド』が発動する。

「ハッ・・・セリヤアアアアッ！」

その場で跳躍したギャレンが宙返りすると同時に二人に分身、炎の力を込めた2段爪先蹴りを二人同時にアンデッドに喰らわせた。

「うっ?!・・・グッ。」

ギャレンの必殺技を喰らったアンデッドは、ギャレンが地面に着地すると同時に爆発。ギャレンが後ろを振り向くと、最後の力を振り絞ってその場で立ちあがるアンデッドの姿があった。

アンデッドは立ち上がると、アンデッドの姿から人間の姿になった。

「何故、俺が・・・俺が、やられる・・・グッ。」

伊坂は信じられないと言った風にそう告げると仰向けに倒れた。そしてその姿は元のアンデッドのものになり、腰のバックルが開く。

ギャレンはアンデッドにゆっくり近づくと、手に持っていたコモンブランクをアンデッドに落とした。コモンブランクが触れた瞬間、封印されるピーコックアンデッド。封印が完了するとカードは勝手にギャレンの手に戻ってきた、カード名はダイヤのJ『フュージョン・ピーコック』。

「利香・・・これで。」

ギャレンがアンデッドを封印したのと同時に、サイズも突然動きを止める。

「あ・・・かっ・・・」

しばしその場で痙攣するように体を振るわせると、ガクリと脱力したように動かなくなる。

「これって・・・」

「恐らく戒が伊坂に勝ったんでしょう、コントロールが無くなった

んです。」

「てことは……イヨッシャアア！」

カリスはこの状況にギャレンとアンデッドの戦いに決着がついた事を悟り、ブレイドはガッツポーズをとりながら喜んだ。そこにギャレンが近付いてくる。

「二人とも、大丈夫かい！」

「もっちゃん！ そっちも大丈夫そうね。」

「ああ、二人のおかげだ。それよりも、利香は？」

「彼女ならあそこです。」

そう言ってカリスはサイズの方を指さす。そこには未だに立ったまま俯いているサイズの姿があった。

「恐らく突然コントロールが無くなって、意識を失ってるんでしよう。行って起こしてあげてください。」

「ああ。」

ギャレンはカリスの言葉にサイズにゆっくり近づいて行く。その様子を見てブレイドは最初これで終わったと思っていたが、ある事に気付いた。

「あれ？ ねえノーマ、普通中の人が気絶したら変身って解除されなかったっけ？」

「え？」

ブレイドに言われてカリスも気付く。ライダーシステムには装着者の状態からオートで変身を解除する機能がついている。装着者の状態を確認しやすくする為と、装着者の体に無駄な負担をかけない為

である。

では、サイズは何故変身が解除されないのか？ それはつまり装着者である利香がまだ気を失っていないからであり、なのに戒が近付いているのに動かないのは……

「ッ！？ 戒、今すぐそこからはなれて下さい！」

「え？ それはどういう、グアッ?!」

カリスの言葉にギャレンが後ろを振り向いた瞬間、サイズがラウザーをギャレンに向けて振るう。全く予想外の事態に、ギャレンは勿論ブレイドも呆然となる。

「えっ？ ちょっと、何がどうなってるの?!」

「ぐっ、利香……一体何を……?」

あまりの光景に、ブレイドは訳が分からず、ギャレンも信じられないと言った風にサイズに声をかける。

「まさか……伊坂のコントロールがまだ生きてるんじゃない?」

「どういう意味?」

「指揮官がいなくなるとオートで戦闘する様な機能がついていた可能性があります、恐らく今の利香さんは……」

カリスがサイズの状態にそう予想を立てるが、その予想は他でもないサイズ自身に否定された。

「残念だけど、もうあの男の支配は無くなったわ。」

「それじゃあ一体どういう事なんだ!? 利香、一体どうして……」

ギャレンがそう言ってサイズに尋ねる。それに対してサイズは笑いながら口を開いた。

「うふふっ……分からない？ 私の事をあんなに痛めつけてくれたくせに。」

「何？ 一体何の事を……待てよ、お前は……まさかっ!？」

サイズの言葉に最初は首を傾げるギャレンだったが、ふとある事が引かった。サイズに関係していてギャレンが痛めつけたモノ、それについて考えた時該当するものが二つばかりあった。

そしてギャレンがそれに気付いた時、サイズがけたたましい位の笑い声を挙げた。

「アッハハハハハハハハハッ！ そうよ、私よ！ 貴方に封印されたカテゴリーAのアンデッドよ!」

サイズの発したその言葉に、3人は愕然となる。まさか本来ライダーに使役される筈の封印されたアンデッドが、逆に装着者の精神を乗っ取るだなんて……

「最初は窮屈で仕方なかったけど、慣れればこの体も悪く無いわね。寧ろ今まで以上に好き勝手出来ていいかも。」

「そんな……こんな事が……」

ギャレンはあまりの事態に完全に茫然自失となってしまった。

「でもまあ一応お礼は言っておこうかしら、貴方達のおかげであの男からの干渉が無くなったんだし。それにしても貴女達二人にはも

「うちよつと頑張つて欲しかったわねえ。」

「どういう意味よ？」

「ちよつと待つて下さい、もしかして妙にサイズの能力が低いと思つたのは・・・」

「そうよ、私の中から干渉してあの男の支配力を弱めてたのよ。おかげで随分とやりやすかったんじゃない？」

そう言ったサイズの・・・いや、カテゴリーAの言葉にまたしても驚くカリス。彼女は当初サイズの能力が低くなつたのは利香の精神が伊坂の支配に抗った結果だと思つていたが、実際はそうではない。今正に利香を操っているカテゴリーAが伊坂からの支配を妨害していたからだつたのだ。

「折角一人でもこのライダーと対等に戦える程度に能力を抑えてあげたつてのに、貴女達全然ギャレンの援護に行かないんだもん。もしギャレンがやられちゃったらか思つて心配しちゃったわ。ま、杞憂だつたみたいだけどね。」

そう言つて軽く肩をすくめてみせた。その様子にカリスは思わず歯噛みする、これではカテゴリーAの掌の上で踊らされたようなものだ。

「さてと・・・それじゃあそろそろお暇しようかしら、いろいろとやりたい事もあるし。」

「行かせると思ふのですか？」

カリスの言葉にサイズはしばし黙っていたが・・・

「・・・全然!!」

即座にラウザーを振り上げて3人に向かって突っ込んできた。ギヤレンが完全に戦意喪失している状態なので事実上ブレイドとカリスで相手をするしかないのだが。

「フッ、ヤアッ、セイッ！」

サイズは先程までと違い鋭くラウザーを振るい、ブレイド達を寄せ付けない。

「クッ、このっ！」

「チッ、これが本当のサイズの力ですか？ さっきとは段違いです。」

カリスはそう愚痴りながらサイズから距離をとってカリスアローを構える。相手が中距離で最大の力を発揮できるなら、自分が遠距離から攻撃してやればいい。そう考えたのであるが……

「クッ、青羽っ！ 退いてください！」

「そ、そんな事言ったってっ！」

「フッ、そう簡単にはいかないわよ！」

サイズはカリスとの位置関係を考えて、射線上にブレイドが来るように巧みに場所を変える。ブレイドが離れようとしてもサイズがそれを許さず、その場に釘づけにされてしまう。おかげでカリスは遠距離からの射撃を事実上封印されてしまった。

「セエエイッ！」

「ガッ?!」

そして遂にサイズの一撃がブレイドに当たり、ブレイドはカリスの

方に吹き飛ばされる。

「あ、青羽！ グッ！？」

「ガハッ！？」

「うふふ、それじゃあそろそろ・・・」

カリスはブレイドを受け止めようとするが、思いの外加速がついた為ブレイドと共に地面に倒れこんでしまう。そしてその隙を突いてサイズが3枚のカードを取り出した。

《Slash Wave Dark》

《Darkness Scissors》

「ハアアアアッ！」

サイズが3枚のラウズカード、ハートの2『スラッシュ・リザード』ハートの4『ウェーブ・シカダ』ハートの6『ダーク・クロウ』をラウズすると、サイズの3枚コンボの必殺技『ダークネス・シザース』が発動。

サイズがラウザーを振るうと、闇の力を纏った刃が波動の様にブレイドとカリスに向かって飛んできた。

「うわあああああっ?!」

「ガアッ!? グッ・・・」

二人はサイズの攻撃をまともに喰らい、弾き飛ばされると同時に自動的に変身が解除されてしまった。二人はショックで気絶したのかそのまま動かない。

サイズはブレイドとカリスを戦闘不能にすると、ギャレンへと近付

いていく。

「戒……」

「り、利香……」

ギャレンは半ば呆然としつつサイズへと近付いていく、何かの拍子に元に戻ってくれることを願って。だが……

「あの男を倒してくれてありがとう、お札に……この技で仕留めてあげる。」

《Bite Dark Drop》

「利香っ?!」

その期待は脆くも崩れ去った。

《Darkness Drive》

サイズのラウズした3枚のカード、コブラが描かれたハートの5『バイト・コブラ』、カラスが描かれたハートの6『ダーク・クロウ』、カブトムシが描かれたハートの9『ドロップ・ビートル』によりサイズの必殺技『ダークネス・ドライブ』が発動。ギャレンの頭を両足で挟んでそのままバク転の要領でギャレンを地面に叩きつける。

「フッ! ハアアアアッ!」

「ぐああっ?!」

ギャレンを叩きつけると、サイズはその反動を利用してその場から飛び退く。サイズが飛び退いた直後に、ダメージ過多と判断されたギャレンの変身が解除された。

変身が解除された戒の体はボロボロだったが、肩が上下しているところを見るとまだ生きていることが分かる。

サイズはそれを見ると変身を解除して利香の姿に戻る。

「うふふ・・・」

「グッ、り・・・利香。」

戒はまともに動かない体に鞭打って利香に向かって手を伸ばすが、その手は利香自身に踏み付けられた。

「ぐうつ!？」

「フフッ、この体は貰って行くわ、なかなか使い心地が良いもの。」

そう言うとき利香は戒の手から足をどけて、踵を返していく。途中一度だけ戒の方を振り返って・・・

「それじゃあね、戒。もう会うこともないだろうけど。」

それだけ言って今度こそその場を去って行った。

あとに残されたのはサイズによって破壊し尽くされた軍の施設と、サイズに打倒された青羽とノーマ、そして戒だけだった。

「利香・・・う・・・うわあああああああつ!？」

その場に残されたものの中で唯一意識のある戒は、しばし利香の去って行った方を見つめた後、空に向かって叫び声をあげた。ちょうどその時突然の雨が降り出し、さながらそれは戒の心を映し出しているかのような光景だった。

第19話 邪悪なライダー（後書き）

と言う訳で第19話でした。戒はまだ利香を取り戻せません（汗）、一難去ってまた一難、今度はカテゴリーAとの戦いです。戒が彼女を取り戻すのはまだ先になりそう・・・

地味に自分大学の期末2週間切ってます、再来週には試験です。しかも最初の1週間に自分のとってる科目全てが集中していると（涙）。

それでは。

第20話 仲間と言うもの（前書き）

どうも、黒服です。今回はブレイド編の更新です。

第20話 仲間と言うもの

カフェ・病院

青羽達とサイズの戦いが終わってから数時間後、街に協会と軍からの増援がやって来る。だが増援の彼らが街に来て軍の施設にやって来た時にはすでに戦闘は終結し、あとには破壊された施設と殺されたライダー達、そして傷を負ってはいるが命に別条はない青羽達だけが残されていた。

青羽達は軍に救助された後治療を受け、何があったのかの事情聴取を受けてから病室に移されていた。とは言っても3人ともそこまで重症というほどの傷は負っていない。戒も手を踏みつけられはしていたが、骨には特に異常はなかったらしいので2、3日大人しくしていればすぐにでも退院できるレベルだった。

そんな訳で現在青羽達はある程度修復がなされた病院内の一室のベッドに横になっていたのだった。

「あゝ、事情聴取とか面倒くさゝ。」

「そうは言っても、あの場で一番事態を詳しく知っていたのは私達だけです。事情聴取を受けるのも仕方ありません。」

「ま、全部包み隠さず言ったわけじゃないけどねえ。」

青羽達は事情聴取の時、サイズに関してはかなり曖昧に話した。変身者が誰かと言うことなどはあえて話さないようにしたのである。何故なら……

「軍って結構やり方乱暴だしねえ……」

「最悪、物量に物を言わせて利香さんを殺してしまう可能性も高いですし。」

軍や協会に利香のことが伝われば、サイズの強さを知った軍が血眼になって彼女を探すだろう。そして最悪の場合、その危険性から利香諸共サイズを倒してしまうかもしれない。それは青羽達にとって御免被りたいことであった。

勿論サイズの外見などは伝えてある、もしもと言う時にサイズの外見を知っていなかったら無駄に大きな被害が出るからだ。

「とは言え、現状の問題はこっちよりも戒の方よねえ。」

「あれからずっと塞ぎ込んでますしね。」

あれからと言うものの、戒は青羽達とともに会話をしていない。完全に無気力化してしまい、食事もまともに取っていないとのことだ。どうしたものかと青羽は頭を悩ませる。

「う〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜・・・」

「青羽、頭から煙が出てます。少し考えるのを止めたらどうです？」

「む〜〜、そうは言ってもさあ。」

やはり同じ仲間である戒が、恋人のことで悩んでいるとなれば何とかしたいと青羽は思う。だが肝心の戒が自分の殻に閉じこもっているのでは、対話も何もあったものではない。青羽はそのことで悩んでいるのである。

「とりあえずもうしばらく放っておきましょう、彼の心の傷が癒えるまでじっくり待つのも一つの手です。」

それだけ言うと、ノーマは改めてベッドに横になってしまふ。一方の青羽は、そんなノーマをしばらく見つめた後ベッドから抜け出て、病室の外へと出て行ってしまった。

森

その頃、カフケのナティの中間にある森の中を、1対の異形が歩いていた。トンボのような外見をしている、トンボの始祖・・・ドラゴンフライアンデッドである。

「フオオオオオオッ！」

アンデッドが獲物を探していると、突然どこからか奇声が響き渡る。アンデッドがそちらを見ると、一人の男性が歩いてきた、音楽を聴いて踊りながら歩く、何とも派手な格好をした男性である。

アンデッドは獲物が向こうからやって来たと男性に飛びかかるが、男性はそれを少し体を傾けただけでかわすとアンデッドの腕を掴んだ。

「無駄よ！ 君クラスじゃ私は倒せない・・・バアッ！」

そう言うとき男性は口から青いビームを放ってアンデッドを吹き飛ばしてしまった、彼はそれを愉快そうに眺めている。

「誰を相手にしてんのか分かってんのか？ 君と遊んでも面白くないだよねぇ。」

そう言うとき男性はにやりと笑って口を開く。

「やっぱり楽しく遊ぶには……仮面ライダーじゃないと……」

そして男性はその場から去って行った。

病院・屋上

青羽は気分転換に屋上へと上がって来た。街が破壊されているので景色がいいとは言えないが天気は悪くない、こんな日は空がよく見えるところに出てぼんやりとするのもいいだろう。

そんなことを考えて青羽が屋上にやってくると……

「ん……戒？」

屋上のフェンスに上の空で寄りかかっている戒の姿が見えた。青羽は迷わず戒に近づいていく。

「やつほ！」

「ああ……青羽か。もう大丈夫かい？」

「こんなの全然へっちゃらよ、あんたは？」

「僕も、そこまでは……」

それだけ言って戒は再び黙りこくってしまう。訪れた沈黙に、青羽はどうしたものかと内心で冷や汗を流す、正直こういう雰囲気は彼女が苦手なのだ。

（どうしたもんかな、何かいい話題は……）

何か会話のネタになるものはないかと必死に考えるが、やはり何もいい案が浮かばない。仕舞いには再び頭から煙を出してしまうほどであった。

「~~~~ツ、ああもう考えてもしょうがない！」
「青羽？」

突然大声を挙げた青羽に戒が訝しげな視線を向けると、彼女は真っ向から戒の目を見て話しかけてきた。

「戒、あんたさあ・・・一体どうしたい訳？」
「どうしたい・・・って？」
「利香ちゃんを助けたいのかどうかよ。」
「ッ!?!?!」

青羽の放った言葉に、漸くまともな反応を返した戒。それを見て青羽はさらに言葉を続ける。

「あの子をこのままほったらかしといたら、まだまだ犠牲者は増えるわ。正直な話こんな所でぼんやりしてる暇は「分かってる!」? そんなことは!」・・・」

「でも今度は伊坂の時のようにはいかない、誰かを倒せばいいってものじゃないんだ! 彼女を・・・利香自身を傷付けなくちゃいけない・・・そんなの、僕には・・・」

どうやら戒自身もサイズを止めるには直接倒す以外に道はないことが分かっているらしい、だがそれをするということは戒の彼女を傷付けるということ。その葛藤が戒を追い込んでいるのだ。

「そんじゃ、あんたはここでジツとしてなさいよ。サイズはあたしとノーマで何とかするから。」

「何とか・・・ってのは？」

「サイズを・・・倒す。」

「ッ!？」

青羽が明確にサイズと戦うことを口にした瞬間、戒は青羽に掴みかかる。その顔は先ほどまでの覇気のない顔ではなく、視線だけで人を殺せるような顔だった。

「それが何を意味するか・・・君は分かってるのか？」

「ええ、サイズを倒すことは・・・利香ちゃんと真正面から戦うってこと。」

「それが分かっているながら何故!」

「サイズを倒さないと、もっと多くの人があいつの犠牲になる。それを止めるためには、サイズと戦って倒すしかないじゃない。」

青羽の言っていることは確かに正論である。不特定多数の人とたった一人の少女、どちらを犠牲にしてどちらを助けるかなど子供でも即答できる。だが戒にとって利香を犠牲にするなど到底許容できることではなかった。

「君は!？」 利香を犠牲にするって言うのか!」

「~~~~ッ、誰もそんなこと言ってないでしょうが! あたしが言っているのは、サイズを倒して! そんなもって利香ちゃんも助け出すってことよ!」

いつまでもサイズを倒す! 利香を犠牲にするという図式を作り出す戒に、流石の青羽も痺れを切らしたのか怒鳴り返した。

「そんなこと、できると思ってるのか！ 利香は完全にカテゴリーAに操られてるんだぞ、それをどうやって！」

「何よ、そんなことも考えられないの？ だったらあんたに利香ちゃんを助ける云々言う筋合いなんかないんじゃないの？」

「ッ！？ クッ！」

青羽のあまりの物言いに、カッとなった戒は彼女の顔を殴りつけてしまう。

「あっ・・・」

「チッ、やってくれんじゃないのよ。このっ！」

「グッ?!」

思わずとはいえ青羽を殴ったことに戒が怯んでいると、口元を切った青羽がお返しとばかりに戒を殴り返す。

「あたしには彼氏とかいないからよく分かんないけど、誰か大事な人を助けたいって気持ちは分かるつもりよ。本当に誰かを助けた言ってるって思ってるんだったら、そんな簡単に諦めてないでもっと足掻きなさいよ！」

「君に何が分かるんだ！ 問題はそんなに簡単じゃない、利香を傷付けるなんて僕にはできない！」

「何でもかんでも完璧にできるわけじゃないでしょうが！ この馬鹿！」

その後も二人はお互いに怒鳴りながら殴りあった。

それから数分・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「ふう・・・ふう・・・ふう・・・」

お互い顔のあちこちに生傷を作りつつ、しっかりと相手の目を見つめていた。

「はあ、君も、なかなか強情だね、はあ・・・」

「あんたさ、こんだけやっても、まだ分かんないの？」

青羽の口にした言葉に、戒は訳が分からず首をかしげる。

「僕が、何を分かってないって？」

「あたしが、こんなになるまであんたと殴りあってる理由よ。」
「え？」

戒には青羽の言っていることの意味が分からなかった、単純に互いの意見がぶつかり合っているからではないのか？

「あたしとあんたは、仲間でしょ？ だったら・・・一人で悩んで堂々巡りになってないで、『一緒』に考えなさいよ！」
「ッ!？」

戒はその青羽の言葉に、先ほどまでとは違った感じに頭を殴られたかのような衝撃を受ける。

「いい？ よく聞きなさいよ。仲間ってのはただ単につるむだけじゃない。一緒に考えて、悩んで、それでもって答えを出して、一緒に前に進んで行く為にいるんでしょうが！」

「うっ!？」

「だったら一人でウジウジ悩んでないで、あたしやノーマと一緒に考えてよね！ あたしはともかくノーマはすっごく頭がいいんだか

ら、利香ちゃんの被害を最小限にして助ける方法とか分かるかもしれないじゃん。」

青羽の言葉一つ一つが戒の心に突き刺さる。

「あんたが仲間って言葉をどう思ってるのかはあたしは知らないけどねえ、少なくとも仲間ってのはさ、みんなと一緒にあって前に進もうとするものなんじゃないの？」

「僕は・・・青羽の言うことももつともです。」、ノーマ？」

戒が青羽の言葉に考え込み始めると、屋上の入り口からノーマが歩きながら声をかけてきた。

「三人寄れば文殊の知恵とも言います。少なくとも一人で考えるよりは複数人で考えた方が、何かしらのいい案は出るものなんじゃないですか？」

青羽とノーマ、二人の言葉に戒の頭は急速に冷えてきた。

「・・・・・・・・ふう、済まない二人とも。どうやら事態が急転しすぎて少し動揺してたみたいだ。」

実際あまりにもとんでもない事態に陥ってしまったせいで、かなり動揺していた。勢い余って青羽を殴りつけてしまったのがそのいい証拠である。

「青羽、さっきは済まなかった。思わず殴ったりして・・・」

「別に気にはしないわよ、あたしだってあんたのこと思いっきり殴ったんだし、いろいろ言いたい放題言っちゃったしね。それでノーマ、何かいい案ある？」

「それは・・・これから考えるんですよ。私達3人で。」
「あはは、そりゃいい案ね。」

そう言って笑いながら青羽は手を前に出した。青羽が差し出した手にノーマが手を重ね、その手にさらに戒が手を重ねる。

「へへっ！」

「フッ・・・」

「ははっ・・・」

3人は手を重ねながらお互いを見て、お互いに微笑み合う。口には出さずともお互い何を考えているかはよく分かる。

『自分達は・・・仲間だ。』

この考えが3人の心の中を占めていた。

「今度こそ、絶対に利香ちゃんを取り戻すわよ。」

「ええ・・・」

「うん、やろう。僕達・・・3人で！（利香、もうしばらくだけ待っててくれ。みんなで力を合わせて・・・必ず助け出して見せるから！）」

こうして3人はお互いの絆を再確認し、再び利香を助け出す決意を新たにしたのだった。

余談だがこの後病室に戻った青羽と戒は、新たに生傷を作ってきたこと、そしてその原因がお互いに殴りあいをしたからだということで看護師達にこってり絞られたとのこと。

第21話 誘惑

カフェにおける青羽達とサイズの戦いから数日後

青羽達はナティへと戻る道を走っていた。青羽が戒を立ち直らせた後、とりあえず寧々に何かいい案がないかを尋ねようと考えたのだ。

「寧々さんだったらきつと何か知ってるかも。それを聞ければ・・・」

そんなことを呟きながら、ナティへと続く街道をバイクで走って行った。

夜

青羽達は野宿をしていた、青羽が作った食事を焚き火を囲みながら食べる。

その時、突然灰色のオーロラが現れ中から一人の男性が現れた。枯草色のコートに帽子を被り、眼鏡をかけた男性である。

突然現れた男性に警戒する青羽達、だが男性はそれに構うことなく口を開く。

「この世界の仮面ライダー、ブレイド・ギャレン・カリスだな。君達に頼みがある。」

「頼み？」

「そうだ、もうすぐこの世界に『世界の破壊者』仮面ライダーディ

ケイドと、『究極の闇をもたらすライダー』仮面ライダークウガがやってくる。」

「ディケイド・・・クウガ・・・」

男性が口にする『世界の破壊者』と『究極の闇をもたらすライダー』と言う単語に、難しい顔になる青羽達。そもそも目の前の男性が何者なのかも分からない。

「あんた・・・一体何者？」

「私はただの予言者、鳴滝と言うものだ。」

「予言者・・・それで、その予言者が私達に何の用です？」

「その世界の破壊者とやらが来るから、僕達にどうしろと？」

「端的に言おう、君達にディケイドを倒してほしい。」

戒が鳴滝に尋ねると、鳴滝は3人にディケイドを倒してほしいという。その言葉に青羽達は再び首を傾げた。

「ディケイドは全ての破壊者だ。いずれ必ずこの世界にやってきて、この世界のすべてを破壊していく。だから・・・」

「ちよっと待ってください。その前にさっきから貴方が言っている『世界』とはどういうことですか？」

鳴滝が目的を離していると、ノーマがそこで口を挟む。先ほどから鳴滝の口に使っていた『世界』と言うのがどうしても気になっていたのだ。

「その言葉通りの意味だ。君達がいるこの世界の他にも、様々な世界がある。こことは別の『ブレイドの世界』、『キバの世界』に『龍騎の世界』と言うのもある。」

「キバ？ 龍騎？」

青羽が鳴滝の話に訝しげな顔をしていると、鳴滝が再び口を開いた。

「もう一度言う、ディケイドを倒してくれ。そうすることでこの世界だけでなく、全ての世界を救うことが出来るのだ。頼んだぞ」

「あっ！？　ちよっ、待っ！」

鳴滝は言いたいことを言ってすぐにまたオーロラでどこかへと消えて行ってしまう。青羽が呼び止める間もなく、鳴滝は消えて行ってしまった。

あとに残された青羽達は、しばし茫然としていた。

翌日、青羽達はナティに向かう為に野宿の後を片付けていた。だが青羽の顔は未だ難しいものになっている、原因は昨夜鳴滝から聞かされたことである。

「あまり気にしない方がいいですよ、青羽。」

「ノーマ・・・」

青羽が暗い顔をしていると、ノーマが声をかけてくる。

「あの鳴滝とかいう男の話は信用しない方がいいです。」

「そ、そうかなあ？」

「いきなり現れてあんな訳の分からない事を言うような人物、信用するだけ無駄です。その世界の破壊者がホントにいるかどうかも分からないんですし。」

ノーマの言う事はもっともだろう、少なくとも異世界と言うものと接点を持たない者にとっては。

「そうだね・・・今考えても仕方ないよね。あのオジサンの言うことが本当かどうかも分かんないし。」

「そうです。考えるだけ無駄ですから、今は目の前の問題だけを考えましょう。」

ノーマの言葉に元気付けられ、いつもの顔に戻っていく青羽。ノーマと戒はそんな彼女の様子に、苦笑いを浮かべていた。

ナティ

その後野宿の後片付けを終えた青羽達は、無事にナティに到着した。

宿に余分な荷物を置いた後、一行は早速寧々の自宅へと向かっていく。だが・・・

「寧々さん・・・いないね。」

「そう・・・みたいですね。」

「・・・・・・はあ。」

彼女達が寧々の自宅に着くと、そこには誰もいなかった。もしかしたら単に買い物にでも出掛けただけなのかもしれないが、郵便受けのところに郵便物が入らないように封がされている。これはつまりしばらくは戻らないから郵便物は預かっておいてくれと言う彼女なりの意思表示であり、それが意味することは・・・

「寧々さん、また旅に出ちゃったみたい・・・」

そう言うことである。この結果に一行、特に戒は盛大に溜め息をつ

いて肩を落とした。利香を救う方法が分かるかもしれないからだ、それは当然である。

「と、とりあえず街に戻らない？ 何時までもここにこうしてても仕方ないし。」

「そうですね、戻ってじっくり考えましょう。」

青羽とノーマは肩を落とした戒にそう言って、宿へと引き返していった。

街中

現在青羽は単独で街中を歩きまわっていた。歩き回ると言っても特に目的があるわけでもなく、気晴らしに街をぶらついていると言った感じである。

と言うのもあの後宿に戻ってあれこれと話し合ったが、結局何も思い浮かばなかったのである。このままでは何もいい案は浮かばないだろうと言うことで、3人で思い思いに行動して気分転換でもしようと言った青羽が提案したのだ。

「とは言え、どうしたもんかしらね。」

頭を掻いてそんなことを呟きながら、青羽はそのまま歩いて行った。一方戒は戒で、一人人気のないところをぶらついていた。その顔には先日よりはマシになったとは言え、覇気がないのが丸わかりだった。

「利香……どうすればいいんだ。」

戒がそんなことを呟きながら歩いていると、道端でワゴン車を停めてエンジンを調べている女性を見つけた。そのまま無視するのも何だったので、戒はその女性に声をかけた。

「あの、どうしました？」

「はい？」

戒に声を掛けられてそちらを向く女性、その瞬間彼女から美しい花のような香りが戒の鼻に届いた。

（何だ、香水か？　なんだか……いい香りだな……）

「あの、何か？」

「あっ？！　いえ、すみません。その、何かいい香りがしたもので。」

戒が女性と話していると、後ろの方からノーマがやってくる。と言ってもたまたま歩いていたら戒と同じところに出てきただけであるのだが。

「ん？　あれは戒と……誰です？」

ノーマは戒と親しげに話している女性に首を傾げる。だがその瞬間、ノーマの感覚に激しく反応するものがあった。その反応は彼女にとって慣れ親しんだもの、アンデッドの反応である。

「ッ！？　あの女、まさかっ！」

周囲の気配をくまなく探っていると、反応は戒と一緒にいる女性か

ら出ていた。それが意味するものはつまり、あの女性がアンデッドであるというもの。

（あの女、上級アンデッド?!）

人間からアンデッドの気配がするということは、その人物は上級アンデッドであるということ。その上級アンデッドが戒に近づいた、つまり戒は上級アンデッドに狙われているということ。

ノーマは急いで青羽に連絡した。

「青羽、大変です！ 今戒が上級アンデッドと一緒にいます。」

『ちょっ、それマジで?!』

「はい、戒は気付いていないみたいですが、今彼と一緒にいる女性
はッ?!?!?」

ノーマが青羽に事の詳細を知らせようとしていると、新たにアンデッドの気配を感じた。流石に上級ではないようだが、ここから大分離れたところである。

「非常にマズイ事態になりました、別の場所にもアンデッドです。」
『げえっ! ど、どうする?』

「~~~~ッ! 仕方ありません、青羽は今どこに?」
『えっと、もうちょっとで公園の近くに着くけど・・・』

もう一方のアンデッドが出たのは街中、青羽がいる公園近くとは大分離れたところだ。そしてこの道を真っ直ぐ行けば公園に出られる。案の定戒と女性は直った車で道を進んで公園の方に向かった。

この時点でノーマの考えは決まった。

「青羽はそのまま公園の近くを、戒がもうじきワゴン車でそこに着きますから。もう一方は私が。」

『分かった、頑張ってるね!』

「お互いに、それでは。」

ノーマはそう言って携帯を切ると、踵を返して街中へと戻って行った。

そして・・・それを近くの車の中からみている一人の男性の姿が。

「あららら、そういう展開か。けどあの子も男ねえ、美しいものには弱いかな。」

そう言うとき男性はその場から走り去って行ってしまった。

一方街中では、1台のバスに何人かの子供とそれを迎えに来た大人たちの姿があった。どうやら幼稚園の送迎バスらしい。とそこへ、1体のトンボの様なアンデッド・・・ドラゴンフライアンデッドが現れた。

最初は誰も気付かなかったが、一人の子供がその存在に気付いた。

「ね、ねえ・・・あれ・・・」

「ん？ き・・・きやあああああつ?!」

「うわあああああつ!?!」

一人が気付くと、全員が気付いて一気にパニックになる。バスの入り口にいた全員が車内へと入って行ってしまい、袋小路へと追い込

まれることになる。

そして対するアンデッドは、追い込まれた獲物を見て嘲笑うように、阿鼻叫喚の車内へと入って行こうとする。そこに……

「待てっ！」

騒ぎを聞き付けた周囲にいたライダー、そして協会でこのアンデッドの存在を知ったライダー達が集まって来た。アンデッドは自分に敵意を向けてくるライダー達に興味を示し、バスから出ていく。

その隙に運転手はバスを発進させて、その場から離れて行ってしまった。だがアンデッドはそれを気にすることなく、ライダー達に近付いていく。

「かかって来い、封印してやる。変身！」

《Open up》

一人が変身すると、他の人も変身する。そしてアンデッド1体と複数のライダーが戦い始めた。

第21話 誘惑（後書き）

現在このブレイド編でエンジェビルさんの『デルタと黄金の不死鳥』とのコラボ小説を執筆中です。一方のキバ編ではリスさんの『新設・仮面ライダーキバ』とのコラボ小説を執筆中、どちらも近いうちにお見せできると思います。

第22話 感謝の気持ち

ナティ・街中

ドラゴンフライアンデッドと複数の仮面ライダーダガーの戦いは一方的なものとなっていた、アンデッドの優勢と言う形で。

ダガー達は数に物を言わせて一気にアンデッドを倒そうと考えていたのだが、戦いはアンデッドのペースで進み常に1対1の状況に持ち込まれてしまう。何故なら……

「うわあああつ!? 離せ、離せよッ!?」

「くそっ!? こいつまたっ!」

アンデッドは自分が飛行できることを利用して、ダガーを一人一人高いビルの上などに連れて行って一人ずつ確実に倒していったのだ。地上に降りてきた際に一気にダメージを与えようにも、空中をすばやく移動するトンボの特性を備えたアンデッドを相手にするには、この場のダガー達では役不足であった。

ダガー達が苦戦しているところに、漸くノーマも到着する。彼女が到着したとき、さらに一人のダガーが別のビルの屋上へと連れて行かれてしまっていた。

ノーマはそれを見るとすぐにカリスラウザーを腰に装着して、『チェンジ・マンティス』のカードをラウズする。

「変身!」

《Change》

ノーマはカリスに変身すると、迷うことなくバイクでアンデッドが降り立ったビルに入っていく。

そしてそのまま途中にいるビルで働いている人が驚くのも気にせず屋上まで辿り着く。彼女が屋上にたどり着いた時にはすでにダガーは倒されており、アンデッドは新たな目標をカリスに定めた。

「……来なさい。」

カリスが挑発すると、アンデッドは彼女目掛けて飛びかかって来た。

「フッ、ハッ！」

カリスは牽制目的でパンチを繰り出すが、アンデッドはそれを軽々と回避すると得意の飛行で一氣にカリスに詰め寄る。カリスもそれを迎撃しようとするが、突然上昇したり下降したりと空中を自在に動き回るアンデッドに翻弄されていた。

そして一瞬の隙を突かれて、カリスはアンデッドに組みつかれてそのまま空中に連れ去られてしまう。

「しまった!？ く、くそっ！」

カリスは何とかアンデッドを振り払おうとするが、アンデッドもなかなか手を離さない。

「クッ、ならこれはどうです！」

カリスはアンデッドの手の片方を振りほどくと、カリスアローから

フォースアローを放ってダメージを与える。攻撃を受けたアンデッドはカリスと共にそのまま急降下、街中にあるファミリーレストランに突っ込んで行ってしまった。

「うわああああっ!?!」

「きやああああああっ?!」

たちまちパニックになる店内、店の客や従業員はカリスとアンデッドからひたすら距離をとる。

カリスは一早く体勢を立て直すと、すぐさまアンデッドに攻撃を仕掛けようとするが・・・

その瞬間、周囲にいる一般人が目にとまった。

「あっ!?! (まずい、この場で戦えば彼らを巻き込んでしまう! 何とかこいつを此処から叩き出さないと!・・・・ん?)」

そう考えた瞬間カリスは自分の思考に疑問を抱くが、アンデッドの方はお構いなしにカリスに攻撃を仕掛けてくる。カリスもそれに対抗するが、誤射を避けるためフォースアローが使えないなどの制約があるため何時もの実力が出し切れていなかった。

「クウツ!?! (何故です! 何故私は彼らにここまで気を使っているのです!?! 私の、私の使命は・・・・)」

全てのアンデッドを封印すること。そうカリスが心の中で叫ぼうとした時、アンデッドが両刃のダガーを振りおろしてきた。カリスは咄嗟に避けようとしたが、その時すぐ後ろに子供連れの家族がいることに気付く。

「ッ!?!?!? クッ!」

その瞬間、カリスは回避を止め防御に回ることにした。だがいかに彼女の反射神経が優れているとは言え、この攻撃を防ぐには些か行動が遅すぎた。カリスはアンデッドの容赦のない攻撃を喰らってしまう。

「がはああっ?! グッ、あああああっ!」

アンデッドの攻撃をまともに食らったカリスだが、それに怯まず攻撃直後にアンデッドに出来た隙を突いてアンデッドを店外まで押し込めることに成功した。

店の外に出てしまえばこちらのモノ、カリスは躊躇うことなくフォースアローなどを駆使してアンデッドを追い詰めていった。

「これで、トドメです。」

《Drill Tornado》

《Spinning Attack》

カリスが2枚のカードをラウズした瞬間、彼女の周りに猛烈な風が集まってくる。そして彼女が宙に浮かびあがった瞬間、アンデッドはその場から逃げだすために空中へと逃げて行った。

「ハアアアアッ!」

だがそう易々と逃がすようなカリスではない、アンデッドが逃げる進路を予想して『スピニング・アタック』を放った。必殺技はカリスの読み通りにアンデッドに当たり、地上に叩き落とされたアンデ

ツドはそのままバックルが開いて身動き一つとらなかった。

カリスはアンデッドをコモンブランクで封印すると、『スピリット』のカードで変身を解除した。するとその時を見計らっていたかのように、店内から一組の家族がやってくる。ノーマが咄嗟に盾になったあの家族である。

「？ 何か御用ですか？」

「あの、先程はありがとうございました。おかげさまで私達家族は助かりました。」

「そ、そんな・・・私は・・・」

家族の中で男性がノーマに感謝してくるが、ノーマとしてはむしろ今回の戦いは酷いものだった。あの程度の相手に時間をかけ過ぎ、拳句に無駄に被害を広めてしまった。ノーマ的には自分で自分を殴りたい気分だ。

だが目の前の家族は、そんなことを気にもせずにノーマに感謝してくる。

「本当に、ありがとうございます！」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

男性に続いて女性と二人の子供だろう男の子も感謝の言葉を述べてきた。ノーマは一瞬それに戸惑ったが、すぐに気を取り直すと軽く微笑してそれに返した。

「いえ、それほどのことは。急いでいるので私はこれで、それでは。」

ノーマはそれだけ言って足早にその場から立ち去って行く、急いでバイクを回収して青羽の方へと向かわなければならぬ。

ノーマがバイクが置いてあるビルに向かっている途中、先程の感謝の言葉が脳裏に浮かぶ。

『ありがとうございます。』

『ありがとうございます！』

『ありがとう！』

「・・・・フッフ・・・・」

彼らの感謝の言葉と笑顔を思い浮かべた途端、心に何かこそばゆいモノを感じた。それと同時に頬が緩んでしまい、自然と笑みを浮かべてしまう。

それは以前にも感じたことのある感情、嘗てツツバで赤城母子を助けて理帆子に礼を言われたときに感じたのと同じ感情だった。それが一体何なのか、ノーマには分からなかった。だが一つ言えることは・・・・

（決して・・・・悪い感情ではありませんね。）

そんなことを考えながら、バイクが置いてあるビルへと向かって行った。

公園

青羽は公園に辿り着くと、すぐに周囲を見渡した。とりあえず今は一刻も早く戒と合流することが先決である。

注意深くあたりを見渡すと、戒はすぐに見つかった。一人の女性と一緒に公園に入って行く途中だったのだ。

「見つけた！ 戒と一緒にいるってことは・・・あの女が上級アンデッド！」

青羽は急いで戒が入って行った所へ向かう。そして戒に声をかけようとしたその時、出し抜けに何者かに首を掴まれて公園の木に向かって放り投げられた。

「グッ、がはっ?! な、何よあんだ！」

青羽を投げ飛ばしたのは、一人の派手な格好をした男性だった。青羽が男性に向かって怒鳴ると、彼は不敵な笑みを浮かべて口を開いた。

「野暮なことしないでよ。いま、デート中なんだからさあ。」

男の言葉に青羽が一瞬戒の方を見た瞬間・・・

「フオオオオオオッ！」

「うわっ!? くう・・・」

男性は奇声を発しながら口から青白いビームを出した。それを喰らって吹き飛ばされた青羽は、再び木に激突してしまう。

「ちょっと待ってよ、あんだ・・・まさか上級アンデッド？」

「ほほう、おっお当たりッ！ フオオオオオオオッ！」

青羽がある恐ろしい考えを口にする、男性はそれを肯定して再び奇声を発した。すると彼の体が変化して、山羊のような姿のアンデッド……カプリコーンアンデッドに変化した。

「ハッ！」

青羽がその姿に目を見開いていると、カプリコーンは腰から三日月型のブーメランを飛ばしてくる。青羽はそれをギリギリのところで回避した。

「クッ、変身！」

《Turn up》

回避すると同時にブレイバックルにカードを装填して、ブレイドに変身する青羽。

ブレイドは変身すると、即座にカプリコーンと戦い出す。序盤は上級アンデッドのパワーに押されていたブレイドだが、次第にその動きになれると反撃を開始。ラウザーを駆使して、カプリコーンと互角に戦うようになっていった。

「フッ、ハアッ、イヤアッ！」

ブレイドとカプリコーンはお互い一步も退かずに戦っていく。そして次第に戦いの場は、戒と女性がいるところへと移って行った。

一方戒は、先程出会った女性……吉永 みゆきと話し込んでいた。つい先ほどまでは利香のことで頭が一杯になっていた筈なのに、今は不思議と気分が落ち着いている。

「なるほど、みゆきさんもあちこちを旅して・・・」

「ええ、旅先でいろいろな人と出会うのが、なんだか楽しくって。」

二人がそんな話をしていると、戒が後ろのほうで何かの気配を感じた。彼がそちらを向くと、そこには山羊の様なアンデッドと戦っているブレイドの姿が。

「あ、青羽ッ!？」

「あ、あれってもしかして・・・」

「アンデッドです。みゆきさんは此处にいてください!」

戒はそう言っ青羽の加勢に向かおうとしたが、それをみゆきが引き留める。

「やめて! 危ない真似しないで・・・いかないで。」

「みゆきさん・・・」

彼女のその言葉と表情に、戒はそれに従いたくなってしまう。戒が青羽への援護を取り止め、その場に残ろうとした時・・・

（って、何を考えてるんだ僕はッ!？）

寸でのところで戒は思い留まった。彼を思い留ませたのは純粹に仲間を助けねばという気持ち、それと脳裏に浮かび上がった利香の笑顔だった。

「（こんな所で腑抜けてる場合じゃないだろう、まったく・・・）すみませんみゆきさん、あのライダー僕の仲間なんです。僕自信こんなところで止まってるわけにはいかないし。」

それだけ言ってその場を離れていく戒。みゆきはその後ろ姿を見つめて……

「チッ！」

と舌打ちしてその場を離れて行った。

戒はすぐさまギャレンバックルを腰に装着して変身し、ブレイドに加勢した。

「すまない青羽、少し遅れた。」
「ホントよ！」

ギャレンが加勢したことで形勢は一気にブレイド達に有利になった。カプリコーンも必死に対抗するが、息の合ったコンビネーションで攻撃してくるブレイドとギャレンに成す術がなかった。

「クソッ！ 俺はそこら辺のアンデッドとは一味違う、なのに何故！？」
「フッ！」

カプリコーンが困惑の声を出す、ブレイドはそれに構わずラウザーから2枚のカードを出してカプリコーンにラウザーを投げつける。カプリコーンはギリギリでそれを回避するが同時にブレイドも相手を飛び越えて、ラウザーの近くに着地していた。

そしてすぐにラウザーを地面から引き抜くと、2枚のカードをラウズする。

《Slash Thunder》

《Lightning Slash》

「はああああ・・・デヤアアアアッ！」

「があああああっ?!」

ブレイドの必殺技『ライトニング・スラッシュ』が発動するが、攻撃はカプリコーンの腕に傷をつける程度にとどまる。

斬られたところを押さえているカプリコーンにブレイドとギャレンが追い打ちをかけようとしたその時、二人の前にみゆきが現れる。

「みゆきさん!？」

「初めてよ・・・私に魅了されなかった人間なんて。」

「え? 一体何を・・・」

ギャレンがそう尋ねようとした時、みゆきの周りに無数の花卉が舞い上がり、それが晴れた瞬間彼女の姿は花の様な異形・・・オーキッドアンデッドに変化していた。

「なっ?!」

「チィッ！」

ギャレンがみゆきの正体に驚愕し、ブレイドがオーキッドに斬りかかるようにするが、それよりも早くにオーキッドが二人に背中を向けた。そして後頭部についているもう一つの顔から花卉が吐き散らされて、ブレイドはその場に足止めされてしまう。

「うっ、クソッ！」

そして花卉が晴れた時、そこにはオーキッドどころかカプリコーン

の姿すらなかった。ブレイド達はしばし周囲に気を配っていたが、完全に逃げられたことを悟ると変身を解除した。

「ふう、大丈夫？ 戒・・・」

「ああ、なんとかね。その・・・すまない、ちょっと気分が沈んでみたいだ。」

「気にしなくてもいいわ。大事な人のことだもん、いつも以上に緊張って悩むなんて当たり前でしょ？」

二人が話していると、ノーマも合流してきた。彼女は二人が無事なことを確認すると少しホッとしたような顔になる。

その後3人で宿に戻って話し合った結果、翌日次の街『ラウクト』に向かうことが決まった。

翌日・青羽達が街を離れた頃

カプリコーンアンデッドが人間態になった男・・・矢沢は、同じ上級アンデッドの人間態であるみゆきのワゴン車に乗っていた。

「ちつくしょう、ブレイドの奴・・・ふざけやがって！ この俺に恥かせてくれちゃってさ・・・次に会った時には、ぶちのめしてやる！」

矢沢は右腕を押さえながらそう言うと、運転しているみゆきに視線を向ける。

「よお、なんで俺を助けたんだ？ 助かったっちゃ助かったけどよ・・・」

「あなたにも協力してほしいからよ。」

「協力？」

「そう．．．ブレイド達を倒すのに．．．」

みゆきはそう言って、車のアクセルを踏み込んでさらにスピードを上げて街道を走って行った。

第22話 感謝の気持ち（後書き）

と言う訳で3連続更新でした。次回は遂にエンジェルさんの『デ
ルタと黄金の不死鳥』とのコラボ小説です！ どうかお楽しみに！
それでは。

第23話 通りすがりの仮面ライダー（前書き）

どうも、黒服です。今回は遂に、エンジエビルさんの小説『デルタと黄金の不死鳥』とのコラボ小説です！

第23話 通りすがりの仮面ライダー

街道

ある日、街道を一人の女性が歩いていた。歳は20代半ば、緩くウエーブのかかった紫色の髪にゴスロリ調の服を着て、右手の人差し指に赤い紐を複雑に巻いた女性である。

その女性・・・寧々が歩きながら本を読んでいると、突然風が吹いて彼女の髪を靡かせていく。風は髪だけでなく本を持っている右手の人差し指に巻かれた紐も靡かせる。するとその時、本にだけ視線を向けていた寧々が突然顔を上げた。まるで何かに気付いたかのよう。

「あらあら・・・随分と珍しいお客さんが来たみたいね。」

寧々は微笑みながらそう言うと、再び本に視線を落として歩き出した。

ラウクド・路地裏

誰もいなかった路地裏に、突然灰色のオーロラが出現した。オーロラが通り過ぎていくと、それまでそこにはいなかった筈の組の男が現れた。赤紫色の着物を着て長めの金髪、そして左目に包帯を眼帯の様に巻いた男性と、黒髪に爆乳を持ったおっとりとした感じの女性である。

「ここが次の世界ですか。ここは一体どんな世界なんでしょうね

え、十兵衛さん。」

「さてな・・・どんな世界かは知らないが、俺様はあずささえ居てくれたらどんな世界でも構わないぞ。」

「十兵衛さん……。」

のっけから甘い雰囲気醸し出しているのは、『柳生 十兵衛三厳』と『三浦 あずさ』の二人である。二人はそれぞれ【仮面ライダー クウガ】、【仮面ライダーディケイド】として様々な世界を旅してまわった人物である。

少し前までは二人とも『765プロダクション』という芸能プロダクションに所属していた、十兵衛はプロデューサーとして、あずさはアイドルとして活躍して。

二人はこことは別の世界『555の世界』にしばらく滞在していたが、その世界での役目を終えてはぐれていた仲間のアイドル達と無事に合流。その後彼らの元の世界である『クウガの世界』に戻ることに成功した。

ちなみにその際、彼らと行動を共にしていた『アギトの世界』の住人である『津上 翔一』も自分の世界に帰って行ったのだが、十兵衛達の仲間の一人である『音無 小鳥』が、

『私も翔一さんと一緒にこの世界に残ります!!』

等と言って一悶着あったのだが、何とか説得して無事に元の世界に戻ってこれた。

その後十兵衛とあずさはプロデューサーとアイドルを辞め、現在は二人で様々な世界を旅しているのである。お互いに恋人としての時間を、静かに過ごしながら……

「とりあえずここから出るか。こんな所じゃ情報収集も何もあったもんじゃない。」

「そうですねー、それじゃ「きゃあああああつ?!」・・・っ!?!」

二人がとりあえず路地裏から出ようとすると、突然どこからか人の悲鳴が聞こえてくる。それも一人や二人ではなく複数の人の悲鳴である。

「十兵衛さん!」

「ああ、行くぞ!」

二人が急いで悲鳴が聞こえた方へ向かうと、そこには街の大通りに無数に存在する黒い異形・・・ダークローチに群れがいた。

「この世界にも怪人がいるのか・・・あずさ!」

「はい!」

十兵衛が腰にクウガに変身するのに必要な『アークル』を出現させ、あずさが腰にディケイドの変身ツール『ディケイドライバー』を着する。そしていざ変身しようとした時、大通りのあちこちから人が集まってきた。集まってきた人たちは老若男女様々だが、全員に共通して腰にバックルが装着されている。

「変身!」

《Open up》

一人が変身して【仮面ライダーダガー】になると他の人たちも次々と変身し、大通りはたちまちダガーとダークローチが入り乱れる戦

場と化す。十兵衛とあずさはその光景にしばし呆然となる。

「な、何だこいつ等は？」

「仮面ライダーがいっぱいです。」

二人の前では複数のダガーとダークローチ達が一進一退の攻防を繰り広げる。その時、二人の後ろの方から一人の少年が走ってきた。

「ぬおおおっ！ ヤバい、出遅れた！？ こうしちゃいられねえ！」

少年はそう言うと、急いで懷から1枚のカードとバツクルを取り出してカードをバツクルに装填、即座に腰に装着する。

「変身！」

《Turn up》

少年がバツクルについているハンドルを引くと、彼の目の前にオリハルコンエレメントが生成。少年がそれをくぐると、黒いライダースーツに灰色の装甲を持った重厚そうなライダーに変身した。

「よっしゃ！ 行くぜえ！」

少年は意気込むと手斧の様な武器を持ってダークローチに突っ込んでいく。パワーと防御力に優れているのかダークローチ達をモノともせずに蹴散らしていくが、考え無しに突っ込んでいった為か何時しか周りに味方がいない状況に陥ってしまう。

「えっ?! ちょっと、ヤバ、どうしよう!？」

「あいつ不味いな・・・」

「十兵衛さん！」

「応！」

少年が変身したライダーが窮地に陥ったのを見て、十兵衛とあずさは彼を助ける為に改めて変身する。

「変身！」

《KAMENRIDE DECADE》

十兵衛が変身ポーズをとると、彼の体が見るうちに変化していき赤い鎧と複眼をもった戦士・仮面ライダークウガに変身した。あずさは腰の『ライドブッカー』から取り出したカードをディケイドライバーに装填して90°回転させる、すると灰色の虚像がいくつもあずさに重なっていき最後にドライバーから飛び出た複数のプレートがディケイドの顔に差し込まれて、ピンク色に色づいて仮面ライダーディケイドに変身する。

クウガとディケイドは少年を取り囲んでいるダークローチに飛び掛かると、次々とダークローチを蹴散らしていく。

「ふう、大丈夫か？ 坊主。」

「えっと・・・あんた達は、一体？」

少年が変身したライダーは突然現れた見たこともないライダーに呆然としつつそう尋ねる。

「俺様達か？ 俺様達は・・・」

「通りすがりの仮面ライダーと・・・」

「不可能を可能にする仮面ライダーだ！」

「覚えておけ（きなさい）！！」

そう言って二人は再びダークローチの群れに突っ込んでいく、少年はその後ろ姿を呆然と見つめていた。

その後はクウガ・ディケイドの活躍もあり、ダークローチ達はあつという間に倒されていった。十兵衛とあずさは戦闘がある程度終わってくる、さり気無くその場を去って行く。先ほどの少年の反応から、この世界では自分達は少々目立つ存在であることを直感したのである。もしあのままあそこにいたら少々面倒なことになっていたであろう。

「新しい世界についていきなり戦闘とは、まったくついてない。」
「でも本当に何なんでしょう、この世界は？ 見たところ仮面ライダーが普通に生活の中に溶け込んでるみたいですが……。」

あずさが周囲を見渡すと、街のあちこちに何らかの形で仮面ライダーを見かける。ポスター、街頭テレビ、本屋に置いてある雑誌の表紙など様々な所に仮面ライダーがいた。

「とりあえず本屋にでも行ってみよう、何かわかるだろう。」

十兵衛がそう言って、二人は手近な本屋へと足を運んだ。

公園

十兵衛達は先ほど立ち寄った本屋で買った雑誌を読んで、この世界に関する情報を入手していた。それによってわかったのは……

「この世界、『ブレイドの世界』によく似てるな。違うのはライダー

ーもアンデッドも沢山いるってところか・・・。」

二人が入手できた情報は、

1、この世界では仮面ライダー、アンデッド共に一般に認知されている。

2、アンデッドを封印する為の協会・ボードが世界中に存在しており、協会に申請すれば誰でも仮面ライダーになれる。

と言った様な事だった。他にも、『怪奇!？ 宙に浮く牙の謎に迫る!!』や『コウモリ男現る!？』など微妙に気になる事が買った雑誌には書いてあったが、概ねこの世界について分かったのはこの程度であった。

「さて、これからどうするか・・・。」

「まあゆっくり考えましよう、焦る必要も無いですし。」

あずさがほんわかと微笑みながらそんな事を言うと・・・

出し抜けに二人が座っているベンチの後ろから突然狼のようなアンデッド・・・ウルファンデッドが飛び出してきた。

「あずさ!？」

「きゃっ?!」

咄嗟に十兵衛があずさを抱きしめてその場を飛び退いたため、アンデッドの爪があずさを傷付けることはなかった。

「おのれえ・・・人間にしてはなかなかやるじゃないか・・・。」

アンデッドが悔しそうにそう言う中、十兵衛とあずさはアンデッドを見据えながら戦闘の構えをとる。

「まったく次から次へと・・・本当に忙しい世界だな。」
「退屈しないでいいじゃないですか。」

二人はそんな会話をするが、その実全く隙はなかった。油断なくアンデッドを見つめながら十兵衛はアークルを、あずさはディケイドライバーを腰に装着する。

「変身！」

《K A M E N R I D E D E C A D E》

二人はクウガとディケイドに変身すると、同時にアンデッドに攻撃する。だが今度の敵は少々手強く、素早い動きで翻弄されてしまう。

「クソッ！　なんてすばしっこい奴だ。」

「それなら、これでどうです！」

《A T T A C K R I D E B L A S T》

ディケイドが広範囲に光弾をバラ撒く技『ディケイドブラスト』を発動させようとライダーカードを装填し銃口をアンデッドの方に向けた時、二人の後ろから一人の少女が走ってきた。

「変身！」

《T u r n u p》

「ん？　のわっ!？」

「きゃっ!？」

背後から聞こえてきた声と電子音声に二人が振り向くと同時に、オリハルコンエレメントが生成。二人はそれに弾き飛ばされ、代わりに一人の赤い髪をポニーテールにした少女がゲートをくぐって仮面ライダーに変身する。その姿はパツと見はクウガとディケイドが良く知る仮面ライダーブレイドだったが……

「赤い……ブレイド？」

本来青い筈のライダースーツ部分は赤くアーマーも黒、そして複眼は青と彼らが知るブレイドとはカラーリングが大分異なっていた。

「チィ……。今度は一体何だ！」

「上級アンデッド……。見つけたわ。あんたの力、あたしが貰う！」

そう言うとき赤いブレイド……。クリムゾンブレイドは、腰からブレイドラウザーを抜いて、一気にアンデッドに突っ込んでいく。

「ハアアアアッ！」

Cブレイドが振り下ろすラウザーを、アンデッドはギリギリで回避する。だがCブレイドの攻撃は留まる事を知らず、次々と素早くかつ重い斬撃をアンデッドに繰り返す。次第にアンデッドも避け切る事が出来ず、Cブレイドの攻撃を受けていく。

「グウツ……。ガハッ！」

「セヤアッ！」

Cブレイドの斬撃を受けて一瞬怯んだアンデッドに、さらに重い斬撃が繰り返される。

「グアアアッ!？」

その斬撃を受けてアンデッドは大きく吹き飛ばされる、それを見てCブレイドはトドメの必殺技を放つ為に3枚のカードをラウズする。

《Kick Fire Mach》
《Burning Sonic》

Cブレイドが3枚のカード、スペードの5『キック・ローカスト』と6『ファイア・フライ』そして9『マッハ・ジャガー』をラウズして発動する3枚コンボの必殺技、『バーニング・ソニック』をアンデッドに叩き込む。

「はあああああ・・・、ハアッ!」

「ぬ、グワアアアアッ?!」

Cブレイドの攻撃を受けたアンデッドは吹き飛ばされながら爆発、後にはバツクルが開いた状態で倒れたアンデッドがいた。Cブレイドはそれにコモンブランクを投げ封印する、手に入れたカードはスペードのJ『フュージョン・ウルフ』であった。

「よしっ! カテゴリーJゲット、これに必要なカードは揃ったことだし、後は・・・。」

「おい!」

Cブレイドが手に入れたカードを見て独り言を呟いている時、クウガが声をかける。流星の彼も戦闘中にいきなり乱入されて、拳句の果てに戦闘から弾き出されるなど初めての経験であった。文句の一つも言いたくなるだろう。

「お前、いくらなんでもさっきのは無いんじゃないか？ 戦闘中にいきなり人を弾き飛ばしたりして。」

「アンデッド狩りは早い者勝ちよ。それにライダーが変身しようって時に咄嗟に避けようとしてもしないあんた達だって・・・ちよつと待って、何そのベルト？」

Cブレイドがクウガの抗議に反論しようとする、ある事に気付く。自分が知るモノとは全く異なる形状のベルト、見たところラウズカードが入っているようには見えないが。

「・・・ああ、そっか。あんた達がディケイドとクウガね？ 世界の破壊者とか言う。」

「ほお、俺様達の事を知っててもらえたとは・・・光栄だな。」

Cブレイドはバックルの形状が自分達のモノとは全く違う事から、相手がクウガとディケイドであることに気付く。

「ちよつと前に鳴滝とか言う変なオッサンが現れてね、あんた達の事はそいつから聞いたわ。」

「それで？ 俺様達が誰だか分かって、お前はどするつもりだ？」

「別に。あんた達が本当に世界を滅ぼすかどうかなんて、あたしには分からないしねえ・・・ただ。」

《Fusion》

クウガの問いかけに、Cブレイドは特に興味も無いと言った風に答えながらたった今手に入れたカード『フュージョン・ウルフ』をラウズして、ラウザーのAPを回復させる。そしてAPが回復したのを確認すると、ラウザーの切っ先をディケイドとクウガに向ける。

「世界の破壊者と言われるほどの強さ・・・見せてもらいたいわ、

あたしがどこまで通用するようになったのか・・・それを確かめる為に。」

Cブレイドはそう言ってデイケイドとクウガに、宣戦布告をした。

第23話 通りすがりの仮面ライダー（後書き）

次回、遂に紅羽があずさ・十兵衛と激突！ コラボ小説は基本眺めの話になると思います。

コラボ小説を書くにあたり、快く応じてくださったエンジェルさん、本当にありがとうございます！ 執筆するにあたって何度も『デル不死』を読み直すなどしてあずさと十兵衛の性格を再現しましたが、「ここがおかしい」などと言うところがあったら遠慮なく仰ってください。

今回何気に名前は出ませんでした但し新キャラが登場です。正式に登場するのはコラボ終了後ですね。

後何気にブレイド編で初めて紅羽を登場させました、キバ編では何度か登場してるんですけどね（汗）

第24話 激突！ 世界の破壊者 対 紅蓮の剣

公園

クウガ・ディケイドの二人は現在、Cブレイドと睨みあっていた。

「ここで俺様達が戦うことに意味はないだろう、出来れば見逃してくれるとありがたいんだが・・・。」

「あたしには大いに意味があるわ、『世界の破壊者』と『究極の闇をもたらすライダー』・・・一体どれだけ強いのか興味がある。」

Cブレイドから発せられる気迫がさらに大きくなる、無用な戦いを避けたい二人は何とか説得をして宥めようとした。

「あのー、どうしても戦わないといけないんでしょうか。十兵衛さんが言うように私達が戦うことに意味は・・・。」

「だからあたし的には意味があるのよ・・・あっ！ そうだ、あんな達この世界についてどれだけ知識持ってる？」

「えっ？」

Cブレイドからの質問に困惑する二人、そんな二人を尻目にCブレイドは言葉を続ける。

「大方ほとんど何にも分かって無い状況なんじゃない？ あたしと戦ってくれたら、あたしがあんな達のガイドになってあげるんだけど・・・。」

「む・・・。」

「いろいろ教えてあげるわよ。この世界の細かい事とか、いろいろとね。」

Cブレイドの言葉にクウガとディケイドは考え込む、彼女の出す提案は非常に魅力的だった。二人は正直なところこの世界については完全に手探り状態で、事情を知っていて色々と教えてくれる人物は非常にありがたい。二人はCブレイドに背を向けると、小声で相談し始める。

「ど、どうします？ 十兵衛さん・・・」

「うむ・・・魅力的な提案ではあるが、どうしたものか・・・。あずさは、どうしたい？」

「私はどちらでもいいですよ、十兵衛さんにお任せします。」
「そうか・・・よしっ！」

ディケイドの言葉にどうするかを決めたクウガは、Cブレイドに向き直る。

「相談は終わった？ それで、どうする？」

「いいだろう、お前の望み通り戦ってやる。その代わり・・・。」

「安心しなさい、あたしは約束は守る方だから。それじゃ・・・。」

Cブレイドはクウガの答えに満足し、ラウザーを腰だめに構える。
そして・・・

「ハアアアアアアッ！」

二人に向けて一気に駆け抜けていき、射程に入った瞬間斬撃を喰らわせる。攻撃の対象になったのは・・・ディケイド。

「クッ!？」

想像以上のスピードで迫ってきたCブレイドに驚きつつも、咄嗟にソードモードのライドブッカードで斬撃を受け止める。

「ハッ、フッ、ハッ！」

その後もCブレイドの攻撃は続き、次々と斬撃がディケイドを襲う。

「クッ、ハッ、えいっ！」

ディケイドも何とか反撃しようとするが、Cブレイドの連撃の前に防戦一方となる。その時、クウガがディケイドを援護する。

「おりゃあっ！」

「チッ!？」

クウガがCブレイドに飛びかかりながらパンチを繰り出し、Cブレイドはそれを辛くも回避する。

「あずさ、大丈夫か！」

「はい、十兵衛さん。」

クウガの妨害にあった事でディケイドから距離をとらざるを得なくなったCブレイド、戦闘は一時膠着状態となる。

「こいつ・・・かなり強いな。まさかあずさが防戦一方になるとは・・・」

「反撃できる隙が全然なかったです、十兵衛さんも気を付けてください。」

「安心しろ、俺様は不可能を可能にする男だぞ。それに2体1だ、負ける筈が無い。」

そうやって見せるクウガに対し、Cブレイドは仮面の下で不敵な笑みを浮かべる。

「ふーん・・・じゃあこんなのはどう？」

《J e m i n i》

そうやってCブレイドがラウズしたのはダイヤの9 《ジェミニ・ゼブラ》のカード、それをラウズした瞬間Cブレイドが二人に分身する。

「マジかっ！？ 厄介な奴だな。」

「これで数的には五分五分ね、行くわよ！」

数的優位が崩れたことに焦るクウガ、Cブレイドはそんな彼を見つづ二人に向かっていく。

クウガはCブレイドに苦戦していた。元々クウガ自体には武器が無く、フォームチェンジしようにもその隙を与えてはくれなかった。

「クッ、本当に強いなお前は！」

「お褒めに預かり光栄ね、でもまだまだこんなモノじゃないわよ！」

その後もCブレイドの攻撃は続き、クウガはそれを回避するので精一杯だった。

一方ディケイドの方はCブレイドと互角にやり合っていた。ガンモードにしたライドブッカードによる銃撃で距離をとりながら戦って、何とかここまで持ち込んだのだがそこから先へ踏み込む事が出来な

いだった。

「このおとおおっ！」

「クッ?!」

ディケイドがライドブッカーで銃撃するが、Cブレイドは銃撃を腕とラウザーで防ぎながら突っ込んできたのである。度々強引に距離を詰めてくるCブレイドに、ディケイドは決め手を与えられずにいた。

「ほらどうしたの? ディケイドってのはこんなもん！」

「ま、まだまだです！」

《ATTACK RIDE ILLUSION》

ディケイドが新たに1枚のライダーカードをドライバーに装填すると、複数のディケイドの分身を作り出す『ディケイドイリュージョン』を発動。5体の分身体がCブレイドの前に立ち塞がる。

「ちよっ?! いくらなんでも多すぎじゃないこれ、クソッ！」

総勢6人のディケイドからの波状攻撃に一時苦戦するCブレイド、だがすぐに体勢を立て直すと、オーブントレイから1枚のカードを取り出す。

「そっちがそう来るなら、こっちはこれよ！」

《Mach》

Cブレイドはスピードの9『マッハ・ジャガー』をラウズして高速で移動、スピードを生かして瞬く間に5体の分身体を消滅させる。

「ふん、こんなもん《KAMEN RIDE》・・・ん？」

「目には目、歯には歯・・・ブレイドにはブレイドです!」
《BLADE》

Cブレイドが分身体の相手をしている間に、ディケイドはライドブッカードから1枚のカード『カメンライド ブレイド』を装填する。するとディケイドの前にオリハルコンエレメントが現れ、ディケイドがそれをくぐるとその姿は仮面ライダーブレイドのモノになっていた。

「ブレイド?! まさか、他のライダーに変身した!?!」
「行きますよ!」

そう言うとき、ディケイドCブレイドはCブレイドに斬りかかっていく、Cブレイドも一瞬反応が遅れたが即座に反撃した。

その頃クウガとCブレイドの方は、先程とは形勢が逆転していた。

クウガは一瞬の隙を突いてタイタンフォームにフォームチェンジ、近くにあった枝を『タイタンソード』に変化させてCブレイドを圧倒し始めた。

「そろそろ、さっきまでの威勢はどうした!」
「くっそ、堅い・・・。」

スピードでは勝っているCブレイドだったが、タイタンフォームの強固な装甲の前に彼女の攻撃はまるで効いていなかった。

「ああもう、攻撃が効かないってのは面倒ねえ。」
「これで・・・終わりだ!」

タイタンフォームはCブレイドの斬撃を弾くと、渾身の一撃をCブレイドに叩き込む。すると攻撃を受けたCブレイドは、その場で消滅していった。どうやらこちらが偽物だったらしい。

「よし、待ってろあずさ！」

クウガがCブレイドの分身体を倒した頃、DブレイドとCブレイドの戦いは接戦となっていた。

「ハッ、クッ、このっ！」

Cブレイドは持ち前の腕でDブレイドに斬りかかっていき、

「えいつ、ヤアッ！」

Dブレイドもそれに対抗する。だが剣の扱いに関してはCブレイドの方が若干勝っていたのか、次第に追い詰められていくDブレイド。そして……

「フッ！」

「ウグッ?!」

Dブレイドの一瞬の隙を突いてCブレイドが相手の腹部にラウザーの刃を叩き込み、その状態で1枚のカード『スラッシュ・リザード』をラウズした。

《Slash》

「ハアッ！」

「きやああああっ?!」

零距离からの『リザード・スラッシュ』を受けて、変身を解除されるDブレイド。そのままあずさの姿に戻ってしまった。

「悪いわね、ブレイドの扱いに関してはあたしの方が長いのよ。」

もし仮にあそこであずさがブレイドではなく他のライダーに変身していたら、結果は異なっていたかもしれない。だがブレイドは紅羽自身も使い、その弱点すら彼女は熟知している。その差がここで現れたのだろう。

その時、分身体のCブレイドを倒したクウガが二人の下にやってくる。

「あずさ?!」

「あっ、あんた分身の方倒せたんだ。あたしとそんなに変わらない強さの筈なのに、結構やるじゃない。」

Cブレイドはクウガが来たのを確認すると、変身を解除して元の姿に戻る。それを見てクウガも変身を解いて、あずさの下に駆け寄る。

「あずさ、大丈夫か？」

「はい、何とか・・・。」

「安心しなさい、急所は外してあるから。しばらくすれば普通に動けるようになるわ。」

紅羽はそう言うのと近くの自販機で適当に飲み物を買って二人に手渡した。

「はい、お疲れさん。」

「お疲れさんって、お前が付き合せたんだろが。」

「男がそういう細かい事気にするもんじゃないわよ。」

「それで、約束の方は。」

「大丈夫、ちゃんと案内してあげるから。その前にまずはそれ飲んで、軽く体力回復させときなさい。」

そう言って自身も買った物に口を付け始める。十兵衛とあずさもとりあえずそれにならって、渡された物を飲み始めた。

街道

時間は少し遡って、街から少し離れた街道。

「やゝん何この子、ホント可愛いっ!」

「あわわ・・・」

青い髪をポニーテールにした少女・・・桐沢 青羽が、ネコ耳に尻尾の生えた一人の少女・・・沖田 結衣に抱きついて頬ずりしていた。

「全く貴女と言う人は・・・。」

「やれやれ・・・だね。」

その近くには呆れた感じで様子を見ている銀髪に赤いサングラスを付けた少女、ノーマ・イクスと、苦笑いしながら見ている黒髪の青年、大神 戒と・・・

「えっと・・・どうしよう?」

「・・・俺に聞くな。」

やや呆然としながらその様子を見ている黒髪ロングヘアに袴履きの青年、沖田 総司と、同じく呆然としているやや大人しそうな少女、広瀬 凜がいた。

第24話 激突！ 世界の破壊者 対 紅蓮の剣（後書き）

今回は前回に引き続きあずさ・十兵衛対紅羽の戦いです。あずさ達の方が二人だったので、紅羽には『ジェミニ』で分身して対抗させました。

DブレイドvsCブレイドと言う色は違えどブレイド同士の対決をさせて見ましたが、これだけでは終わりません。最後の方に少しだけ登場しましたが、沖田 総司一行もこの世界にやってきました。そして彼らが出会ったのはこの世界のブレイド・青羽、と言うことは………此処まで言えば分かりますよね（笑）

次回の更新もお楽しみに！ それでは。

第25話 二人のブレイド（前書き）

どうも、黒服です。コラボ小説第3話、今回は青羽と総司の邂逅です。

第25話 二人のブレイド

街道

この世界に十兵衛とあずさがやってきた時とほぼ同時刻、二人が現れた街から少し離れたところの街道にも灰色のオーロラが発生していた。そしてそこから現れたのは、一人の青年と二人の少女・・・
沖田 総司と広瀬 凜、沖田 結衣の3人である。

沖田 総司はこことは別の『ブレイドの世界』の住人で仮面ライダーブレイドとして戦ってきた。だが元の世界で仲間に裏切られたり社会から拒絶されたりなどされた揚句、あずさ達が以前いた世界『555の世界』に逃げ込み、今はその世界で平穏に暮らしている。

広瀬 凜は『555の世界』で総司が世話になっている家の一人娘で、総司に気があるらしいが今一歩踏み出せていない。

沖田 結衣はキャットウン族と言う種族の少女で、『555の世界』で総司に拾われてからの付き合いである。

「ねえ総司お兄ちゃん、ここ・・・何処？」

「あたし達確か、買い物に行こうとしてたんだよね？ それが何でこんな所に？」

「俺に聞くな。だがまあ大体想像できる、多分別の世界に来てしまったんだろう。」

3人は『555の世界』にて買い物に行こうとしていたところだったのだが、突然彼らの目の前に件の灰色のオーロラが現れてそれをくぐるとこの世界に来てしまっていたのである。

「とりあえずあそこに行ってみよう、どうやら街が「ちょっと!」・
・お?」

とにかくこの場にいても何も始まらない、少し離れたところに街がある様なので総司が二人にそこに行こうと提案しようとした時、後ろから突然声をかけられる。

振り返って見るとそこには3台のバイクと、それに跨った3人の人物がいた。だが総司はその3人自身よりも、3人が乗っているバイクの方に意識が向いていた。

(あれは、ブルースペイダー!? それにシャドーチェイサーにレツドランバスまで、と言うことは・・・)

「? ちょっとどうしたんです、急に黙ったりして?」

「ちょっと尋ねたいんだが、お前達そのバイクどうした?」

突然黙って自分達のバイクを凝視してきた総司に、青い髪の少女・
・桐沢 青羽は訝しげな顔で話しかける。総司はそれに素直に気になっ
ていた事を聞く。

「これ? いいバイクでしょ! あたしが仮面ライダーとして旅に出
るって決めた時に、父さんが知り合いに頼んで作ってもらったオ
ーダーメイドなのよ!」

総司からの質問に青羽は嬉しそうな顔で説明し始める。

「僕のこれは市販のライダー用バイク『ライトチェイサー』を協会
の工房で改造してもらって。」

「私のこれは・・・まあいいでしょう、説明が面倒なので貰い物

と言う事で。」

青羽に続いて戒とノーマが自分のバイクを説明する。

「協会？」

戒の口にした『協会』と言う聞きなれない単語に、総司は怪訝な顔をした。

「『教会』って・・・あのお祈りしたりする？」

「何の事言ってるの？ 協会は協会よ・・・ってもしかしてあんた達、協会知らないの？！」

「いやそれは無いでしょう、この時代協会を知らないなんて人いる訳が・・・。」

凜の協会なんて知らないと言っても言いたげな（と言うか彼女は実際知らない訳ではあるが）仕草に、青羽は驚愕する。

アンデッド封印協会・ボード・・・青羽達が住むこの世界を説明する際に真っ先にキーワードとして挙げられる単語である。世界中に出現するアンデッドを封印する為にライダーシステムを開発し、仮面ライダー達を世界的に支援する組織。

総司達と青羽達がお互いの常識の違いに戸惑っていると、突然突風が吹いてくる。突風と言っても大した物ではなかったが、突然の風に結衣の被っていた帽子が飛ばされる。結衣が慌ててそれを捕まえに行くが、それよりも早くに反応したノーマがキャッチした。

「危ない所でしたね。はい、どう・・・ぞ・・・。」
「へっ？」

「あれって・・・もしかして・・・。」

帽子がとれた結衣の頭を見て3人とも思わず硬直した。そこにあつたのは本来人にある筈が無い・・・ネコ耳。

「あっ!？ え、えっとその・・・これは・・・。」

先程も述べたように結衣は人間ではなくキャットウン族という種族の少女である。その人間との最大の違いは頭部のネコ耳と尻尾、結衣はこのネコ耳をいらないと思っっているらしく普段は帽子などで隠していた。そのネコ耳が風で帽子が飛ばされた瞬間露わになってしまった。

「あ、貴女一体何ですか？」

「動いてるってことは・・・飾りじゃないって事だよねえ。」

挙句に思わずピクリとネコ耳を動かしてしまった為、ただの飾りであると誤魔化す事も出来ない。結衣が何を言われるのかとビクビクしていると、総司が彼女の前に立つ。彼からは『ちよつとでも結衣に変な事を言ったらただでは済まさない』と言った雰囲気が出ていた。

「何だお前ら？ 俺の結衣に何か文句でもあるのか、ん？」

「・・・正体不明の相手に対して警戒するのは当然のことと思いますが？」

「貴様・・・。」

総司の言葉にノーマが反論する。その物言いにいよいよ総司の怒りが爆発しそうになった時、青羽が結衣に近付いて行く。

「あ、青羽？」

「おい、結衣に何か変な事をしたら「か・・・」、か？」
「あの・・・なんですか？」

目の前に立つ青羽に怯えながら尋ねる結衣、すると青羽はそれには
答えず・・・

「可愛いっっ！！」

突然結衣に抱き付いた。そのあまりの事態に青羽と結衣以外の全員
が呆けてしまう。

「やっくん何この子、ホント可愛いっっ！」

「あわわ・・・」

青羽は結衣の愛くるしさに一発でメロメロになり、頬擦りまでして
しまう。結衣はそれに僅かながらも抵抗しているが、その仕草が逆
に愛くるしさを増して余計に青羽を焚き付ける。

「全く貴女と言う人は・・・。」

「やれやれ・・・だね。」

「えっと・・・どうしよう？」

「・・・俺に聞くな。」

そして取り残されたメンツ、特についさっきまで険悪な雰囲気だっ
た総司とノーマは、青羽と結衣の様子に先程まで一触即発の雰囲気
を出していた自分達がバカらしくなってしまう。

「うわっ、ねえ見て見てノーマ！ ネコ耳ネコ耳、これ本物ッ！？」
「あっ！？ ふしゅ・・・」

「おお！　なんかふにゃふにゃになった、これもまた可愛いっ！」
なおも青羽の結衣に対するスキンシップは続くが、このままでは話が先に進まないと考えたノーマが青羽を結衣から引き剥がす。

「あゝんもうちょっと、もうちょっとだけ！」

「いい加減にしなさい、彼女にも迷惑です。失礼しました、どうぞ。」

「あ、ど……どうも。」

青羽を結衣から引き剥がした後、ノーマは結衣に帽子を返す。

「色々聞きたい事もありますがとりあえず街に行きましょう、こんな所に何時までもいたらアンデッドに襲われても不思議じゃないですよ。」

「ッ！？　ア、アンデッドがいるのか！」

「？　そりゃいますよ、テレビのニュースや新聞とかでもアンデッドの情報が書かれてる事も、っ？！」

ノーマの口から普通に出てきた『アンデッド』と言う単語に、総司は驚愕の声を上げる。ノーマの口ぶりからこの世界では日常的にアンデッドが出現することを察したのだ。

そんな総司の様子にノーマは訝しげな顔をするが、突然近くの林に視線を向ける。雰囲気を変えたノーマに総司達は首を傾げるが、青羽と戒にはそれが何を意味するか分かっていった。

「アンデッド？」

「ええ、数は……1体と言ったところですか。」

ノーマがそう言った瞬間、林からダークローチが1体出てくる。

「ダークローチが1体だけ？ 珍しいわね。」

「アレは多分偵察要員だ、さっさと倒してここから離れないと、多分群れがやってくるよ。」

「そんならあたしがやるわ！」

青羽がそう言うのとダークローチの前に立ち、懷から取り出したブレイバツクルにスピードのA『チェンジ・ビートル』を装填する。それに総司は目を見開いた。

「あ、あれはっ!？」

「変身！」

《Turn up》

青羽はバツクルのハンドルを引いて仮面ライダーブレイドに変身する、その様子を総司は黙って見つめ、凜と結衣は絶句した。

「デヤアアアアッ！」

そんな3人を余所に、ブレイドはダークローチに立ち向かっていく。

「フッ、ハッ、イヤアッ！」

ブレイドは腰から抜いたブレイラウザーを縦横無尽に振り、着々とダークローチを追い詰めていった。ダークローチも反撃しようとするが、流れるような動作のブレイドに攻撃が当たらない。

「さあて、そろそろ決めさせてもらおうわ！」

《Slash》

ある程度ダークローチの動きが鈍ってきた時、青羽がトドメを刺す為に1枚のカード『スラッシュ・リザード』をラウズする。

「ハアアアアアアッ！」

ブレイドはダークローチに一気に近付いて行き、斬撃力を強化されたラウザーを一閃、斬撃を喰らったダークローチはその場で消滅してしまった。

「へへっ、どんなもんよ！」

「あれが・・・この世界のブレイドなのか・・・。」

得意げな様子のブレイドを見て、総司はそう言葉を漏らした。

第25話 二人のブレイド（後書き）

と言う訳でコラボ第3話でした。次回は総司も変身しますのでお楽しみに。

第26話 ブレイド VS ブレイド

街道

突然現れたダークローチをブレイドに変身して苦も無く倒してしまった青羽、そんな彼女を総司達は呆然と見つめていた。

「あ、あれって・・・ブレイド？」

「総司お兄ちゃんと同じ・・・。」

凜と結衣がそう呟くと、ノーマと戒、そして青羽の変身しているブレイドが反応する。

「同じ？ それは何かの間違いなんじゃないですか？」

「確か青羽のブレイドって・・・。」

「あたしのこれはオーダーメイドの特注品よ。確かに昔はあたしが使ってたのと同じブレイドがあったらしいけど、今はもう新世代から発展したライダーシステムが主流だからこの“ブレイドタイプ”を使う人そんなにいない筈だけど。」

より具体的に言えば青羽が使っているブレイドはソフトウェア的に最新型であると言うだけで旧世代と何ら変わりはない。ブレイドなどの旧世代は大きなパワーが発揮できるが、その分高い融合係数が必要とし、さらに使用するにあたって癖が強いシステムとなっている。為現在ではオーダーメイド以外で販売される事はほとんどない。これは戒が使用するギャレンも同様である。

だがそんな事情を知らない総司は、黙って懷から自分のブレイバツクルを取り出し『チェンジ・ビートル』を装填して腰に装着した。

「それ・・・っ!？」

「・・・変身・・・」

《Turn up》

驚く青羽達を余所に、総司はブレイドに変身した。体格的な差はあるものの、青羽のモノとほとんど変わらないブレイドがそこにいた。

「貴方は・・・」

「ホントに・・・ブレイドだったんだ。」

ノーマと戒は総司が変身したブレイドの姿に驚くが、S（総司）ブレイドはそんな二人を無視してA（青羽）ブレイドに声をかける。

「・・・お前に一つ聞きたい。」

「何？」

「お前は何のために戦う？ 仮面ライダーとして・・・ブレイドとして・・・。」

SブレイドはAブレイドにそれを聞いたかった。先程のAブレイドの戦いを見て思ったことだが、彼女は戦いをしているにしては少々明る過ぎる様な気がしたのだ。勿論それはこれまでの人生経験や心構えからくるものなのだが、彼にはAブレイドの様子が歪に見えていた。

「何の為に・・・夢を叶えるためだけど？」

「夢？」

「そっ! あたしの夢はあたしが知る中で最強の仮面ライダーの父さんを超える事、その為にこうして旅をしてるって訳なのよ。」

そう言うAブレイドの様子はとても希望に満ちており、仮面越しでも彼女の笑顔が見てとれるようであった。

その時総司の心にある考えが浮かんた。希望を糧に戦うブレイド、青羽の力がどの程度の物なのか、その実力を知りたいと。

「ならばその夢、俺に見せてみる。」

「へっ？」

Sブレイドの言葉に一瞬呆気にとられるAブレイド、だがSブレイドの方はそれに構う事無くAブレイドに斬りかかる。

「ちよっ！？ クッ！」

「さあどうした？ 見せてみる、お前の力を！」

「・・・へっ、上等じゃない。興味あるわ、あたしの知らないあたし以外のブレイドの力に。」

そう言うAブレイドは体勢を立て直してブレイラウザーを構える。

「それじゃあお望み通り、見せてあげるわ。あたしの・・・『夢』を！」

「来い！ 相手になってやる！」

「デヤアアアアアッ！」

Aブレイドが雄叫びを上げながらSブレイドに斬りかかっていく。最初の一撃はかわされたが、その後も休むことなく次々とラウザーを振るう。

「ハッ、フッ、セイッ！」

Aブレイドは先程ダークローチと戦った時と同じように流れるような動作でSブレイドに斬りかかる。

「フンッ、ハアッ、いやぁ！」

一方のSブレイドは無駄のない動作でAブレイドの攻撃をかわしつつ、一瞬の隙を突いて反撃する。

「グウッ!？」

「どうした、その程度か？」

「クッ、まだまだぁ！」

その後もAブレイドは何度もSブレイドに攻撃していくが、彼女の攻撃は一切当たらずSブレイドに一方的に攻撃されていた。

そして遂に、Sブレイドの重い一撃がAブレイドに直撃する。

「ウアアアアッ!？」

直撃を受けたAブレイドは弾き飛ばされる。幸い変身は解けなかったが、そこにSブレイドからの容赦のない攻撃が繰り返される。

「うわっ!？ クッ、ガッ?!」

Aブレイドは必死に応戦するが、戦いの経験でも技術においてもSブレイドの方が勝っている。Aブレイドはその場に膝をついてしまった。

「こんなものか、お前の『夢』や『力』ってのは？」

「グッ! (悔しい・・・でも、あたしじゃこれ以上は・・・)」

青羽!」・・・ノーマ?

Sブレイドとの実力の違いにAブレイドが弱気になり始めた時、Aブレイドの耳にノーマの声が届く。Aブレイドがそちらを見ると、ノーマがサングラスをとってAブレイドの事をジッと見つめていた。

「どうしたんです、貴女はそれで終わりですか?」

「ノーマ・・・ハッ、冗談!」

一見するとノーマはAブレイドを馬鹿にしているかのような感じだが、その目には彼女がAブレイドを信頼しているのが手にとるように分かった。そのノーマの瞳に元気づけられたAブレイドは、心を奮い立たせ再び立ち上がる。

「ゴメン、ちょっと疲れてボーっとしてたみたい。」

「ほお、まだやるつもりか?」

「当然! あたしはこんなじゃ終わらない、本番はこれからよ!」

そう言ってAブレイドは再びSブレイドに斬りかかる。Sブレイドはそれをかわそうとするが・・・

「ハアアアアッ!」

「グッ?! 何っ!」

SブレイドはまたもAブレイドの攻撃を避けるが、先程とは少し様子が違った。さっきは軽々とかわせたが今度はギリギリでかわせたと云ったところなのである。

(な、何だ今のは?! さっきまでの攻撃とまるで違う!)

「デヤアアアアッ!」

「クッ、ハアアアアア！」

SブレイドがAブレイドの攻撃の変化に驚いていると、再びAブレイドが斬りかかる。Sブレイドはそれに反撃していくが、ここで再度驚愕することとなる。Aブレイドの攻撃がどんどん鋭くなっているのだ。

「セイツ、フッ、ハアッ！」

Aブレイドの斬撃を、Sブレイドは辛くも防いでいく。その仮面の下に先程までの余裕は微塵も無かった。

そしてある程度相手の攻撃をさばき、受け流した後で二人とも同時に距離をとる。どちらも息が上がり、肩で息をしている状態だった。

「ハッ・・・ハッ・・・（凄い、あたしの攻撃がほとんど当たらない。この人もしかして父さんと同じくらい強いんじゃない！）」

「フウ・・・フウ・・・（火事場の馬鹿力って奴か、それとも追いつめられたことで眠っていた才能が発揮され始めたのか、いずれにしても大した奴だな。）」

二人はお互いを心の中で賞賛していた。AブレイドはSブレイドの強さを、SブレイドはAブレイドの持つ素質を。

（一体どれだけ戦えばこんなに強くなれるんだろう、とてもじゃないけど今のあたしじゃ勝てそうも無い・・・けど！）

（凄いな、この歳でこれほどの素質を見せるとは・・・いや、素質だけじゃない。きっと普段から並々ならない鍛錬を積んでるんだ、それがこの戦いの中で発現している。）

お互いにある程度息を整えると、黙ってラウザーから2枚のカードを取り出す。取り出したのはスピードの2と6『スラッシュ・リザード』と『サンダー・デИАー』だ。

「そう言えば、まだだったわねえ。」

「ん？ 何がだ？」

「自己紹介。あたしは青羽、桐沢 青羽よ。」

「俺の名は沖田 総司、またの名を・・・仮面ライダーブレイドだ。」

二人はお互いに自己紹介を済ませると、2枚のラウズカードを同時にラウズした。

《《Slash Thunder》》

《《Lightning Slash》》

ラウザーから電子音声がり、必殺技の『ライトニング・スラッシュ』が発動する。二人はしばしお互いに見合った後、同時に駆け出した。

「デヤアアアアアッ！」

「うおおおおおおっ！」

お互いに一気に近付いて行き、射程に入った時に刃を一閃。そしてお互い相手を通り過ぎたところではしばし静止していたが・・・

「ちえっ、届かなかったかあ・・・」

青羽がそう言うと同時に、彼女の変身が解かれてそのまま地面に倒れる。それに対してSブレイドは・・・

「いや、届いてたよ。お前の剣は・・・」

彼の方は倒れる事は無かったが、Sブレイドのアーマーには斬り付けた様な傷跡がついていた。そして変身を解いた総司はその場に座り込んでしまう。そんな彼に凜と結衣の二人が近付く。

「総司！？ 大丈夫？」

「総司お兄ちゃん！」

「ああ、大したことは無い。大丈夫だ。」

そう言って総司は二人を安心させると、青羽の方に目を向ける。

青羽は気を失っているらしく、ノーマ達が近付いても起き上らない。ノーマと戒に介抱されている青羽を見ながら、総司は口を開いた。

「大した奴だ、まさかこれほどの素質を持っているとは・・・コイツは将来が楽しみだな。」

「当然です、私達の仲間ですよ。きっとこんなモノでは終わりますせん。」

「信頼してるんだな・・・。」

「仲間・・・ですから。」

ノーマの言葉に総司は何とも言えない気持ちになる。彼は元いた世界で仲間に裏切られ、失ってきた。

だが目の前の3人は、本当にお互いを信頼し合っている。総司にはそれがどこか眩しく、そして羨ましく思えた。

その時、近くの林から複数のダークローチが現れた。先程倒したダ

ークローチの仲間が、戻ってこない偵察要員に何かあった事を察したのだろう。

「クッ、マズイ・・・グッ!？」

「総司お兄ちゃん!？」

「無茶だよ!」

総司が即座に変身しようとしたが、先程の戦闘のダメージが残っている為すぐにその場に蹲ってしまう。

その時、ノーマと戒がダークローチ達の前に立ち塞がる。

「貴方はそこで休んでいてください。」

「後は僕達が。」

そう言うノーマはカリスラウザーを、戒はギャレンバックルを取り出す。ノーマはそれをそのまま腰に装着しハートのA『チェンジ・マンティス』を取り出し、戒はバックルにダイヤのA『チェンジ・スタッグ』を装填してから腰に装着する。

「「変身!」」

《Change》

《Turn up》

二人が同時に掛け声をかけてノーマはラウザーにハートのAをスラッシュさせ、戒がハンドルを引く。するとノーマはその姿が揺らぎ次の瞬間には仮面ライダーカリスに、戒の目の前にはオリハルコンエレメントが生成され、それを戒が通過すると仮面ライダーギャレンに変身する。

「あの二人、やはり・・・」

「総司のとは違うけど・・・」

「仮面ライダーだったんだ!？」

総司達が三者三様に驚く中、カリスとギャレンはダーククローチの群れに突っ込んでいった。

その後はほとんど一方的だった。群れと言っても数自体は20体にも満たない数だったので、射撃をメインに戦うギャレンが銃撃して足止めをしカリスが近接攻撃で大ダメージを与えていくだけでダークローチ達は総司達にはおろかギャレンにすら近付く事も出来なかった。

「ノーマ、そろそろ終わらせよう。」

《Bullet Fire》

「そうですね、これ以上何かあっても困りますし。」

《Drill Tornado》

《Spinning Attack》

程良くダークローチ達が弱ってきた頃を見計らい、二人はそれぞれ2枚のカードをラウズした。ギャレンは『バレット・アルマジロ』と『ファイア・フライ』を、カリスは『ドリル・シェル』と『トルネード・ホーク』をラウズして必殺技の『スピニング・アタック』を発動する。

「もらった!」

・ギャレンが炎を纏った銃弾で次々とダーククローチを始末していき・

「フウウウウ・・・ハアアアッ！」

カリスの『スピニング・アタック』がダークローチを蹴散らしていく。そして二人の攻撃が終わった時、その場にいたダークローチ達は全滅していた。

「す、凄い・・・」

その二人の強さに、凜と結衣はただ見とれているしか出来なかった。

そして・・・

あずさと十兵衛が辿り着いた街から大分離れたところ・・・

「ふう、休暇を取って違う世界に来てみたは良いモノの・・・ここはどんな世界なのかしら？」

またも出現した灰色のオーロラから一人の青みがかったストレートのロングヘアーの少女・・・如月 千早が現れた。

「たまにはちよつと変わった世界に行こうと思ったんだけど「お困りかしら？」・・・え？」

千早が今自分がいる世界について考えている時、一人の女性が彼女に声をかけてきた。

声の聞こえた方を千早が見るとそこには、緩くウェーブのかかった紫色のロングヘアーに、ゴスロリ調の服装の女性・・・神崎 寧々が微笑みながら立っていた。

「えっと・・・あなたは？」

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私の名前は神崎 寧々、よろしくね！」

「はぁ・・・あ、私は「如月 千早ちゃん、仮面ライダーディエンド・・・でしょ。」、ッ!？」

寧々が自己紹介したのに対し、自分もとりあえず自己紹介して返そうとした矢先に寧々に名前と、仮面ライダーディエンドであることを指摘されて驚愕する千早。

千早は寧々を警戒しながら見るが、寧々は依然として微笑みを崩さない。

「あなたは一体何なんですか？ どうして私の名前と、私が仮面ライダーディエンドである事を？」

「うふふふ・・・」

千早の質問に対し、寧々は相変わらず微笑みながら、右手の人差し指を顔の高さまで上げた。

第26話 ブレイド VS ブレイド（後書き）

今回は青羽と総司の対決です。青羽はブレイド系のライダーシステム特有の感情の爆発によるスペックアップでなんとか総司に対抗しましたけど、やっぱり負けてしまいました。彼の方が年季も技術も大分違いますから、多分次に戦ったら普通に青羽が負けるかも（へ；）

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第27話 アンデッドハンターの世界（前書き）

どうも、黒服です。今回はコラボ小説第5話になります！

第27話 アンデッドハンターの世界

アンデッド封印協会ボード・ラウクド支部

十兵衛とあずさは、紅羽に連れられて協会に来ていた。この世界の事を説明するにはここに来るのが一番手っ取り早いからである。

「まずは自己紹介ね、あたしは紅羽よ。桐沢 紅羽。」

紅羽が自己紹介すると、十兵衛とあずさもそれにならった。

「俺様は柳生 十兵衛三厳だ。」

「私は三浦 あずさともうします。」

自己紹介を済ませると、紅羽は早速この世界について説明し始めた。

「それじゃあとりあえず、この世界について基本的なことから説明するわ。もしかしたらもう知ってる情報もあるかもしれないけど、順序立てて説明していかないと訳わかんない事になるかもしれないからそこんところは勘弁ね？」

紅羽の言葉に頷く二人、それを見て紅羽は説明を始める。

「それじゃあまずはこの建物についてだけど、ここはアンデッド封印協会・ボードっていうの。まあ長ったらしいから皆この事は協会って呼んでるんだけどね。」

「ここがアンデッドを封印してるんですか？」

「厳密に言えばちょっと違うわ、確かに協会はアンデッドを封印する為にライダーシステムを開発したりしてるけど、やってる事はあ

たし達仮面ライダーの支援よ。」

あずさの質問を受けて、協会の行うライダーへの支援について説明していく紅羽。

「基本的にライダースystemはここで買う人が多いわね、勿論ここ以外にもオーダーメイドでライダースystemを作ってくれるところもあるけど。」

「お前の使ってる、赤いブレイドなんかか？」

「そう言う事。他にも、普通は有料のアンデッドの分布の詳しい情報を無料で提供してくれたり、余分なカードを買い取ってくれたり。」

その後も二人は紅羽から様々な事を聞いた。その中でも二人が驚いたのが、この世界では野生動物のような感覚でアンデッドが存在していると言う事である。

「そんなに頻繁にアンデッドが出るのか？」

「出るわよ、街の外だけじゃなくて場合によっちゃ中にまで。それこそライダーでも無い人が街の外をうろつきたいんだったら、アンデッド避けの装置買わないといけなくらい。」

もつともそんな物好きはほとんどいない。基本的に街から街へ移動したい場合は、街道を定期的に行き来しているバスに乗って行くのが普通である。当然そのバスは通常の車両よりも頑丈に出来ているし、移動の間は協会所属のライダーによる護衛がつく。

勿論それなりに費用もかかるのではあるが・・・

「随分とおっかない世界だな。」

「ですね、落ち着いて外を出歩けません。」

「そうでもないわよ？　慣れればどうってことないし、皆普通に生活してるでしょ？」

言われて二人はここに来るまでの街の様子を思い出す。街行く人々は皆アンデッドの脅威に怯えることも無く、二人が今まで訪れた世界の人々のように普通に生活していた。

「これがこの世界の人達にとっては普通なんですね、アンデッドも仮面ライダーも生活の一部で。」

「そう言う事なんだろうな。」

「ある程度理解してもらえたみたいね、それじゃあ説明を続けるけど……」

そうして紅羽が十兵衛達にこの世界での常識を教えている頃……

ラウクド・宿

「……と言う訳です。ご理解いただけましたか？」

「う、うん。なんて言うか、その……」

「凄い世界なんだね、あんなのが普通にいるなんて。」

ダークローチの群れを始末した後、青羽達は総司達を連れて街の宿に来ていた。そこで総司達は、自分達がこことは別の世界からやってきた事を青羽達に話した。

ちなみに青羽と総司以外のメンバーは街に行く途中にすでに自己紹介は済ませてある。その際に結衣の自己紹介（緊張でややオドオドとしながら）に目を覚ました青羽が再び暴走しかけたのだが、それ

はノーマと戒によって止められた。

「それにしてもまさか違う世界なんてねえ・・・」

「俄かには信じられないけど、この間のおじさんもそんなような事を言ってたね。」

青羽がしんみりと呟くと、戒が先日であった男性のことを思い出す。思えば彼も似たようなことを言っていた。

「おじさん？ 誰だそれ？」

「ん？ 鳴滝っておじさんだけど。」

そう言って青羽は数日前自分達の前に鳴滝なる人物が現れた事、その人物に近い内に『世界の破壊者、ディケイド』が現れると言われた事を総司に話した。その話に総司は顔を顰める。

「お前達はどう思ってるんだ？ その鳴滝の言葉を・・・」

「んん・・・別にどうって言われても・・・ねえ？」

「いきなりそのような事を言われても、正直ハッキリした情報ではありませんし。」

「あのおじさん自体結構怪しかったしねえ、そんな人に世界諸々言われても、正直信じていいか分かんないよ。」

総司の言葉に、青羽達はそう答えた。ノーマと戒はともかくとして、青羽も他人の言葉を素直に真に受けるほど単純ではない。この辺りは信司の教育の賜物であろう。

「ま、そんな事はどうでもいいわ。それよりもこの世界の説明の続きね。」

「ああ、そうだな。頼む。」

ハッキリとしない情報について考えても無駄であると考えた青羽の発言により、話はこの世界の説明に戻った。

「んで、この世界のライダーなんだけどね。言うまでも無い事だとは思うんだけど、皆アンデッドを封印する事を目的にしてるのよ。そんで、その封印したアンデッドのラウズカードを協会に売ったりして働いてる人もいるって訳。」

「ついでに言えばライダーになるのはそんなに難しい事じゃありません。協会に必要な書類を提出して、簡単な試験を受けてそれをパスすれば誰でもライダーになる事が出来ます。」

ノーマの言葉にまたも驚愕する総司達。彼らにとってライダーになると言う事はそんな簡単なことではない、それがこの世界ではちょっとした資格か何かをとる感覚でなれると言うのだから驚く他はないだろう。

「なんだか羨ましいなあ、そんなに簡単に仮面ライダーになれるんだったら、結衣も総司お兄ちゃんの力に・・・」

「結衣、馬鹿な事を言うな。お前が戦いの場に出たら逆に心配でたまらない。」

「それに、簡単になれるが故にライダーの実力もピンからキリまで様々あります。おまけにライダーの力を悪用しようとする人物まで出る始末ですし。」

実際仮面ライダーによる犯罪と言うのも、数は決して多くはないがあるにはある。勿論協会で仮面ライダーになる為に提出する書類には、その人物が問題を起さないかどうかを判断する為の項目もある。だが所詮は人の心の問題、その時は大丈夫でも後になって心変わりする事があるのである。

そんな感じで青羽達は、総司達にこの世界の事を説明していった。

街道

その頃、とある街道では寧々が千早に紅茶を出しながらこの世界について説明をしていた。

「はい、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます・・・」

あの後当然のことながら千早は寧々に何故自分のことを知っているのかなどを、寧々に詰め寄って尋ねた。千早からの鬼気迫るその詰問に、寧々は全く動じることもなく答えていった。

風を読んで様々なことを知る・・・そう告げられた寧々の能力を最初は疑っていた千早だが、寧々が次々と千早に関すること・・・特に彼女のスリーサイズに関することをズバリと言い当てられたことで信じざるを得なくなった。

その際に千早がディエンドライバーを寧々に向けて引き金を引きかけたのだが、それは寧々の自業自得であろう。誰しも自分のコンプレックスを見ず知らずの他人に指摘されれば、怒りたくもなる。

「それにしてもなんて言いますか、まるでゲームみたいな世界ですね。」

現在千早に脳裏には、元いた世界で双海姉妹がやっていたゲームが思い出されていた。確かそのゲームもモンスターが普通に存在して、

それを狩っていくという内容だった筈だ。」

「ああそれはいい例えかもしれないわねえ。言うなればここは・・・『アンデッドハンターの世界』ってところかしら？」

そう言うっておどけて見せる寧々、実際そのゲームとこの世界は細かな違いこそあれ良く似ているのである。

「まあそんなところかしらね、この世界に関しては。」

「黒界って一体どんなところなんです？」

千早は寧々がこの世界の地理に関して説明していた時に口にした、『黒界』に興味を持った。彼女の話によると未開拓の土地の事を言うらしいが・・・

「そうねえ・・・一言で言うなら、『行ったら戻ってこれない地獄のようなところ』・・・てどこかしら？」

「じ、地獄?!」

「そうよ、黒界にはこの辺とは比べ物にならないくらい強いアンデッドが沢山出るのよ。それに生態系もこの辺とは全然違うから、アンデッド以外にも危ない生き物が沢山いるし。」

黒界の関してはほとんど何も分かってはいない。すでに何度も調査団が派遣されて入るものの、悉く壊滅的な被害を被っている。

「もっとも、黒界には私たち人間が住んでる・・・“人間界”とも言えばいいかな、そこじゃほとんど出会う事が出来ない幻獣種のアンデッドも多いから行けば危険に見合うモノは多いんだけどね。」

「幻獣種？」

「そ、こういう奴。」

そう言って寧々は自分が持っている13枚のカードを見せる。カードに描かれている絵柄は全て現実には存在しない生き物、お伽話にしか出てこない様な生き物ばかりが描かれていた。

「これ・・・ユニコーンにグリフォン、フェニックスまで・・・」

「こういうカードが比較的手に入りやすいのが黒界なのよ。ちなみに幻獣種のカードは普通のカードよりも強力だから、持っていればそれだけ他のライダーと差を付ける事が出来るわ。」

「なるほど・・・ん？」

寧々の説明を聞いている内に、千早はある事に気付く。彼女の話だと人間界には幻獣種のアンデッドはほとんど出現しないとのこと。それは単純に出現率が低いなどと言う理由よりも、人間界にはそう言ったアンデッドが生息していないと言う事を示しているらしい。では、寧々はこれらのカードを一体何処で手に入れたのか・・・

「ね、寧々さん？ あなたもしかして・・・黒界に行ったんですか？」

「ん？ うふふふふ♪」

千早の質問に対し、寧々はただ微笑むだけ。千早はそんな寧々の笑顔に、どこかうすら寒い物を感じていた。

第27話 アンデッドハンターの世界（後書き）

と言う訳でコラボ小説第5話でした。と言っても基本この青羽がいる世界の説明がほとんどでしたけど（^^;）

ちなみにこの小説の世界の名前がこのようになったのは、以前『デ
ル不死』に感想を書いた際にエンジェビルさんから返信で『世界観
がモンハンに似てる』と言われた所からピンと来てこのようになり
ました。エンジェビルさん、改めてありがとうございます！

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第28話 異世界堪能

アンデッド封印協会ボード・ラウクド支部

総司達にある程度この世界に関することを説明し終えた青羽達は、彼らを伴って協会へと足を運んでいた。それと言うのも、この世界のシステムを知るには協会に行くのが一番だと思ったからである。

「で、その協会とやらに行ってお前達はどうするんだ？」

「とりあえず、さっきノーマ達が倒したダークローチを換金しないとね。」

「換金？」

封印できないダークローチを換金すると言う青羽の言葉に、またしても首を傾げる総司。その彼の顔を見て、すぐさまノーマが補足を入れた。

「換金と言うのは、倒したダークローチの分だけお金が貰えるということです。」

そう言いつつノーマはバトル計を取り出した。

「何だ？ そのストップウォッチみたいなのは？」

「これはバトル計と言うものです。ライダーシステムと繋がっていてこれまでの戦績は全てこれに記録されます。」

そう言ってノーマはバトル計を操作した。すると機械のディスプレイに『ダークローチ撃破数』という文字と数字が表示された。

「この数字は先ほど倒したダーククローチの数です。この他にも今まで闘ってきたライダーとの結果や、これまでに封印してきたアンデッドなどの情報を見ることが出来ます。」

ノーマが総司達にバトル計について説明していると、一行は協会に到着した。

早速中に入っていく一行、そこで総司達は内部の雰囲気圧倒されることになる。

「うおっ、これは・・・」

「ふわぁ〜・・・」

「す、凄いね・・・」

内部は趣のある装飾が施されているながらも静けさなどなく、むしろ多くの人で非常に活気に満ちていた。周囲に視線を向ければ、壁には仮面ライダーのポスターが貼っており、大きめのディスプレイにはライダーとアンデッドが戦っている映像が表示されている。

「どう？　凄いでしょ。」

青羽が得意そうに言った言葉に、総司達3人は頷いて答えるしかできなかった。

その後青羽達は換金受付カウンターに行き、ノーマと戒の倒した分のダーククローチの報奨を貰うことになった。

「これが今回の報奨金になります、お確かめください。」

ノーマと戒が報奨金を受け取ると、次にこの近辺のアンデッドに関

する情報を得るために専用の受付カウンターへと向かっていた。

「さ〜と、あいつらいるかな？」

「どうでしょう、なかなか頭のいい連中でしょうからねえ。」

「あいつらって？」

青羽の言葉に、凜は首を傾げる。見ると総司達も同じような表情だ。

「上級アンデッド、カプリコーンとオーキッドよ。」

「先日出会ったんですが、ものの見事に逃げられてしまいましたね。」

そう言ってノーマが肩をすくめていると、反対側から歩いてきた人物と肩がぶつかってしまう。

「あっ！？ 失礼しまし……。えっ？！」

「ノーマ？ どうし……。あっ！？」

「ん？」

ノーマは今しがたぶつかった人物の顔を見て驚愕する、その顔は青羽と瓜二つだったのだ。違うのは服と目と髪の色くらいだろうか。そしてノーマの様子に気づいた青羽がノーマの方を向くと、ぶつかってきた方の少女と目が合って双方一瞬啞然となる。

しばしお互いに啞然とした後……

「紅羽〜ッ！ 久し振り〜ッ！！」

「うっさい。」

青羽は目の前の少女……。紅羽に抱きつこうとし、紅羽はそれを軽

くかわしてみせた。その直後、紅羽の後から一組の男女がやってくる。

「紅羽、一人で先に・・・ってお前ら!？」

「お前、十兵衛! それにあずさも!？」

「あら、こんな所で会うだなんて奇遇ですね。」

やってきたのは十兵衛とあずさ、目まぐるしく変化する状況に流石のノーマも頭の処理が追いつかなかった。

「えーっと・・・まずは青羽、こちらの方は一体どなたですか？」

「ん? 紅羽よ、あたしの双子の姉妹の。」

「青羽、君双子だったの?」

「うん、そうよ。紅羽の方があたしより先にライダーとして旅に出てっちゃったんだけどね。」

そう笑顔で青羽が言うと、紅羽が声をかけてくる。

「青羽、誰? そいつら。」

「あたしの仲間たち、ノーマに戒よ。」

「あ、失礼しました。私はノーマ・イクスと言う者です。」

「僕は、大神 戒です。よろしく。」

「ふうん、あんたがああなギャレンの・・・あたしは紅羽よ。ま、よろしく。」

青羽が二人を紹介すると、慌てて二人が自己紹介する。紅羽は戒に少しだけ興味を持つと、すぐさま自身も簡単に自己紹介して見せた。

「ん? 僕の事を知ってるのかい?」

「現代のライダーの代名詞の一人でしょ、知らない方がどうかして

るっての。」

「あ、あはは・・・」

紅羽の言葉に、彼の事をそこまでよく知らなかった青羽が乾いた笑い声を上げる。よく見ればノーマも若干引き攣った顔をしていた。

「ところでさ、あの人たち誰？」

「ああ、女の方が三浦 あずさで男の方が柳生 十兵衛三蔵、デイケイドとクウガだそうよ。」

「ッ！？ あの二人が？」

「そ、実力も本物よ。」

紅羽はあっさりと自分の連れが“世界の破壊者”である事をバラし、青羽は二人に興味深そうな視線を向ける。

「ふーん・・・」

「で、あんたの連れは？」

「ああ、うん。男の人が沖田 総司で、帽子を被った子が沖田 結衣ちゃん。そんで、もう一人の子が広瀬 凜ちゃんだって。」

「・・・それで、どういう人たちなの？」

紅羽がそう尋ねると、青羽はにやりと笑って・・・

「別の世界からやってきた、あたし達が知らないブレイドよ。」

「ッ！？ へえ・・・」

青羽がそう言うと、紅羽は興味深そうな目で3人・・・中でも総司を見た。

「ブレイドってあの男？」

「そうだけど、何で分かったの？ あたしまだあの人がブレイドだ
って一言も・・・」

「雰囲気で大体分かるわよ、あれはどう見ても修羅場をくぐって来
たって感じだもの。」

青羽達がそんな話をしていた頃、十兵衛達の方もお互いの状況を話
し合っていた。

「お前ら、自分の世界に帰ったと思っていたが・・・」

「実はあの後、私達アイドルとプロデューサーを引退しまして。」

「今は二人でこうして色々な世界を旅しているって訳だ。お前達こ
そこんなところで何してるんだ？」

十兵衛の質問に、総司は顔を顰めながらも答える。

「正直な話、俺達にもよく分からん。」

「結衣達、お買い物に行く途中だったんだけど・・・」

「いきなり灰色のオーロラに飲み込まれて、気がいたらこの世界
にいたんです。」

3人がそう答えると、あずさも難しそうな顔をした。

「うーん、それだと多分元の世界に戻るのは運任せになるかもしれ
ないですね。」

「ま、違う世界に行くのは初めてじゃないからな。何とかなるだろ
う、もし時間がかかりそうだったらお前らに送ってもらえばいいし。
」

「俺様達をタクシー代わりにするつもりか？」

総司の言葉に十兵衛はジト目で彼を睨む。そんな時、桐沢姉妹が十

兵衛達に近付いてきた。

「あんた達がディケイドにクウガ？」

「ブレイドなんだってね、あんた。」

青羽はあずさと十兵衛に、紅羽は総司に尋ねる。総司達がそれに頷くなどして肯定すると、姉妹から戦いたいと言うオーラが発せられた。

「（おいおいコイツもか？）とりあえず、お前は？ 紅羽とどういう関係だ？」

「あっと、自己紹介してなかったわね。あたしの名前は桐沢 青羽よ、よろしく！」

青羽と十兵衛達がお互いに自己紹介している時、紅羽の方も自己紹介をしていた。

「あたしはあいつの姉妹の紅羽よ。早速だけどあんた、強いんでしようね？」

「（こりゃまた随分と好戦的な奴だな）青羽から聞いたかもしれないが、沖田 総司だ。それで、お前は俺が強かったらどうするつもりだ？」

「そんなの決まってるでしょ？ あんたと1対1で『グウ~~~~~』
・・・ん？」

紅羽が総司に勝負を挑もうとした時、突然周囲に異音が響きわたる。紅羽は何事かと周囲を見回していたが、ふとノーマ達の方を見ると何やら呆れた様な顔をしていた。そして彼女達の視線の先には・・・

「~~~~~ッ」

腹を押さえて顔を真っ赤にしている青羽の姿があった。

「青羽・・・あんたねえ。」

「しょ、しょうがないじゃん！ 考えてみたらもうお昼だし、ついさっき総司と全力だして戦ってきたからお腹すいちゃったんだもん！！」

「だからってもうちょっと空気をねえ『グウ~~~~~』・・・・・・」

紅羽が青羽に文句を言おうとした時、彼女の腹の虫もけたたましい音を立て始める。瞬間紅羽の顔も自身の髪の色並みに赤くなる、そんな彼女に青羽はこれでもかと言うくらいにやけた顔をした。

「紅羽~~~~？」

「~~~~~ッ、とりあえず・・・・腹ごしらえでもする？」

「賛成っ！」

紅羽が顔を赤くしながら提案すると、青羽がそれに笑顔で賛成。その二人の様子に、ノーマや十兵衛達も苦笑いしながら賛成していた。

協会内・カフェ

一行はとりあえず協会内にあるカフェで食事をする事にした。この辺りは特に特別有名な店も無かった（あっても所持金の関係でおいそれと行けるものでもないが）し、食べ物に関してはさほど違いはないだろうと考えたのである。だが・・・・

「うをつ!？ 美味しいぞこれ!」

「リザード・パイが？ そんなに美味しかった?」

「リザード・・・トカゲかこれっ!？」

十兵衛は初めて食べるトカゲの肉をパイ生地で包んだリザード・パイの味に驚愕し・・・

「この青い牛乳爽やかな味ですね」

「貴女の居た世界には普通の牛乳しかないのですか?」

通常の牛乳に様々なハーブなどを混ぜたブルーミルクにあずさも舌鼓を打った。世界が変われば様々な事が変わるだろうが、この世界は今まで彼らが訪れた世界とは大きくかけ離れていた。アンデッドが生態系の一部に組み込まれ、その影響で様々な部分が異なっている。

「トカゲの肉って結構美味しいんだねえ。」

「もしかして凜ちゃん、そこいらにいる小さなトカゲを想像してない?」

凜の呟いた言葉に、青羽はニヤリとした感じの笑みを浮かべる。凜のほうもそこまで小さいとは思っていなかったが、精々がちよつとした魚程度の大きさだと考えていた。

「サンドドラゴン、砂漠地方に生息する大型のトカゲです。全長約6m、大きいもので10mになるものもいるとか。」

「そ、そんなに大きいのか?!」

「まあ雑食性でおとなしいですから、大きさ以外で危険な点はそんなにないんですけどね。」

ノーマの言葉に結衣が驚愕する、彼女もそこまで大きなトカゲがいるとは思ってもみなかったのだ。

このように、青羽達と出会った総司、あずさ一行は異世界をそれなりに楽しんでいた。

その頃・・・

ラウクドに辿り着いた寧々と千早も、腹ごしらえの為に手頃な店に入っていた。

「お待たせいたしました、ご注文のタートルディッシュになります。」

千早も見た事のない料理が多いこの世界、何よ頼むか迷う千早に寧々が彼女にお勧めを注文した。注文したのはタートルディッシュ、寧々曰くこの世界の女性には人気の料理だとの事。

「タートル・・・亀ですか？」

「ええ、『フォレストタートル』っていう亀をメインに使ってる料理よ。亀の他にも色々な効能がある野菜をふんだんに使ってるから、この世界の女性には人気なの。」

寧々はそう言うと、料理を食べ始めた。それを見て千早も口を付け、その味に舌鼓を打つ。

「ホントだ、美味しいですねこれ。」

「でしょ、コーゲンもたっぷりだしビタミンも豊富だから、美容と健康にはいいって凄い人気なんだから。」

寧々の言葉に千早は辺りを見渡す、すると他の女性客にもこれと同じ物を頼んでいる人がいるのを見つけた。

千早がその様子に感心していると、寧々が微笑みながらさらに言葉が続けた。

「これに使われてるのには面白い効果の物もあってね。」

「面白い？」

寧々の言葉に首を傾げる千早、ついで寧々の口から出てきたのは彼女にとって衝撃的な内容だった。

「えっとねえ、確か胸が大きく「早く食べましょう！ ついでにお代わりも！！」 あらあら・・・」

寧々の言葉に千早は大急ぎで料理を平らげ始め、寧々はその様子にニコニコと笑みを浮かべている。

「千早ちゃん、その胸が大きくなる食材って普通にお店でも売ってるんだけど、ちょっと見ていく？」

「是非！」

と言った感じで、こちらはこちらでそれなりに楽しんでいるようだ。

アンデッド封印協会ボード・ラウドク支部

青羽達が和気藹々と時間を過ごしていると、なくなった飲み物を新たに取ってくるため総司が立ち上がった。

「ちょっと飲み物を取ってくる。」

「私も行きます。」

総司が立ち上がると、ノーマもそれに続いて立ち上がっていった。

一行がいるテーブルから少し離れたところ、そこに来た時出し抜けにノーマが総司に話しかけた。

「それで、貴方は一体何者なんですか？」

「言わなかったか？ おれの名前は「名前などではありません。」
・・・じゃあ何だ？」

言葉を遮ってきたノーマを見ながら総司がそう尋ねると、ノーマは彼の眼を見つめながら口を開く。

「貴方という存在そのものです。」

「・・・どういう意味だ？」

「貴方、人間ではないでしょう。」

ノーマの言葉に総司は眼を見開く、何故それがバレたのかと。

「どちらかと言えば貴方からはアンデッドの気配が感じられます、
一体何なんですか？」

「どうして、俺が人間ではないと？」

「失礼、私も少々“特殊”でして、アンデッドの気配を感じ取ることが
できるんです。」

ノーマの言葉に総司は訝しげな顔をする。

「お前……アンデッドなのか？」

「違います、ただ非常に似通ったものだと言っておきます。」

「それで？ 俺がアンデッドだったらどうする？」

総司がそう言った瞬間、ノーマから気迫が立ち上る。

「私の使命は、全てのアンデッドを封印すること……」

そうノーマは言うてのける、総司はそれを黙って聞いていた。

「貴方の連れの二人……まあ一人は厳密に言えば人間ではないのかもしれないですが、あの二人は無害でしょう。問題は貴方です、先ほどの戦闘の際に感じた気配から貴方がアンデッド、しかも通常のアンデッドとは異なるものであることはわかりました。」

「……」

「貴方は……何者なんです？」

・
ノーマは先ほどと同じ質問を総司にする、総司はしばし考えた後・

「俺の名前は沖田 総司、またの名を……仮面ライダーブレイドだ。それ以上でもそれ以下でもない。」

それだけ言ってドリンクバーへと向かって言った。ノーマがしばしその後ろ姿を睨んでいると、後ろから青羽が声をかけてくる。

「ノーマ、どうしたの？」

「青羽……いえ、特にどうとも。貴女こそ、何を？」

「何って、飲み物取りに行くのよ。」

そう言って首をかしげる青羽、その様子にノーマも毒気を抜かれる。

「それじゃあ行きますか。」

「うん、あっ！　ねえねえ、どうせだからいろいろ混ぜてみない？」

「遠慮しておきます、どんな味になるか想像もできませんし。」

「それが面白いんじゃない。」

そんな会話をしながら、ノーマと青羽はドリンクバーへと歩いて行った。

第28話 異世界堪能（後書き）

今回はコラボ小説第6話、あずさや十兵衛達にこの世界を少し楽しんでいただきました。この世界はファンタジー世界を大分意識している（ライダーが普通に存在してるのもそれを意識して）、ちよっと現実には無い料理なんかを出してみました。青羽達が食べた料理には、元ネタの様な物があります。多分かなりのSF映画好きなら『アレの事かな？』って言うのが分かる人がいるかもしれません。

千早の方に関しては、前回寧々にスリーサイズを思いっきり指摘されてしまいましたので、そのお詫び的にやってみました。実際現実にも胸を大きくする効果のあるモヤシと言うのがあるらしいですね、自分はお目にかかった事ありませんが。

さて、ほのぼのとした雰囲気は今回まで。次回からは一気にバトルに突入します。しかも戦うのはちよっと意外な『あの人』！！

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第29話 守る槍（前書き）

どうも、黒服です。今回から戦闘が始まります、少し意外な人が変身しますよ。

第29話 守る槍

協会前

昼食を済ませた青羽、総司、凜、結衣、そして紅羽の5人は協会の外に出ていた。ちなみにノーマはまだ協会内に少し用事があるらしく、戒は十兵衛とあずさがこの世界の地図を見たがったため地図が見れるところに連れて行っている。連絡を取り合うことは可能であるため、とりあえず青羽たちだけが先に出てきたのだ。

用事がない面子の中で真っ先に出てきたのは紅羽だった。紅羽は協会から出て軽く体を伸ばす、そして何気なく周囲を見渡すと、街の中に見知った顔を見つけた。

「寧々さん？」

紅羽が見つけたのは彼女が子供の頃から見知った女性、神埼 寧々だった。

「ほら、あそこにいるわ。」

「ほ、本当ですか？」

「あら、まだ私の言うことが信じられない？」

「い、いえ・・・そう言う訳では・・・」

・
二人はそんなことを言いながら協会に近づいてくる、ところが・・・

「ッ!？」

「ん?」

寧々は突然何を思ったのか後ろを振り向いた、その彼女らしからぬ雰囲気は彼女をよく知る紅羽どころか彼女と一緒にいる女性・・・千早も首をかしげる。

「あの・・・寧々さん？」

「え？ ああ、ごめんなさい。私ちょっと用事を思い出しちゃった。紅羽ちゃん！」

千早の声に我に返ったように振り向いた寧々は、協会の前で彼女達のことを見ている紅羽に声をかける。案の定というか紅羽の存在にはとっくの昔に気付いていたらしい。

「久しぶりね、紅羽ちゃん。」

「はい、それで・・・えっと・・・」

「ゴメンね、私ちょっと用事思い出しちゃったから。彼女・・・千早ちゃんのことお願いね、あなたと一緒にいた人達のお知り合いだから。」

寧々はそれだけ言ってそそくさとその場を離れてしまう。紅羽と千早がその後ろ姿をしばし眺めていると、青羽達が出てきた。

「さうて、これからどうしようか？・・・って、誰その人？」

「ああ、えっとこの人は「総司さん！ お久しぶりですね。」って・・・」

「そうだな。お前は、あずさや十兵衛達に会いに来たのか？」

紅羽がとりあえず千早のことを青羽に話そうとすると、千早の方が総司に声をかけた。総司もそれに懐かしそうに返してきた。

「ええ、この世界に来た時にで寧々さんと言う人にいろいろと教えてもらって・・・」

千早がそんな感じに話していると、彼女は青羽の視線に気付いた。それを見て千早は慌てて自己紹介をする。

「すみません！ こっちで勝手に話を進めたりして。初めまして、如月 千早と言います。」

「ああ・・・こちらこそ、あたしは桐沢 青羽です。こっちが双子の紅羽で「青羽。」ん、何？」

青羽が千早の自己紹介に応えていると、紅羽が声をかけてくる。青羽はそれに首をかしげながらそちらを向いた。

「あたしちよつと野暮用が出来たから、一旦別行動とるわよ。」

「へ？ どうしたのいきなり？」

「だから野暮用だってば、じゃあね。」

「・・・」

そう言って紅羽はレッドスパイダーに跨ってその場から離れて行った。青羽は紅羽の様子に首を傾げ、千早は黙ってその後ろ姿を見つめる。

「ん、どうしよ「お待たせ、青羽。」っと、来た来た。」

「ん？ 青羽、そちらの人は？」

戒が青羽と一緒にいる千早について尋ねようとする、あずさ達が口を開いた。

「千早ちゃん！ 久しぶりねえ。」

「本当だな、元気にしてたか？」

「お久しぶりです、あずささん、プロデューサー！」

あずさ達は久しぶりに出会った千早との再会を喜び、あれやこれやと話しかけるが、対する千早は何かが気になっているのか先程から後ろをしきりに振り向いている。

「どうした千早？ 何か気になることでもあるのか？」

「色々と話したい事もあるんですけど・・・えっと、すみません。再会していきなりですけど、私やらなきやいけないことが出来たので。」

それだけ言うと千早も紅羽が走って行った方向へと向かって行ってしまう。あずさ達はそんな千早を引き留める暇すらなかった。

「どうしたんだ？ 千早の奴。」

「さあ、何か焦ってるようでしたけど・・・」

「紅羽も行っちゃったし・・・」

せっかく再会できたのにあっさりとその場から離れて行ってしまった千早と、同じく突然何処かへと行ってしまった紅羽の様子に首を傾げる青羽とあずさ、十兵衛の3人。

「どうしよ、どこかに行くにしても・・・ん？ あたし何か忘れてるような・・・」

「そう言えばお前、さっきアンデッドの情報を手に入れるとか言ってたかったか？」

「あっ！？ そうだそうだ、忘れてたわ！ どうしよ、もう一度協会に・・・」

総司の指摘に青羽が再び協会に入ろうとすると、彼女たちの近くに1台の車が停まった。そして窓が開き、中から青羽の見知った顔が覗いてくる。

「よお、ブレイド。また会ったな。」

「あ、あんた?!」

そこにいたのは青羽達が追いかけている上級アンデッドの1体、カプリコーンアンデッドの人間態である矢沢がいた。

「ま、今はお前の相手をする気分じゃないから見逃してやるよ。それじゃ、ごきげんよう・・・はっはっはっはっ！」

それだけ言って矢沢は車を走らせる。青羽はそれを慌てて追いかけてようとした。

「ゴメン！ あたし急いであいつ追いかけるからさ。戒、後お願い！」

「お、おい！ 青羽！」

総司が青羽を引き留めようとするが、それよりも早くに青羽がバイクを走らせて行つた。

「全くあいつは……」

青羽が離れていくのをその場の全員が見送っていた。総司は落ち着きのない青羽にやれやれと言った風に首を振ると、戒に事情説明を求めた。

「あれは僕らが追いかけてるアンデッド、上級カテゴリーのカプリ

コーンアンドレッドです。」

「どうするんだ？」

「皆さんを放っておくこともできませんし、とりあえず場所を変えてゆっくり話し合いましょう。ノーマには連絡を入れておきますからね。」

そう言って戒は全員を引き連れて、その場を離れて行った。

郊外

街から少し離れたところ、郊外近くのところに一人の男性がいた。枯草色のコートに帽子、そして黒縁の眼鏡をかけた男性である。

「この世界にいたか、ディケイドにクウガ、そしてディエンド。この世界のライダーが頼りにならない以上、私が直接動くしかない。」

その男性・・・鳴滝がそう言うのと、彼の後ろに灰色のオーロラが出現する。そしてそこから二人のライダーが現れた。

「ここか・・・祭りの場所は・・・」

そう言ったのは紫色の蛇のような仮面ライダー・・・本来『龍騎の世界』のライダーである【仮面ライダー王蛇】。

「今・・・誰か俺を笑ったか？」

そしてもう一人、緑色のアーマーに赤い複眼のライダー・・・『カブトの世界』の住人の【仮面ライダーキックホッパー】が、気だるそうにそう言った。

「この二人なら間違いなくディケイドを倒してくれる筈・・・行け！」

「さあ、祭りだ祭りだ！」

「地獄祭りの始まりだ・・・」

鳴滝の命令に王蛇とキックホッパーが街へと行こうとすると、彼らの前に一人の女性が現れた。紫色の髪にゴスロリ調の服装の女性・・・神埼 寧々だ。

「あなたが・・・鳴滝さんですね？」

「君は？」

「ふふふ・・・ディケイドを倒すとか言っているいろいろな世界に現れているんですけど、ハッキリ言ってしまうえばそれは余計なお世話というものですよ。」

「何っ!？」

寧々は鳴滝の質問には答えず、微笑みながらそう言った。それに鳴滝は顔を歪める。

「この世界は、この世界の仮面ライダーが守ります。彼女達みたいな、強くて真っ直ぐな心を持ったライダーが・・・だから、あなたの力には必要ありません。」

「そうはいかない、ディケイドは必ず全てを破壊する！ その前に奴を始末せねば・・・」

寧々はそう言うが、鳴滝は聞く耳を持たない。依然としてディケイドを倒すことのみを考える彼に、寧々はいつになく冷やかな視線を向ける。

「その過程で・・・その世界の住人を傷つけても、ですか？」

「全ての世界を救うためだ、止むを得ないだろう。」

鳴滝のその言葉はこの世界に来ているディケイドであるあずさを、行動を共にしている青羽達諸共倒すと言っているのと同じである。その言葉に寧々は眼を細めて、彼女のことを少しでも知るものなら信じられない位の気迫を醸し出した。

「あの子達は傷付けさせません、それが私の・・・“あの人”に對する恩返しですから。」

そう言って寧々は1枚のカード『チェンジ・ユニコーン』とジャベリンバツクルを取り出し、カードを装填して腰に装着した。

「変身！」

《Open up》

バツクルを開くと、寧々の前に白いオリハルコンエレメントが生成され自動的に寧々の体を通していく。そして寧々がゲートをくぐるとそこには純白の装甲を持ったライダー、【仮面ライダージャベリン】がいた。

「クッ、邪魔するつもりなら容赦はしない。王蛇、キックホッパー！」

鳴滝の命令と同時に、ジャベリンに襲いかかる王蛇とキックホッパー！。

「ハッ、フッ、セイッ！」

対するジャベリンは、2対1という状況ながらも二人のライダーに
対して優位に状況を進めていた。槍型の武装である【ジャベリンラ
ウザー】のリーチを最大限に生かして、王蛇とキックホッパーを寄
せ付けない。

「はぁ・・・クロックアップ。」

《Clock up》

「ッ!? あ!?!?・・・ガッ、グフッ?!」

だが一瞬の隙を突いてキックホッパーがクロックアップを発動させ
る。超高速で攻撃してくるキックホッパーに、ジャベリンも一方的
にやられてしまう。それでも自身に備わった能力である『風読み』
を駆使して辛うじて防ぐ程度のことはしてのける。

「くう!」

「ハハッ! こいつはどうだ?」

《ADVENT》

《ADVENT》

《ADVENT》

だが今の敵はキックホッパーだけではない。王蛇はジャベリンがキ
ックホッパーに釘付けにされているのを見ると、コブラ型の杖【ベ
ノバイザー】に3枚のカードを装填した。するとどこからともなく
3体のモンスター、巨大な紫色のコブラ『ベノスネーカー』、灰色
のサイ『メタルグラス』、赤紫色のエイ『エビルダイバー』が現れ
てジャベリンに襲いかかる。

「ハッ、ヤッ!」

ジャベリンは必死に3体のモンスターを相手にしていく、そこにさ

らに王蛇自身も加わった。

「はああああっ！」

「クッ！」

王蛇が振り下ろすベノスネーカーの尻尾の先を模した剣【ベノサーベル】をラウザーで受け止めつつ、3体のモンスターからの攻撃を掻い潜るジャベリン。状況は悪いがよく持っている方だろう。

だがやはり多勢に無勢、再びキックホッパーがクロックアップを発動しようとする。

《Clock up》

「ッ!？」

ジャベリンはそれに気づくがもう遅い、再びキックホッパーの攻撃がジャベリンに襲いかかると思った、その時・・・

《Mach》

「ハアアッ！」

出し抜けにそこに『ジャガー・マッハ』を発動させた赤いブレイド、クリムゾンブレイドが乱入してきた。Cブレイドはキックホッパーに攻撃を受け止めるとラウザーによる連続攻撃でキックホッパーをクロックオーバーするまで相手取る。さらに・・・

《KAMENRIDE》

「変身！」

《DIE》

千早が大型の銃型変身アイテム『ディエンドライダー』にライダーカードを装填した状態で王蛇に向けて引き金を引く。すると複数のプレートが王蛇にぶち当たり、その間に千早には3つのシルエットが重なり、最後に王蛇に当たって跳ね返って来たプレートが頭部に刺さり全身に水色のラインが入った【仮面ライダーディエンド】に変身した。

「紅羽ちゃん！ それに千早ちゃんも、なんでここに?!」

「さつき、寧々さんの様子がおかしかったからこっそりついて来てみたんです。そしたら案の定ヤバそうだったんで・・・」

「色々と助けてもらった恩、返さないと私のプライドが許しません。」

「あなた達・・・ありがとう。」

ジャベリンが二人に礼を言うと、3人はそれぞれ武装を構える。

「ところで紅羽ちゃん、今上級カテゴリーのカードいくつ持ってる?」

「?・・・JとQ。」

「流石ね、それじゃ・・・」

ジャベリンは突然Cブレイドにそんな事を尋ねる。Cブレイドはそれに首を傾げながらも今持っている上級カテゴリーのカードを答えた。ジャベリンはその答えに満足そうに頷くと、Cブレイドに黒い箱のような機械を手渡した。

「頑張ってる紅羽ちゃんに、お姉さんからプレゼント。」

「こ、これっ!?!」

ジャベリンからCブレイドに手渡されたのは、ライダーシステムの

強化アイテム【ラウズアブゾーバー】。本来は年に2回行われる試験をパスした者のみが入れることが出来る筈の代物なのだが・

「緑色の方を頼むわね、私達は紫の方を何とかするから。」

「・・・オツケー！」

「はい！」

Cブレイドはジャベリンの言葉に頷くと、オープントレイから2枚のカード、スペードのJ『フュージョン・ウルフ』とQ『アブゾーブ・サーペント』を取り出す。そしてアブゾーバーにQのカードを装填して・・・

《Absorb Queen》

Jのカードをスラッシュさせる。

《Fusion Jack》

するとCブレイドを銀色の光が包み込み、彼女にJのカードに描かれている絵柄と同じ狼のレリーフが重なる。そして光が弱くなると、そこには・・・

「これが・・・これがあたしの・・・」

「そう、それがあなたの【ジャックフォーム】よ。」

頭部と胸部の装甲が銀色になり、胸部のスペードの紋章に狼のレリーフが刻まれた、【仮面ライダークリムゾンブレイド・ジャックフォーム】がそこにはいた。風が吹いて首の後ろについたマフラーが揺れる。

「じゃ、お願いね。」

「よし、ハアアアッ！」

Cブレイドは一気にキックホッパーに肉薄していく、だがそのスピードは先ほどの比ではなくあつと言う間にキックホッパーへと近づいて行った。

「（速い！？ さっきまでとは大違い！）セヤアッ！」

「チッ、お前はいいよなあ。」

「ふん、羨ましいでしょう。」

キックホッパーはJCブレイドジャックの攻撃を防いで少しだけ距離をとる。JCブレイドはキックホッパーと皮肉を言いあうが、内心では大いに動揺していた。何しろ・・・

（ちょっと待ってよ、なんだかパワーが落ちてない？！）

先ほどの攻撃、確かに手応えはあったはずなのに相手は軽く防いで見せた。その後もJCブレイドとキックホッパーは戦うが、やはりJCブレイドがパワー負けしていた。

「セリヤッ！」

「グッ？！ チィ（そうか、分かったわ。このフォーム、スピード重視なんだ。装甲とパワーを削ってスピードで相手を翻弄する。）」

JCブレイドはしばしキックホッパーと戦う内に自身のフォームの特性に気が付いた、だがそれはさらに彼女の頭を悩ませることになる。何せ攻撃力が下がっているのだ、これでは普通に攻撃しても決定打を与えるのは難しいだろう。

（くそ、よりによって厄介なフォームになっちゃったわねえ。スピードはこっちが上、さっきの高速移動もマッハを使えばあたしの方が優位に立てる。でも攻撃力は一発一発が弱すぎて・・・ん？）

そこまで考えてJCブレイドは気が付いた。一発一発が弱いなら何度も攻撃してやればいい。一発でだめなら十発、十発でだめなら百発・・・そして今彼女はそれができるカードを持っていた。

「塵も積もれば山となりってこと？ やってみるしかないか！」

《Rapid Kick Match》

《Machinegun Blast》

JCブレイドは3枚のカード、スペードの4・5・9『ラピッド・ペッカー』『キック・ローカスト』『マッハ・ジャガー』をラウズする。するとこの3枚のカードでコンボが成立、『マシンガン・ブラスト』が発動した。

「ハアアアアアアッ！」

「チッ、クロックアップ。」

《Clock up》

高速で迫ってくるJCブレイドに舌打ちしつつ、クロックアップするキックホッパー。だが彼女の動きはクロックアップ以上に速かった。彼女はキックホッパーの攻撃をかわすと、何度も連続でキックを叩き込む。

「イヤアアアアアアッ！」

度重なるキックに完全にキックホッパーは釘付けにされ、防御する

こともできない。そしてJCブレイドがキックを止めて相手に背を向けたと同時に……

「地獄に……堕ちるのか……」

そうキックホッパーが呟いて爆発した。

その頃、ジャベリン・ディエンドと王蛇の戦いも決着が着こうとしていた。

「おらぁ！」

「ハアッ！」

ジャベリンと王蛇はお互いの武器で相手を攻撃する。ちなみに王蛇が召喚した3体のモンスターはすでに王蛇の『ユナイトベント』の効果で、1体のモンスター『獣帝・ジェノサイダー』になっている。だがそれが逆にジャベリンの敵を減らすことになり、先ほどよりも優位に戦いを進めていた。

「これならどうです！」

《ATTACK RIDE BLAST》

しかもそのジェノサイダーの相手はディエンドが行っている。ディエンドは持ち前の素早い動きでジェノサイダーを翻弄しつつ、ディエンドライバーから『ディエンドブラスト』を発動して着々とダメージを与えていく。

「イラつかせる……」

《FINAL VENT》

なかなか戦況が有利にならないことに痺れを切らせた王蛇が、一気に勝負を決めるべくバイザーに『ファイナルベント』のカードを装填する。それと同時にジェノサイダーは自らの腹部を食い破り、そこにブラックホールを造り出す。

「はあああああっ！」

そして王蛇がジャベリンに斬りもみキックを放った瞬間……

「させません！」

《ATTACKRIDE BARRIER》

「ぐおっ?!」

ディエンドがタイミングを見計らって王蛇の攻撃を防御技『ディエンドバリヤー』で防御、ディエンドの紋章と同じ形のエネルギー弾で王蛇の攻撃を中断させる。さらに王蛇が立ち上がった瞬間ジャベリンの攻撃が決まり、王蛇をジェノサイダーの下へと弾き飛ばす。

「ぬおおお?!」

「これで！」

そして二人は王蛇にトドメを刺すべく、ジャベリンは3枚のカードをラウズし、ディエンドは1枚のライダーカードを装填した。

《FINAL ATTACKRIDE》

《Heel Shine Shield》

《Shining Ring》

「ハアアアッ！」

『ヒール・ウロボロス』 『シャイン・サエーナ』 『シールド・カー

バンクル』のカードをラウズして発動するジャベリンの必殺技、『シャイニング・リング』が発動。光を纏った踵落としが容赦なくジェノサイダーに落とされる。

ジェノサイダーは咄嗟に波動弾で攻撃を中断させようとするが、それは彼女の周りに張られているシールドに阻まれて意味をなさない。

一方ディエンドも必殺技『ディメンジョンシユート』を王蛇に放とうとする。

《DI DI DI END》

100枚ものカードで構成されたターゲットサイトが王蛇に狙いを定め、引き金を引いた瞬間強力なビームが王蛇に向かって放たれる。王蛇は避けようとするが間に合わず、同時にジェノサイダーにジャベリンの必殺技が命中する。

「くそっ、ぐあああああっ?!」

そして王蛇はモンスター諸共、その場で爆散してしまった。それを見届けると、二人は変身を解除する。

「ふう・・・」

「寧々さん。」

寧々が一息つくと、そこに同じく変身を解いた紅羽が近づいてくる。

「あら、紅羽ちゃん。お疲れ様。千早ちゃんも・・・」

「いえ・・・」

「あの、それよりも・・・これ・・・」

紅羽は寧々に何故アブゾーバーを持っているのか尋ねようとした。だがそれは寧々自身に止められる。

「説明してあげたいのは山々だけど、今はそれどころじゃないみたいだわ。さっきの二人を呼び出した男が、青羽ちゃん達のところに向かってるわ。」

「チツ、あいつ・・・」

「急いで街に戻りましょう！」

千早の言葉に頷くと、紅羽は寧々の言葉に急いでバイクに跨って街に戻っていきこうとする。その後ろ姿に寧々が声をかけた。

「手伝いましょうか？」

「いい、青羽達もいるし。それにいつまでも寧々さんに世話になるわけにもいかないし。」

「あの、本当にありがとうございました！」

「ふふっ、そう・・・それじゃ頑張って。」

寧々は二人に微笑むと、そう言って手を振る。紅羽と千早もそれに軽く頷き返した。そして千早は目の前に灰色のオーロラを発生させる。

「これを使えばすぐに街へ行けます。」

「それじゃ、行くわよ。」

紅羽の言葉に千早は頷くと、寧々に見送られながら二人はそのオーロラの中へと入って行った。

第29話 守る槍（後書き）

という訳でコラボ編第7話でした。少し意外な寧々の変身でした。寧々は隠れ実力者ですけどやっぱりクロックアップには手を焼きます（^^;）

それと今回Cブレイドがジャックフォームになりました。言うまでもないと思いますが、元ネタは仮面ライダーアクセルトリアルです。ブレイド原作だとジャックフォームは鳥系のアンデッドとしか融合しなかったのも、他のアンデッドと融合するとどうなるのかと考えながら書いてみました。勿論アクセルトリアルが好きだって言う気持ちもありましたが（^ー^;）

寧々は謎多き女性です。彼女の過去についてはスピノフ的に別の作品として描いていく予定です、まあ今書いてる作品のどれかが終わったら（と言ってもカブトが一番早くに終わりそうですけど）書いて行こうかと思っています。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第30話 青羽の怒り、人を感じる心（前書き）

どうも、黒服です。今回はコラボ小説第8話。今回は青羽達の方にスポットを当てた話です。

第30話 青羽の怒り、人を感じる心

寧々と紅羽が鳴滝の召喚したライダーを倒した時より時間を遡って・

公園

戒は総司、十兵衛一行を連れて公園に来ていた。ここならゆつくりと話が出るからである。

「さてと、それで皆さんどうします？　これから。」

戒はその場の全員にそう尋ねた。戒には彼なりに目的があるため、いつまでも彼らに構ってもいられない。

「とりあえず、俺様達はもう少しこの世界を見て回りたい。ここはいろいろと面白そうだしな。」

「あの、私も一緒にしてもいいですか？」

「もちろんよく、旅は人数が多いほうが楽しいものゝ」

十兵衛達はそう言って彼らなりにこの世界を見て回ると言った。彼らはそれなりに旅にも慣れているようだし問題はないだろう、問題なのは・・・

「それで貴方達は、どうするんです？」

戒は総司達にそう尋ねた。実際彼らはなし崩し的にこの世界に飛ばされてしまったらしい、となるとほとんど荷物など何も持っていないだろう。こうなると少し話が面倒だ、戒個人としては放ってお

きたいが、どうしても後ろ髪を引かれる。

「とりあえず十兵衛達について行くさ。もうしばらく待って、もしまたあの灰色のオーロラが出なかったらその時は十兵衛達に送ってもらえばいいし。」

「だから俺様達はタクシーじゃ・・・」

「まあいいじゃないですか、十兵衛さん。」

総司の言葉に十兵衛は顔を顰めるが、あずさはそんな彼をほんわかと宥める。彼女のその表情と言葉に、十兵衛も何も言えなくなってしまう。

その時、あずさがふと気が付いたかのように口を開いた。

「そう言えば、千早ちゃんがお世話になった寧々って言う人は、どんな方なんでしょうか？」

あずさのそんな疑問に戒が答える。

「なんと言いますか、不思議な人ですよ。普段はほんわかとしつつもいざという時には凜とした雰囲気ですし、なんか不思議な能力も持っていますし。」

「能力？」

「超能力みたいなものです。僕も以前一度出会って、いろいろなことをズバリと言い当てられて驚いたものです。」

そう言って戒は以前寧々と出会った時のことを思い出す。あの時は本当に度肝を抜かれた、まさかあそこまでの的確に言い当てられるとは・・・

「ねえねえ、それってどんな能力？」

「えっと・・・確か、風を読む能力・・・だったかな。」

「風を・・・読む？」

「ええ、何でも人間の脳の使われていない部分を活性化させて鍛えた能力だとか。」

結衣の質問に戒が答えていると、不意に風が吹いて来て結衣の帽子が再び飛ばされてしまう。戒は未だに総司達に寧々に関して話している。

「あっ!？」

「待ってて結衣ちゃん、私が拾ってくるから。」

そう言って凜が結衣の帽子を取りに行く、そして木の根元に引っかった帽子に近づいて行った時、木の陰から一人の女性が姿を現して帽子を拾い上げた。

「うふふ・・・」

「え・・・っと・・・」

同時刻・公園入り口

青羽は矢沢の乗った車を追いかけている内に、公園の前まで来ていた。おそらく何かしらの罠を張っているだろうことは予想していた青羽だが、ここで逃がしても何をしでかすか分かったものではなかったため止むなく追いかけてきたのである。

公園の前に着くと、矢沢は車から降りて公園内に入っていく。青羽も急いでバイクを降りて公園に入ってしまった。

「待て！」

青羽がそう言って矢沢を引き留めると、彼は笑いながら視線を青羽からある方向へと向けた。青羽が訝しげな顔をしながら視線をそちらに向けると、そこには凜と彼女の眼の前に立つ一人の女性・・・オーキッドアンデッドの人間態である吉永がいた。

「ッ！？ クッ！」

「おっ！ おおおおお、おっ！ お前がもし変身したら・・・あのガキ絞め殺されるぜ？ それでもいいのかなぁ？」

「なっ?!」

青羽は吉永の姿を見た途端、急いで懷からカードとバックルを取り出す。だがその瞬間矢沢は青羽にそんなことを言っただけだ。

凜を人質にする・・・と、そう言っているのだ、矢沢は。

「くそ、凜ちゃん！ 急いでそいつから離れて!!」

「え？」

「青羽？・・・ッ!? あいつは！」

突然の青羽の声に、凜は一瞬呆然となる。戒も青羽の存在に気付く、凜の方に視線を向けてそこにいる人物に気付く。

「フッ！」

「え?! な、きやあああつ?!」

「凜!？」

青羽は慌てて凜にその場を離れるように言うが、その瞬間吉永がア

何もできずに見ていた。

（くそ、迂闊だった。まさかこいつが来ていたなんて・・・）

戒はオーキッドが来た時にはまだ総司達と話していた。おかげでその存在に気付くのが遅れてしまい、一気に窮地に陥ってしまったのだ。

「青羽さん・・・ごめんなさい、私の所為で・・・」

「優しいわよねえ、彼女。でもその優しさが命取りになるのよね。さ、あんた達も下手なことするんじゃないわよ。この子がどうなってもいいなら構わないけど。」

「貴様・・・クッ！」

オーキッドの言葉に、先頭の構えを解かざるを得ない戒達。

「ふふ、あなたが不用心に行動してくれたおかげで、うまく事が運んだわ。ありがとうね、お譲ちゃん。」

「ッ!？」 総司、皆さん・・・ごめんなさい、本当に・・・うつ。」

動けない一同に申し訳なく思っている凜の心に、オーキッドの言葉が突き刺さる。その言葉に凜はさらに顔を悲しみに歪め、その瞳からは涙が零れ落ちる。その様子を総司達は何もできずに見るしかできなかった。

そんな様子を愉快そうに眺めていたオーキッドだが、その時突然オーキッドと戒達の間にある木の枝の間からカリスが飛び降りてきた。

「ッ?! お前は！」

「ノーマ!?」

「貴女の相手は・・・私です。」

カリスは地面に着地するやすぐにカリスアローを、オーキッドに向けて構える。その射線上には凜が・・・

「ひっ?!」

「あなた、こいつが目に入らないの!?!」

「おい貴様ッ!? まさか「黙りなさい・・・」、何だと!?!」

カリスはオーキッドや総司の言葉を一蹴すると、何も言わずにアローを構えてフォースアローを撃つためのエネルギーをチャージする。周囲にはエネルギーをチャージする音が響き渡り、凜の顔は恐怖に引き變っている。

「あ、ああ・・・」

「動かないで下さいね。」

カリスは凜に向けてそう警告した。そして一瞬の静寂の後・・・

「・・・・・・・・ッ!」

カリスアローから光の矢、フォースアローが放たれる。その矢は寸分のズレも無く凜・・・・・・・・の後ろの彼女を拘束している蔦の根元に命中、彼女を束縛から解放した。

「きゃあっ!?!」

「し、しまっ?!」

「ハッ!」

障害がなくなった瞬間、カリスは即座にオーキッドに斬りかかっていく。その隙に総司と結衣が凜に駆け寄る。

「凜、大丈夫か?!」

「凜ちゃん! 怪我とかない?!」

「う、うん・・・大丈夫。ゴメン、迷惑かけちゃって・・・」

「気にするな。それより、離れてろ。」

総司はそう言って凜と結衣をその場から避難させる。そしてオーキッドとカリスが戦っている方を向いた。

「あなた・・・よく撃てたわね。ちょっとでも狙いがズレてれば・・・」

「私にとって、あれは盾でもなんでもありません。あれだけ隙間があれば私にとって好きなのところを撃ってくださいと言っているようなものです。あんな体格差がある相手よりも、今後は自分より大きな相手を盾に使うことをお勧めします。」

実際カリスにとってあの時のオーキッドは的でしかなかった。凜とオーキッドでは体格に差がありすぎて、狙おうと思えば顔でもどこでも狙いたい放題だったのである。

何よりカリスに備わった高い分析能力と、ノーマに備わった高い視力があればあの程度のことは造作もないことだったのだ。

「ノーマッ!」

「ん?」

「変身!」

《Turn up》

その時、総司もブレイドに変身して戦いに参加してくる。戒達の方を見れば、青羽が捨てたバックルを持って彼女の下へと向かっているのが見えた。

「とりあえず礼を言っておく。凜を助けてくれたからな。」

「他人を見殺しにすると、少々うるさい人物が近くににいるものでしてね。それに、やったらやったでなんだか後味が悪そうですし。」

「フッ、ちよつと機械みたいな奴だと思ってたが、少し意外だったな。」

「・・・・・・私ものです。」

Sブレイドとカリスが軽く雑談し終わると、同時にオーキッドへと駆けていく。

戦いは完全にカリスとSブレイドのペースで進んでいた。オーキッドも反撃しようとするが、一瞬の隙を突いて攻撃されてしまうため必然的に守りに徹するしかない。

「ぐう・・・・くそっ!？」

「終わりですね・・・・」

「凜を傷付けたんだ、ただで済むと思うな!」

そして二人が同時にオーキッドに斬りかかろうとすると、相手は突然背中を向けてきた。その後頭部には、もう一つの顔が・・・

「グッ!？　これはっ!」

「くそっ、しまった?!」

オーキッドのもう一つの顔から放たれた無数の花卉に、カリスとSブレイドは完全に惑わされる。そして花卉がなくなったとき、そこ

にオーキッドの姿は影も形もなかった。

その頃、青羽は絶体絶命だった。

バックルはなく、仲間も釘付けにされている。唯一の希望はあの場にいないノーマが駆けつけてくれることだけだが、それも間に合うかどうか・・・

（いや、大丈夫・・・絶対に間に合う！）

青羽はまだ諦めてはいなかった、彼女はノーマのことを信じていたから。それは何の根拠もない、青羽が一方的に思っているだけの信頼。だが、それが今の青羽を支えてくれている。

だが、カプリコーンの攻撃はさらに激しくなり、青羽はついに地面に倒されてしまう。

「グッ?!」

そして倒れた青羽の襟をカプリコーン掴んで無理やり立たせた時・・・

「青羽、これをつっ！」

戒が青羽の下に走り寄ってくる、その手には先ほど青羽が手放したブレイバックルが。

「ッ!? こんのお！」

青羽はカプリコーンを突き飛ばしてバックルを受け取ると、即座に

カードを装填。腰に装着した。カプリコーンはその場に凜が無事な姿でいることに驚愕する。

「何故だっ?!」

「変身!」

《Turn up》

青羽はブレイドに変身すると、カプリコーンに斬りかかる。今までの借りを返すと言わんばかりに連続で斬り、蹴り、相手を圧倒するAブレイドの様子に、戒達は加勢の必要はないだろうと考えた。

「許さない、凜ちゃんを危ない目にあわせて……絶対に許さないから!」

そう言って再びカプリコーンに斬りかかるAブレイド、その怒涛の連続攻撃に、カプリコーンは成す術がなかった。

「フッ、セイツ、ヤアッ!」

「ぐ、ぐおおっ?!」

カプリコーンがダメージを受けたことを確認して、オープントレイを開くAブレイド。そこから取り出したのはスペードの5, 6, 9のカード。

《Kick Thunder Mach》

《Lightning Sonic》

「ハアアアア……」

3枚のカードをラウズして発動するAブレイドの必殺技、『ライトニング・ソニック』がカプリコーンに放たれる。高速で相手に体当

たりを食らわせたAブレイドは即座にその場でUターンしつつカプリコーンへ向けて飛び蹴りを放った。

「デヤアアアアッ！」

「ぐう！　ぐあああああああつ？！」

Aブレイドの必殺技を食らったカプリコーンは吹き飛ばされ、落ちた先で爆発。爆炎が晴れるとそこにはバックルが開いて倒れているカプリコーンの姿がある、バックルの中にはスペードの紋章とQの文字が。

Aブレイドはそれを見るやすぐにコモンブランクを投げて、アンデッドの封印を行う。そしてAブレイドが手に入れたのは、スペードのQ『アブゾーブ・カプリコーン』のカードだった。Aブレイドは変身を解いてしばしそのカードを眺めた後……

「ふう……いよっしゃーっ！！　上級カテゴリーゲットーッ！」

といった風に歓喜の声を挙げた。その様子に苦笑しながら青羽に近づいていく戒達、そして別の方向からは同じく変身を解除したノーマと総司が歩いてきた。

「お疲れ、青羽。」

「サンキュー戒、最高のタイミングだったわ。」

「お礼はノーマに言ってあげてくれ、彼女が来てくれなかったら僕らも動けなかった。」

「助かったわ、ノーマ。」

「いえ、そんな大したことは……」

そんな風に話している青羽達を、あずさが微笑みながら見守っている。

その時、灰色のオーロラが現れて、中からレッドスペイダーを走らせて紅羽が青羽達のところにやって来た、千早も一緒だ。

「青羽ッ！」

「あ、紅羽ッ！ 見て見てこれ、あたし上級カテゴリーの「今それどころじゃないのよ！」、へ？」

紅羽が青羽達に敵が迫っていることを伝えようとしたその時、周囲が突然爆発を起こした。

「グッ?! な、何!?!」

「チッ、来たか・・・」

青羽達が慌てて周囲を見ると、そこには先ほど王蛇とキックホッパーを召喚した男性・・・鳴滝が立っていた。

第30話 青羽の怒り、人を感じる心（後書き）

という訳で第30話でした。今回はかなりブレイド原作を意識した話になりました。

青羽も漸く上級カテゴリーのカードをゲット、残るはカテゴリーJだけになる訳です。さて、どうやって手に入れるのか・・・

次回からこのコラボ小説も終盤に突入です！ 青羽達の前に現れた鳴滝、彼女達がどう戦うのかお楽しみに。

それでは。

第31話 窮地、ダークライダー参上（前書き）

今回は思い切って2話投稿してみました。

第31話 窮地、ダークライダー参上

ラウクド・公園

カプリコーンとオーキッド、2体の上級アンデッドを退けた青羽達の前に現れたのは、以前青羽達の前に現れあずさ達のことを話し、これまで何度もあずさと十兵衛の邪魔をしてきた人物、鳴滝だった。

「ようやく見つけたぞ、ディケイド。」

「鳴滝・・・貴様も相変わらずしつこいな。」

「しつこい人って、嫌われますよ。」

十兵衛が鳴滝を見据え、千早が皮肉を漏らす。だが彼はそんなこと意にも介さず、口を開いた。

「お前たちの旅はここで終わりだ。」

彼がそう言った瞬間、灰色のオーロラが現れ中から3人のライダーが姿を現す。

漆黒のボディに赤い複眼の龍をモチーフにしたライダー・・・【仮面ライダーリュウガ】

同じく黒いボディに回路のような模様を描かれたカブトムシの様なライダー・・・【仮面ライダーダークカブト】

黒い装甲にマントを着けた、騎士の様なライダー・・・【仮面ライダーオーガ】

その3人のダークライダーが青羽達の前に立ちはだかっていた。

「チッ！ あずさ、行くぞ！」

「はい！」

「あたし達も！」

『変身！』

十兵衛達に続いて、青羽、総司達も仮面ライダーに変身してダークライダー達に立ち向かう。しかし・・・

「面白そうなことをやってるわね、私も混ぜてもらいましょうか？」

「り、利香?!」

「変身。」

《Open up》

間の悪いことにこの場に仮面ライダーサイズが現れてしまった。

「久しぶりね、まだ生きてたんだ？」

「おい、何なんだあいつは？」

「説明は後、とりあえず止めるわよ！」

クウガからの質問にAブレイドはそう言って、サイズと戦い始める。カリスとギャレンもそれに続き、ディケイド達も鳴滝が呼び出したダークライダーと戦い始める。

「ハッ、くう、きやああっ?!」

「あずさ!?! クソッ！」

ディケイドとクウガはオーガと戦っていたが、パワーでは向こうが優れていたのかオーガの攻撃に弾き飛ばされるディケイド。クウガ

も必死に応戦するが、やはり『555の世界』で最強とされるだけあって圧倒されてしまう。

「ええいっ！ 宗矩ではないとはいえ、やはりオーガは強いな・・・こうなったら、超変身！」

状況を打開する為に、クウガは防御力とパワーに優れたタイタンフォームにフォームチェンジする。だがその分スピードが下がってしまい、その弱点を突かれて追い込まれてしまった。

その頃Sブレイドは、リュウガと接戦を繰り返していた。

優れた剣技を発揮するSブレイド、リュウガもドラグセイバーを召喚して応戦していたが、接近戦ではやはりSブレイドに分がある。

「はああああっ！」

「グッ?!」

そしてついにSブレイドの攻撃にリュウガがドラグセイバーを弾き飛ばされる。リュウガはその瞬間即座にSブレイドから距離をとり、Sブレイドはそれに対して追撃を行おうとするが・・・

《ADVENT》

「ッ!? ぐあっ?!」

リュウガは一瞬の隙を突いて自身の契約モンスター『ドラグブラッカード』を召喚、その口から放たれる業火でSブレイドを吹き飛ばしてしまった。

そしてディエンド・Cブレイドとダークカブト、この戦いは終始ダ

ークカブトの方が主導権を握っていた。

「クッ、一体どこに、グッ?!」

ダークカブトのクロックアップに翻弄され、二人の攻撃はなかなか当たらなかった。

「それなら、これでっ!」

《ATTACK RIDE BLAST》

高いホーミング性能を持った弾丸を放つ『ディエンドブラスト』が辛うじてダークカブトを捉える、だがそれも一瞬ダークカブトの動きを止める程度ですぐにまたクロックアップでディエンドを翻弄し始めた。

「逃がしません!」

「これならどう!」

《KAMEN RIDE IXA PHYGA》

《Mach》

「行っ!」

ディエンドはダークカブトに対して、【仮面ライダーイクサ】と【仮面ライダーサイガ】を召喚、Cブレイドも『ジャガー・マッハ』を発動してクロックアップに対抗した。

「その命、神に返しなさい!」

「It's show time!」

ライダー二人の銃撃でクロックアップしたダークカブトを捉えることに成功するも、ダークカブト自体の高い戦闘力にイクサとサイガ

はあっと言う間に倒される。

「クッ、流石ダークライダー、手強い・・・きやあっ?!」

「クソッ!? コイツ、がああっ?!」

ディエンドが改めてダークライダー達の強さに仮面の下で苦い顔をしていると、一瞬の隙を突かれてクナイモードのゼクトクナイガンに一撃を受けてしまった。Cブレイドはディエンドを援護しようとするも、一瞬でガンモードにしたクナイガンの銃撃でこちらもダメージを受けてしまう。

サイズとAブレイド・カリス・ギャレンの戦いは、3対1という状況もあってか一番善戦している方だった。だがやはり相手のスペックが非常に高く、3人は何とか対等の勝負をするので精一杯だった。おまけに・・・

「くっ、利香! 止めてくれ!」

「戒、今は無理だって!」

「とにかくサイズを行動不能にしないと・・・」

サイズの装着者・・・利香の恋人であるギャレンが攻撃を躊躇してしまっている為、今一歩攻撃が踏み出せない。しかもサイズはそこを的確に突いてくるため、Aブレイドとカリスはギャレンをサポートする為に奔走している状態だった。

「じゃあ、これで・・・」

《Slash Wave Dark》

《Darkness Scissors》

「ハアッ!」

そしてついにサイズの必殺技『ダークネス・シザース』が発動、3人に闇の力を纏った斬撃が波動のように襲いかかる。

「うあああああつ?!」

「ぐあつ!?!」

「がはあああああつ?!」

クウガの技も、ディケイドとディエンドの力も、3人のブレイドの剣技やカリスのテクニクやギャレンの射撃ものともせずにダークライダー達はディケイド達を打ち倒してしまう。

「きゃあああああつ?!　くう・・・」

「あ、あずさ・・・」

ダークライダー達の圧倒的な力の前に、ディケイド達の変身は解除されてしまっていた。そしてその場には倒れた青羽達と、それを見下ろす鳴滝率いるダークライダー、そして・・・

「あなたね、私をここに呼んだのは。」

「ああそうだとも、もはや君しか頼れる者がいなかったのですね。」

鳴滝に呼ばれてこの場にやって来たこの世界のダークライダー、サイズがいた。鳴滝はサイズの質問に肯定の意を示すと、再びダークライダー達に命令を下す。

「さあ、ディケイドを排除しろ。ディケイドが全てを滅ぼす、こいつの存在こそが全てを破壊するんだ!　その前に「・・・けんじやないわよ。」何?」

鳴滝が命令を出そうとした時、彼の言葉を遮る人物がいた。

「ふざけるんじゃないわよ・・・存在が全てを破壊する？　じゃああずささんは何のために生れて来たってのよ・・・」

そう言って青羽はゆっくりと立ち上がった、その瞳は怒りに燃え、真っ直ぐに鳴滝を睨みつける。

「下らない。そいつが存在する意味など、世界を破壊する為だけに以外の何物でもない。」

鳴滝はそう言って青羽を見下した。

だが青羽はそれに納得できない、時間は短いがあずさ達と触れ合ってきたからこそわかる。あずさはそのような事をする女性ではない。

「そんなのおかしいでしょ！？　あんた、あずささんとともに話とかした事無いでしょう。この人はそんなことしない！」

「青羽ちゃん・・・」

「会って長くないけど分かるわ、この人は・・・あずささんは絶対にそんな人じゃない。ただ好きな人といろんな世界を旅して回ってだけの、ただの旅人よ！　それを・・・あんたの身勝手な考えだけで存在そのものを否定するなんて、そんなの・・・そんなの絶対間違ってる！！」

青羽の言葉は、その場に倒れている全員の心に再び火を付けた。彼女のどこまでも真っ直ぐな心に、揺るがない信念に。

「青羽ちゃん・・・ありがとうございます。鳴滝さん！」

青羽の言葉に勇気づけられて立ち上がったあずさは、鳴滝を見据え

る。他の者達もゆっくりと立ち上がり始めた。

「あなたがどれだけ私のことを破壊者と言おうが、私のやることはこれから変わりません!」

「そうだ、俺様達はこれから旅を続ける!」

「いろんな世界の人達と・・・触れ合う為に!」

あずさ、十兵衛、千早が立ち上がって鳴滝にそう言う。その言葉に青羽達も頷いた。

「おのれえ、ディケイドッ!? お前は・・・お前達は一体何なんだ!?!」

「通りすがりの仮面ライダーと・・・」

「不可能を可能にする仮面ライダーだ!」

「「覚えておけ(きなさい)!!」」

そう言った瞬間、あずさは腰にディケイドライバーを装着した。

「変身!」

《KAMENRIDE》

あずさはドライバーにライダーカードを装填し・・・

「変身!」

十兵衛はアークルを出現させ・・・

《KAMENRIDE DIEREND》

「変身!」

千早はディエンドライバーにあずさ同様カードを装填してポンプアクションで前にスライドし・・・

「「「「「変身!」」」」」

《《《《《Turn up》》》》》

《Change》

青羽・紅羽・総司・戒の4人はバツクルのハンドルを引いて、ノーマはラウザーにカードをスラッシュして・・・

《DECADE》

あずさがドライバーを90°回転させて、全員がライダーに変身した。

ここに集結した8人のライダーと、鳴滝率いる3人のダークライダー、そして青羽達と因縁のあるサイズとの戦いの火蓋が切られようとしていた。

第31話 窮地、ダークライダー参上（後書き）

初見のダークライダーに敗れるのは、仮面ライダーのお約束（笑）。最後の方の全員一斉変身は、MOVIE大戦での士一行4人の同時変身を参考にしています。

楽しかったコラボ小説も、次回で遂に終わりを迎えます。最終決戦がどのように展開され、どのような結末になるのかお楽しみに！

それでは。

第32話 訪れる別れ（前書き）

どうも、黒服です。今回で楽しかったエンジェルさんとのコラボ小説もクライマックス、どんなラストになるのか楽しみにしてください！そして、皆さん気になっているであろうFFRも・・・
（笑）

第32話 訪れる別れ

8人のライダー達は、4人のダークライダー達と戦い始めた。

クウガとAブレイドはダークカブトを相手にする。序盤はダークカブト相手にいい勝負をしていた二人だが、相手がクロックアップを使うと一気に形勢は逆転される。

「うわっ!？」

「グッ、ええい!」

まだまだ未熟なところがあるAブレイドはともかくとして、ライダーとしては熟練である筈のクウガですらクロックアップには手を焼いてしまう。だが二人とも諦めることなく即座に体勢を整えて、反撃の構えをとる。

「クロックアップは厄介だぞ、どうするんだ?」

「こうすんのよ!」

《M a c h》

Aブレイドは『ジャガー・マッハ』を発動して、ダークカブトに接近戦を挑んだ。ダークカブトもクロックアップで対抗し、Aブレイドは互角とはいかないまでもダークカブトと戦っていく。

「なるほど、なら俺様は・・・超変身!」

その様子を見て納得したように呟くと、クウガは感覚力を強化した『ペガサスフォーム』にフォームチェンジ。何処からか取り出した玩具の銃を専用の武器『ペガサスボーガン』に変えたPクウガは右

耳の辺りに右手を添えて、感覚を最大限に研ぎ澄まして相手を探す。そしてPクウガの強化された感覚力がAブレイドと、彼女と戦っているダークカブトの存在を捉える。

「ッ！？　そこだ！」

ダークカブトの存在を捉えたPクウガは、ダークカブトに必殺技の『ブラストペガサス』を放つ。圧縮された空気の矢は直撃とはいかないまでも大きなダメージを与え、ダークカブトをクロックアップから引きずり出すことに成功した。

「ナイス！　やるじゃん十兵衛さんも。」

「当たり前だ、俺様は不可能を可能にする男だぞ。」

ペガサスフォームからマイティフォームに戻ったクウガは、Aブレイドと共にダークカブトを追い込んで行った。

その頃ディケイドとディエンドは、リュウガを相手に善戦していた。

「行きますよ、千早ちゃん！」

「はい、あずささん！」

《《ATTACK RIDE　BLAST》》

ディケイドの『ディケイドブラスト』とディエンドの『ディエンドブラスト』、二人が放つ強化されたエネルギー弾にリュウガはその場に釘付けにされてしまった。

「クッ！」

《《STRIKE　VENT》》

「おおおおお、ハアッ！」

何とか二人の弾幕から抜け出したリュウガは『ドラグクロー』を召喚、必殺技の一つ『ドラグクローファイアー』を放った。

「ならこれで！」

《ATTACK RIDE BARRIER》

だがその攻撃は、ディエンドの防御技『ディエンドバリヤー』に防がれてしまう。そして一撃を放った後で隙が出来たリュウガに、ディケイドが一気に接近する。

「行きます！」

《ATTACK RIDE SLASH》

「ハアッ！」

リュウガにある程度近づいたディケイドは、斬撃力を強化する『ディケイドスラッシュ』を発動し、リュウガに着々とダメージを与えていく。

オーガの相手は、CブレイドとSブレイドがしていた。どちらも剣による攻撃をメインとし、特にSブレイドはこの中で一番剣技に優れている。Cブレイドも巧みにSブレイドに合わせて攻撃しているので、流石のオーガも圧倒されてしまう。

「あんた、なかなかやるじゃない。是非とも手合わせ願いたいわ。」
「また今度な！」

そう話しつつも攻撃の手を緩めない。二人のブレイドに翻弄され、オーガは防戦一方となってしまう。

だがオーガも何時までもやられている訳がなく、一度二人の攻撃から抜け出すと一気に反撃に転じてきた。力強く無駄のない動きで自身の大剣【オーガストランザー】を振るって、二人のブレイドに斬りかかってくる。

「ガッ?! くっそ、パワーは向こうが上ね。悔しいけど・・・」
「どうした、もう諦めるのか?」

「誰に向かって言ってるのよ、まだまだこれから!」

CブレイドはSブレイドの言葉にそう言って返すと、再びオーガに斬りかかって行く。Sブレイドはその姿に仮面の下で苦笑しながら、Cブレイドに続いてオーガに斬りかかって行った。

そして・・・

「くっ、ぐあっ?!」

「戒っ!?!」

ギャレンとカリスはサイズと戦っていたのだが、やはりギャレンにはまだ迷いがあるのか何時もの実力が出せてはいなかった。

「なんだかつまんないわねえ。ま、あなたがこの子の体を気遣ってあたしに攻撃できないこと位、とっくの昔に分かってるんだけどね。」

「くっ!」

サイズの言葉にギャレンは齒噛みするしかなかった、実際彼女の言う通りなのだ。ギャレンはサイズの装着者・・・利香の体にダメージが及ぶ事を気にしてしまい思うように攻撃が出来ない、サイズはそのギャレンの心の迷いに付け込んで攻撃してきている。

結局、ギャレンはサイズとはほとんど戦えず、カリスが一人でサイズと戦っているような現状となっていた。

「クッ、ハッ！」

「うふふ、流石にあなたは楽しませてくれそうだけど、あたしの方がずっと強いんだよ！」

そう言ってサイズはカリスに怒濤の攻撃を喰らわせていく、その攻撃にカリスも守りに徹する以外無くなってしまう。

「くっ、戒！ 確かに私や青羽はサイズを、貴方の彼女を攻撃します。でもそれは以前言った様に利香さんを犠牲にする訳じゃない。」
「ノーマ・・・」

カリスはサイズからの攻撃を捌きつつ、ギャレンに向かって言葉を紡ぐ。青羽ほど上手くやれるとは思っていないが、今は自分が彼の心に火をつけねばならないと感じたからである。

そしてカリスの言葉は、確実にギャレンの心に影響を与えていた。

「今、私達は彼女をカテゴリーAから解放する手段を知らない。だからこの場はサイズを退ける事を考えればいいんです。」

「退ける？」

「そうです、何かしらの形でサイズの攻撃手段を封じるなどすれば「そんなくだらない事を話してる余裕があるのかしら！」ぐふっ？！
ガッ！」

カリスがギャレンを必死に説得していると、その隙を突かれてサイズの攻撃を受けてしまう。そして地面に倒れたカリスの首にサイズ

がラウザーの刃を付き付ける。

「これで……終わりね。」

「くうっ……」

どうにかしようにもどうしようもない状況、死神の鎌は文字通りカリスの首を捉えている……絶体絶命だ。

「さようなら……」

サイズのラウザーが振りかぶられ、カリスの首に迫ったその時……複数の銃弾がサイズを捉えた。

「あぐっ?! な、何っ!?!」

サイズが慌てて銃撃が来た方を向くと、そこにはラウザーを構えたギャレンの姿が。それにサイズは驚愕の声を上げた。

「戒っ!?! あなたっ!」

「すまないノーマ、待たせたね。」

「……全くですよ、本当に。」

カリスは軽く溜息を吐くと、その場から離れてギャレンの隣に立った。ギャレンからはもはや迷いが感じられず、何時もの気迫が溢れていた。

「利香を……彼女を解放するまでだ、それまではサイズを退ければいい。」

「そうです、彼女を解放する方法が見つかるその時まで。」

ギャレンとカリスは共に武器をサイズに向けて構える、それを見てサイズは肩を竦める。

「ふう、やっとやる気になったみたいだけど、その程度であたしには勝てないわよ!」

《Wave Dark》

《Darkness Impact》

サイズが2枚のカードをラウズすると、ラウザーに闇の力が収束されていく。そしてサイズがそれを一振りした瞬間、辺りを闇を纏った波動が襲った。

「きやあああああつ?!」

「ぐわあああつ!」

サイズの必殺技『ダークネス・インパクト』は、ギャレンとカリスのみならずディケイドやクウガまで巻き込んだ。

「くっ! それならこれでどうです!」

ディケイドは一気に巻き返す為、切り札を切る。ライドブッカードから2枚のカードを取り出す、クウガと一緒にクワガタムシの様なモノが描かれているカードと、ブレイドと一緒にブレイラウザーの様な剣が描かれているカードだ。

「十兵衛さん、青羽ちゃん。ちよつとくすぐりたいですよ♪」

「へっ?」

「ま、待てあずさ!? お前また・・・」

ディケイドの言葉にAブレイドは頭にハテナマークを浮かべ、クウガは必死にディケイドを止めようとするが、彼女はお構いなしに2枚のカードをディケイドライバーに装填した。

《FINAL FORM RIDE KU KU KUUGA
B B B BLADE》

「えいっ♪」

「ぐおおおおっ!？」

「んきやつ!？」

カードを装填した後ディケイドが二人の背中を叩くと、クウガはクワガタムシの様な形をした支援メカ『ゴウラム』を模したFFR態【クウガゴウラム】に、Aブレイドはブレイラウザーを模したFFR態【ブレイドブレード】に変形させられてしまう。

『あずさっ!？ お前なあ!』

『えっ? えっ? 何これ、どういうこと?!』

「あ、青羽?!」

クウガは無理やり変形させたディケイドに抗議し、Aブレイドは何が何だか分からず困惑している。それを見てCブレイドも驚きの声を上げる。

「ふむ……」

そしてそんな様子を見たディエンドから、何やら不穏な空気が漂い始める。Sブレイドはその空気を敏感に感じ取った。

「おい千早、お前まさか「総司さん。」ッ!? な、なんだ?」
「痛みは一瞬です。」

《FINAL FORM RIDE B B B BLADE》

Sブレイドが恐る恐るディエンドに声をかけると、彼女は彼の予想通りの行動に出る。ディエンドライバーに1枚のライダーカードを装填し、Sブレイドに向けたのだ。

（ま、まずい！？　どうにかしないと・・・そ、そうだ！）

Sブレイドが慌てて周囲を見渡すと、そこには未だに変形したAブレイドに驚愕しているCブレイドの姿があった。

「許せ、紅羽！」

「えっ?!　ちよつ、だああああっ!?!」

Sブレイドは咄嗟にCブレイドの手を引いてバランスを崩させ、一気にその場を離れる。それと同時に本来Sブレイドにかけられる筈だったファイナルフォームライドの効果で、Sブレイドの代わりにCブレイドにかかってしまい結果Cブレイドは【ブレイドブレード・クリムゾン】に変形してしまった。

『ちよつとお!?!　何すんのよあんだ!』

「微妙に違いますけど、まあ些細な問題ですね。」

「悪いな、俺もこれは御免なんだ。」

ゴタゴタはあったモノの状況は整った。ディケイドとディエンドはさらにカードを装填し、Sブレイドはオーブントレイから3枚のカードを取り出す。

《《FINAL ATTACK RIDE B B B BLADE
《《》

《KU KU KU KUGA》

《Kick Thunder》

《Lightning Blast》

二人がそれぞれカードを装填するとブレイドブレードは青い光を、ブレイドブレード・クリムゾンは赤い光を発し、クウガゴウラムはダークカブトをハサミで掴んだ。Sブレイドも必殺技の『ライトニング・ブラスト』を発動する。

それに対し、リュウガとオーガも必殺技を発動する。

《FINAL VENT》

《Exceed Charge》

リュウガの周りを黒い龍『ドラグブラッカー』が回り、オーガストランザーから元の数倍の大きさの光の刃が形成される。

ディケイドは手に持ったブレイドブレードを振りかぶり、オーガに向かって振り下ろした。

『こうなりや自棄よ、いつけえええっ！』

「えええいっ！」

「ぐうう、ぐあああああつ?!」

ディケイドの放った『ディケイドエッジ』は、オーガの『オーガストラッシュ』ごと相手を切り裂いてしまう。ディケイドの必殺技を受けたオーガはその場で爆発してしまった。

一方リュウガも必殺技『ドラゴンライダーキック』を発動、ディエンドに向けて炎を纏ったキックを放つ。ディエンドはそれに怯むこ

となくブレイドブレード・クリムゾンを振り抜いて、リュウガに『
ディエンドエッジ・クリムゾン』を放つ。

『やってやろうじゃないのよ!』

「はあああっ!」

ディエンドの『ディエンドエッジ・クリムゾン』はリュウガの『ドラゴンライダーキック』どころか、その後ろにいたドラグブラッカーでさえ切り裂いてしまう。

「ガアアアアアッ!?!」

切り裂かれたリュウガとドラグブラッカーは爆発し、そのまま消滅していく。それを見てディエンドがブレイドブレード・クリムゾンを手放すと、それは元のCブレイドの姿に戻った。

元に戻るなり、Cブレイドはディエンドに文句を言い詰める。

「ちょっとあんた! 何してくれてんのよ!」

「い、いえあれは総司さんを狙ったのであって・・・」

「ッ!?! そうだ、あいつ!」

Cブレイドがディエンドの言葉に本当の原因の方を見ると、Sブレイドとクウガゴウラムがダークカブトを倒すところだった。

クウガゴウラムは十兵衛の意思を無視して発動された『ディケイドアサルト』に従い敵をはさんだ状態で直進する。ただしその先にいたのはディケイドではなくSブレイド、Sブレイドは迷うことなくクウガゴウラムに向かって駆ける。

『総司！？ 退けえええつ！』

「断る！」

Sブレイドはクウガゴウラムの叫びを一蹴すると、飛び蹴りの体勢で突っ込んでいく。

「うええええいつ！」

「ぐわあああああつ?!」

ダークカブトが爆発してその場から消滅すると、爆炎の中から元のクウガが現れる。クウガは着地すると一目散にSブレイドに詰め寄り、同時にCブレイドもやって来た。

「総司！？ お前俺様を殺す気か！」

「よくもあたしを身代わりしてくれたわね!？」

「今はそれどころじゃないだろう、まだ敵はいるんだ。」

Sブレイドの言葉に、未だ納得できないと言った雰囲気をもしながらもクウガとCブレイドは残った敵を見据える。鳴滝が呼びだしたダークライダーがいなくなった今、この場に残っているのは鳴滝本人とこの世界のダークライダー、サイズだけだった。

サイズは味方がいなくなったのを見るや、肩を竦めて1枚のカードを取り出す。

「な〜んか旗色も宜しくないし、今日はここまでしておくわ。」

《S m o g》

「ッ！？ 待て！」

「逃がしません。」

ギャレンとカリスが急いでサイズを取り押さえようとするが一足遅く、サイズはその場から姿を消してしまった。

ギャレンはサイズを取り逃した事に拳を握りしめるが、すぐに心を落ち着けて今度は鳴滝の方を見る。もはやこの場に彼の見方は誰もおらず、辺りをクウガやAブレイド達に取り囲まれている状況だった。

「おのれ、ディケイドッ!? 次に会った時が貴様らの最期だ!」

鳴滝は悔しそうに顔を歪めてそう言うのと、次にAブレイド達を指差す。

「覚えておけ、ディケイドと関わったモノは消滅する運命にある! 貴様らもこの世界も、いずれ必ず破壊されるのだ!」

それだけ言うのと鳴滝は灰色のオーロラを発生させて、その中へと消えていった。

鳴滝がいなくなったのを見て、全員変身を解いて元の姿に戻る。

「あゝ、皆お疲れ。」

「今回はホントに色々ありましたね、青羽が変形したり。」

「忘れて・・・お願いだから、なんか体の節々痛いし。」

青羽はそう言って腰を回し、それを見た紅羽は思い出したように総司に詰め寄った。

「忘れるところだった、総司あんた「総司お兄ちゃん!」って・・・」

紅羽が改めて総司に文句を言おうとした時、今まで隠れていた凜と結衣が総司に走り寄って行く。

「総司、大丈夫だった?!」

「総司お兄ちゃん・・・」

「心配するな、この程度どうってことない。」

和気藹々と話す総司一行、その様子に紅羽は立ち入る隙が無くなってしまう。

「くう、あいつ・・・はあ、もういいわ。なんか色々疲れたし。」

紅羽は疲れたようにそう言って溜息を吐いた。

「お疲れ様です、十兵衛さん、千早ちゃんも。」

「あずささんこそ。」

「あずさ、頼むからもうあれは使わないでくれ、命がいくつあっても足りない・・・」

あずさ達がそんな風にお互いを労っていると、再び灰色のオーロラが現れる。

また何か来るのかと身構える青羽だが、総司達はそれが何なのかを察した。

「どうやら、お別れみたいだな。」

「えっ?」

総司の呟きに一瞬何の事だか分からなかった青羽だが、すぐにその

意味を理解する。それを理解した瞬間、青羽は肩の力を抜き穏やかな顔になった。

「そっか、帰っちゃうんだ。皆の世界に・・・十兵衛さん達も？」

「ああ、もつといういろいろ見て回りたいかったが、なかなかに楽しませてもらったしな。それに、次の世界が俺様達を呼んでいる。」

そう言って十兵衛はあずさを見る、あずさもそれに笑顔で頷いた。

「千早、あんたはどうすんの？」

「私も次の世界に向かいます。世界はまだまだ沢山ある訳ですし、もつといういろいろ見て回りたいですから。」

紅羽は千早の言葉に軽く頷くと、黙って右手を差し出した。

「ホントにすっごく短い間だったけど・・・なんだかんだで助かったわ、ありがとう。」

「こちらこそ・・・」

そう言って二人は握手を交わす。他の者もお互いに握手をしたりとして最後の挨拶を済ませた。

そして・・・別れの時がやってくる。

「じゃあな、青羽。精々頑張れよ、仲間と一緒に・・・夢に向かって。十兵衛、あずさ、千早！ 今度また俺達の世界にも来い、夏海や景綱達も喜ぶ。」

「気が向いたらな！」

「またね、次に会う時は絶対あたしが勝って見せるわよ！」

青羽はそう言って総司に向かって手を振り、ノーマと戒も結衣と凜に別れを告げる。

「結衣さんと凜さんも、お気を付けて。」

「いつかまた会いましょう。」

「はい、こちらこそ。」

「皆ッ！ またねッ！！」

別れを告げると、総司一行はオーロラの中へ消えていきそのまま姿を消してしまった。それを見届けると十兵衛達もオーロラを出して、それに向かって歩いて行く。

「じゃあな、紅羽！ いつかまた会おう。」

「千早ちゃんも、元気でね！」

「次に会った時はあんたにも勝って見せるから、覚悟しときなさいよ。」

「プロデューサーとあずささんも、またいつか！」

そう言うのと十兵衛達はオーロラの中に消え、千早もオーロラを出してその中へと去って行った。

オーロラは消え、全員己の居場所へと帰って行く。総司達は元の世界へ、あずさ達は旅を続けて。後にはこの世界の住人である、青羽達と紅羽が残される。

「それじゃ、あたしももう行くわ。」

「うん・・・ねえ、紅羽・・・」

「何・・・？」

青羽と紅羽はしばしお互いに見つめ合うと、同時に拳を相手に突き

出す。お互いの拳がぶつかり合うと、どちらも不敵な笑みを浮かべていた。

「次に会った時が勝負よ、その時にはあたしはもっともっと強くなってるから！」

「期待しないで待ってるわ、精々頑張んなさい。」

二人は笑い合うと、今度こそ別れた。青羽は次の街『ルークス』に、紅羽は『アティールアシミ』に向かって……

こうして青羽達と通りすがりの仮面ライダー……あずさ達との邂逅は幕を閉じた。

彼女達との出会いは、少なからず青羽達に影響を及ぼすだろう。

青羽達はこれからも旅を続ける、己の目的……夢に向かって。

そしてあずさと十兵衛も、旅を止めることはないだろう。人の希望、可能性の数だけ世界は存在するのだから。

第32話 訪れる別れ（後書き）

という訳で第32話でした。なんだかんだで10話もかかってしまいました。書いてる間は楽しかったです！

FFRはこうになりました。青羽はともかく総司と紅羽どちらをFFRさせようか迷ったのですが、総司が紅羽を身代わりにする展開の方が面白そうだったので紅羽にFFRしてもらいました（笑）

最後になりますが改めまして、今回コラボを承諾してくださり、エンジェビルさん本当にありがとうございました！

第33話 知られる秘密

街道

異世界の仮面ライダー達、あずさや十兵衛、総司達と別れてから2日後、青羽達は次の街ルークスに向けてバイクを走らせていた。現在は途中休憩として道端にバイクを停めているところである。

「ルークスって後どのくらいで着くの？」

「このまま街道に沿って行けば後3日、途中にある森を突っ切れば1日で着く筈です。」

「森にも一応道はあるらしいよ、その代わりアンデッドに遭遇する確率が高いけど。」

戒はそう言って森を通ることへのリスクを口にするが、そんなモノは青羽達にとっては大したリスクではない。青羽は修行の一環としてアンデッドとの戦いを望むだろうし、ノーマに至っては旅の目的がアンデッドの封印である。この二人がどちらを選ぶかなど火を見るより明らかだろう。

「あたしは森を突っ切る方に一票。」

「私もそちらがいいです。」

結果は案の定、当の戒も利香を助け出す情報を得る為に街へと急ぐことはやぶさかではないので、このルートの賛成だった。

「それにしても、最近全然アンデッドに会わないわねえ。」

「最近と言っても、ここ2日程度の短い間ですが・・・」

「ノーマ、何か分かるかい？」

戒の質問は、周囲にアンデッドがいるかどうかと言う事を示している。ノーマはそれに特に表情を変えすることもなく、顎に手を当ててしばし感覚を研ぎ澄ませるような仕草をした後、アンデッドがない事を伝えた。

「いえ、この辺りにはアンデッドはいないようです。」

「そうか・・・ノーマが言うんだったら確かなんだろうね。」

「でも不思議だよねえ、ノーマのそれも超能力みたいなものなの？
寧々さんが持つてる。」

ノーマの答えに戒が答えた時、青羽がそんな事を口にする。実際青羽はノーマと付き合いが長いが、出会った当初から不思議で仕方無かった。

だが不思議に思っただけでいたがそこまで警戒してはいない。青羽は寧々と言う特殊な能力を持っている人物を既に知っていたので、ノーマに関して似た様な能力か単に勘がいいだけなのかと考えていたのだ。

「いえ・・・そう言うのでは・・・」

「あれ、違うの？」

だがノーマから返って来たのは違うという言葉、その答えに一瞬キョトンとする青羽だがすぐに何時もの笑顔を取り戻す。本人が言いたくないというのならそれでも構わない、無理に聞き出すよりも言うまで待った方がずっといい。少なくとも余計ないざごさは起こらないだろう。

「ま、そんなに重要なことでもないしね。それじゃ行こっか！」

そう言って立ち上がる青羽に、戒も頷きながら立ちあがる。

「・・・・・・・・・・」

ノーマも立ち上がったが、その表情はどこか不安と罪悪感が混ぜ合わさったかのような複雑なモノになっていた。

森

青羽達がしばらくバイクを走らせていると、ノーマが言っていた森に着いた。道は森に続く物と森を迂回する街道に続く物の二手に分かれており、青羽達は先程話し合ったように森に続く道に向かう。

なお森の中を進む場合は余程の事が無い限りバイクを走らせずに進む。いくら道があるとはいえ森の中は見通しが悪い、もし先に森の中を歩いている人がいた場合衝突事故を起こしかねないだろう。少なくとも突き出た木の枝で怪我をする危険はある。

青羽達が森の中を進んでいくと、道の先に人の気配を感じた。先は少し開けた分岐点のようで、気配の主は青羽達から見て左側にいるらしい。生憎と木の枝に邪魔されて相手を見ることは出来ないが、近付くにつれて相手の声が聞こえてくる。しかもそれはどこか聞き覚えのある声だった。

「？　ねえ、この声どこかで聞いたこと無い？」

「青羽もかい、実は僕も・・・」

「これは・・・ッ！？」　隠密調査部の、黒木とか言う男の声です！」

ノーマの言葉に息を飲む青羽と戒、彼がこの場にいるという事は恐らくもう一人も仲間の可能性が高い。しかし何故彼らがここにいるのか、もしや自分達を待ち伏せしていたのではないかと考えてしまう。

「待ち伏せ？」

「どうだろう、少なくとも彼らにかかれれば僕らの行き先を知るくらい造作もない事だと思うけど・・・」

「とにかく気配を消して、少し聞き耳を立ててみましょう。」

ノーマの提案に二人は頷き、その場にバイクを停めると足音を立てない様にして分岐の所に近付いていく。そしてギリギリの所で立ち止まり聞き耳を立ててみた。

「・・・でよ、お前結局どうなんだよ？」

「どう・・・と言いますと？」

「気になる奴はいないのかって話。ちょっと位はイイと思えるような女とかいないの、お前？」

「生憎と、そのような考えは毛頭ございません。それを言うのであればあなたはどうかですか？」

「俺が？ 俺の何がどうだって言うんだよ？」

青羽達が聞き耳を立てると、恭司達の話声が聞こえてくる。だが一体何の話をしているのかが分からない。少なくとも自分達に関することではなさそうだが・・・

「簡単なことですよ、怜奈さんとは最近どうなのかって話です。まさかもうやることもやってしまったとか？」

「おっと、そいつは機密事項って奴だ。いくら相棒でもコイツは教

えられねえな。」

二人の会話を聞いて、青羽は首を傾げる。これは所謂コイバナと言う奴ではないだろうか？　だが何故こんな所でそんな話をしているのか分からない。

「・・・何やってんの、あいつら？」

「どうも女性関係の話をしているみたいですが・・・」

青羽に続いてノーマも首を傾げていると・・・

「・・・暇つぶし。」

「「「ッ!?!?!」」」

突然後ろから声をかけられ、慌てて声の方を見る青羽達。そこには以前出会った恭司と同じく隠密調査部の奄美　怜奈の姿があった。

「あ、あんた何時の間に?!」

（い、一体何ですか彼女は？　以前に引き続きまたしても気配が全く分からなかった・・・）

「暇な時・・・時々話してる・・・意味・・・特にない。」

驚愕している青羽達を余所に、怜奈は表情を全く動かさずそれだけ口にする。そして言いたい事を言い終わったのか、青羽達を通り過ぎると恭司達に合流した。

「恭司・・・あいつら、来た。」

「あいつらって？」

「・・・ブレイド。」

「ほお、ここまで来たのか。」

青羽達を通り過ぎた怜奈は、恭司に青羽達の存在を知らせる。もう隠れても意味はないと悟った青羽達は、木の陰から出て分岐点に出た。そこは思いの外広く、ちょっとした広場並みのスペースはありそうだ。

分岐点に出た青羽が恭司を睨むと、彼は余裕そうな笑みを浮かべている。その笑みに青羽は何か嫌なモノを感じた。

「よお、久しぶりだな。」

「そうね、まさかまた会えるとは思ってなかったわ。別に会いたくも無かったけど・・・」

「おっ！ そいつは今流行りのツンデレって奴か？ 悪いけど俺そう言うのに興味ないぜ。」

「ふざけないで！ 何であんた達がこんなところにいるの？ 狙いはあたし達？」

恭司は何を考えているのか、態とおどけて見せているが青羽はそれに食って掛かる。戒が恭司の近くに二人に視線を向けるが、怜奈は相変わらず無表情で何を考えているのか全く分からない。晃は晃でこちらも笑みを浮かべているが、こちらを小馬鹿にしている様な嫌な笑みを浮かべている。正直目を向けたくはない。

「やゝれやれ、折角再会の空気を軽くしようと思ったのに・・・なあ？」

「ま、恭司さんのハイセンスなジョークが理解できないんでしょう。ユーモアが分からないというのも、気の毒じゃありませんか。」

「~~~~ッ！ あんた達ねえ「青羽、いけません。」ノーマ・・・」

相変わらずふざけた雰囲気を出そうとする恭司に、こちらを馬鹿に

する気満々な晃の言葉。それに青羽が我慢ならなくなり怒りをあらわにするが、ノーマに窘められることになる。そして青羽が何とか怒りを鎮めると、今度はノーマが彼らに質問した。

「それで、一体何をしているのですか？ 先程の様子から察するに私達が目当てと言う訳ではなさそうですが・・・」

ノーマの質問に恭司はニヤリとした笑みを浮かべて、今度はふざけずに答えてきた。

「ま、機密事項だから詳しくは言えないが、この先でちょっとした作戦が行われててな。」

「作戦？」

恭司の口にした『作戦』と言う単語に首を傾げるノーマだが、当然の事ながら検討は全くつかず彼らもそれを口にするつもりは毛頭なさそうだ。

だがそんな事は些細なこと、次に恭司の口から出てきた言葉はノーマを今までにないくらい驚愕させるには十分だった。

「まあ作戦に関するかどうかはどうでもいいじゃねえか。それよりも俺はお前が気になってたんだよ、ノーマ・イクス・・・・いや、トライアルX。」

「ッ?!?! な、何故……あなたがそれを・・・」

「トライアル・・・X? 何それ？」

恭司の口にした言葉にノーマはサングラスの奥で驚愕に目を見開き、青羽は首を傾げる。今まで聞いたこともない単語に、ノーマが何故驚くのが分からなかったのだ。

「トライアル……ッ!? まさか、トライアルシリーズ!」

だが戒だけはその言葉の意味が分かったのか、彼も驚愕の声を上げる。恭司はそんな戒に感心した目を向けた。

「へえ、お前知ってるんだ。」

「何、戒。その……トライアルシリーズって言うの。」

青羽の質問に答えたのは、戒ではなく恭司だった。彼は青羽に向かってしたり顔でトライアルシリーズについて説明していく。

「ライダーシステムが開発される前にはな、いろいろな対アンデッド用の兵器が開発されてたんだよ。どんなのがあるか知ってるか?」

「そんなの……あたしが知る訳ないでしょ。」

「やれやれ、ちったあ勉強しろよ。最初はもちろんアンデッドに効く強力な銃弾だが、そんなもんでアンデッドに対抗できる訳がねえ。兵器は次第にパワードスーツに変化していき、最終的にアンデッド自身の力を使うライダーシステムが開発された。」

恭司はそこで言葉を区切ると、一拍置いてから再び口を開く。

「だが、対アンデッド用に開発された兵器にはライダーシステムの他にもう一つ案があった。それは対アンデッド用の人造人間だ。」

「人造人間?」

「やめてください……」

恭司の言葉に青羽は首を傾げ、対照的にノーマは小さい声で恭司にそれ以上言うのを止めるように言う。その様子は明らかに何かを恐れていた。

「そう、人造人間だ。人間にアンデッドの遺伝子を組み込んでアンデッドと同等に戦える強靱な肉体を持たせた、アンデッドと戦う為に作られた兵士……いや、兵器か。」

「やめなさい。」

「コストが高過ぎることに使い勝手の良さから、最終的にはライダーシステムが採用されたんだが……どんなものにも試作品ってのはあるもんだ。んで、その試作品の一つが……」

「やめてえ!?!」

恭司が説明していく中、ノーマの声は次第に大きくなっていく。最終的には叫び声と大差ないモノになり、彼女のそんな声を聞いた事のない青羽はノーマに呆然とした視線を向ける。そんな彼女達を見て恭司はニヤツと笑うと、トドメの言葉を口にした。

「そこにいるノーマ・イクス……いや、対アンデッド用人造人間試作体……トライアルXなんだよ!」

「ッ?! あ、ああ……」

自身の正体を高らかに言われるとともに、ノーマはその場に崩れ落ちる様にへたり込んでしまう。知られたくない秘密を、仲間である青羽達に知られてしまったことに対する絶望感に彼女の目の前は真っ暗になった。

「ノーマが人造人間? 何を証拠にそんな事……」

「トライアルシリーズはアンデッドを封印する為に対アンデッド用のセンサーが付いてる。勿論性能は協会とかに置いてある物ほどじゃないけど、それでもある程度近づけばすぐに分かるもんだ。」

「ッ! そうか、だからノーマは……」

ノーマの正体に戒は漸く合点が行ったという顔になる。それならば今まで妙に彼女がアンデッドに素早く反応していた事にも説明が付く。

「で、でもそれは単に勘がいいとかじゃ「他にも、アンデッドの遺伝子の影響で常人を超える怪力を発揮できる。何か心当たりはないか？」ッ！　そう言えば・・・」

なおも青羽はノーマが人造人間であることを否定しようとするが、恭司の口から出た言葉に何も言えなくなってしまふ。思い返せば最初にノーマと戦った時に、異様に力が強かったのを思い出した。あの細腕の何処にこんなパワーがあるのかと。

「これで分かったろ？　そいつは人間じゃない、ただアンデッドを封印する為に造られた、戦う為に生れた兵器なんだよ。」

青羽はその言葉に再びノーマを見る。彼女は完全に放心状態で、サングラスの上からでもノーマの目が虚ろになっているのが手に取るように分かった。

青羽はそんなノーマの前にしゃがむと、何も言わずに彼女のサングラスをとる。ノーマの目は案の定虚ろになっていて、辛うじて青羽に反応しているといった感じだった。

「あお・・・ば・・・」

ノーマは放心状態でありながらも青羽の名を呼ぶ、その様子は助けを求めている子供の様でもあった。そんな彼女に青羽は・・・

「大丈夫よ、安心して。」

「青羽？」

何時もの快活な笑みを浮かべて、ノーマの頭を軽く撫でた。その笑顔と仕草に、ノーマの目に光が戻ってくる。

そして青羽は、ノーマのサングラスを持ったまま立ち上がって恭司達の方を見た。

「ねえ知ってる？ ノーマってばこう見えて意外と石頭でさ、一度こうと決めたモノはなかなか曲げないのよ。おまけに思った事をズバズバ言っちゃうからそのフォローも大変だし・・・」

青羽はやれやれといった感じに頭を振ると、一拍置いた後再び口を開く。

「でもね、そんなノーマでも誰かを思って行動することもあるのよ。仲間の為に動くこともあるし、それに子供の相手が苦手って言う意外な弱点があったりするの。」

そう言って次々にノーマについて話していく青羽、恭司達はそんな青羽に怪訝な顔を向ける。一体何が言いたいのかわからないからだ。対する青羽は、それまで浮かべていた笑みを引っ込めて真剣な眼差しで恭司達を見据えた。

「どう？ あたしはこれだけノーマについて知ってるわ。確かにあんな達が言っていることは事実なのかもしれない、ノーマは人間間とやらなのかもしれないわね。でも！ あたしはノーマが人間間だってところ以外の事をたくさん知ってる！ あたしにとってノーマは、頑固で馬鹿正直だけど優しく可愛げのある大事な仲間よ！」

「……そいつは人間じゃないんだぞ、それでもお前はそいつを仲間って言い張るのか？」

「当然でしょ！ 人造人間？ トライアルX？ 上等じゃない、ノーマがどんな奴だろうとあの子があたしの仲間だってところは絶対に変わらない。」

青羽はそう言って恭司達に強い視線を向け、恭司もそれに対抗するかのように青羽の目を睨んだ。しばし両者が睨みあっていると、不意にノーマが立ちあがって青羽に近付いてその手からサングラスをとる。

「失礼しました、少々迷惑をかけた様で。」

「ノーマ……」

ノーマはそう言いながらサングラスをかけ直し、青羽はそんな彼女に心配そうな視線を向ける。だがノーマは青羽の視線に対して、小さく、だが力強く頷いた。もう大丈夫と言う事だろう、その様子に青羽も笑みを浮かべる。

「はっ！ あゝあ、大して効果はなかったか。揺さ振りとしては結構いい作戦だと思ったんだけどなあ。」

青羽達の様子を見て、恭司は頭上を仰ぎ見ながらそんな事を口にする。それは特に悔しそうな感じではなく、どちらかと言うとちょっとした悪戯がバレた子供の様であった。

「そいつが人間じゃないって事をダシにして心理戦仕掛ければ、お前らも何時もの力を発揮できなくなると思ったんだけどな。」

「お生憎様、あたしはそんなに簡単には行かないわ。」

「そうみたいだな。まあいい、とにかくここから先は通行止めだ。」

そっちに行くんなら何も言わねえし来た道戻って迂回するのも止めはしねえ。」

恭司はそう言うが、青羽達に引き返したりする気は欠片も無かった。右に行っても目的地には着かないだろうし、それ以前に彼らの言う事を聞く義理など全くない。

「残念だけどあたし達急いでの、そこを退いてもらうわよ。」

「ははっ！　そう言うと思ったぜ。俺としてもお前には借りがあるからな・・・これで心置きなく戦えるってもんだ。」

そう言って恭司はカードとバツクルを取り出す。それを見て青羽を含む他の者たちも各々のカードとバツクルなどを取り出して臨戦態勢に入る。

静かな森の一画、そこは今正に戦いの場になろうとしていた。

第33話 知られる秘密（後書き）

今回は青羽達にノーマの秘密が知られてしまいました。ちなみにトライアルシリーズの一つとしてノーマは生まれましたが、原作ブレイドに出ていたトライアルシリーズと違ってノーマは人間ベースにアンデッドの遺伝子を組み込んだモノです。だから傷付けば赤い血が出ます、ノーマはあくまでも人造『人間』なので。

青羽は基本目先の情報よりも自分で得た情報を優先させます、だからノーマの正体が人間ではなかったと知っても驚く程度でそこまで動揺はしませんでした。でも戒の方は……

ノーマは自分の正体は何であるかを自覚しています、それについてはまた後ほど本編で。それ以上に彼女は青羽達にこの事を知られる事を恐れていました、多分青羽と出会った初期の頃ならそうでもなかったんだと思いますけどね、彼女と触れ合って行く内にノーマの心に変化が起きたという感じで。

次回、青羽達と隠密調査部との再戦！そして新キャラ登場、お楽しみに。

それでは。

第34話 再戦・新たなライダー（前書き）

どうも、黒服です。今回は青羽達と隠密調査部の戦い第2回戦、それともどちらも同数3対3の戦いです。さてさて一体どんな戦いになるか・・・

第34話 再戦・新たなライダー

森

青羽達は森の中で隠密調査部の3人と対峙していた。どちらも力強い目で相手を睨み、その場は一触即発の状況となっている。

そんな中、真っ先に動き出したのは青羽であった。彼女はゆっくりとバックルにカードを装填すると腰に装着する。他の者もそれにつられる様にバックルにカードを装填して腰に装着、ノーマの場合はそのまま腰に装着してカードを構えた。

辺りには森特有の生物の音に混じり、バックルから発せられる待機音が響きわたる。そして・・・

「ッ！ 変身！」

「「変身！」」

《《Turn up》》

《《Change》》

青羽がバックルのレバーを引くと同時に、戒とノーマもライダーに変身。

「変身！」

「……変身……」

「へーんしん！」

《《Open up》》

同時に隠密調査部の3人もバックルを開いて変身した。昼間とはい

え森の中は多少薄暗い、辺りは一瞬ライダーが変身する際のオリハルコンエレメントの光で照らされ、光が消えるとそこには6人の仮面ライダーがいた。

ブレイド・カリス・ギャレンと、グレイブ・ランス・ラルクはお互いの獲物を構えて何時でも戦えるように身構える。

そのまましばしお互いにらみ合い、数秒とも数分とも言える時が過ぎた時……

ブレイド達とグレイブ達は、同時に相手に向けて駆けだした。

「デヤアアアアッ！」

「おっと！ 前より剣の筋が良くなってんじゃねえか、おもしれえ！」

ブレイドの斬撃をグレイブは苦もなく受け止め、お返しとばかりに斬り返す。ブレイドはそれを紙一重で避けると、今度はキックを繰り出す。だがそれは容易くかわされ逆に回転を加えた回し蹴りを喰らってしまった。

「ぐっ?!」

「おらどうした？ まだまだこれからだぜ！」

二人の戦いはグレイブの方が若干上回っているのか、ブレイドは徐々に圧されていく形となってしまう。だがブレイドの方も伊達に修羅場をくぐって来た訳ではない、意地でも負けはしないとグレイブに立ち向かっていった。

「ハアアアアアッ！」

「くっ！ 相変わらず攻撃の軌道が全く読めない、なんて人ですか。」

一方こちらはカリスとランスの戦い。カリスは間違いなくこの中でも上位の腕を持つライダーであるが、この相手は話が別だった。野生の獣の様に我武者羅に突っ込んでくると思えば直前になって攻撃をキャンセルする、若しくは予想と全く違う軌道の攻撃を繰り出してくるなど、カリスの予想をはるかに上回る攻撃をしてくるのだ。しかもさらに性質の悪いことに・・・

「フンッ、ハアッ！」

「チィッ！ こっちの動きを読んでる？！」

前回の戦いの時とは異なり、力任せに突っ込むだけではなくこちらの動きを予想するなどの頭脳戦も見せてくる。

これには最初手を焼いた、始はただ闇雲に突っ込んでくるだけの相手かと思っただけに、その思いは一際強くなる。だが慣れれば対処することは十分に可能だった、何せカリス・・・ノーマはただの人間ではない。

「そう、私は人間を超えている・・・この程度で後れをとる訳には！」

そう言いながらカリスはカリスアローでランスに斬りかかる。ランスも反撃しようとするが、間合いを詰められた為防御に徹するしかない。

「ハアアッ！」

ランスはカリスを引き離す為、突きとキックで攻撃する。攻撃は当然避けられ、カリスはランスから距離をとった。距離は少し遠く、ランスの攻撃圏内ではないがカリスアローの攻撃も届かない・・・斬撃だけなら。

「フッ！」

「う、ぐうっ?！」

カリスはフォースアローでランスに射撃を加え始め、ランスは何とか防ぎ避けようとするもカリスの行う正確無比な射撃は避けることなど出来なかった。あえなくその身に複数の光の矢を受けてしまう。そして残るはギャレンとラルクの戦い、こちらはハッキリ言って膠着状態となっていた。どちらも射撃メインのライダー、そして戦いの場が森の中と言う事もあり、森の木に隠れて相手の隙を窺いあっているのが現状だ。

「・・・クッ！」

森の木の陰から相手の様子を伺っていたギャレンに向けて、ラルクのレーザーの矢が飛んでくる。ギャレンは咄嗟に身を隠してやり過ぎすが、どうにも攻めきれない。どうやら向こうは地形の利用と言うモノを心得ているらしい、流石はプロと言ったところか。

「こうなったら、ちょっと手荒だけでも・・・」

《Fire》

この状況を打開するため、ギャレンはラウザーに『ファイア・フライ』のカードのみをラウズする。普段はこれに『バレット・アルマジロ』のカードをラウズして銃弾を強化するのに使うのだが、今回

は銃弾の強化に使ってはならない。何故ならば・・・

「これでどうだ！」

あえて炎のみを発射することでラウザーを火炎放射機とし、ラルクが隠れていると思われるところを炎で炙り出すのである。

「おっととととっ!? これはマズイ！」

ラルクもまさか彼がこのような手で来るとは思わなかったのか、慌てて隠れていた所から飛び出てきた。その隙を見逃すギャレンではなく、出てきた際にラルクに対して容赦のない銃撃を喰らわせた。

「がああああっ?! くっ！」

ギャレンの銃撃を受けながらも隠れる所を探すラルクだが、生憎と彼の周りには隠れられる所が無い。周りは炎に囲まれ、隠れられる木があるのは前方のみ。だがそちらにはギャレンがいる為、近付けばさらなる銃撃に晒されることは目に見えている。

ここでラルクは咄嗟に1枚のカードをラウズする。それはこの状況を打開しようと苦し紛れにラウズした1枚、彼自身咄嗟の事で自分が何をラウズしたのか理解していない。

しかし今回はそれが幸いした、何せ彼がラウズしたのは『バイオ・プラント』のカード。カードをラウズした瞬間、ラウザーから伸びたツタの様な触手がギャレンを絡め取りラルクの前に引き摺りだした。

「な、何っ?!」

「おおっ！ 咄嗟にラウズしてしまいましたがこれはラッキー。さて、これで条件は五分に戻りましたね。」

お互い相手を視認している状態で、再び対峙する二人。この二人の実力は正に拮抗していると言っているだろう。

ブレイド達が森の中で激戦を繰り広げている頃……

森の奥

恭司達とは別の隠密調査部のチーム、健介・志美・冬馬の3人の変身するGグレイブ・Bラルク・Yランスが一人のライダー、仮面ライダーサイズを相手に戦っていた。3人は巧みに連携しながら戦うが、相手は一切の容赦を知らないカテゴリーAに操られている少女。サイズ自体のスペックの高さもあって、彼らも今一歩踏み出せずにいる。

「ふむう……さて、どうしたもんかねえ。」

「何だって変身してる時にちよっかいかけんのよ！ 変身解除した時を狙って攻撃仕掛ければ良かったじゃない。」

「しょうがないじゃない、見つけた時にはもう変身してたんだから。このタイミング逃したら次何時サイズのバツクルを頂戴する機会があるか……」

この会話から分かる通り、彼らの狙いはサイズバツクルである。アレンデッドが開発に携わった、現行最強クラスの能力を発揮する仮面ライダーサイズ。そのサイズのバツクルを解析して、さらに強力なライダーシステムを作り出すのが彼らに命令を与えている総合事務局の目的だった。

その為に彼ら隠密調査部には、サイズバツクルの確保が命じられたのだ。

「とはいえ、流石に何時までもこう進展が無いとねえ。」

「何してるの？ 仕掛けてきたのはあなた達よ・・・少しは楽しませてよ。」

「健介え、あいつなんかヤバそうな雰囲気だしてるけど・・・」
「仕方ない、こうなったら一気に仕掛けて・・・」

Gグレイブがそう口にしたその瞬間、森の中に少年のモノと思われる叫び声が響き渡る。

「ぎゃあああああつ!? た、助けてええええつ?!」

「な、何だ何だ？」

「あら？」

叫びは次第に彼らに近付いてくる、Gグレイブ達がそちらに視線を向けるとそこには・・・

場面は戻って再びブレイド達の戦闘。

ブレイドとグレイブの戦いはいよいよ佳境に入ろうとしていた。優れた技量で相手を圧倒しようとしたグレイブだが、ブレイドはこれでもかと言うくらいしつこくグレイブに食らいつく。

「はっ・・・はっ・・・、お前、相変わらずやるじゃねえか。」

「ふんっ、あたり前でしょ。そう簡単に負けてたまるかっての。」

「はっ！ それじゃあそんなお前に取って置きを見せてやる。」

「前にあんたの仲間が言ってた、必殺技って奴？」

そう言いつつブレイドは警戒を強めた、この相手が冗談をいうような奴ではない事くらい分かる。自信満々に言うからにはそれなりの効果がある技を使ってくるという事だろう、心してかからねばなるまい。

ブレイドが警戒する中グレイブはオープントレイを開き、そこから2枚のカードを取り出した。取り出したカードは以前使ったラウザーにエネルギーを溜めて斬撃を行う『マイティ・グラビティ』のカードと、ブレイドもよく使う『キック・ローカスト』のカードだった。

(? 何アレ、どういうこと?)

ブレイドはその組み合わせに内心で首を傾げる。『マイティ・グラビティ』のカードは以前見た限りだとラウザーの強化的な効果を持つ筈だ。それなのに『キック・ローカスト』のカードを取り出すとは一体どういう事なのか・・・

「へへっ、お前今不思議そうな顔してんだろ？」

「ッ!？」

「こいつはな、こうやって使うんだよ。」

そんなブレイドの内心を見透かしたようにグレイブは声をかけ、彼女がそれに若干驚く中てに持つ2枚のカードをラウズしていった。

《M i g h t y K i c k》

ラウズすると同時にラウザーから電子音声が響く、するとグレイブ

の前に現れた『マイティ・グラビティ』の絵柄に『キック・ローカスト』の絵柄が重なりそのままグレイブの吸収されてしまう。その様子にブレイドは驚愕した。

「ちょっと何それ、どういう事!？」

ブレイドが驚くのも無理はない、彼女はそれまで『マイティ・グラビティ』の効果がラウザーの強化の様なものだと思っていたのだから。

「『マイティ・グラビティ』の効果はラウザーの強化なんかじゃねえ、こいつの効果は『自在』。要は使い方次第でどんな効果も持たせることができるのさ。」

通常の使い方は確かにラウザーの強化に見える。だがこのカードはその効果が表す『自在』の言葉の通り、使い方次第で自由自在に扱える。

「普段は効果が掛かるべきモノが他にないからラウザーが強化されるだけで、同時に他のカードをラウズすればそのカードが強化されるのさ。今みたいにな。」

そう言ってグレイブは必殺の蹴りを放つ為の予備動作に入る、腰を落として何時でも飛び蹴りが繰り出せる体勢だ。

それを見て黙っているブレイドではなく、こちらも必殺技の動作に入る。ラウズするカードは『キック・ローカスト』・『サンダー・ディア』・『マッハ・ジャガー』の3枚。

「そっちがそう来るなら、受けて立とうじゃないの!」

《Kick Thunder Mach》
《Lightning Sonic》

ブレイドが3枚のカードをラウズすると、彼女の必殺技『ライトニング・ソニック』が発動。ラウザーを地面に突き立てて何時でもグレイブに喰らわせられる様に構えた。一方のグレイブも必殺技『グラビティ・ブラスト』の体勢は既に整っており、何時でも攻撃に移れる。

二人の間の緊張感が徐々に高まり、いよいよ同時に相手に攻撃しようとしたその時・・・

「恭司っ！ 作戦中止、撤退だよ！」

突然グレイブの後ろの方から灰色のグレイブが現れ、そのようなことを口走った。その言葉にグレイブも思わずブレイドから視線を反らして驚愕してしまう。

「はあっ?! 中止ってどういう事だよ、逃がしたのか？」

「サイズバックルどころじゃなくなったのさ、トラブルが起こってるね。」

「ちょっと待って、サイズってどういう事よ！」

突然の事態にブレイドも混乱するが、彼らの口にした『サイズ』と言う単語は聞き逃せない。確定するには早過ぎるが、彼らがサイズを狙っている可能性があるのだから。

「トラブルって、一体何だよ!？」

「それはね・・・ああ、あれさ。」

そう言ってGグレイブが指さす先からは、灰色で重厚そうなアーマーに身を包んだ一人のライダー。そして……

そいつを追いかける無数のダークローチだった。

「ゲッ?! ちょっと、なんだあれ!?!」

「ね? あれの所為で混乱状態になっちゃってさ、おかげでサイズも逃がしちゃったし。僕らもさっさと逃げよう、あれの相手は流石に荷が重いよ。」

それだけ言ってそそくさとその場を離れていくGグレイブ、グレイブもそれを見てランスとラルクに逃げるように促す。

「怜奈! 晃! とりあえずここは退くぞ!」

「分かった……」

「何だってまた、折角これからだって時に。」

「文句はあの馬鹿ライダーに言え、まったくこの忙しい時に何やってやがんだ。おい青羽、この勝負はおあずけだ。決着は次に会った時にしようぜ!」

そんな事を云いながら、グレイブ達はその場から離れていった。後にはブレイド達と、今正にこちらに向けて逃げてきている一人のライダー、そしてそのライダーを追いかけているダークローチ達が残される。

「で、どうするんだい?」

「どうするも何も、来た道戻って逃げるしかないでしょう。」

「でもあのライダーはとけないでしょ! 助けんのよ!」

「あ、青羽ちょっと待ちなさ……」

ブレイドはカリス達の制止を振り切ってダークローチの群れに突っ込んでいく。流石にそれを見過ごすわけにはいかない為、カリス達もなし崩し的にダークローチと戦う羽目になってしまった。

「青羽、早く逃げましょう！ 流石にこの数は骨が折れます、私達は戦闘直後なんですよ。」

「せめてあのライダー助けてから、それだけだから！」

「はぁ・・・分かりました。速やかに済ませてくださいね。」

「ありがとう！」

ブレイドはカリスに礼を言うと、一目散に灰色のライダーに向けて走って行く。念のため『スラッシュ・リザード』のカードをラウズして、ライダーにたどり着く途中までに複数のダークローチを斬り伏せた。

「あんた、大丈夫！？」

「おおおっ！ ありがとうございます、名も知らない姐さん！」

「あ、姐っ！？ と、とにかくここから逃げるわよ・・・って!？」

ブレイドがダークローチに囲まれていたライダーに近付くと、相手は涙声になりながら彼女にしがみつく。顔は見えないが恐らく泣いているモノと思われる。

とにかくこの場からさっさと逃げようとする、今来た道がダークローチ達で塞がれていた。しかも後から後からどんどん現れて、このままでは非常に危険なことが一目で分かる。この状況に危機感を覚えたブレイドは、思い切ってカリス達とバラバラに別れることにした。

「ノーマ！ ここは一旦別れて逃げよう、あたしこいつと逃げるか

ら！」

「待ってください青羽、それは「ノーマ！」っ!？」

「ルーコスでね！」

「青羽……はあ、仕方ありませんね。遅刻したら許しませんからね。」

「やれやれ、結局はこうなるのか。ま、彼女らしいと言えば彼女らしいかな？」

カリスとギャレンは、何とかバイクの所にたどり着くとそのまま森の中へと入って行った。道の方にはダークローチがいるので、少々危険だが森の木々の間をバイクで駆け抜ける。それを見てブレイドも自分のバイク、ブルースペイダーに向けて駆けて行った。幸いなことにダークローチの一部がカリスとギャレンの方へ向かってくれたので、ダークローチ達の間を突いてブルースペイダーに跨りカリス達とは別の方向へ向かっていく。勿論灰色のライダーを乗せることを忘れずに。

それからしばらく、バイクで森の中を走破するという無茶をした甲斐あってかブレイド達はダークローチを振り切ることに成功する。もっともその代わりかなりの無茶をさせたブルースペイダーは、エンジンも含めて大分痛めてしまった。とりあえずもうしばらく走ることには問題はないだろうが、ルーコスに着いたら真っ先に整備に出した方がいいだろう。

とりあえず何時までも変身したままにいるのも疲れるので、ブレイドは変身を解除して青羽の姿に戻ることにした。それを見てもう一人のライダーも変身を解除する。元の姿に戻ったライダーは青羽の予想通り少年で、茶髪に活発そうな眼を持った少年だ。

「大丈夫？ 結構無茶な運転しちゃったけど……」

「全然へっちゃらっすよ！ 助けていただいて感謝感謝ッス！」

曲がりなりにもかなり強引な逃亡につき合ってしまった為相手が参ってはいないかと心配した青羽だが、どうやら余計なお世話だったらしい。答えた様子など全く見せず、至ってケロッとしている。

「何にせよ危ないところだったわね。あたしは桐沢 青羽よ、あんたは？」

青羽が自己紹介すると、少年の方もそれにならって答える。

「あっ！ 俺、弘貴・・・櫻羽 弘貴ッス！」

少年・・・弘貴はそう言いながら、快活な笑みを浮かべていた。

第34話 再戦・新たなライダー（後書き）

と言う訳で第34話でした。全員結構いい勝負させてみましたが、結局決着はつかず仕舞いです。

今回グレイブがマイティとキックを同時に使いましたが、これはこの作品独自の設定です。マイティの効果が自在で、使用するラウザーによって効果が自在に変わるので、カードの組み合わせでも効果の現れ方に違いが出るんじゃないかと考えてこのようにしてみました。実際に出来るかどうかは分からない（と言うか出来ない可能性の方が圧倒的に高そうですが）ですけど、今後は恭司達はこのようなテクニクを見せてくる筈です。

なお今回登場した恭司達とは別のチーム、健介達についてはこの小説のキバ編を参照して見てください。彼らは主にそちらで活躍しているのです。

新キャラ弘貴こと仮面ライダーアクス、実は彼この話のちよつと前にチラッと登場してるんです。次回その事も含めて彼が青羽に今回の様な事態になった経緯を説明しますので、どうかお楽しみに。

それでは。

第35話 ビギニング オブ ノーマ (前書き)

どうも、黒服です。今回ついにノーマの過去が明らかになります。

第35話 ビギニング オブ ノーマ

森の奥

「さて、自己紹介も済ませたことだし、ちょっとあたしの質問に答えてもらおうかしら？」

「何すか、姐さん？」

「その姐さんってのは止めなさい、何であんたダークローチに追い回されてたの？ それもあんなに沢山。」

青羽は自己紹介を済ませると早速その事を尋ねた。いくらなんでもライダー一人に対してあの数は異常である、何か理由があるんじゃないか。

「まさかダークローチの巢に突っ込んだなんて馬鹿な事言わないでしようね？」

「ちよっ！？ そんなことする訳ないじゃないっすか！」

青羽はジトつとした目で弘貴を睨み、弘貴はそれを慌てて否定する。彼とてそこまで考えなしではない。

「じゃあ何だってあんなすごい数のダークローチに追い回されてたのよ？ どう考えてもおかしいでしょ。」

「えっと、じつは・・・俺、最初は3体のダークローチと戦ってたんすよ。んでそいつら以外と手強くて、気が付いたら1体いなくなってる・・・そのままほったらかしにしてたらいつの間にかどんどん増えていった・・・」

「あんたそれ仲間呼ばれてんじゃないのよ！ 大体ダークローチ3体程度だったらちゃちゃっと倒しなさいよ、ラウザー強化タイプの

カード使えば一発でしょうが。」

基本的にダークローチは群れてさえないなければ大したことはない。1体1体の戦闘力は大したことはなく、駆け出しのライダーが相手にするには絶好の相手と言われているほどである。

しかも聞くところによると弘貴の変身するライダー、仮面ライダーアクスはパワーと防御力に優れたライダーだと言うではないか。それならばダークローチ3体程度のダメージなら多少は無視してパワーで押し切ればすぐに済んだ筈だ。

青羽が弘貴にそれを伝えると、彼は若干肩を落としながら口を開く。

「実は、俺もそう考えて一気に突っ込んでいったんすけど…….
なんか上手くいかなくって。」

弘貴は肩を落としながら、さらに言葉を紡いでいく。心なしか声にも覇気が無くなって来た。

「この間もラウクドでダークローチが出た時他のライダー達と一緒に戦ったんすけど、気が付いたら周りがダークローチだらけになってて。その時は、なんか変な仮面ライダー二人に助けられたんすけど。」

「変な仮面ライダー？」

「はい、何か……『通りすがり』とか『不可能を可能にする』とか言っていましたけど…….」

「ッ! ? あずささんと十兵衛さん……. そっか、あんたあずささん達に助けられたんだ。」

青羽はそう言って数日前の出会いを思い返す。あの異世界の仮面ラ

イダーとの出会いと戦い、そして共闘は彼女にとって貴重な経験だった。何か自分が腕を上げたと納得できた時にはもう一度、あの時戦った仮面ライダーブレイド・・・沖田 総司と戦ってみたいものだと言羽は心の中で呟く。

「まあいいわ。あたしこれからルーコスに行くんだけど、あんた何処行くの？」

「あっ、俺も行き先ルーコスッス。」

言羽が弘貴に行き先を尋ねると、どうやら目的地は同じらしい。これも何かの縁だろうと言う事で、言羽は弘貴としばらく行動を共にすることにした。どうにもこの少年は危なっかしい、ここでほったらかしにしたら次は何をするか分からない。

（お願いだからこれ以上の厄介事は勘弁よ。）

言羽は心の中でそう願うが、果たしてそれが叶うかどうか・・・

一方その頃、言羽と別れたノーマと戒も何とかダークローチの群れから逃れていた。ノーマは既に変身を解除し、一息ついている。

「ふう、ここまで来れば取り合えず大丈夫でしょう。」

「そうだね・・・」

ノーマの言葉にそう相槌を打つ戒は、未だに変身を解除していない。ノーマはそれを疑問に思い、思い切って戒に尋ねてみることにした。

「戒、何時まで変身しているんですか？ そのままでも疲れるのでは・・・」

ノーマが戒を氣遣ってそう言葉をかけるが、彼はそれには答えず・・・

黙って彼女にギャレンラウザーの銃口を向けた。

「・・・・・・何の真似です？」

「ノーマ、まさか君があのだトライアルシリーズの試作体だったとはね。」

「知ってるんですね、トライアルシリーズの事を。」

「まあいろいろあってね、それよりも・・・・・・」

ギャレンはそう言いながらも銃口をノーマからずらさず、ノーマは銃口と共にさっきも向けられている事を感じた。

「話して貰おうか、君自身の事を・・・・」

「さっき黒木が言っていたでしょう、私は「そこじゃないよ。」・・・・

・では何です？」

「僕は疑り深いんだ。君が作られた存在だと言う事は分かった、じやあ君に命令を出した人物はいるのかい？ いるとしたらその目的は？」

ギャレンからの連続の質問に、ノーマは軽く肩をすくめて見せる。

彼女としては自分の正体が知られた時点で二人にも話すつもりでいた、だがどうやら戒はそれを待ってはくれないらしい。

だがそれも仕方のないことか、用心深い人物なら怪しい要素のある相手を警戒するのは当たり前である。ましてやそれが人間ではなく、対アンデッド用の兵器として生み出された人造人間となれば・・・

「せっかちですね、黒木達を退けた後に青羽も含めて話す予定でしたが……貴方はそれで我慢してはくれないでしょうね。」

「悪いね、不安要素は可能な限り取り除きたいんだ。僕だって君を仲間だと信じたい……」

ギャレンの言葉には戸惑いを感じられた。ノーマの事は仲間として頼りにしているし信頼している、だが彼女が隠していた事は流石に見過ごせないほど大きい。彼の生い立ちがどのようなモノだったのかは想像するほかないが、その所為で疑り深い性格になってしまったのだろう。

頭では信じたいと思っているが、心が疑えと言う。そのせめぎ合いにギャレン自身……戒自身苦しんでいるようだ、よくよく見てみればラウザーの銃口が微かに揺れ動いている。

「仕方ありませんね。まあ青羽には後で合流した時に話せば済む事です。」

そう言うとノーマは口を開き、彼女の過去について話し始めた。

数ヶ月前・とある研究室

ノーマが青羽と出会うよりも前、イオケスと言う街の外れにある廃墟の中の研究室に彼女はいた。液体の入った大きなシリンダーの中で、一糸まとわぬ姿で浮かんでいる。その双眸は堅く閉じられ、ともすれば精密に作られた人形と見間違えるほどだ。ノーマ自身ピクリとも動かず、シリンダーの近くに置いてある機械のディスプレイに表示されているバイタル表示だけが唯一彼女が生きている事を証明している。

その時、機械から電子音が鳴り響き、それと同時にシリンダーに変化が現れた。シリンダー内部に微弱な電流が流れ始め、ノーマの瞼がピクリと動き薄らと瞳が開かれる。それと同時にシリンダー内部の液体が抜かれ始め、液体に浮かんでいたノーマの両足がシリンダーの底についた。

「ゲホッ!? ゴホッ・・・ガハッ・・・ハッ!?」

まだ肺の中に液体が残っていたのか、激しく咽て液体を吐きだしていくノーマ。そうしている間にシリンダー内に暖かい風が吹き込み始め、温風が液体に濡れたノーマの体を乾かしていく。そしてある程度彼女の体が乾き、同時にノーマ自身が落ち着いてきた頃、シリンダーに切れ込みが入り一部が扉の様に開いた。

ノーマが辺りを警戒しながら外に出て、しばらくあたりをきよろきよろと見回しているとある物が目に入る。下着を含めた上下の服一式、それと何かを書いた紙とハート型に見える機械・・・カリスラウザー。

それまでをシリンダーの中で過ごし外界とは一切かかわってこなかったノーマでも、衣服を着ずにいることがまずいと言う事は一応常識として認識している。いや・・・インプットされていると言った方が正しいか。

とにかくノーマは誰かに与えられたと思われる衣服に袖を通す。衣服が置いてあった机の上には他に赤いサングラスが置いてある、ノーマは何を思うでもなくそれをかけた。何となく、これがあった方がしっくりくると感じたから。

ある程度身なりを整えるとカリスラウザーと一緒にいてあったハートのA『チェンジ・マンティス』を懐に入れ、最後に衣服と一緒ににおいてあった紙に目を通す。

『今貴女がこれに目を通していていると言う事は、ちゃんと目を覚ましていると言う事なのね。良かった・・・貴女自身が何なのかは、ここで書く必要もないでしょう。もうあなたは自分が何なのかは知っているだろうから・・・』

これを書いたのが誰かは分からないが、筆跡からして女性だろう。彼女の言う通り、ノーマは自分の事についてはすでに理解している。自分が何のために生まれたのか、自分のなすべき事は何なのか・・・

『私はもう貴女に会う事は出来ない・・・出来れば貴女と直接話して、いろいろな事を教えてあげたかった。でもそれが出来そうにないから、この場で文章だけで貴女に伝えるわね?』

教えたいとは何のことだろうか? ノーマは読みながら首を傾げる。戦い方なら教えてもらうまでもなく彼女の頭の中にすでに入っている、自分がこれ以上何を学べと言うのか。

『貴女は貴女の生きたいと思うように生きなさい。自分の存在に囚われないで、自分がしたいと思う事をして、それから・・・自分が信頼できる人を見つけなさい。心から貴女を信頼してくれて、貴女が心から信頼できる・・・仲間を。本当はもっといろいろ書きたかったんだけど、あまり時間も無いから・・・元気だね・・・“ノーマ”』

「ノーマ・・・それが、私の名前・・・」

ノーマは自分の名前を認識すると、この手紙を書いた人物の名前を

探す。だが生憎それらしきものが書いてある様子はなく、ノーマはやや困った顔になってしまう。

これを書いた人物が誰なのか分からない以上、これからは自分一人で生きていかなくてはならない。だがそれ自体は特に問題はない、彼女はもとも人間社会に溶け込みながらアンデッドを封印する為に造られたのだから。だが人間社会に溶け込む為には、ファーストネームだけでは問題がある。

身分証明書の偽装をするにしても、ファミリーネームは必要だ。出来ればこれを書いた人物のファミリーネームを使おうと思ったがそれは出来そうにない。さてどうしたものかとノーマが辺りを見渡すと、自分が入っていたシリンドーの下のプレートが目に入る。プレートには『Trial X』と書かれていた、彼女の存在を表すものだ。ノーマはしばしその文字を見つめる。

「トライアルX・・・エックス・・・イクス・・・」

決まった。少し安易だがこれなら問題はない、これから自分はこの名乗ろう。

「私の名前は……ノーマ・イクス。使命は、全てのアンデッドの封印。」

そう呟くと、ノーマは近くにおいてある端末に向かう。まずは身分を証明する物を作らなければならない。幸いなことに自分にはそれをやるだけの知識がある、余程情報の扱いが上手いものでなければバレル事はないだろう。

こうして・・・『ノーマ・イクス』と言う人物は誕生した。

現在・森の奥

「これが私の過去です、それから私はアンデッドを封印しつつあちこちを回っている間に青羽と出会い、貴方とも出会ったと言う訳です。」

「なるほど・・・じゃあ君は特に誰かに命令を受けたとか言う訳じゃないんだね？」

「ええ、強いて言えば私を作り上げた人物が私に与えた使命が命令に当たるかもしれませんが・・・」

使命とは当然全てのアンデッドを封印すること、だがそれは彼女が生まれ持った使命として考えていた物で、それ以外は特にこれと言って命令と言える物はない。

勿論これはノーマ自身が話した事、彼女が何かを偽っている可能性はある。だがギャレンの目には彼女が嘘を突いているようには見えなかった。ギャレンは銃口を下ろすと変身を解除する。

「・・・分かった、判断材料としては不安な所もあるけど、君を信じることにするよ。ゴメン・・・」

「お気になさらず、寧ろ疑うのは当然のことです。信用はこれから作り上げていくので、ご安心を。」

そんなどこか機械的な口調で話すノーマに、戒は思わず苦笑してしまう。やはり彼女は良く分からない。だがそれが逆に彼女の個性として映えているのもまた事実、初めてであった時から何も変わらないう、ノーマと言う人物を表す最大の個性であり特徴だ。

「それで、これからどうする？」

「ルーコスに向かいます。ここで下手に青羽と合流しようとするより、共通の目的地で合流した方が効率がいいです。それに何より、青羽は『ルーコスで』と言いました。なら、信じてルーコスで待つのが一番です。」

その後話し合うのは今後の事。方針としては非常に理にかなっている、こんな森の中では下手に合流しようとすれば逆にすれ違いあってしまう可能性もある。だったらこの森から出て共通の目的地で合流した方がマシだ。少なくとも先に街についた方が捜索隊の依頼が出来る。

もつとも青羽だってコンパスも地図も持っている、ならばそうそう迷うことなく彼女もルーコスに辿り着けるだろう。唯一の不安要素はと言えば……

「あの追いかけてたライダーだよね。」

「ええ、青羽も大概ですがあのライダーもトラブルを呼びこむ体質の人物の気がしてなりません。青羽に何事も無ければいいのですが……」

人間誰しも悪い予感当たらないように願うモノだが、人間も動物である以上本能と言うモノは存在する。それは技術を得て文明を築いて以降次第に必要なモノとして弱くなってきてはいるが、決してなくなりはない。俗に言う『第六感』と言うモノが顕著で、防衛本能から起こりえる悪い結果を感じ取る。悪い予感がやたら当たる事があるのはこの為だろう。

特にノーマは様々な部分が優れている、それは身体的なモノは勿論感覚的なモノも。とどのつまり、何が言いたいのかと言うと……

「ぎゃああああああっ?!」

「あんた何やってんのよこの馬鹿っ!?!」

物の見事にノーマの悪い予感当たったと言う事である。

第35話 ビギニング オブ ノーマ（後書き）

と言う訳で第35話でした。前回新キャラとして登場した弘貴、実はエンジェルさんとのコラボの際あずさが変身するディケイドと十兵衛が変身するクウガに助けられてたライダーなんですよ！ エンジェルさん、その節は本当にありがとうございました。

今回ノーマの過去が明らかになりました、見た目は青羽と同じ年齢ですが実は生まれ出してから1年と経ってないんです。もっとも一般常識などは予め彼女の頭の中に入っていた訳ですけども。なおノーマを作りだした人物については今後の物語の展開をご期待ください、いずれ判明しますので。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第36話 夢と誇りを胸に

森の奥

現在青羽と弘貴は蜂の大群に追われている。あと一步で追いつかれるところだったがギリギリの所でブルースペイダーに跨り、走り出す事に成功した。だがそれでも蜂はしつこく追いかけてくる、何故このような事になっているのかと言うと・・・

「何だって蜂の巣にちよっかいかける様な真似したのよ！　こんな事になるのやる前から分かるでしょうが！？」

「い、いや・・・ちよつと最近まともに物食べてなくて、腹減っちゃって・・・」

「熊か！？　何処の世界に空腹だからって蜂の巣を襲おうとする人間がいるのよ、返り討ちにされるに決まってるでしょ！」

「こ、ここに・・・」

などと話しながら青羽は蜂の群れから逃げる為に必死にバイクを走らせる。だがつい先程ダークローチから逃れるためにかなり無理をさせたブルースペイダー、青羽自身いつ愛車が限界を迎えたりしないかと冷や冷やしていた。

とその時、青羽がある事を思いつく。

「あつ、そうだ！　何も逃げることに無かったこうすりゃいいんじゃないん。」

そう言うとき青羽は片手で器用にバックルにカードを装填すると腰に装着し、ブレイドに変身した。なるほどこれなら確かに蜂など敵で

はない、アンデッドの攻撃にも耐えるライダーシステムだ、蜂の針など全く効果はない。

「変身！」

《Turn up》

「そ、そうかその手があった！ よっし、俺も・・・」

青羽の変身を見て即座に真似ようとする弘貴、だが激しい揺れから上手くカードを装填出来ないでいた。言うまでもないが今青羽が走っているのは舗装も整備もされていない森の中である。木の根や岩の所為で揺れが尋常ではなく、突き出た木の枝にぶち当たらない様に極力開けたところを選んでいるがそれでも走破に向いている道とは言い難い。

「ちよっ！？ 姐さん、もうちよっと揺れ減らして・・・」

「出来る訳ないでしょそんなの！？ あたしは運転のプロじゃないのよ！」

そんな遣り取りをしながらも懸命にカードをバツクルに装填しようとする弘貴だが、やはり上手くいかず逆に手を滑らせてカードを落としてしまった。

「あゝあああああああつ?! 俺のカード!?!」

「ちよっ!? いきなり暴れないでよ、危ないでしょうが!」

「でもっ! 俺のカードが!?!」

「~~~~ッ、ああもうっ!」

弘貴が落としたカードを拾いに行こうと暴れ、ブレイドがそれを引き留めるが彼の気持ちも青羽は理解できる。ライダーになる事に特別な思いがある者にとっては変身に必要なカードは他のラウズカー

ドとは価値が違う。悩み悩んだ挙句ブレイドはバイクを止め、後ろを見据える。蜂は依然として彼女達を追いかけていた。

「あ、姐さん?!」

「・・・ゴメン!」

《Thunder》

「ハアッ!」

ブレイドがスパードの6『サンダー・ディアー』をラウズすると、ラウザーから広範囲に稲妻が迸り彼女達を追いかけていた蜂の群れを一掃してしまった。本来アンデッドが使用する電撃で、直撃させればアンデッドが相手でもそれなりのダメージは与えられる技である。余波でも蜂は一溜まりもなく、後には電撃に焼かれた蜂の死骸と焼けた木々が残った。

しかしいくら緊急事態だからとはいえ相手はアンデッドでも何でもないただの蜂、青羽の心は蜂に対する申し訳ない気持ちで溢れていた。そもそも原因と言えば弘貴である、最初は食料になるモノを探して森の中を探していたが、弘貴が蜂の巣に手を出そうとしたので蜂が怒り狂って襲って来たのだ。青羽も蜂の巣の存在には気付いていたが、彼女としては木の実か野草でもあればいいと思っていたので蜂の巣にちょっかいを掛ける気など毛頭なかった。それなのに弘貴が余計な事をしたせいでこれである、ある意味被害者である蜂達に青羽は申し訳なさを感じずにはいられない。

当の弘貴はと言うと危険が無くなった事を確認すると、即座にバイクから降りて自分のカードを探し始めた。その間にブレイドは変身を解除し、バイクに異常が無いか一通りチェックする。とは言っても機械の専門家と言う訳でもないので詳しい事は分からないのだが。

しばらくすると弘貴がカードを見つけたのか青羽の下に戻ってくる。その手には大事そうにサイの絵柄が描かれたスペードのA『チェンジ・ライノセラス』が握られていた。

「あんた、何でライダーになったの？ そんなに大事そうにカードを持ってるって事は、並大抵の理由じゃないんでしょ？」

そんな弘貴の様子に青羽の好奇心が疼き、そのような事を尋ねる。特に理由はない、本当に気まぐれの様なものだ。

対する弘貴の方は、しばし口籠った末にようやく話し始めた。

「ちよっ、ちよっと恥ずかしい理由ですけど・・・俺、ヒーローになりたいんす！」

「ヒーロー？」

「そうッス、アンデッドから沢山の人を助けるヒーローにッ！・・・って言ってもさっきみたいに上手いかなかったりで、ヒーローって言うには程遠いんすけど。」

弘貴はそう言って『たははっ』と笑う。一方の青羽は至って真面目に彼の話を聞いていた。

「・・・あんたのライダーシステム、オーダーメイドでしょ？ 今時ターンアップタイプのバックルなんて珍しいもん。」

「はい、その通りッス。これは俺がライダーになるって言った時に父ちゃんが無理して特注してくれたもので、俺の誇り何ス！ こいつに誓って俺はヒーローになるって決めて旅に出たんすけど・・・最近、自信なくしちゃって・・・」

「どうして？」

「だって、折角オーダーメイドのライダーシステム持っても、そ

の性能全然生かしきれないし。ちょっと前の事ですけど、ヤバいって時にダガーに助けられちゃって・・・そんな時に『お前がオーダーメイドのライダーシステムなんて十年早い』って馬鹿にされちゃって・・・」

その話を聞いて青羽は無性にそのダガーの装着者に腹が立った。そうまで言うからにはその人物はダガーを使ってそれなりの戦果を挙げてきたのだろう、だがだからと言って他のライダーを馬鹿にするとはどういう事なのか。

青羽が心の中で静かに怒りを燃やしていると、弘貴はさらに続けた。

「俺・・・やっぱり実家に戻って静かに暮した方がいいんスカね？」
「・・・・・・・・」

「俺みたいな奴がライダーやってても、ヒーローどころかまともにアンデッドを「あたしの・・・」へっ？」

遂には弱気な発言をしだす弘貴だが、そこで青羽が口を挟んだ。普段だったらない事だが、弘貴が持っている本当の誇りを見て放っておけなくなった。彼女も夢と誇りを持っているから。

「あたしの夢はね、父さんを超える仮面ライダーになることなの。」
「親父さんを超える？」

「そうよ、あたしの父さんは昔仮面ライダーとして戦ってたの。あたしが生まれるよりも前だから、20年くらい前かしら？」

「に、20年！？ その時代のライダーってもう生きた伝説レベルの人じゃないっスか！ そんなすごい人が姐さんの親父さん何スカ？！」

今から20年以上前には、仮面ライダーの数も少なくその支援施設

もほとんどなかった。つまりその時代のライダー達は自分の力のみでアンデッドと戦わなくてはならなかったのだ。当然の事ながら数の少ないライダーの多くが命を落とすか、良くて再起不能になる。そんな中未だにライダーとして戦える肉体を残してこの時代まで生き残っている人物は、正に生きた伝説級の実力者として認識されるのである。

その事を知ってか知らずか青羽は笑いながら首を縦に振る。

「凄いでしょ、あたしの父さん。これまでも鍛錬に付き会ってもらったりしたことあるけど、その時点で実力の差が分っちゃったもん。相手は頂上の見えない断崖絶壁、こっちは道端に落ちてる石ころレベル。訓練もメチャメチャ厳しい課題が出されたりして、正直諦めた方がいいんじゃないかって思ったことも一度や二度じゃないわ。」

その事を青羽はさも楽しそうに語ると、『でも』と付け加えてどこか遠くを見つめながら続けた。

「やっぱり諦めきれないのよねえ、あたしの心が父さんを超えるって言って聞かないのよ。それにあたしにも誇りがあったから。」

「誇り？」

「そっ！　これ見て。」

そう言って青羽はジャケットを脱いで背中を弘貴に見せる。そこには背中に翼を生やして、黄金の鎧を纏って黄金の剣を構えた戦乙女の姿があった。

「これはね、母さんがアップリケしてくれたの。あたしが父さんを超えるライダーになるって誓った時に。」

そう言う青羽の笑顔はどこか昔を懐かしむ様で、いつもの元気な笑みではなく優しく静かな微笑みであった。

「あたしこれ貰った時ずっと嬉しかった。後で父さんに訊いたら、母さんこれ作る為に寝る時間削ってくれてたんだって。それであたし誓ったの。母さんがこんなに応援してくれてる、父さんもあたしを本気で鍛えてくれてる。だったらあたしはそれに応える、何が何でも父さんを超えて見せる！・・・てね。」

「でもそれ・・・超えられなかったらどうするんスか？」

弘貴はそれが疑問だった。いくら高い志を持っていたても、それで全てが解決する訳ではない。時には志半ばで挫折する者もいるのだ。青羽がそうならないとは限らない。だが青羽はその言葉に軽く苦笑して、ジャケットに再び袖を通してながら答えた。

「勿論その可能性もあるけどね・・・でもあたしは諦めない、何が何でも父さんを超えて見せる。一度や二度の失敗で諦めるようなら最初から夢見ないわよ。」

そう言って青羽はニッと笑って見せる。その笑みに弘貴は眩しいモノを感じていた。

「夢を見るから諦めないんじゃない、諦めないから夢を見るのよ！だからあたしは頑張ってるの。それに、駄目だったとしても行ける所まで喰い付いて見せるわ。例え無様でも、諦めるよりは何倍もマシな筈よ。」

そう口にする青羽の顔は、これ以上ないほどの自信と希望に溢れて輝いていた。それを見て弘貴は改めて自分の心に訊いてみる、ここ

で諦めていいのか？ 自分の夢はこの程度か？ と・・・

「・・・やはり諦めきれない。ヒーローと呼ばれるほどでなくとも、せめて行ける所まで行きたい。」

「あ、あのっ！」

「んっ？」

「無理を承知でお願いしますけど、俺も姐さんと一緒に連れてってもらえませんか？ 俺、やっぱり自分の夢諦めきれないんす！ でも・・・俺やっぱり自分の強さに自信が持てなくて、だから・・・姐さんと一緒に！」

そう言う弘貴の瞳には強い光が灯り、声にも覇気が戻っていた。青羽はその笑みを見て、笑みを浮かべると力強く頷いて返す。

「とりあえず、姐さんってのは止めなさい。あたしの名前は青羽よ、姐さんじゃないわ。」

「了解ッス、青羽の姐さん！」

「・・・だから止めろっての。」

どうやらこれからの旅は、今まで以上に賑やかになりそうだ。

その頃・・・

「あゝあ、折角楽しい遊び相手が出来たと思ったのに。どこかに新しい相手はいないかしら？」

森の中を進む邪悪な存在に乗っ取られた一人の少女。退屈そうに進む彼女の歩いた後には、無残にも切り刻まれた無数のダークローチ

の姿があつた。

騒動はまだ終わりそうにない。

第36話 夢と誇りを胸に（後書き）

と言う訳で第36話でした。設定の所にも書いてありますが、青羽のジャケットは彼女のお気に入りです。宝物でもあります。ブレイドのライダーシステムと共に彼女の誇りの象徴でもあるからなんです。ちなみに双子の紅羽も物は違いますが母親の明日香にプレゼントを貰っています。性格が青羽と違ってドライなので、あまり目立つ物じゃありませんけど。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第37話 合流・弘貴の意地

森

青羽と弘貴は目的地であるルークスに向けて歩いてた。バイクが使えれば早いのだが、ここは道の無い森の中。ダークローチを撒く際に道から外れて逃げてしまったので何処が道かも分からず、木々の間をバイクを転がして歩いていくしかない状況だった。幸いなことに青羽がコンパスと地図を持っていた為、街への方向には向かっているのだが。

「うー、しんど・・・」

「文句言わないの、街の方には確実に向かってる筈だから。」

「ちょっと休憩しません？ 青羽の姐さん。」

「何言ってるの、だらしないんだから。休憩すんのはせめてもうちょっと開けた所に出てからよ、でないと危ないでしょうが。」

先程はなんとか撒くことができたが、この森の中にはダークローチがいる。多少なりとも開けたところに出ておかないと仮に連中が近付いて来ても直前まで気付けない可能性があった。弘貴は勿論青羽もそこまで敏感にアンデッドの気配を察知することはできないのだ、可能な限り安全な場所を探すべきだろう。

そうこうしていると、二人は川原に出た。程よい広さがあり、川の近くにいればダークローチ他アンデッドが出て来ても反応することもできる。休憩するには理想的な場所だろう。

「川原かぁ、ちょうどいいわ。ここで少し休みましょう。」

「やったーっ！」

休憩できると知った瞬間それまでのだらしなさが消えて一目散に川に近付いていく弘貴、そんな彼の現金な様子に思わず青羽も苦笑してしまった。普段はノーマや戒に苦笑される立場である彼女だが、共にいる人間が変われば自然と影響される部分もあるということだろう。この場合は『他人のふり見て我がふり直せ』……という言葉が妥当だろうか。

それからしばらく川の近くで休んでいると、唐突に弘貴が話しかけてきた。

「そう言えば姐さん、さっき一緒にいた二人のライダーは姐さんのお仲間ですか？」

「ノーマと戒のこと？ もちろん仲間よ！」

「へー、どんな人達なんスか？」

徐に弘貴が尋ねてきたのは、ノーマと戒の二人について。青羽はその質問に自分のイメージの中での二人を口にしていく。

「ノーマはねえ、普段は冷静で腕も立つからすごく頼りになるわ。でも子供の相手が苦手だったり、結構石頭だったり、可愛いところも結構あるのよ。」

「ほうほう、是非とも直にお会いしたいっスねえ。」

「戒の方はねえ、生真面目で気の良い奴よ。結構有名でギャレンとして名が通ってるらしいわ。」

「おおっ！ あの仮面ライダーギャレンっスね、前に雑誌で特集記事組まれてるの見たことあるっス。昔の事とか分からない部分もあるらしいっスけど、その実力は本物だって書いてあったっス！」

弘貴が普通に戒のことを知っている風な反応を示したことに、青羽

はどこか負けたような印象を受ける。年下の弘貴ですら知っているというのに、自分と来たら……

「あつ、そう……知ってるんだ、ばっちり……」

「？ どうしたんスカ、姐さん？」

「う、ううん……なんでもない。（ノーマ……あたしら大分潜りだったみたい。今度からちょっと雑誌とかも買おうね……）」

その頃のノーマは……

「ッ！?!?」

「ん？ どうしたんだいノーマ、急に立ち止まったりして？」

「いえ、なんだか急に悲しい気分になりました……」

そう言いつつサングラスを外して目頭を押さえるノーマ。何故だか分からないが突然何かに負けた様な悲しい気分になって、涙が滲んできそうになった。その様子に戒もノーマを心配している。

「大丈夫？」

「ええ、問題ありません。（何でしょう、どうしようもなく自分が情けないような気が……）」

何故だか知らないが、とにかく今後はもっとアンデッド以外の話題にも目を向けてみた方がいいのかもしれない。そう心の中で思うノーマだった。

川原

「そう言えば、姐さんの旅の目的は聞きましたけど、他のお二人の目的って何なんスか？」

とりあえず一通り二人について聞くと、今度は何故3人がともに旅をしているのかを弘貴は尋ねた。仮面ライダーの中には複数人でパーティーを組んでアンデッドを封印しながら旅をする者もいる。その場合パーティー内で目的がバラバラの者達が一時的に集まっている場合も少なくはない。

青羽の目的は完全に彼女個人の目的だろうから、当然残りの二人にもそれぞれ理由があるだろうと思ったのである。

「ノーマの目的は単純よ、全てのアンデッドを封印するんだって。」

「す、全てって・・・出来るんスカそんなこと？」

「さあね、アンデッドだって時々どこからともなく出てきたりするし、できるかどうかは分からないわ。」

「はぁ・・・それで、戒さんの目的ってのは？」

「戒はねえ、ッ!？」

青羽が戒の旅の目的を口にしようとした時、突然殺気を感じた。青羽が慌ててそちらを振り向くと、そこにいたのは数度見たことがある緑色の髪を持った少女の姿。見紛う筈もない、音無 利香である。

「あ、あんた・・・」

「久しぶりね。他の二人はどこに行ったの？」

「お、お知り合いつスカ？」

青羽が利香に警戒しながら話しかけていると、弘貴が青い顔をしながら青羽に尋ねてきた。彼も利香から発せられる殺気を感じ取っているのか、彼女に怯えて青羽の後ろに隠れている。

「音無 利香……戒の彼女で、今はカテゴリーAに操られてるわ。」

「あ、操られてる?!」

「そう、細かいことは省くけど、そのカテゴリーAの支配から彼女を解放することが戒の旅の目的よ。」

青羽はそう言うと同時にブレイバツクルとスピードのAのカードを取り出す。これだけの殺気を放っているのだから、このまま青羽達を逃がすつもりは利香にはないだろう。となればこの場で何とか撃退するしかない。

とはいえ出来るだろうか、という不安が青羽の心に重く押し掛かる。これまでに青羽は2度ほど利香が変身する仮面ライダーサイズと戦ったが、戒の迷いがあつたとは言っても3人がかりで完全に圧倒されてしまっていた。今この場に居るのは青羽の他に弘貴ただ一人、その彼も利香の放つ殺気に飲まれて完全に戦意を喪失している。実質的に青羽一人で相手をしなくてはならない。

(ちよつと厳しいけど、やるしかないか!)

「あなた一人だけってのはちよつと物足りないけど、暇潰しにはなつてくれそうね。」

青羽が心の中で戦う決意を固めていると、利香はカードを装填したサイズバツクルを取り出して腰に装着した。それを見た青羽も自身のカードをバツクルに装填して腰に装着する。

「弘貴、あんたは離れてなさい!」

「あ、姐さん!?!」

「変身!」

《Turn up》

青羽は弘貴に逃げるように言いながら、バックルのハンドルを引いてブレイドに変身する。対する利香も、不気味さを感じさせる笑みを浮かべながら腰に装着したバックルを開いた。

「ウフツ、変身。」

《Open up》

彼女がバックルを開くと、禍々しい黒いオリハルコンエレメントが形成され、自動的に利香を通過すると黒紫色のライダーサイズが現れる。ブレイドはサイズから放たれる殺気に気圧されながらも、ラウザーを抜いて真っ直ぐ構えた。

「さっきはそれなりに楽しめる連中と戦ってたんだけど、そこのおバカな坊やの所為で台無しになっちゃったからね。あなたは少しは楽しませてよね？」

「上等よ、やってやろうじゃないの！」

そう言うが早いかブレイドはサイズに向けてラウザーを振り下ろす。だがその斬撃は容易く受け止められ、逆にサイズからの攻撃を受けてしまった。

「ぐうつ?!」

「ほらほらどうしたの？ あなたの力はこんな程度？」

「まだまだ、勝負は始まったばかりでしょ。これからよ！」

その後もブレイドは何度もサイズに斬りかかるが、その悉くは防がれかわされてしまう。それだけに留まらず、サイズの攻撃はラウザーによる攻撃だけでなくパンチやキックも鋭く重い。サイズの攻撃

を受けて見る見るブレイドはボロボロになって行ってしまった。

「フンッ！」

「うわああああっ?! くっ、まだ・・・まだ・・・うつ。」

「粘るわねえあなたも。分かってるんでしょ、あなた一人の力じゃ私には勝てない事が？」

サイズの言葉に、ブレイドは仮面の下で唇を噛む。実際彼女の言う通りだった、すでにブレイドのアーマーはボロボロでブレイド自身体力を大分消耗してしまった。今まではブレイドの他にカリス・ギヤレンと言った仲間もいたのだが、それでも退ける事は出来なかった。精々が相手の気紛れで勝手に引き上げて行ったこと位だ、サイズはそれほどに強い。

だがそれでもブレイドは退けない、彼女の後ろには弘貴がいるのだ。彼は恐怖で足が動かないのか未だに立ち竦み、逃げる事が出来ずにいる。

「なに何時まで突っ立ってんのよ、早く逃げなさいって!」

「あ、姐さん・・・」

「うおおおおおっ!」

《Slash Thunder》

《Lightning Slash》

ブレイドはサイズに突撃しながら得意のコンボ技『ライトニング・スラッシュ』を発動、サイズに向けて雷を纏った刃を振り下ろす。
が・・・

《Slash Wave Dark》

《Darkness Scissors》

「ハアッ！」

「うああああああっ?!」

ブレイドの技が決まるよりも早くにサイズの『ダークネス・シザーズ』が決まり、ブレイドはその衝撃で変身が解除されてしまった。ダメージが大き過ぎたのか、青羽も身動きが取れずにいる。

サイズはそんな青羽に近寄ると、うつ伏せに倒れている彼女の背中を踏みつけて抑えつけた。

「ぐっ！」

「まあまあってところね。あっちの坊やはすぐに潰せるだろうし・・・少しあなたで遊ぼうかしら。」

その瞬間猛烈に嫌な予感を感じた青羽は必死に抵抗してサイズの足元から逃れようとするが、サイズがラウザーを振り下ろす方が早かった。サイズラウザーは青羽の右手に真っ直ぐ振り下ろされ、彼女の右手を貫く。冷たい刃の感覚と灼熱の痛みが同時に青羽の右手を襲い、青羽は目を見開いて絶叫を挙げた。

「あああっ?!」

「ふふっ、いい声を挙げてくれるのね。もっと聞かせて。」

その後もサイズは青羽の左手、太ももを次々とラウザーで貫いていた。その度に青羽の悲鳴が森の中に響き渡る。

「あうっ!　ぐううっ!　うあああっ?!」

貫かれた箇所から流れる血で青羽の周りは赤く染まり、体力も消耗したのか次第に悲鳴も聞こえなくなった。

「う、ああ・・・うう。」

「ん？ もうお終い？」

反応が薄くなった青羽の様子にサイズも興味を失ったのか、蹴飛ばして仰向けにさせるとトドメとばかりにラウザーを思いっきり振り上げた。

「じゃあもういいわ。さっさと死になさい。」

「ああ、姐さ「こ、弘貴・・・」、えっ？」

「に、逃げて・・・早く。」

いざその首に刃が振り下ろされようとしている中、青羽は未だに弘貴の身の安全を心配していた。弘貴はそれに目を見開くと、雄叫びを上げながらサイズに突っ込んでいく。

「うおおああああああああっ！」

「ん？ あなたから死にたい？」

「こ、弘貴っ！？ 何して・・・」

「変身！」

《Turn up》

青羽が弘貴の突然の行動に驚いていると、彼はバックルにカードを装填して仮面ライダーアクスに変身した。

「こんな所で逃げてたまるか！ 助けてくれた恩人を見捨てて逃げたりしたら、絶対に・・・ヒーローになんかなれやしないんだあああっ！！」

アクスは叫び声を上げつつサイズに肉薄する。一方のサイズは煩わ

しい虫を追い払う様にアクスに向けてラウザーを振るうが、彼はそれを真正面から受け止めて見せた。

「なっ!？」

「痛つつう・・・・へへっ、こいつはパワーと防御力が自慢なんですね。こんな攻撃じゃびくともしないツスよ!」

アスクはそう言う隙を突いてラウザーにスピードの2『スラッシュ・リザード』をラウズした。

《Slash》

「セイツ!」

「うあっ!？ コイツッ!」

アクスの思わぬ攻撃にサイズも怯んでしまったが、体勢を立て直すと逆に怒りにまかせてアクスを滅多切りにし始めた。

「やってくれるじゃないの、このゴミがっ!？」

「うわっ!？ グッ、がああっ?!」

サイズの怒涛の攻撃に、アクスも耐えきれず倒れ伏してしまう。

「ブレイドの方から始末しようと思ったけど、予定変更。先にお前から潰してあげるわ!」

「弘貴!？」

サイズの攻撃は防御力のあるアーマー部分ではなく比較的脆弱なスリット部分に集中していた。その為アクス自身もダメージによって身動きできない、サイズはそんな彼に容赦なくトドメの一撃を放とうとする。

（親父・・・俺、少しはヒーローに近付けたかな？）

サイズの刃が振り下ろされ、もはやこれまでとアクスが諦めかけたその時。

《Float Drill Tornado》

「ッ!？」

《Spinning Dance》

「ハアアッ!」

電子音声が響いたと思ったら森の中からカリスが竜巻を纏ってきりもみ回転キックを放ってくる、流星のサイズもそれに対応しきることが出来ずに吹き飛ばされてしまった。

「ぐうつ!？ くっ、カリス!」

「青羽!？」

サイズは自分にダメージを負わせたカリスを睨みつけるが、彼女の方はサイズを無視して一目散に青羽に駆け寄る。カリスが近寄ると、青羽は大分血を流したせいで意識が朦朧としているのか、焦点の合わない目でカリスの事を見上げていた。

「の、ノーマ・・・どうして？」

「あれだけの悲鳴を挙げていれば私なら嫌でも聞こえます、戒もこちらに向かっていますからすぐに付く筈ですよ。」

それだけ言うとカリスはサイズに向き直る。サイズは攻撃を受けた箇所をしばらく抑えると、カードケースから1枚のカードを取り出した。

「まさか、私がダメージを受けるなんてね。勝負はお預けよ、また何処かで会いましょう。」

《S m o g》

サイズが『スモッグ・スキッド』のカードをラウズして煙幕を張って逃げるが、カリスはそれを追おうとはしなかった。彼女一人ではサイズに勝てないし、今は青羽の傷を癒す事が最優先だからだ。

「青羽、変身できますか？」

「えっ、なんで？」

「いいから。」

カリスの奇妙な発言に、青羽は首を傾げるがカリスの方は説明の間を省く為かそれには答えなかった。しかし変身しようにも青羽は先程サイズに痛めつけられ、腕にも手酷い切り傷を付けられている。これでは変身しようにも出来ない。

「変身したいのは山々だけど・・・腕が動かないわ。悪いけど、変身させてくれる？」

青羽がカリスにそう頼むと、カリスは黙って頷いてブレイバックルにカードを装填。青羽の腰に装着させて彼女をブレイドに変身させた。

《T u r n u p》

「それで、これからどうするの？」

「これを使います。」

ブレイドの質問にカリスはそう言って1枚のカード、『リカバー・

『カメラ』を取り出した。このカードの効果はリカバーの示す通り回復である。カリスはこのカードを使って、ブレイドが受けたダメージを全快させようと考えたのだ。

《Recover》

カリスはブレイラウザーを引き抜くと、自身のカードを迷わずブレイドのラウザーにラウズさせる。すると淡い光がブレイドを包みこみ、アーマーに隠れて見えないが青羽の傷を見る見る回復させていった。

「あゝ辛かった。ありがとうノーマ、助かったわ。」

「いえ、大したことは・・・」

「あつ、そうだ！ ちょっとそのカード貸して？」

変身を解除した青羽が同じく変身を解除したノーマにそう言うのと、彼女は何も言わずに『リカバー・カメラ』のカードを差し出した。もう彼女が何をするつもりなのかを分かっているのだ。

青羽はノーマからカードを受け取ると、一目散に未だ倒れているアクスの下へ向かう。

「大丈夫？」

「へ、へへへっ・・・これくらいヘッチャラすよ。」

「全く、あんたも無茶するわね。」

《Recover》

青羽はアクスに近付くと、ノーマがしたように彼のラウザーにカードをラウズさせ、傷を回復させた。

「何かすみません姐さん、結局助けられちゃって・・・」

「何言ってるのよ、あんたが馬鹿してくれたおかげでノーマが到着するまでの時間稼ぎが出来たんだから。こっちが感謝したいくらいよ。」

青羽がそう言うのと、ノーマが弘貴に近付いていった。

「貴方が、先程の灰色のライダーですか？ 私はノーマ・イクスと申します。青羽を助けてくださり、ありがとうございました。」

「あっ、どもッス。俺、櫻羽 弘貴・・・弘貴って呼んでくださいッス。」

ノーマと弘貴が自己紹介を済ませると、同時にノーマが来た方向から戒が姿を現す。

「や、やっと追い付いた・・・」

「あっ、戒・・・遅かったのね。」

「何言ってるんだい、ノーマの方が早すぎるんだよ。」

ノーマに遅れてやってきた戒に、青羽がそう何気なく口にするとは心外だとも言いたげにムツとした顔になった。

「ノーマ、青羽が心配なのは分かるけど少し無茶し過ぎだよ。あれじゃ君のバイク修理に出す必要があるよ、きっと。」

「どういう事？」

「ノーマってば青羽の悲鳴が聞こえたと思ったら、君の声が聞こえた方向に向けて必死にバイクを走らせたんだ。いくらなんでもあれは無茶だよ、タイヤもかなりガタガタになってるんじゃない？」

何でも戒が言うには、森の中で青羽の悲鳴が聞こえた瞬間ノーマは

我を忘れて青羽の下へ向かったと言う。青羽が軽く驚いた様な顔をノーマに向けると、彼女は完全に青羽達から顔を反らしている。おかげで彼女の表情を窺い知れることは出来ないが、彼女の耳はこれでもかと言うくらい真っ赤になっていた。耳でこれなのだから顔はもっと赤いのだろう。

「へえ、そんなに心配してくれてたんだ？」

「な、仲間を心配する事に・・・何か問題でも？」

「んっ！ 本当に可愛いんだから、このこのっ！！」

「ちよっ！？ あ、青羽！」

ノーマの様子に心を刺激されたのか、彼女に思いつきじゃれつく青羽。ノーマはそれを引き離そうと躍起になっているが、青羽は負けじとノーマにしがみついていた。

「やれやれ、相変わらず騒がしいねえ。」

「何時もこんなンスか？」

「ま、大体こんな感じだね。ところで君は？」

「あっ、申し遅れたッス。俺・・・」

戒と弘貴が自己紹介をしている中、青羽とノーマは未だにじゃれ合っていた。

第37話 合流・弘貴の意地（後書き）

と言う訳で第37話でした。前回までは騒動の元となる賑やかキラの弘貴が、今回は意地を見せてくれました。現時点でサイズにまともなダメージを与えたのって彼が初めてなんですよね、ダメージ自体は大きくはありませんでしたが。

仮面ライダーアックスは全体的に仮面ライダーブレイドと仮面ライダー電王・アックスフォームを組み合わせた様なライダーをイメージしています。パワーと防御力が見所な所とか。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第38話 バイクと謎の約束と

アンデッド封印協会ボード・ルーコス支部

あの後合流を終えた青羽達は、一路ルーコスへと向かっていった。地図とコンパスを頼りにしながらの移動だった為結局2日かかってしまったが、何とか無事に街に着く事が出来た。

なおその2日の間に、弘貴は完全に青羽達に懐いた事を付け加えておく。理由は彼女達を作った料理、どうも彼は旅に出てからと言うものの本当にまともな食事をしていなかったらしい。青羽が作った料理を涙を浮かべながら平らげていた。

そして街に着いた青羽達は、何時もの如く宿を取って荷物を置いた後に協会に向かっていった。もっとも今回はその前に工房に向かって青羽とノーマのバイクを点検してもらいに行ったのだが・・・

「予想以上にひどかったわね、あたし達のバイク。」

「そうですね。幸いな事に修理は可能だそうです、1週間も時間がかかるとは・・・」

青羽とノーマは森の中をバイクで走破すると言う無茶をさせた為工房にバイクを点検してもらったのだが、結果は散々だった。致命傷となる様な損傷はなかったものの、丸々1週間かけないと修理が出来ないものらしい。寧ろここに来るまで良く動いてくれたものだ。

とにかく旅の足であるバイクが無ければ今後動きようがない。修理が完了するまでこの街に足止めされる事になるだろう。

で、一行は何時も通りライダーとしてアンデッドの封印を行おうと
していたのだが、ここで弘貴が一言。

「あのー、俺もバイク欲しいんスけど・・・」

そう、今いるメンツの中で弘貴だけがバイクを持っていなかったの
だ。理由は至極単純、お金がないかららしい。

バイクが無いとなれば今後青羽達と行動を共にするのが難しい。勿
論誰かと二人乗りすると言う手もあるのだが、弘貴のライダーは装
甲が厚い為重量も通常のライダーの倍近くある。変身していない時
はともかく、変身した場合二人乗りなどしたら間違いなくその相手
のバイクの性能を著しく損なわせるだろう。重量による負担だって
半端ない。

と言う訳で、アンデッド封印は青羽とノーマが行い、戒は弘貴のバ
イクを調達しに向かう事になった。

青羽・ノーマ組み

青羽とノーマは、現在協会のサーチャーからの情報でアンデッドを
搜索する為街中を歩いていた。バイクを使えば手っ取り早かった
のだが、そのバイクは修理中である為歩きである。

「そう言えば、あれから見ないわね・・・オーキッドアンデッド。」

「なかなか狡猾なアンデッドです。今も何処かで、何か良からぬ
事を企んでいるかもしれません。」

「ま、出てきたら今度こそ封印してやるわ!」

青羽はそう意気込んで片方の手に拳を叩き付ける。

「それにしても、今度のアンデッドはちょっとばかり厄介な感じじゃない？」

「そうですね、パワータイプのアンデッド・・・コングアンデッドですか。一筋縄ではいかなそうです。」

協会から得た情報で現在確認出来ているアンデッドは、ゴリラの始祖と言われるコングアンデッド。特徴は頑丈な筋肉による分厚い表皮と、剛腕から繰り出される強烈な攻撃とのこと。パワーに関しては二人のライダーもそこそこ自信はある方だが、果たして今回はどうなるか・・・

「・・・ちよつとタイミングが悪かったですかね、弘貴のバイクを手に入れるのはこのアンデッドを封印してからの方が良かったかもしれません。」

ノーマは今回のアンデッドと相性がいだろう弘貴の事を考えて、そんな事を呟く。彼のライダーは防御力とパワーに優れたタイプだ、恐らくコングアンデッドとも互角に渡り合えるだろう。

「今更言ってもしょうがないわ、今はとにかくアンデッドを探さなきゃ。」

青羽の言葉にノーマも頷くと、改めてアンデッドを探し始めた。

工房

その頃の戒・弘貴組みはというと、工房にて弘貴のバイクを選んで

いる最中だった。

工房には大きく分けて2種類ある。一つは青羽達がバイクを修理に出した、修理・点検・改造などを主に行ってくれる文字通りの工房。そしてもう一つが今戒達が来ているバイクなどの販売を行っている所だ。こちらはライダー用のバイクと、そうでない一般用のバイクや車などを販売してくれている。

「それにしても兄貴、確かにバイクが欲しいって言ったのは俺っスけど・・・俺金ないッスよ？」

「ん？　もしかして君知らなかったのかい？」

弘貴の言葉に首を傾げると、戒は彼にライダーカードを出すように言った。突然何を言い出すのかと弘貴は思ったが、とりあえず戒の言う通りに自身のライダーカードを取り出す。

弘貴がライダーカードを取り出すと、戒はそれを工房の受付に持っていくように言う。言われるままに弘貴がライダーカードを受け付けに持っていくと・・・

「あの、これ・・・」

「はい、バイクを購入希望のライダーですね？　でしたらあちらの仮面ライダー用のバイクを、全て特別価格で提供しております。」

そう言って受付の人の示す方に向かってみると、そこには確かに通常のバイクとは一線を画すバイクが所狭しと並んでいる。しかも値段は通常のバイク以上の安さだ、これには弘貴も驚愕する。

「安っ！？　マジっすかコレ！」

「これも、ライダーに対する援助の一環だよ。ほとんどのライダー

はいろんな所に行くからね、その足になるバイクなんかも協会の援助のおかげでこれだけ安いんだ。」

戒はそう言うが、弘貴が驚くのも無理はない。何しろどのバイクの値段も通常のバイクの値段の半分近くしかないのだ。勿論それでも弘貴にとっては大金だったが、先日の森でダークローチから逃げ延びる際に彼もそれなりの数のダークローチを倒しており、資金的には十分許容範囲内だった。

「遠慮はいらないよ、好きなバイクを選ぶと良い。これからの君の足になる訳だからね。」

戒に促されてバイクを選び始める弘貴。とはいえ彼の変身するライダー・アクスの重量は相当なモノなので、並大抵のバイクではすぐにガタが来てしまう。必然的に弘貴が選べるのは頑丈でアクスの重量に耐えられるバイクに絞られるのだが、その時彼の目にあるバイクが止まる。

「おっ！ 兄貴、俺こいつが良いッス！！」

「ん？ ほお、これはなかなか・・・」

弘貴がそう言って指差すバイクを見て、戒も感心した様な声を挙げる。そこにあつたのは一台のサイドカー付きのバイク、重量感もあり何より丈夫そうなバイクだった。

「グレーバッシュャー・・・サイドカー部分は分離させて身軽に動くことも可能・・・か。うん、良いバイクなんじゃないかな？」

性能的にも申し分はなく、アクスの重量も支えきれぬ頑丈さが一番の魅力だ。サイドカー部分は普段は荷物を入れるのに使えるだろう

し、これを購入しても損はないだろう。

結果、弘貴はこのバイクを購入する事になり、めでたく彼もバイクを手に入れる事になったのだった。

自然公園

弘貴が自分のバイクを決めた頃、青羽達は自然公園に足を運んでいた。だがノーマも未だにアンデッドの気配を見つけることは出来ず、疲労だけが溜まっていく。

「んー、見つからないね。」

「簡単に見つけられればそう苦労はありません。アンデッド探しとはそういうものです。」

そう言いながらベンチに腰掛ける二人、流石に歩き過ぎて疲れた。ベンチに座って一息ついてる時、何気にノーマの方を見た青羽は彼女のサングラスに目を向ける。そして思い出すのは先日ノーマに聞かされた、彼女が最初に目覚めた時の話。

「そのサングラス・・・ノーマに手紙残した人のなのかな？」

「えっ？ ああ・・・わかりません。本当に身に覚えがないので・・・」

「ふーん・・・でもそれ、ノーマの宝物なんですよ？」

何時だったか、少し前に青羽がノーマを怒らせてしまった時。あの時ノーマは青羽にこのサングラスを取られて怒りを露わにしていた。それはつまり彼女にとってそのサングラスが掛け替えのない大切なモノであるという証である。

「宝物？ 大切な・・・大切な物・・・」

青羽に言葉に深く考え込むノーマ。そこまで大切なのかと聞かれれば即答できないが、失いたくない物だと言う事は自信を持って言える。今までまともに考えた事も無く、そもそも大切という言葉自体最近になってようやく理解出来たノーマだ。まだ自分の気持ちを理解しきれていなかった。

一人思考の海に潜りこんだノーマに軽く笑みを浮かべると、飲み物を買いにその場を離れる青羽。こういう時のノーマは下手に構うよりも一人にしておいた方がいい事を青羽も学んだのだ。

青羽がその場を離れた事にも気付かず、ノーマは一人考え込んでいた。

（失いたくない物は、大切な物？ じゃあ、このサングラスは大切な物・・・青羽も、大切な・・・人・・・）

ノーマがそんな感じに物想いに耽っていると・・・

「久しぶりね、カリス？」

「ッ！?!? 貴女は！」

突然何者かに声をかけられ、慌ててその場から飛び退くノーマ。そして声をかけてきた人物を見ると、その相手は忘れようも無い、オーキッドアンドッドこと吉永 みゆきだった。

「何の用です？ まさか貴女の方から現れてくれるとは思ってもみませんでしたか・・・」

「フフッ……この間はよくも邪魔してくれたわね。おかげでこっちの計画が台無しだったわ。」

みゆきが口にする計画とは、以前青羽達の世界に異世界のライダーである三浦 あずさこと仮面ライダーディケイドや、柳生十兵衛三厳こと仮面ライダークウガがやって来た時の事であろう。あの時みゆきは、あずさ達の仲間の一人である沖田 総司の連れであった広瀬 凜を人質にとって青羽達の変身を封じようとしていた。だがタイムング良くノーマがその場から席を外していた為、後から追い付いて状況を理解したノーマの変身したカリスによって彼女の作戦は失敗に終わったのだ。

「あの時の借り……きっちり返させてもらおうわ！」

そう言うともみゆきの姿は植物とツタからなるアンデッド……オーキッドアンデッドに変化した。変化すると同時に腕を振るって攻撃してくるオーキッドアンデッド、ノーマはそれを後方に飛び退いて避けるとカリスラウザーを腰に装着。『チェンジ・マンティス』のカードをラウズして変身した。

「変身！」

《Change》

カリスは変身すると即座にオーキッドアンデッドに対してカリスアローを振るい、オーキッドアンデッドもそれに対抗する。そこに漸く青羽が戻って来た。

「あの女のアンデッド!? ノーマ！」

青羽がやって来た時、カリスはオーキッドアンデッドの後頭部から

撒き散らかされる花卉に翻弄されていた。青羽は急いでカリスに加勢しようと走り出したが、その瞬間何処からか吹いてきた突風に花卉が吹き飛ばされてしまう。

「ん!？」

「えっ? 何?」

「うおおおおおっ!!」

オーキッドアンデッドが不自然な風の吹いてきた方を向き、青羽もそれにつられる様にその方向に目を向けると、空から1体の鳥の様なアンデッドが雄叫びと共に飛び降りてきた。

そして突如現れたアンデッドは、カリスを守る様に立ち塞がるとオーキッドアンデッドと戦い始めた。

「ちよっ!? どういう事、何でアンデッドがノーマを?」

青羽がそう疑問を口にする中、2体のアンデッドは戦い続けている。

「どういう事? 何故邪魔をするの?」

「貴様がカリスと戦っているから、理由はそれで十分だ!」

オーキッドアンデッドの言葉を切り捨てると、両腕に付いた鉤爪でオーキッドアンデッドを弾き飛ばすもう1体の鳥の様な顔に背中に翼を生やした黒いアンデッド・・・イーグルアンデッド。弾き飛ばされたオーキッドアンデッドはツタを伸ばしてイーグルアンデッドを攻撃するが、それらは両腕の鉤爪で切り裂かれてしまった。

オーキッドアンデッドも相手が悪いと感じたのか、この場は素直に退く事にする。

「また会いましょう、カリス。次に会った時、必ず息の根を止めてあげるから。」

そう言ってその場から逃げて行くオーキッドアンデッド。それを見届けたイーグルアンデッドは、カリスに向き直って口を開いた。

「久しぶりだな、カリス。」

「久しぶり？」

「嘗ては邪魔が入って果たす事の出来なかった約束、今こそ果たそう！」

「約束？ 何の事です？」

イーグルアンデッドはカリスに対して親しげに話しかけるが、全てカリス・・・ノーマには身に覚えのない事だった。それを見てイーグルアンデッドはしばし考えるような仕草をする。

「そうか・・・私の事も、約束の事も分からないか。」

「分からないも何も、私達は初対面の筈です。」

「・・・・・・はあ。」

何処か落胆したような様子を見せるイーグルアンデッド、そこで漸く黙って見ている場合ではない事に気付いた青羽がカリスの下に駆け寄った。

「ノーマ！」

「ん？ ハッ！」

青羽が近付いてきた事に気付いたイーグルアンデッドは、その場から飛翔して空に跳び上がる。

「また会おう、カリス！」

そう言ってイーグルアンデッドはその場から飛び去っていく、青羽とカリスはその様子を黙って見ているしか出来なかった。イーグルアンデッドの姿が見えなくなると、カリスは『スピリット』のカードをラウズして変身を解除した。

《Split》

「あのアンデッド・・・一体何を？」

変身を解除してのノーマの第一声がそれである。自分と親しげに話してくるアンデッド、しかし当然のことながらノーマには全く身に覚えのない事だった。

「ノーマ、何なのあいつ？ 約束って？」

「さあ？ 私には全く身に覚えがありません。」

二人はしばしその場で首を傾げていたが、何時までもそうしていても仕方がなかったので青羽達はその場を離れることにしたのだった。

夜・とあるビルの屋上

その日の夜、ネオンに照らされたビルの屋上にオーキッドアンデッドこと吉永 みゆきと、イーグルアンデッドの人間態の男性・・・高原がいた。みゆきは彼が来たのを確認すると、早速彼に詰め寄った。

「さっきはご挨拶だったわね？」

「カリスを傷付けるあなたがいけないですよ。」

「マンティスアンデッド……アンデッド・カリス、数多いアンデッドの中でもその強さは伝説クラスだった。」

この世界には数多くのアンデッド達がいる、その中には当然のことながら同じ始祖のアンデッドも含まれていた。だが全てのアンデッドが同じ実力とは限らない、同一の始祖を持つアンデッドであっても、実力に大きな差がある場合があるのだ。

「でも……あれは本当にカリスなのかしら？ マンティスアンデッドも1体だけじゃない、他のマンティスアンデッドだと言う可能性も……」

「私が間違えるはずもない、あの気配は間違いなくカリスのモノだった。ただ……」

「ただ？」

みゆきが小首を傾げて高原に問いかけると、彼は不敵な笑みを浮かべて返した。

「最近人間も知恵を付けて来ましたからねえ、いろいろと探ってみるつもりです。言っておきますが、手出しは無用に願いますよ？」

それだけ言っただけで高原はその場から去っていく。そしてそんな彼の背中を、みゆきは怪しげな微笑みを浮かべて見送っていた。

第38話 バイクと謎の約束と（後書き）

と言う訳で第38話でした。

今回は弘貴がバイクを手に入れ、青羽達が新たな上級アンデッド・イーグルアンデッドに出会う話です。

弘貴が買ったグレーバツシャーは、名前から想像つく通りファイズに出てきたカイザの乗るサイドバツシャーを灰色にした感じですが、流石に変形したりはしませんけどね（汗）。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第39話 決闘と約束（前書き）

どうも、黒服です。

今回ちょっと長めです。切り所が微妙だったので・・・でもそしたら1万字を超す事に（汗）

第39話 決闘と約束

ルーコス・街中

青羽とノーマが奇妙な上級アンデッドに遭遇し、弘貴が自分のバイクを手に入れた翌日。今度は戒と弘貴も交えてアンデッドの捜索を行っていた。

「んじゃ、組み合わせは昨日と同じでいいわね？」

「うん、それでいいと思うよ。」

チーム分けは先日と同じ、青羽・ノーマ組みと戒・弘貴組みに分かれる事になる。青羽と弘貴は接近戦しか出来ないのに対して、戒とノーマは遠距離にも対抗できるので何気にこの組み合わせは悪くなかったりするのだ。

そんな訳で戒達と別れた青羽達は、先日探していたコングアンデッドもそうだが、それよりも先日出会ったオーキッドアンデッドとイーグルアンデッドが目的だった。

「イーグルアンデッドの方はともかく、オーキッドアンデッドの方はそろそろケリを付けたいわよねえ。」

「同感です。流石にそろそろ・・・」

そこまで言った瞬間、出し抜けにノーマが明後日の方向に目を向けた。彼女の突然の行動に驚く青羽だが、それが何を意味しているのか即座に理解する。

「アンデッド？」

「ええ、しかも上級アンデッドの方です。どうやら向こうから誘っている様ですよ。」

ノーマがそう言うと、二人は一目散に上級アンデッドが現れた場所に向かつていった。

その頃の戒と弘貴は・・・

「おおっ！　これが兄貴のカードッスか！」

街中にある喫茶店に戒と向かい合って座った弘貴は、戒の持っているカードを見て目を輝かせていた。

現在戒が持っているカードは、

ダイヤのA『チェンジ・スタッグ』

ダイヤの2『バレット・アルマジロ』

ダイヤの3『アッパー・フロッグ』

ダイヤの5『ドロップ・ホエール』

ダイヤの6『ファイア・フライ』

ダイヤの8『スコープ・バット』

ダイヤの9『ジェミニ・ゼブラ』

ダイヤの10『シーフ・カメレオン』

ダイヤのJ『フュージョン・ピーコック』

の9枚である。何故こんな事をしているのかと言うと、弘貴の知識に不安を持った戒が彼に改めてライダーの戦い方を教えようと考えたのだ。

とはいえ弘貴自身ライダーの戦い方など基本的な事は一応知っているようだったので、それぞれのカードの効果を彼に教えているのが現状になっている。

当の弘貴はと言うと、戒の持つ上級カテゴリー・ダイヤのJを手にと取っていた。

「うおおお、これが上級カテゴリーのカード！ カッコいいッ！！
これ、どんな効果があるんスか？」

弘貴が目を輝かせながら戒にそう尋ねると、彼は肩を竦めながら答える。

「ラウザーがチャージされるだけさ・・・そのカードだけじゃね。これともう1枚Qのカードと、【ラウズアブゾーバー】がないと。」

ラウズアブゾーバー・・・それはライダーシステムの強化ツールである。カテゴリーJとQを使用する事で、そのライダーをさらに強化することが可能なのだ。

もっともアブゾーバーの入手は簡単ではない。まず大前提としてカテゴリーQのカードと、カテゴリーJ・Kのどちらかのカードを持っている必要がある。上級カテゴリーのカードがないと意味がないので当然と言えば当然か。

さらにカードを持っていたても、年に2回行われるアブゾーバー取得の試験に合格しなければ手に入らない。ちなみに試験は筆記と実技一（アブゾーバーを持つに相応しい実力があるかのテスト）が行われるのだが、これがライダーになる際の試験とは比べ物にならないほど難しい。ただでさえ厳しい受験資格で少ない受験者が、この試

験の所為で毎年ほとんどの者が弾かれる。場合によっては合格者ゼロと言う年も少なくはない、それほどに厳しい試験なのだ。

弘貴は戒の口からそれを聞いて顔を青褪めた。主に難しい筆記試験の辺りで。

「うえー、そんな難しい試験があるんスか？」

「ああ、僕はまだQのカードを持ってないから受験することはできないけど。ただその難しさは大体分かるよ、上級カテゴリー2体を封印できる腕前を持って実戦経験からくる知識も豊富なのに、ほとんどの人は筆記試験で弾かれるみたいだからね。」

そう言いながら戒は席から立ち上がり、会計を済ませに向かう。弘貴も慌ててそれを追い掛けた。

「兄貴は受ける気があるんスか？ その試験。」

「まあね、ライダーになった以上行けるところまでは行っておかないと……ん？」

そこまで言った時、戒は街の1点を見つめながら怪訝な顔をする。彼が見ていたのは数人の男達、彼等は何事か話し合うと一目散にどこかへと走って行った。その内の何人かの手にはバツクルが握られている。

戒はそれを見て全てを察した。彼らはライダーのパーティーで、仲間の一人がアンデッドの情報を手に入れて全員でそこに向かうつもりなのだ。かなり急いでいる様子を見るに、恐らく現在進行形でアンデッドが現れているのかもしれない。

「弘貴、アンデッドが出たみたいだ。行くよ！」

「おっ！ 了解っス！！」

弘貴は戒の言葉に元気に頷くと、バイクに跨ってアンデッドが現れているだろう所に向かって行った。

海岸

戒と弘貴がアンデッドの下に向かった時とほぼ同じくして、青羽とノーマも上級アンデッドが現れた場所に到着していた。

青羽達が着くと、そこには海岸の柵を越えた岩場に立つ一人の男性と、その周辺で倒れている数人のライダーの姿が見える。恐らく青羽達よりも一足早く上級アンデッドに遭遇し、あえなく返り討ちにあったのだろう。

そしてそんな彼らの中でただ一人、傷どころか汚れも無い服装で佇む男。ノーマは彼から感じ取った気配に、彼が上級アンデッドである事を察する。

「貴方ですか、私達を呼んでいたのは？」

「ええ、その通りですよ。私としては、銀髪の貴女だけに来てほしかったんですけどねえ。」

男・・・高原はそう言うとその顔に薄ら笑いを浮かべる。青羽はそれに不気味な物を感じつつ、バックルとカードを取り出した。ノーマもそれに同じくバックルを腰に装着して、『チェンジ・マンティス』のカードを取り出すのだが・・・

「フッ！」

「あっ!？」

「グッ?!」

高原が素早く何処から取り出した羽を二人に向けて投げ、その手に握られていたカードを弾き飛ばしてしまう。弾き飛ばされたカードの内、青羽のカードは彼女達から少し離れた所に、ノーマのカードは高原の近くに落ちて行った。

そして高原は、落ちたノーマのカードを素早く拾うと、その顔に悲しみの感情を浮かべる。

「これは・・・やはりカリス。まさか君が封印されていたんだなんて・・・」

高原が信じられないと言った感じの声を挙げていると、青羽が彼に声をかける。

「ちょっとあんた、どういう事よ? 何でノーマのカードを・・・」

「これは私の親友にして最大のライバル・・・カリスです。返してもらうのは当然のことでしょう。」

「親友? ライバル? カリスってのはライダーの名前じゃ?」

アンデッドに親友がいる事自体には特に違和感を抱かない青羽。アンデッドの、それも上級アンデッドには人間とほとんど変わらない心がある。他のアンデッドがどうかは知らないが、少なくとも上級カテゴリー達は人間と話すだけの理性があるのだから、アンデッド同士で友好関係を築く者もいるだろう。

ただ青羽が分からないのは、彼が『カード』をカリスと呼んだ事。彼女が知る中ではカリスとは仮面ライダーの名前である筈なのだが・

・

「貴女に言っても仕方のない事です。それよりも問題は、このカリスの力を盗んで利用した・・・貴女の方だ!」

高原は青羽の質問に適当に答えつつ、ノーマのカードを懐にしまう。そして次いでノーマに敵意を向けながら、その姿をイーグルアンデッドの姿に変えた。

「貴女は許されない事をした。その罰・・・身を持って味わうがいい!」

そう言うなりイーグルアンデッドは無数の羽をノーマに向けて飛ばしてくる。ノーマは咄嗟に回避するが、生身では避ける事は辛うじて出来ても反撃する事が出来ない。

「何すんのよ! この「邪魔だッ!」あうっ?!」

「青羽ッ!」

一方青羽はノーマに攻撃するイーグルアンデッドに掴みかかるが、いとも簡単に振りほどかれてしまう。ノーマがそんな彼女を心配している、不意に彼女の目に青羽の手から弾かれた『チェンジ・ビートル』のカードが映る。

それを見たノーマは一瞬躊躇した後、即座にそれを手に取った。

「試す価値はありますか・・・青羽、少し借りますよ。」

「えっ? 何を・・・」

青羽がノーマの言葉に首を傾げていると、彼女はおもむろに腰に装

着したカリスラウザーに青羽のカードをラウズした。

《Change》

するとラウザーから電子音声が鳴り響き、同時にノーマの姿が仮面ライダーともアンデッドともとれる異様な姿に変化する。

それは本当に仮面ライダーとアンデッドの中間と言った感じの外見だった。肩や胸部など体のあちこちに装着されているアーマーはブレイドのそれを彷彿とさせる。だがそれ以外ではどこか生物を思わせる感じがあり、特に頭部は全体的な雰囲気こそ仮面ライダーの時に変わらないが、どちらかと言うとその雰囲気はブレイドが変身の際に使うカードに封印されたアンデッド・・・ビートルアンデッドのそれを思わせる。

「はあっ?!」

「戦うつもりですか・・・いいでしょう、相手になります。」

青羽が自分のカードを使って変身したノーマに驚く中、イーグルアンデッドはノーマの変身したライダー・・・仮面ライダーアナザーブレイドに跳びかかっていく。

アナザーブレイドはイーグルアンデッドに対してカリスアローと同型の武装で対抗するが、その動きはどこかぎこちない。

（くっ！ 予想はしていましたが、やはり『チェンジ・マンティス』に比べると私との相性が悪いですね。物が青羽のカードだから仕方ないと言えば仕方ないんですが・・・）

心の中でアナザーブレイドはそう愚痴るが、イーグルアンデッドの

方はそんな事情など知る由も無い。両手の鉤爪で容赦なく彼女に向かって斬りかかる。

ノーマが普段変身するカリスは、パワー・スピード共に優れたライダーなのだが、対する青羽の変身するブレイドはパワー面では申し分ないがスピードの面でカリスを下回っている。その差が今回表れたのだ。

それでもノーマとてこれまで伊達に戦ってきた訳ではない。イーグルアンデッドの隙を見つけると手に持ったアローで斬り付けた。

「フッ！」

「グッ?! おのれっ！」

アナザーブレイドに斬り付けられたイーグルアンデッドは、一瞬でその場から飛翔。上空に逃れて行くと、その手にノーマのカードを持って彼女に声をかける。

「カリスを封印したカード、返して貰ったぞ！」

彼はそれだけ言うと、一目散にその場から飛び去っていった。

「逃げられましたか・・・追わねばいけませんね。」

アナザーブレイドはそう言うとりあえず変身を解除、そのまま自分のバイクに方に向かっていこうとする。

だがそれは青羽に寄って呼びとめられた。

「ちょっと待って、ノーマッ！」

青羽に呼び止められたノーマは、その場で立ち止まると彼女の方を見る。

「一体どういう事？ 何であんたがあたしのカードで変身したの？」

青羽は訳が分からなかった。彼女が知る限り基本的にライダーシステムは特定のバックルに特定のカテゴリーAのカードを使う事でしか変身できない筈だからだ。ブレイドならブレイバックルに『チェンジ・ビートル』、ギャレンならギャレンバックルに『チェンジ・スタッグ』といった具合に。だからカリスの場合も同じだと思っていたのだが、ノーマはあろうことか『チェンジ・マンティス』ではなく『チェンジ・ビートル』のカードで変身してしまった。

「すみません、その話はあとでも構わないでしょうか？ 今は私のカードを取り戻さないと・・・」

対するノーマは、言おうか言うまいかしばし迷った後、青羽にはこの事を話さないでおく事にする。別に何時までも秘密にしている訳ではない、今はただそれよりも最優先でしなければならぬ事があるだけだ。

「・・・分かったわ、今は聞かないでおく。でもあたしのカードだけは返して。」

青羽も今の状況を分かっているのか、それ以上ノーマに詰め寄る様なことはしなかったが、代わりに今度は自分のカードを返せと言ってきた。

「それは・・・今回の事は私のミスです。自分のミスは「だゝめ、

返して。」・・・」

ノーマとしては今回の事は敵に易々とカードを奪われた自身のミスであるので、自分で何とかしたいと考えていた。自分のミスで青羽に迷惑をかける訳にはいかないと・・・

だが青羽は頑なにカードを返すように言う。ノーマがなおも青羽を説得しようとした時、それよりも早くに青羽が口を開いた。

「ノーマさっき、あたしのカードで変身した時苦戦してたでしょ？
大方あたしのカードはあんたの戦い方に合わなかったんじゃない？
」

凶星を突かれてノーマは押し黙る。実際問題スピードが足りない青羽のカテゴリAでは、ノーマの実力が発揮できないのだ。

「だったらあたしがやるわ。あたしが変身して、ノーマのカードを取り返してあげる。」

「ですが、それでは・・・」

『それでは青羽に迷惑がかかる』・・・そう言おうとしたノーマの言葉は、青羽の手によって制された。

「確かにカードを奪われたのはノーマのミスかもしれないわ。でもね、仲間ってのは助けあってこそでしょ？ 例え本人のミスであっても、仲間だったらあたしは喜んで手を貸すわ。」

そう言って青羽は何時もの笑みを浮かべる。ノーマは彼女の笑みと言葉に何も言えなくなってしまった。

ショッピングモール

その頃戒と弘貴は、アンデッドが現れたと思われるショッピングモールに来ていた。と言っても最初は追いかけていたライダーだろう者達を見失ってしまったので、仕方なく協会に向かおうかと考えていた時、モールの方から人々が逃げ出して来たのだ。

それから先の行動は迅速だった。何しろアンデッドが現れたのは人々が逃げてきた方向、つまり人の流れに逆らっていけば自ずとアンデッドの下に辿り着ける。

果たして、戒と弘貴がたどりついた時そこでは既に数人のライダー・・・ダガー達が1体の筋肉の塊の様なアンデッド・・・コングアンデッドと戦闘を繰り返している様子が見て取れた。だが状況はダガー達に不利な様で、周りにはやられたらしい倒れたダガー達の姿と、逃げ遅れたらしい一般人の姿が。

ここで二人はアンデッドの相手を他のライダー達に任せて自分達は逃げ遅れた人達を逃げそうと考えるが、それよりも早くに残っていた最後のダガーが倒されてしまった。そして残ったアンデッドは逃げ遅れた人達にその矛先を向ける。

「ッ!？ 考えてる暇はないか、変身!」

《Turn up》

コングアンデッドに逃げ遅れた人が襲われそうになっているのを見て、戒は即座にギャレンに変身。コングアンデッドに向けて攻撃を開始した。

「兄貴、よしっ！ 俺も「弘貴ッ！ 君は逃げ遅れた人達を早く逃がすんだ！」えっ！？ あ、兄貴っ！」

「ここは僕一人で何とか持たせてみる、早くっ！！」

「兄貴・・・了解ッス！」

ギャレンの言葉に一瞬不満そうな顔をした弘貴だが、彼の言い分も分からなくはない。経験が浅い自分よりも、豊富な戦闘経験を持つ戒が囹になって逃げ遅れた人達を逃がした方がより確実だからだ。

「さ、急いで。こっちッス。」

ギャレンがラウザーによる射撃でコングアンデッドを釘付けにしている傍で、弘貴は逃げ遅れた人達を誘導していく。中には恐怖で足が竦んで動けない者もいたが、そんな人には弘貴が肩を貸して少しでもギャレンとアンデッドの戦いから遠ざける。

「さ、ここまで来ればもう安心ッスよ。」

「ああ・・・ありがとうございます！」

弘貴が逃げ遅れた人達を伴って歩いていくと、モールの出口に付いた。弘貴が促すと次々とモールから出て行く人々、その全てが彼に向けて感謝の言葉を残した。一方の弘貴は、彼らにお礼を言われる度に顔が綻ぶのを感じる。

（そう言えば俺・・・こんな風にお礼を言われたのなんて初めてだ・・・）

思い起こせばライダーに変身してもいつも失敗ばかり。他のライダーに邪魔者扱いされて文句を言われこそすれ、この様に感謝されたことなど一度も無かった。

「本当にありがとうございます！　あの、お名前は？」

そして最後の人がモールから逃げる時に、不意に弘貴に名前を尋ねてきた。対する弘貴はこの様な経験がなかった為、嬉しさと恥ずかしさに顔を赤く染める。

「いや、えっと・・・そんな。あつ、それじゃあこれでっ！」

答えようかどうしようかしばし迷っていた弘貴だが、ギャレンが未だ戦っている事を思い出して急いでそちらに向かっていく。そんな彼の背中を、弘貴に名前を尋ねた女性と彼女の娘らしき少女が黙って見送っていた。

一方弘貴が逃げ遅れた人達を逃がす為に囷となってその場に残っていたギャレンは、コングアンデッドに対してやや苦戦していた。

「くそ、流石に硬いな・・・」

先程から何度もラウザーによる射撃を加えてはいるのだが、どうにもダメージは芳しくない。情報通りの堅い表皮を持っているようで、どのようにこの相手を攻略するかでギャレンは頭を悩ませている。

その時、弘貴が戻って来た。

「兄貴、やりましたよ俺！」

「弘貴！　いいタイミングで戻ってきてくれた、早く変身をッ！」

ギャレンは戻って来た弘貴にすぐさま変身する様に言う。戦う前から感じていたが、この手のパワーと防御力が自慢の相手には、同じ

くパワーと防御力が高い弘貴のアクスの方が相性がいい。ギャレンでも倒せない事はないだろうが、どちらかと言うとスピード重視のギャレンでは少し苦勞する。その点弘貴の変身するアクスなら確実だ。

「分かったっす！ 変身!!」

《Turn up》

弘貴はアクスに変身すると、即座に手斧型のラウザーを振りかぶってコングアンデッドに立ち向かっていった。

「でやあああああっ!!」

コングアンデッドは向かってくるアクスにその剛腕を振り下ろすが、パワーと防御が高いアクスにはこれまでのライダーの様なダメージを与えられない。それどころか拳を受け止められた際の隙を突かれて、ラウザーによる斬撃を受けてしまった。

「フンッ、セイツ、どりゃあああっ!!」

立て続けにコングアンデッドに向けてラウザーを振るうアクス、コングアンデッドも負けじとアクスを殴ろうとするが、ギャレンが的確な援護射撃を行う為攻撃の悉くを妨害される。

「どっせええええい!!」

そしてアクスが大きく振りかぶったラウザーがコングアンデッドに当たると、そのパワーに負けて相手は大きく吹き飛ばされてしまった。その瞬間コングアンデッドには大きな隙が出来る。

「今だ弘貴！ トドメを!!！」

「それなら、こいつで！」

《Slash Shine》

《Shining Slash》

ギャレンが指示を出すと、アクスがカードケースから2枚のカードを取り出した。取り出したカードは青羽も使う『スラッシュ・リザード』と、タマムシの様な絵柄が書かれた『シャイン・ジュエル』。その2枚のカードをラウズして必殺のコンボ技『シャイニング・スラッシュ』を発動した。

技が発動するとアクスラウザーが光を集めて発光、その状態でアクスはラウザーをコングアンデッドに叩き付ける。

「うおおおおおっ！ おりゃあああっ!!！」

アクスの放った必殺技をコングアンデッドは一瞬受け止めるも、アクスのパワーの前では耐えきることが出来ず数歩下がった時点で袈裟掛けに斬り裂かれてしまう。斬り裂かれたコングアンデッドが仰向けに倒れると、その腰にあるバックルが二つに割れた。

「はぁ、はぁ、やった「弘貴。」兄貴？」

「君が倒したんだ。封印は君がするといい。」

すでに変身を解除した戒が、アクスに向けてそう言う。その言葉にアクスはコモンブランクを取り出すと、コングアンデッドにそれを投げて封印した。

「はぁ、はぁ・・・やった・・・やったあああっ!!！」

自分の手で封印したアンデッドのカード、それを感慨深い目で見ながら、アクスは嬉しさのあまりその場で両手を振り上げて叫ぶように声を挙げていた。

海岸沿い

青羽とノーマは、イーグルアンデッドに奪われたカードを取り戻す為にバイクを走らせていた。とは言っても正直彼女たちにはアンデッドが何処にいるかと言う事は全く見当がつかなかったのだが、あながち当てがない訳ではない。と言うよりも青羽達には向こうから現れるだろうという確信があった。

「さあ、出て来なさい。ノーマのカード返して貰うんだから。」

青羽がそう呟いていると、ふと上空に何かを見つける。空に浮かんだ人型の何か、紛れも無いイーグルアンデッドである。

「カリスを騙った罪、今度こそ償ってもらおうぞ！」

イーグルアンデッドはそう口にする、真っ直ぐノーマに向けて突っ込んできた。それに気付いた青羽は、バイクのスピードを上げつつ予め腰に装着しておいたバックルのハンドルを引いて変身する。

「変身！」

《Turn up》

青羽はブレイドに変身すると、こちらに突撃してくるイーグルアンデッドに向けて片手でラウザーを振るう。しかしあと一歩ですれ違いざまにイーグルアンデッドを切り裂く筈だったそれは、直前で上

昇したイーグルアンデッドに避けられてしまった。

「ああん、もう!? 空を飛べるってのは羨ましいわねえ 「青羽!」」

ブレイドがどうやってイーグルアンデッドを相手にするか考えていると、ノーマが彼女に声をかけてきた。何かと思いブレイドがそちらを見ると、ノーマが1枚のカードを投げってくる。ブレイドがそれをキャッチして見てみると、そのカードは『フロート・ドラゴンフライ』だった。

「これ、ノーマの!?」

「使ってください。それを使えば奴にも対抗できる筈です。」

そう言って力強く頷くノーマ。ブレイドはそんな彼女に頷き返すと、ラウザーにカードをラウズした。

《Float》

カードをラウズした瞬間、ブレイドの体が重力から解き放たれたかのように宙に浮かび始める。それを確認したブレイドは一目散にイーグルアンデッドに向けて飛翔していった。

一方のイーグルアンデッドは、こちらに向けて飛んでくるブレイドを見て戦慄した。無意識のうちに空は自分にとっての絶対安全領域だと思っていただけに、ここまで追ってくるブレイドに驚愕したのだ。

「まさか!? 人間が空を!」

「こういうカードもあるって事よ! ハアッ!」

驚愕のあまり大きな隙が出来たイーグルアンデッドを、ブレイドが容赦なくラウザーで斬り裂いた。斬り裂いたのは背中に生えた1対の翼の内の片方、それを失った事でバランスが取れなくなり、イーグルアンデッドは真っ逆さまに落ちて行く。さらに追い打ちとして、もう片方の翼も切り裂くブレイド。イーグルアンデッドは叫び声を上げながら落下していく。

「ぐわああああっ?!」

そのまま地面に激突したイーグルアンデッドと、何なく着地するブレイド。イーグルアンデッドは何とか体勢を立て直すが、それよりも早くにブレイドがイーグルアンデッドを切り裂いた。

「イヤァッ!」

「ガッ?!」

ブレイドが斬り裂いたのはイーグルアンデッドの胸部、そこはちょうど彼が人間態の時にノーマのカードをしまった所である。ブレイドがそこを切り裂いた瞬間、イーグルアンデッドから『チェンジ・マンティス』のカードが飛び出す。

ブレイドはそれを見ると飛び出したカードを見事にキャッチしてみた。

「ノーマッ!」

ブレイドは取り戻したカードを即座にノーマに投げ、ノーマはそれを苦もなく受け取る。

「変身。」

《Change》

ノーマは腰に装着したラウザーにカードをラウズして、カリスに変身した。そしてカリスはそのままブレイドと共にイーグルアンデッドと戦い始めた。

「ハッ！」

「グッ!? カ、カリスッ?!」

カリスに攻撃を受けた事でイーグルアンデッドは即座に反撃しようとするが、カリスの姿を見て一瞬攻撃を躊躇してしまう。

その隙が命取りとなり、ブレイドとカリスの波状攻撃を受けてしまうイーグルアンデッド。流石の上級アンデッドと言えどもこの波状攻撃を凌ぐ事は出来なかった。

「はっ、グッ!? うわあああっ?!」

「ノーマ、行くわよ!」

「ええ。」

二人の同時攻撃がイーグルアンデッドを弾き飛ばす。それを好機とみて、ブレイドとカリスはそれぞれカードをラウズする。

《Kick Thunder Mach》

《Float Drill Tornado》

《Lightning Sonic》

《Spinning Dance》

ブレイドは『ライティング・ソニック』を、カリスは『スピニング・

ダンス』を発動。ラウズしたカードの絵柄が投影され、二人の体に吸収されていく。

「はあああ・・・デヤアアアアッ！」

「ふううう・・・ハアアアアアッ！」

紫電を纏い高速で蹴りを繰り出すブレイドと、宙に浮きながらきりもみ回転キックを繰り出すカリス。イーグルアンデッドも二人の攻撃に気付くが、時既に遅し。回避も防御も間に合わず二人の必殺技をその身に受けてしまった。

「ぐわあああああっ?!」

二人の必殺キックをその身に受けたイーグルアンデッドは大きく吹き飛ばされ、吹き飛ばされた先で爆発を起こした。

それを確認して軽く警戒を緩めるブレイド、だが一方のカリスが依然として警戒していると、ふら付きながらもイーグルアンデッドが人間の姿になりながら立ち上がった。

「ゆ、油断した・・・違うと分かっている、カリスの姿を見ただけで動揺してしまうとは・・・」

「一つ教えてもらえませんか？ 貴方がマンティスアンデッドと交わしていた約束とは、一体？」

カリスの言葉に、高原は薄らと笑みを浮かべながら答えた。

「簡単ですよ、戦う事です。」

「戦う？」

「ええ、そうです。私とカリスはお互いを最高の敵として認めあい、

良き友であり良きライバルとなった。そして誓った、何時かお互いが納得できる強さになった時、雌雄を決する戦いをしようと。」

ブレイドとカリスが聞く中、高原の言葉は続く。

「そして20年以上前、私とカリスは出会いました。約束を果たす為に・・・なのに、そこで邪魔が入った。」

「邪魔？」

「そうです。いざ私とカリスが戦おうとした時、乱入する者がいたのです。それはあなたと同じ、ブレイドタイプのライダーでした。ただ、色は灰色でしたが。」

「ッ!？」

高原の言葉に、ブレイドは息を飲む。彼女が知る中で灰色のブレイド、それは青羽の父である信司に他ならない。

「もしかして・・・それってあたしの父さん？」

「さあ？ 私はあなたの父親など知らないのね・・・ただもしそうなのだとしたら、悔しい事です。同じ血族の相手に、2度も邪魔をされてしまったのですから・・・」

そこまで口にして、高原は仰向けに倒れた。それと同時にアンデッドの姿に戻り、腰のバックルが開かれる。ブレイドはどちらが封印するかという意味を込めてカリスを見やるが、彼女は既に変身を解除していた。

「今回は、貴女に譲ります。いろいろとお礼の気持ちもありますし・・・ね。」

「ノーマ・・・ありがとう。」

ノーマに礼を述べると、コモンブランクをイーグルアンデッドに投げるブレイド。そしてアンデッドを封印したカードは彼女の手に戻って来た。カードは『フュージョン・イーグル』、スペードのJだ。青羽はそのカードをしばし見つめると、黙ってカードケースにしまう。

そしてここには用はないとばかりにノーマがその場を離れようとすると、徐に青羽が声をかけてくる。

「ねえ、ノーマ。」

「あたしね、今すっごく父さんが許せないって思ってる。」

「はっ？」

ノーマが首を傾げていると、青羽はさらに言葉を続けた。

「こういう事考えるのって、どうかと思うんだけど・・・こいつがしようとしたのは、1対1の決闘。お互いの全てを賭けた、大事な決闘・・・」

青羽は、戦いに関してある程度の美学を持っている。戦いとは単に強いモノが弱いモノを踏み越えるモノではない。お互いの魂を、もっとも近くに感じる事が出来る神聖な物だと・・・そう青羽は考えているのだ。

「父さんがこいつ等の約束を知ってたのかは知らないけど、そういう大事な決闘は絶対に邪魔しちゃいけないって・・・そう思えるんだ。」

「で？ 貴女は父に対して文句の一つでも言いたいと？」

「ううん、そうじゃないよ。今更言ってもしょうがないし、父さんがやったって証拠も無いし。」

『可能性は限りなく高いけどね』と言いながら苦笑すると、青羽は真面目な顔でノーマを見た。その身から発せられる威圧感に、ノーマもやや気圧される。

「こいつ等は約束を果たせなかった・・・だからさ、あたし達でこいつ等の約束果たしてあげようよ。」

「はっ？」

「約束しよう・・・何時か、もう一度勝負するって。物足りないかもしれないけど、こいつ等の力を借りて戦えば・・・少しはこいつ等の約束も果たされるんじゃないかなって。」

そう言ってニシシツ、と笑う青羽にノーマは軽く溜息を吐いた。本当にどれだけお人好しなのか・・・と。

（ですが・・・そのお人好しな部分に惹かれたのもまた事実ですね。）

ノーマは心の中でそう口にすると、サングラスを外して青羽の目を見た。

「ま、いいでしょう。どうせ勝つのは私ですけどね。」

「あっ！ 言ったわね、今度は絶対負けないから！！」

ノーマの言葉に、青羽はムキになって言い返す。以前の敗北がやはり悔しいのだろう、そんな彼女にノーマは笑みを浮かべる。対する青羽も、ノーマの笑みに笑って返した。

「もう、ノーマったら・・・あははっ！」

「ふ、ふふふっ！」

何がともなく可笑しくなった二人は、しばらくその場で笑い合っていた。いつか再び、お互いの全力を出し合って戦う時を思い描きながら。

第39話 決闘と約束（後書き）

と言う訳で第39話でした。

今回ノーマが青羽のカテゴリAを使って変身しました。具体的な姿は、ビートルアンデッドとブレイドを組み合わせた感じです。大本のシステムがカリスラウザーから来てるので、武器はカリスアローのままですが。ちなみに設定にも書いてありますが、カテゴリA以外のカードでは変身できません。その代わりどのカテゴリAのカードを使ってもライダーに変身できますが。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第40話 邂逅・蠢く狼の影（前書き）

どうも、黒服です。

今回、キバ編と軽くリンクしています。

第40話 邂逅・蠢く狼の影

ルーコス・街中

その日の夜、ルーコスの街中でデートをしている一組のカップルがいた。仲睦まじく手を繋いで隣り合っている様子は、なんて事はない平和な日常その物だ。

だが・・・そんな幸せを謳歌している二人に、悲劇が襲いかかる。

「グワウウツ！」

「うわ、ぎゃあああああつ?!」

突然物陰から飛び出してきた狼の様な姿のアンデッド、ウルフアンデッドが男性の方に襲いかかる。男性は必死に抵抗しようとしたが、所詮は非力な人間の力。ライダーでもない人間がアンデッドにかなう筈も無く、彼の首にウルフアンデッドの牙が突き刺さる。

「きゃあああああつ?!」

ウルフアンデッドに襲いかかられ、首から血を噴き出す彼氏の様子に悲鳴を上げるしか出来ない女性。男性から抵抗が無くなった頃、ウルフアンデッドは彼を解放してそのままどこかに去って行ってしまった。残されたのは無残にも首を食いちぎられた男性と、あまりの惨状に呆然とした女性のみ。

「あ、ああ・・・」

女性が恐怖のあまり震えていると、突然倒れていた筈の男性が起き

上った。首を食いちぎられ血を噴き出し、確実に死んだと思われるほどの重症だったのにもかかわらず……

「ッ!?　ね、ねえ、大丈夫?」

女性はすぐさま男性に近寄り、彼に容体を確認する。しかし男性は何も答えず、俯いたままだった。その様子に女性は口もきけないほどの重症だと考えてすぐに救急車を呼ぼうとしたのだが、彼が顔を上げると驚愕に目を見開き動きが止まる。

「えっ……そんな、嘘でしょう……?」

女性が見たもの、それは間違いなく狼の顔だった。つい数分前まで人間だった筈の男性の顔は、先程のアンデッドとは多少異なるが狼の顔に変化していたのだ。

「うううっ!」

「ッ!?　ああ……待ってよ、止めて……」

「グアウッ!?」

「いやああああああっ?!」

狼の顔になった男性は、唸り声を上げながら女性に近付く。その様子に女性は後退りしながらも哀願するが、男性は聞く耳持たない。獣の様な叫び声を挙げると、一気に女性に襲いかかりその首に牙を突き立てた。

そして人通りの少ない夜の街に、女性の叫び声と彼女の首が食いちぎられる音だけが響き渡った。

翌日

青羽とノーマの二人は、工房に向かって歩いていった。二人がバイクを工房に預けてからこの日でちょうど1週間、予定では今日には二人のバイクの修理が完了している筈だ。

「ちゃんと直ってるかな？ あたし達のバイク。」

「そこは工房の技術者の腕を信じましょう。」

今の青羽の頭の中は、自分のバイクがどうなったのかで一杯になっていた。その様子は誕生日のプレゼントを今か今かと待ちわびる少女の様であり、ノーマは思わず苦笑してしまう。

「前から思っていました、青羽はかなり物に愛着を持つんですね。」

「まあねえ、特にブルースペイダーなんかは長い事使う様な物だし、何より折角父さんが特注してくれた物だもん。大事にしようとは思うって。あゝ、バイクの事考えたら早くまた会いたくなっちゃった！ 行こう、ノーマ！」

「あ、青羽ちよっとっ！」

そう言うとき青羽は早くバイクの下へ行きたいと言う気持ちが強くなってしまうのか、ノーマの制止を振り切って走り出す。とはいえ人通りがそれなりに多い通りでの事、そんな事をすれば当然・・・

「うわっと!？」

「ッ!？」

同じように通りを歩いている他の人にぶつかる可能性だってある。案の定青羽は目前の人影に隠れていた別の人に出会い頭にぶつかってしまった。

「あぁっと、ごめんなさい（うわっ!? 凄いカッコいい・・・って言うか綺麗な人!）。」

青羽がぶつかったのは、基本色恋に疎い青羽でも一目見てカッコいいと思える男性だった。白い髪と一点の曇りも無い白い肌、さらに白いコートと言う何から何まで白いその男性の中で、唯一コバルトブルーの瞳だけが際立って見える。

その男性からは何か引き付けられるようなものを感じ、青羽はしばらく男性から目が離せなかった。

（モデルか何かかな？ 隣にいる人ってもしかして彼女さん？ 目、怪我してるのかな？）

男性の近くには、黒髪の女性がいる。こちら間違いない無く美人の部類に入るかもしれないが、それより何より彼女の右目を覆っている包帯に目が行った。怪我をしているようだが大丈夫だろうか？

とその時、青羽は男性がどこか訝しげな視線を自分に向けている事に気が付いた。彼と自分は初対面の筈だが、何故このような視線を向けられているのか分からず青羽は首を傾げる。

「えっと・・・あたしの顔に何か付いてる？」

「・・・いや、ただ知り合いに似てただけだ。気にするな。」

「知り合い？ それってもしかして「青羽、何やってるんですか？ 早くいきますよ。」おっとそうだった、あたしも急いでるんだっただ。引き留めちゃってごめんなさい、それじゃあ!」

青羽が男性の言葉にもしやと思いい口を開くが、それよりも早くにノ

ノーマの声が聞こえた。どうやらいつの間にかノーマの方が先に行ってしまったらしい、青羽が立ち止まっている事に気付いたノーマが彼女を呼ぶ為に声を挙げたのだろう。青羽はノーマの声に慌ててその場から離れて行く。男性達の方は去っていく彼女の後姿を見ていたが、すぐにその場から離れて行った。

（あ、そう言えば紅羽との関係聞きそびれちゃった。あたしと似てる人って、多分紅羽の事だね？）

もしかしたら紅羽とも違う別人の可能性もあったが、青羽には何となく彼が出会ったのが紅羽ではないかと言う気がしてならない。そのまま走りながら首を傾げて唸り声を挙げる青羽。

「うーん……ま、いつか。」

しばし悩むが一向に答えは見えてこない。今更戻って聞くのも馬鹿らしいし、今は特別に知るべき事でもないだろうからだ。

もっともそれ以上に青羽は彼と再び会える様な気がしていた。何の根拠もないが、そう遠くない未来に再び彼と出会う時が来るような、そんな予感が……

工房

見知らぬ男性との邂逅を果たした後、青羽はノーマと共に工房にやって来ていた。受付に話すと、係の職員がやってきて二人を工房内部に案内してくれる。

「1週間前にお預かりしたバイクはこちらになります。」

工房内は絶えず機械の駆動する音と機械油の匂いが充満し、青羽達を案内する職員の声も大声で話して漸く聞きとれる位だった。青羽とノーマが工房内部の騒音に辟易しつつもしばらく職員に付いていくと、ある程度騒音が収まってきた。それと同時に二人の前にブルースペイダーとシャドーチェイサーが見えてくる。

それを目にした瞬間、青羽は一目散に自身のバイクに駆け寄った。

「おお、直ってるんですか？」

「ええ、幸い致命的な損傷も無かったので、これまでと変わることなく乗る事が出来ますよ。」

「ありがとうございます！」

青羽は修理を担当した技術者にお礼を言うと、改めてブルースペイダーに目をやった。ノーマがそんな彼女に苦笑しつつ職員に料金等に付いて話していると、一人の技術者が青羽に話しかけてくる。

「いや、君がコイツの持ち主かい？」

「そうだけど、何？」

「いや、触ってて分かったんだけどね、こいつの持ち主は随分とこれを大事にしてたんだなって。あっ！ 自己紹介が遅れたね、僕はここの技術者の一人で榊原（さかきばら）って言うんだ。」

「あたし青羽、こいつ直してくれてありがとう！」

そう言って青羽は榊原と軽く握手を交わす。青羽もそうだが榊原も他人と接するのが上手い性格なのか、二人はすぐに親しくなり雑談まで始めた。

曰く、大抵のバイクは触れば持ち主が大事にしていたかどうか分か

ると言う事。

曰く、彼は昔バイクのレーサーだったが、怪我を理由に引退せざるを得なかったという事。

曰く、ライダー専用のバイクは出来の良い物が多く、こうして技術者として関わるだけでも十分楽しいと言う事。

そんな他愛のない雑談をしている青羽を余所に、料金に関する話を終えたノーマが流石にそろそろ彼女をこの場から移動させようとすると、視界の隅に身に覚えのある人物の姿を見つけた。

「ん？ あれは、もしかして……」

ノーマが見つけた人物……それは燃えるような赤い髪をポニーテールにし、髪と同じ赤い瞳を持った少女。瞳からは強い意志が感じられ、雰囲気こそ違うが外見は今ノーマの目の前にいる青羽と瓜二つだった。

「青羽、あれはもしかや紅羽さんではないのですか？」

「へっ？ あっ、ホントだ。紅羽ッ！」

青羽が呼ぶと、向こうもこちらに気付いたのか近付いてくる。

「何よ青羽、こんな所で……ブルースペイダーぶっ壊れたの？」

「いや、ちょっと無茶させ過ぎちゃって、修理出したのを引き取りに来てたんだけどね。そう言う紅羽は何してんの？ 紅羽もバイクの修理？」

大方自分と同じでバイクを修理に出したのだろうと青羽が考えてい

ると、紅羽は一気にバツが悪そうな顔になり頬を掻きながらソッポを向いた。

「あたしの場合はどうかって言うと、修理じゃなくて買い替えね。」

「えっ!？ 買い替えてどうして？」

「レッドスペイダーがスクラップ同然になったのよ。一応駄目元で修理に出したけど、一目見ただけで修理不可能って言われたわ。」

そう言うと紅羽は小声で『あの女、人のバイクをよくも』等と呟いていたが、口元を手で隠していた為青羽はおろかノーマにすらほとんど聞こえる事はなかった。

そこでノーマがある事を疑問に持つ。

「何故こちらの工房なんです？ バイクを買うのでしたらこちらではなく、販売専門の方に向かうのが道理なのではないのですか？」

今青羽達がいるのは修理などを専門にしている場所であり、こことは別に先日弘貴がバイクを手に入れるのに赴いた販売専門の所がある。紅羽がバイクを手に入れる事を考えているのであれば、彼女がいるべき場所はここではなくそちらであった為、ノーマの疑問ももつともだった。

「ああ、それなら理由は簡単よ。ここで新しく作ってるバイクを貰う事になったんだけど、貰う条件が製作の手伝いとレッドスペイダーのパーツの提供だった訳。あと完成したバイクのモニターね。」

「パーツの提供？」

「そっ。幸いぶっ壊れたのはエンジンとかバイクとして動くのに必要な部分だけで、モビルラウザーとかは案外無事だったから。」

パーツの提供以外にも製作自体に手を貸すことも条件とのことで、そそくさとその場を去っていく紅羽。彼女の後姿を見ながら、榊原は何かを思い出したかのように口を開く。

「ああ、そう言えば今ここで最新型のライダー用バイクを作ってるんだっけ？」

「最新型？ それってどんな？」

「えーっと確か……ああっ、思い出した。【ゲイルバイト】って言うバイクだよ。」

大通り

青羽達が工房に向かっていている頃、戒と弘貴は街に買いだしに来ていた。予定では今日には青羽のバイクは修理し終わっている、となれば明日にでも街を出る事が出来るように準備を整えておく必要がある。今日までに修理が間に合わない可能性もあるが、工房の技術者は優秀な腕を持っている、恐らく心配はいらないだろう。

「にしても最近は静かだったっスねえ？ 普通のアンデッドはおろかダークローチもほとんど出ませんでしたし。」

「確かにアンデッド自体は出なかったけど、確実にアンデッドは動いてると僕は思うね。」

「へっ？」

戒の言葉に首を傾げる弘貴、戒は頭にハテナマークを浮かべている弘貴に今朝の新聞を見せた。

「何々？ 『ルークスにて行方不明者続出、アンデッドの関与が考

えられ現在鋭意捜査中』・・・って、これ・・・」

「十中八九、アンデッドの仕業だろうね。実際協会のサーチャーにも足取りは掴めてないけどアンデッドの存在はキャッチされてた、ここ数日の行方不明者の増加には間違い無くアンデッドが関わっている筈さ。」

戒の導き出した結論に、弘貴が難しい顔になる。この1週間の間に彼らも遊んでいた訳ではなく、暇さえあれば協会に足を運んでアンデッドがいないかどうかチェックしていた。その際に何度か、反応の強いアンデッドの存在がいると聞かされている。しかし時間がまちまちでしかも出現場所にも法則性が全くなかった為、足取りを掴めないでいたのだ。

「何とか・・・ならないんスカねえ？」

「こればかりは、相手の目的も分からない事には何ともねえ・・・」

二人がそんな話を話していると、突然通りの一角で悲鳴が上がる。

「うわあああつ?! な、何だこいつ等ッ!？」

「た、助けてくれええっ!？」

「「ッ!？」」

二人が急いで悲鳴が聞こえた方に向かうと、そこには狼の様な顔と爪の生えた毛深い手を持った化け物が複数体いた。一瞬弘貴は新手のアンデッドかと思ったがどうにもおかしい、連中が身に纏っているのはどう見ても人間が着る様な衣服だったのだ。

「な、何スカアレ? なんかおかしくないッスカ?」

「疑問はもっともだけど、今はあいつらをどうにかする事を考えよ」

う。」

弘貴が戒の言葉に頷くと、二人はカードを装填したバツクルを腰に装着する。

「「変身ッ！」」

《《Turn up》》

二人は変身すると即座に狼男(?)達と戦い始める。周りを見ると彼らの他にもダガーが集まってきた、騒ぎを聞き付けてやって来たのだろう。

戦闘自体は数分程度で終わった。見た目は何処か凶悪さを感じさせるが、それほど強い訳でもなく寧ろダークローチよりも弱く苦戦する者は誰一人いなかった。

そして戦闘終了後、彼らの疑念はさらに募る事になる。

「ん? おい、こいつ等封印できないぞ?」

「えっ? ホントだ、どうして?」

「アンデッドじゃないのか、こいつ等・・・」

周りのダガー達が騒ぐように、この狼男(?)達は封印する事が出来なかった。試しにアクスも倒れて動かない奴に向けてコモンブラークを投げてみたが、カードは狼男(?)の上でしばし回転するとそのまま彼の手に戻ってきてしまう。その様子を疑問を持ちながらアクスは変身を解除した。

「どうなってるんスカね、兄貴?」

「おかしい・・・ダークローチでもないのに倒しても消えないなん

て・・・」

「あつ、そう言えば・・・」

戒の言う通り、ダークローチなどは通常倒されるとその場で消滅してしまふものである。しかし今彼らの前にいる狼男(?)達は、明らかに倒される程のダメージを受けているにもかかわらず消滅する気配がない。かと言って動き出す様な気配も無いのだが・・・

戒や他のライダー達が目の前の状況に首を傾げていると、新たに数人のライダーがやってきた。パツと見た感じはダガーを緑色にした感じだが、ラウザーが剣ではなく拳銃だった。

「あれは確か、仮面ライダーベレッタ・・・協会所属のライダー達か？」

仮面ライダーベレッタ・・・戒の言う通り、協会に所属する者が変身するライダーである。基本スペックは軍用のカービンには多少劣るものの、ダガー以上の性能を持っている為数を揃えて行動すればアンデッドを余裕で倒すだけの能力を持つ。

戒達が見る中、ベレッタ達は次々と狼男(?)達を担ぎ上げると近くに停めてあるトラックへ運び始めた。

「それで最後だな？」

「はいっ！」

「よし、撤収する。」

倒された狼男(?)達をある程度運び終わった事を確認すると、一人の指揮官らしきライダーが指示を出す。周りのベレッタ達はその場から離れて行く中、指揮官らしき人物だけは戒達に近付いて来て

変身を解除した。変身を解除した後には、茶色い短髪を持つ紺色のジャケットを着た男性、彼がこのベレッタ達のリーダーだろうか。

「ご協力、感謝します。」

「協力？」

「あの狼男、我々はワーウルフと呼んでいますが、そいつらの捕獲に協力して下さいました事です。」

茶髪の男性はそう言って戒や他のライダー達に向けて敬礼する。そこで弘貴がある疑問を口にした。

「あの、あいつら一体何なんスか？ どうも普通のアンデッドとは違う感じっスけど。」

「あれはあるアンデッドの犠牲者たちのなれの果てです。現在我々が追っている狼のアンデッド、ウルフアンデッドに襲われた者は皆あのワーウルフになってしまふんです。」

男性の答えに弘貴は驚いた。アンデッドには特殊な能力を持った者が多いとは知っていたが、まさか殺した人間を自分の仲間にするアンデッドがいるなど思いもよらなかったのだ。

「もしかして、ここ最近この街で起きている行方不明事件は・・・」

「そうです、そのウルフアンデッドの仕業です。我々はこれ以上の被害拡大を防ぐために行動しているのですが、何分奴の足取りを掴むのが難しく・・・」

「あの、俺達で良ければ協力しますけど？」

「本当ですか!？」

一向に解決の目処が立たない状況に俯き方を落とす男性、そんな彼

に弘貴が協力を申し出た。男性が驚きに目を見張る中、戒も苦笑しつつ頷いた。

「ま、青羽もこんな事を見過ごす筈がないだろうからね。アンデッドが好き放題するのを見過ごすのも気分が悪いですし、僕らも協力しますよ。」

「ありがとうございます！ あなた達の様なライダーに協力してもらえれば、百人力ですよ！」

「オーバーですって。僕は大神 戒、こっちが櫻羽 弘貴です。」

「私は、協会所属の新名しんめいと申します。よろしく願います。」

宿

その日の夜、青羽達は宿で今後の方針に付いて話し合っていた。

「じゃあ、あたし達その新名って人に協力する事になったの？」

「すみません、勝手に決めちゃって・・・」

「いいって、多分あたしも同じ事言ってたと思うし。」

勝手に今後の方針を決めてしまった事に申し訳なさそうな顔をする弘貴に、青羽が笑みを浮かべながらそう言って返す。事実青羽であれば喜んで協力したであろう。

二人がそんな遣り取りをしている中、ノーマが顎に手を当てながら何気なく口を開いた。

「しかし、妙な偶然があったモノですね。別々に行動していた筈なのに、どちらも協会と接点を持つ事になるとは。」

「えっ？ どういう事？」

「工房で協会が携わる新型バイクが開発されてるんです。」

「そうそう、しかも紅羽がそれ貰う事になったんだって。勿論開発手伝ったりとか、いろいろと代償は払う事になったみたいだけど。」

「何でも彼女が使っているバイクが何者かに破壊された様で、残ったパーツを提供して開発スタッフのサポート、テスト走行にライダーシステムとのリンクなどを手伝う事になったらしいですよ。」

協会に登録しているライダーは、自身が乗る事になるであろうライダー専用バイクに関する知識もある程度頭に叩き込む事が要求される。工房に持っていけば整備などはしてもらえろとは言え、何時でも何処でもと言う訳にはいかない。場合によっては一人で問題を解決しなくてはならない事もあり、そう言った事態に対応する為にライダー専用バイクの整備に関する知識は必須なのだ。

そう言う訳で、紅羽もその例に漏れず自身が乗るバイクに関してはある程度の知識を持っている。その為技術的な面に関しても協力することが出来ていた。

ちなみにライダー専用のバイクと通常のバイクの整備では、求められる知識に微妙な違いがある。ライダー専用バイクにはラウズカードの効果をバイクに付加させるモビルラウザーが搭載されている為、そちらに関する知識も必要だった。

そこで戒が、何かを思い出したかのように口を開く。

「ライダー専用バイク・・・そう言えば数年前、協会が開発に携わってた最新型のバイクがアンデッドに奪われたって話を聞いた事があるな。」

「はっ？ 何でアンデッドがライダー専用のバイクを盗むの？」

「僕も詳しい事を知ってる訳じゃないから一概には言えないけど、

「どうやらモバイルユーザーを狙ったらしいね。」

アンデッドの力を引き出す事が出来るユーザー、本来は人間が変身するライダーが他のアンデッドの力を利用する為に使用されるそれだが、もしそれをアンデッドが使えるようになるか？　しかもそれを自分の能力を読み込ませたらどうなるか・・・答えは簡単、使用したアンデッドの能力を最大限以上に引き出す事が可能となる。

「なんだか物騒ね。紅羽大丈夫かなあ・・・」

「まあ、そんな大層な物を持っているんですから今更別のバイクに手を出そうとは思わないでしょう。」

「いや、分かんないツスよ？　もしかしたら今持ってるバイクに飽きて新しいバイクを欲しがったりとか・・・」

「そんな子供じゃあるまいし・・・」

弘貴の言葉をやんわりと否定する戒だが、その実彼は弘貴の言う事が現実になりはしないか心配になっていた。技術の進歩は日進月歩、数年前に開発されたバイクよりも今開発されているバイクの方が基本スペックでは上回っている可能性が大いにある。そしてアンデッドがそのバイクに目を付けたとしたら・・・

（・・・余計なことは考えないようにしよう。）

戒は心の中でそう呟いて、誰に気付かれる事も無く自身の嫌な予想を振り払うようにその場で頭を振るのだった。

工房

青羽達が今後の事に付いて話し合っている頃、紅羽は工房の技術者

と共に新型バイク・ゲイルバイトの開発に勤しんでいた。と言っても彼女には基本知識があるのみで技術者達の様な技術がある訳ではなかったので、やることと言えば技術者にパーツや工具を渡したり、エンジンを軽く動かしてみたりと言った地味な作業が主だったりする。

それでも彼女の存在は技術者達にとっては掛け替えのない物だったりした、何故ならば・・・

「コイツも明日には漸く完成、明日は貴女にも頑張ってもらいますよ。」

「任せてください。と言っても、やる事は走らせたりカードをラウズする程度だから、あたしじゃなくても誰でもできる事だとは思いますが。」

「いやいや、貴女みたいな経験のあるライダーは意外と得難かったりするんです。ライダーは基本的に上級者になればなるほど人里から離れて行く事が多くなりますから。」

紅羽はすでに2年以上ライダーとして活躍している。そんな彼女が試運転をすれば、バイクとしての癖やモビルラウザーの不備などをいち早く気付く事が出来る筈だ。それは駆け出しの初心者には頼めない、紅羽の様な経験のある者にしか頼めない事なのである。

そうでなくても彼女が持ってきてくれたモビルラウザーのパーツは彼らにとって天の恵みにも近かった。実を言うと基準を満たすモビルラウザー用のパーツが修理などで底を突いており、開発が微妙に滞っていた所に紅羽が現れたのである。

「本当にあの時は貴女が女神か何かに見えましたよ、ありがとうございます。」

「褒めても何も出ないわよ。」

頭を下げてくる榊原に素っ気無い返事を返す紅羽だが、その頬はほんのり赤く染まっている。真正面から礼を言われて照れているのだろう。

とその時、工房に一人の男性がやってきた。昼間戒達と話をした男性、新名である。

「どうですか、調子は？」

「ああ、新名さん。順調ですよ、明日には試運転できそうです。」

「そうですか、それは楽しみです。数年前の事件で最新型のライダー専用バイクの開発が滞りましたからね、コイツを開発して得られたデータは我々の乗るバイクにも反映される。頼みましたよ。」

「ええ、任せてください。」

新名の激励に榊原がそう返すと、彼は差し入れを置いてその場から去っていった。紅羽は彼に興味がないのか、すぐに視線をゲイルバイトに向ける。他の技術者達も同様だった。

この時、誰か一人でも・・・特に紅羽が新名の様子を注意深く探っていれば、この後に起きた被害は防げたかもしれない。防ぐ事は出来なくとも、被害を減らす事は出来ただろう。

静かに工房から出て行く新名が纏う雰囲気は、それまでの人の良さそうな物から一変、何処か禍々しさを感じさせる雰囲気を放っている。

そして……その顔には不気味な笑みが張り付いていた。

第40話 邂逅・蠢く狼の影（後書き）

という訳で第40話でした。

キバ編より直人と優紀が登場、青羽と直人が初対面です。今回は一瞬であった程度ですが、今後どのように二人が出会うのかお楽しみに。

ちなみに紅羽のレッドスパイダーが壊れたと言う描写がありますが、そちらに関する詳しい事は後々キバ編で明らかになります。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第41話 奪われた疾風

アンデッド封印協会ボード・ルーコス支部

翌日、青羽達は協会にやって来ていた。先日新名に協力する事を約束した青羽達は、とりあえず協会で情報を仕入れる事にしたのだ。

協会のサーチャーで調べた結果、先日現れたワーウルフからはアンデッドの反応がかなり微弱ながら感知されたと言う。つまり犠牲者たちは、元凶のアンデッドに半アンデッド化されたと言う事らしい。とはいえ能力的にはダークローチにも劣る為、戦う上でなら大した問題はない。

現在この街の協会ではこのワーウルフに関する調査が行われているが、結果分かったのはこの人間をアンデッドにさせる因子（ウィルスのような物）は発生源のアンデッドを封印すれば効果を失うらしいと言う事だけだった。厄介な事にワーウルフ達は封印できない。流石にアンデッドの様に不死身という訳ではない様だが、このままワーウルフが増え続ければいずれ手に負えなくなるのは目に見えている。

とりあえずこれ以上被害を増やす訳にはいけない、青羽達は手分けしてアンデッドを探していく事になった。

「あつ、ゴメンあたしちょっと工房に寄ってくわ。」

「？ どうしたんです、急に？」

「紅羽に差し入れ、持ってってあげようと思って。」

協会から出た時、青羽はそう口にする。いろいろな出来ない事に苦

労しているだろう姉妹に、励ましてもしようと思ったのだ。

ノーマ達も特にそれに理解を示し、青羽は紅羽の所に寄った後そのままアンデッド探索に向かうと言う事で話はまとまった。とそこに・

「やあ、皆さんお揃いで。」

「あ、新名さん。」

新名がやって来て、青羽達に声をかけてきた。それに気付いた戒が代表して軽く手を挙げる。

「こちらのお二人が、先日仰っていた大神さん達の仲間ですか？」

「ええ、こっちが桐沢 青羽でこっちがノーマ・イクスです。」

「どうも！」

「よろしく。」

戒が青羽とノーマを新名に紹介すると、二人は彼に頭を下げた。新名もそれに応える。

「お二人ともライダーとしてなかなかの実力者だとか。期待させてもらいますよ。」

「い、いやあ、そんな・・・」

「私は、自分の役目を果たすだけです。」

新名の言葉に青羽は照れながら、ノーマは至って淡々と答えた。対する新名は、薄い笑みを浮かべたままでいる。

「本当に・・・期待してますよ。」

（ん？）

激励の言葉を残してその場を去っていく新名。青羽達も各々の目的の為にその場を動くが、ただ一人ノーマだけはその場を離れつつも背中を向けている新名に冷たい視線を向けていた。

工房・試運転用サーキット

工房の近くには、基本的に試運転用のサーキットがある。新しく作ったバイクのテストの為でもあり、新たにバイクを購入する人が試し乗りをする為にも使われた。

そんなサーキットを、1台のバイクが走り抜けていた。先端から後ろに流れる様な鋭角的な形状、灰色の車体があつという間に走り抜ける様子は正にゲイル（疾風）である。

バイクはある程度全速力で走ると、スピードを緩めてピットに入る。そしてバイクを完全に止めると乗っていた人物・・・紅羽は、ヘルメットを取って近くのベンチに腰掛けた。それと同時に工房の技術者達がゲイルバイトに群がり、データのチェックや各部の整備を行い始める。

紅羽がベンチに座ってドリンクを飲んでしていると、榊原が近付いてきた。

「お疲れ様です。走らせた感じはどうでした？」

「まずまずね、特に不自由はしなかったし。」

「そうですね、それは良かった！ 次はいよいよモビルラウザーのテストです、お願いしますね。」

「りょーかい。」

彼の言葉に紅羽が『よっ』と立ち上がると、バイクに集まっていた技術者達が離れて行った。紅羽がバイクに跨りエンジンをかけると、力強いエグゾースト音が辺りに響き渡る。

しばらくゲイルバイトを走らせた頃、紅羽は腰に予め装着しておいたブレイバックルのハンドルを引いた。

「変身！」

《Turn up》

紅羽はCブレイドに変身すると、バイクに乗った状態で器用にオーブントレイを開いて『マッハ・ジャガー』のカードを取り出した。

「とりあえず、こいつで十分かな？」

《Mach》

Cブレイドがバイクに搭載されているカードリーダーにカードをラウズすると、電子音声で鳴りカードと同じ絵柄が投影されてバイクに吸収される。それと同時に先程計測した最大速度を大きく上回る速度をゲイルバイトは弾き出した。使ってみた感じは悪くない、レッドスペイダーを使用していた時とほとんど同じ感覚だったことに、Cブレイドは心の中で満足そうに頷く。

（モビルラウザーに関しても問題なし、と。これなら大丈夫かな・・
・）

Cブレイドが胸中でそう呟いていると、不意に技術者たちが何か騒いでいることに気付く。どうしたのかとそちらを見ていると、どうやら彼女の後ろの方に注目しているらしい。

（一体何が・・・っ！ あれはっ!?!）

不審に思ったCブレイドが肩越しに後ろを振り向くと、そこには自分以外にもう一人サーキットを走っている者がいた。牙を持つ刺々しい顔、鋭い爪を持った手、首元から後ろに棚引くマフラー・・・以前Cブレイドが出会ったものとは違うが、それは間違いなくウルフアンデッドだと分かる。

「アンデッド!?! どうして?」

Cブレイドが疑問に思ったのは何故アンデッドがここにいるかではない、アンデッドは基本こちらの都合など考えもせずに現れる。いつ現れてもおかしくはない。

では何が彼女を驚かせたのか。それはひどく単純なもので、アンデッドがバイクに跨っているということである。

黒く前後に牙の様に伸びた車体、赤い一つ目の様なライトに、カウルに付いているアンデッドのバックルに酷似したレリーフ。何から何まで異様と言える相手だった。

そのウルフアンデッドはCブレイドが乗っているバイクに並走すると、徐に彼女に声をかけてきた。

「いいバイクに乗っているな、貴様。」

「・・・だったら何?」

「そのバイク・・・俺が貰うッ!」

そう言うと同時に、ウルフアンデッドはCブレイドに向けて鋭い爪

を振るってきた。Cブレイドはそれを相手から遠ざかることで避けるが、アンデッドは執拗にCブレイドに攻撃を仕掛けてくる。

それに対してCブレイドもラウザーを引き抜いてウルファンデッドに攻撃を仕掛けるのだが……

「クソッ！　ちよろちよろとッ！？」

「ふっ、どうした？　俺はここだぞ！」

Cブレイドは何度となくアンデッドにラウザーを振るうのだが、その攻撃は悉くがかわされ防がれてしまう。

とはいえそれもある意味仕方がない。Cブレイドに限らず基本ライダー達はバイクを移動手段の一つとしてしか見ていない。もちろんそれ自体は悪いことではないどころか、寧ろそれが当然の扱いだろう。特別な事例を除いてバイクで攻撃しようとしたり考えたり、バイクに乗りながら戦おうとするものはまずいない。アンデッドは空を飛んだり素早く走ったりはしても、基本的に地面の上に立っているのだから戦うならライダーの方も必然的にバイクから降りて戦うことになる。

だがウルファンデッドは自らバイクに乗り、走りながら攻撃を仕掛けてくる。今までにない戦いを仕掛けてくる相手に、流石のCブレイドも押されてしまっていた。

「ふんっ！」

「ぐうっ?!　クッ、なんでこいつを狙うの？」

ウルファンデッドの攻撃を受けつつも、なんとか耐え切ったCブレイドはアンデッドにそう問いかける。彼女としてはアンデッドが態

々バイクを狙う意味が分からなかったのだ。

「簡単だ、そのバイクは俺の為にある。」

「はぁ？ あんたの為？」

「そうだ、俺ならそいつの性能を遺憾なく発揮できる。分かっただらさっさとそいつを寄せこせ！」

「誰があんたなんかによッ！？」

Cブレイドはそう言ってウルフアンデッドから距離をとる。このバイク、ゲイルバイトは彼女の前のバイク・レッドスペイダーのパーツを使って作られている。つまりはレッドスペイダーの生まれ変わりだ。そのバイクを勝手な理屈を振り回すようなアンデッドに渡す道理など欠片もない。

だがウルフアンデッドは彼女の事情などお構いなしにゲイルバイトを奪うつもりでいた。アンデッドは徐にバイクに右手を爪を突き刺すと、何かを流し込むように手に力を込める。するとバイクから緑色の不気味な波動が放たれた。

「うわっ？！ くっ、何これ？」

全く予想もしていなかった攻撃に、困惑するCブレイド。ウルフアンデッドはそれに構わず2度、3度と波動を放ち、Cブレイドの運転を狂わせていく。

「ぐっ！ くそ、うわっ？！」

Cブレイドは必死にハンドルを握って運転するが、奮闘虚しくバイクはサーキットの壁に激突してしまう。Cブレイドは必死にスピードを落としたが、それでも壁に激突した衝撃は堪えたのかしばしそ

の場で呻いていた。

だがウルフアンデッドがその隙を見逃す筈がない、素早く乗っていたバイクから降りるとあっという間にCブレイドに近付き彼女をバイクから引き摺り下ろした。

「あんた、くう・・・」

「こいつは貰っていくぞ。」

悔しげな声を挙げるCブレイドのそれだけ言うと、ウルフアンデッドは先程のっていたバイクに対して行ったようにモビルラウザーの辺りに爪を突き刺した。するとゲイルバイトから先程と同じ緑色の光が放たれ、徐々にその姿を変え始めた。

「ゲ、ゲイルバイト・・・ッ!？」

変異したゲイルバイトの姿は正に異形だった。先端から流れる様な鏃型のフォルムは歪み、さらに至る所から鋭い突起が生え見るからに凶悪そうなデザインに変わってしまう。

「あんた・・・よくもゲイルバイトを・・・」

激昂しつつウルフアンデッドに近づくCブレイド。と、その時・・・

「えーっと、確かここで紅羽が試運転やってるって聞いたんだけど・・・」

タイミングが良いのか悪いのか、紅羽への差し入れを持ってきた青羽がやってくる。彼女はサーキットに入るなり異様な雰囲気には訝しげな顔になり、次いでCブレイドがウルフアンデッドと対峙してい

るのを見て只事ではない事を察した。

「紅羽ッ！」

「あ、青羽ッ?!」

青羽が紅羽の名を呼び、Cブレイドがそれに反応する。それは致命的な隙を生み出し、ウルフアンデッドはすかさずゲイルバイトを走らせて一目散にその場から去っていった。

「しまっ?! 待てッ！」

Cブレイドは慌てて追いかけようとするが、バイクと足では速さに違いがあり過ぎる。Cブレイドは咄嗟にジャックフォームになろうとするが、アブゾーバーからJとQのカードを取り出した所でウルフアンデッドに完全に振り切られてしまった。

「あいつ・・・クソッ!?!」

ゲイルバイトを目の前で奪われ見す見す取り逃がしてしまった事に、Cブレイドは悔しげな声を挙げると壁に拳を打ち付けた。それで気が収まるというものでもなかったが、一先ず変身を解除するCブレイド。彼女が紅羽の姿に戻ると同時に、青羽が紅羽に近付いた。

「紅羽、大丈夫?!」

「青羽・・・あたしは大丈夫よ。でも、ゲイルバイトを上級アンデッドに取られたわ。」

声をかけてくる青羽に、力無くそう答える紅羽。一方の青羽は紅羽が出し抜かれたという事実、驚愕の表情を浮かべている。

青羽にとっては悔しい事だが、紅羽は強い。技術的にも精神的にも青羽を上回っていると言う事は、双子の姉妹である青羽が誰よりも理解している。その紅羽が上級とはいえ、アンデッドにしてやられたと言う事が信じられなかったのだ。

「まさか・・・紅羽がやられるなんて・・・」

「事実よ、悔しいけど・・・それにしてもなんであいつはゲイルバイトを？」

紅羽は顎に手を当てて考え込むが、一向に答えは見えてこない。そんな彼女を見て、青羽もジツとしている暇ではない事を悟る。

「とにかく、あたしはあいつ追いかけてみるわ！ 紅羽は待ってて。」

「・・・分かった。今回は任せるわ。」

紅羽は肩を落としながら青羽にそう言う。事実彼女は今バイクを持っている、工房が近くにあるのでそのバイクを貸して貰えば良いかもしれないが、扱いなれていないバイクで全力が出せるかと言えば微妙なところだった。そもそも彼女が使っていたレッドスパイダーは、彼女達の父・信司が特注してくれたオーダーメイド、通常のバイクとは性能が違う。

青羽が差し入れの品を置いてその場を去っていくのを見送った紅羽、その時榊原が彼女に近付いてきた。

「その、何と言うか・・・大丈夫ですか？」

「何とか・・・ね。」

「しかし、こいつは驚きましたよ。まさか数年前に奪われた筈のバイクが、今日の前にあるなんて。」

「えっ？」

榊原の言葉にキョトンとした顔になる紅羽。一方の榊原はそんな彼女を気にする事も無く言葉を続けた。

「私は直接関わっていませんでした。数年前にも最新型のバイクを開発してましてね。性能的に他のバイクを大きく上回る様な、そんなバイクを。ただ、そいつはあるアンデッドに奪われてしまい、結局最新型のバイクの開発は滞ってしまったと言う事らしいです。」

榊原の話によると、その時にバイクを奪われた際にご丁寧にも開発資料などがアンデッドによって消されてしまったらしく、代わりに開発が行われたゲイルバイトもほとんどゼロから開発を進めなくてはならなかったらしい。

「その数年前に奪われたバイクって……なんて名前なの？」

「確か……ブラックファング……そんな名前だったと思います。」

「ブラック……ファング……」

数年前に奪われたバイク、ブラックファング……紅羽はその名前を呟きながら目の前に置き去りにされたバイクを見つめていた。今ではウルファンデッドの所為で何処か攻撃的なフォルムになってしまっていたが、彼女にはブラックファングが悲しんでいるようにも、喜んでいるようにも見えていた。

今まで共に歩んできた乗り手に捨てられた事を悲しみ……

同時に奪われ呪縛から解き放たれた事を喜ぶ……

そんなブラックファンクを見ている内に、何を思ったのか紅羽はそれに手をかけ始めた。榊原達が驚く中、紅羽はブラックファンクに跨るとアクセルを回してエンジンをふかせる。そして何かに満足したのか小さく頷くと、そのままブラックファンクを走らせてしまった。

紅羽がブラックファンクで走りだした頃・・・

青羽は街のあちこちをバイクで走り回っていた。ゲイルバイトは流石に最新鋭と言うだけあって、青羽が乗っているブルースペイダーとは出せるスピードがケタ違いだった。最初は何とかその姿を捉える事が出来たが、向こうに気付かれるとあっという間に引き離されてしまう。

そうして見失ってしまったウルファンデッドとゲイルバイトを探して、青羽は街のあちこちを走り回っていたのだ。

とはいえ現状それらしき者は見つけられていないのが現状だったりする。

「くっそ、あいつ一体何処に・・・」

そう愚痴を呟く青羽だが、そんな事をしたって状況は変わらない。今はとにかく探索あるのみである。

とはいえ青羽もそこまで馬鹿ではない。相手の目的がゲイルバイトだったのであれば、すでに街の外に逃げている可能性もある。青羽は郊外の方に向けてバイクを走らせ、それでも見つからない様であれば一度協会に向かってサーチャーでそれらしき反応を確認するこ

とも考えていた。

数分後・郊外近く

駄目元で郊外の方に向けて足を運んだ青羽だが、ここで彼女は思わぬ人物に遭遇する。新名がボロボロになりながら、ゲイルバイトを転がして現れたのだ。

「ッ!？ 新名さん!」

彼の存在に気付いた青羽は、急いで彼に近付いた。彼は最初に見たとおりボロボロになりながらも、何とかゲイルバイトを引き摺りつつ青羽に目を向ける。

「ああ、青羽さん・・・良かった、貴女に会えて。」

「あたしの事は良いですから。それより大丈夫ですか?」

「大丈夫です。何とかゲイルバイトを奪い返す事が出来ました、ア
ンデッドには逃げられてしまいましたが・・・」

「新名さんが無事だっただけでも十分です。さ、こっちに・・・」

青羽がそう言って新名に手をかけようとする。彼女の手が新名にかかったその瞬間・・・

新名が彼女の手を自身の方に退いて青羽のバランスを崩させた。

「えっ!？ ちょっ!」

あまりにも突然過ぎる事態に対応できない青羽。青羽は咄嗟に新名の方に視線を向けるが、その瞬間彼の手を見て目を見開いた。

何しろ彼の手は、人間の物とは思えないほどに鋭い爪が生えた異形の物に変わっていたのだから……

「ふっ！」

「ッ!？」

そしてバランスを崩してまともに防御の体勢が取れない彼女に向けて、渾身の力を込めて青羽に爪を突き刺そうとする新名。この状態ではどう考えても防御は手遅れ、何がどうなっているのかイマイチ理解できないが、自身が今まさに絶体絶命の状態であると言う事は理解できる。

新名の爪が青羽に近付き、彼女の心臓を串刺しにしようとする。確実に目の前に迫る死に思わず青羽は目を瞑ってしまうが……

「ガッ?!」

突然青羽の後ろから飛んできた光の矢が、新名の行動を中止させた。

「えっ？」

「大丈夫ですか、青羽？」

「あっ、ノーマ!？」

またしても突然変化した事態に青羽は困惑していたが、背後から聞こえてきた聞き覚えのある声に笑みを浮かべながら背後を振り返る。果たしてそこには彼女が予想した通り、黒いボディースーツに赤い複眼を持った仮面ライダー、カリスが武器を構えて佇んでいた。

青羽の窮地を救ったカリスは、即座に彼女を守る様に新名の前に立

ち塞がる。そこでようやく青羽も事の異常さに警戒する事が出来た。

「新名さん、あんた一体・・・その手は？」

「簡単ですよ青羽、彼はアンデッド。それも上級アンデッドです。」

青羽の問いに答えたのは新名では無くカリス。その答えに青羽は驚きつつもやはりという顔をし、新名は悔しげに顔を歪めた。

「貴様、一体何時から気付いていた？」

「残念ですが、協会の前で別れる時には気付いてはいました。少々特殊な体質でしてね、アンデッドには敏感なんです。」

青羽達が新名と協会前で別れた時、新名は一瞬だがアンデッドの力を解放していた。勿論彼は協会のサーチャーに引つかからない程度にアンデッドの力を抑えてはいたが、距離が非常に近かったこともあってかノーマには彼がアンデッドである事がバレていたのだ。

「本当はあの後すぐにでも貴方を倒しに向かっても良かったのですが、そうも言っていられない状況になってしまったものでしてね。結果貴方に好き勝手させてしまったのは悔しいところです。」

「何、一体どうしたの？」

「昨日戒達が見たと言うワーウルフ、それが複数現れて暴れ出したんです。」

青羽と別れてすぐに新名の下へ向かおうとしていたノーマは、街のあちこちにアンデッドに似た気配を感知して驚いた。戒と弘貴と共に近場の反応に近付くと、そこには先日戒達が出会ったワーウルフ達がいたのだ。

ノーマとしてはすぐに新名の下に向かいたかったが、あれを放って

おくこともできない。ノーマはカリスに変身して、ワーウルフ達を倒しながら新名の下へと向かって来たのだ。

一方・・・

戒と弘貴、それに他のライダー達は先日現れた者と同じワーウルフを相手に戦っていた。しかし戦況は先日と打って変わってやや苦戦していた、明らかにワーウルフ達が強くなっていたのだ。

「兄貴、なんだかこいつら強くないですか?!」

「多分手を抜くか何かしてたんだろう、昨日のは僕らの目を眩ませる攪乱的な奴だったんだ。」

二人は話しながらもワーウルフと戦っていく。しかし先日よりも素早く動き回るワーウルフ達に、戒の変身するギャレンはともかく弘貴の変身するアクスはなかなか攻撃を当てられないでいた。

「姐さん達、大丈夫っスかね?」

「ま、彼女達の事だから大丈夫だとは思っけど・・・」

ギャレンは今この場にいない二人の身を案じながら、次のワーウルフに向けてその銃口を向けているのだった。

第41話 奪われた疾風（後書き）

という訳で第41話でした。

今回はウルファンデッドが大暴れ、紅羽があえなくゲイルバイトを奪われると言う結果になりました。試運転中に現れてバイクを奪うと言う行動に出ていただきました。ちなみにこの作品の中では、ウルファンデッドは既にブラックファンクを奪ってます。前回戒が少しだけ口にした話題の奴がそれです。

今回はさらに大暴れ、青羽だけでなく紅羽も頑張るかも！

それでは。

第42話 機獣咆哮・決めろ、姉妹のダブルライダーキック！（前書き）

どうも、黒服です。

今回はちょっとサブタイに凝って見ました。

第42話 機獣咆哮・決めろ、姉妹のダブルライダーキック！

郊外近く

青羽とカリスは、今だ新名と対峙していた。青羽は怒りの籠った目で新名を睨みつけ、カリスはただ静かに彼を見据えている。

「騙したのね、あたし達を・・・」

「ふん、人間は単純だ。同じ姿をして友好的な態度を取れば・・・コロッと騙される。はっはっはっはっ！」

怒りに燃える目を向ける青羽に、新名は嘲る様な笑い声を挙げた。

「あんたは、紅羽まで騙して、あいつのバイクを奪った・・・どうして？」

「簡単さ、前のバイク・・・ブラックファングの性能に満足できなくなっただ。あいつも悪くはなかったが、やっぱり新しく性能が良い物の方が欲しい・・・お前ら人間だって同じだろう。」

そこまで口にして新名はその姿を、ウルフアンデッドに変えた。青羽達も身構えるが、そんな二人の前に複数のワーウルフが立ち塞がった。

「くっ！ 何時の間に・・・」

「えっ？ ノーマ気付かなかったの？」

「こいつ等は元が人間であるせいか、反応が非常に薄いんです。おかげで昨日もその存在に気付かませんでした・・・」

二人が話している間に、ウルフアンデッドはゲイルバイトに跨って

しまう。

「お前らはそいつと遊んでろ！」

それだけ言って走り去っていくウルフアンデッド。青羽は悔しそうな顔をするも、行く手をワーウルフに塞がれている為身動きが取れずにいた。

だがここでカリスが動く、彼女は瞬く間にワーウルフ達を斬り伏せると青羽とブルースペイダーに道を作る。

「青羽、ここは私が何とかします。貴女はあのアンデッドを。」

「ノーマ・・・ありがとう！」

青羽がカリスに礼を言った時には、すでにカリスはワーウルフ達を相手に戦っていた。そんな彼女の後姿を見つつ、青羽はブルースペイダーに跨ってウルフアンデッドを追いかける。

「逃がさない、絶対に！」

意気込んでウルフアンデッドの後を追いかける青羽。そんな彼女の前に、ブラックファングに乗った紅羽が現れる。

「く、紅羽ッ!？」

「あんた一人に行かせないわよ。これはあたしの問題でもあるんだから・・・」

「紅羽・・・うん、行こうッ！」

青羽の言葉に頷く紅羽。そして二人は同時にウルフアンデッドに向けて走り出していった。

街中

現在ルークスの街は混乱状態になっていた。街のあちこちにワーウルフ達が現れ、所構わず暴れ回っているのである。

勿論街にいるライダー達とて黙ってはいない。ダガーなど一般のライダー達は勿論、協会のベレッタ達も必死になってワーウルフを駆逐していく。しかしダガーは熟練度が低いからかワーウルフに苦戦する者も多く、訓練を積んでいる筈のベレッタ達も統制が乱れた動きしか取れないでいた。それと言うのも、リーダーとして潜り込んでいた新名が本性を表して協会から忽然と姿を消してしまったので、指示を出す者が誰もいなくなってしまうからだ。

しかもワーウルフは厄介な事に封印する事が出来ない。行動不能にすることは可能だが、他の所で仲間を作り出しているのか次から次へと現れる。これが混乱にさらに拍車をかけていた。

そんな街中を、ゲイルバイトに跨ったウルフアンデッドが走り抜けていく。ライダーの中にはウルフアンデッドの存在に気付く者もいたが、皆ワーウルフの相手に手一杯でゲイルバイトに乗ったウルフアンデッドにまで手が回らない。

ウルフアンデッドは混乱状態にある街を優越感に浸りながら走り抜けていく。まんまと人間を出し抜けた、その満足感を感じながら・

その時後ろから追いかけてくるバイクのエンジン音が聞こえてくる。何かと思って後ろを振り返ると、そこにはブルースペイダーを走ら

せるブレイドと、ブラックファングを走らせるCブレイドの姿があった。

「見つけた、もう逃がさない！」

「どうかな、捕まえられるものなら捕まえてみろ！」

ウルファンデッドが二人を挑発してスピードを上げ、二人も負けじとアクセルを回す。だが二人がある程度近づくと、ゲイルバイトから緑色の波動が放たれコントロールを奪われてしまう。

「ちょっ!？ 何これ！」

「くう、こいつまたッ！」

ウルファンデッドの攻撃にブレイドは困惑し、Cブレイドは必死にハンドルを握る。だが結局は相手の攻撃に抗えず、あえなく近くの建物の壁に激突してしまった。

「痛つつ、何なのよアレ。あれじゃ近付けないじゃない・・・」

「これじゃ、また・・・」

痛みに呻きながら悔しそうな声を挙げる二人、そうしている間にもウルファンデッドはどんどん離れて行き、このままでは逃げられてしまう。

そこで、二人にとって聞き覚えのある声がかけられた。

「大丈夫ですか！」

「えっ? さ、榊原さん!？」

二人が声のした方を見ると、そこには赤いバイクに跨った榊原がい

た。ライダースーツにヘルメットを被っている。

「何してるんですかこんな所で、今結構危ない状況なんですよ！」

「いきなり走り出してしまった紅羽さんが心配で付いて来たんですが、どうやらかなり苦労しているようです。」

「ゴメン、やっぱりあいつ逃がしちゃうかも・・・」

折角苦労したバイクを奪われてしまい、責任を感じて沈んだ声を出すCブレイド。そんな彼女に対して、榊原は首を左右に振った。

「まだ諦めるのは早いですよ。あれを破る方法はさっき思い付きました。」

「「えっ?!」」

驚く二人を尻目に、榊原は『見ていてください』と言って走り出す。二人が慌てて付いていく中、榊原はあっという間にウルファンデッドに追いついてしまった。どうやら彼のバイクは大分チューンされているらしい。

「無茶よ、あんたもやられるわ！」

「榊原さん戻って!？」

二人は必死に榊原に警告するが、彼はお構いなしにウルファンデッドの真後ろに付いていく。ウルファンデッドも彼の存在に気付いたのか、再び緑色の波動で追い払おうとするのだが・・・

「ッ!?! 何っ!」

ゲイルバイトから放たれた波動は、榊原のバイクの前で見えない壁に防がれるかのように弾けてしまう。再度攻撃するが結果は同じ、

それどころか榊原はみるみるゲイルバイトと距離を詰めて来た。

その様子に驚愕し、流石にまずいと思ったのかウルフアンデッドは攻撃方法を変えた。モビルラウザーに爪を突き刺すと、今度は波動ではなく多量の蒸気のようなガスが噴き出し榊原の視界を覆い隠す。

「くっ！」

これには流石に耐えきれなかったのか、スピードを落としてウルフアンデッドと距離を取る榊原。そんな彼に追いついたブレイド達が並走しながら話しかけた。

「ちょっと、今のどういう事!？」

「スリップストリームです、高速で走るバイクなんかの後ろにはそのバイク自身が起こした風で空気の壁が出来るんです。見た所あの攻撃は直接的な攻撃以上に波動で起こした空気の流れで他のバイクのコントロールを奪うもの。スリップストリームを利用すれば、あの攻撃に耐えて距離を詰めることもできる筈です。」

スリップストリームはモータースポーツなどのスポーツ競技の用語としても用いられ、先頭に行く相手を追い抜く技術として使われる。元レーサーである榊原はその原理を知っていたし、彼自身現役の頃はそれを使って何度も他のレーサーを追い抜いて来た。彼はその頃の経験から、ウルフアンデッドに苦戦するブレイド達にこの事を教えるに來たのだ。

「お二人とも、ゲイルバイトを・・・頼みます！」

「・・・分かった。」

「任せて！」

思わぬところからもたらされた起死回生的手段、榊原の思いを受け取り二人は再びウルファンデッドの追跡を開始した。

すでに少々距離を離されてしまっていたが、二人は全速でウルファンデッドに向けてバイクを走らせる。メーターは既に振り切れ、これ以上無理をさせては再び支障があるかもしれない。

だが二人は走り続ける。奪われたゲイルバイトを取り戻す為に、榊原の見つけてくれた打開策を無駄にしない為に。

「くそっ、これでも喰らえ！」

「うっ、くう・・・」

「負ける・・・もんですか！」

二人の気持ちに呼応してか、ウルファンデッドとの距離は着々と縮まっていく。これ以上はやらせないと波動を出して二人を引き離そうとするウルファンデッド。波動に翻弄される二人だが、諦めずにゲイルバイトの真後ろに付こうとする。

幾度かの挑戦の後、遂に二人はゲイルバイトの真後ろに付いた。ウルファンデッドを先頭に、ブレイド・Cブレイドの順に並ぶ。

「よし、後ろに付いたわ！」

「まだ油断しないで、こいつにはもう一つあるのよ！」

スリップストリームの恩恵を受けられる真後ろに付いた事で喜ぶブレイドに、Cブレイドの叱責が飛ぶ。実際榊原の行動でウルファンデッドも真後ろに疲れたら波動攻撃が効果を発揮しない事に気付いている、とすれば次に相手が行う行動は・・・

「フンッ！」

煙幕による視界の封鎖である。案の定ブレイドの目の前は白い煙幕で視界を覆い隠されてしまう。

だがブレイドは決して諦めない。前がほとんど見えない状況であるにもかかわらず、しつこくウルファンデッドに喰らい付いていく。

そんなブレイドの目が、煙幕が一瞬切れた先に右に曲がるカーブを見た。この道は完全な一本道、そしてこのスピードを出していると言う事は、相手もカーブに沿って右に曲がるしかない。

「ッ！ 紅羽、右よ！」

ブレイドの叫びに、彼女の意図を察したCブレイドも小さく頷く。そして薄らと見えるゲイルバイトが右に曲がりだした瞬間、二人は一気にアクセルを回し同時にハンドルを切った。

元よりスリップストリームで加速力を得ていた二人のバイクである、カーブを曲がろうとしたゲイルバイトの内側に回る事であつという間に抜き去ることが出来た。

「ッ！？ 馬鹿なッ？！」

まさか抜かれるとは思っていなかったウルファンデッドが驚愕の声を上げる中、追い抜いた二人は道の先でバイクを止めると地面に降り立ちラウザーを構えた。

「行くわよ、青羽。」

「オッケー、紅羽。」

《Slash》

ラウザーを構えて頷き会った二人は、同時にラウザーに『スラッシュ・リザード』のカードをラウズする。カードの効果を受けて斬撃の威力が上がったラウザーを構える二人に向けて、ウルファンデッドが突っ込んでくる。このまま突き抜けるつもりなのであろう。

見る見る内に二人と距離を詰めて行くウルファンデッド。そして遂に目の前に来たと言う時・・・

「フッ！」

ウルファンデッドはバイクをその場でジャンプさせた。突き抜けると見せかけて飛び越えてやり過ぎすつものようだ。

だが、二人もそれをみすみす見逃す気はなかった。

「逃がすか！」

「イヤアアッ！」

ウルファンデッドに負けない驚異的な跳躍を見せる二人。そして目の前にウルファンデッドが見えた瞬間、二人はラウザーでウルファンデッドを切り裂いた。

「ぐわああああっ?!」

見事に攻撃を受けたウルファンデッドは、バランスを崩してそのまま落下。ゲイルバイトも派手な音を立てて落下する。

一方着地した二人は、一気に畳み掛けるべく攻撃を開始した。

お互い攻撃が干渉し合わない様に気を付けながら互い違いに攻撃していく、双子と言うだけあってそのコンビネーションは完璧だ。ウルフアンデッドもこの連続攻撃に、碌に反撃も出来ないでいた。

「ぐう、クソッ！　こんな筈では・・・」

怒りに震えるウルフアンデッド、二人はラウザーを構えながらアンデッドに近付いていく。

「これで終わりね・・・」

「ゲイルバイト、返して貰うわよ。」

「まだだ・・・まだ終わってはいない！」

価値を確信した二人の言葉に、ウルフアンデッドはなおも敗北を認めない。ブレイド達がウルフアンデッドにトドメを刺すべくラウザーを振り下ろすと、紙一重でかわしたウルフアンデッドは一目散にゲイルバイトに向かっていく。

またしてもバイクで逃げるつもりかとあとを追う二人だが、対するウルフアンデッドはバイクに跨ると何を思ったのか二人に向き直った。

「お前達に見せてやる、この俺の・・・本当の力を！」

訝しげに見る二人に対してウルフアンデッドはそう口にする、両手の爪をゲイルバイトに突き刺した。

「ぬおおおおおっ！！」

ウルファンデッドが体を震わせながら空に向かって雄叫びを上げる。二人がその様子を見てみると、驚愕すべき事が起こった。

「なっ!?!? そんな・・・」

「嘘・・・でしょう?」

二人が呆然としながら見つめる先、そこではゲイルバイトがさらに形を変えていた。

前輪近くからは鋭い爪を持った前足の様なパーツが生え、カウルの部分も徐々に伸びて行く。そしてカウルの左右に付いていたライトが目のように輝くと同時に、カウルの下半分が口の様に開いて雄叫びをあげた。その口には鋭い牙が生えている。

狼・・・正にその姿は、機械的な狼その物だ。

「さあ、覚悟しろ!」

ウルファンデッドがそう言うと同時に、ゲイルバイトが二人に向けて走り出す。迎え撃とうとする二人だが、パワーに差があり過ぎるのかあえなく吹き飛ばされてしまう。

「ガハッ?!」

「ぐっ、ちよっと待ってよ。こんなのあり?」

あまりと言えばあまりの事態に、思わずブレイドの口から文句が出る。だがそんな事をしている場合ではない、ウルファンデッドが操るゲイルバイトが再び二人に向けて突っ込んで来たのだ。

「うわああああっ?!」

「ぐふっ!? くっ・・・」

迎え撃つのは止めて何とか回避しようとするが、スピードも損なわれるどころかさらに上がっているゲイツバイトを避けるのは至難の技だった。

「紅羽、大丈夫!？」

「青羽・・・ゲイルバイトを破壊するわよ。」

何とか体勢を立て直しつつCブレイドを気遣うブレイドに、Cブレイドが驚くべきことを口にする。形は変わってしまったがゲイルバイトにはレッドスペイダーのパーツが使われている、そのゲイルバイトを破壊するなど・・・

「でも、あれには紅羽のツ!？」

「じゃあこのまま黙ってやられろって言うの!」

「それは・・・」

Cブレイドの言葉に口籠るブレイド。Cブレイドととれるなら他の手を取りたい、事実ジャックフォームを使えばウルフアンデッドのも倒す事も可能だろう。しかしこの状況でジャックフォームになっている余裕があるとは思えない、となれば残るはゲイルバイトを破壊してウルフアンデッドを引き摺りだすしかない。

「このままレッドスペイダーの一部を受け継いだゲイルバイトを好き勝手される位なら・・・それなら、あたしの手で壊してやった方がずっとマシよ!」

「紅羽・・・分かった。」

Cブレイドが下した苦渋の決断、ブレイドもそれを理解したのかも

はや何も言わない。今考えるべき事はただ一つ、ゲイルバイトを破壊する事だけ……

再び二人に向かって突撃してくるゲイルバイト、それに対してブレイドは『メタル・トリロバイト』のカードをラウズして立ち塞がった。

《Metal》

「さあ、来い！」

全身を硬質化させ防御力を跳ね上げたブレイドに、ゲイルバイトは容赦なくその牙を突き立てた。

「ぐうつ!? く、くう……」

左肩から噛みついて来たゲイルバイト、ブレイドは相手のパワーに呻き声を上げるが今がチャンスである。ゲイルバイトは抑えつけられ、僅かな時間であるが大きな隙が出来た。

「今よっ！ 紅羽ッ!!」

「何っ?!」

「おおおおっ！」

《Slash Fire》

《Burning Slash》

ブレイドが合図を送ると同時に、Cブレイドが駆け抜ける。ウルフアンデッドは急いで離れようとするが、ブレイドが抑えている為容易には行かない。その隙にCブレイドが必殺技の『バーニング・スラッシュ』を発動して、ゲイルバイトを切り裂いた。

「はああああっ！」

切り裂かれたゲイルバイトは中央から真っ二つになり、Cブレイドの攻撃の余波で後ろに吹き飛ばされる。ウルフアンデッドも同様に飛ばされ、アンデッドが地面にたたきつけられると同時にゲイルバイトが爆発四散した。

爆発し燃えるゲイルバイトの残骸、それをCブレイドは何とも言えない気持ちで見つめていた。今まで共に歩んできたバイク、決してバイク好きという訳でもなかったが、それでも大事にしてきたバイクを自分の手で破壊してしまった。

「さよなら・・・レッドスペイダー。」

Cブレイドは静かにゲイルバイトに・・・レッドスペイダーに別れを告げる。それと同時に、地面に倒れていたウルフアンデッドがようやく立ち上がった。

「馬鹿な、俺の・・・俺のゲイルバイトがッ!?　こんな、貴様等・・・ッ!!」

憎しみの籠った声を上げるウルフアンデッドに、トドメを刺すべく二人は身構える。

「これで、本当に終わりね。新名・・・いや、ウルフアンデッド!」
「決めるわよ、青羽。」

二人はラウザーのオープントレイからそれぞれ2枚のカードを取り出すと、次々にラウズしていく。

《Kick Thunder》

《Kick Fire》

《Lightning Blast》

《Burning Blast》

ブレイドは『キック・ローカスト』と『サンダー・ディアー』を、Cブレイドは『キック・ローカスト』と『ファイア・フライ』をラウズする。電子音声が鳴り響くと同時に二人は腰を落とし、投影されていたカードの絵柄が吸収されると同時に高く跳躍した。

「デヤアアアッ！」

「ハアアアアッ！」

ブレイドの必殺技『ライトニング・ブラスト』と、Cブレイドの必殺技『バーニング・ブラスト』がウルファンデッドに炸裂する。

「ぐああああああっ?!」

二人の必殺技を受け、大きく蹴り飛ばされるウルファンデッド。二人が着地すると同時にアンデッドは地面に叩き付けられ、その場で大きな爆発を起こした。二人は倒れたウルファンデッドに近付いていく。

「ハートスート・・・Jか。」

二人が近付くと、アンデッドのバックルが開いているのが見える。そこにはハートのマークとJの文字が。

「紅羽が・・・封印する?」

「あんたにあげるわ、あたしスピードスートで同じの持ってるから。」

」

ブレイドがCブレイドに気遣う様な声をかけると、Cブレイドはソップを向いた。ブレイドも使用するのはいスピードスートなので、どちらが封印しても使う事は出来ないのだが。

「分かった、封印するね。」

ブレイドはCブレイドの言葉に特に反論する事も無く、コモンブランクのカードをウルファンデッドの上に落とした。眩い光がアンデッドを包みこみ、光が収まるとアンデッドを封印したカードがブレイドの手元に戻って来た。

アンデッドを封印した事で変身を解除した二人、だが二人の間には何処か重苦しい空気が流れていた。

アンデッドは倒せたが、紅羽は結局バイクを失ってしまった。青羽は彼女に何か言葉をかけたかったが何も浮かんでこない。と、その時・・・

「あれ？　ブラックファンクが・・・」
「えっ？」

ブラックファンクが光を放ち始め、それに気付いた青羽がブラックファンクを指差す。紅羽が吊られてその光景を見つめていると、ブラックファンクに変化が起きた。車体のあちこちに突き出ていた突起が短くなり、先程よりもシンプルなブラックファンク本来の姿に戻っていく。バイクを変異させていたウルファンデッドが封印された事で、その呪縛から解き放たれたのだろう。

紅羽は元に戻ったブラックファングをしばらく見つめると、歩み寄ってそれに跨った。

「榊原達の所に持っていくわ。元々は協会の方で開発されてた奴だし。」

「紅羽・・・」

「・・・じゃ、また今度ね。」

「・・・うん。」

言葉少なに会話を済ませて、その場から走り去っていく紅羽。青羽はしばしその後ろ姿を見つめながら、自身も仲間達の所に向かうべくブルースペイダーに跨ってその場を去っていった。

第42話 機獣咆哮・決めろ、姉妹のダブルライダーキック！（後書き）

という訳で第42話でした。

今回はブレイド・Cブレイドがウルフアンデッドとバイクでレース。途中苦戦しましたが、榊原の活躍で攻略しました。原作だとサーキットにいたレーサーが何を思ったのかいきなり行動しましたが、この話では事情を良く知った榊原がスリップストリームを見せました。バイクで負けたら今度はゲイルバイトを機獣にして反撃です。イメージ的にはオーズのトライドベンダーみたいな感じをイメージします。

トドメは二人のブレイドによるダブルライダーキック、こういう息を合わせての同時攻撃ってなんか良いですね（笑）。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第43話 戦い終わって(前書き)

どうも、黒服です。

お待たせしました、ブレイド編の更新です！
直後の話、新キャラも登場しますよ。

今回は前回の騒動の

第43話 戦い終わって

スーモスク・桐沢家

「あら、ねえ見てこれ。」

その日、青羽の実家にて彼女の母・明日香の少し驚いた様な声が室内に響いた。その声に青羽の父・信司が不思議そうな顔でやっている。

「どうしたんだい？ 朝からそんな声を出して・・・」

「ねえあなた、これ。青羽からの手紙よ。」

そう言って明日香は信司に手紙を見せる。差出人の所には確かに青羽の名が書かれており、中身を見るとそれなりに綺麗な字で書かれていた。

「元気にやってるみたいだね、あの子も。」

「ええ、仲のいいお友達も出来たみたいだし。」

信司が手紙の内容を読んでいると、明日香が言いながら彼に1枚の写真を見せる。そこには焚き火を囲んだ青羽達の姿が写されており、青羽以外の者は少々驚いた様な顔をしている。どうやら彼女がこの手紙の為に勝手に撮影したらしい。写真に写っている人物の中で笑顔なのは青羽だけだ。

信司は青羽、弘貴と順番に写真に写っている人物を見ていくが、戒を見ると首を傾げた。

「ん？ この子・・・」

「どうしたの？」

「この男の子、誰かに似てる気がするんだけど・・・」

戒の姿に誰かの面影を感じた信司だが、しばらく考えても結局答えが出ることはなかった。

ルーコス

青羽が紅羽と共にウルフアンデッドを封印した次の日、街は協会の手スタッフを中心とした復興作業が行われていた。

ウルフアンデッドは行動を起こす以前から地味に活動が続けていたらしく、相当数のワーウルフを街中で暴れさせ、その結果街のあちこちはかなりの被害を被ってしまう。

とはいえそれもある意味日常茶飯事、被った被害は決して小さくはないが街が壊滅するよりは遥かにマシだった。もちろん今回の事で親しい者を失ってしまい、悲しみにくれる者もいるだろうが、それでも人は明日に向かって歩みを進めていく。

希望がある限り前に進む事が出来る・・・それは人間がこの世界に生れ出てからずっと持ち続けて来た力なのだから・・・

そんな中、青羽達は街の復興に力を貸していた。青羽達だけではなく、他の街の外から来たライダー達もだ。街が被った被害は基本的に被害だけなのだが、それでも戦闘の余波で建物が崩れた個所も少なくはない。そこで活躍するのもライダーシステムである。単純な話ライダーに変身すればダガーとは言えかなりのパワーを発揮でき

る、それを使えば重機を持ちこめない様な所であっても瓦礫の撤去などを行うことは容易い事だ。物資の補給もライダーに変身すれば生身の倍の量を一気に運べる。

そんな訳で、青羽達も街の復興に協力しているのだった。

「よっと！ とりあえずこんなもんな。」

青羽は現在ブレイドに変身して、街のあちこちに医薬品などの物資を運んでいる最中だ。ノーマ達も今は別々に行動している。

「つつても弘貴は間違いなく瓦礫退かすの手伝わされてるんだろうけどねえ。」

休憩がてら変身を解除して近くのベンチに腰掛けた青羽は、ふと他の仲間達の事を考えてそのような事を呟く。彼が変身するアクスは典型的なパワータイプのライダーである。スピードを犠牲にする代わりにパワーと防御に優れており、ちよつとやそつとの攻撃ではビクともしない。仮に瓦礫を退かす最中に建物の一部が崩れてきても、アクスなら案外自力で何とかすることも可能だろう。

と、そんな時、青羽は何者かに声をかけられた。

「お疲れ様です。これ、どうぞ。」

「へっ？ あ、ども・・・」

青羽が声のした方を見ると、そこには彼女と同年代だろう黒髪で前の髪を白いヘアピンでとめた少女が立っていた。その手にはペットボトルが握られており、少女は笑顔で青羽にそれを差し出してくる。青羽は突然現れた少女に一瞬戸惑いながらも、素直に差し出された

ペットボトルを受け取って中身を口に含んでいく。中身は良く冷えたスポーツドリンクであり、体力を使う作業をこなした後では非常に嬉しいモノだった。

「……はあ、あゝ生き返った！　ありがとう、なんか……貫っちゃって。」

「いいえ、気にしないでください。隣り……いいですか？」

やや控えめに訊ねてくる少女に、青羽は笑顔で頷いて自身の隣りに促した。

「……凄いですね、人間って。」
「ん？」

少女は青羽の隣りに腰かけると、しばらく周りを見渡すような仕草をした後そのような事を口にする。それに青羽が聞き返すと、少女は笑顔でそのように思った理由を話した。

「だって、これだけの目に遭っても諦めずに前に進んでるじゃないですか。どんなに酷い目に遭っても、立ち止まらずに進み続ける……それって凄い事じゃないですか。」

「んゝゝ、まあね。心を力に変える事が出来るって言うのは、確かに凄いことかもしれないわね。」

少女の言葉に、青羽は頷きながら辺りを見渡す。そこには確かに希望に満ちた目で復興作業に当たっている人達がいた。

「……羨ましいな……」

「えっ？　何？」

「あっ！？　いえ、何でも無いんです！」

青羽が辺りを見渡していると、少女がそんな事をボソリと呟く。しかし青羽には聞き取れなかったらしく、咄嗟に少女に聞き返してしまふ。だが少女は慌てて手を顔の前で振って誤魔化した。

青羽はしばし少女の様子を伺っていたが、特に気にするほどでもないとその場を立ち上がると再び復興作業を手伝う為に歩き出していく。少女は少しホッとした顔になりながら青羽の後姿を見送っていたが、彼女は少し歩くと不意に振りかえって来た。

「そうだ、忘れるところだったわ。」

「？」

突然何かを思い出したかのような青羽の様子に少女が首を傾げていると、彼女は笑顔で自身の名前を口にしていく。

「あたし青羽、桐沢 青羽って言うの。あなたは？」

「あ・・・私、白奈です。白井^{うすい} 白奈^{しろな}って言います。」

「ありがとう、白奈！ それじゃあ！」

青羽は少女・・・白奈に向かって手を振ると、踵を返して再び前に向かって歩いていく。白奈はそんな青羽の後姿が見えなくなるまで、その場で手を振っているのだった。

夜

夜になると、青羽達は拠点とした宿に集まって来ていた。青羽達や他のライダー達の協力もあってか復興はスムーズに進み、後は協会や国の支援で復興可能な段階になったらしい。よって明日には青羽

達も再び旅に出る事が出来る事になった。

「いや、今日はいつもと違った感じに疲れたわねえ。」

「皆さんお疲れ様です。」

青羽は肩を揉みながらそう言って、ノーマは全員を労う様な言葉を放つ。

「そう言う割にはノーマはいつも通りだね、弘貴とは大違いだ・・・」

そう言って戒はベッドの方に目を向ける。そこでは既に横になった弘貴が、若干放心したように横たわっていた。

「・・・大丈夫なの？ あれ・・・」

「どうも今日1日ずっと瓦礫の撤去やら思い物資の運搬やらを手伝ってたらしいね。後先考えずに手伝った結果があれだよ。」

戒の言う通り、弘貴はこの日ひたすら家屋の修理などに奔走していた。自身の変身するライダーが完全なパワータイプだと言う事で、積極的にそういった作業に手を貸していたらしい。

ただし後先考えずに全力で作業に臨んだため、文字通り精根尽き果てるまで働き続けたとか。

今はもう呼び掛けてもほとんど反応せず、半ば廃人と化している。次第に何やらブツブツと呟き始め、終いには居もしない家族を呼び始めた。

「あう~~~~、と~~~~ちゃん・・・か~~~~ちゃん・・・」

「だ、大丈夫なのあれ？ マジで大丈夫？」

「……あんまり大丈夫じゃない……のかも……」

弘貴の様子に青羽は後頭部にでっかい汗をかき、戒もかなりマズイ顔をしている。だがノーマだけは特に不安そうな顔をすることも無く、極めて冷静に弘貴の様子を見て口を開いた。

「特に問題はないでしょう。あれは単に疲れて少し混乱しているだけでしょうし、明日にでもなればまたいつも通りの彼に戻っている筈です。」

「ほ、ホントに？」

「そもそも、ライダーに変身している人間が戦闘以外でどうにかなるなんて話を聞いた事がありますか？ 手伝わせていた者たちも弘貴が子供と言うことを考慮して適度に休みは挟んでいたでしょうし、そこまで心配する必要はありません。」

そう言ってノーマは自分も寝るべくベッドに向かって行く。残された青羽と戒はしばらくノーマと弘貴を交互に見ていたのだが、今こうしていてもどうにかなる訳でもないと考えて、大人しく二人の明日に備えてベッドに入るのだった。

翌朝

次の日の朝、弘貴はノーマが予想した通り朝になったらいつも通りになっていた。日課である朝の鍛錬から戻って来た青羽は、起きていつも通りにしている弘貴の様子に若干面食らったモノである。

その後は朝食を取る為に全員で食堂に赴く。先日疲れて何も口にしていないでそのまま眠ってしまった弘貴などは、体が栄養を欲している

からか早く行こうと全員を急かした。

「いや、昨日は本当に疲れたツスね。」

そう言いながら弘貴は運ばれてきた料理を次々に口に運んでいく。年相応に育ち盛り食べ盛り、朝からリザード・パイなどと言う重い物を平気で口に放り込んでいくあたりもう本当に大丈夫なのだろう。とはいえ流石に朝っぱらからここまで食べる彼に若干呆れもするのだが。

「あっ！ そうだ忘れるところだったわ。」

ある程度食べ終わった所で、青羽が何かを思い出したようにそう言うのと、カードケースを取り出して中から先日封印したハートのJ『フュージョン・ウルフ』を取り出してノーマに差し出した。

「これこの間の、ウルフアンデッドを封印した奴。あたしスピードスートで基本揃えてるから、このカードはノーマにあげるわ。ノーマってハートスートと相性良かったんでしょ？」

そう言う青羽とノーマの二人の間に思い出されるのは、もう1ヶ月以上前の出来事。ノーマが青羽と仲間として行動する時に彼女に言ったセリフである。

あんな他愛もない会話の内容をよく覚えているモノだ、とノーマは内心で笑みを浮かべつつ青羽からカードを受け取った。

「そうですね、ありがたく頂きます。」

「いいって別に。あたしが持ってもあんまり使い道ないんだし。」

そう言って青羽が軽く手を振っていると、今度は戒が何かを思い出したかのように弘貴に声をかける。

「そう言えば弘貴、君どれぐらいカード持ってるんだい？」

「んえ？ えーっと、俺が今持ってるのは・・・」

弘貴は戒の問い掛けにしばし考える仕草を見ると、カードケースから自分のラウズカードを取り出していく。その内容は、

スペードのA…『チェンジ・ライノセラス』

スペードの2…『スラッシュ・リザード』

スペードの3…『ナツクル・コング』

スペードの6…『シャイン・ジュエル』

と言ったモノであった。その中でも青羽は、スペードの6『シャイン・ジュエル』に注目する。

「あれ？ あんた自然現象系なんて持ってたの？」

「はい、持っていましたよ。」

「こう言っただけですけど、よく封印できましたね。カテゴリ6は一筋縄ではいかない場合が多いんですよ。」

ノーマの言う通りカテゴリ6、通称自然現象系と呼ばれるカードに封印されているアンデッド達は、その特性もあってか封印が容易ではないのである。青羽自身、スペードの6『サンダー・ディアー』を封印する際にはディアーアンデッドの雷攻撃に少々苦戦したモノだ。にもかかわらずダークローチ相手に逃げ回っていた弘貴が封印出来ていると言うのは、青羽やノーマにとって少々意外な事だったのである。

「ダークローチ相手に逃げ回ってたくせに、よくカテゴリー6を封印出来たわねえ。」

「あ、姐さん・・・そんな言い方酷いッス。」

「へっ!？」 ああごめんごめん、別に馬鹿にした訳じゃなかったんだけど。ただ何かちょっとギャップがあるっていうかなんて言うか・・・」

青羽はそう言うが目がやや泳いでいる。少なからず弘貴に対して頼りなさを覚えていたらしい。

とはいえそれも無理からぬことか、青羽達と弘貴の最初の出会いは彼がダークローチの群れから逃げ回っているところから始まった。そこを考えるとある意味仕方がないのかもしれない。

しかし青羽も弘貴の事を馬鹿にしている訳ではない。今回のアンデッド封印もそうだが、彼はサイズに痛めつけられて罅り物にされていた青羽を身を呈して助けている。少々向こう見ずな危うさや経験不足からくる判断の甘さなどはあるだろうが、今後青羽達と行動していけば間違い無く伸びるであろう。

「俺だって、ライダーになって序盤の内は結構頑張ってたんスよ! 流石にスピードの2はライダーになってすぐの時に協会で買いましたけど、6の方は自力でやったっスよ。」

そう言って青羽に抗議する彼の目に嘘は見えない。と言う事は本当に彼は一人でカテゴリー6を封印したと言うことだろう。だがそうになるとある疑問が青羽達の心に生まれてくる。

「では何故、貴方はダークローチ如きに後れをとったのですか? 一人でカテゴリー6を封印するだけの力があるのなら、ダークロー

ちぐらい容易いモノの筈ですが？」

「いや、なんて言うか・・・続けてる内に体が上手く動かなくなっ
ていったって言うか。」

弘貴の言葉に首を傾げる青羽達。彼女達を知る中で、ライダーを続
けて体に異常を来すなどと言う話は聞いた事がない。強いて言うな
ら恐怖心による変身時の身体能力の低下だが、彼がそのような事態
に陥っていたとは考えにくいだろう。となると一体何なのか・・・

（ん？　もしかして・・・）

そこで青羽は、これまで彼と行動を共にしてきた時の事を思い返す。
そしてある事に気が付いた。

「ねえ弘貴、ちょっと訊きたいんだけど。」

「はい、何スか？」

「あんたさぁ・・・一番最後にまともにご飯食べたのって何
時？　あたし達と会う前に。」

青羽が訊ねたそれは、何とも奇妙な問い掛けだった。そんな彼女の
言葉に、思わずノーマと戒も首を傾げる。

対する弘貴はと言うと、しばし考え込んだ後・・・

「うーんと・・・ああ！　確か半年くらい前だった気がするッ
ス。」

と答えた。青羽はその答えに額に手を当てて俯くと、さらに問いか
ける。

「・・・その間、あんた食事どうしてたの？」

「え？ えゝゝゝ・・・コンビニで買ったおにぎりとか、場合によっちゃ昼飯とぼしたり・・・」

「……何で？」

青羽は弘貴の答えに頭痛を耐える様に頭を押さえると、彼が赤貧生活を送っていた理由を訊ねた。すると弘貴は・・・

「そりゃ勿論家に仕送りしてるからっスよ！ 俺ん家兄妹も結構いるから、ライダーになつてアンデッドを封印していらぬ奴を売っぱらったりして金作つてたもんスから。」

「で、それに手に入れた分を注ぎ込んだから手元にはほとんどお金が残らなかつた・・・ってこと？」

「そうッス。」

青羽の確認するかの言葉に、弘貴は特に何を思うでもなく頷いた。すると青羽は大きく溜息を吐いたかと思うと、祈る様に握った右手に左手を乗せ・・・

「こんの・・・馬鹿あ！？」

骨を鳴らして拳骨を弘貴の脳天に叩き込んだ。そして弘貴が痛みに悶える隙もなく彼女は彼の耳を引っ張っていく。

「イテッ、イテテッ！？ 何スカ姐さん・・・」

「いいからあんたはこっちに来る！？ ちよつと説教してあげるわ！！！」

もがく弘貴を引っ張ってそのまま食堂から出ていく青羽。ノーマや戒は勿論食堂に居た全員がそんな青羽の様子を見ていたのだが、幸

か不幸か青羽がその視線に気付くことはなかった。

第43話 戦い終わって（後書き）

と言う訳で第43話でした。

今回登場した新キャラ白奈、彼女はこの物語でかなり重要なキーパーソンになります。彼女にはある秘密があるのですが……

弘貴はコンディション万全で且つやれば出来る子なんです。ただ経験不足と性格ゆえに、それが遺憾なく発揮される事が少ないのがネックと言う話で（汗）。

今朝のオーズで劇場版でも登場したバースが登場！ したんですけども……お前マジで誰じゃあッ！？ こんな唐突に新キャラ登場?! てつきり後藤さんになるモノと思っていたバースを引っ提げての登場とは、一体彼が何者なのか非常に気になる所。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第44話 サイズは何処に（前書き）

どうも、黒服です。

今回の更新では青羽達の出番は若干少なめ。その代わり、サイズと利香の部分が多めとなります。

第44話 サイズは何処に

街道

あれから数分後、青羽にみっちり説教を受けた弘貴が精神的にへろへろになりながら戻ってきた後青羽達はルーコスを後にした。

ちなみに説教の内容は、主に『もつと自分にも気を配れ』などだったそう。手に入れた資金のほとんどを、家族の為とはいえ容易く手放してしまったのだからそのような言われても仕方がない。もちろん青羽も彼の家族を大事にしようとする姿勢には好感を受けるが、流石に自身が旅をする上で必要になる分までを削って仕送りをしようなどとは思えなかった。何よりもまずは自分の体が一番である。

そんな事があるながらも、青羽達は次の街『タジン』に向かっていった。

（サイズ・・・ここ最近会って無いけど、今何処で何してるんだろう？）

青羽はバイクを走らせながら、サイズについて考える。これまで過去3度あのライダーと対峙してきたが、一つ言えるのはあのライダーは危険だと言う事だ。

今は特にサイズが関連していそうな事件も何も起きてはいないが、これからどうなるか分からない。特に青羽は間近でサイズに変身している利香・・・・・・を操っているカテゴリーAの凶暴性をその身を持って味わった。単に暴れ回るのではなく、青羽をいたぶって楽しんでいたのだ。

「ッ!？」

青羽はその時の事を思い出して思わず身震いする。あの時は弘貴が体を張ってサイズに突撃し、寸での所でノーマが間に合ってくれたから何とかなかった。だがもしノーマが間に合っていなかったら・・・

「青羽？」

そんな事を考えていると、出し抜けにノーマが声をかけてくる。青羽の様子がおかしかった事を察し、気になって声をかけたのだろう。

「な、何、ノーマ？」

「いえ、何処か様子がおかしかったので・・・」

「そう？ 別にどうってことないけど？」

そう言う青羽の顔をしばし見ていたノーマだが、すぐに納得した様な顔で運転に集中する。いかに整備された街道とは言え、気を散らせて運転しては思わぬ事故に繋がりがかねない。そう考えてノーマは青羽から視線をそらした。

だから気付けなかった・・・青羽の手元が若干震えていた事に。

とある森の中

太陽の光が薄らとしか届かない森の中、そこに4人の男女が居た。よくよく見ると、彼らの持ち物からラウズカードやバックルが覗いている。恐らくこの4人は仮面ライダーで、彼らは4人でパーティ

ーを組んでいるのであろう。

その内の一人が、バトル計を見ながら口を開く。

「いやー、さっきはなかなか大漁だったな！ 結構な数のダークローチが出て来たしよ、なかなか稼がせてもらったぜ。」

「あたしはどっちかって言うところ封印出来るアンデッドの方が良かったね。必要な奴にしる必要ない奴にしる、封印出来れば何かしらの役に立つ。」

「俺も同感だな。金を稼ぐのもいいが、ライダーたる者やはり戦いをより有利に進める為に使えるラウズカードは増やすべきだ。」

「まあまあ、資金が増えるのはいいことじゃん。」

彼らは口々にそんな話を話し合っていく。どうやら会話の内容から察するにそこそこの実力を持ったライダー達らしい。

そんな彼らに、一人の人物が近付いていく。

「あの・・・」

「ん？」

突然聞こえてきた声・・・少女の声に一人が気付いてそちらを見ると、そこには緑色の髪を持った少女が居た。少女の存在に気付いた男は、首を傾げながら少女に声をかける。

「えっと、俺達に何か用・・・かな？」

彼が声をかけると、少女は俯きがちに答えた。

「あの、私、仮面ライダーを探してるんです。」

「は？ ライダーを探してる？」
「それってどういう事？」

少女の言葉に男が訝しげな顔をしていると、仲間の女がそのように訊ねる。

「実は、ある理由から強いライダーを探していて……あなた達は、強いんですか？」

少女がそう訊ねると、最初に少女に気付いたのとは別の男がそれに答えた。

「当ったり前だろ！ 自慢じゃないが、俺達もそれなりに強いって自信はあるぜ。」

「威張るなよ、見つともない。」

「へえ……そうなんですか。」

一人の男が胸を張りながら答えるのを、別の男が軽く宥める。少女はそれに満足そうな声を出すと……

「じゃあその力……私に見せてください。」

《Open up》

「「「ッ!?!?」「」「」」

何時の間に装着していたのか腰のバックルを開いた。バックルから出たのは禍々しい黒いオリハルコンエレメント、そしてゲートが少女を通過すると、そこには黒紫色の仮面ライダーサイズが立っていた。

男達はその光景に驚いて呆気にとられてしまう。

「ちよっ?! あんた何をッ!?!」

「聞こえなかった? あなた達の力を見せて欲しいって言ったのよ!」

サイズはそう言って一人の男に向けてサイズラウザーを振るう。男はそれをギリギリで回避すると、バックルとカードを取り出して腰に装着する。他の者も自分の分のバックルを腰に装着して変身の準備をした。

「くそっ、一体何だってんだ!?!」

「とにかく今はやるぞ! このまま黙ってやられてたまるか!?!」

「「「変身!」」」

《《《Open up》》》

彼らは急いでバックルを開くと、全員が仮面ライダーダガーに変身する。そして四方からサイズを取り囲んで、何時でも飛びかけられる体制を取った。

「ふふ・・・」

サイズはその様子を満足そうに眺めていた。数的には圧倒的に不利であるにもかかわらず。

「あんた、一体何のつもりだい? 何だってあたし達に喧嘩売る訳?」

「だ・か・ら、あなた達の力を私に見せて、私を満足させてほしいの、よッ!」

女の問い掛けに答えながら、サイズはラウザーを下から振り上げた。

女のダガーがそれをギリギリ回避すると、別のダガーがサイズに斬りかかっていく。

「馬鹿にすんな!？」

「おっと!」

サイズはダガーが振り下ろしてくる刃を容易くラウザーの柄で受け止めると、軸をずらして受け流しながら相手の首に刃を振るう。だが斬撃が相手に襲いかかる直前、別のダガーが攻撃して来た為咄嗟に攻撃を中止してその場から飛び退いた。

「ふうん、チームワークは悪くないみたいね。言うだけの事はあるわ。」

「こいつ、舐めやがって!？」

その後もサイズと4人のダガー達との攻防は続いたが、彼らは一向にサイズに対して一太刀も浴びせる事が出来ないうでいた。

そして何時しか、状況はサイズが彼ら4人を圧倒する状況に変化する。

「まさか・・・こんな。」

「あたし達が、圧されてる!？」

「うーん、この程度かぁ。もういいや。」

驚愕の表情を浮かべる4人を相手に、サイズは肩を落とすと一瞬で近付いていき徐に一人のダガーに向けてラウザーを振り下ろした。

「えっ?」

振り下ろされたダガーは最初特に何も異常がない事に、何処か拍子
抜けした様な声を上げた。周りのダガー達も同様である。だが・・・

突然彼の右肩から左腰に駆けて一筋の線が入ったかと思うと、そこ
から彼の体がずれていき袈裟掛けに切り離されてしまった。

「なッ?!」

「こ、このおっ!?!」

仲間が殺された事に驚愕するダガー達。その内の一人が怒りに身を
任せてラウザーを振り下ろすが、それはサイズに当たることなく空
を斬った。

「ふん。」

そして大きく隙が出来たダガーの首に、サイズがラウザーを振るう
と蹴り上げられたサッカーボールの様にダガーの頭が飛んでいった。
後に残された体からは切断面から噴水の様に鮮血が吹き出し、サイ
ズはおろか近くにいた残りのダガー二人の身も赤く染め上げる。

「ひっ!?! あ、ああ・・・」

「う、うわあああああつ?!」

残された二人のダガーの内、女が変身している方はその場で立ち竦
み、もう一人は恐怖を感じてその場から逃げだした。

「何処に行くの?」

《Wave Dark》

《Darkness Impact》

サイズは逃げるダガーに対して、2枚コンボの『ダークネス・インパクト』を発動。闇の波動が逃げるダガーを後ろから打ち据え、木に叩きつけられて動けなくなったダガーは近付いてきたサイズに抵抗する間もなく首を刈り取られてしまった。

「さて……と。」

「ひいっ!？」

瞬間に3人のダガーを始末したサイズは、残る一人に目を向ける。対するダガーはその視線に身を竦めると、急いで変身を解除して命乞いを始めた。

「ま、待って!？ 分かったあたしらの負けだ、降参する! だから……だから命だけは!？」

そういう女の顔は恐怖から流れる涙と鼻水でぐしゃぐしゃになり、傍から見れば見つともない事この上ないモノとなっていた。それに対しサイズは――

「ん~~~~~~~~・・・駄目♪」

仮面越しにも笑顔が見えそうな声でそう言うと、何の躊躇もなく女の首を撥ね飛ばした。首の無くなった女の体からはしばし血が吹き出るが、最後には力無くその場に倒れてしまった。

「はあ、つまんないの。」

4人のダガーを惨殺し終えたサイズは、変身を解除して利香の姿に戻った。その顔は言葉の通り心底つまらなさそうで、まるで満足し

ていないのが見て取れる。

「悪くは無かったんだけど、やっぱり何か物足りないのよねえ。」

そう言いつつ、利香は脳裏に一人の少女を思い浮かべる。青いポニーテールに力強い目を持った少女・・・青羽の姿を。

その姿を思い浮かべながら、利香は口元を笑みに歪める。

「やっぱり、彼女じゃないと面白くないわよね。今・・・何処にいるのかしら？ フフツ・・・」

4人の惨殺されたその場に、利香の挙げる笑い声が響きわたった。その時・・・

「ねえ貴女。」

いつの間にか現れた女性が、怪しい笑みを浮かべながら利香に話しかけてきた。

タジン

あれから数日経って、青羽達はタジンの街に着いた。着いたのはは昼に程近い時間帯、ちょうどいいと言う事で、青羽達は宿に部屋を取るとそのまま食堂に昼食を取りに向かう。

「ふん・・・」

青羽は食堂で注文した料理が届くまで、入口に置いてあった雑誌を

手にとって適当に色々な記事を読んでいた。今まで特に気にした事は無いが、読んでみるとなかなかどうして面白い記事もいくつかある。特に興味をそそられたのは、コウモリ男に関する記事だった。

「どうしたんです、青羽？」

「ねえ見てよこれ、コウモリ男だって。本当にいるのかな？」

割と真剣に雑誌を読む青羽にノーマが声をかけると、彼女は今しがた見ていた記事をノーマに見せる。そこには目撃者の証言から描いたと言われるコウモリ男のイラストが掲載されていた。とはいえそれは文字通りコウモリと人間の男を合体させたような、ハッキリ言って漫画かB級映画に登場しそうなほどチープなモノで眉唾もいい所だった。

「ああ、コウモリ男ツスカ。俺もその記事何度か見た事あるツスよ！」

「ああ、それなら僕も。」

「へえ・・・こんなの？」

コウモリ男の話題に興味を示した戒と弘貴に、青羽が持っていた雑誌の記事を見せる。そこに描かれている安っぽいコウモリ男の絵に、二人は思わず苦笑してしまう。

「いや、流石にそれは無いと思うツス。」

「ま、実際どんな外見なのかまでは知らないけど。でも聞くところによると――――」

そう言って戒は自身を知る中でのコウモリ男に関する情報を口にしていく。

曰く、外見は普通の男性だが、周りをコウモリが飛んでいる。

曰く、その男がコウモリ男になると、昼間でも空が暗くなり三日月が浮かぶ。

曰く、コウモリ男が出る直前に、全身がステンドグラスの様な体の怪物を見た。

等々――

「ん？」

戒の話すコウモリ男に関する情報を聞いていた青羽は、彼が最後に話した『ステンドグラスの様な体の怪物』の部分に違和感を感じた。

「どうしました？」

「いや、ステンドグラスみたいになって……なんか……」

ステンドグラスの様な体を持った怪物……その言葉が頭に引かかる感覚を覚えた青羽だが、いくら考えても思いだせない。ノーマに訊ねて見ようかとも考えたが、結局モノは都市伝説。深く考えなくても仕方がないだろうと思い、すぐにその考えを頭の中から追いやってしまうのだった。

街中

あの後、青羽達は街中に繰り出してサイズに関する情報を集めていた。

しかし協会やB A Rに立ち寄り様々な人に訊ねて回るも、とくに有力な情報を得る事は出来なかった。

現在はノーマを除いて全員やや落胆した面持ちで、人通りの少ない所を歩いている最中である。

「情報・・・無いね。」

しんみりとした空気に耐えきれなくなった青羽がぽつりとそう呟く。だがそれで状況が変わる訳でもない、寧ろ無駄に状況を認識させただけで余計に戒の気分を落胆させただけになった。

「利香・・・今何処に・・・」

「これだけ捜し回って、何の手がかりも掴めない。彼女自身が迂闊に尻尾を見せない為に大人しくしているか、それとも・・・」

戒とノーマが利香の行方についてあれこれと話し合っていると――

「ッ!?!?」

突然青羽は何者かの視線を感じた。それも殺気が混じった、身の毛もよだつ様な禍々しい視線を。

「姐さん？」

突然立ち止まって周囲を見渡す青羽を怪訝に思っただけに声をかける弘貴。ノーマと戒もそれに気付き、二人が青羽に声をかけようとしたその時――

「やっと見つけた、本当にここにいたのね。」

「ッ?! あっ!？」

4人の前に、満面の笑みを浮かべた利香が現れた。

第44話 サイズは何処に（後書き）

と言う訳で第44話でした。

今回またもサイズが大暴れ、今度は軍用ではない一般のライダーが犠牲となりました。サイズの動きが青羽達の下に届かないのは、利香の動きが目立たないのがありますが、今回の様に出会った者が全員やられているっていうのも原因の一つと言えます。

そんな利香が青羽達に遂に接触。そして次回、驚きのライダーが登場します。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第45話 二人のカリス（前書き）

どうも、黒服です。

今回のサブタイトルは原作ブレイドでも使われていましたが、意味合いはあちらとは全く異なります。

第45話 二人のカリス

タジン

青羽達は、突然現れた利香に驚愕していた。まさかこのように唐突に、しかも向こうから現れるとは思ってもみなかったのだ。

「あなた達、私の事を捜してくれてたんでしょう？ お望み通り私はあなた達の前に来てあげたわ。だから・・・」

利香は驚愕の表情を浮かべる青羽達に、笑みを向けながらバックルとカードを取り出し腰に装着した。

「あなた達も……私を楽しませて。」

《Open up》

利香はそう言いながらバックルを開き、仮面ライダーサイズに変身する。その様子に我に返った青羽達は、慌てて自分達も変身するべくバックルを装着した。

「全く、確かに探しちゃいたけどこんないきなり出てくる事ないじゃないん。」

「戒、行けますか？」

「大丈夫、今はとにかく退かせればいいんだ。それだったら・・・」
「うっっし、やるツスよ！」

4人は各々変身の準備を整えると、適度に距離を開けて身構えた。

「」「変身！」「」

《《Turn up》》
《Change》

4人はそれぞれブレイド・カリス・ギャレン・アクスに変身、その後一斉にサイズに立ち向かっていった。

「はああああっ！」

「うおおおおお！」

「フフッ。」

ブレイドとアクスがサイズに向かって突撃し、カリスが後詰として二人についていく。ギャレンは彼女達の支援だ。戦い方としては悪くは無い、それぞれの特性・戦い方が生かせる理想的な連携だろう。

だがその4人の様子を見ても、サイズからは余裕が見て取れた。

「ハッ！」

ブレイドが真っ先にラウザーをサイズに向かって振り下ろし、続いてアクスが渾身の力を込めて手斧型のラウザーを叩きつける。

だが二人の攻撃は容易く受け流され、逆にサイズの殴打と蹴りによる反撃を受けてしまう。しかしその隙を突いて、カリスがカリスアローでサイズに斬りかかった。

「フッ！」

「んっ、惜しい♪」

だがサイズはその攻撃が分かっていたかのように容易く受け止める。と、何を思ったかカリスを掴んである方向に向ける。その瞬間――

「ぐうつ?!」

「ッ?! しまつ!？」

意識がカリスに向けられているサイズに銃口を向けていたギャレンの銃撃が、全弾カリスの背中に命中してしまう。サイズはカリスを盾にしたのだ。

「連携としては悪くなかったわねえ。でもそれ、まだ考えだしてそんなに経ってないんじゃない? 粗が目立ってるわよ。」

サイズの言う通り、ブレイド達が考えたこの戦法はつい先日考えだされたばかりであった。幸いと言うかなんというか、サイズは基本一人で行動している。ならば、多少卑怯であっても4人の能力が出来るだけ活かせる戦いをした方が有効であるのではないかと考えこの戦法が生まれた。

だがこれはまだ考えだされたと言うだけで、実戦では今回が初である。それ故細かい調節などが行われておらず、結局このようにサイズに粗となった部分を突かれる事になってしまった。

《Slash》

「フッ!」

「があっ?!」

だがそれもサイズにとっては好都合、ギャレンの銃撃がかなり効いたのか動きを止めたカリスに対し、サイズは斬撃力を強化したサイズラウザーによる一撃を見舞う。アーマーもない所にまともに受けたカリスは大きく吹き飛ばされ、地面に叩きつけられると衝撃で変身が解除されてしまった。彼女が倒れている場所からは、よく見る

と血が流れてきている。」

「ノーマ!?」

「こいつう!!」

カリスが倒された事にブレイドは狼狽し、アクスは決死の突撃を試みる。しかし――

「動きがまだまだ幼いわね。」

《Dark》

「う、うわあああああつ?!」

「弘貴ツ?!」

彼の攻撃が当たるよりも早くサイズがラウズした『ダーク・クロウ』の効果で放出された闇がアクスを包み、彼は全身に形容しがたい激痛を感じてその場に倒れてのたうち回った。サイズは叫びを上げながら苦しむアクスを無視して、残るブレイドとギャレンに近付いていく。

「くっ! あんた・・・」

「クソッ!」

ブレイドがラウザーを構えてどうするか考える中、ギャレンがサイズに向けて銃撃を開始した。彼は状況が不利になった事で早急に撤退すべきと考え、彼がサイズの足を止め得ている間にブレイドに倒れている二人を連れていかせようと考えたのだ。

しかし、サイズはそれをいとも簡単にラウザーで受け止めると瞬く間にギャレンに肉薄して、逆にサイズラウザーで斬り付けた。

「ハアッ！」

「ガッ?! くう、利香・・・」

「フンッ！」

「ぐわあああっ?!」

サイズは何度もギャレンを斬り付け、彼が倒れるまで攻撃を止めなかった。そしてギャレンが倒れて動かなくなると、サイズはブレイドに目を向ける。

「フフッ、漸く二人きりになれたわね。」

「あんた・・・よくもッ!?!」

仲間を全員倒された、その事に激昂したブレイドがサイズに斬りかかるが、その全てはかわされてしまう。

「どうしたの? 攻撃にキレがないわよ。」

「こんのお!?!」

やや小馬鹿にしたサイズの言葉に、ブレイドが何度もラウザーを振り下ろすが、それらは全てかわされ受け流されてしまった。

あまりにも一方的・・・そんな状況を、離れた所から楽しげに眺めている人物が居た。

「うふふ、やってるやってる！」

その人物は怪しげな笑みを浮かべた女性、吉永 みゆき。何故彼女がここにいるのか、それは利香に青羽達の事を教えたのがほかならぬ彼女だからである。

彼女は離れた所からクッキーと紅茶を片手に完全に観戦状態で、苦戦するブレイドの様子を眺めていた。

「あの子たちが手も足も出ない・・・ふふふ、愉快だわ!!」

そう言って彼女は笑い声を上げる。そんな彼女の視線の先では、遂にブレイドが膝をついていた。

「もうお終い？」

「はあ・・・はあ・・・くそつ。」

サイズの言葉に悔しげな声を上げるブレイドだが、彼女の攻撃はまるでサイズに届かず相手との実力差を嫌でも認識させられた。

「それじゃあ今度はこちらの番よ。」

「くっ!？」

ブレイドが攻撃でなくなった事により、今度は攻守交替とラウザーを振り上げるサイズ。ブレイドはとっさに身構えるも、疲労から反応が鈍り、サイズの鋭い一撃を受けてしまった。

「うあっ?!」

サイズの攻撃にその場に倒れるブレイド。一方サイズはそんな彼女に近寄ると、徐にブレイドが落としたブレイラウザーを手に取り彼女を足で踏みつけた。

「ぐう、くっ!」

「また・・・いい声聞かせてくれる？」

「うっ!？」
あ・・・」

サイズの言葉にブレイドが硬直すると、同時にサイズはブレイラウザーを何度も彼女に叩き付けた。

「うあっ!?! ああっ?!? ぐううっ!?!」

「うふふふふ、あはははははははっ!」

苦痛の悲鳴を上げるブレイドに対し、心底楽しげな笑い声を上げるサイズ。彼女はしばしブレイドを斬り付けると、一旦攻撃を止めてブレイドを蹴り飛ばした。

「がっ?! うう・・・」

「安心して、まだまだこんな物じゃないから。」

「あ・・・え・・・」

ゆっくりと近付いてくるサイズに何事か口にするブレイドだが、激痛と疲労からまともな言葉になっていない。

そうこうしている間に、再びブレイドの近くにやってきたサイズ。

「さあ、まだまだこれから・・・」

「い・・・あ・・・かはっ。」

何とかその場から離れようともかくブレイドだが、手足がまともに動かない状況では数cm動くのがやっとだった。そしてサイズが手にしたブレイラウザーを振り上げ、再びブレイドに振り降ろそうとしたその時――

「うあっ?!? な、何っ!?!」

「えっ?」

突然何処からか光弾が飛んできてサイズに命中、その手からブレイラウザーを弾き飛ばした。予期していなかった攻撃に驚愕し周囲を見渡すサイズと、突然の状況の変化について行けないブレイド。

すると、出し抜けに飛び込んできた白い影がブレイドとサイズの間
に立ち塞がった。その姿は――

「なっ!?! カリス?!」

「ノーマ?」

赤い複眼に触覚、腰のハートを模したラウザーなど細部こそ微妙に違うがその姿は正しくノーマが変身する仮面ライダーカリスと同じ物であった。ただ大きく違うのは、カリスの黒い部分が全て白いのと胸にカマキリのレリーフが刻まれているところだろうか。

青羽が呆然としつつノーマが倒れている方を見ると、そこではようやく目覚めたノーマが同じく呆然としながら白いカリスを見つめていた。

「あなた……何者?」

サイズが白いカリスに訝しげにそう訊ねる。

「何故、ライダーがこんな事をするの?」

対する白いカリスは、サイズの質問に答えず怒りを滲ませた声でそのような言葉を紡ぐ。声からするに、どうやら変身しているのは女性らしい。

（あれ？ この声・・・）

青羽がその白いライダーの声に首を傾げていると、サイズが口を開いた。

「はあ？ あなた何言ってるの？」

「ライダーは人々を守る為の存在でしょう！？ それなのになんでこんな事をするの！？」

呆れた様な声で話すサイズに対して、白いカリスはやや声を荒げてそのように言った。サイズはその言葉に笑い声を上げる。

「あはははっ！ あなた何言ってるの？ ライダーなんて所詮はただの力じゃない。どう使おうがあたしの自由だわ。」

「あなたっ！？ 待って、あなたもしかして・・・」

サイズの言葉に一瞬激昂する白いカリス。しかし何かに気付いたように訝しげな声を上げると、しばし何かを探る様にサイズを見つめる。そして、何かに気付いたかのように頷くと――

「そう、あなた、カテゴリーAの意味ね。」

「あら、何で分かったの？」

「そうだとしたら、尚更見過ごすわけにはいかない！ けど・・・」

白いカリスは一度サイズに対して身構えるが、周囲を見渡して戦いの構えを解く。ここで戦えばブレイド達にも被害が及ぶ、今は逃げた方がいいだろう。

そう考えた白いカリスは、すでに気絶して変身が解除されている弘貴に手を向ける。すると彼が倒れている所から1枚のカードが飛ん

でき、白いカリスの手に収まった。青羽が目を凝らすとそのカードは『シャイン・ジュエル』、弘貴が持っているカテゴリー6だ。

（なんで？）

何故弘貴が持っているカードが白いカリスの手に収まったのか、それを疑問に思っていると彼女は手にしたカードをカリスアロー……ただしノーマが変身するモノとは違い、カリスラウザーが収まっている部分にハサミの様なパーツが取り付けられている……にラウズした。

《Shine》

白いカリスがカードをラウズすると、カリスアローから眩い光が放たれる。サイズがそれに思わず顔を反らして両手で目を庇い、光が収まった頃に再び前を見るとそこには誰もいなくなっていた。先程の光を目くらましに、ブレイド達を連れて逃走を図ったらしい。

獲物が逃げた事を察すると、サイズは肩を落としながら変身を解除した。

「あゝあ、逃げられちゃった。それにしてもさっきのカリス……なんか変だったわねえ？」

利香が首を傾げるのと同時に、離れた所にいるみゆきも訝しげな顔をしていた。

「何かしら、さっきの仮面ライダー……ライダー？」

みゆきは自身が口にした言葉に違和感を感じ、しばし考え込む。そ

して――

「もしかして、あいつ……」

何かに気が付いたのか、不敵な笑みを浮かべるみゆき。彼女はそのまま笑みを浮かべたままその場を離れていった。

空き地

先程の場所から少し離れた空き地、そこに白いカリスと青羽達はやって来ていた。

弘貴は今だ気を失っているが、戒とノーマは完全に意識を取り戻している。その二人の視線は、当然と言うべきか白いカリスに向けられていた。

「えっと、その……ありがとう、助けてくれて。」

青羽は何を言ったらいいのか分からなかったが、とにかく今は助けられた例を言うべきだろうと頭を下げながらそう言った。

「いえ、いいんです。助けられただけでも満足ですから。」

そう言って青羽達に背を向けると、白いカリスは青羽にその状態で話しかける。

「また……会いましたね。」

「えっ？」

青羽が彼女の言葉に首を傾げていると、出し抜けに白いカリスの姿が歪み始めた。そしてその歪みが収まった時、その場には見知った人物――白奈が立っていた。

「ッ!？ あなた、白奈!？」

（ん？ 今・・・）

青羽は自分達を助けてくれたのが、まさかつい最近見知った人物とは思わず驚愕する。

「青羽、知り合いかい？」

戒の質問に、青羽は呆然としつつ頷く。

「う、うん。この間、ルークスで復興作業してる時にちょっと・・・でも、白奈がここにいてるなんて思わなかった。」

「それは私事です。まさかあなたがこの街に居て、しかも危ないところだったなんて思いませんでした。」

白奈はそう言うと、戒とノーマに目を向けて自己紹介を始めた。

「お二人と会うのは初めてですね。私は、臼井 白奈と言います。」

「ああ、僕は大神 戒です。」

「・・・ノーマ・イクスです。」

一通り自己紹介を済ませると、立ち上がれるまでに回復した青羽が弘貴に肩を貸しながら口を開く。

「とりあえず何時までもこんな所に居るのもなんだしき、とりあえずあたし達が取ってる宿に行かない？」

青羽の提案に反対する者もいなかった為、彼女達は一先ずその場から離れて宿に向かう事になった。

宿

「なるほど、ではその利香さんがカテゴリーAに操られてしまったと言う事ですね。」

青羽達は宿に着くと、白奈に先程の状況に至るまでの経緯を話した。彼女はこう言った事に理解があったのか、思いの外すんなりと利香がカテゴリーAに操られてしまった事を理解する。

「そう言う事、僕達は彼女を助ける為に何とかしたいと思ってるんだけど、今はまだどうすればいいのか・・・」

「そうですか、流石に私もそれをどうすればいいのかまでは・・・ごめんなさい。」

「いや、白奈は別に悪くないって。あたし達もどうすればいいのか分かって無いんだし。」

青羽と弘貴、白奈がそのような話をしている中、ノーマだけは会話に加わらずジッと白奈の顔を見つめていた。その視線に居た堪れなくなっただのか、白奈はノーマに話しかける。

「あの、ノーマさん？　ですよね、何でさっきからあたしの顔を・・・」

「・・・白奈さん、貴女「そうだ白奈！」・・・」

ノーマが白奈に何か口にしようとした所で、青羽が二人の会話に

口を挟む。話を中断された事で青羽を軽く睨むノーマだが、青羽はそんな彼女の視線に気付かず白奈に話しかける。

「えっと、なんでしよう？ 青羽さん？」

「白奈さ、あたし達に無理して敬語使わなくてもいいわよ？」

「えっ？ でも・・・」

「いいっていいって。ノーマは素って感じだけど、白奈は何か無理してる感じだし。」

青羽は困惑した表情の白奈に『それに』と続けると、

「あたし達もう友達でしょう？ だったら無理して敬語使わなくてもいいって、何か堅苦しいし。」

「ッ!？」

青羽がそう言った瞬間、白奈は一瞬目を見開いた。青羽はそんな様子を見せる白奈に首を傾げるが、彼女はすぐに普段通りの顔をする。と口を開く。

「えっと・・・それじゃあ・・・青羽、でいいかな？」

「うん！ オツケーオツケー!!」

やや遠慮がちなながらも敬語で話すのを止めた白奈に、青羽は笑顔で頷いた。

その時、ちょうどそれまで気絶していた弘貴がようやく目を覚ます。

「んう？ あれ？ 俺何でここに？」

「あ、目が覚めた？」

「姐さん・・・と、どちら様ツスか？」

目が覚めた弘貴は、早速と言うか白奈に気付き青羽に訊ねる。そこからは青羽が弘貴に白奈を紹介し、白奈と弘貴が自己紹介し始めた。一方、白奈に何事か話しかけようとしていたノーマはと言うと、雰囲気的に完全に話を斬りだせる雰囲気では無くなった事を察して溜め息をつきながら窓の外に目を向ける。

その様子に子供が拗ねたような印象を受け、戒がこっそり忍び笑いをしていたのだが、それにノーマが気付く事は無かった。

第45話 二人のカリス（後書き）

と言う訳で第45話でした。

今回、窮地の青羽を救いに来たのはノーマが変身するのとは異なる白奈が変身する白いカリス。外見はワイルドカリスの赤い部分が白くなり、胸のレリーフと複眼が赤くなった感じです。武器も最初からカリスアローとワイルドスラッシャーが合体したモノですね。

白奈が助けに来た時、もしかしたらキバ編の直人が来たと思った方もいるかもしれません。ちょっと前に出会ったばかりですし。

ブレイド編の更新は年内はこれで最後になります。もちろん来年も完結に向けて頑張っていく予定ですので、どうかよろしく願います。

それでは。

第46話 寧々の師匠（前書き）

どうも、黒服です。

今回は原作仮面ライダー剣でも自分が好きな人物が登場します（人間ではなくアンデッドですが）。

第46話 寧々の師匠

タジン・街中

青羽達が宿で話している頃、タジンの街中を風変わりな格好をした男が歩いていた。

青いバンダナに丸いサングラス、枯れ草色のコートを纏い、左手でキャリーバッグを引っ張り右手にはカナリアが入った鳥籠を持っている。そしてその右手の人差し指には、複雑に巻かれた赤い紐が・

「ふむ・・・・・・・・こっちな。」

男性はそう呟くと、人ごみの中を巧みにすり抜けて目的の場所へと向かって行った。

タジン・宿

青羽達は白奈とある程度親交を深めると、改めて先程の戦いを振り返っていた。

「サイズ・・・・前より強くなったね。」

「ええ、あそこまで強くなっているとは予想外でした。おそらく、利香さんへのカテゴリーAの侵食が深まったのでしょうか。」

「急ぎたいところだけど、真正面からまともに戦っても彼女には・・・・」

青羽達はあれやこれやと意見を出し合うが、共通しているのは今の

自分達では束になってもサイズには勝てないだろうと言うことだけだ。戦う前からネガティブになっていては勝てるモノも勝てないのは分かっているが、先程の戦いはこれ以上ないほど惨敗だった。

「もう・・・無理なんじゃないッスか？ あんなの、俺達で相手にできるような奴じゃ・・・」

「何弱気なことやってんのよ！ そんなの「でも俺ら、さっきボロボロにされたばかりッスよ？」ッ！？ それは・・・」

「俺だって少しは悔しいって思うッスけど、それでもやっぱり、どうしても勝てない相手だって。」

弘貴とて本当はこんな簡単に諦めたくはない。だが相手があまりにも強大すぎるので、自身を奮い立たせるよりも相手の強さに委縮してしまうのだ。

すでに負けムードとなっている室内の様子に嫌気がさした青羽は、唐突に白奈に話しかけた。

「それにしても、白奈もカリスに変身できたんだね。ちょっとビツクリしたわ。」

「えっ？ あ、ああ、うん。まあ「ありえません。」ッ！？」

「ノーマ？」

青羽が白奈の変身するカリスに興味を持っていると、突然ノーマが口を挟んでくる。その口調は何処か棘があり、彼女が警戒心を持っているのが手に取る様に分かった。何故彼女が警戒心を持っているのか分からず、青羽は首を傾げる。

「カリスと言うライダーが二つ存在することなどまずあり得ません。ましてや、私と同じラウザーが二つあることなど。」

「どういう事ッスか？」

ノーマの言葉に弘貴が質問すると、彼女は自分のラウザーを取り出した。

「青羽、以前私貴女のカードを使って変身しましたよね？」

「ああ、そう言えばそんな事もあったわね。あれってどういう事なの？ 結局あの後色々あった所為で何の説明もされてないんだけど。」

青羽の言葉を聞くと、ノーマはラウザーをテーブルの上に置いて説明を始める。

「カリスラウザーと言うのは、私が便宜的にそう呼んでいるだけです。これの正式名称は、『零号ラウザー』。」

「零号？」

「そうです。これは、全てのラウザーの原型にあたるラウザーなんです。」

ノーマの言葉にその場の全員が驚いた。現存する全てのラウザーの原型を、彼女が持っていたなど思ってもいなかったのだ。

「このラウザーの特徴は、如何なるスートのAでも変身できると言う所です。」

「如何なるスートの？ そうか、だから何時も使ってる『チェンジ・マンティス』だけじゃなくて青羽の『チェンジ・ビートル』でも変身できたんだ。」

戒が納得した様子を見せると、青羽が疑問の声を上げる。

「あれ？ でもそんなに凄いラウザーなんだったら、何で量産せずにこんな風にしちゃったの？ そっちの方が絶対強そうなのに。」

青羽の言う事も尤もだ。極端な話、防御力に優れたライダーに変身できるAと、スピードに優れたライダーに変身できるAを持っているだけでも戦いの幅を広げる事が出来る。それなのになぜ今のラウザーの様な特定のスーツでしか変身できない様なシステムにしてしまったのか。

「まあ、コストの面などいろいろな問題はありますが、最大の理由は普通の人間には扱いこなせないからなんです。」

「へっ？」

「このラウザー、青羽達が使っている物ほどリミッターがかけられていません。その所為で封印されたアンデッドの力をより多く使役出来るのですが、代わりに装着者にかかる負担も尋常ではありません。」

厳密に言えばリミッターが全くない訳ではない。だがやはり装着した時に人体にかかる負担が大きく、人間が耐えきれるものではなかったのだ。

「あの、じゃあなんで姐さんは平気なんスか？」

「私、厳密に言えば人間ではありませんから。」

「ああ、そう言えば弘貴知らないんだっけ？」

ここで弘貴がノーマの秘密を知らない事に気付いた青羽は、彼女に関する事を簡単に説明していく。青羽の口から語られるノーマの秘密に、弘貴は酷く驚いた。

「じ、人造人間!？」

「ま、正確に言えば人間にアンデッドの因子を組み込んだ程度です
ので、肉体の強靱さ以外は青羽達と変わるところはそうありません。
先程の傷も完全ではありませんが塞がり始めています。」

そう言ってノーマは先程サイズに付けられた傷を弘貴に見せる。確
かに腹部を斬り裂かれていた筈だが、彼女が包帯を取ると確かに傷
が塞がり始めていた。この分だと数日で完治するだろう。

弘貴がその様子に感心していると、ノーマはたくし上げていた服を
戻して話を再開した。

「話が逸れましたが、そう言う訳でこのラウザーが2つあるのはお
かしい事なんです。これは最初の1つが作られただけで、そこから
先は青羽が使っている様なラウザーが作られるようになりましたか
ら。」

ノーマはそこまで話すと、視線を白奈に向けた。彼女は何も言わな
かったが、その顔面は何処か蒼白になり手元も僅かに震えている。
まるで何かに怯えているかのように・・・

「白奈、貴女は確かにさっきこれと同じようなラウザーを着けてい
ましたね？ 一体何処で手に入れたんですか？」

「えと・・・それは・・・」

「聞きたい事はまだあります。貴女、さっき変身を解く時に『スピ
リット』のカードを使用しなかったでしょう？ このラウザーは変
身とその解除両方にカードを必要としているんですよ。一応緊急時
にオートで変身が解除される事がありますが、さっきそれが作動し
たとは思えないのですし。一体どうやって変身を解いたんですか？」

「だから・・・それは、その・・・」

「ノーマ、もうその辺で・・・」

詰問にも等しいノーマの質問に、白奈は何も答える事が出来ない。不安そうな白奈を見て青羽がノーマを止めようとするが、彼女はそれを聞こうともしない。

「それと後一つ、これが一番気になっていた事です。」

「な、何？」

「さっき変身を解く時、貴女――」

ノーマがその先を言おうとした時、出し抜けに扉がノックされた。

「？ 誰だろう？」

突然の訪問者に戒が首を傾げながら扉を開ける。するとそこには、頭にバンダナを巻いたサングラスの男が立っていた。

「えーっと、どちら様でしょうか？」

その怪しさ爆発な風貌の男に若干引き気味に訊ねると、彼はおもむろに室内に入ってきた。

「こんにちは・・・と、君が大神 戒君か。」

「ッ!？」

突然あった事もない男性に名前を言われた事に戒が目を見開いてみると、男は続いて室内を見渡した。

「ふむ、そちらの少年が櫻羽 弘貴君。そしてそのサングラスの君が、ノーマ・イクス君だね。」

「あの・・・おっちゃん誰ツスか？」

（？ 前にもこんな事があった様な・・・）

次々と室内に居る青羽達の名前を言い当てていく男性。そして次に青羽の方を向くと、顔を綻ばせて彼女の肩に手を置いた。

「君が、桐沢 青羽君か。お母さんにそっくりだね。」

「母さんを知ってる？ あなた、一体・・・」

青羽がそう訊ねると、彼はサングラスを取った。

「私の名は嶋 昇。昔、君のお父さんに世話になった者だよ。この子はカナリアのナチュラル。」

男性・・・嶋 昇はそう言って手に持った鳥籠を軽く持ち上げると今度は白奈の方を見る。白奈は一瞬肩をビクリと震わせるが――

「・・・初めまして。」

「あ、その・・・初めまして。」

嶋の柔らかな笑みと共に放たれた挨拶に、肩の力を若干抜いて挨拶を返す。

「あの、嶋さん。父さんの世話になったって？」

「言葉通りの意味さ。君のお父さんにはいろいろと世話になった、おかげで今の私が居るんだ。今も彼には感謝しているよ。」

青羽が父・信司と嶋の関係について訊ねると、彼は笑顔で信司に感謝していると述べた。例えば自分の事でなくとも、父に対して感謝されると言う事が嬉しかったのか青羽はほんのり笑みを浮かべる。

「それよりも、貴方一体何なんですか？　突然やって来ては上がり込んで来て・・・」

だがノーマだけは、嶋に対して警戒心を抱いていた。青羽は父の事をよく知っている人物と言う事で既に警戒を解いているし、戒や弘貴も嶋が悪人ではない事を察したのかあまり警戒してはいない。しかしノーマだけは嶋に対する警戒心を解く事が出来ない、そもそもいきなりやって来て次々と初対面である筈の自分達の名前を言い当てるていく様な人物をそう簡単に受け入れられるほど、彼女のガードは甘くは無かった。

「おや？　寧々君から私の事は聞いている筈だが？」
「寧々？」

ノーマの言葉に、嶋が不思議そうな顔で寧々の名を出す。彼女の名が出た事に白奈と弘貴を除く室内の全員が首を傾げるが――

「あっ！？　そう言えば、寧々さん嶋って人に鍛えてもらったって言ってた！　もしかしてその嶋さんって・・・」

「ああ、私の事だよ。彼女は・・・今も元気になっているみたいだね。うん、元気そうだ。」

青羽が何かに気付いたように声を上げると、嶋は頷いてそれを肯定した。そして右手を上げて何かを確認する様にうんうんと頷く。青羽達はそんな彼の人差し指に、寧々が着けている物と同じ赤い紐が結び付けられているのに気付いた。

「それ、寧々さんと同じ・・・」
「ああ、これがあると風を感じやすいんだ。」

嶋は微笑みながらそう言った。

だが次の瞬間、彼は真剣な表情で口を開く。

「時に、仮面ライダーサイズだが……あれは危険だ。」

「ッ!？」

突然の彼の言葉に息を飲む青羽。

「変身している音無 利香君に対する浸食は、君達が思っているよりも大分進んでいる。彼女の心も少しずつだが抵抗が弱くなってきているようだ。このままだと、直に彼女の心も消えてしまうかもしれない。」

「そんなッ!？」

「どうにもならないのですか？」

嶋の出した結論に、戒が悲鳴の様な声を上げる。ノーマが嶋にこの事態を打開する手は無いのかと訊ねると、彼は残念そうに首を振った。

「難しいね。そもそもサイズに勝つこと自体かなり厳しいんだ。仮に軍隊が相手にするとしても、かなりの戦力が必要になるだろうね。」

絶望的とも言えるその言葉に、室内の空気が一気に重くなる。もう本当に駄目なのではないか、そう青羽達が思い始めた矢先――

「だが、心配する事は無い。」

今度は明るい声で嶋が話し始めた。

「心配ないって……何か根拠でも？」

ノーマが怪訝そうな声で嶋に訊ねる。彼はそれに微笑むと、頷きながら口を開いた。

「ああ。ある人が言っていたよ『絶望の後には必ず希望が来る』とね。」

「あつ……」

嶋の言葉を聞いて、青羽が何かに気付いた様な声を上げる。それを見て嶋は微笑んだ。

「この言葉、覚えがあるみたいだね。」

「はい、父さんがたまに言ってた。」

そう言って青羽は軽く笑みを作った。まだ不安が拭い切れた訳ではないが、少なくとも忘れかけていた父の言葉に多少は勇気付けられたようだ。

「何処にそんな証拠があると言うのですか。いくらなんでも楽観的すぎます。」

「でも、なんだかホツとする言葉ツスよ？」

「そうだね。少なくともそう信じていれば、希望は持たせてくれる。」

気が付くといつの間にか室内の空気からは重さが無くなっており、青羽達の心にあった不安も幾分か和らいでいた。

その頃――

街中のとある路地裏を、変身を解除した利香は歩いていた。

「さっきの白いカリス・・・なんか妙だったわね。」

彼女が考えているのは先程自身とブレイドの間に割って入って来た白いカリスの事。利香はそのカリスから、通常のライダーからは感じられない奇妙なモノを感じていたのだ。

それが具体的に何かと言う事は流石にできない。最強のライダーとしての力と人間の体を手に入れたが故に、アンデッドとしての能力の一部に制約が出来てしまったからだ。

「でもま、もう一度戦えば何か分かるかもしれないわね。」

利香はそう言いながら怪しげな笑みを浮かべると、そのまま薄暗い路地裏の先へと消えて行ってしまった。

第46話 寧々の師匠（後書き）

と言う訳で第46話でした。

今回登場したのは原作でも登場したタランチュラアンデッドこと嶋さん。登場人物としても好きな方だっただけに、原作の方では物語から脱落してしまったことが悔やまれます。

その一方でノーマは白奈に対して疑念を募らせます。寧々と初めて出会った時もそうでしたが、彼女は得体の知れない相手にはとことん警戒するたちなので。

果たして白奈にはどんな秘密があるのか……。まあ、薄々感づいてる方もいるかもしれないですが（汗）。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第47話 隠されるモノ・恐怖の扱い（前編）（前書き）

どうも、黒服です。

お待たせして誠に申し訳ありません！！ 何分若干のスランプとバイトと春季講習で時間がなかなか取れなくて（汗）

第47話 隠されるモノ・恐怖の扱い（前編）

タジン

突然の訪問者・嶋の登場に青羽達は驚いたが、少し経つと彼と雑談に花を咲かせるまでには親しくなっていた。

ノーマも最初は警戒していたが、次第にその警戒も解いていった。嶋という男性の放つやんわりとした雰囲気の影響されたのだろうか。

「ねえ嶋さん、あたしの父さんって昔どんな感じだったんですか？」

嶋と話している中、青羽は不意にそんな事を訊ねた。特にこれと言って他意は無い、純粹に第3者から見た自身の父・信司の評価というのを訊いてみたかったのだ。

嶋は彼女の問い掛けにしばし考え込むと、何か得心がいった感じで頷いて口を開いた。

「そうだね、諦めが悪くて物事に真っ直ぐ立ち向かう熱い男だったね。目に見えて熱くなるのは心のボルテージが上がった時に限るけど。」

「へへへ、父さんって昔そんなんだったんだ。今からじゃ考えられないわ。」

「諦めが悪くて真っ直ぐ立ち向かうところは、さすが青羽の父って感じだね。」

嶋から聞いた信司のイメージから、戒は青羽と彼女の父の似ている点を指摘した。その言葉に、青羽は『なはは』と笑ってみせる。

「嶋さん嶋さん、青羽の姐さんの親父さんってどんだけ強いんスカ？」

そんな中、弘貴はやや興奮した様子でそんな事を訊ねる。青羽の父は20年以上前から仮面ライダーとして戦って来た超ベテラン、今はほとんど引退した様なモノらしいがそれでもダークローチ討伐などで生計を立てているらしい。この時代まで戦えるコンディションを保ち続けた人物などもはや数えるほどしかない現在、信司の實力は相当なモノである事が伺える。

仮面ライダーとなってヒーローになる事を夢見る弘貴としては、参考までに信司の實力を聞いておきたかったのだ。

彼の言葉に嶋は考え込みつつ室内を見渡した。見ると弘貴以外にも室内の全員が嶋に注目している、信司と同じ時を生きた者による彼の話が聞けると言う事で、皆真剣になっている。相当気になるのだろう。

彼らの様子に一瞬苦笑を浮かべると、嶋はゆっくりと口を開いた。

「端的に言えば、彼に対しては強いの一言が出てくる。だがそれでは分かり難いかもしれないね。」

そう言う嶋は立ち上がると、窓際に近付いていつて窓を全開にした。

「一言で言うなら、彼の強さは『風』だ。吹き抜ける突『風』の様に鋭く、そよ『風』のように掴みどころがなく、それでいて暴『風』の様に力強い。そんな強さだね、彼は。」

「風・・・か。」

青羽は嶋の話聞いて、一瞬自分もその域に辿り着けるかと考えた。だが直後に、そんな青羽の考えを見抜いたのか嶋が彼女に声をかける。

「言っておくが、それは彼だからこそ辿り着く事が出来た強さだ。誰もが彼の様な強さに辿り着けるとは限らない。」

そう言う嶋は『それに』と付け加える。

「彼だって敗北する事はある。青羽君も知ってるだろう、今の彼はアンデッドとの戦いで負った傷が原因でほとんど引退した身になっているのは。」

嶋の言葉に、青羽は即座に頷く。信司に修行を付けてもらっていた時から聞かされていた、『敗北はいつ来てもおかしくない』という言葉。どれほど強い力を身に付けようが、敗北は何かの拍子に突然自身の身に降りかかってくる。

だからどんな奴が相手でも決して油断はしてはいけなないと、相手に敬意を払う意味でも常に全力で戦う様に教えられて来た。

その事を再認識して、青羽は小さく、だがしっかりと頷いた。

その様子を見て、嶋は満足そうな顔をするすつと立ち上がって扉に向かって歩いていく。

「それではそろそろお暇するよ。と言っても私の部屋はこの向か

いだからね、何か困った事があれば、遠慮せずに聞きたい。」
「あっ!？」 嶋さん、その・・・ありがとうございました!」

部屋を出ていく嶋に、青羽は深く頭を下げる。嶋はそんな彼女に軽く微笑むと、今度は黙って部屋から出ていった。

「それじゃあ、あたしもそろそろ・・・」

彼が出ていったのを確認して、白奈も部屋から出ていこうとする。

「白奈も、この宿に泊ってるの?」

「うん。しばらくはこの街に居るつもりだから、またね。」

「うん! またね、白奈!!」

青羽は部屋を出ていく白奈に笑顔で手を振り、白奈も彼女に笑顔を返して部屋から出ていった。

翌日

次の日、宿の屋上で青羽は日課の早朝鍛錬に勤しんでいた。

「ふっ、はっ。」

青羽は一心不乱に手に持った木刀を振り続ける。脳内には仮想敵としてサイズを思い浮かべ、再び戦う事になった時の為の対策も考えていた。

(次に会った時は、絶対負けない! でも・・・)

心の中で次こそは勝つと誓う青羽。だがその顔に一瞬陰りが見える。

その時目の前に思い浮かべたサイズがニンマリとした狂笑を浮かべた気がして、青羽の脳裏にサイズに馴染まれた記憶が蘇った。

「ッ！！？？」

あの時の光景がよみがえった瞬間、青羽は強く目を瞑り、数秒と経たずにゆっくりと目を開ける。その時には既にサイズの姿はなく、青羽は内心で胸を撫で下ろすと同時にそんな自分に不甲斐なさを感じた。

（駄目だな、あたし・・・変わったと思ってたのに・・・）

一瞬そんな事を考えて、すぐに頭を振ってその考えを振り払う。

「いけない、駄目よ青羽、ネガティブになっちゃ。」

そう言う気合を入れる為に両の頬を強く叩く。

「ふう・・・よし。」

気合を入れ直して若干表情が明るくなった青羽は、近くに置いたタオルで汗を拭きながら踵を返す。と、その時――

「お疲れ様、精が出るね。」

「へっ？ 嶋さん？？」

何時の間にそこにいたのか、嶋がその手に水の入ったペットボトルを持ちながら立っていた。嶋が差し出したそれを受け取りながら、

青羽は何故彼がこの場に居るのかを訊ねる。

「あの、嶋さん。こんな朝早くにどうしたんです？」

「大した理由じゃないさ。ただ君が毎朝日課にしている鍛錬に向かうのが分かったから、興味本位でこっそり見に來ただけの話だよ。」

「あはは、お見通しなんですね。」

嶋の言葉に苦笑しつつも受け取った水を口に運ぶ青羽。一方の嶋はそんな彼女をしばし見つめた後、ある言葉を紡いだ。

「怖いかい、あのライダーが？」

「ッ！?!?!？」

彼にそう言われた瞬間、青羽は表情を凍り付かせた。思わず口に含んだ水を吐きだしそうになったが、精神力でそれを押さえてのける。青羽はそんな自分を一瞬無性に褒めたくなった。

「・・・何の事です？」

「言葉通りの意味だよ、君は心の中でサイズを恐れている。また酷い目に遭わされるのではないかとね。」

聞き返した青羽に、嶋は淡々とした口調で自身の考えを述べていく。そんな彼に青羽は努めて動揺を隠しながら彼の言葉を否定する。

「そんな事、ある訳ないじゃないですか。敵が強いからって怖がってばかりいたら、父さんを超えるなんて出来る訳ありません。」

「さつき、一瞬震えているみたいだったが？」

「あ、あれは・・・そう、武者震いって奴ですよ。」

青羽は何とか誤魔化そうとするが、嶋には全てお見通しなのかまる

で通用しない。逆にどんどん追い詰められていく感覚に青羽は陥っていた。

「もう認めたらどうだい？ 君はサイズを恐れている。仲間の前では気丈に、いつも通りに振舞っているが、本当はもうサイズと対峙したくない・・・戦いたくないと考えているんだろう？」

嶋はあくまで無感動な目で青羽を見つめながら、淡々と言葉を紡いでいく。

「違う!？」

そんな彼の言葉に、青羽は声を荒らげて反論する。

「あたしは、そんなこと思ってない！ 気丈にとか、そんな勝手なこと言うのはやめて下さい!？」

青羽の反論はまだ続く。

「あたしは無理なんかしてません。たしかにサイズが強いのは認めますけど、だからって怖いとかは思ってません!？ 気丈に振舞ってる？ これがあたし、“本当の”あたしなんです！ 振舞ってるとかそんなこと・・・」

なおも言葉が続けようとした青羽だが、手を上げた嶋がそれを遮った。

「まあ、別に君を馬鹿にして言ったわけじゃないんだ。だが、今のままでは・・・君は望んだようになることはできないぞ。」

嶋の言葉に、青羽は頭を殴られたかのような衝撃を受けてよろけてしまう。

今の言葉で青羽は理解してしまった。嶋はすべてを分かっている。考えて見れば当然のこと、嶋は寧々の師匠なのだ。であるとすれば、青羽がその内に仕舞い込んでいることもバレている筈・・・

「あ、あ・・・」

青羽は震える口で何かを言葉にしようとしているが、様々なことが頭の中でぐちゃぐちゃに混ざり合って言葉にならない。

そのまま青羽が何も言えずに立ち尽くしていると――

「青羽ッ!？」

ノーマが慌てた声を上げながら、急いで青羽と嶋の間に割って入った。

「ノ、ノーマ・・・どうして？」

「大した理由ではありません、ただいつもより鍛錬の時間が長かったので様子を見に來ただけなのですが・・・」

そう言いながら、ノーマは嶋を睨みつける。

「青羽、これは一体どういう事ですか？ 彼は一体何を？」

ノーマは青羽にそう訊ねるが、青羽は何も答えない。彼女のそんな様子にノーマが怪訝な顔をしていると、徐に嶋が踵を返していく。

「それじゃ、私はこれで失礼するよ。」

「あっ！　ちよつと・・・」

立ち去っていく嶋を引き留めようと、慌てて声を掛けるノーマ。対する嶋はお構いなしにそのまま屋上から立ち去ろうとして――突然立ち止まって青羽の方を振り返った。

「もし、君が望むのなら・・・私の所に来るといい。いつでも力になるから。」

嶋はそう言って今度こそその場から立ち去っていき、後にはそんな彼の後ろ姿を見つめるノーマと、暗い表情で俯いている青羽だけが残されていた。

タジン・路地裏

嶋が青羽たちの下から離れた頃、街の中とある路地裏に利香は居た。

その顔は怪しげな笑みに歪み、見るものを萎縮させるのに十分だと言える。

「さて、そろそろあの白いカリスを探しに行くのでしょうかしら。フフフ・・・」

そう言って一層笑みを深めると、路地裏から出て人ごみの中に消えていった。

タジン・宿

その頃、白奈は宿の部屋の中で自分のラウズカードをチェックして時間を潰していた。絵柄はカマキリや鷹など、ノーマが所持しているカードと類似している。

だが奇妙な点が二つ。一つはどのカードも白を基調とした色合いになっていること、描かれている生物も皆色は白で統一されていた。

そしてもう一つは、ノーマが指摘したとおり『スピリット・ヒューマン』のカードが無いことだ。

……いや、無いことはない。だがそれは彼女が持っている他のカードとは違い通常のラウズカードで、彼女がそれを取り出したのもカードケースからではなく懐のポケットからだ。

白奈はそれを取り出すと、そのカードを大切なモノを見るようで、それでいて羨むような複雑な目で見つめていた。

「はぁ……あっ!？」

しばしそれを見つめて、重々しく溜息をつく白奈。だが突然何かに気づいたように声を上げると、徐に座っていた椅子から立ち上がった。

「力が強くなってる……また動き出した。」

白奈はそう呟くと、急いで机の上のカードをかき集めて部屋から出て行く。

そして宿の外に行こうとして……唐突にその足を止めた。

「あ、あなたは……」

立ち止まった白奈の前、そこにはつい先程出会ったばかりの男性、嶋がいた。

その頃、ノーマは朝の青羽と嶋の様子からやはり何かがあったと考え、彼と話をするために宿の中を捜し歩いていた。

「あの人は一体……ん？」

ノーマがしばらく宿の中を彷徨い、いよいよもって彼が宿を出て街に行ったのかと考えたとき、角を曲がった先に嶋と白奈が相對しているのが見えた。嶋の顔は今朝青羽と對面していた時と同じく無表情であり、對する白奈はやや困惑した様子をみせている。

一瞬この場で出ていこうかとも思ったが、白奈に対しても警戒心を抱いているノーマはしばらく二人の様子を観察することにした。もしかしたら、まだ自分たちが知らない秘密があるかもしれない。

「お——い——よ、まさ——ん——で————に会える——だ——らね。」

「ッ!?!? 嶋——、ど——て、——を……」

懸命に聞き耳をたてるノーマだが、開いてる窓から聞こえてくる街の喧騒と、距離が離れた曲がり角に隠れていることもあって断片的にしか聞き取れないでいた。もっと近づけば何か分かるかもしれないな

いが、生憎角を曲がってからには遮蔽物になりそうなものが何一つ無い。ヘタなことをすればすぐに見つかってしまい、結果二人に会話を中断させてしまうことになる。

アンデッドと戦うために造り出された人造人間であるノーマは当然五感も優れている。だがそれは中途半端に敏感なだけであって、それのおかげでノーマも聴覚は彼女に必要な以上の喧騒ノイズをもたらししていた。

ノーマは至らない自身の能力に齒噛みしながらも、なんとか有力な情報を得ることができないかと必死に聞き耳をたてる。

「何故――まで――る？ 君――や――同――だ、そ――君――何故――こ――で必死に――間――為――え――？」

「私――・・彼――対――存――す。――ら、――には――――で――心――ません。」

（対？ 対とは一体・・）

様々な要因によって断片的にしか聞こえてこない二人の会話、その中からノーマは気になる単語を聞き取った。

白奈は自分が何かと対になると言っていた。おそらくそれは、白奈がノーマの知らないカリスに変身できることに関係があることなのかもしれない。しかし、それは一体何を意味しているのか？

その後もノーマは聞き耳を立てていたが、それ以上気になる情報を得ることはできず、白奈と嶋は二言三言話すとその場で別れてしまった。

（何を話していたのかはいまいち分かりませんでした、とにかく

あの二人には今後も警戒したほうが――)

ノーマが二人の会話を盗み聞きした結果からとりあえずの結論を出したその時……

「やあ、精が出てるね。」

「んなッ!?!?」

突然角から嶋が顔を覗かせてノーマに声をかけてきた。まさか見つかっているとは思っていなかったノーマは、あまりの出来事に一旦思考が止まってしまう。

しかし嶋は、驚愕の表情でいるノーマを前に何をするでもなく微笑んでいた。

「まあ、君が私を警戒する気持ちも分かるがね。もうちょっと信頼してくれてもいいんじゃないかな?」

「……参考までに、どのタイミングで気づいていたのか訊いてもいいですか?」

ノーマは嶋の質問には答えず、努めて冷静に振る舞いながら口を開いた。その内心では、未だ同様が続けていたが。

「私が得意なことは……何だったかな?」

そんな彼女に対し、嶋は直接答えることはせずにこれだけを話した。最初は馬鹿にされているのかと思ったノーマだが、少し考えて彼の言いたいことをすぐに理解する。

「風……ですか?」

「その通り。」

ノーマが導きだした答えに、嶋は満足そうに頷いた。

「嶋さん、貴方は一体何者なんですか？」

「それは君ならすぐに分かるんじゃないかな？」

嶋の言葉に、ノーマはどういう事なのかを訊ねようとする。だが・

「ッ!？ あ、貴方はッ?!」

嶋から発せられる人間とは異なる歪な気配……ノーマにとって馴染みのあるその感覚に、彼女はサングラスの奥で再び驚愕に目を見開いた。

即座にカリスラウザーを取り出して変身しようとするノーマだが、それよりも早くに嶋の体がそれまでとは全く異なる姿に変異した。

「フッ。」

「あっ!!!?!」

つい先程まで嶋の姿をしていた異形……上級アンデッド・タランチュラアンデッドは、手から無数の蜘蛛の糸を飛ばしてノーマを絡めとってしまう。

必死にもがいて拘束から逃れようとするノーマだが、流石の彼女でも変身せずに上級アンデッドが出した糸を引きちぎることはできないでいた。

彼女がもがく中、嶋は追撃を加えるわけでもなく即座に人間の姿に戻る。

「落ち着きたまえ、別に私は君たちに敵対しようと言うつもりはない。」

「信用、出来ません！ 何を証拠に、そんな、ことを・・・」

嶋の言葉に聞く耳を持たないノーマ。そんな彼女に近づいた嶋は、何も言わずに自分が出した糸をちぎっていく。

「な、なにを？」

「言っただろ、私は君たちの敵ではないと。君を縛ったのは、あまり騒ぎを大きくしたくないからだ。」

そう言っている間に、ノーマを拘束していた糸は完全になくなり、ノーマは自由の身となった。束縛から解放されたノーマは、未だその手にカリスラウザーを持っているもののそれを腰に装着することはない。完全に彼を信用したつもりはないが、多少は話を聞いてその真意を見極めてみようと考えたのだ。

「何が目的か、話してもらえますか？」

「目的・・・という程のものはないよ。ただ彼の娘がどのように育ったのか、ちよつと興味が湧いたのでね。」

彼の娘というのは青羽のことだろう。そうノーマが考えていると、嶋は真っ直ぐ彼女の目を見つめてくる。

「君がアンデッドを封印することに特別な意味を持っているのは分かっている。だが、中には人間に友好的な考えを持つアンデッドがいることも分かって欲しい。私以外にも、そういう考えを持つアン

デッドは案外いるものなんだ。」

そう言って少し遠い目を見ると、徐に真剣な表情で口を開いた。

「そうそう、青羽君にはよく目を配っておいた方がいいよ。目に見えている彼女が全てではない、時には表面上は分からない彼女にも目を向けてみてくれ。それが彼女にとっても助けになるだろう。」

「？ それはと言う――」

「とりあえず、私はさっさとこの場から離れさせてもらうよ。アンデッドの力を使ってしまったからね、多分協会のサーチャーに引っ掛けてこの辺りにライダー達が来てしまう。バレる可能性は低い、面倒にならないように少しこの場から逃げるとするよ。」

嶋の言っていることが理解できず、怪訝な顔をするノーマ。だが彼女がそのことを訊ねるよりも早くに嶋は近くの窓を開け放った。その瞬間突風が吹きノーマが一瞬手で視界を覆い、次の瞬間にはその場に嶋の姿は影も形もなくなっていた。

第47話 隠されるモノ・恐怖の扱い（前編）（後書き）

というわけで第47話でした。

青羽は恐怖心を抑えています。嶋さんには簡単にはばれていますが、少なくとも他のメンツにはバレてないです。何故彼女が嶋の指摘にあそこまで噛み付いたのか、それにはちょっとした理由があるのですが……

嶋さんは意外とあっさり正体をバラしました。現状そのことを知ってるのはノーマだけですが、多分次回あたりで青羽たちも知ることになるかと思っています。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第48話 隠されるモノ・恐怖の扱い（後編）（前書き）

どうも、黒服です。

自分は東京在住ですが、物が落ちた程度でなんとか無事でした。揺れた当初はめちゃくちゃ怖かったです；；

なにはともあれ、今回は後編の更新です。

第48話 隠されるモノ・恐怖の扱い（後編）

タジン・街中

白奈は街中を彷徨っていた。目的はただ一つ、サイズを止めるために。

宿を出る際、彼女は嶋にやめた方がいいと止められた。サイズは強力で邪悪、一人で立ち向かうのは危険過ぎると・・・

（それでも・・・それでも私は・・・）

もとより白奈は一人で行動してきた、仲間と呼べる者がいない彼女には最初から一人で立ち向かう以外に手がなかった。

その時、ふと白奈の脳裏に青羽たちの姿が過る。心の底からお互いに笑い合っている、目には見えない絆で繋がっているのが分かる彼女たちの様子を思い浮かべて、白奈は心に羨ましさを覚えた。

（私もあの中に加われたら・・・・・・無理だよね。）

一瞬、自分も彼女たちの輪に加えてもらえないかと思いつくが、すぐに自嘲的な笑みを浮かべてその考えを振り払う。仲間など自分には縁のない存在、望むこともおこがましい。

そんなことを考えながら街中を歩いていると・・・

「ッ!？」

突然何処からか、全身が粟立つような視線を向けられたのを感じた。
慌てて周囲を見渡す白奈、すると……見つけた。

「サイズ……」

街中を歩いている人々の流れ、その中に一人だけ異なる気配を発している少女、利香の姿があった。

白奈は彼女の姿を見るなり即座に臨戦態勢をとる。流石に人通りの多い町中で戦いを始めるつもりはないが、相手がそう考えてくれているとは限らない。というよりも今眼の前にいる相手のことを考えると、周りに人が居ようが問答無用で戦いを始める可能性のほうが高かった。

「……なんの用？」

だからこそ、白奈は相手をむやみに刺激しないようにしなければならなかった。戦いを避けることはまず難しいが、場所くらいならこちらで誘導することができるかもしれない。街の人々への被害をできるだけ少なくするために、白奈は慎重に言葉を紡いでいった。

「ちょっと、あなたに興味があつてね。」

「私の……何が気になるの？ そんなに変な部分はないと思ってるんだけど？」

「まあ……そんなに大したことじゃないけどね。人のいない所に場所を移しましょう。」

そう言って踵を返していく利香の様子に、白奈は若干意外そうな顔をした。彼女に出会ったのは一度だけだが、その時に感じた雰囲気

や言動からもっと好戦的だと思っていたのだ。

ともあれ、これでもやみに被害を広げる危険はグッと減ったわけだ。それでもあまり油断はできない。白奈は利香が心変わりしたときのために神経を張り巡らせながら、彼女のあとに付いていったのだった。

郊外

宿にて朝食を済ませた後、青羽は一人郊外にやって来ていた。

青羽は辺りに誰もいないことを確認すると、木刀を取り出して一心不乱にそれを振るい始める。まるで何かを振り払うかのように。

（もっと……もっと強くなりたい！）

強くなる……その一心の為に只管木刀を振るい続ける青羽。彼女のことをある程度知る者が見れば、その姿は自身の夢を叶える鍛錬に打ち込んでいるように見えただろう。

だが……

（強くなれば……そうすればあたしは……）

彼女の心を占めているのは、夢を叶えること以上の別のことだった。それを知る者は、おそらくほとんどいないだろう。少なくとも、彼女自身と彼女の家族以外には。

「そんなことでは、恐怖は振り払えないよ。」

「ッ!？ 嶋さん？」

そんな時、彼女の心の底に眠る願望を知る数少ない人物がやってきた。その人物こと嶋は、能面のような感情を感じさせない顔で口を開く。

「今の君では、強くなることなんて出来はしない。むしろ弱くなるばかりだ。」

「なんで、そんなことが言えるんです？」

「すぐに分かるさ。今みたいに恐怖を無理やり抑え込むようなやり方をしているようでは、その内サイズは愚か下級カテゴリーのアンデッドにも負けてしまうだろう。」

嶋の物言いに思わず反論しようとする青羽だが、開いた口からはなんの言葉も出ては来ない。

青羽自身も気づいているのだ、今の自分は弱いと。

ライダーの強さはメンタル面でのコンディションで決まる。となると、次第に戦うことへの恐怖を覚えた青羽では、ライダーシステムの力を発揮することができなくなってしまう。

それでもなにか反論せずにはいられない。自分は弱くはないと、そう考えていなければ自分の中で何かが崩れてしまうような予感がしていたから。

「そんな・・・そんなことはありません。あたしは、何も怖くなんて・・・」

「・・・じゃあ、試してみようか？」

「えっ？」

嶋の含みを持たせたような言葉に、首をかしげて聞き返す青羽。そんな彼女の前で、嶋はその真の姿を顕にした。

「えっ？ な、ええっ?!」

突然目の前でクモのような姿のアンデッドに変化した嶋に、青羽の頭はパニックを起こして正常な判断力を失ってしまう。そんな青羽の様子を見て、嶋が変化したアンデッド・タランチュラアンデッドは片手を上げた。

「さあ、掛かってくるといい。私は右手しか使わないよ。」

「嶋さん・・・アンデッドだったんですか？」

「ああ、その通り。」

「父さんの知り合っているのも、嘘だったの？」

徐々に冷静さを取り戻した青羽の問いかけに、タランチュラアンデッドは首を横に振る事で答えた。

「それは本当さ。私は昔彼に世話になったことがある。もちろん彼自身も、私がアンデッドだということは知っていたよ。」

そう言うのとタランチュラアンデッドは全身から威圧感を出し始める。

「そんなことより、早く始めよう。何時までもこうしては、邪魔が入ってしまう。」

「・・・手加減しませんよ？」

「手加減が必要なのは、むしろ君だと思うけどね。全力で来るといい。」

「ッ・・・変身！」

《Turn up》

相手の言葉に一瞬顔を歪めると、青羽は腰に装着したバックルのレバーを引いて仮面ライダーブレイドに変身する。

「はっ！」

ブレイドは変身するなり即座にタランチュラアンデッドに向かって斬りかかっていく。だが相手は右手だけでそれを軽くいなししてしまい、勢い余ったブレイドはそのまま前のめりに倒れこんでしまった。

「クッ・・・」

「どうした、攻撃にキレがないぞ？ そんなことではダークローチにだってダメージを与えられない。」

「ッ！？ このおッ！」

攻撃を軽く受け流された上でのダメ出しに、苛立ちを感じながら再び斬りかかるブレイド。だが結果は先ほどと同じく、簡単に受け流されてしまう。

それからしばらくの間、ブレイドは只管タランチュラアンデッドに攻撃を仕掛けていくのだが、右手だけで対抗してくる相手に掠ることはさえできなかった。

「グッ、くう・・・」

そして何度目になるか分からない攻撃を受け流したところで、タランチュラアンデッドはその姿を嶋のものに変化させた。

「分かったろ、今の君は弱い。そんなことでは信司くんを超えることなど夢のまた夢だ。」

そう言いながらブレイドに向かって歩み寄っていく嶋。その時……

「青羽ッ!!」

横から突然ノーマが割り込んできた。彼女は二人の間に割り込むと、即座にラウザーを腰に装着してカードを取り出した。

「やはり貴方は信用できません。一体青羽に何を「待ってノーマ!」、青羽?」

今にも変身して嶋に襲いかかりそうになっていたノーマだったが、ブレイドが彼女の方に手を置いて制止させる。そしてノーマの注意が自分に向いたことを確認すると、ブレイドは変身を解除して真剣な顔で嶋に向き合った。

「嶋さん、どうすれば……いいんですか?」

青羽は思いつめたような様子でそう尋ねた。それに対して嶋はしばらく考える素振りをしてから答えた。

「今の君は、溺れてパニックを起こしているような状態だ。だからどんどん嵌っていつてしまう、恐怖から抜け出すことができない。」
「えっ? どういう事ですか?」

「簡単にいえば、『恐怖を恐れるな』ということさ。」

嶋は一体何を言っているのか? 青羽だけでなくその場にいるノーマも理解できず首をかしげていた。

「あの、それってどういう？」
「ん?!」

一体どういう意味なのかと青羽が再度訊ねようとしたその時、突然
嶋が険しい顔をしながら街の方に目を向けた。

「嶋さん？」

「マズイな・・・サイズと白奈くんが戦っている。戒君と弘貴君
もその場に近づいてはいるが・・・」

「えっ!？」

何時もよりやや厳しい顔をして嶋が呟いた言葉に、青羽は驚愕の表情を浮かべる。同じくカリスを扱うノーマが近くにいるために、白奈も決して弱くはないだろうことは青羽にも分かる。だがサイズ自身の能力やスペックから考えると白奈でも苦戦は免れないだろう。

そう考えると青羽は居ても立ってもいられなくなった。

「ノーマ、行こう!」

「ええ。」

青羽はノーマと共にその場から踵を返して白奈達の下へ向かおうとするが、その時嶋が青羽の背に声をかける。

「行っとうする？ 今の君では足手まといもいいところだ。行ってもまた負けるだけだぞ。」

嶋の言葉に青羽は一瞬その場で立ち止まり考え込んでしまう。

確かに彼の言う通りかもしれない、今の青羽では足手まといにしかならないだろう。

或いはこの場に残って、事をノーマたちに任せてしまうのもいいかもしれない。弱い自分が行くよりはそのほうが良いに決まっていると、青羽の心が甘い誘惑を囁いてくる。

その誘惑に負けそうになり振り返ろうとした矢先――

「ッ!？」

青羽は自身の顔を渾身の力を込めて拳で殴った。

（何やってんのよ!？　こんな所で立ち止まってる場合じゃないでしょう!　もう・・・立ち止まらないって決めたんじゃないの?！）

青羽は心の中で自身を叱責すると、何も言わずにその場から去っていく。彼女の突然の行動に一瞬呆気にとられたノーマは慌ててついて行き、嶋はそんな二人の様子を黙って見送っていた。

街中

それから少し時間を遡って、白奈と利香は人気のない場所にやって来ていた。

「一つ聞きたいんだけど、なんで態々場所を移したの？」

「あら、どうしてそんなことが気になるのかしら？」

「あなたなら・・・周りのことなんて考えないと思ってたから・・・

・
」

白奈がそう言うと、利香は怪しげな笑みを浮かべて笑い出した。

「うふふふふ、だって邪魔が入ってほしくなかったんだもの。今は、あなたとだけ戦いたいだよ。」

「・・・どうして？」

「ちよつと、気になることがあるのよ。」

利香はそう言うと、サイズバックルとカードを取り出した。それを見て白奈もカードを取り出し、手を素早く腰に持っていく。

次の瞬間には、白奈の腰にはノーマのものと非常に良く似たカリスラウザーが装着されていた。利香はその様子に一瞬笑みを浮かべると、腰に装着したバックルを開いた。

「変身♪」

「変身！」

《Open up》

《Change》

二人はほぼ同時に変身すると、武器を構えてお互いに距離を詰めていった。

「ハッ！」

「フフッ・・・」

白奈の変身した白いカリスーアルビノカリスーはノーマの物とやや異なるカリスアロー『アルビノアロー』を振り下ろし、サイズはサイズラウザーの柄の部分で受け止める。

「さあ、見せてもらおうわよ。あなたの力。」

「何をッ！」

白いカリスが力を込めてアローを振るうと、サイズはその勢いを利用して一気に距離を取る。そして着地と同時に一気に相手との距離を詰めた。

「フッ！」

「くうっ?!」

アルビノカリスはなんとか攻撃を受け止めるも、攻撃した直後から強引に防御に回ったため不完全な体制で防がねばならなかった。その為サイズのパワーに徐々に圧されていていつてしまう。

「く、このっ!!」

アルビノカリスはこの状況を打開するため、力尽くでサイズラウザーを弾き飛ばす。だがそれは、彼女にとって致命的な隙を作り出してしまった。

《Slash》

「しまっ!?!」

「ハッ!!」

「うあっ?!」

サイズラウザーを弾き飛ばした際にできた隙を突かれて、サイズの強化された斬撃がアルビノカリスに襲いかかる。アルビノカリスは右腕を切り裂かれてしまい、腕を抑えた左腕の指の隙間からは彼女の血が流れでた。

「フフフフフ・・・」

「う、くっ・・・」

サイズは血を流すアルビノカリスの様子に愉快そうな笑い声を上げ、対するアルビノカリスは苦悶の声を上げる。サイズが悠々と歩いていきアルビノカリスに再度攻撃を仕掛けようとした瞬間――

「あ、兄貴あれッ!？」

「サイズ!？ 利香!!!？」

「あら？」

突然サイズの後ろから聞き覚えのある声が響いてきた。何事かとサイズが後ろを振り向けば、そこには自分を見て驚愕の表情を浮かべる戒と弘貴の姿が。

「？ 兄貴、あの白いカリスって白奈さんが？」

「ああ、アレは白奈が変身してるカリスだ。」

そう言って戒が視線を向ける先では、自身の体で隠すように右腕を抑えたアルビノカリスの姿が見える。その様子を見た戒は、自身のバックルにカードを装填して腰に装着した。

「や、やるんスカ？」

「やるしか無いさ。怖かったら逃げてもいい、ここは僕一人で行くか・・・」

「兄貴一人に任せるなんて薄情な真似できないっスよ、俺も戦うっス！」

弘貴は戒の言葉に首を横に振ると、自分もバックルを腰に装着した。

「「変身！」」

《《Turn up》》

二人はギャレン・アクスに変身すると、武器を構えて身構える。流石に先日手酷くやられてしまった手前、いきなり距離を詰めるなどということはしない。

（とはいえ、流石に二人で行くのは辛いか・・・）

先日は万全の状態でかつ4人で立ち向かったが、それでも一方的にやられてしまった。この場にはアルビノカリスもいるが、彼女は腕を怪我しているため戦うことはできないだろう。

「白奈！ その怪我じゃもう戦えないだろう、君は下がっててくれ！」

「ご、ゴメン・・・」

ギャレンは一先ずこれ以上戦闘を行えそうにないアルビノカリスを下がらせると、サイズにどう対処するか考える。彼としてはあまりサイズに積極的に攻撃を仕掛けることはしたくないのだが、同時に彼女を放っておくわけにもいかない。

（これ以上・・・利香の手を汚させはしない！）

ギャレンはアルビノカリスがその場から下がったのを確認すると、即座にギャレンラウザーの銃口をサイズに向けて引き金を引いた。

「うふ・・・」

サイズはギャレンの銃撃をいとも簡単に避けて見せる。それも当然、今の銃撃を彼は命中させる気がなかった。今のは謂わば牽制射撃、一瞬だけサイズに隙を作ってアクスに即興で立てた作戦を伝える為の時間を作ったのだ。

「弘貴、僕が先に行く。君はその隙に彼女に！」

「えっ！？　でも兄貴よりは俺が先に行ったほうが・・・装甲だつて俺のほうが・・・」

「いや、君が先に行くとその間の二の舞になる。今度は僕が先に行って彼女の注意を引きつけるから、その間に近づいて攻撃するんだ。」

ギャレンがそう言うのと、アクスは一瞬考え込んだあと小さく頷いた。

「よし、行くぞ！」

アクスが頷いたのと同時に、ギャレンは力強くそう言ってサイズに銃撃を行いながら突撃していった。今度は牽制を目的としない、純粹にサイズにダメージを与えるための攻撃である。それと同時にアクスからサイズの注意をそらすことも目的としている。

「ハッ、フッ。」

正確に狙いを定めてラウザーから放たれた銃弾、サイズはそれを自身のラウザーで次々と防いでいく。ギャレンはその様子を見ても怯まず突き進んでいきいよいよサイズの攻撃の射程圏内に入るという時、出し抜けにジャンプしてサイズの頭上を飛び越えた。

「ッ！！？？」

突然のギャレンの行動に驚き、そのままギャレンの動きを追いかけてしまうサイズ。彼がサイズの真後ろに着地したとき、同時にアクスが攻撃できる範囲に彼女を捉えた。

「へえ・・・」

そこでようやく自分がギャレンとアクスの二人に挟まれている状態になったことを理解し、短時間でこの状況をつくり出してみせたギャレンに対し称賛の声を上げる。

前を見れば銃口を向けるギャレン、後ろを見ればラウザーを振りかぶっていつでも攻撃できるように構えたアクスがいる。並の相手であればここで焦ってその場から逃げようとするなり、自棄になってどちらか一方に攻撃を仕掛けようとするだろう。

だが、サイズは並の相手ではなかった。

サイズはアクスの方を見ながらラウザーを構えて、今にも斬りかかるんとする。アクスは来たる攻撃に備えていつでも防御できる構えを取り、反対側のギャレンもいつでも撃てるように引き金に力を込めていく。

だが・・・

「ハッ!!」

サイズは振りかぶったラウザーをアクスではなく、背後にいたギャレンに向かって背を向けたまま振り下ろした。

「なっ?! ぐあっ!?!」

「兄貴ッ!?　ぐっ?!」

サイズの周りを半円を描くようにして振り回されるサイズラウザー、正しく死神の鎌のごとく迫ってくるその刃をギャレンは慌てて回避しようとするが、リーチを生かしたその攻撃を避けきけることはできず胸の装甲を切り裂かれた。

それにアクスが気を取られている隙に、ラウザーを振り下ろしたと同時に前に踏み込んだサイズの伸ばした左手が彼の首を握りしめる。

「ぐう……が、か……」

変身前の少女の姿からは想像できないほどの怪力で首を締め上げられ、気道を塞がれるアクス。仮面の下で弘貴は目を見開きながら空気を求めて口を動かすが、サイズはさらに力を込めて彼の意識を刈り取ろうとする。

「く、弘貴!?!」

サイズの攻撃からなんとか体制を立て直したギャレンが、アクスを解放しようと彼女に銃口を向ける。

しかし彼が銃口を向けると同時にサイズは左手に掴んだアクスをギャレンの方に向けた。その瞬間彼は引き金にかけた指を硬直させてしまう。

「うっ……」

「お馬鹿さん!」

「グッ!?　があっ?!」

仲間を盾にされたことでできた大きな隙、サイズはその隙を見逃さなかった。サイズラウザーで素早くギャレンラウザーを弾き飛ばすと、返す刃で再びギャレンの装甲を切り裂いたのだ。

「いい加減邪魔だし、コレかえしてあげるわ。それっ！」

「あっ!?!? ぐう?!」

さらにサイズは手に持ったアクスを渾身の力を込めてギャレンに向かって投げつけた。咄嗟にアクスを受け止めようとするギャレンだが、ダメージを受けた体では受け止めきるのは容易ではなく敢え無くアクス共々吹き飛ばされてしまった。

吹き飛ばされた先で倒れこむギャレンとアクス、そんな二人に歩み寄っていくサイズ。

「う、くっ・・・」

「ゲホッ、ガハッ・・・は・・・」

二人はうけたダメージの大きさから立つこともままならず、拳句の果てに変身も解除されてしまう。徐々に近づいてくるサイズの姿に戒が半ば諦めかけたその時・・・

「待ちなさい。」

突然サイズの背後から、ようやく追いついたノーマが声をかける。その視線は真っ直ぐサイズに向けられており、手にはカリスラウザーが握られていた。

「あら、あなた達も来たのね。」

サイズは現れたノーマと、彼女の後ろにいる青羽に興味を移してそちらを見た。

ノーマは倒れている戒と弘貴に一瞬目を向けると、すぐに表情を引き締めてラウザーを腰に装着する。だが一方の青羽は、サイズに視線を向けられると一瞬ビクリと肩を振るわせてしまう。立て続けに嶋に自身の恐怖心を指摘されたことで、それまで意識しないようになってきたサイズに対する恐怖が表面に現れるようになってしまったのだ。

そして、サイズはそんな青羽の反応を見逃さなかった。

（あの子……ふん、コレはなかなか楽しませてくれそうね。）

サイズは内心でそう考えると、ラウザーを二人に向かって構えた。

「いいわ、コレで終わっちゃつまらないと思ってたところだし。あなた達二人の相手もしてあげるわ。」

「今度はそう簡単にはいきません。青羽、行きますよ。」

「う、うん。」

（ん？）

ノーマは一瞬躊躇したような声を上げた青羽に内心で首を傾げるが、目の前にサイズがいるということで即座に雑念を振り払って変身する。

「変身！」

《Change》

「変身。」

《Turn up》

ノーマと青羽はカリスとブレイドに変身すると、同時にサイズに向かって立ち向かっていった。

「ハッ！」

カリスがカリスアローで斬りかかると、ブレイドがそれに合わせてブレイラウザーで突きを放つ。ブレイドが袈裟懸けに斬りかかれば、カリスが飛び蹴りを放った。

だがサイズはそんな二人の連携もモノともせずいなすと、お返しとばかりに強烈な斬撃と掌打を放ってきた。

「フッ、シッ！」

「ちっ?!」

カリスは斬撃を避けるために咄嗟に真横に飛び退き、掌打を放たれたブレイドは左手でガードする。戦況は決してブレイドたちに有利とは言えず、むしろ二人を相手に一向に退く様子を見せないサイズに分があるように見えた。

そして……

「さて、どうなることか……」

彼女たちのそんな様子を、近くの木の影に隠れた嶋がジッと見つめていた。

「ハアッ！」

「ガッ?!」

「ノーマ!?」

嶋が見ている先で、戦況はさらに悪化していった。サイズは二人の連携を潰して戦力を分断すると、手始めにカリスから潰しにかかる。

サイズの苛烈な攻撃とパワーにカリスは圧されていき、背後から止めようとブレイドが攻撃を仕掛けるがそれらは軽く受け止められ防がれてしまう。

「うあ、グッ?!」

そうこうしている内についてカリスはサイズの力に負けて仰向けに倒れてしまい、追い打ちとばかりにサイズに胸を踏みつけられて動きを封じられてしまった。

「く、このっ!!」

ブレイドはカリスを押さえつけているサイズを退かすために攻撃を仕掛けるが、サイズは煩わしい虫を追い払うような感覚でブレイドを一蹴してしまう。

「ぐうっ?!」

「青羽!?」

カリスが咄嗟にブレイドに呼びかけるが、同時にサイズがカリスの首にラウザーの刃を突きつけながらブレイドに声をかけた。

「あなた・・・弱くなったわね。」

「な、え？」

ブレイドは突然のサイズの言葉に一瞬呆然となる。対するサイズはそんな彼女に構うことなく言葉を続けた。

「さっきの戦いだってそうよ。一番最初にあなたと出会ったときはもっと齒応えがあったけど、今じゃ見る影もないじゃない。」

その代わりに髑髏甲斐は出たと言いながら笑う。

「まあ理由は分からなくはないわ。あなた、私が怖いんでしょ？」
「ッ！?!?!」

「知ってるわよ、ライダーシステムって装着者の精神状態で強さが変化するんでしょ？ だから今のあなたは弱くなっている。私が怖いから。」

サイズはブレイドを見ながらそう語っていき、対するブレイドは彼女の言葉のすべてが的を射ていたため何も言い返せずにただ体を震わせていた。

その様にサイズは満足すると、ラウザーを天高く振り上げた。

「あなたはそこで黙ってみたなさい。カリスを始末したら、次はあなたの番だから。たっぷり楽しみましょ。」
「くっ！？」

その瞬間、カリスは必死になって藻掻くが先程のダメージから思うように動けない。そうしてサイズの持つ死神の刃がカリスの首に振り下ろされそうになっていき……

その様子を見ていたブレイドの脳裏に、ある光景が重なった。

複数のダークローチに囲まれた幼い少女・・・

その少女の周りはダークローチで埋め尽くされており、逃げるなどできそうにない・・・

そして、少女は必死に青羽に向かって手を伸ばして・・・

『青羽?! 助けて青羽!?! 助けてえ!?!?!?』

「ッ!?!?!? うわああああああああっ!?!?!?」

その少女の声を聞いた瞬間、目の前の光景がダークローチに囲まれた少女のものからサイズに首を切り落とされそうになっているカリスのものに切り替わった。

それと同時に、ブレイドは叫び声を上げながらサイズに向かって突っ込んでいき、カリスに向かって振り下ろされた刃を自身の体で強引に受け止めた。

「ぐううっ?!」

「なっ?!」

「青羽ッ!?!」

ラウザーで何とか受け止めるが強引に割り込んで止めたためその勢いを殺しきることはできず、案の定サイズの刃はブレイドに届き、おまけに装甲を突き破ってブレイドの左肩のあたりに突き刺さっている。

当然のことながらカリスはブレイドの心配をしたが、それと同時にサイズも驚愕の声を上げた。まさかここで彼女が割り込んでくるとは思っても見なかったのだ。

「ぐ、うう・・・」

「あなた・・・どういうつもり？ 私が怖くないの？」

痛みに呻くブレイドに、サイズがそう訊ねる。それまでの彼女・・・カテゴリーAが得た人間に関する情報では、恐怖にとりつかれた人間は逃げることもまともに出来ない格好の獲物だったからだ。

事実、ブレイドはサイズに対して尋常ではない恐怖心を抱いていた。嶋が指摘していたとおりに・・・

「そうね、確かに・・・あたしはあんたが怖いわ。」

それに対して、ブレイドは声を震わせながらそう答えた。顔は俯かせており、よく見れば体もかなり震えている。彼女今も恐怖心をサイズに抱いているのは明らかだ。

「でも・・・それでもねえ・・・」

だがそれでも、ブレイドは必死になって自身を奮い立たせた。彼女には、負けるわけにはいかない理由があったから。

「あたしは・・・怖くても、負けてらんないのよ！」

「ッ!？」

ブレイドはそう言いながらサイズラウザーを左肩から引き抜き、それを強引に振り払うとサイズに向けてラウザーを振り下ろした。

「うあっ?! この、ぐっ!?!」

「あたしは、あんたが怖い! でも、怖さに負けて、“また”同じことを繰り返すことのほうが、ずっとずっと怖いのよ!」

「がっ?!」

ブレイドはそう叫びながらサイズに次々と攻撃を加えていく。その凄まじい気迫に、サイズは次第に防戦一方になってきた。

「だからあたしは、あんたを倒す! 痛めつけたいんだったらやってみなさいよ、噛み付いてだって抵抗してやるんだから!」

「こいつ、調子にのるんじゃないわよ!?!」

ブレイドの猛攻を、サイズは力技で振り払う。だがそれでもブレイドはしぶとくサイズに立ち向かった。

そして、そんな様子を見ていた嶋は、ブレイドを見つめながら口を開く。

「恐怖に正面から立ち向かったか……それでいい。」

そう言う嶋はキャリーバッグの中を漁り、そこから手の平より少し大きい程度の大きさの箱のようなものを取り出した。

「ブレイド!」

箱を取り出すと、嶋はブレイドを大声で呼びながらそれを投げた。

「ッ!?! 嶋さん、って!」

突然呼びかけられたブレイドは困惑しながらも、投げられたそれをキャッチする。そして、投げられたそれを手にした時、それがなんなのかを目にして驚愕した。

「ラ、ラウズアブゾーバー?!　なんで、嶋さんがコレ――」
「それを使え!　今の君なら使えるはずだ!!」

ブレイドは嶋の言葉に一瞬の逡巡を見せたが、すぐに気を引き締めて手にしたラウズアブゾーバーを左腕に装着。そしてオープントレイを開いてそこに入っていたスペードのJとQを取り出した。

《A b s o r b Q u e e n》

アブゾーバーの上部にQを装填し・・・

《F u s i o n J a c k》

Jのカードをスリットにスラッシュする。

するとその瞬間、ブレイドが光り輝く大鷲のイメージに包まれた。

「な、何っ?!」

突然の光に怯むサイズ。そして光が収まった時、そこには・・・

「これが・・・ジャックフォーム?」

頭部と胸の装甲が金色に輝き、その背中には3対のマントのような巨大な翼・オリハルコンウィングを持ったブレイドの高機動形態で

あるブレイド・ジャックフォームが佇んでいた。

ジャック
Jブレイドはしばし自身の姿を見て、刀身がやや長くなったブレイドラウザーを見ると、再びサイズに視線を向けた。

「フンッ、なんだかパワーアップしたみたいだけど、その程度であたしが倒せると思ってるの!!」

サイズはそう言って鼻で笑うと、Jブレイドに向かってラウザーを振り下ろす。対するブレイドは、サイズの攻撃を僅かに横にずれることで回避。さらに続く連撃も風に舞う羽のように軽やかな動きで次々とかわしていった。

「くっ、ちよろちよろとッ!？」

「ハッ!」

「あぐっ?!」

自身の攻撃が当たらないことに焦りを見せるサイズ。そして相手の動きに微かな隙を見つけた瞬間、Jブレイドは鋭い一撃をお見舞いし、さらにそこから次々とサイズに攻撃を加えていった。

サイズも必死になって反撃しようとするが、形勢はそれまでとは完全に逆になりJブレイドが一方的に攻撃していった。

「こんな・・・こんな筈が、なんで・・・」

全く予想もしていなかった事態に、サイズは困惑した声を上げる。それに対して、Jブレイドは勝負を決めるべくオープントレイから2枚のカードを取り出した。

「これで・・・あんたも終わりよ。これ以上好き勝手にはさせないわ。」

《Slash Thunder》

Jブレイドが2枚のカードをラウズすると、それを見たサイズも急いでカードを2枚取り出した。

「こんなこと、あり得ない・・・認めない!？」

《Slash Dark》

《Lightning Slash》

《Darkness Slash》

Jブレイドとサイズのラウザーから電子音声になると、二人のラウザーにそれぞれ雷と闇の力が宿る。それと同時に、Jブレイドのオリハルコンウィングが開き彼女を空に飛翔させた。

「空を手に入れたからって、嘗めるなあ!!？」

「おおおおおっ!!！」

サイズがそう叫ぶと同時に、雄叫びを上げながらJブレイドがサイズに突撃していく。そして、サイズの目の前で急上昇すると、見上げるような高さから急降下しつつラウザーを振り下ろした。

「はあああああっ!!！」

「消えろおっ!？」

Jブレイドの放つ『ライトニング・スラッシュ』と、サイズの放つ『ダークネス・スラッシュ』がぶつかり合い、小規模な爆発が起る。

「うわっ!？」

「くっ!」

「り、利香・・・っ!？」

二人の必殺技がぶつかり合った瞬間起こった爆発の閃光から、ノーマたちは目を守るように手や腕で顔を覆い隠す。

そして、爆発と閃光が収まった時を見計らってゆっくりと各々視界を覆っていた手などを退けた。そこには地面に落ちている砕けたサイズラウザーの刃の部分と、その前に佇んでいるJブレイドの姿があった。

「・・・逃げられた、か。」

Jブレイドは砕けた刃を見てそう呟く。状況から見ても、サイズは刃が砕ける瞬間自身の不利を悟って爆発に紛れて逃げ出したのだろう。

勝利できたわけではないことに若干残念な気もするが、サイズを正面から戦って追い払えたのだ。まずはそのことを喜ぶべきだろう。

そう思い直して、Jブレイドは変身を解除しながら仲間たちのところへ向かっていった。彼女の仲間たちも、ようやく動くようになって体が立ち上がりながら彼女と合流しようとする。

「ん? げっ!? なんだコレ？」

そんな時、弘貴が自身の腕になにか液体が付いていることに気がついた。なにかと思いきその部分を触ってみると、それは若干粘性を持った緑色の液体だった。

「アンデッドの血？ な訳ないよなあ、さっきまでアンデッドなんていなかったんだし。」

弘貴はそれを一瞬アンデッドの血か何かかと思ったが、つい先程までアンデッドなど陰も形もいなかったことを思い返しそれはないと自身の予想を振り払った。

とにかく気持が悪いので、弘貴はその緑色の液体をハンカチで拭き取ると、改めて青羽達の下へと歩いて行った。

第48話 隠されるモノ・恐怖の扱い（後編）（後書き）

という訳で、第48話でした。

今回ついにブレイドのジャックフォームが登場です。当時はサイガと同じく仮面ライダーが単体で空を飛べるということで、かなり印象に残っていました。後に、空を飛べるライダーとしてスカイライダーがその身一つで空を飛べるということを知ったわけですが（笑）。

今回チラッと青羽の過去に関わるシーンがありましたが、現状これがなんなのかはまだ秘密で。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第49話 父から子へ・受け継がれるもの（前書き）

どうも、黒服です。

今回は前回のサイズ戦の直後の話。嶋が持っていたラウズアブソーバーの出所も判明します。

そして、ついにあのアンデッドの名前が・・・

第49話 父から子へ・受け継がれるもの

タジン

サイズを退けた青羽は、仲間たちと合流した後も何処か放心状態になっていた。どこかぼおっとしており、まだ自分のやったことに実感が持てていないらしい。

「やったっスね姐さん!! あのサイズを追っ払いましたよ!」

「そ、そうね。」

「大丈夫ですか?」

何処か歯切れの悪い様子の青羽に向けて、ノーマが心配そうな視線を向ける。

「あはは、大丈夫よ。なんかちょっと実感が持ててないっていうか、サイズをあたしが追い払えたってことがまだ信じられなくて・・・」

青羽はそう言って笑いながら頬を掻く。

その時、嶋が彼女たちに近づいてきた。

「今のは間違い無く、青羽くんのだよ。もっと胸を張ったっていい。」

「嶋さん・・・」

嶋は青羽に近づくと、彼女の顔をしばし見つめた後口を開いた。

「恐怖に立ち向かったようだね・・・それでいいんだ。水を恐れていては溺れてしまう、恐れなければ泳ぐことができる。」

「恐怖も、同じってことですか？」

「そうだ。恐怖を恐れていては心がどんどん弱くなってしまう。だが、恐れず立ち向かえば人はその恐怖をバネにさらに高みへ登ることができるとだ。」

ここにきて、青羽もようやく嶋が言おうとしていることを理解した。人が溺れるのは、その理由の大半が水に対して恐怖心をいだいているから。

先程までの青羽も、同じように恐怖に対して恐怖心を抱いていた。それが彼女の動きを鈍らせて、彼女自身を弱くさせていたのだ。

恐怖は恐れるものではなく立ち向かうもの。恐れを振り払った瞬間、人はそれまでよりも更に先へ進むことができるのだ。

「そう言えば嶋さん、何で貴方がこれを持ってたんです？」

青羽が話し終わると、ノーマはこの場における最大の疑問を口にする。

「確かラウズアブソーバーは、協会が実施している試験をパスしないと入手できないものだったはずですが？」

もしや誰かから盗んだのではないか？ そんなことを考えているノーマに対して、嶋は柔らかな笑みを浮かべながら答えた。

「これはね、青羽くんのお父さんから預かったものなんだよ。」

「えっ！？ これ、父さんの何ですか？！」

予想外の答えに、青羽が目を見開きながら自身の持っているアブソーバーに目を向ける。

「君のお父さんが、今は殆どライダーを引退した身であるのは知っているね？ その時彼に預かったんだよ。自分にはもう必要ない、もし私が認めた人物がいたらその人に渡してほしい・・・とね。」

嶋の言葉に、青羽はそれまでとは異なった感情でアブソーバーを見る。

父がかつて使っていたアブソーバー、それが何の因果か青羽のものとなった。いろいろな感情や想いがごっちゃになって何を思えばいいのか分からなかったが、青羽はそっと笑みを浮かべて手の中にあるアブソーバーをゆっくり撫でた。

そして心を落ち着けた後、彼女は嶋に対して深く頭を下げた。

「嶋さん・・・ありがとうございます。」

路地裏

その頃、なんとかあの場から逃げ出したサイズは、変身を解除して路地裏に逃げ込んでいた。

「何で？ 何であたしが負けたの？ サイズは、最強のライダーシステムの筈じゃ・・・」

利香は困惑した顔になりながら、呪詛のように同じような言葉を呟

いていた。

初めて味わった敗北感、絶対無敵と思っていたサイズが圧倒された挙句戦いから逃げ出すという屈辱。しかも相手は、それまで絶好の獲物だと思っていた青羽なのだ。先程の敗北は、とてつもない程の憎悪を利香に抱かせた。

「もっと・・・もっと力・・・そうだ。」

力が欲しい・・・そう考えた瞬間、利香の脳裏に青羽が強くなるのに使用したラウズアブソーバーが浮かんだ。

「私もアレを使えば、今よりももっと強くなれるはず。そうと決まれば、まずは・・・」

利香は自身の考えに笑みを浮かべると、それを実行するべくその場から移動していく。その顔には、今まで以上に狂気に歪んだ笑みが浮かんでいた。

場面は戻って再び青羽達

「そう言えば、白奈の姐さん大丈夫っすかね？」

「えっ？ 白奈居たの？」

青羽と嶋の話が一段落したとき、不意に思い出したかのように弘貴が白奈の名前を口にした。そこでようやく戒も白奈のことを思い出し、青羽とノーマに彼らがここに到着した時点で白奈がいた話を話す。

「サイズと一足先に戦ってたみたいだね。腕を切られてたみたいだから、一先ず下がってもらってたんだけど・・・」

ざっと辺りの気配を探って見る限り、この辺には彼女たち以外に誰かがいるという事はなさそうだ。となると、白奈は傷ついた体でこの場から離れてしまったということである。

「嶋さん、白奈って今何処にいるか分かりますか？」

「・・・・・・彼女はどうかやらここから少し離れたところにいるらしい。でも心配は要らないよ、怪我也自分で治療できたみたいだし。怪我自体そう大きなものじゃない。」

青羽が嶋に訊ねると、彼はそう言って若干ながら焦りを見せた青羽を宥める。

だがその直後、嶋は何か考えるような仕草をとると徐に口を開いた。

「青羽くん、君に一つ教えておきたいことがあるんだ。」

「何です？」

突然真剣な表情になって話してくる嶋に、青羽は首を傾げた。

「君のお父さんに、怪我を負わせたアンデッドのことだ。」

「ッ!？」

その瞬間、青羽は一気に体を緊張させた。

父・信司はアンデッドとの戦いで負った傷が原因で、今となってはほとんどライダーに変身することが無くなってしまった。

過去に青羽は何度か信司にその相手のアンデッドについて質問してみたことがあったが、いつも決まって適当にはぐらかされてしまっていた。その相手が今、嶋の口から語られようとしている。

青羽は自然と身構えて、嶋の言葉を一言も聞き漏らさないようにした。

「君のお父さんに傷を負わせたアンデッド、それは・・・」

「それは？」

青羽は固唾を飲んで嶋の言葉を待つ。青羽だけでなく、気付けばノーマ達も嶋の言葉に耳を傾けていた。

そして・・・

「それは・・・ジョーカー。」

ついに、嶋の口からその名が語られた。

「ジョーカー・・・」

青羽は嶋が口にしたアンデッドの名を、自身の口で噛み締めるように呟いた。

「それは・・・一体どんなアンデッドなのですか？」

「ふむ？ 君も知らなかったのか？」

「生憎と、私も全てのアンデッドに対する知識があるわけではありませんので。」

ノーマの言葉に、嶋はやや意外そうな顔をした。彼の能力を以てす

ればその程度のことも簡単に知ることが出来ただろうが、彼とて他人の隅々まで知ろうとするほど悪趣味ではない。それは彼の弟子の寧々として同様だ。最低限、他人の踏み込んではいけない領域には踏み込まない程度の良心はある。

「ジョーカーはかなり特殊なアンデッドでね、まず数が非常に少ないんだ。」

「数が少ない？ 出現頻度が低いとかじゃなくてですか？」

「ああ、こいつは世界に2体しかない。」

嶋がまず最初に口にしたジョーカーの特徴、青羽達はその時点で驚かされた。どんなアンデッドであれ、スートや強さの違う同種が複数は存在するものである。

「次に、ジョーカーは他のアンデッドの姿と能力を借りることができる。」

「アンデッドの姿を・・・借りる？」

「・・・・・・待ってください。それはもしや・・・・」

「察しがいいね。そう、ノーマくんが持っているラウザーは、まさにジョーカーの能力を擬似的に再現したものなんだ。」

他のアンデッドの姿と能力を借りる・・・それはノーマが持っているラウザーの特徴である『どのスートのAでも変身できる』と非常に良く似た特性だった。

「そのジョーカー、やっぱり強いんですか？」

一頻りジョーカーに関する情報を聞いた後、青羽は一番聞きたい内容を口にする。もっとも、これについては態々聞くまでもなかったかもしれない。

娘である自分が言うのもなんだが、父の力は今でなおベテランのライダーの上をいくと青羽は思っている。今でさえそうなのだから昔はもっと強かったのだろう、であるとすればその父を倒すジョーカーの強さはかなりのモノだろう。

それでも、青羽は訊かずにはいらなかった。

「・・・強いよ。全てのアンデッドの中でも上位に入る強さは持っているはずだ。」

嶋の声は決して大きいものではなかった。だがその言葉は確実に青羽の耳に入り、その心に重くのしかかっていた。

思わず青羽は手を口元に持っていき、人差し指の中程を軽く咥える。

しばらくそうして何事か考えた後、彼女は嶋に問いかけた。

「あたし、ジョーカーに勝てますか？」

「それは、今後の君次第だよ。」

彼女の問い掛けに、嶋はそれだけを言った。それは聞きようによってはつれないものであったが、同時に言葉通りに捉えることも出来た。

「そうですか・・・よし！」

今後の青羽の成長具合では、ジョーカーに勝てる見込みもある。それはある種の希望でもあった。

「青羽だけではありませんよ。」

それに、彼女は決して一人ではない。

「俺達だってお手伝いするッス！」

「そういう事だよ、青羽。」

ノーマに続いて弘貴と戒が青羽に向かってそう言った。それは何よりも頼もしく、また安心出来る仲間からの言葉だ。

彼らの言葉に、青羽は照れくさそうにしつつも満面の笑みをその顔に浮かべたのだった。

第49話 父から子へ・受け継がれるもの（後書き）

という訳で、第49話でした。

嶋が持っていたラウズアブソーバーは、青羽の父のものでしたという話です。青羽の父である信司は生活資金集めの為のダークローチ討伐意外では殆ど戦うことがなくなったので、彼が信頼を寄せる誰に対しても基本平等な嶋に必要な無くなったアブソーバーを預けたという感じですね。

ちなみに既に紅羽が寧々からアブソーバーを貰っていますが、寧々はアレとは別にもう一つアブソーバーを持っています。彼女が紅羽に渡したのは寧々自身の物。もう一つは、彼女がある人物から譲り受けたものです。誰に貰ったものかは、今後の話か予定している外伝的な小説で描いていくかもしれません。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第50話 疑惑と企み（前書き）

どうも、黒服です。

今回割とサイズのシーンが多めです。彼女が何を考えつきどう行動するのか、それが明らかになります。

第50話 疑惑と企み

タジンから少し離れた程度の距離にある、鬱蒼とした木に覆われた森の中。

そこで、複数人の仮面ライダーダガーが戦闘を行っていた。

「クソツタレ！ この野郎！？」

苦戦しているからか、ダガーの一人が悪態をつく。そんな彼の近くに、別のダガーが飛ばされてきた。

「ぐわあああああっ?!」

ダガーが飛ばされてきた方、そこには人間とは全く異なる姿をした異形の存在がいた。

「きやはははははは！ この程度なの？ 人間が変身したライダーってのは!!」

それは全身にびっしりと生えた鱗に、頭部から髪の毛のように伸びる蛇を持ったアンデッド・・・上級のカテゴリーQ、サーペントアンデッドだった。

アンデッドはその場にいるダガーを一人、また一人と葬っていく。ダガー達も必死の抵抗を見せるが、相手はベテランのライダーでも苦戦を強いられることのある上級カテゴリー。力及ばず、彼らは皆サーペントアンデッドに倒されてしまった。

「うふふふ、あゝ楽しかった!」

ダガーを全滅させると、満足したのかアンデッドはその姿を人間のものに変えた。人間の姿をしたそいつは、長い黒髪を持って愉快そうな笑顔をした女性のものだ。

「相変わらずね、あなたは。」

「? あら、誰かと思ったらみゆきじゃない。」

突然声をかけられた女性が声のした方を見ると、そこには不敵な笑みを浮かべた一人の女性・吉永 みゆきの姿があった。

みゆきの姿を確認した女性は、親しげな様子で彼女に近づいていく。

「久しぶりじゃない。今日はどうしたのよ?」

「ちょっと面白いことを考えていてね、どうせだからあなたも誘ってあげようかと思ったのよ、あずみ。」

あずみと呼ばれた女性は、興味津々といった様子でみゆきの話に耳を傾けた。

タジン

あの後、青羽達は嶋と別れて街中を歩いていた。

「それじゃあ、次の街に行くために色々と準備でもしますか?」

弘貴は後頭部で腕を組んだ状態で、青羽たちにそう訊ねた。彼としては、勝つのが難しいと思っていた強敵を退けることが出来たので

上機嫌だ。それを成し遂げたのは彼ではないが・・・

「今日は休みましょ。何だかんだで色々と疲れたわ。」

青羽はそう言って肩に手をかけてゆっくり回す。流石に初めて使用したジャックフォームは負担がかかったらしい。何度か使っていれば慣れるだろうが、しばらくはジャックフォームを使う度にこの負担と戦わねばならないだろうと青羽は考える。

尤も、それは青羽にとって望むところだった。ジャックフォームを使っても支障がないほどになっていれば、それは彼女が一段階か二段階成長したことを意味する。

それはつまり、青羽の夢に近付くと共に目標にも近付けるということだ。

（今度は・・・もう絶対に・・・）

青羽が心の中でそう呟いていると、道の少し離れたところに見知った人物の後ろ姿を見つけた。

「あれって、もしかして・・・」

「白奈・・・かな？」

戒の言う通り、その後姿は間違い無く白奈のものであった。彼女は街中を歩きながら、時折右腕に手を当てている。恐らくサイズとの戦いで負った傷が原因であろう。

「白奈！」

青羽は早速白奈に声をかけた。彼女が声をかけると、それに気付いた白奈が立ち止まって青羽達の方に目を向ける。

「あ、青羽？」

「良かった、サイズと戦って怪我したって聞いたけど大丈夫？」

「う、うん。これくらいなんとも無いよ。」

白奈はそう言って再び右腕に手を当てた。だがその言葉とは裏腹に、彼女は眉間に若干皺を寄せる。口では大丈夫と言っても、やはり傷が痛むらしい。

「本当に大丈夫ですか？ 何でしたらちょっと傷を見せてくだされば――」

「い、いいよ全然！ 本当になんとも無いから！？」

ノーマが白奈の右腕に触ろうとした瞬間、白奈は後ろに飛び退きながらノーマの申し出を拒否した。その表情は何処か焦っているようにも見え、やや大袈裟に見えるリアクションに青羽も少し驚いてしまう。

「えっと・・・どうしたの白奈？ 何か、慌ててるみたいだけど？」

「いや、その・・・な、なんでもないのよ。本当に、もう大丈夫。今すぐ戦うことだって出来ちゃうんだから。」

そう言って右腕を挙げて笑顔を作る白奈だが、やはり無理をしているのかその笑みはやや引き攣っていた。

そんな白奈の様子に、ノーマはそれまで以上に怪しい物を感じていた。

（やはり彼女は妙です。カリスに変身することもそうですが、頑なに傷を見せようとしないうこともおかしすぎます。）

一瞬、白奈の腕に醜い傷跡が残っている可能性を考えついたノーマだが、それでもやはり何処か彼女の反応に違和感を感じてしまう。

もう少し粘ってみよう・・・そうノーマが考えたとき、青羽が一足早く白奈に話しかけた。

「なんか痛そうにしてるけど、ホント大丈夫？」

「うん。これくらいならちょっと痛いだけでなんとも無いから、ごめんね心配かけちゃって。」

微笑む白奈の様子に、青羽はふうとため息をつく。これ以上は何を言っても無駄と思ったのか、それとも何かを隠そうとしている様子の彼女に気を遣ったからなのか。

「分かった。でもあんまり無茶しちゃ駄目だからね？」

「ありがとう。青羽も気を付けてね、それじゃ。」

そう言って白奈はその場を去っていってしまう。ノーマは咄嗟に呼び止めようかどうしようか迷ってしまったが、既に機を逸してしまったのを悟ってそれ以上白奈を探ることは諦めた。

（しかし、あれは気のせいではなかった筈。次に会ったときは、必ず・・・）

白奈と別れたことで再びその場を歩き出し始めた青羽たちに遅れないようにについて行きながら、ノーマはそんなことを考えていた。

森の中

その頃、森の中ではみゆきの話をあずみが興味深そうに聞いていた。

「へー、そうなんだ。“奴”が出たのね？」

「私が見たところ、まず間違いはないわ。あいつにちよっかいをかけるのも、なかなか楽しいと思わない？」

二人ともとても愉快といった様子で話をしている。どちらも他者をいたぶる事を楽しむので、何処かしら波長が合う部分があるのだろう。

「相手が相手だから、流石に私一人だとかななかね？ だからあなたを誘おうかと思ったんだけど。」

「面白そうね、私も混ざらせてもらおうわ！」

新しい遊びを思いついた子供のような顔であずみは彼女の提案にノッた。実際、これもあずみやみゆきにとっては遊びなのだろう。

アンデッドは不老不死だ。もちろん例外的に何らかのイレギュラーがあったり、封印された状態でなんらかの手を打たれてしまつてはアンデッドも消滅してしまう可能性はある。

しかしそれでも不老不死の彼女たちアンデッドにとって、長い年月というのはそれだけで十分に退屈で苦痛だった。常に何かしらの娯楽に飢え、その娯楽への渴望がこのような形で現れているのである。

もちろん、全ての上級アンデッドがこのようなことをする訳ではない。嶋のように人間社会に溶けこんで静かに暮らす者もいれば、中

には強い者との戦いに全てをかけるものもいる。

二人の話がまとまり、次いでどのように事をなすかを話し始めたとき……

《Darkness Scissors》

「え？ 何があっ?!」

突然電子音が響いたかと思うと、闇を纏った斬撃が飛んできてあずみを切り裂いた。あまりにも突然のことに彼女は反応できず、訳も分からないまま夥しい量の緑の血を流して地面に倒れる。

「だ、誰っ!?!」

運良く斬撃が掠る程度で済んだみゆきは、その姿をオーキッドアンデッドのものに変えた。

オーキッドアンデッドが見据えるその先、森の木によって太陽の光が遮られてできた影の中から、斬撃を放った物が姿を現す。

「あ、あなたは?!」

それは、オーキッドアンデッドも何度か見たことのあるライダー、仮面ライダーサイズの姿だった。

突然のサイズの登場にオーキッドアンデッドが驚愕する中、サイズは倒れているあずみにコモンブランクを投げて封印する。

「ダイヤのQ……あたしじゃ使えないか。」

サイズは封印して手元に戻ったカードに目を向けて、それが自分にとってあまり意味のないものだとなると落胆の声を上げた。だが肩を落としていたのはほんの一瞬、次の瞬間にはオーキッドアンデッドに狙いを定めてラウザーを構える。

「あなたは、どのスートのアンデッドなのかしら・・・」
「ず、随分唐突ね。一体どうしたのかしら？」

オーキッドアンデッドはサイズから溢れ出る殺気に圧倒されながらも、なんとか平常を保って声を出す。しかし、何とか出したその声は恐怖のあまり震えていた。

「力がね、欲しいのよ。その為には、上級アンデッドが必要なの。」
サイズはオーキッドアンデッドの問いかけにそう答えた。その声は何処か虚ろで、まるで幽鬼のようだ。

「そ、それなら私と手を組まない？　ちょうど、あなたにお誂え向きの相手が・・・」

オーキッドアンデッドはサイズの関心を自分から逸らせようとそのような事を口にする。交渉が成功しようが失敗しようがとにかくこの場から逃げる事が出来ればそれでいい、オーキッドアンデッドはそう考えていた。

しかし・・・

「あなたが言いたい相手なんて大体分かってるわ。そいつももちろん手に入れるけど、あたしはあなたが欲しいのよ。」

サイズにはオーキッドの話を聴く気がまるでなかった。

これ以上は無理だとオーキッドアンデッドが目眩ましに花卉を放とうと後ろを向くが、それよりも早くサイズの攻撃がオーキッドアンデッドを捉える。

「ぐあっ?!」

「逃さないわよ。」

サイズは逃げようとするオーキッドアンデッドに何度も斬撃を喰らわせていき、メツタ切りにされたオーキッドアンデッドはその場に膝をついてしまった。

「ぐ、はっ・・・た、助けて・・・」

オーキッドアンデッドは無駄と知りつつも、サイズに手を伸ばして命乞いをする。

だが当然、サイズにその言葉は届かなかった。

《Grip Dark》

彼女は自身が持っている属性カードの『ダーク・クロウ』ともう一つ、ハエトリグサのような絵柄が描かれたカード、ハートの2『グリップ・フライキャッチャー』をラウズした。

《Darkness Crow》

2枚のカードをラウズすると同時に必殺技『ダークネス・クロウ』が発動、闇の力を纏った右手がオーキッドアンデッドの頭部を掴ん

だ。

「ぐあ、あああああっ?!」

途轍もない力で締め付けられる頭部にオーキッドアンデッドは絶叫をあげるが、サイズはそれを気にすることなくさらに力を込めていく。

そして……

「……………フン。」

トドメとばかりにサイズが手に力を込めると、オーキッドアンデッドの頭部は見るも無残に握りつぶされてしまった。

力なくその場に倒れるオーキッドアンデッド、その腹部にあるバツクルは倒れると同時に開いており、そこにはハートの紋章とQの文字が。

「見つけた……」

サイズは仮面の下でしたり顔になると、オーキッドアンデッドにコモンブランクのカードを落として封印した。

「これでまずは1枚。後はJかK、それから……」

変身を解除した利香は、そう呟きながらその場を離れて行った。

第50話 疑惑と企み（後書き）

という訳で第50話でした。

今回オーキッドアンデッドが久々の登場、そして新たにサーペントアンデッドが登場しましたが、どちらもアツサリ退場となりました。サーペントなんて今回が初登場なのに、早速退場……

サイズの考えはお察しの方もいるでしょうが、ジャック若しくはキングフォームの取得です。その為に先に上級アンデッドを封印しているのがサイズの現状ですね。

白奈には色々と秘密があります（もう気付いていらっしやる方がほとんどでしょうが（^^;）。そんな彼女の秘密が次回、明らかに！？

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第51話 本当の白奈（前編）（前書き）

どうも、黒服です。

もうすぐゴールデンウィークも終わりですね、皆さんはどのような過ごしをしましたか？ 自分はバイトとネットが主でした（笑）

さて、今回と次回で遂に白奈の秘密が明らかにされます。もう既に大体の見当が付いてる方がほとんどでしょうが（^^;）

第51話 本当の白奈（前編）

青羽がジャックフォームを手に入れてから数日後・・・

タジンを離れた白奈は、一人次の街に向かってバイクを走らせていた。彼女が乗っているバイクは仮面ライダー用に造られたバイクの中でもベーシックな『ライトチェイサー』。基本的なモビルラウザー機能と通常のバイクを上回る程度の性能を持った、特に特色のないバイクである。

バイクを走らせている間、白奈は頭の中である事を考えていた。これはある種彼女の日課の様なモノでもあり、ともすれば一人でさえいれば何処でも行っている。

（心の力・・・想いを力に上乘せる能力・・・それは人にしかできない事・・・本当にそうなのかな？）

彼女は考える、人が持つ心の力を。

人間というモノは、追い詰められたりいざという時になったりすると通常では考えられないほどの力を発揮する事が出来る。よく『火事場の馬鹿力』という言葉が使われるが、仮面ライダーはそれが特に顕著に表れているだろう。ライダーシステムには手っ取り早く言えば感情でスペックが上下する機能が備わっている。尤もこれはアムドとの融合の度合いが装着者の精神状態の変化で上下する事による副産物の様なモノだが、その機能がライダーの強さをスペック表だけで測れない物にしているのは確かだった。

（きっと、人間だけじゃない。心を持つてるモノなら何でもできる。

人間だけじゃない、“彼ら”にだってできるだろうし、多分上級ア
ンデッドにも……）

そんな事を考えている内に、白奈は山の中へと入っていった。とり
あえずといった感じではあるが舗装された道を進んでいき、適当な
ところで休憩の為にバイクを止める。

（でも、私には……）

白奈が自身の事を考えて少し暗い気分になっていると、ふと近くに
人の気配を感じた。それも、自分に対して悪意に向けた気配を……

「……誰？　そこにいるの？」

白奈がある方向の山の木々に向かってそう口にする、相手が隠れ
る必要がないと判断したのか草や枝を掻きわけてゆっくり近づいて
来た。近づく足音は全部で3つ、ほとんど同じ方向から近付いて来
ている。

白奈がじっとそちらの方を見つめっていると、現れたのは3人の男女。
しかも全員黒いスーツ姿だった。

「いや、まさかもうバレるとはね。流石にちょっと甘く見てたわ。

」

「いいじゃないですか、こそこそする必要が無くなった訳ですし。
どうせ最終的にはこうなってたんですから。」

そうお互いに軽口を叩き合うのは3人組の内の男性二人。一人は黒
髪、もう一人は灰色の髪をしている。

残る一人は女性だが、こちらは表情をピクリとも動かさずジッと白奈を見つめていた。

「私に何の用？ 見たところあなた達、共和国の隠密調査部よね？」

白奈は警戒心も露わにそう訊ねた。女性はともかくとして男達は軽口こそ叩き合っているがその実隙が全くない。白奈自身は戦いをあまり好む方ではなかったが、相手が玄人かそうでないか程度の観察眼は持ち合わせていた。

一方の3人組の方は、正体がバレた事を気にした様子もなく……

「おっと！ 俺等の事知ってたか、流石に長生きしてるだけの事はあるな。」

「知られてる……消す。」

「まあまあ怜奈さん、そうすぐにケンカ腰になるのはよくありませんよ。まずはお話だけでも……」

そんな約1名を除いて軽い雰囲気醸し出していた。

3人組……恭司達はおどけた雰囲気を出しているが、与太話に何時までも付き合うほど白奈も呑気ではない。何時でも変身できるようにその手には白いハートスートのAが握られていた。

それを見ると恭司はフツと肩を竦め、それまでのふざけた雰囲気を仕舞って真剣な表情になる。

「ま、おふざけはここまでにして……さっさと始めるか。」

そう言うと恭司はバックルを取り出し、カードを装填して腰に装着した。

「情報通りにここに来てくれたな。」

「ま、スタッフの皆さんは給料分の仕事をしてくれたという事で。」

「飛んで火に入る……何だっけ？」

「目的は何？」

3人が戦闘態勢に移行する中、白奈は特に返答を期待せずにそう訊ねてみた。期待していないというのは彼らがどういったタイプの人間かを知っている為秘密や任務の内容をそうそう漏らす事は無いだろうという考えからきている。

「目的？ そんなもん一つに決まってるだろ。」

それとは別に彼女は彼らの目的にも大体見当が付いていた。案の定、今回の彼らは白奈が思っていた通りの目的で現れたらしい。

何故彼女が彼らの目的を予想できたか、それは――

「俺等の目的は……お前自身だよ！」

《《Open up》》

「くっ!？」

《Change》

彼女が自分自身に対する価値観を良く理解していたからだ。

一方その頃……

白奈が向かった方向とは別の方角に向かった青羽達は、次の目的地に向けてバイクを走らせていた。彼女達の次の目的地はダーティ。

その道中、ノーマは運転への集中もそこそこに白奈と同じく考え事に耽っていた。

（白奈さんがそうである事はすでに検討が付いていますが、まだ確証がありませんね・・・何か動かない証拠でもあればいいのです。）

ノーマの頭の中を占めているのは、先日出会った白奈の秘密を如何にして暴くかという事であった。彼女は白奈を欠片も信用していない。

その理由には、白奈が見せた不可解な行動や存在しない筈のライダーに変身した事ももちろんあるのだが、それ以上に彼女にしか分からない理由があった。

（そう言えば、先日弘貴が・・・）

ノーマはあれこれと考えていた。それは走行中はもちろん、休憩の為にバイクを停めた時にまで。だからだろう、考え事をしている所為で難しい顔になったところを仲間に目撃されてしまったのは。

「ねえノーマ、なんか最近やけに難しい顔になって無い？」

「えっ？　そ、そうですか？」

「うん。なんかここ最近考え事してるみたいに難しい顔になってたわよ。悩みでもあるの？」

青羽は純粹にノーマの事を心配してそう訊ねた。普段無表情を貫い

ているノーマだが、この日は青羽に気付かれるほどに考えが顔に出
ていたのである。

この様に表現すると青羽が鈍いように思えるが、彼女とて決して言
うほど鈍くは無い。少なくとも人並みに他人の変化に気付ける程度
の観察眼や洞察力は持っている。ただノーマの表情の変化が常人の
それよりも少ないので、気付けるのに時間がかかると言うだけの話
だ。

「いえ、別に悩みという程のモノは・・・」

「ふん・・・」

「ノーマの姐さんでも考え込む事ってあるんスか？」

「・・・どういいう意味ですかそれは？」

「いっ!? や、別に変な意味がある訳じゃ、あ、あはは・・・」

ノーマがサングラスをしていても分かるほど冷めた目を弘貴に向け、
慌てる弘貴の様子を青羽と戒がやれやれと言った様子で見つめてい
る。そんないつも通りの賑やかな光景がそこでは繰り広げられてい
た。

「そういえば、白奈は今頃何してるのかな？」

同時刻・山中の橋

「よっ！」

「はあっ！」

「くっ?!」

山の中ではアルビノカリスがグレイブ・ランス・ラルクの3人を同

時に相手にしていた。最初は周りに木だけしか見えない所で戦っていたが、次第に戦いの場は移り今は谷と川で分断された道を繋ぐ為の橋の上で戦っている。

状況は3対1、この時点で既に数で負けているアルビノカリスの勝機は薄いと言っているだろう。グレイブ達はただでさえ個々の戦闘力に加えて連携も優れている。絶えず絶妙なタイミングでお互いに援護し合っている為、アルビノカリスは防戦一方になっていった。

「ははっ、情報通りだな。お前あんま戦いに向いてねえだろ？　これなら楽勝だぜ！」

グレイブは余裕綽々といった口調でアルビノカリスにそう告げた。その言葉に彼女は内心でムツと来るモノがあつたが、それに反論する事は出来ないでいる。彼の言うことは事実だからだ。

白奈自身、自分の能力がこの程度ではない事は理解している。ただ全力を発揮する事を心の何処かで拒否しているのだ。本気を出してしまつたら、自分は戻れなくなってしまう・・・そんな予感がしたから。

こんな無様な姿、“奴”に知られたら何と言われるだろうか？　そんな事を彼女は考えてしまう。

そしてその思考が命取りだった。思考で一瞬意識が逸れた隙を狙ってランスが強烈な突きを繰り出して来た。

「ハアッ！！」

「しまっ、ぐうっ?!」

ランスの突きに反応しきれず、胸部の装甲にまともに喰らってしま
うアルビノカリス。そこへ畳み掛ける様にしてラルクの銃撃が彼女
に襲いかかった。

「きゃあっ?!」

ラルクの銃撃はそれぞれ右ヒザ・右腕・腹部に命中、これによりア
ルビノカリスは戦闘力と機動力を失ってしまう。それを見てグレイ
ブは仮面の奥でしたり顔になりながら、オープントレイを開いて2
枚のカードを取り出した。

「これで、ゲームオーバーだ。」

《M i g h t y K i c k》

グレイブは『マイティ・グラビティ』と『キック・ローカスト』の
カードをラウズし、依然ブレイド相手に使おうとした時は不発に終
わった技『グラビティ・ブラスト』を発動する。

「行くぜっ!」

「う・・・くっ!?!」

「ハアアアアアアッ!!」

グレイブは必殺の飛び蹴りをアルビノカリスに向かって放つ。アル
ビノカリスも必死に避けようとするが直前のラルクからの銃撃で機
動力が削がれている為思うように動く事が出来ず、結果グレイブの
蹴りは彼女に命中する事になる。

「ああああああああああっ?!」

アルビノカリスはグレイブの蹴りを受けて大きく吹き飛ばされ、そ

のまま谷底の川に落下してしまった。

「へへっ……って、ヤバッ!？」

勝ち誇った様な笑みを浮かべた直後、慌ててアルビノカリスが落ちていった方に向かって下を覗き込むグレイブ。今回の任務は抹殺ではない為、ここで彼女を取り逃がす事があってはならなかったのだ。橋の上から彼女が落ちていったと思われる川を見ると、思いの外流れの速い川で既にアルビノカリスは遠くまで流されてしまっていた。変身は解けており姿は白奈のものに戻っており、先程の攻撃で気を失ったのかピクリとも動かない。

グレイブは曲がりくねった川に白奈の姿が消えていったのを見ると、地団太を踏みながら変身を解除する。変身を解いた恭司の表情は、苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

「ちつきしょお、やっちゃったぜ。」

「これは、始末書ものですな。」

「うっせえよ!？　これから追いかけて見つけりゃいいんだろ!！」

「オウル……呼ぶよ。」

珍しく失敗した恭司の様子に、これでもかと意地の悪い笑みを浮かべて声をかける晃と流されていく白奈を追いかけるべく移動手段のヘリを呼ぶ怜奈。

しばらくしてヘリが見えて漸く晃の嫌味から解放された恭司は、白奈が流されていった方を睨みながらボソリと呟いた。

「こんなチャンスは滅多にねえんだ。絶対に見つけて――――」。

┐

彼の呟きの最後の方は、着陸するへりのローター音に掻き消されて二人に聞こえる事は無かった。

第51話 本当の白奈（前編）（後書き）

という訳で第51話でした。

今回はまだ完全にはバラしませんでした。次回で完全に白奈の秘密が明らかになります。まあ・・・大方皆さんの予想通りだと思いますよ（汗）。

後編の方も明日には更新予定ですので、今回はこの辺で。

今回の更新もお楽しみに。それでは。

第52話 本当の白奈（後編）（前書き）

どうも、黒服です。

今回は後編の更新です。いよいよ白奈の正体が明かされますよ！

第52話 本当の白奈（後編）

街道

青羽達は頃合いを見計らってノーマの攻めから弘貴を解放して、再びバイクを走らせていた。天気は快晴、遠くの方には山と森が見え小さくとだが鳥が飛び交っているのが見える。

（平和ねえ。）

そんな景色を見て、青羽は心の中でそんな感想を持った。実際の今の光景は人の心を穏やかにするには十分なモノだと言えるだろう。

この世界では基本的に多くの自然が手付かずで残っている。その理由の多くはこの世界にアンデッドが存在している事が理由となっているのだが、そのおかげでこうして開発されずに自然が残っている場所が多く存在していた。この点はこの世界における美点の一つかもしれない。

そして、そんな光景をこうして眺める事が出来るのも一重にライダーとして旅に出たからである。青羽はこう言った時旅に出て良かったと、素直にそう思う事が出来た。

そうこうしていると、次第に日が暮れて来た。ぼちぼちこの日の野宿の場所を決めなければならない。夜の走行は先が見通せなくなる事による運転ミスの危険以上に、活発に行動を始める夜行性のアンデッドや猛獣に襲われる危険性の方が高いのだ。

何処かにいい場所は無いか、そう考えて周囲を見渡していると

近くに川が流れているのを見つけた。流れは決して遅くはないが、かと言って急過ぎるほどでもない。河原で野宿すれば水の節約にもなるし一石二鳥だろう。川の近くにはある程度木も生えているので、程良く周りから姿を隠す事も出来る。

青羽達は早速川の近くにバイクを止め、焚き火用の薪を集めるなどして準備を始めた。野宿の為のセッティングはノーマが行い、戒と弘貴は薪集め。そして青羽は夕食を作る為川に水を汲みに行っていた。

「おお、澄んでてきれいな水。」

青羽が川を覗き込むと、水は底までハッキリ見通す事が出来る程の透明度を持っていた。よく見てみると川の中では魚が泳いでいる。

ついでにこの魚も釣っていいとか、そんな事を考えながら水を入れる為の容器を川に入れようとしてふと流れの先に目を向けると・・・

「ん？」

河原に何かがあるのに気付いた。一瞬上流から流れてきたゴミが引っ掛かっているのかと思ったがどうにも様子がおかしい。もっと良く見て見ようと近付きながら目を凝らすと、それが人であるのに気付く。

「ちよっ！ 大丈夫ですか!？」

青羽は慌てて倒れている人に近付きながら、ノーマ達にも声をかけて呼び寄せた。身動きしないところを見ると相当酷い怪我をしている。

るのかもしれない。

そうして近付いていくと、その倒れている人物が白奈である事に気付いた。近くで見た訳ではないが、少し離れた位置からでも服装などから大体察しが付く。

「し、白奈?! だいじょう・・・えっ?」

白奈に近付いて彼女の安否を確認しようとする青羽だが、近くで見える位置まで近づいたところであるものが見えてしまった。

彼女の傷口から流れ出ている、緑の血・・・・・・アンデッドの証である。

「し、白奈?」

あまりの光景に、青羽の思考は停止してしまった。思ってもみなかった光景、想定外にも程がある。もしや返り血として浴びたものがまだ残っていたのではないかと考えたが、その緑の血は間違いなく白奈自身から流れ出ていた。

「な、何で・・・・・・白奈から・・・・」

「やはりそうでしたか。」

青羽が呆然としていると、近くに来たノーマが静かにそう呟いた。彼女のその言葉に青羽はギョツとしつつノーマに目を向けた。

「ノーマ・・・・あんた知ってたの?」

「確証があった訳ではありません。ただ最初に彼女が変身を解除する時一瞬ですが確かにアンデッドの気配を感じました。もしかした

らと思っではいましたが、本当に彼女はアンデッドだったのですね。」

白奈がアンデッド、その事実を突き付けられて青羽は頭を鈍器で殴られたような気分になった。だが逆にそれ以上のショックを受けなかったのは、彼女にとってある種師とも言える嶋の存在があったからだろうか。

その時、ノーマが徐にコモンブランクのカードを取り出した。相手がアンデッドであれば彼女のやる事はただ一つ。嶋の時はなし崩し的に見逃したが、今度はそうはいかない。

「ッ！？ 駄目よノーマ！！」

ノーマが白奈を封印しようとした時、青羽がその前に立ち塞がってそれを阻止しようとする。

「青羽、退いてください。」

「待つてよノーマ、そんないきなり封印しようとしなくても・・・」

「私の使命は、全てのアンデッドを封印する事です。嶋さんは状況的に見逃さざるを得ませんでした、今回はそうしなければならない理由もあります。青羽こそ何故彼女を庇うのですか？」

「ッ！？ そ、それは・・・」

何故白奈を、アンデッドを庇うのか・・・そう言われて青羽は思わず口籠ってしまう。青羽とて、これまで何度かアンデッドを封印して来たしその中には人とコミュニケーションできる上級アンデッドもいた。彼らを封印してきておいて、今更封印するなも何もないであろう。

しかし……

「白奈は……白奈はあたしの友達！ 確かにアンデッドかもしれないけど、友達としてかアンデッドとしてかならあたしは友達として白奈に接する。だから白奈は封印させない！！」

「友達……それだけの理由ですか？」

「理由なんてそれで十分。あれこれ考えてギクシャクするようなら、あたしは馬鹿と言われようと単純に考えて行動するわ！」

「ッ！？」

青羽の言葉を聞いて、ハッとして動きを止めるノーマ。

そう言えばそうだった、青羽は人造人間である自分も仲間だからという単純な理由で受け入れてくれた。彼女はそういう人間なのだ、肩書きや上辺ではなく自身が接した事で得た経験でその相手を判断する。

ある種騙されやすい馬鹿な性質だが、そこがまた彼女の美点でもあった。

青羽を押し退けてまで封印することはしたくないが、かと言って自身のアイデンティティとも言えるアンデッドの封印を蔑にする訳にもいかない。

どうすればいいか……そんな事を考えているとコモンブランクを握っている手を後ろから掴まれた。突然の事に驚いてそちらを見ると、そこには漸くここに來たのか戒がノーマの手を掴んでいる。その後ろにはオロオロしている弘貴の姿も……

「ここは君の負けだよ。それに、白奈に話を聞くのも悪くは無い。」

戒がそう言って諭すと、ノーマは渋々とカードを仕舞い込んだ。その様子に青羽はホッと一息をつく。白奈の方に向き直って、彼女の背中と足に手を回して野宿の場所まで抱き上げていった。

数分後・・・

「う・・・ん・・・」

白奈は最初目を覚ました時、自分がどうなっているのか理解していなかった。動くのも億劫なほど気だるく、目を覚ます以前の自分が何をしていたのかよく思い出せない。

「私・・・あっ!？」

しかし少し時間が立って意識がはっきりしてくると、自分の身に何があったのかを思い出した。自分は山の中でグレイブ・ランス・ラルクと戦闘になり、そして・・・

(運が良かった・・・のかな?)

正直グレイブの必殺技を喰らった時はもう駄目かと思っていたが、怪我の功名とでも言えいいのかそのおかげで川に蹴りだされて彼らから逃げだす事が出来た。おかげで体はボロボロになってしまったが。

「そう言えば、ここは・・・づっ!？」

自分がどういう状況なのかを確認しようとして、体を起こした所で

全身に痛みが走り白奈は体を硬直させる。

「あっ！？ 目が覚めた？」

「えっ？」

痛みで呻き声を上げたからか、白奈が目を覚ました事に気付いた青羽。一方白奈は思いもしなかった人物がいた事で一瞬呆けてしまった。

「あ、青羽？」

「そうそう。大丈夫白奈？ どっか変なところとかない？」

青羽がそう訊ねて自身の体を見渡して、初めて自分に治療が施されている事に気付く。最初特に何を思うでもなく巻かれた包帯に目を向けていた白奈だが、その直後に背中に冷水を流し込まれたかのように身を堅くした。

包帯が巻かれているという事は、巻かねばならないほどの傷があったという事だ。そして傷があったという事はつまり……

「あのさ、白奈……」

「ッ！！？？ な、何？ 青羽？」

青羽が声をかけて来た事に驚き、思わずその場で飛び跳ねてしまう白奈。何処かバツが悪そうな様子の青羽に白奈は何とか口を開くが、出てきた言葉は傍から聞いても分かる程に震えていた。

「白奈って……」

青羽の口の動きが白奈にはゆっくりに見えていた。心の中では自身

の懸念が間違っていてくれと、全く見当違いの事を訊ねてくれと願
い続ける。

折角できた友達を、自分の事を友達と言ってくれた人物を、こんな
所で失いたくはない。そう白奈は考えていたのだが――――

「アンデッドだったんだね・・・」

現実はまだ非情だった。

「え・・・あつ、う・・・その・・・」

もう誤魔化しようは無い、青羽には全て知られてしまった。自身の
緑色の血も見られてしまっている。即座に否定していれば或いは誤
魔化せたかもしれないなどと希望的観測をして見せるが、肝心の口
が思うように動いてくれない。肯定する事も否定する事も出来ない
でいたのだ。

「その、青羽、私ね・・・違うのよ。ううん、違くない、でも違う。
そうじゃない、そうじゃなくてね。えっと、その、私、あれ？」

とにかく何か言わねばならない。そう思って何かを言おうとするが
口から出てくるのは支離滅裂な言葉のみ。白奈自身自分が何を言お
うとしているのかまるで分かっていなかった。

周りが見えない。胃の中身が逆流しそうになる。手足の感覚がない。
冷や汗が止まらない。口の中も乾燥してくる。息も上がって来た。

もはや混乱しどうすればいいのか分からない。今すぐ目を閉じて耳
を塞いで叫びだしたくなった。

だが……

「大丈夫よ白奈、落ち着いて。」

「あ……」

今にも取り乱して暴れそうになった白奈を、青羽が優しく抱きしめた。胸元に白奈の頭を抱いて、子供をあやす様に優しい言葉をかけながらゆっくりと彼女の頭を撫でる。

その抱擁に、徐々に白奈は落ち着きを取り戻していった。アンデッドである自分が人間の抱擁で安心感を得るというのもおかしい話だと思ったが、或いはこれも人間の為せる心の力なのかもしれない。白奈を安心させようという、青羽の心の……

「えっと……もう大丈夫だから。」

「ん、そう？」

程良く心が落ち着いたところで白奈は青羽の抱擁から抜け出て、改めて周囲を見わたした。場所は川の近く、どうやら流れ着いたところを青羽達に拾われたらしい。

さらに周囲には青羽だけでなく、ノーマや戒、弘貴の姿も見えた。全員青羽の仲間で見れば現状この4人でパーティーを組んでいるのだから当然だ。

「えっと……姐さんって、本当にアンデッドなんスか？」

白奈が落ち着いた頃を見計らって、弘貴がおずおずとそう訊ねて来た。その言葉に再び落胆しつつも、今度はしっかりとその事実を受

け止める事が出来た。認めよう、この場の全員は既に自分の秘密を知っている。

「ええ、そうよ。私は・・・アンデッドなの。」

「そっか・・・白奈は、何であたし達を助けてくれたの？」

白奈がアンデッドである事実を認めると、青羽はやや肩を落としながら納得といった表情になる。そしてそのまま、何故自分達を助けたのかと青羽は白奈に問いかけた。その所は彼女自身の口からハッキリと聞いておきたかったから。

「そんなの簡単、見過ごせなかったからよ。私、人間を愛してるもの。出来れば人間になりたいって・・・そう思ってる。」

そう言って儂く笑う白奈の様子には嘘を言っている風には見えない。彼女は心から人間を愛し、人間になりたいと思っているのだろう。

彼女の様子を見て、青羽は肩からフツと力を抜いて柔らかな笑顔になった。

「そうなんだ・・・ありがとね、白奈。」

青羽は自然とそう口にしていた。彼女自身何故ここでそれを口にしたのかは理解していないが、何となく言っておきたくなったのだ。

だが言われた白奈の方は、何に対して言われたのかが理解できずキョトンとした顔をしている。

「えっと、何に？」

「うーん・・・いろいろ。」

思わず青羽にそう聞き返すと、青羽は先程とは違った明るい笑顔であっけらかんとそう言い放った。白奈は一瞬呆けてしまっていたが、次の瞬間には込み上げてきた笑いに堪え切れず思わず吹き出してしまった。

「ぷっ、あははっ！ 何それ？」

「さく、何かしらね？」

そう言ってお互い笑い合う青羽と白奈。気付けば弘貴も笑みを浮かべており、戒も呆れた様子だが笑っている。ノーマだけは笑う事はしなかったが……

「そう言えば、白奈は何のアンデッドなんだい？」

一頻り笑って青羽達の笑い声が収まった頃、タイミングを見計らって戒がそう白奈に訊ねた。

「えっと……その……」

戒の質問に白奈は即座に答える事が出来ない。もちろん自身がアンデッドである事を知られた事実は受け止める事が出来たが、自身の正体を明かす事となると再び戸惑ってしまった。

本当の姿に関する知識を知らないならばそれでもいい。だが知られていた場合、一体どういう反応が返ってくるのか。それを考えると今一步踏ん切りがつかないのだ。

「失礼ですが……」

言おうかどうしようか白奈が迷っていると、それまで黙りこんでいたノーマが口を開いた。

「貴女の正体は・・・ジョーカーなのではないですか？」

「えっ！？　な、何で分かったの?!」

「ちょっ！？　ノーマ、ジョーカーって!!?」

ノーマが口にした言葉は、白奈のみならず青羽達も驚愕させた。白奈は明かす前に正体を指摘された事で、青羽達は何故ノーマが白奈をジョーカーと呼んだのかが分からずに・・・

「私のラウザー、カリスラウザーはジョーカーの能力を模倣して作られています。そして白奈さん、貴女はアンデッドでありカリスと同様の方法で変身を行った。仮に貴女の正体が白いマンティースアンデッドであるなら、カードを使う必要はない筈ですからここで貴女が普通のアンデッドではない事が分かります。そしてジョーカーは特殊なアンデッド・・・ここまで材料が揃えば大体想像はつきます。」

違いますか？　と、ノーマは目線で白奈に問いかける。それに対して白奈は降参だともいう様に両手を上げた。完全にノーマの読み通りである。

「凄いわね、そこまで見事に見抜くなんて・・・」

「まあ、嶋さんにヒントを貰っていなければここまで言い当てる事は出来ませんでした。」

ノーマはそう言ってサングラスを掛け直す。思えばタジンで嶋がアンデッドについて話をしたのは、白奈の正体を仄めかす意味合いもあったのかもしれない。そう考えると結局自分は彼の掌の上で踊ら

されていたのではないかとノーマは少し悔しい気持ちになった。

「ねえ白奈、一つ聞いてもいい？」

「うん、何？」

白奈がジョーカーだと分かった瞬間、青羽の心にはある疑念が浮かんでいた。

もしかや彼女がそうなのか？　彼女が、父の――と・・・

「あたしの父さん、昔ジョーカーと戦ってね。その時の怪我が原因で結構早い段階でライダーとしての活動をほとんど止めちゃったんだって。」

「・・・・・・」

「その時のジョーカーって・・・もしかして・・・」

信司はジョーカーとの戦いで怪我を負い、結果ライダーとして表舞台で戦う事を止めざるを得なかった。もし目の前の白奈がその時のジョーカーであるならば、一体どうすればいいのだろうか？　そんな懸念が青羽の心に重く圧し掛かる。

だが白奈は、そんな青羽の質問に静かに首を横に振った。

「私、今までずっと人を襲った事はないわ。もちろん、戦いを挑んで来たライダーと戦った事はあったけどその時も私はカリスに変身して戦った。」

「それじゃあ・・・」

「青羽のお父さんと戦ったのは・・・きっと私とは違うもう一人のジョーカー・・・・・・ノワールよ。」

白奈の言葉に、青羽は肩から重い物が降りた様な気分だった。復讐とかそういう事を考えていた訳ではないが、目の前の白奈がそうであった場合流石の青羽でも接し方がギクシャクしてしまう。

「ノワール・・・それがもう一体のジョーカーの名前ですか？」

「ううん、これは私が勝手にそう呼んでるだけ。彼は黒いジョーカーで、私は白いジョーカーだから。」

そう言って白奈は一瞬その姿を本来のジョーカーとしてのもの・・・アルビノジョーカーに変えて即座に人間に戻した。

一瞬とは言え白奈の姿がジョーカーになったのは流石に驚いたらしく、青羽達は面食らった顔になる。

「いや、いきなり変えなくても・・・」

「あはは、ごめんごめん。」

「じゃあ、その黒いジョーカーが父さんを？」

「多分そうだと思う。彼は私と違って好戦的だから・・・」

白奈はそう言って小さく溜息をついた。それは自身と同じ存在が人を傷付ける事に対する嘆きによるものか、或いは自分と違い強い力を持つ同族に対する羨ましさによるものか・・・

「白奈さんは、その黒いジョーカーを止めようとはしなかったのですか？」

「止められる事なら止めたいんだけどね。私、戦うのあんまり好きじゃないし、それ以前に彼に会えた事がそんなにないんだ。」

「会った事ないの？」

「うん。世界でたった二人しかいないからかな？　今まであったのは片手で数える程度の回数しか・・・」

そこで白奈は何かを思い出したかのように顔を上げ、顎に手を当てながら言葉を紡いだ。

「そう言えば、ここ最近ノワール全然活動してない。ずっと休眠状態になってる。」

「休眠・・・状態？」

弘貴が聞き慣れない単語に首を傾げる。もちろん休眠が何を指しているのかは分かるのだが、アンデッドと休眠の間にどんな関係があるのか見当もつかなかった。

「休眠状態って言うのはね、大きなダメージを受け過ぎて活動できなくなったアンデッドがたまになるの。不死身のアンデッドでも、一瞬で傷が塞がる訳じゃない。受けたダメージが大きければ大きいほど、それを癒すのに時間がかかるモノなの。」

「それ、何時頃の話？」

青羽は白奈の説明に引っ掛かるモノがあった。彼女の考えが正しければ、或いは信司は・・・

「確か、18年くらい前だったかな？」

「ッ！？ やっぱり・・・」

白奈の答えに青羽は全てを理解した。

18年前・・・それは青羽が生まれた年であると同時に、信司が怪我でライダーを実質引退した年でもあったのだ。恐らく青羽の父・信司は、黒いジョーカーと戦い大怪我を負いはしたが、相打ち同然にジョーカーに対しても致命傷を負わせていたのだろう。だからも

う一体のジョーカーは長い事活動を停止していた。

もしかしたらジョーカーは別の者にやられたのかもしれないが、青羽は不思議とそれが真実であるように思えた。

「よっし！」

青羽は自身が立てた仮説に大きく頷くと、勢いよく立ちあがって焚き火の方へ歩いていく。他の者達がどうしたのかと見ていると、青羽は鍋に入っていたスープを皿に盛って白奈に差し出した。

「はいこれ、そろそろお腹空いてきたんじゃない？」

「へっ？ いや、そんな——」

そんな事はない、そう言おうとした矢先白奈の腹から空腹を訴える音が鳴り響いた。数秒の間を置いて白奈は顔を耳まで赤くし、青羽はニンマリとした顔になる。

「い、頂きます……」

誤魔化しようもない自身の空腹に、白奈はニヤニヤ笑う青羽から大人しく皿を受け取るのだった。

第52話 本当の白奈（後編）（後書き）

という訳で第52話でした。

白奈の正体はアルビノジョーカー。多分皆さん大体の予想はついていたかもしれませんが（^^;）

白奈が黒い方のジョーカーをノワールと呼んだのは、単にアルビノジョーカー視点で黒い方のジョーカーを見た場合の呼び名です。厳密に言うところの物語の世界では白奈のアルビノジョーカーは黒いジョーカーの亜種とかそう言った立ち位置ではなく、あくまでも『この世界にいるジョーカーの1体』なので、正確には白奈自身もアルビノではなくただのジョーカーという事になります。ただジョーカーはこの2体以外に同族を持たないので、2体を識別する為に便宜的に黒い方をノワール、白奈の方をアルビノとしているだけです。

最後に、現在斬空さんの小説『破滅の断罪者』とのコラボを企画しております。次回辺りから開始する予定ですので、どうか楽しみに！

それでは。

第53話 破滅の断罪者（前書き）

どうも、黒服です。

お待たせしました、今回は斬空さんの小説『破滅の断罪者』とのコラボ小説となります。

第53話 破滅の断罪者

街道

その日、タジンからダーティへ向かって伸びる街道には人の気配が全く存在していなかった。周囲には青々と広がる草原とその先に時折ぼつんと立っている山々、反対側に目を向ければ鬱蒼と森広がっており、空には鳥が自由に羽ばたいている。

そんな特に何の変哲もない街道に、突然灰色のオーロラが現れた。まるで空間を切り取ったかのようにその場に存在していたオーロラ、その中から4人の人影が現れる。

「？ 随分と唐突に別の世界に飛ばされたみたいだが・・・」

一人は白銀の髪に紅の右目を持った人物で、上下が黒のフード付きの服を着ている。中性的な顔立ちをしておりパツと見では女性にも見えるが、声や醸し出す雰囲気は男性の物だ。

「人の気配は・・・ありませんね」

そう言ったのは黒い長髪を持った少女だ。少女は周囲を見渡して、辺りに人の気配がない事を確認する。

「でも道があるって事は、人がいるのは確かって事なんじゃないか？」

ショートカットの金髪に暗めで藍色の瞳を持ったもう一人の少女が自分達の足元から伸びている整地された街道を見つつそんな事を口

にした。道の先までは見えないが、彼女の言う通りその先の一方にはタジンが、もう一方にはダーティがある。

「それじゃあこのまま道に沿って歩いてみるか。運が良ければ今日中には人のいる所に行けるだろうし」

最後にそう言ったのは赤い髪をしたこの中で最年少と思われる少年だった。彼は続く道の一方を指差して他の3人を促す様に言った。

「……………そうだな、ちょっとこの世界を見て回るか」

銀色の髪を持った少年はしばし考える素振りをして、赤髪の少年の言葉に頷く。それを見て二人の少女は銀髪の少年の手を引っ張った。

「では行きましょうか、マスター」

「善は急げだ、『刃』」

「分かったから、そんな引っ張るな」

少女達に手を引かれた少年――刃――は、苦笑しながら街道を進んでいくのだった。

一方その頃……………

白奈の正体が青羽達にバレた翌日、5人は改めて次の街ダーティに向かっていた。

現状恭司達の攻撃を受けた際に白奈は自身のバイクを置きっぱなしにしてきてしまっていたのだが、弘貴のバイクには荷物入れとして機能していたサイドカーが付いていたので中の荷物を分担して白奈

を乗せる事で事なきを得ていた。

そうしてバイクを走らせていき半日程経った頃・・・

「そう言えば白奈ってどれくらいカード持ってるの？」

休憩がてら街道の端にバイクを停めた場所で昼食を取っている中、青羽は不意に白奈にそんな事を訊ねる。

「ちなみにあたしのカードはこんな感じ」

そう言って青羽は自身のカード、スペードスートのA、7、9、J、Qとクラブスートの10を取り出して白奈に見せた。白奈は青羽の手持ちを感じた様子でまじまじと見つめる。

「うわぁ、凄いね青羽。上級カテゴリーを2枚揃えてるなんて」

「あたし一人じゃ厳しかったかもしれないけどね」

「でも何でクラブスートのカード持ってるの？ コンボにならないでしょ？」

白奈は青羽のカードに感心していたが、一つだけ仲間はずれとも言えるクラブスートのカードを見て首を傾げた。彼女の言う通りこの世界のライダーシステムでコンボを行うには、同じスートで行う事が絶対条件となっている。もし仮にスートが異なるカードでコンボをやるう等とした場合、異なるスートのカードが干渉して威力が半減してしまう可能性があるのだ。

「ああ、これは父さんが渡してくれたカードなの。昔はこのカードでアンデッドを解放して鍛錬の相手をしてもらってたのよ」

そう言って青羽は懐かしむ様にクラブの10を見つめる。思えば随分と故郷から離れたモノだと、青羽はしばし郷愁に耽っていた。

「ふ〜ん……あ、私のカードはこれよ」

「ん？ おっ！ 見せて、どれどれ……ちよっ!？」

青羽の様子をしばし眺めていた白奈だが、不意に思いだしたように最初の話題に上がっていた自身のカードを取り出して青羽に見せた。青羽の方も思いだしたと言った感じでそちらに視線を向けると、興味津々と言った感じで白奈からカードを受け取り、次いで驚愕に目を見開いた。

「な、何かあたし達のカードと違う感じだけど、それよりも、白奈上級カテゴリー全部集めてるじゃん!!」

青羽の言う通り、白奈のカードは全て通常のラウズカードとは異なる白を基調としたモノだったのだが、それ以上に上級カテゴリーのJからKまで全てを彼女は網羅していたのだ。逆に上級以外のカードは所々に穴があいており、揃い具合としてはややチグハグと言った感じだった。

「まあね、結構苦労したわ。捜そうにもなかなか見つからないんだもの」

「よくここまで集めましたね。下級カテゴリーが妙に少ないのに上級カテゴリーは全部揃ってるじゃないですか」

青羽の横からノーマも覗き込んで、呆れた様な声を上げる。その言葉に白奈は曖昧な笑みを浮かべて答えた。

「あはは、こうでもしないとあたしもノワールと同じになっちゃい

そうだったから」

「？　どういう事だい？」

ノワールと言うのはつい先日白奈が話していたもう一体のジョーカーの事である。それと白奈が同じになると言うのがイマイチ理解できず戒は疑問の声を上げた。

「えっと……私がこうして大人しくしてるためにはね、この強いカードと一緒にいて力を抑えてないといけないの。そうしないと、私もノワールと同じ好戦的で人間を平気で傷付ける様になっちゃうから……」

「いっ！？　し、白奈の姐さんも暴れたり、ぐえっ？！」

愁いを帯びた表情の白奈に弘貴が引き攣った顔で少し後ろに引き下がりがつつそんな事を口にする、出し抜けに青羽の拳骨が彼の脳天に直撃した。

「あ、姐さん……脳天メツチャ痛いッス……」

「あんたね、もうちょっとデリカシーってもんを持ちなさいよ？」

白奈がそんな事すると思ってるの？」

「す、すみません。でも、なんて言うか……」

青羽からの叱責に少々バツが悪そうな顔をする弘貴。しかし彼としても白奈に好戦的な一面があるとなればそれを容易く無視できるほど肝が座っている訳ではない。若い故に目の前に提示された事実を正直に受け止めてしまうのだ、相手に凶暴な部分があると言われたら大なり小なり警戒はしてしまう。

「いいよ青羽、そんな気にしてないし。仕方ないよ、私アンデッドだもん」

「白奈がアンデッドがどうかじゃないの、あたしは自分の友達を悪く言われるのが腹立つって言ってんのよ」

そう言いながら青羽はジトつとした目で弘貴を睨む。父・信司の教えで友を蔑にする者が何かを為し得る事はないと言われていたし、彼女にとって友達とはどんな時でも自分と対等に付き合ってくれる掛け替えのない存在。

それを悪く言うのは同じ友であっても許しがたい事であった。

「まあまあ青羽、ちょっと落ち着いて」

「弘貴も決して悪気があっていった訳ではありませんから、あまり攻めるのもどうかと思いますよ」

戒とノーマの二人に宥められて、何とか青羽も落ち着きを取り戻した。そんな彼女に自身でも失言を反省したのか弘貴が頭を下げる。

「姐さん、何かすみませんでした。変なこと言っちゃって・・・」

「いやゴメン、あたしもちょっと熱くなりすぎてたわ。でもその言葉、言うなら白奈に言いなさい」

「あ、はい。すいません白奈の姐さん、俺・・・」

「だから、気にしないでいいよ。そう思うのも当たり前なもの」

そう言って弘貴に頭を上げさせる白奈。彼女の顔には先程までの愁いを帯びた表情が無くなっており、それを見て青羽も何時もの雰囲気を取り戻していた。

「それじゃ、さっさと食べちゃって先に行くとしよっか!」

同時刻

青羽達の居る所と刃達の居る所どちらからも離れた街道を、寧々が風に身を任せて佇んでいた。普段はほんわかとした雰囲気を漂わせてのんびりとした表情をしている彼女だが、その時はいつもの雰囲気を引き込ませて険しい表情をしている。

「彼は・・・ちょっと危険ね」

目を瞑って指に巻いた紐を風に靡かせていた寧々だが、不意に目を開くとそんな事を口にする。そして即座に近くに置いてあったキャリーバックに手を伸ばすと、一直線にある方へ向かって行った。もちろん徒歩で・・・

「私も何か乗り物、買った方がいいかな？ でも歩くのも好きだし・・・」

向かう途中、寧々はそんな事を呟くのだった。

場面を刃達の所に戻すと、彼らは依然として街道を何事もなく進んでいた。

「なんて言うか、随分と平和だな」

金髪の少女が何気なく口にしたその言葉に、黒髪の少女と赤髪の少年が頷いて同意する。だが刃と呼ばれていた少年だけは、その言葉に首を横に振った。

「いや、そうとも限らない。だんだんと分かってきたが、この世界

アンデッドがいるぞ。それもかなりの数が」

「それは本当ですかマスター？」

「ああ、現に今……」

刃の言葉に黒髪の少女がやや驚いた様な表情をする。刃がそれを見ながら近くの森を指差すと――

「かなりの数がこっちに近付いてる」

そこから大量のダークローチが姿を現した。

「何だこいつ等!？」

「こいつ等はダークローチ、バトルファイトでジョーカーが勝ち残った場合のみ現れるある種特別なアンデッドだ」

突然現れたダークローチに驚愕する仲間に刃は説明しつつ内心で首を傾げていた。彼の中にあるダークローチに関する知識と現在の状況に違和感があったからだ。

（しかし妙だな。ダークローチが現れていると言う事は大破壊が起こっている筈だが、それにしても随分と静かすぎる様な……）

「刃さん、考え事してる場合じゃないぜ!」

ダークローチを見ながら考え事をしている刃に、赤髪の少年が一見するとカメラのようにも見える物……ディケイドライバーを取り出しつつ声を掛けた。その隣では金髪の少女も長剣と何かのカードを取り出している。

「それもそうだな、サヤは決壊を頼む。行くぞレヴァ! 飛翔!」
「分かりました、マスター」

「ああっ!!」

「分かった!!」

刃は黒髪の少女――サヤーと金髪の少女――レヴァー、赤髪の少年――飛翔――に声をかけつつ、自身も腰にハート型のカリスの者に良く似たバックルを出現させてその手にトランプの様なカードを取り出した。

「「変身!」」

《Change》

《K A M E N R I D E D E Z A N D E》

《K A M E N R I D E D E C A D E》

刃がバックルにカードをスラッシュし、レヴァが剣の鏢に、飛翔が腰に装着して90°回転させたバックルの中央にカードを装填する。

レヴァが刀身をポンプアクションの様にスライドさせ柄のトリガーを引くと、刀身から数枚のプレートと赤、緑、青の人型の虚像が出現、3つの虚像がレヴァに重なりプレートが頭部に突き刺さると紅の戦士【仮面ライダーディザンド】に……

赤髪の少年・飛翔がカードを装填した状態でバックルを再び90°回転させて元に戻すと、彼の周囲にいくつもの灰色の虚像が現れ、それが彼に重なり同時にバックルから飛び出た数枚のプレートがディザンドと同じく頭部に突き刺さりマゼンタ色の戦士・仮面ライダーディケイドに……

そして、バックルにカードをスラッシュした刃はその姿を揺らめかせ、Wを象った黄色い仮面を付けた戦士【仮面ライダーレイブ】に変身した。

「さあ、裁きの時だ」

レイブがそう言うと同時に、ダークローチ達が一斉に彼らに襲いかかるのだった。

第53話 破滅の断罪者（後書き）

と言う訳で第53話でした。

今回はとりあえず刃達の顔見せと言う所で、青羽達との対面はまた次回と言う事に。本格的な戦闘も次回になりますので、お楽しみに！

それでは。

第54話 邂逅と暴走（前書き）

どうも、黒服です。

今回はコラボ編第2話、いよいよ青羽と刃達が出会います。が・・・

第54話 邂逅と暴走

街道

快晴の青空が広がるその下で、仮面ライダーレイブ・ディザンド・ディケイドの3人は夥しい数の異形の存在、ダークローチと戦いを繰り広げていた。

「はっ！」

レイブはその卓越した剣技で次々とダークローチを斬り捨てていき、或いは撃ち抜いていく。ディザンドとディケイドも負けじとダークローチを薙ぎ払っていくが、相手は一向に数を減らす気配を見せない。それどころか明らかに先程よりも多くなっていた。幸いサヤがはってくれた結界のおかげでそれらを一遍に相手にする事態は避けられていたが、それでも現状があまり宜しくないのは手に取るように分かる。

拳句の果てには……

「ん？ げっ！？ 刃さん、何かデカイのが来た！！」

「何だ、あいつは？」

ディケイドが指さす先、結界とダークローチの群れの先に他のダークローチをはるかに凌駕する大きさの存在が見て取れる。生身の間であれば容易くミンチに出来るであろう太さの四肢、他のダークローチと異なりまるで王冠を思わせる形状をした頭部、そして何より目を引く背中についたコブの様な器官。

レイブですら初めて見る存在、それこそがダーククローチのボスとも言えるクイーンローチだった。

「それにしても、こいつ等何で刃ばかりを!？」

ディザンドがダークローチの一体を斬り付けつつ愚痴った様に、ダークローチ達はレイブ『達』ではなくレイブ『のみ』を狙って行動していたのだ。ディケイドとディザンドの攻撃を受ければそれを振り払う為か反撃する事はあったが、それ以外では基本的にレイブを集中的に狙って他の面子には目もくれない。ディケイドとディザンドを無視してまでレイブを攻撃しようとしているのだ。

まるで、彼を排除しようとしているかのよう……

一方その頃、街道を進んでいた青羽達は奇妙な光景を目の当たりにしていた。

「な、何こいつ等……？」

青羽が呆然と呟いたその先では、人気アイドルコンサートもかくやと言った感じにダークローチが群れていたのだ。地を埋め尽くすほど……と言うのはややオーバーな表現だが、途切れる様子を見せないダークローチの群れは驚異だなんだを差し置いて変な感動すら覚えてしまう。

「でもこいつ等……何で俺等には見向きもしないんでしょう？」

弘貴の言う通り、奇妙な事にダークローチ達は青羽達には一切目も

くれない。一度近付いていった青羽達の方に視線を向けはしたのだが、一瞬向けただけで興味を失ったのかすぐに別の方へ視線を向けてしまったのだ。この数を相手にしなければならぬのかと焦った青羽達もこれには啞然としてしまう。

「この先に何かあるのかな？」

「………ありましたよ」

戒が何気なく呟いたその言葉に、ノーマが街道の先を見て何かを見つけた。一同が彼女の指差す先を見ると、そこには今まで彼女達が見た事もない物が存在している。

「何アレ？ ドーム？」

青羽が首を傾げながら見つめる先には、何やら半透明のドーム状の何かが見て取れる。形状からしてドームの頂上に見えなくもないが、こんな所にドームなどある筈がない。

ともあれ何時までもこうしていても仕方がない。幸い相手はこちらに興味がない様なので、このまま迂回なりしてやり過ごしてしまおうかと考えていたその時――

「ん？ なん、うわっ?!」

突然空から雨あられと降ってきた氷や炎の弾丸、飛んできた閃光や斬撃が青羽達の目の前を薙ぎ払い、次の瞬間にはあれほどいたダークローチ達は影も形も見えなくなっていた。

数分前

レイブ達は未だに凄まじい数のダークローチを相手にしていた。結界の中のダークローチがある程度減った所で逃げても良かったのだが、ここで逃げたら他の関係ない人に襲いかかるかもしれない。そう考えて少しでも数を減らすべく戦い続けていた。

「ちっ！ こいつでどうだ！！」

《ATTACK RIDE BLAST》

ディケイドの放った『ディケイドブラスト』が次々とダークローチを撃ち抜き消滅させていくが、それもこの数に前には焼け石に水、結界のおかげで即座に次が来る事もないがそれでも絶望以外感じられない状況だった。

「刃、このままだとジリ貧だぞ。どうする？」

「こうなったら・・・一気に決める」

そう言ってレイブが取り出したのは3枚のカード、彼はそれを次々とレイブラウザーにラウズしていく。

《Separated Chaos Mist》

彼がラウズしたカードは双頭の犬が描かれたカードのワイルド4『セパレード・オルトロス』、様々な生物が融合した怪物が描かれたワイルド6『カオス・キマイラ』、そして虫の様な羽を持つ小人が描かれたワイルド7『ミスト・フェアリー』の3枚。この3枚のカードをラウズすることで、レイブのコンボ技の一つ『エンドレス・スコール』が発動する。

《Endless Squall》

レイブが技を発動させたのを見て、ディケイドとディザンドも勝負をかけるべく1枚のカードを取り出した。

《Final ATTACKRIDE DE・DE・DE・DEZ
ANDE》

《Final ATTACKRIDE DE・DE・DE・DEC
ADE》

「サヤ、結界を消せ!!」

レイブがそう叫ぶと同時に周囲を覆っていた結界が消え、結界に阻まれていたダークローチが雪崩れ込んでくる。だがそれらが辿り着くよりも先にレイブは二つに分離したラウザーの、ディケイドはガンモードのライドブツカーの引き金を引き、ディザンドはディザンドライバーをダークローチに向かって振り抜いた。

「ハアッ!!」

レイブ達が必殺技を放つと同時に、レイブラウザーからは光・闇・炎・氷の銃弾が無数にダークローチ達に襲いかかる。ディケイドの放った『ディメンジョンシュート』とディガイドの放った『ディメンジョンブーム』もアンデッドの群れに向かって行き、ダークローチはおろかクイーンローチも飲み込んでいく。そして彼らの攻撃が終わった時、目の前には凄まじい攻撃に決りとられた大地だけが残っていた。

「終わったか・・・」

「そのようだな」

周囲を見てもう敵はいないと見たレイブがそう言って変身を解き、

他の二人も元の姿に戻った。そんな彼らの下に、サヤが近付いてくる。

「マスター、皆さん大丈夫でしたか？」

「ああ、大丈夫だ」

「私も何ともない」

「俺も・・・」

彼らはお互いの無事を確かめ合うと、今しがたのダーククローチに関して考え始めた。

「何だってあいつら、刃さんばかり狙ったんだろう？　俺やレヴァも無視しようとしてたのに」

「刃、あいつらについて何か知ってるか？」

レヴァが訊ねると、刃は顎に手をやりながらぽつぽつと答えていった。

「あのアンデッドはダーククローチ、依然立ち寄ったブレイドの世界でジョーカーがバトルファイトに勝ち残った際に現れるアンデッドだ」

「ジョーカーって・・・始さんが勝ち残ったら、あんなのが出るのか!？」

「ああ、しかもそいつらは全ての生物を破壊する為に出てくるから倒しても倒しても無限に出てくる」

その言葉に飛翔達は戦慄した。つい先程もアレだけ相手にしたのに、奴らは無限に湧き出てくると言う。しかもそいつらは世界中の生物を破壊する為に現れると言うのだ。

だが刃は、しかしと言って話を続けた。

「ジョーカーが勝ち残ると大破壊が起きる筈だが、それにしてはこの世界は静かすぎる。本当ならこの世界ももつとんでもない事になってないとおかしい筈なんだが・・・」

「それにマスターの話が本当だとしたら、アレがマスターだけを狙う理由が分かりません」

サヤの言葉に飛翔とレヴァはハッとした顔になる。刃の言う事が本当だとしたらダークローチは刃だけでなくレヴァと飛翔、サヤにも襲いかかる筈であった。しかし実際にダークローチが狙っていたのは刃ただ一人。サヤには一切目もくれなかったし、レヴァと飛翔も襲いかかったと言うよりは邪魔するから反撃したと言った方がしっくりくる。

一体どういう事なのか、刃達がしばしその事について考えていると
一一一

「ちよっ!?! 何これ一体何があったの?」

「ん?」

バイクの音と共に少女の驚きの声上がる。刃達がそちらを見ると、青髪の少女を先頭とした5人・・・青羽達が挟れた街道を見ながら近付いてきていた。

この世界の住人か・・・そんな事をぼんやりと考えていた刃だったが、ふとある少女の姿が目にとまる。4台あるバイクの中で一番重厚そうなバイクのサイドカーに乗った、前髪をヘアピンでとめた少女だ。

「これは、貴方達がやったのですか？」

「まあ、そうだが・・・」

刃が赤いサングラスをかけた少女、ノーマの問い掛けに答えながらサイドカーに乗った少女、白奈に目を向けた。向こうも刃の視線に気付いたのか二人の目が合った、その瞬間・・・

「ひっ?!?!?」

突然白奈が小さな悲鳴を上げて顔を青白くさせた。

「白奈? どうしたの急に?」

「あ、ああ・・・うっ!? う、ううう、あ・・・」

「あ、姐さん? 大丈夫っスか?」

白奈の様子を心配した青羽が声を掛けるが、彼女は慄くばかりで何も答えない。そして突然胸を押さえて蹲ったので、青羽がバイクを降りて弘貴と共に白奈の様子を心配していると、突然彼女はサイドカーから飛び出して刃に殴りかかった。

「うわあああああああっ!?!?」

「くっ?!!」

「し、白奈!?!?」

突然の事に驚く青羽達。白奈の攻撃を刃は咄嗟に回避し、同時に彼女の正体が何であるかを確信した。

(やはり彼女はジョーカーだったか。闘争本能が反応しているらしいが、それにしても様子が・・・)

様子がおかしい……そう思っていた時、再び白奈が刃に襲いかかる。

「ちょっと白奈、一体どうしたのよ?!」

「うわああ、ううう、がああああつ?!」

必死になって青羽とノーマが白奈を宥めるが、まるで獣の様な叫び声を上げて白奈は二人に抵抗した。

「おい、一体何なんだ! いきなり刃に襲いかかって!?!」

「いや、これはこっちにとっても予想外の事態で……白奈、一体どうしたんだ!」

突然の白奈の行動に非難の声を上げるレヴァに、戒も訳が分からなと言った顔で返すと白奈を止めに入る。すると白奈は必死に止めようとしていた青羽達を振り払って、その姿をジョーカーのそれに変えてしまった。

「白奈!?! どうして!?!?!」

「こ、こいつもジョーカー?!」

「ッ!?! 貴方達、ジョーカーの存在を知っているのですか?」

青羽が白奈がジョーカーに姿を変えた事に、飛翔は白奈がジョーカー出会った事に驚愕し、ノーマは飛翔達がジョーカーを知っていた事に反応した。その間にもジョーカーによる刃への攻撃は続いている。

「うわあああああつ!?!」

「くっ!?! 仕方がない……」

刃はジョーカーの攻撃を回避しながら、その手に再びWA『チェンジ・エインヘリアル』を取り出して腰に出現させたナイトラウザーにラウズした。

「変身！」

《Change》

刃は再びレイブに変身すると、ジョーカーの攻撃を真っ向から受け止める。青羽達は人が変身した姿に一瞬気を取られるも、青羽は即座に二人の戦いを止める為に割って入ろうとした。

「ちょっと待って！ 白奈、一体どうしたの？！」

「青羽、恐らく今の彼女には私達の言葉は届きません。止めるなら力付くで止めなければ」

「ッ！？ で、でも・・・」

ノーマの言葉に青羽は固まってしまった。白奈は確かに人間を愛していた筈だ、その彼女がこんな事をする筈がない。そんな考えが青羽の中で枷になり、変身してでも止めようと言う考えを無くさせてしまう。そもそも彼女が何故こんな事をしているか分からないのだ。

「刃、今助ける！」

葛藤する青羽を余所にレヴァと飛翔は変身して戦いに参加し始め、戒も白奈を止めるべく弘貴と共に変身した。

「今は彼女を止めるのが先決だよ」

「あれ？ 何か変なライダーっすねあの人たち。って言うか片方どっかで見た覚えが・・・」

「ディケイド！？ あずささんじゃないのに?! じゃなくて、待

って二人とも!!?」

飛翔がディケイドに変身した事に驚く青羽だが、すぐにギャレンとアクスを止めようと声を掛ける。だが一步遅く二人はジョーカーを押さえにかかってしまう。

「青羽! 今は戦うしかありません!!」

「何でよ、一体何が・・・」

ノーマの言葉に青羽は辛そうに顔を歪めながら、バックルにカードを装填して腰に装着したのだった。

そんな彼女たちの様子を、じっと見つめる者が数人・・・

「一体何がどうなってるんだ? ジョーカーがあいつらと合流しただけでも面倒だってのに、なんか訳わかんない連中と戦いだしたぞ」

そう言ったのは、消音装置を起動させた特殊工作用ステルスヘリ『オウル』に乗った恭司である。彼はヘリの窓から双眼鏡で青羽達の様子を確認していた。

「恭司さん、最近お地藏様なんかを酔っ払った勢いで蹴り飛ばすなんて罰当たりな真似をした記憶はありませんか?」

「俺は酒に飲まれたことなんて一度もないし、そもそもそんなことしただけでこんな事態になって堪るかってんだよ。『リザードテール』はこっち来てんのか?」

「通信・・・・・・・・もう直ぐ」

苛立ちを隠しながら恭司が放った言葉に、怜奈が必要最小限以下の

言葉で答えた。その言葉に恭司は多少満足したのか内心の苛立ちを納めると、再び戦いの様子を見るべく双眼鏡を覗き込んだ。

その頃……

一直線にある方向へ歩いていった寧々だが、何かに気付いたかのように顔を上にあげるとその場に立ち止まった。

「不味いわ、このままだと……. こうなったら」

険しい表情だった寧々は何を思ったのかその場で手に持っていた本を開く。何も描かれていないページが風で次々と捲られていくが、寧々が手を出して捲られていくのを止めるとそこには一人の人物が描かれていた。ダブルスーツを着こなした、自信に満ちた目をした男性である。その彼の背後には牛を意匠した様な紋章も。

寧々はそれを見ると、徐に右手の人差し指を口元に持っていき指先を歯で噛み切った。当然その手からは赤い鮮血が滴るが寧々は気にも留めず、それどころか血を男が描かれたページに垂らしさらに文字を描くかのように塗りたくった。

するとどうだろう、ページに塗られた寧々の血が男と紋章に集まっていき次の瞬間には赤い光る球体が本から飛び出して何処かへ飛んでいってしまった。残された本には何も描かれていない。

「もう一人くらい、出しておこうかしら」

そう言って寧々は再びページを捲っていき、今度は先程とは異なり筋骨隆々とした男が描かれたページでその手を止めた。そして今度

も同じように血を垂らし、文字を描く様に塗るところからも赤い光る球体となってページから飛び出していく。

寧々はそれを見送ると、先程よりも足早にその場を後にするのだった。

第54話 邂逅と暴走（後書き）

と言う訳で第54話でした。

今回白奈が突然暴走して刃に襲いかかりましたが、何故彼女がこの様な行動に出たのかは次回以降で語られるのでしばしお待ちを。

寧々が今回初めて持っていた本を使用。ちょっとファンタジーチックな描写でしてね。まあこの世界事態がRPGのファンタジー世界をベースにして作られているので。

ちなみに寧々が開いた本に描かれていたのが誰だったか、皆さん分かりますか？ 皆さんが見た事ある筈の人物ですよ。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第55話 混戦・魔女の仲介（前書き）

どうも、黒服です。

今回はコラボ編第3話をお送りします。前回寧々が使用した本の効果が見えますよ。

そう言えば今さらですけど、ユーザーページに出てた規約改定の表示が消えましたね。

第55話 混戦・魔女の仲介

突然暴れ出したジョーカー!! 白奈を止めるべく、刃達と青羽達はライダーに変身して対抗する。

だが彼らの行動は大きく分けて2つに分かれていた。

「白奈、一体どうしたのよ! 落ち着いてっば!?!」
「ううう、うわあああああっ!!?!」

一つは青羽と弘貴のジョーカーを必死に宥めようとする動き。ラウザーも抜かず言葉をかけて必死にジョーカーを正気に戻そうとしているが、相手は依然として元に戻る気配がない。それどころか邪魔するなとばかりに容赦なくブレイド達に攻撃を仕掛けてくる。

「青羽! 無茶です!?!」

「何がどうなってるんだ、なんであいつ・・・」

そして二つ目が、ノーマやレヴァの様な力付くでジョーカーの動きを止めようとする動きだ。ノーマ・戒と刃・レヴァ・飛翔とではジョーカーに対する認識に違いがあったのだが、ジョーカーを大人しくさせると言う所で両者は一先ず共闘することになっていた。

「ぐぎぎっ・・・白奈の姐さん、落ち着いて・・・」

「ぐるあああああっ!?!」

「ぐうあっ?!」

背後から羽交締めにしてジョーカーの動きを封じようとするアクスだったが、途轍もないパワーで振り払われたのち鋭い爪による一撃

を胸部の装甲に喰らってしまう。攻撃を受けて数歩後ずさったのち再び向かって行こうとして、ふと自身の斬り付けられた部分を見て絶句した。

「うえっ?! ちょっと、マジでッ!？」

彼が目を向けると、アクスの取り柄でもあった硬さを持つ装甲に大きな傷が付いているのが見て取れる。今までライダースーツ部を受けてダメージを受けたことはあったが、装甲部分を斬りつけられて装甲諸共ダメージを受けたことなど初めてのことであった。

「彼女の突然の豹変……貴方達一体何をしたんですか？」

「そんなこと知る訳ないだろ!？ こっちだって訳が分からないんだ!!」

突然のジョーカーの暴走に原因がレイブ達にあるのではないかと考えたカリスが、彼らに疑いの目を向ける。それに対してディザンドが当然ながら反論しつつジョーカーに斬りかかって行った。

「とにかく、こいつを何とかしないと!」

「ちょっと待って!？」

ジョーカーに向かって刃を振り下ろしたディザンドだが、それはブレイドのラウザーによって受け止められてしまう。

「おい! 何をッ!？」

「お願いだから待って!？ 白奈はこんな事する子じゃ、アグッ?!」

必死にジョーカーを弁護しようとするブレイドだったが、その背に

背後のジョーカーの一撃が決まりディザンド諸共吹き飛ばされてしまう。無防備な状態で攻撃を受けた為かなりダメージが大きかったが、何とか立ち上がりジョーカーの方を見た。そこでは白いジョーカーがディケイドやカリスの攻撃を受けながらも必死になってレイブに襲いかかろうとしている様子が見て取れた。

その頃、レイブ達はジョーカー相手に意外な苦戦を強いられていた。単純な戦力で言えばレイブやカリス達の方が勝っているのだが、ジョーカーはまるで自身の存在全てを賭けているかのような凄まじい戦闘力を発揮していたのだ。

それでもレイブはその戦闘のセンスでジョーカーと互角に渡り合っていたが、その実仮面の奥では顔を顰めていた。

（くそっ、ジョーカーの闘争本能が俺に対して反応しているのか？
しかし、こいつはさっき見た限りだと随分と安定しているようだったが・・・）

彼、仮面ライダーレイブこと黒滅こくめつ 刃じんはジョーカーアンデッドである。本当はそれ以外にも彼には秘密があるのだが、それはこの場では関係ないのであえて触れないでおく。

とにかく彼がジョーカーアンデッド、ナイトジョーカーである事は事実だが、それでも彼が感じた様に目の前の白いジョーカーこと白奈はジョーカーとしての闘争本能を完全に抑え込み、完全に安定な状態だった。にもかかわらず突然のこの豹変、レイブも内心で動揺を隠せなかった。

「ハアッ！」

ディザンドが隙を見て――と言ってもジョーカーはレイブ以外は眼中にない状態だったので、他のライダーに対しては完全に無防備だったが一ディザンドライダーでその背を斬り付ける。だがジョーカーは、それがどうしたと言わんばかりに依然としてレイブにのみ攻撃を仕掛けていた。

ディザンドだけでなくディケイドやカリスもジョーカーに割と本気の攻撃をしていた為、ジョーカーは体の至る所から緑の血を流して満身創痍の状態だ。だがジョーカーは、まるで止まる様子を見せない。その姿からは途轍もない執念の様な物を感じた。

それでも全くレイブ以外のライダーに攻撃を仕掛けない訳ではない。時には邪魔なモノを振り払うかのように他のライダー達にも攻撃を行っていた。

「うわっ?! くっ!」

もう何度目になるか分からないジョーカーの薙ぎ払いを、ディケイドは寸での所で回避する。

「くっそお、こいつ一体・・・ん?」

ディケイドがジョーカーに対して悪態をつきながら再び向かっていこうとすると、不意に視界の隅で何かが動いたのが見えた。何かと思ひ彼がそちらを見て見ると、そこにはダブルスーツを着た男性とミルクを入れておくようなタンクを肩にかけた筋骨隆々とした男が近付いてくるのが目に入る。その二人の姿は、カリスの目にも入っていた。

「何だ? あんた達は・・・」

「一体・・・何時の間に・・・」

デイケイドとカリスがそう呟く中、二人の男はその場で立ち止まった。

「それじゃまあ、いきますか」

「さうて、稼ぎますか」

二人がそんな事を言うと、筋骨隆々とした男はタンクを降ろして代わりにベルトの様な物を取り出した。対してもう片方の男は、緑色の手の平サイズの薄い箱の様な物を取り出す。

全く見た事のないその二人が手に持った物に、カリスは内心で首を傾げていた。だがデイケイドの方は、少なくとも薄い箱の様な物に關しては一度見た事がある。

（あれは、確か龍騎の世界にあったカードデッキ・・・でも何でこの人カードデッキを持ってるんだ？ それにもう一人の方は・・・）

デイケイドとカリスが見守る中、一人が小さい箱――カードデッキ――を前に掲げるとその腰に何処からか現れたベルトが巻き付き、もう一人は腰にベルトを撒くと手に持っていた銀色のコインを親指で弾いた。

「「変身！」」

カードデッキを持った男がポーズをとり、もう一人が弾いたメダルをキャッチしてそう言う。そして一人がカードデッキをベルトのバックル部分に装填すると、3つの虚像が彼に重なってその姿をロボ

ツトの様な緑の戦士・仮面ライダーゾルダに変えた。

「ッ!？ あれは、仮面ライダー……なのですか？」

カリスが驚く中、もう一人はキャッチしたメダルをバックルの左側から入れて右側に付いたギアの様な部分を回転させる。

すると小気味いい音と共に彼の全身を球状のエネルギーが包み込み、同時に様々なパーツが生成されて彼の体を覆っていった。そして球状のエネルギーが消えた時、そこには鈍い銀色に輝くもう一人のライダー・仮面ライダーバースが現れる。

「なんだ、あいつ?! アレも仮面ライダー？」

ディケイドは今まで見た事もないライダーの姿に驚愕する。

カリスとディケイドが呆然とする中、ゾルダとバースは己の武器を手にとるとジョーカーに向かって引き金を引いた。

「な、なにっ?!」

「ッ!？ なんだ、あいつら？」

ブレイドやレイブが見る中、ゾルダは大型の拳銃型の武器・マグナバイザーの、バースはサブマシンガンの様な武器・バースバスターの引き金を引いて、ジョーカーをその場から遠ざけていく。

「ちょっと待って、なん「はゝいはい、ちょっとごめんよ!」」

一瞬唾然としていたブレイドだが、すぐに我に返ると二人のライダーを必死に止めようとする。しかしそんな彼女を、バースはやんわ

りと遠ざけてしまう。

「こういうゴチャゴチャした戦いは好きじゃない」

バースがブレイドを足止めしている間に、ゾルダは腰のカードデッキから1枚のカードを取り出してマグナバイザーの銃身についているマガジン部に装填した。

《SHOOT VENT》

ゾルダがカードを装填すると、マグナバイザーから電子音が響き何処からか身の丈以上の長さを持った巨砲が彼の手に収まる。見た感じからしてかなりの重量がありそうなその巨砲『ギガランチャー』をゾルダは重さに喘ぐことなく構えて見せ、銃撃のダメージが未だ残るジョーカーに向けて引き金を引いた。

「があああああああつ?!」

「白奈ッ!?!」

ゾルダの砲撃に叫び声を上げて吹き飛ばされるジョーカー。ブレイドがそちらに注意が逸れた瞬間、今度はバースが近くに置いてあったタンクに近付き、徐に銃身下のマガジンの様な部分を外して中に入っていたメダルをその場に捨てて。そしてタンクを開くと、中に入っていた大量の銀のメダルを掬い取ってマガジンを銃身の下に戻さず銃口に直接取り付けた。

「さして・・・」

《セルバースト》

「ッ!?!? させない!」

そして銃口を真っ直ぐジョーカーに向け、それを見たブレイドが止めようとするが今度はゾルダの銃撃がブレイドの足を止めてしまう。その隙を見逃さず、バースはジョーカーに向けて引き金を引いた。

「うあ、があああああああ……うつ」

「白奈、白奈あ!!?」

バースの『セルバースト』を受け、遂にその場に倒れるジョーカー。ブレイドが駆け寄ると、その姿はジョーカーの者から白奈の物に変わり力無くぐったりとしていた。

「白奈、白奈しっかりして!?!」

「う……ん、青……羽?」

ブレイドが必死に声をかけると、白奈はゆっくりと目を開き青羽の名を呼んだ。どうやら人としての心を取り戻したらしい。それを見てブレイドは仮面の奥で安堵のため息をつく。

ブレイドが元に戻った白奈の様子に安堵しているなか、他の者達は突如現れたゾルダとバースに目を向けていた。

「あなた達は一体何者です? 一体何処から……」

その場の全員を代表してカリスが二人に声をかけるが、ゾルダもバースも何も答えない。それどころか彼女達が見ている前でその姿がどんどん薄くなっていき、最後にはその場に数滴の血を残して消えてしまった。異常とも言えるその様子に、カリスも言葉を失いつつ彼らがいた場所をまじまじと観察していた。

(今のライダーの内片方は龍騎の世界の仮面ライダーゾルダ。それ

は分かるが、もう片方は一体………ッ!?)

ゾルダについてはレイブこと刃も知っていた。だがもう片方のバーンについては彼も始めて見るライダーだったので、そちらに関する知識は無いに等しかった。しかし彼も仮面ライダーであるだろう事はすぐに分かったので、恐らく最近新たに生まれた世界のライダーか何かだろうと想像する。

その時、不意に周囲から新たな敵意を感じ取った。

「青羽、どうして変身してるの？ あれ………そう言えば、私、一体何を……」

「白奈、覚えてないの？」

だが敵意を感じ取ったのは彼だけなのか、ブレイドは白奈の異変に首を傾げ、他の者はゾルダとバースが消えた所に集まっている。いや、サヤも周囲に意識を配っていたからか彼女も周囲の気配に気付いた様子で辺りを警戒していた。

「全員警戒しろ。何かが来るぞ！」

レイブがそんな彼らに警告すると同時に、近くの森の中から無数の銃撃が彼らに向かって行われた。それと同時に森の上空を音もなく3機のヘリが飛んでいき、ブレイド達を通り過ぎたかと思うとそこで滞空しつつゆっくりと降りて来る。

「な、なんスかいきなり?!」

「ッ!?! あれは隠密調査部の……?!」

アクスが突然の銃撃に驚く中、ギャレンは黒塗りのヘリを見て相手

が何なのかを悟る。

その時、森の奥と降下したヘリの内2機からは全身が黒に塗装されたランスの様なライダーが現れた。ただしその手に持っていたのは銃型のラウザーではなく、サブマシンガンの様な形状のラウザーだったが。

「何だこいつ等は？」

「少なくとも、敵である事は確かかと」

レイブも始めて見るそのライダー達は、しかし敵意だけはハッキリと感じ取れたので敵である事がすぐに分かった。そして、残った1機のヘリからは3人の男女が降りてくる。

「よう、また会ったな」

「あんたは……恭司!!」

ヘリから降りて来た男、黒木 恭司の姿にブレイドは声を上げ、対する恭司はさも愉快と言った雰囲気口を開いた。

「これで3度目か？ お前らとこうして会うのも」

「今日は何の用です？ 遂に私達を消しに来たんですか？」

カリスが周囲のライダー達に警戒しつつ恭司に声をかける。その声にはかなり殺気が込められていたが、彼はそれを特に気にした様子もなく懐からコモンブランクを取り出した。

「今日はお前らに用は無いよ。俺が用があるのはそのジョーカーさ」

そう言って真っ直ぐ白奈を指差す恭司に、ブレイドが悲鳴の様な声を上げた。

「ッ！！ 白奈を封印するつもり！！？」

「御名答。ジョーカーを研究したいって奴が居てね。こんなチャンス滅多にないし、ここらでさっさと封印させてもらおうかと」

そう言いながら白奈に近付いていく恭司。咄嗟に彼女を守ろうとブレイドやギャレンが動くが、その瞬間周囲のライダー達が銃口を彼女達に向ける。

「動くなよ？ お前らがちょっとでもおかしい態度を見せれば、全員その場で蜂の巣だ。特にそこのお嬢さんなんかは生身だ、アツサリあの世に行っちゃまうぜ？ あんまり他人を巻き込みたくはないだろう？」

その言葉にブレイド達は動けなくなってしまう。銃口を向けられている事もそうだが、何よりブレイド達にとってはレイブ達は巻き込まれただけの他人である。そんな彼らを危険にさらす事は、彼女達にとっても不本意な事だった。

対してレイブ達は、恭司の行動に怒りを覚えていた。ジョーカーである白奈を封印する事に関しては、そもそも彼らは白奈と面識がないに等しかったのであまり思う所は無い。だが他人の弱味に付け込んで動きを封じるなどと言う事は、彼らにとっても許せる事ではなかったのだ。

それに何より、レイブ・・・刃にとっては、サヤ達も平気で傷付けようとしている恭司が許せない。ジョーカーとしての残虐な部分が彼の怒りに反応し、静かな殺気を恭司に向ける。その影響からか、

仮面の奥にある紅い右目が金色に変化した。

そこで恭司も自分に向けられている殺気に気付きレイブに目を向け、怒りに堪え切れなくなったレイブがついに恭司に襲いかかろうとしたその時――

それ以上の殺気が辺りを包みこんだ。

「ッ！？ これは・・・」

「あ？ うおっ?!」

レイブやブレイド達が殺気に気付いて周囲を見回す中、突然恭司が手に持っていたコモンブランクが何かに弾かれる。コモンブランクを弾かれた恭司が手を押さえながら辺りを見渡すと、弾かれて地面に落ちたコモンブランクの近くにはユニコーンが描かれた1枚のラウズカードが落ちていた。

「こいつは・・・」

恭司がそれを見てカードが飛んできた方に目をやると、本を片手にキャリーバックを引いたゴスロリ調の服を着た一人の女性の姿を見つける。

「お前は、神崎 寧々ッ!？」

「寧々さん！ 何でここに?!」

「うふふっ、こんにちは」

恭司は現れたその人物に目を見開き、ブレイド達も驚愕の目を彼女に向けている。対する寧々は普段と変わらぬ様子でその場の全員に挨拶するが、その身から発する威圧感だけは依然としてその場の全

員を圧迫していた。

「神崎、寧々……」

「あいつが、あの？」

「あの女が……」

彼女の姿に、周囲のライダー達から困惑と畏怖が混じった声が出始める。恭司はそんな彼らを睨みつつ、先程とは異なる忌々しげな顔で寧々に話しかけた。

「お前……何の用だ？」

「うーんと、一言で言えば……」

寧々は小首を傾げつつそんな事を言ってきた。常の状況であればその仕草は大変可愛らしい物である筈なのだが、今の状況では可愛いなどと思える筈もない。本来であればこの場でこの様な事を言われてすんなり退く訳もなく、ふざけるなの一言で片付ける筈であった。

しかし……

「……帰るぞ」

恭司はしばし寧々の顔を睨みつけた後、意外なほどあっさりとその事を言っただけで踵を返した。あまりの呆気なさに、ブレイド達等一瞬思考が停止しかけたほどだ。

「いいんですか？ ジョーカーを封印する千載一遇のチャンスかもしれないよ？」

「お前やる気あんのか？」

「……御冗談を」

踵を返す恭司に晃が皮肉を言うが、恭司の言葉に参ったとばかりに両手を上げる。

「いいの？・・・命令・・・怒られる」

「構やしないだろ、あの女が出たって言えば主任も納得してくれるよ」

怜奈が恭司に心配そうな眼を（傍から見ると分かり辛い）向けると、恭司はそう言いながら彼女の肩を叩く。その恭司の背に、寧々が声をかけた。

「ありがとう、聞き分けのいい子は私好きよ」

まるで小さい子供に向かって言う様なそのセリフを言われた瞬間、恭司は懷から取り出した拳銃を寧々に向けて引き金を引いた。乾いた音が響いた瞬間、ブレイド達は一瞬目を見開いた。が・・・寧々は引き金が引かれたとほぼ同時に、体の正面で握り拳を作っていた。そして全員が見守る中、彼女がゆっくりと人差し指と中指を伸ばすと、そこには指の間に挟まれた1発の銃弾が。

「聞き分けはいいけど・・・やんちゃなのは頂けないわね」

そう言って再び銃弾をその拳の中に収めると、寧々は握りしめた銃弾を親指で恭司に向かって弾き飛ばした。弾かれた銃弾は真っ直ぐ彼に向かって飛んでいき、恭司の頬を掠って飛んでいく。

薄らと滲みでる血、それに恭司は舌打ちし怜奈が怒りの形相で寧々に向かおうとするが、それは恭司に止められる。そして怜奈を宥め

た恭司はへりに向かって行くが、ふと立ち止まって振り返ると――

「俺だってな、魔女の相手をする趣味はねえんだよ」

どこか侮蔑が籠った声でそう告げた。

彼の言葉に寧々は目を細めるが、恭司はそんな彼女に鼻を鳴らして今度こそへりに乗り込んだ。そして他の二人やライダーもへりに乗り込んだりその場から立ち去ったりしてその場を去っていき、その場にはブレイド達とレイブ達、そして寧々だけが残されていた。

「えっと……寧々、さん？」

隠密調査部が去っていったところを見計らって、ブレイドがおずおずと寧々に声をかける。正直な話、彼女がここまで怖く思えた事は無かったので一瞬別人に思えてしまったのだ。

「ん？ なぁに？」

だが当の寧々は、先程まで出していた殺気をアツサリしまい込むと普段通りの笑顔でブレイドの方を見た。その様子に何となく安堵したブレイドを余所に、寧々はレイブ達の方を見る。

そして、いつも通りの様子で笑顔を浮かべながら彼らに声をかけた。

「初めまして。私の名前は神崎 寧々、宜しくね」

第55話 混戦・魔女の仲介（後書き）

と言う訳で第55話でした。

寧々が使った本から出て来たのは、龍騎のゾルダこと北岡さんと現在オーズでバースをしている（でも明日の放送辺りで退場しそうだなあ…）伊達さんでした。この二人を選んだのは個人的に好きな銃使いライダーだったからです。だからって別に橘ギヤレンや風間ドレイクが嫌いと言う訳ではありませんけどね、ただあの二人よりも彼らの方が好きと言うだけであって（^^;）

恭司が美味しい所を持っていくこうとしてあえなく失敗。今回の恭司が口にしていましたが、サブタイの『魔女』と言うのは寧々の事です。何故彼女が魔女と呼ばれるのか、それは今後の展開などをお楽しみに。

それでは。

第56話 お茶会と原因（前書き）

どうも、黒服です。

今回は前回までとは異なり、説明がほとんどになります。

第56話 お茶会と原因

隠密調査部の面々が立ち去った後、ブレイドとレイブ達は変身を解いて元の姿に戻って対面していた。青羽、ノーマ、戒、弘貴、白奈の反対側に刃、サヤ、レヴァ、飛翔が座り、寧々がその中間に腰掛けている状態だ。

お互いしばらく何も話さないでいたが、この空気に堪えかねたのか青羽が刃達に話しかけた。

「あの、何かごめんなさい。巻き込んだって言うか、なんて言うかその……」

「いや、気にしないでいい。あと敬語も必要ないぞ。俺は黒滅 刃だ、刃と呼んでくれ。こっちがサヤで、こっちがヴァンティ・レンと飛翔」

青羽がとりあえず頭を下げていると、刃は手を上げてそれを制し代わりに自分達の自己紹介をする。刃に紹介されて、サヤ達も青羽達に頭を下げた。

「初めまして、サヤと申します」

「ヴァンティ・レンだ。レヴァと呼んでくれ」

「飛翔です、宜しく」

彼らが自己紹介を済ますと、それに答える様に青羽達も自己紹介を始めた。

「あたしは青羽、桐沢 青羽って言います」
「……ノーマ・イクスです」

「大神 戒です、どうぞ宜しく」

「あつ、俺櫻羽 弘貴ッス！」

青羽達が自己紹介を済ませるが、白奈ただ一人は青羽の背に隠れて怯えた目で刃達に目を向けている。青羽に事の顛末を聞いて気まずくなったのだろうか。

「ほら、白奈」

「う、うん・・・・・・・・・・白井・・・・・・・・白奈です。さっきはその、すみません」

青羽に促されておずおずと自己紹介をするが、その声は小さく注意深く聞かなければ分からないほどだった。

「さっきからどうしたんですか？ いきなり刃さんに襲いかかったり」

怯えた様子の白奈に、飛翔が訝しげな目を向ける。それはその場の全員が思っていた事で、青羽達も一体彼女に何があったのか知りたかった。

「ねえ白奈、一体どうしたの？」

「分からない・・・・・・・・分からないけど、何かあの人・・・・・・・・怖い」

そう言って青羽の上着を握りしめる白奈。その様子に青羽が首を傾げていると、ここで漸く今まで黙っていた寧々が口を開いた。

「大丈夫よ、すぐに慣れるから」

「寧々さん？ 一体どういう事ですか？」

何かを知った風な口調の寧々に、ノーマが疑問を投げかける。それを受けて寧々はキャリーバックから人数分のガスコンロとポットを取り出して紅茶の準備を始めた。

「ま、いろいろ聞きたい事はあるかもしれないけどまずはお茶でも飲んで落ち着きましょう」

笑顔でそう言った寧々にノーマはこれ以上何を言っても無駄だと悟ったのか、質問の対象を寧々から刃に移した。

「一つ訊ねたいのですが……貴方、人間ではありませんね？」

「ッ！？ 何で?!」

「ええっ?!」

「……よく分かったな」

ノーマの言葉に周りが驚く中、刃だけは冷静にそれを受け止めた。この中で驚いていないのは質問したノーマとされた刃、そして何もくと紅茶の用意をしている寧々だけである。

「私も、普通の人間ではありませんので……」

「アンデッドか？」

「いえ、どちらかと言えばそのハイブリッドです。ですが妙ですね、貴方からはアンデッドの気配がしますが、いまいちはっきりしません」

そう言ってノーマはサングラスの奥で目を細めてじつくりと刃を眺める。ノーマから感じる強い視線に、刃は言い様のない居心地の悪さを感じていた。

あまりの居心地の悪さに、刃もどうしたものかと内心で苦い顔をしていた時・・・

「あの〜〜・・・お話し中の所ちちょっとお尋ねしたいんですけど・・・」

「なんですか、今大事な話を・・・」

突然弘貴が手を挙げながら声をかけて来た。ノーマはそんな彼に若干の苛立ちを感じつつ何事かと訊ねると、主に飛翔とレヴァに目を向けながら口を開く。

「いや、そっちの人が人間じゃないってどこにも凄い驚いてるんスけど・・・そっちのお二人が変身してた仮面ライダーみたいなのって何なのかな〜って・・・」

そこでようやくノーマも弘貴が異世界という概念を知らない事に考えが至った。よく見ると青羽の後ろに隠れた白奈も気になると言いたげな顔をしている。

ノーマはしばし考えた。ここで弘貴の言葉を無視して刃を詰め寄っても構わないのだが、あまり彼を置いてきぼりにすると言うのもあまり気持ちのいいモノではない。

しばらく考えた結果、渋々ながらノーマは弘貴にも異世界の存在を説明する事にした。

「彼らは恐らくこことは異なる世界の仮面ライダーでしょう」

「異なる世界？　なんスかそのどっかの映画なんかに出てきそうなフレーズは？」

ノーマの言葉に、弘貴は最初半信半疑と言った顔をしていた。当然だろう、いきなり異世界だ何だ言われてすんなり信じるなど出来る筈がない。

「まあ疑いたくなる気持ちも理解できますがね。しかしこれは事実です。実際貴方も以前彼らとは違いますが異世界のライダーに出会っている筈ですよ」

そう、弘貴は以前別の世界の仮面ライダーディケイド、三浦 あずに助けられた事があったのだ。当の本人はその事を忘れていたようだが、ノーマに指摘されて漸く彼もその事を思い出した。

「ああ！ あの時の・・・」

「そう言う訳で、異世界の仮面ライダーと言うのは存在するんです。分かりましたか？」

正直な話、これだけで異世界の存在を信じろと言われて信じるのは難しいものがあるかもしれない。しかし試しに飛翔に再び変身してもらい、この世界のライダーシステムとは根本的に異なるディケイドの変身方法に弘貴も薄らとだが異世界と言うモノを信じる様になっ

「青羽ちゃん、コップ何か出してくれる？ 流石にこの人数全員のカップは持ってないのよ」

「えっ？ あ、ああ、分かりました」

そんな時、用意が出来たのか寧々が紅茶を入れる為のカップを用意し始める。だが流石に10人分のカップを普段から持ち歩いてはいないので、青羽にも何か持っている入れ物を出す様に頼んだ。

青羽が自分達の分のコップを出していき、寧々がそれに次々と紅茶を注いでいった。

寧々に出された茶を、とりあえず一口飲む一同。すると、飛翔がある事に気付く。

「ん？ あれ、もう甘い？」

「君はそっちの方が飲みやすいでしょ？」

そう言ってやんわりと微笑む寧々。どうやら飛翔のカップにだけ一足早く砂糖を入れていたらしい。あからさまな子供扱いにムツとした顔になる飛翔だったが、紅茶はそれなりに美味かったので一先ずもう一口飲んで誤魔化する。

その様子に微笑むと、寧々はいよいよ本題に入った。

「さてと、それじゃあさっき一体何があったのか、皆いい加減知りたくて仕方ないでしょ？」

寧々の言葉にその場の全員が肯首する。当然だ、下手すればとんでもない事になっていたかもしれないのだから。

「まあ簡単に言うと……君がこの世界から拒絶されてたのよ」

そう言って寧々は刃を指差した。彼女の言葉がよく理解できない青羽達は首を傾げ、対する刃達は顔を顰めている。

「どういう意味だ？」

顔を顰めつつ質問する刃に、寧々はしばし顎に指を当てて考え込む。

「ん〜つと、そうね……。カップをこの世界に例えてみるわね」

そう言って自身のカップを上にあげる。全員の視線が注目する中、寧々はカップに半分ほど紅茶を注いだ。

「このカップが世界で、紅茶がこの世界の住人。まだまだ余裕はあるわよね？」

寧々の言葉に当然の様に全員が頷く。カップにはまだ半分ほどしか紅茶が入っていないのだし、カップに余裕は十分にあると言えた。

「カップにはまだ半分しか紅茶が入ってない。だから、ここにコーヒードでもタバスコでも何を入れるのも自由よ。マヨネーズ、ラード、お味噌……。個人の趣味で紅茶に合うかどうかは関係なくね」

彼女が言ったその例えに、青羽は想像しただけで胸焼けがした。紅茶にコーヒードや、あろうことかタバスコ、マヨネーズ、ラードに味噌を入れようなどと言う輩が果たしているのだろうか？

「世界も同じよ。その世界の住人に合うかどうかは関係なく、大抵のモノは受け入れるだけの懐の深さは持つてるわ。だからこの世界にもう一人ジョーカーがやって来たとしても、そう簡単に拒絶はされないの。この世界の中でだって、規定外のジョーカーが生まれる可能性は無くはないもの……。ね」

寧々はそう言いながら色取り取りの角砂糖の中から黒い砂糖と白い砂糖を紅茶に入れた。白奈ともう一体のジョーカーを指しているのだろうか。そこにさらにもう一つ、今度は青い角砂糖を入れ溶かし

角砂糖3つ入った紅茶を口の中に流し込む。

ちなみに、ちょっと前にやって来たジョーカーと言うのは以前この世界にやって来たもう一人の仮面ライダーブレイド、沖田 総司の事であるのだがそれは青羽達も知らない事である。

「そう言う訳で大抵の事であれば世界は何だって受け入れてくれるんだけど……今回はちょっと行き過ぎちゃったのよねえ」

そう言って寧々は新しく注いだ紅茶のカップの中に何個も角砂糖を入れてしまう。入れ過ぎるあまり砂糖が溶けきらず紅茶内部を漂っていた。

「行き過ぎって……どういう意味なんですか？」

「……ハッキリ言ってもいいかしら？」

寧々の言葉の意味が分からず戒が首を傾げて訊ねるが、寧々は即座に答えず刃に了承を得ようと彼に話しかける。話を振られた刃はここで寧々が言いたい事情を大体察し、無言で頷いた。

「彼はね、ジョーカーであり他の様々な怪人でもあるのよ。ダグバ、ワーム、ファンガイア……他にもいろいろな怪人の因子を持っているわ。いくらこの世界が広い懷を持つてると言っても、流石にそれだけの数の怪人が一遍に入ってきたら話は別。この世界、意外とデリケートだから、君が入ってきた瞬間この世界もびっくりして咄嗟に君をここから追い出そうとしちゃったのよ」

刃がジョーカーと言うことにも驚いたが、それ以上に聞いた事もない怪人の名前を挙げられて青羽達は頭が混乱してしまう。次々と寧々が怪人の名前を列挙していくが、青羽達はアンデッド以外知らない

いので、それらの名を挙げられてもピンとは来なかったのだ。

ちなみに弘貴と白奈を除いた青羽達は以前一度ファンガイアには出会っているのだが、ファンガイアを知らない青羽達にとってはそれを知る術は無かったりする。

なおデリケートと言うのはアンデッドがファンガイアの祖先であるという、両者が同じ世界に存在する土壌の事を指している。その世界における理を維持するためには、刃の様な『強過ぎる』存在にいきなり来られては困るのだ。刃は複数の怪人をその身に宿すと同時に彼の意味一つで世界や生命を消滅させる事の出来る『断罪者』としての力も持っている。それが突然入り込んできると言う事は、何もいれていなかった口にいきなり大量の塩や唐辛子をぶち込むのと同じであった。

とその時、ノーマがふと隣に目を向けてみると・・・

「あの寧々さん、もう少し簡単な説明は無いでしょうか？」

「うん？」

「弘貴が頭から煙を吹いています」

ノーマの視線の先には、虚ろな目で頭から湯気を出しながらゆらゆら揺れている弘貴の姿があった。それを見て寧々は少し考える。

「そうね・・・簡単に言っちゃえば激しいスポーツをした直後にキンキンに冷えた飲み物を飲むみたいなものね。あまり冷たすぎる物を飲むと、体がビックリしちゃうでしょ？」

それと同じよと言う寧々だったが、本当はそんなレベルの話ではない。話ではないのだが弘貴はそれで何となく理解したのか、割と普

段通りの状態に戻った。

「それでは、マスターはこの世界にいてはいけないと……そう言う事なんですか？」

刃の存在を否定するとしても言いたげに聞こえたサヤが、寧々の言葉にそう言って来た。だが寧々はそれに対し首を横に振る。

「ううん、そろそろ大丈夫よ。言ったでしょ？ 世界は意外と広い懷を持ってるって。白奈ちゃんがその証拠よ」

寧々がそう言ってカップで白奈を指す。全員の視線が白奈に注目する中、寧々は話を続けた。

「白奈ちゃんはジョーカーアンデッド。アンデッドはこの世界のシステムの一部……と言うより世界の代表者と言ってもいいわ」

人間は言ってしまうほどの世界にも居る。もちろんあり方などに多少の違いはあれど、人間と言う括りで統一してしまえばどの世界の人間も大きな差は無い。だが怪人は別だ、特にアンデッドなどその世界特有の怪人ともなればそれはその世界をある意味において表すモノだろう。

「その白奈ちゃんが最初は見ただけで刃君に襲いかかったのに今は怖がるだけ……青羽ちゃん、これがどういうことか分かる？」

話を振られて青羽は一瞬狼狽するが、すぐに落ち付いて頭の中で状況を整理した。

アンデッドがこの世界のシステムの一部で、白奈もその一員。故に最初彼女は刃に対して攻撃を仕掛けた。だが今は攻撃を仕掛けない。世界のシステムである白奈が今は攻撃しないと言う事はつまり・・・

「世界が・・・刃さんを受け入れてる？」

「はい、よく出来ました」

青羽が出した答えに、寧々は満足そうな笑顔で頷いた。

「そう言う訳だから、もう安心していいわ。その前のダークローチも白奈ちゃんと同じ理由で襲いかかっただけだから、多分もう向こうから積極的に襲ってくる事は無いと思うわよ」

そう言ってまた紅茶を一口啜る寧々。どうでもいい事だが今彼女が口に入れた紅茶は飽和するほど砂糖が入った代物、つまりとんでもないほどの甘さを持っている。しかしそれを口に入れても、彼女は顔色一つ変える事は無かった。

「そうそう、他に何か質問はあるかしら？」

「・・・・・・・・それじゃあ、この世界について大まかな事を教えてくれ」

「いいわよ。それじゃあ青羽ちゃん、お願いね」

刃からの申し出であるこの世界の説明を、寧々は華麗に青羽にスルーパスした。当の青羽はというと、流れるに寧々が全部説明するモノと思っていたから突然の事に一瞬反応が遅れてしまい、寧々の言葉が頭の中に入った瞬間飲んでいる途中だった紅茶が気管に入り込んで盛大に咽てしまう。

「うゝえほッ！？ ゲホッ、エホッ・・・・はいっ？！ あたしで

すか!?!?」

何とか正常な呼吸を取り戻した青羽が目を見開いて寧々の方を向くと、彼女は両手を合わせて可愛らしく首を傾げて見せた。

「うふふ、お願い。お姉さん流石にもう話し疲れちゃったわ」

「いや、でも……うう、分かりました」

寧々の言葉に一瞬断ろうかとも思ったが、彼女から発せられる何とも言えぬオーラに渋々ながら頷いた。彼女の掴み所の無い性格を考えると、この後自分が何を言っても全て言いくるめられて結局自分が説明をさせられる羽目になる。何となくだが青羽にはそれが分かっていた。

或いは、彼女の悪意を感じさせないその雰囲気が自分から拒否という選択肢を奪ってしまったのだろうか？ そんな事を考えつつ、青羽は刃達にこの世界について説明していった……

数分後

「……………と言う訳なんだけど、分かってくれたかしら？」

「ああ、大体の事はな」

「うふふふ……青羽ちゃん、よくできました」

「子供扱いはやめてくださいよ」

あれから青羽が数分かけて説明したのは、この世界に置いて基本的な事。特に上限もなく存在するアンデッド達、そのアンデッドを封印する為の仮面ライダーを支援する組織・協会の事など、とにかくこの世界における常識を片っ端から話していた。

その甲斐あって、刃達にもこの世界がどう言ったモノなのかを理解してもらえたらしい。

「しかし、誰でも簡単に仮面ライダーになれる世界か」

「ん？　どうかした？」

話を聞き終わると、刃達は差はあれど皆一様に顔を顰めてしまう。青羽がそれに首を傾げていると、飛翔が口を開いた。

「何か、仮面ライダーってそんな言葉が随分と軽くなったような気がして・・・」

「少なくとも、今まで私達が見て来た仮面ライダーは皆己の信念を持っていた。だがこの世界では、仮面ライダーがファッションのブランドみたいに見えてしまう」

飛翔の言葉をレヴァが補足する。実際今まで彼らが出会って来た仮面ライダーは力を持つ事に何かしらの信念や自分自身に対する恐れを持って来たのだ。それに比べると、この世界の『仮面ライダー』と言う言葉はレヴァの言う通りブランド物のファッションか何かに見えてしまう部分が少なからずあった。

だがそれを言われて黙っていない者がいる。

「俺達が遊びで仮面ライダーになってるって言うんスカ!？」

そう言ったのは弘貴だ。彼はレヴァの言葉を聞いた瞬間、一気に顔を怒りの表情にしてその場に立ち上がる。

「取り消してください今の言葉!　俺達は一度でも遊び感覚で仮面

ライダーになったつもりなんてないんすよ!!?」

「ま、待て落ち着け!?! 誰もお前達がふざけて仮面ライダーにな
ってるだなんて・・・」

「言ってるも同然スよそんなの!?! ファッションだとかブランド
だなんて、俺にだってちゃんと夢や目標があつて「弘貴ッ!!」、
ッ!?! あ、姐さん?」

怒りに任せて刃達に捲し立てる弘貴。慌ててレヴァが宥めようとす
るが彼女の言葉が耳に入らないほど興奮しているのか彼はさらに彼
女に詰め寄っていった。弘貴の様子に刃達もレヴァのフォローをし
ようとした時、唐突に青羽が声を張り上げる。その声に弘貴は漸く
止まった。

「まあ落ち付きなさい。その人たちの言いたい事、あたしだって分
からない訳じゃないわ」

「ちよっ!?! 姐さんまでそんな事!!?」

青羽の刃達を擁護する様な物言いに再び激昂仕掛ける弘貴だったが、
青羽は片手を挙げてそれを制した。

「落ち着きなさいって、前に言ったでしょ? あたしにも夢がある
って。だからあんたがこういう気持ちで仮面ライダーになったのか
も分かるつもりよ」

弘貴を何とか宥めると、青羽はそこで一旦言葉を区切る。

「でもね? この人達が言うみたいに、この世界には仮面ライダー
って言葉を軽く捉えてる人がいるのもまた事実なのよ。そうでしょ、
ノーマ?」

「ま、そうですね。ライダーの实力がピンからキリまであると言う

のもそうですが、ライダーによる犯罪が僅かながら起こっているのもそれを証明する物になるでしょう」

仮面ライダーと言ってしまえば一つの力である。力は簡単に人を酔わせ、暴走させてしまう事が少なからずあると言えるだろう。それは揺るがしようなない事実だ。特に誰でも仮面ライダーになれてしまうと言う特徴のあるこの世界では。

「でもこの世界の仮面ライダー全部がそう言う訳じゃないわ。あたしにも弘貴にも、叶えたい夢があるのよ。ノーマや戒にも目的があるし、ちゃんと意味を持って仮面ライダーになってる人だってたくさんいるわ」

青羽はそう言って自分の胸に手を当て、己の夢の起源を振り返った。辛く、悲しかった『あの時』の事を・・・

「それはお前達を見てれば何となくだが分かる。俺だって、別にお前達が遊びで仮面ライダーになってると思ってたわけじゃない。ただ、いろいろな世界を旅している身としてはやはり・・・な」

そんな青羽の様子を見て、刃が彼女に向かってそう言った。先程の様子を見る限り、青羽達もそれなりに覚悟をしているのだろうと言う事は彼にも分かる。だがそれでも、仮面ライダーと言う存在が少なくなるにしてもそれなりの条件があった今までの世界と比べてしまふと、やはりどこか軽さを覚えずにはいられないのだ。

そこは青羽にも何とはなしに分かるのか、そうね、と言って刃の言葉に理解を示した。すると彼女は徐に懷から自身のスピードのAを取り出す。

「それじゃあさ、試してみる？ あたし達が軽い気持ちで仮面ライダーをやってるんじゃないって事」

そう言って青羽は挑戦的な笑みを彼らに向けるのだった。

第56話 お茶会と原因（後書き）

と言う訳で第56話でした。

白奈が暴走したのは、この世界そのものが強大な力を持つ刃を拒絶した事によるものでした。アンデッドはこの世界と密接に関わっているのです、特別なジョーカーはその影響を受けやすいんです……少なくともこの世界では。

でもいつまでも拒絶していると言う訳ではなく、時間が経てば馴染む程度のものであればありますけど。だから暴走が収まってからの白奈は怖がりながらも刃に襲いかかる事がなかったんです。

次回は遂に青羽達と刃達が真っ向勝負です。どんな勝負になるかお楽しみに。

それでは。

第57話 ライダーズバトル（前書き）

どうも、黒服です。

今回ついに青羽達と刃達が正面からぶつかり合います。

第57話 ライダーズバトル

青羽からの挑戦を、刃達は受ける事にした。

別に断っても良かったのだが、この世界には特に目的があった訳ではないし、何よりこの世界のライダーをよく知る意味でもここでの戦いには意味があると考えたのだ。俗に『拳は己の魂を表現する』と言われるが、人間誰しも必死になる追い詰められた時こそ本質が現れる。

ならばこの場で戦い、彼女達の本質を見極めてみようとな刃は考えたのだった。

「それじゃ、青羽ちゃん達は誰が戦うの？」

「まず、言い出しっぺのあたしに「俺がやるッス!!」・・・だそうです。で？ 二人はどうするの？」

刃達は仮面ライダーに変身できるのが実質刃・レヴァ・飛翔の3人しかいないので、この3人が戦う事が即座に決まる。こうなると戦う気の無い白奈を除いても青羽達は4人なので、戦いを公平にする為にも1人余ってしまう。

勿論青羽は確実に戦う事になる。言いだしたのは彼女だ、それは当り前だろう。そして次に名乗りを挙げたのは弘貴だった。どうやら自身の中の仮面ライダーを馬鹿にされたと思って少々意固地になっているらしい。

これで残るはノーマと戒の二人のみ。青羽が二人にどちらが戦うかを訊ねると、戒は両手を肩まで上げて首を横に振った。

「僕は遠慮しておくよ、戦いはそんなに興味ないし」

「では私が行かせてもらいます」

戒が戦いに出るのを拒むと、代わりにノーマが名乗り出た。サングラスで隠れているのでよく分からないが、雰囲気は完全にやる気満々だ。

「それじゃ、これで決まりね。早速始める？ それとも何か準備する？」

「あたし達はこのままで。いいでしょ、二人とも？」

「ええ」

「勿論ッス！」

青羽達の様子に寧々が満足そうに頷くと、次に刃達の方に目を向けた。彼女の言いたい事を察したのか、刃は即座に頷いてこちらも準備完了の意思を示す。

「それじゃ、皆準備も出来た様だし……始めましょうか。あつ、そうそう刃君はそのままさっきのライダーで戦ってくれない？」

早速戦いを始めようかといった矢先、唐突に寧々が刃に向かってそんな事を口にした。刃は一瞬何の事だか分からないでいたが、彼女の言葉の意味を理解すると驚愕に目を見開く。

「あんた……なんで俺がレイブ以外のライダーに変身できる事を知ってるんだ？ この世界に来てから俺はレイブ以外には変身していない筈だが……」

刃は警戒心の籠った目で寧々を見つめるが、対する彼女は彼の警戒

心など何処吹く風と言った具合に笑顔を乱さない。

「うふふ、それは内緒！ それよりお願いしてもいいかしら？ もう一つの方だと強すぎちゃうから、ちょっと一方的になっちゃうわ」寧々はそう言って問題を有耶無耶にしまおうが、刃の中で寧々は『少々変わった女性』から『油断ならない女性』に印象が変わってしまった。

確かに刃はレイブ以外にもう一つ、飛翔が変身するディケイドのプロトタイプである【仮面ライダーディガイド】に変身できる。見た目こそディケイドに似通った部分も多いが、その強過ぎる能力から変身できる者がほとんどいないと言う使用になっていた。

刃としてもディガイドの戦闘力が強過ぎる事は百も承知だったのでこの場で使うつもりはなかったが、まさかその存在を寧々に知られるとは思ってもみなかったのだ。

「お願い、あなたならさっきの奴でも十分強いでしょう？」

そう言って手を合わせる寧々の様子には邪気が全く見られない。恐らく妙な企みなどは無いだろうし元よりレイブで戦うつもりだったのでそのところは構わなかったのだが、刃は何処か釈然としない物を感じていた。

「ルールは特に制限なし、どちらかのチームが全員戦闘不能になるか降参したら終了でいいか？」

「いいわ、それで十分よ。それじゃ・・・」

お互いルール確認すると、両者ともほぼ同時に変身アイテムを構え

る。青羽達や刃と飛翔は腰にバックルやラウザーを装着し、レヴァはディザンドライバーを構えた。

「「「変身!」」」

《《Turn up》》

《Change》

青羽達がそれぞれブレイド・カリス・アクスに変身するのとはほぼ同時に、刃達も変身する。

「「「変身!」」」

《Change》

《KAMENRIDE DECADE》

《KAMENRIDE DEZANDE》

刃達がレイブ・ディザンド・ディケイドに変身すると、どちらも相手の出方を伺うかのように己の武器を構えて微動だにしない。数瞬間だが重苦しい雰囲気が一瞬を包みこむ。

そんな時、彼らの様子を見ていた寧々が不意に懷から1枚の硬貨を取り出した。彼女はそれを握った手の親指に乗せると、勢いよく弾き飛ばす。周囲に小さくも澄んだ金属音が鳴り響き、飛んだ硬貨が勢いを失って落ちていくとその先には寧々が手に持ったティーカップがあった。硬貨がカップに入り再び金属音が鳴った瞬間――

両者は同時に駆けだしていった。

ブレイドはレイブに、カリスはディザンド、アクスはディケイドとそれぞれ戦い始める。

「フッ、ヤアッ！」
「ハッ、セイッ！」

ブレイドとレイブはお互い武器で斬り合いを始め、そこから少し離れたところではカリスがディザンドに接近戦を挑んでいた。

「ハアッ！」
「くっ、イヤアッ！」

ディザンドは最初カリスの軽快な身のこなしに翻弄されかけたが、それでも互角に渡り合っている。

そして・・・

「うおおおおおっ！」
「フンッ！」

アクスとディケイドはお互いの武器を打ち合わせていたが、パワー面でアクスに分があるからディケイドは一撃でソードモードのライドブッカードを弾かれてしまう。

「くそ、パワー型のライダーか」
「力強さなら誰にも負けないツスよ！」

その後も何度は二人はお互いの武器をぶつけ合ったが、どう考えてもパワー勝負ではディケイドに分が悪い。案の定数合打ち合った末にディケイドはライドブッカードを手放してしまった。

「しまっ!？」
「おりやああああっ!!」

「ぐっ?!」

武器を手放した際大きな隙が生まれてしまい、そこにアックスの渾身の力を込めた手斧型ラウザーによる一撃が決まる。流石パワーに自信を持つだけはあってか、一撃喰らっただけでディケイドは後ろに押し出されてしまった。

「くっそ、んにゃろっ!!」

「ヌンッ!」

ディケイドは攻撃のダメージから何とか立て直すと、そのまま無手でアックスに殴りかかった。このままでは武器を拾う事も出来ないの、一先ず相手の動きが鈍ってくれさえすればいいと考えたのである。ところが・・・

「い、痛ってゝゝ・・・ッ!？」

殴った瞬間手に凄まじい痛みが走り、彼は自分がダメージを受けてしまった。そんな彼の様子にアックスは余裕綽々と言った雰囲気付近付いていき、近くまで来たアックスにディケイドは反射的に再び相手の胸部装甲を殴ってしまう。その手には再び痛みが走り、思わず彼も怯んでしまった。

「か、硬・・・?!」

「へっへっへっ・・・硬さにも自信ありッス。ぬりゃあっ!!」
「ぐあっ?!」

怯んでいる隙にアックスからの攻撃を受けてしまうディケイド、その後も無防備な状態で何度も斬撃を喰らって最終的に後方に弾き飛ばされた。

「ぐう、硬さとパワー……典型的な力押しのパワー型か」

アクスの攻撃にダメージを受けながらも、ディケイドは何とか相手の特性を分析する。アクスの持ち味は途轍もないパワーと並大抵の攻撃を受け付けない防御力、それは彼の言う通り典型的なパワー型のライダーの特徴だった。

「どうしたんスカ、もうお終いッスカ？」

「まさか、まだまだこれからさ……変身」

《KAMENRIDE DEN-O》

ディケイドは体勢を立て直すと、ライドブッカーからある仮面ライダーの絵が描かれた1枚のカードを取り出す。それを展開したディケイドライバーに装填して回転させると、電子音声と共に奇妙な音楽が鳴り響く。それと同時にディケイドの姿が変化していき、赤い装甲と仮面を持った戦士・【仮面ライダー電王】に変身してしまった。

「んなっ!？　なんか全然違うのに変わった!!?」

「行くぞ!　はあああぁっ!!」

アクスは初めて見るディケイドの能力に驚愕し、その隙にD電王はソードモードのデンガッシャーでアクスに斬りかかっていった。

一方、カリスとディザンドの戦いは一進一退の攻防になっていた。

「貴女、なかなかやりますね」

「お前こそ……」

ディザンドは元々接近戦を得意とし、さらに身軽さを生かした戦いを行ってきた。対するカリスはどちらかと言えばオールマイティー、接近戦も遠距離戦もどちらも行えるが近くに寄られると接近戦を得意としたディザンドのペースに巻き込まれる事がある。

それでもディザンドと同様身軽さを生かした戦いと、遠近を織り交ぜた戦いを展開する事でカリスはディザンドと一進一退の攻防戦を続けていたのだ。

「だが、私は負けたりしない！」

「それはこちらと同じです」

お互いしばし睨みあった後、両者は再び近付いて接近戦を展開した。

カリスのカリスアローによる斬撃とその合間に繰り出されるパンチやキックがディザンドに襲いかかり、ディザンドはその悉くを受け流し躲していく。どちらも手加減なしで相手の急所を突こうと一撃必殺を狙い、それ故に一瞬の隙が命取りとなる。

その時、カリスの放った回し蹴りがディザンドの頭部を捉えた。

「グッ?!」

「もらった!」

《Chop》

カリスの蹴りにディザンドが怯んだ隙を突いて、彼女はアローに取り付けたラウザーにハートの3『チョップ・ヘッド』をラウズして強化された手刀を放つ。

「させるか!？」

「がっ?!」

だがカリスが手刀を放とうと右腕を引き絞った瞬間、ディザンドの放った突きがカリスを捉えて大きく後ろに突き飛ばしてしまった。カリスはそのまま地面に後ろ向きに倒れてしまい、体勢を立て直すのに数秒かかってしまう。そこを見逃すディザンドではなかった。

《ATTACK RIDE SLASH》

「行けえっ!」

「ッ!? くっ!」

《Tornado》

ディザンドが発動した『ディザンド・スラッシュ』を刀身から飛ばしたのを見て、カリスもラウザーにハートの6『トルネード・ホーク』をラウズして風の矢を放った。技の出はディザンドの方が早かったが、攻撃の速度はカリスの方が早い。結果両者の攻撃はお互いの中間地点でぶつかり合い、激しい爆発を起こすのだった。

そして、残るブレイドとレイブの戦いはと言うと・・・

「ハッ!」

「甘い!!」

ブレイドがレイブに向かって斬りかかるが、それをレイブは軽く受け流してしまう。そして受け流された際に出来た隙を突かれて、ブレイドはレイブの攻撃を受けてしまった。

「うわっ!?　くうう、強い・・・」

ブレイドはレイブの強さに、仮面の奥で一筋の汗を流していた。先程から二人の戦いは終始レイブがブレイドを圧倒する形で進んでいき、ブレイドは一太刀もレイブに浴びせる事が出来ないうでいた。

「凄い、流石ね。この世界の外って、刃みたいな奴が一杯いるの？」
「そうだな・・・この世界のレベルがどれ程かは分からないが、少なくとも強い奴は山ほどいるぞ」

「そっか・・・」

レイブの言葉に、ブレイドは仮面の奥で口元に浮かぶ笑みを抑えきれずにいた。

一体他にはどんな仮面ライダーがいるのだろうか？　どんな人物で、どれほどの強さを持っているのか？　以前この世界にやって来た総司やあずさも、他の奥の仮面ライダー達と戦って来たのだろうか？

そんな風にしばし思いを馳せた後、ブレイドは再びレイブに向かって斬りかかっていく。

「ハアアアアッ！」

「フッ！」

ブレイドの放った斬撃を、レイブは再び受け流そうとする。だがその瞬間、ブレイドは攻撃を受け流そうとするレイブの動きに乗って彼の背後に回り込みそのまま彼に斬り付けた。

「なっ?!　くっ!?!」

彼女の動きからそれを悟ったレイブによってあえなく攻撃は失敗し

てしまったが、レイブは今のブレイドの動きに舌を巻いていた。明らかについ先程とは動きが異なる。

（感情の昂ぶりがライダーシステムに影響を与えているのか？ それとも彼女の心に火が付いたのか……何にしても油断は禁物だな）

レイブは心の中でブレイドの動きの変化を分析すると、気を引き締めてラウザーを構え直す。

「すまない、お前の事を少し甘く見ていたようだ。ここからは、今までの比じゃないレベルで行くぞ」

「上等よ！ 寧ろ本気で来てもらわなきゃ意味がないわ！！」

ブレイドはそう言って再びレイブに向かって斬りかかっていた。

その様子を、寧々達は座りながらゆっくり観戦していた。戒はブレイド達の戦いよりもどちらかと言えばレイブ達異世界のライダーの戦いの方に注目している。レイブはともかくディケイド・ディザンドと自分達とは異なるシステムで作られたライダーに戦いに興味があるのだろう。

対して白奈は不安げな様子でブレイドの戦いを見守っていた。もう刃に対して恐怖心が湧かなくなったのかその目には恐れが見られなかったが、代わりに青羽が心配と言った様子だ。

一方でサヤは特に不安そうな顔も心配そうな顔もしていない。ディケイドはアクスに圧され気味だったが、今は電王に変身して対抗している。ディザンドもカリスといい勝負をしているし、レイブに至

っではブレイドを圧倒している。一瞬ブレイドが持ち直したかとしヒヤリとしたが、やはり地力ではレイブの方に分があった。

ここでレイブがブレイドに勝てば、後はもう勝ったも同然。手の空いたレイブが他の二人と協力して各個撃破となる。

「それはどうかしら？」

「ッ！！？？」

サヤが内心でそんな事を考えていると、不意に寧々が彼女の心を見透かしたかのような言葉を口にする。その言葉にサヤが驚きつつ寧々の顔を見ると、彼女は相変わらず何処か楽しげな様子でニコニコと笑っていた。

（もしかして……心を見透かされた？）

「そうね、大体そんな感じよ」

つい今しがたの寧々の言動にサヤが予想を付けていると、またも寧々がサヤの心の声に相槌を打って来た。怪しいを通り越して異常とも言える彼女の反応に、サヤの表情も厳しくなる。

「超能力者か何かですか？」

「ま、そんな所ね。でも今日教えられるのはここまで、これ以上はまた今度よ」

一期一会とも言える今回の出会いに、また今度があるのだろうか？二人の会話を横からそれとはなしに聞いていた戒は疑問に思う。

「あなたは一体何者です？　ただの人間とも思えませんか？」

他人の心を見透かすどころか刃の正体やディガイドの事まで見抜いて見せた寧々に、サヤはやはり警戒心を隠せない。そもそもサヤがそんな寧々に警戒心を露わにするのは至極当然とも言えた。

「そこは御想像に任せるわ。ねっ？」

「えっ？」

サヤの言葉に微笑みながら白奈に声をかける寧々。彼女が唐突に話を振った為、今まで戦いに注目していた白奈は一瞬訳が分からないと言いたげにキョトンとしてしまう。

「…………お久しぶり」

そんな白奈の様子をしばし見つめた後、寧々はそれまでの楽しげな笑顔とは一転慈愛を感じさせる優しい笑みでそんな事を口にする。最初白奈は寧々の様子に首を傾げていたが、何かに気付いたのか次の瞬間驚愕に目を見開いた。

「あなたは、まさか…………あつ、ごめんなさい!？」

「? 白奈、君昔寧々さんにあった事があるのかい？」

どうも寧々と白奈は面識があるらしい。戒が疑問に思っただけに白奈に訊ねるが、彼の言葉は届いていないのか白奈は一心不乱に寧々に頭を下げる。

「本当にごめんなさい。私の所為で、あなたは…………」

「別にいいわ、気にしてないし。“これ”も案外悪くないもの」

そう言って寧々はそっと自分の胸に手を当てる。何処か哀愁を帯びているようにも見えなくはないその様子に、戒はふと新たな疑問を

抱いた。

「そう言えば、さっき隠密調査部の連中が寧々さんの事を『魔女』とか言っていましたけど……」

「……………」

それは一体どういう意味なのか……。戒はそう訊ねようとしたが出来なかった。何故なら、戒が『魔女』と言う言葉を口にした直後、寧々が表情をそのままに目から一切の感情が消えてしまったからだ。そして再び感じるあの威圧感。

流石に戦っているブレイド達の邪魔をする程のモノではなかったが、それでも彼女から発せられるプレッシャーは戒どころかその場の全員から言葉を奪うには十分すぎた。

それと同時に戒は理解する、『魔女』と言う言葉は寧々にとって禁句である。

「す、すみません……」

戒は恐怖で動きの鈍った口で何とかその言葉だけは言う事が出来た。それと同時に寧々がハッとした表情になってプレッシャーを引っ込める。

「ごめんね、別にそう言われるが嫌いって訳じゃないのよ？　ただちょっと……ね」

そう言った寧々の顔にはもう先程と同じ笑みが張り付いていた。

「さ、それよりも今はあっちを見ましよう。少し動いてきたみたい

よ
」

そう言って寧々が指差す先では、彼女の言葉通り戦いの流れに変化が起こっていた。

第57話 ライダーズバトル（後書き）

と言う訳で第57話でした。

変身からブレイド達が戦うまでのシーンではオールライダー対大シヨッカーのBGM『最終バトル』を推奨します（笑）。初めてあのBGMを聞いた時は痺れたモノです、あれはいい曲だった・・・

次回はこの戦いに決着が、そして同時にコラボも次回が最終回となります。どのように決着するのかお楽しみに。

それでは。

第58話 別れ・青羽を成長させるもの（前書き）

どうも、黒服です。

今回で斬空さんとのコラボも最終回、青羽達と刃達との戦いにも決着が付きます。

第58話 別れ・青羽を成長させるもの

D電王とアックスの戦いは、多彩なフォームチェンジを駆使するD電王の方に傾いていた。

「お次はコイツだ！」

《FORM RIDE DEN-O GUN》

D電王GFは、フォームチェンジするなりガンモードにしたデンガツシャーの引き金を引きアックスにダメージを与えていく。

「イテッ!? イタタタッ?! ああもう俺飛び道具は苦手なのに!?!」

D電王GFの銃撃に苦戦しつつも、アックスは根性で耐えきると相手に近付きアックスラウザーを振り下ろす。だがその攻撃はD電王GFの軽快なステップにより悉くが躲かれてしまった。

「うお、とっ!? あぶねっ!!」

「くうう、ちよろちよろと!?!」

攻撃を回避し続けるD電王GFに業を煮やしたのか、アックスの攻撃が次第に乱雑になっていく。それがアックスに大きな隙を産む結果となり、彼はD電王GFの至近距離からの銃撃をモロに浴びてしまった。

「うわああああっ!? ぐう・・・ま、負けるもんか!?!」

D電王GFの攻撃はアックスにダメージを与えたが、それでもやはり

装甲が自慢のアクスは耐えきり再度D電王に立ち向かっていった。

「くそ、パワー型のライダーは粘り強いな。ならこっちも！」

《FORM RIDE DEN-O AXE》

「げっ!?! また変わった!?!?」

このまま普通に攻めても決め手がないと悟ったのか、D電王は今度はアクスと同じパワータイプのフォームであるアックスフォームにフォームチェンジした。またも姿を変えたデイケイドに一瞬驚愕の声を挙げるアクス。

その隙を突いてアックスモードのデンガッシャーで斬りかかるD電王^{スラフォーム}だが、今度はアクスに正面から受け止められてしまう。だが素のデイケイドの時に行った打ち合いとは異なり今度は両者の力が拮抗した状態で止まっていた。

「ぐ、ぎぎぎ・・・っ!?!」

「ぐうう!?!・・・くっ!」

「どうわっ?!」

しばしお互い持てるパワーを全力にして相手を押し退けようとしていたが、不意にD電王AFの方が力を抜いてアクスは勢い余って前のめりに倒れ込んでしまった。アクスは急いで体勢を立て直すのが、D電王AFの方を向いた瞬間渾身の力を込めたD電王AFの攻撃を受けてしまう。流石に相手もパワー型なだけあってダメージは先程まで以上の物で、アクスの胸部装甲に大きな傷が付いていた。

D電王AFの攻撃はそれだけに留まらず、攻撃にアクスが怯んでいる隙に1枚のカードをドライバーに装填した。

《ATTACK RIDE TUPPARI》

「うおおおおおっ!!」

「ぐっ、が・・・があっ?！」

D電王AFが放つ連続張り手をまともに喰らい、アクスは体力をどんどん削られていく。そして相手の攻撃が終わった瞬間、彼はその場に膝をついてしまった。

「ぐうう・・・う、うう」

「はあ、はあ・・・この勝負、俺の勝ちだな」

アクスは満身創痍で、もはや立つ事もままならない。この勝負はデイクイドの方に軍配が上がる・・・かと思いきや、アクスはボロボロの状態でふら付きながらも立ち上がり始めた。

「ま、まだまだ・・・まだ終わっちゃいないッスよ」

「いいのか? もう立つのがやっとなって感じだけど」

無理して立ち上がるアクスに、D電王AFは言外に負けを認めると言った。これは別に相手を馬鹿にしていた訳ではなく、純粋に勝負が見えたから言っただけである。

だがその言葉を受けても、アクスは一向に引き下がる気配を見せなかった。

「これ位のダメージ、ライダーを始めてからは何時もの事ッス。こんなので音を上げてたら、元よりライダーなんて続けてないッスよ」

実のところ、この世界で仮面ライダーになった者の内1年以上仮面ライダーを続けていられるのは割合としては二人に一人である。続

けられない者の内半分は戦いの中で恐怖に憑りつかれたり重傷を負うなどし、残り半分はアンデッドとの戦いで命を落としていた。

刃達はこの世界の仮面ライダーをファクションの様だと評価していたが、仮面ライダーであることには変わりはなく命の危険は絶えず付き纏っていた。一部はともかくこの世界で仮面ライダーになった者達はその所をちゃんと理解している。弘貴もその一人だったのだ。

「一つ聞きたいんだけど、何でそんなに頑張れるんだ？ そんな簡単にライダーになって・・・」

「俺は、仮面ライダーになって、ヒーローになるんス」
「ヒーロー？」

アクスの言葉に、D電王AFは仮面の奥で怪訝な顔になる。

「そうッス。このアクスは、俺が仮面ライダーになるって時に、夢を叶えられるようになって、父ちゃんが無理して特注してくれたんス。だから俺にとって、仮面ライダーは誇りなんス」

誇り・・・そう言ったアクスはふら付きながらも何とか立ち続けていた。その様子にD電王AFはそれまでこの世界のライダー達に抱いていた軽さが吹き飛んだような気になった。

「・・・次で決めよう、大技のぶつかり合いだ」
「へへっ、望むところッス」

《FINAL ATTACKRIDE》
《Slash Light》

D電王AFはまるで敬意を払うかのようにアクスに必殺技勝負を挑

み、アクスはそれを受け入れ今出せる最大限の威力の技を放つ。

《DE・DE・DE・DEN—O》

《Lightning Slash》

「ハアアアッ!!」

「どっせえええい!!」

D電王AFが放った『ダイナミックチョップ』とアクスの放った『ライトニング・スラッシュ』がぶつかり合い、大きな爆発が起こった。しばらく経った後、爆発の煙がその場から何処かへ流れていくと・・・

「はっ、はっ、はっ・・・」

「ぐっ、うう・・・」

両肩で息をしながらも何とかその場に立ち続けるディケイドの姿と、その足元で地面に倒れ伏したアクスの姿があった。次の瞬間には、アクスの変身が解けて弘貴の姿に戻ってしまう。

そんな彼をディケイドはしばし見つめた後、自身も変身を解除して弘貴に手を差し出した。

「大した奴だよ、あんたは」

「へへへ、そっちこそ・・・ちっちゃい見た目の割に結構やるじゃないッスか」

「・・・・・・・・・・もう一回倒してやろうか?」

「いででででっ?! い、今腕を極めるのは止めて欲しいッス!」

弘貴が口にしたからかいの言葉に背中側に回り込んだ飛翔が彼の腕

を捻り上げる。弘貴がその痛みに悲鳴を上げるが、二人の顔には笑みが浮かんでいた。

同時刻、カリスとディザンドの戦いも佳境に入っていた。当初は遠近を織り交ぜてディザンドに攻撃を仕掛けていたカリスであったが、ディザンドがカリスの射撃に慣れ始めると攻撃を剣で撃ち落とされ始めてしまう。挙句の果てには射撃を全弾撃ち落としつつ接近してくるディザンドの様子に、カリスは遠距離攻撃を完全に止め接近戦で片を付ける事にした。

「流石ですね。ここまで粘るとは思ってもみませんでした」
「お前もな、なかなかやるじゃないか」

時にカリスは『フロート』や『バイオ』のカードでディザンドを翻弄しようとしたが、ディザンドは他の様々なライダーの武器も駆使してそれに対抗して来た。カリスが飛び上がればディザンドは【仮面ライダークウガ】の『ペガサスボウガン』などに武器を変えてカリスを撃ち落とし、ツタを伸ばしてくれば【仮面ライダーアギト】の『ストームハルバード』に武器を変えてツタを切り払った。

このままでは埒が明かない、両者はそう考えてアクスとディケイドの戦いと同じく必殺技で勝負を決める事にする。

「言っておきますが私は負けません。この勝負、勝たせてもらいます」

「それはこっちのセリフだ。私はここで負ける訳にはいかないんだな」

お互い自身の勝利に自信を持つと、カリスは3枚、ディザンドは1

枚のカードを取り出した。

《Float Drill Tornado》
《FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE Z
AND E》
《Spinning Dance》

カリスが『スピニング・ダンス』を発動すると、風が彼女の周囲に纏わりつき宙に浮かせる。そしてそのまま回転しつつ剣を構えるディザンドに向かって渾身の錐揉みキックを放った。

「ハアアアアッ!!」

「ッ!? そこだ! ハアッ!!」

カリスの攻撃のタイミングを見てカウンターで必殺の『ディメンジヨンスラッシュ』を放つ。ディザンドの攻撃は絶好のタイミングでカリスに向かっていきこのまま決まるかと彼女が思ったその時、カリスが攻撃の軌道を僅かにずらしてディザンドの攻撃をギリギリで回避した。

「なっ?! うわあああああっ?!」

カリスの攻撃を喰らって蹴り飛ばされたディザンドは、飛ばされた先で倒れると同時に変身が解除されてしまう。

彼女の変身が解けたのを、カリスは着地しつつ見つめていた。実のところ今の攻撃の回避は咄嗟に行ったモノで、考えての行動ではなかったのだ。カウンターで返されそうになった瞬間カリスは自身の敗北を悟っていたのだが、その考えに反して体が勝手に動き結果彼女はディザンドに勝利する事が出来た。

）
（とはいえ危ない所でした。後一瞬でも動きが遅れていれば・・・

ほとんどまぐれも同然の勝利に、改めてカリスはレヴァに対して賞賛の念を抱く。その時、漸くレヴァがその場で立ち上がった。

「くそお、私の負けか」

「そうですね、ですが私も少し危なかったですよ」

「気休めは結構だ。今度は負けないから、覚悟しておけよ」

「今度があるんですか？」

レヴァの言葉にカリスがやや呆れを滲ませた声を上げる。その言葉にレヴァがムツとした顔になるが、そのすぐ後にはお互いに笑い合った。そして一頻り笑った後、カリスは変身を解除する。その様子にレヴァは怪訝な顔になった。

「ん？ 仲間の助けに行かなくてもいいのか？」

アクスとディケイドの戦いはディケイドの勝ちで終わっているが飛翔の様子からこれ以上の戦闘継続は難しそうだ。しかしブレイドとレイブの戦いはまだ終わっていない、となればレヴァに勝ったノーマはそちらの援護に行くべきなのではないかと彼女は思ったのだが、ノーマはそれに首を横に振って答えた。

「ここで私が横から手を出すのは無粋な行為です。貴女だって、1対1の決闘の最中に横槍を入れられるのは嫌でしょう？」

その言葉に思う所があるレヴァは、何も言わずにノーマの言葉に頷いた。そしてノーマは、未だ戦い続けるブレイドとレイブの方に目

を向けるのだった。

「ハアアアッ！」

「フンッ！」

ブレイドの放った斬撃をレイブは受け止め、お返しとばかりに流れる様な剣戟を放った。それは狙い違わずブレイドの装甲に喰らい付き、ブレイドは火花を上げながらその場から斬り飛ばされる。

「うあっ、ぐうあ・・・」

呻き声を上げながら立ち上がるブレイドの装甲には至る所に切り傷が付き、対するレイブには傷がほとんどなかった。まさに両者の力量の差を見せつけているかのようなその光景に、軽く敗北の予感すらブレイドは感じていた。

（はは、ホント強いやこの人・・・あたし勝てないかも・・・）

心の中でそう考え、諦めにも似た感情が顔を出し始めたその時・・・それは全く逆の感情が彼女の心に湧きあがった。それは単純明快な感情、だが単純故にすぐに頭に沁み込んで、彼女の心を奮い立たせる。

ブレイドの、青羽の心に湧きあがった感情・・・・・・・・それは、『負けたくない』と言う不屈の心。

「違うわ、まだよ。まだあたしは負けてない・・・・・・・・だったら、ここで諦めるのはまだ早過ぎるじゃないの」

ブレイドはそう持ち直して再びラウザーを構える。その様子をレイブはジッと見つめていた。

（今一度諦めかけていたが・・・そう簡単に折れる心ではないらしいな。さて、何処まで喰らいついてくるのか・・・）

レイブがブレイドの様子を分析していた時、彼が瞬きした一瞬でブレイドが目の前に迫って来た。

「ッ!？」

「ハアッ！」

「くっ?!」

何とかブレイドの斬撃を受け止めるレイブだったが、次の瞬間にはまるですり抜けたかのようにブレイドはレイブの側面に立ちラウザーを振り降ろそうとしている。その攻撃にも何とか対応するが、3度目のブレイドの攻撃が放たれた時、捌ききれずレイブは浅いながらも一太刀受けてしまった。

「くっ!？」

「はぁ、はぁ・・・ふふふ、漸く、一撃浴びせれたわね」

仮面の奥で不敵に笑う青羽。その様子を少し離れた所から寧々は満足そうに眺めていた。

（いい感じに青羽ちゃんの心に火が付いたみたい。この調子なら2段階、ううん3段階位成長するかしら？）

桐沢 青羽を成長させるものは何かと問われた時、それを答えるの

は意外と難しい。

人によっては日々の鍛錬と答えるかもしれないが、鍛錬によって彼女が得る成長度合いはほんの微々たるものだ。ならば実戦が彼女を成長させるかと言われるればそれも正確には違う。

では一体何が彼女を成長させるのか？ 仮に寧々がそう問われた時、彼女はこう答えるつもりだった。

心の爆発・・・・・・・・と。

青羽は非常にユニークな成長の仕方をする。彼女は普段の鍛錬や実戦ではほとんど成長をしない。精々動きが少し良くなる程度だ。

だがある条件を満たした時、彼女は驚くほど大きく成長する。その条件こそが感情を爆発させた時なのだ。それは強敵との戦いで敗北が見えて来た時だったり、或いは友からの一言であったり様々であるが・・・

「はああああああっ！」

「はっ、せいっ、はあっ！」

今ブレイドは先程までと異なりレイブと非常にいい勝負を繰り広げていた。通常ブレイドの様なライダーは精神面の動きによってその強さが上限するのが常であるが、ブレイドはこうしている間にも着実に動きが良くなってきている。その動きこそが彼女が今正に成長していることの証でもあった。

（くっ、なんて奴だ。一気にここまで強くなるとは・・・・・戦闘中に突然強くなるのはよくある事だが、こいつは・・・・）

突然動きが格段に良くなったブレイドに、流石のレイブも内心で焦りを見せる。何しろ動きの変化具合が尋常ではないのだ。1段階どころか2段階も3段階も動きが変化している。

これこそがブレイド・・・青羽の成長の特徴でもあり、成長する時は一気に数段階成長するのだ。

（やっぱりこの場で彼と戦ったのは青羽ちゃんにとって大きなプラスになったみたいね）

寧々は戦いの様子を見てそう感想を抱く。正直な話ここで青羽が成長するかどうかは賭けでもあったのだ。

前述した通り青羽は成長し始めると一気に数段階レベルアップするのだが、それは心が爆発した時に限られる。逆に言えば心を爆発させる事ができなかったり、爆発させる前に倒されてしまっただけでは成長する事が出来ない。

これはRPGのゲームのシステムに例えて言えば分かりやすいだろうか。普通に戦闘を繰り返したただけでは経験値が溜まるだけで成長しないが、強敵との戦いでピンチになったり特定のタイミングで仲間から援護してもらった時限定でそれまで溜まった経験値全てを使って成長すると・・・

これが青羽の成長であり、成長する時は決まってブレイド自身の戦闘力も格段に跳ね上がる為相手からすれば堪ったものではないだろう。何しろ戦っている最中に相手が尋常ではない強さになり、その強さも時間が経つにつれて上がっていくのだ。

「ねえ刃！ 刃ってジャックフォームになれる？」

レイブと互角の勝負をしていた時、不意にブレイドがそんな事を訊ねて来た。

「なる事は出来るが・・・やる気か？」

「ここまで来たらとことんやるまでよ！！」

《Absorb Queen Fusion Jack》

ブレイドが勇ましく声を上げながらアブゾーバーにQとJのカードをラウズして金色の装甲に3対の羽を持ったジャックフォームになる。それを見て、レイブも腰のナイトラウザーに後ろ脚だけの翼が生えた龍・ワイバーンが描かれたJのカードをラウズした。

《Fusion》

レイブがそのカードをラウズすると、ワイバーンの紋章がレイブに重なり次の瞬間にはブレイドと同じく胸部を金色の装甲で覆った、1対のオリハルコンウィングを持った【仮面ライダーレイブ・ジャックフォーム】になった。

「へえ、アブゾーバー無しでジャックフォームになれるんだ？」

「まあな。それより、これからはさらに激しくいくぞ・・・付いてくれるか？」

「付いてってやろうじゃないの！ ちょっとでも手加減したら承知しないわよ！！」

ブレイドがそう言うや否や、両者はほぼ同時に翼を広げて大空へ飛び立っていく。地上にいる者達が見上げる中、青空をバックに二人は壮絶な空中戦を展開した。

「はあああああっ！」

「おおおおおっ！」

どちらも全速力で相手に近付くと、すれ違い様にお互い斬り付ける。
ジャックフォーム
Jレイブはなんなく攻撃を当てていくが、Jブレイドもしぶとく食い付いてJレイブに徐々にではあるが効果的な一撃を放ち始めた。

「はっ！」

「グッ?! せやあっ！」

Jブレイドの斬撃がJレイブの胸部装甲を捉える。だがそれはダメージが通ってもクリティカルではなかった為Jレイブは即座に体勢を立て直し、お返しとばかりにJブレイドを袈裟掛けに切り裂いた。

「うあっ!? ぐっ、うう……」

Jレイブの一撃にJブレイドは空中で少しよろめく。そんな彼女に追い打ちをかける様にラウザーに1枚のカードをラウズして刀身に備え付けられた銃口をJブレイドに向ける。

《M a c h》

彼が使用したのは《マッハ・スレイプニル》と言うカード。ブレイドが持っている物と同じような効果だが、違う点があるとすればカードの効果はJレイブ本人のみならずそのラウザーから放たれる銃弾も効果を受けられるという点であった。

「あああっ?! がっ、ぐう」

銃口を向けられた瞬間咄嗟に回避しようとしたＪブレイドだったが、予測を遥かに上回る速度で撃ち出された弾丸を為すすべなく喰らいそのまま地面に向かって力無く落下していく。彼女の様子にレイブは一瞬助けに行こうとしたが、彼が向かうよりも早くＪブレイドは再び上昇し始めた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ギリギリ意識を繋ぎとめたＪブレイドが上昇すると、Ｊレイブがジツと彼女を見つめている。Ｊブレイドに比べてほとんど傷がないその姿は今の彼女との実力差を如実に表しており、彼の強さと毅然とした様子に何よりも敬意をＪブレイドは感じていた。

それと同時に、現時点での自身の限界も・・・

（これ以上は、流石に厳しいなぁ・・・今のあたしじゃここまですが限界か）

今度こそ負けてしまう、それはもう揺るがしような無い事実と言えるだろう。だが彼女は心の中で、でもと呟いた。

「もうあと一撃、大技一発くらいなら!!」

《Kick Thunder Match》

「来い! お前の全力を俺に見せてみる!!」

《Smash Chaos Match》

ＪブレイドとＪレイブは同時に３枚のカードをラウズし、同時に必殺技を発動する。

《Lightning Sonic》

《Endless Sonic》

両者が発動した技は奇しくも同じ系統の技、己の持つ属性を足に乗せて高速で蹴りを放つ技だった。

「ハアアアアアアッ！！」

「ウオオオオオオオッ！！」

雷を纏ったJブレイドの蹴りと、炎・氷・光・闇の4つの属性を纏った蹴りが高速で相手に向かって飛んでいき、二人の技がぶつかるとにかく大きな爆発が広がっていく。

「青羽ッ！？」

それを見た瞬間、ノーマは一目散にその場から駆けだしていく。彼女が駆けだしていったその先では、気を失ったのか変身が解除された青羽が地面に向かって真っ逆様に落ちていく様子が見て取られた。このままでは地面に激突してしまう。

そう思って青羽を受け止めるべく駆けていくノーマであったが、それよりも早くに爆炎の中から飛び出てきたJレイブが落下していく青羽を受け止めた。そしてそのままゆっくりとノーマの前に降り立っていく。

「青羽ッ！」

「大丈夫、気を失っているだけだ。怪我も大したことないから、すぐに目を覚ますだろう」

Jレイブはそう言って駆け寄って来たノーマに青羽を預けた。彼女は青羽を受け取ると大事がない事を見てホッと一息つく。

「礼は言っておきます。危ない所を助けていただき、ありがとうございます」

「気にするな。それより、レヴァに勝ったらしいな。どうする？
このまま続けるか？」

ノーマの様子を見る限りまだ多少戦うだけの余力は残っていそうだが、飛翔はダメージ具合からこのまま戦い続けるのは難しそうだが、青羽のチームと刃のチームで一人ずつ残っている。つまり勝負が完全に付いていないので続けようと思えば続けることも可能だった。

そう思ってJレイブはノーマにそう訊ねたのだが、それはいつの間にか近付いていた寧々によって止められてしまう。

「残念だけど、そろそろお時間よ」
「ん？」

Jレイブが寧々の言葉に首を傾げていると、突然彼らの近くに灰色のオーロラが現れた。それはまるで刃達が入るのを待っているかのようにその場に漂い続けている。

「う、んん・・・」

その時、それまで気を失っていた青羽が目を覚ます。

「あ、青羽、大丈夫ですか？」

「んん？ うん、何とかね。負けちゃったけど・・・」

「いや、なかなか大した奴だよ。まさかここまで喰らいついてくるとは思っても見なかった」

敗北した事実には肩を落とす青羽に、Jレイブが変身を解除しながらそう言った。その言葉に青羽は若干笑みを浮かべる。

「それより、もう行っちゃうの？」

「ああ、どうやら時間切れらしい」

灰色のオーロラが存在に気付いた青羽が刃に訊ねると、彼はオーロラを見つめながらそう呟いた。その言葉に青羽は先程とは違った表情で肩を落とすが、次の瞬間自身の足で地面に立つと彼に向かって手を差し出した。

「またこの世界に来る事になったら、もう一度勝負しましょう。その時は絶対負けないんだから」

「ふっ、望む所だ」

青羽の手を握り返す刃。その近くではノーマ・弘貴とレヴァ・飛翔も同じように別れの挨拶を告げていた。

「次に会ったら私が勝たせてもらう、それだけは忘れるなよ？」

「残念ですが、次も私が勝ちこさせてもらいます」

「今度は負けないッスからね！」

「俺だって！ 今度は背が小さいなんて言わせないくらいでかくなつてやるからね！」

再戦を誓い合う彼らの姿に、戒と白奈、サヤはやれやれと言った顔をしている。

「皆なかなか熱いねえ」

「こちらとしてはあまり無茶をしてほしくは無いのですがね」

「でもみんな楽しそう」

一頻り別れの挨拶を告げた彼らを見て、最後に寧々が刃に近付いていった。

「刃君、あなたにこれをあげるわ」

そう言って寧々が差し出したのは1枚のラウズカード、スートはワイルドで絵柄は鳥の翼が生えた蛇の物だった。カテゴリは6、カードには『Thunder Quetzalcoatlus』と描かれている。

「サンダー……ケツアルコアトルス、ワイルドスートの『サンダー』か。ん？ APが……」

刃の言う通り、寧々が差し出したのはワイルドスートの『サンダー』のカードだった。ただそのAPは通常のカテゴリ6のカードはおろか、彼の持っているカテゴリ6よりも高い1800APを持っていた。

「あれ？ 寧々さんこんなカード持ってたんですか？」

「うふふ、まあね。多分この世界だけで取れる特別製よ。私は別に使わないし、お土産にあなたにあげるわ」

青羽の疑問に適当に答えて刃にカードを手渡す寧々。刃が少し視線をズラせば青羽を除いたノーマや戒などこの世界の人間である者が皆驚いた顔をしている。その様子に刃はこのカードがかなりレアなモノであると感じた。

「いいのか？ これ、随分と珍しい奴みたいだが……」

「言ったでしょ？ 私は別に使わないのよ、もう一通り揃ってるも

の」

そう言って懷から自身のカード13枚を取り出す寧々。カードの絵柄は全てユニコーンやグリフォンなど架空の生物で占められており、それを見たノーマ達は全員口をあんどりと開けた。青羽だけは見た事があるのか無反応である。

刃はそんな彼女たちを気にしない様にして寧々の表情を観察する。だがやはり何処か楽しげに笑みを浮かべているその顔からは何の考えも探る事は出来そうになかった。

「・・・分かった。このカードはありがたく頂いておく」

「大事に使ってね？」

しばし考えた後、ここは素直に相手の好意を受け取っておくかと刃は溜め息をつきながら貰ったカードを仕舞い込み、サヤ達を連れてオーロラに近付いていった。そしてオーロラの目の前にまで来た時、一度青羽達の方を振り向いて――

「青羽ッ!!」

「ん？」

「・・・・・・頑張れよ」

刃は簡潔に青羽に向かってそう言葉を紡いだ。それはパツと聞いた瞬間は何を頑張るのかよく分からなかったが、青羽にはそれだけで何かが伝わったらしい。快活な笑みを浮かべると彼女は刃に向かって手を振った。

「勿論よ！ 刃も気を付けてね、また会おう!!」

青羽の言葉に刃は軽く手を振り、サヤ達も最後にもう一度この世界のライダー達に手を振ってから今度こそオーロラをくぐってこの世界から立ち去っていった。それと同時にオーロラは消え、後には青羽達と何事もなかったかのような草原が残されている。

「なって見せるから・・・・・・強く」

刃達が消えていった場所に向かって、青羽はそう小さく呟いたのだった。

第58話 別れ・青羽を成長させるもの（後書き）

と言う訳で第58話でした。

作中でも述べていますが、青羽は非常に面倒な成長をします。タイミングが合わないと言えない成長できないと言う・・・。ただタイミングが合えばその分一気に成長するので、リスクに見合ったりターンが期待できます。

今回、刃にお土産としてこの世界特製のワイルドスートのカードをプレゼントします。この世界ではワイルドスートのカードは通常のカードより1.5倍のAPを持っています。まあ今回の場合は通常のサンダーの1.5倍の威力があると言った程度ですが（^^;）

今回にてコラボは終了です。斬空さん、ありがとうございました！

それでは。

第59話 最後を運ぶ戦士（前書き）

どうも、黒服です。

今回はユートピアさんの小説『仮面ライダーオメガ 最後を運ぶ戦士』とのコラボになります。

第59話 最後を運ぶ戦士

街道

世界の断罪者と言われる仮面ライダーディザンドこと、黒滅 刃と邂逅した次の日。

青羽達は依然として目的地であるダーティヘ向かっていた。因みにこの場に寧々はいない。刃一行がこの世界を去っていった後、彼女は青羽達とは全く別の方向に向かったのだ。

その事を青羽が指摘すると――

『こっちに行くのもなかなか乙なものなのよ』

とだけ言って立ち去ってしまった。一人街道から外れて何処かへ向かって行く寧々にそこはかとなく不安を抱いたが、不思議と大丈夫な気がしたので後を追うようなことはしなかった。

そうして刃一行、寧々と別れた次の日の昼時。適当な場所で休憩していた時、唐突にノーマが青羽に声を掛けた。

「青羽、寧々さんとは一体どういう方なんですか？ 隠密調査部の連中が無条件で退く辺り、やはり只者とは思えないのですが……」

まだ数回しか対峙していないが、彼らの任務に対する執念の様なものが強いだろう事は何となく理解できた。青羽に深手を負わされながらも目的の物を手に入れた事からも、それは間違いないだろう。

その謂わばプロフェッショナルとも言える彼らが、あんなにもあつさりと手を引くのだから、何かあると思うのはある意味当然と言えた。

そんなノーマの問いに、青羽は顎に手を当てて考え込む。

「んー．．．そうは言ってもねえ。あたしから言えるのは、寧々さんは空気を読むのが抜群に上手いって事くらいかしら？」

「空気？ 場の空気って事ッスか？」

「そうそう。話してる時なんか、こんなリアクションとって欲しいなあーなんて考えてると、本当にその通りのリアクションとってくれるのよ」

今にして思えば、あれも寧々の持つ風を読む能力に関係していたのだろう。そう考えれば辻褄が合う。

「空気を読む．．．か。でもそれだと彼らがあつさり引き下がった理由にはならないよね？」

「まあ、それはそうなんだけど。こういう説明とかは寧々さんの独壇場なん．．．アッ!？」

空気を読む事と恭司が引いたことに因果関係が無い。戒にそう指摘されると他に言うこともない青羽としては何とも言えなくなってしまう。鋭い指摘に青羽は唸り、思わずこの場に寧々が居れば．．．そんな淡い考えを浮かべてしました。っと、唐突に彼女の頭に衝撃的な考えが浮かんだ。

「そうか、ゴメン。あたし間違ってた、寧々さん空気を読むのが上手いんじゃないんだ」

「えっ、どういう事？」

突然一人全てがわかったと言いたげな様子の青羽に、他の面子は訳が分からないと言った顔になる。取り敢えず代表して白奈が青羽に訊ねると、彼女はやや興奮気味に口を開いた。

「寧々さんが上手いのは空気を『読む』事じゃなくて、空気を『モノにする』事が上手かったのよ！」

「？　　どういう事です」

「えーっと、つまりねー」

怪訝な様子のノーマに少し心を落ち着けると、青羽は自身の考えを話し始めた。

「寧々さんってあたし達の考えてる事まで全部見抜いちゃいじゃない？　それってつまり、あたし達が次に何をしようとしてるかまで寧々さんにはお見通しなのよ」

「それで？」

「それでさ、あたし達の考えてる事が分かって事は、場合によってはあたし達が何かに対してどういう反応を返すかも分かる訳で・・・」

そこまで青羽が口にした所で、何かに気付いたのか手を挙げて青羽の話を遮った。

「それはつまり、コチラが返す反応まで考えて寧々さんは行動すると・・・そう言いたいのですか？」

内心冷や汗を流しながらノーマがそう言うと、青羽は何も言わずに黙って頷いた。戒はそれを見てなるほどと言った顔をし、白奈は自身の中で必死に理解しようと頭を働かせる。ただ一人、弘貴だけが

依然頭の上にハテナマークを浮かべていた。

そんな彼に助け船を出すべく、戒が分かりやすい説明を始める。

「つまりだね、弘貴が何か気に入らないことを言われたときにどんな行動をするかも寧々さんには筒抜けって訳だ。ここまでは分かる？」

「うい」

「オーケー、それでだ。ここで寧々さんが意味あり気に僕に話を振ってくる。あたかも僕が陰でそんなことを言っていたかのように……となると、君だったらどうする？」

あくまでも突然寧々さんにそんなことを言われた場合、そう言っただけで弘貴に訊ねると、彼はしばしうーうー唸った後首を傾げながら答えた。

「多分、兄貴が言ったって勘違いするかも……」

「そう、つまりはそう言う事さ」

「ええっ、どういう……」

「早い話が、彼女はコチラの思考を簡単に誘導出来ると言うことです」

例えば仲良し二人組が居たとして、寧々はその二人の考えてる事や特定の刺激に対する反応まで完璧に知ることが出来る。その情報を元に寧々は二人の思考を誘導して仲違いさせてしまう事が出来るのだ。

「恐らく恭司達はその事を知っていたんです。だからあんなにもあつさり身を引いた、やること為すこと全てが彼女の思い通りの可能性があるから……」

無論、寧々自身の戦闘能力が馬鹿になら無いと言うのも勿論あるだろう。手札を全て幻獣種で固めたライダー等他に類を見ない為、想像も出来ない。

「恭司が言ってたね、寧々さんの事を魔女って。もしかして、寧々さんはとんでもない人なんじゃ……」

これまでの話を総合して、戒はその様な考えを抱く。しかし青羽はそれに異を唱えた。

「いや、そんなことはないと思うわよ。少なくともあたしと紅羽にとってはお姉さんって感じだったし」

「そういう風に貴女の思考を誘導しているのかもしれないよ？」

「いや、それ言われるとなんとも言えないけど……でもあたしと紅羽の喧嘩を上手いこと治めてくれたりしてたから、まるっきし悪い人じゃないと思うわ」

青羽の言葉にノーマは顔をしかめる。合理的に考えるなら寧々とはあまり関わらない方が良いのだが、昔からの付き合いがある青羽はそんなことお構い無しに行動するに違いない。

「あの……」

能天気とも言える青羽の考えにノーマが頭を悩ませていると、不意に弘貴がおずおずと口を開く。

「何です？」 「いえ、寧々さんっていろんな事を知ることが出来るんスよね？」

「それが何です？」

「それってつまり、今俺らがこうして話してるのも筒抜けなんじゃ……」

瞬間、青羽を除く全員が動きを止めた。寧々の謎の方に意識が向いてその事に全く気付かなかった。

だが同時に、この会話をする事自体寧々には簡単に予想できていたのではないか、と言う考えも浮かんた。この会話を能力で知りながら優雅に紅茶を飲み、時折満足そうに頷く。そんな寧々の様子が一瞬全員の脳裏を過るのだった。

夜・ダーティ

その日の夜、青羽達の次の目的地であるダーティの一面ね路地裏に突如灰色のオーロラが現れ、そこから一人の男性が姿を現す。

男性は鋭い目をした黒髪・黒目で、しばし訳が分からないと言った顔をしている。

「何だ、ここ・・・？」

男性――朝月 真谷――は辺りを見渡しながらそう呟く。見渡すと言っても路地裏なので、左右にそびえ立つビルの壁と前後に伸びる暗闇しか見るものは無いのであるが。

因みに灰色のオーロラは彼が現れると同時に跡形もなく消えている。

この状況に真谷は頭を抱えた。以前彼のいた世界にも、同じような感じで異世界の者達が来たことはあった。しかし彼も流石に自分が

同じ様な状況になるとは思っではいなかったのだろう。真谷も頭を抱えるしかない。

「取り敢えず、動くか」

知り合いが誰もいない状態でジッとしていても何も始まらない。真谷は兎に角その後から移動する事にした。人の居るところに行けばあるいは何か進展があるかもしれない。

「ん？」

そうして適当に足を進めた矢先、ふと何かがぶつかり合うような音が聞こえてきた。どうやら今歩いている方向から聞こえているらしい。

真谷は警戒しながら進んでいく。歩いている内に音より鮮明に聞こえ、頻度も増えてきた。先を見ると薄らとだが真っ直ぐ進む道とは別に、右に空間があるらしい。

真谷はゆっくりとその角に近付いて覗き込んでみた。すると・・・

「ハアアッ！」

まるで死神と見間違ふような、大鎌を振るう黒紫のライダーがそこにはいた。

（仮面ライダー？）

真谷はそいつの姿を見て疑問符を浮かべる。パッと見た感じは確か

に仮面ライダーに見えなくもないが、何処と無く彼が今まで見てきたライダーとは印象が異なっていたのだ。

真谷が首を傾げながら見ていると、黒紫のライダー——仮面ライダーサイズ——が二枚のカードを取り出して大鎌——サイズラウザー——の石突きにスラッシュした。

《Slash Dark》

(ッ!?) ガイアメモリじゃなくてカードを使った?)

《Darkness Slash》

真谷がカードを使って戦うサイズに驚くなか、サイズは闇を纏った刃を目の前にいる蜘蛛のような異形に向かって振り下ろした。

「ハアッ!!」

サイズが唐竹に異形を切り裂くと、相手は力無くその場に仰向けに倒れる。そして倒れたそいつにサイズが近づくと、黙って一枚のカードを異形の上に落とし封印してしまった。

サイズが封印したカードをみると、ハートマークと10。それと『キャプチャー・アラクネ』の文字が描かれている。

それを見てサイズは舌打ちした。

「またこんな屑カード……上級カテゴリーは一体何処に——」

サイズが一人ブツブツと呟く中、真谷も一人考え込んでいた。

(何だあいつ? ガイアメモリを使わないで戦った。これはアイ

ツが特別なのか、それともここじゃあれが普通なのか……」

今見たものに関して思考を巡らせる真谷。彼のいる世界ではガイアメモリを使用するライダーしか存在しないので、サイズの様なこの世界特有の戦い方をするライダーは初めてなのだ。

その時、あれこれ考えていた真谷の背筋に冷たい何かが流れた。

「くっ!？」

咄嗟に頭を下げる真谷、それと入れ違う様に彼の頭があった所をサイズのラウザーが薙いだ。

「何コソコソしてるのかしら？」

真谷が声のした方を見ると、左手で壁にラウザーを突き刺したサイズの姿が。

「いきなり攻撃とは、随分と穏やかじゃないな。せめて一声掛けてもいいんじゃないか？」

「これから殺す相手に、一声掛ける必要があるの？」

サイズは壁から刃を引き抜くと、今度は両手で構えた。それを見て真谷は大きくため息を吐く。

「全く、なんて世界に來ちまったんだか」

そう言いながら、彼は黒い角張った機械を取り出して腰に装着する。サイズは彼が腰に着けた機械を見て、合点がいったと言いたげに頷いた。

「へえ、あなた他所の世界から来たんだ？」

「ああ、どうやらそうらしい」

真谷はサイズの言葉に適当に答えながら、黒いUSBメモリーのような物を取り出す。そして徐にメモリーに付いているスイッチを押した。

《OMEGA》

メモリーから電子音が鳴ると、腰に着けた装置——オメガドライバ——に装填して上を向いた右側の部分を右に倒した。

「変身！」

《OMEGA》

再び電子音が鳴ると同時に、真谷の姿はそれまでのとは違うものになった。

黒い体に腰まである黒いマント、全身には金のラインが入り何処か刺々しく、『Ω』の文字を上下逆にしたアンテナが付いた頭部では赤い複眼が光っていた。

これが真谷の変身する仮面ライダー、【仮面ライダーオメガ】である。

「さあ、絶望へのカウントダウンを数えろ」

「絶望するのは、あなたよ」

第59話 最後を運ぶ戦士（後書き）

と言うわけでコラボ第1話でした。

今回は青羽達による寧々の考察と、真谷の登場の話。真谷の本格的な活躍は次回になります。

正直真谷を上手いこと再現出来ているか不安な部分はありますが（
^| ^;）

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第60話 別れ、そして出会い（前書き）

どうも、黒服です。

今回はコラボ第二話、前回のオメガとサイズの戦いからとなります。

漸く青羽達と真谷が対面するので、お楽しみに。

第60話 別れ、そして出会い

ダーティ・路地裏

夜の闇が支配するダーティの路地裏、そこで激しく戦う二つの影があった。

「フッ！」

一人は死神を彷彿とさせる大鎌を振るう黒紫の仮面ライダー、仮面ライダーサイズ。

「ハッ！」

そしてもう一人は、金属製の棒の両端に刃が付いた薙刀状の武器を振るう黒い仮面ライダー、仮面ライダーオメガである。

二人が今居るのは路地裏の中でも割かし開けた場所、複数のビルを建設する際にビルの形状の関係で出来たと思われる空き地の様な所だ。

彼らはそこで一進一退の攻防を続けている。

「なかなかやるじゃない。でも今は戦いを楽しむよりも殺しを楽しみたい気分なの。だからさっさと死んで」

「誰がッ!？」

サイズの言葉に声を荒げながら、オメガは手にしていた武器・オメガハルバードを投げつける。咄嗟にラウザーで弾くサイズだったが、その隙に今度は専用の銃・オメガマグナムを構えていたオメガが引

き金を引いた。

「グッ?! あっ、クウツ!!?」

防御が間に合わずモロに無数の弾丸を受けるサイズ。堪らず後退したサイズに追い撃ちを掛けようとオメガが前に出たその時――

《Capture》

「なっ!?!」

いつの間にかサイズが用意していたカード、『キャプチャー・アラクネ』をラウズしてオメガの動きを完全に封じてしまった。

「グッ、クソッ?!」 「無駄よ、それは蜘蛛の糸。もがいても伸縮自在の糸からは逃げられないわ」

糸を引きちぎろうとするオメガの前に、悠々と立つサイズ。オメガは仮面の奥から睨み付けるが、その行為はサイズを楽しませるだけに終わった。

「それじゃ、いい悲鳴を聞かせてね」

《Dark》

サイズが一枚のカードをラウズした瞬間、彼女から放たれた闇がオメガに襲い掛かる。

「うっ、グアアアアアアアッ?!」

「ウフフフフ、アハハハハハハッ!!」

全身を走る痛みにおメガは苦痛の叫びを上げ、対するサイズはさも愉快と言った感じの笑い声を上げる。

（ち、チクシヨウ・・・オメガの、能力が全然、機能しねえ？！）

オメガには本来相手の能力を無効化する能力がある。だがそれはあくまでガイアメモリや魔法などに対するもの。ガイアメモリでも魔法でもないラウズカードの前では、全く効果が無かったのである。

「出来ればもっと聞いていたいけど、生憎私忙しいの。だかもう終わりにするわね」

（チクシヨウ、俺がこんなところで・・・ディエチ……………）

そう言ってオメガの首元に刃を近付けるサイズ。その刃が振りかぶられるのを見ながら、オメガは元の世界にいる恋人の事を想った。

その時である。

「ガッ?! なに!?!」

突然背後から伸びてきた赤く光る鞭のような何かがサイズの背を打った。完全に不意を打たれたことに動揺しサイズは後ろを振り返る。同時にオメガを苦しめていた闇もその場で霧散して、漸くオメガは苦痛から解放された。

「全く、私には会わねばならない人がいると言うのに……」

サイズが振り返った先では、赤い鞭を振るった人物がやれやれと言った感じに首を振っている。

それは今までに見たことの無い相手だった。全身は白く輝く鎧で包まれ、青い複眼を持った頭部はまるで王冠を被っているよう。胸部は青い宝石を中心にステンドグラスの様な模様が広がっている。

「あなた・・・何者？」

「・・・サガ。それよりあなたね、ここ最近裏でライダーや人を殺して回っているのは？」

サガ、そう名乗った仮面ライダーの様な人物は、鞭をレイピアに変えながらサイズに訊ねる。サイズもオメガからサガに興味が移ったのか、そちらに向かってラウザーを構えた。

「だったら何？」

「ほとんど見境がないあなたは危険すぎる。あの方に危害が及ぶ前に、ここで始末させてもらおうわ」

「へえ・・・やってみなさいよ!？」

サイズが駆け出すと同時にサガも手にしたレイピア状の武器を前に突き出す。

二人が戦っている内に、オメガはその場を離れる。常人であれば気を失う程の激痛であった筈だが、彼は持ち前の常人を凌ぐ身体能力のお陰でギリギリ耐えることが出来たのだ。

サイズはサガとの戦いに夢中でオメガがその場から離れたことに気付いていない。

二人はかなり激しく戦っているのか、凄まじい戦闘音が聞こえてくる。その音を背に、オメガは変身を解除しながらその場を離れるの

だった。

翌日・ダーティ

それから一夜明けて、次の日の午前中にダーティを訪れる者達が出た。言わずもがな青羽達である。

「あゝ、なんかやっと着いたって感じね」

「まあ、色々ありましたからね」

実際白奈の正体が明らかになったり刃一行と出会ったりした。期間としては決して長いものではなかったが、その内容は濃いものだと言えるだろう。

一先ず街に着いたのだから宿に行こうかと青羽が提案すると、白奈が一人この場で別れると言い出した。

「えっ、どうして？ どうせだったら一緒に行った方が……」

青羽が言うと、白奈は黙って首を横に振った。

「青羽達と居ると、私きつと甘えちゃうから」

「それって、駄目なことなの？」

「駄目って訳じゃないけど……でも私、アンデッドだから。青羽達と居ると、その事忘れちゃいそう」

それはいけない事だと思う、白奈はそう言って軽く微笑んだ。彼女の言葉に、青羽は表情を曇らせる。

「そっか……ちょっと、寂しいね」

そう言って俯く青羽の手を、白奈が優しく包み込む。

「大丈夫、また会えるよ。友達だもん、だから大丈夫」

白奈の手から伝わる温かさに、青羽の表情から影がなくなっていく。そして自身の気持ちを落ち着けると、白奈に向かって微笑み返す。

「さよならは、言わないからね。また会うんだから」

「うん！ “またね” 青羽」

“またね” 白奈」

再び会うことを約束する意味での『またね』……そうお互いに別れを告げて、二人は別々の方向に向かって歩いていくのだった。

街中

あれからしばらく経って、宿をとった青羽達は協会に向かっていった。

「さーて！ 気持ちを切り替えて、早速協会にでも行きますか！！」

「切り替える必要があるのは青羽だけだと思うけどね」

「細かいことは気にしないの」

先程までの雰囲気も何のその、意気揚々と歩いていく青羽にノーマ達は苦笑しながらついていく。

とその時、不意にノーマの耳に奇妙な物音が入ってきた。

「？」

ノーマは一瞬だけ聞こえてきたその音に首をかしげる。何しろ音が余りに小さすぎてはつきり聞こえたと言い切れないのだ。

「どしたのノーマ、急に立ち止まって？」

「あ、いえ……今一瞬あちらから物音が聞こえた様な気がして」

ノーマが指差す先にあるのは、ビルとビルの間にぽっかり空いている薄暗い路地裏であった。それを見て青羽は自身も耳をすませてみるが、彼女には何も聞こえない。

「何にも聞こえないけど？」

「しかし……ッ！？　やはり聞こえます。こっちです！」

「あぁっ、ちよっとノーマ！？」

青羽の制止を聞かずに路地裏に入っていくノーマ。やむ無く他の面子も路地裏に入ってしまった。

そのまま彼女の後に続いて路地裏を進んでいくと、ノーマは途中でしゃがみ込んでいた。青羽はそんなノーマの背に声を掛ける。

「ねえノーマ、音ってもしかして――」

「アンデッドではありませんよ、それならそうと言いますから」

「それじゃあ、一体……」

何なのか、弘貴がそう訊ねようとした時、それより早く戒がノーマの背で隠れていた彼の存在に気付いた。

「ッ！？　ノーマ、その人は、一体？」

戒に続いてノーマの視線の先を見て、青羽と弘貴も驚愕する。何しろそこには一人の男性、朝月 真谷が倒れていたのだ。

「ちよっ?! あ、姐さんどうします? 救急車、救急車呼びます?」

「落ち着きなさい。どうやら見た目ほど酷い怪我をしている訳ではなさそうです。取り敢えず宿に連れて行って、そちらで手当てしましょう」

ノーマの言葉に青羽は首をかしげる。別に態々自分達が治療するよりも、病院に連れて行った方が良いのではないだろうか。

「ねえノーマ、何で態々宿に連れて行くの? 病院に連れて行った方がいいんじゃない?」

「それをする、少々面倒な事になるかもしれませんが」

「何故だい?」

「彼は身分証を持っていない可能性があります」

そう言ってノーマは、近くに落ちていた機械を持ち上げる。黒く角張ったそれは、パツと見た感じ何の為の物なのか検討もつかない。

ただ、その大きさや明らかに何かギミックがありそうな構造等から何となく想像する事は出来る。

「この人……この世界の人じゃない?」

青羽がやや困惑しつつそう口にすると、ノーマはゆっくりと頷く。傍らでは戒がまたかと言いたげに頭を抑えていた。

数時間後・宿

「う、うう……………」

ダーティにある宿屋、その一室のベッドの上で真谷は目を覚ました。目を覚まして彼がまず最初に思ったのは、目の前に広がる光景への疑問だった。最後に覚えているのは冷たいコンクリートに囲まれた路地裏だった筈だ。断じてこの様な暖かみのある天井ではない。

「ここは「目が覚めましたか？」ッ!？」

彼が何気なくこの部屋に対する疑問を口にしようとする、出し抜けに自分以外の人の声が聞こえてきた。真谷がそちらを向くと、少し離れた場所で椅子に腰掛けたノーマが。

「お前が、俺をここに連れてきたのか？」

「まあ、そんなところです」

彼女の言葉に真谷は礼を言おうと口を開く。

だがその口から出たのは礼の言葉ではなく驚愕の言葉だった。何故ならノーマの手には、真谷のオメガドライバーが握られていたからだ。

「また随分と変わったツールですよね」

そんな彼の視線に気付いたのか、ノーマは手の中のオメガドライバーを弄びながら話し掛ける。真谷は彼女の言葉を見向きもせず、努めて冷

静に、しかし威圧感を込めながらオメガドライバーを返すように言った。

「そいつを返せ」

「お断りします。万が一と言うこともありますし、ここで貴方に暴れられては困りますから」

真谷の言葉を速攻で拒否するノーマ。それに対して真谷は殺気の籠った目で睨み付ける。視線を受けてもノーマは何てことないのか身動きしないが、先程よりも警戒心を強めたのはよく分かった。

両者の睨み合いにより、険悪な空気が室内に漂う。その時、唐突に部屋の扉が開いて青羽・戒・弘貴の三人が入ってきた。

「だからさ、アクスの利点をもっと活かせるようなカードをね」

「でも、そんなカードあるんスカ？」

「あるんじゃないの？ あたしが使うメタルみたいな……あつ！

目が覚めたんだ」

何やらあれこれ話し合っていた三人だったが、青羽の言葉に他の二人の視線が真谷に向く。弘貴は興味津々と言った目を、戒はどこか探るような目を向けていた。

ノーマと真谷も三人の方に顔を向け、全員が向かい合う形になった。すると何を思ったのか徐に青羽はノーマに歩み寄り、彼女が持っていたオメガドライバーを自然な動作で受け取って真谷に手渡ししてしまう。

「はいこれ、あなたのでしょ？」

「あ、ああ……」

「えっ？ あっ、ちょ、青羽ッ!？」

余りに自然な動作でオメガドライバーを真谷に返してしまった青羽にノーマは一瞬反応出来ない。だが次の瞬間何が起こったのか理解すると、彼女は慌てて青羽に詰め寄った。

「何を考えてるんですか!？ 得体の知れない相手に武器になり

かねない物を渡すなんて!」

「そんなに警戒することもないじゃない。まだ悪い人って決まった訳じゃないんだし」

「彼が危険な人物だったらどうするんです?」

「ま、その時はその時よ。こっちが馬鹿見ればいいだけの話だし」

あっけらかんと言つてのける青羽にノーマは深くため息を吐く。本来にどうしてこうも他人を警戒せずにいられるのか理解できない。少しは警戒心を持って欲しいと願うものだが……無理だろうな、と内心で諦める。

どういうわけか知らないが、青羽は基本初対面の相手に対して警戒したりしない。いいことなのかもしれないが、傍から見ている方から言わせれば頼むからもう少し警戒心を持ってくれと考えてしまう。

ノーマが論理的に物事を考えるのに対して、青羽は感性で物事を考える節があった。思考の方向性が全く違うにも関わらずノーマと青羽が仲違いしないのは、ノーマが我慢強いからか青羽が何だかんだでお人好しだからか。

「そんなことより、今はベッドの上の彼だよ。何時までもほったらかしにしちゃ可哀想だって」

ため息を吐くノーマに苦笑いしながら、戒が二人の意識を真谷に向けさせる。当の真谷はと言うと、完全に蚊帳の外に追いやられて手持ち無沙汰になったからか窓の外に目を向けていた。

「あぁつと、ゴメンナサイほったらかしにしちゃって!？ 取り敢えず自己紹介から、あたし桐沢 青羽って言います。で、こっちが右からノーマ、戒、弘貴」

青羽に紹介され、各々自身のフルネームを口にするノーマ達。全員が自己紹介を済ませると、今度は真谷が名乗った。

「俺は朝月 真谷だ。一応聞くが、お前達が助けてくれたんだよね？」

「正確に言うとノーマが最初にあなたを見つけたんですけどね」

青羽の言葉に彼はそうかと呟くと、先程よりは幾分か柔らかめな目をノーマに向けた。

「一応礼は言っておくぞ」

「どうも」

真谷に礼を言われて、ノーマはそっぽを向きながら軽く返す。それは照れ隠しと言うよりは、心底どうでもいいと言った感じだった。

「それより、貴方仮面ライダーですよね？」

「だったら何だ」

「貴方が変身するライダーについて教えてもらいたいのですが……」

唐突にノーマは真谷にそんな質問をする。青羽は彼をそこまで警戒していないが、ノーマは彼女程甘くはない。少なくとも相手の戦力

位は把握しておきたかった。

「断る。お前達に話す理由がない」

数秒と間を置かず速攻でノーマの言葉を拒否する真谷。彼にして見ればここでオメガの事を話す理由が欠片も存在しなかった。

「どうしても……ですか？」

「当然だ」

真谷の拒絶にノーマはサングラスの奥で目を細める。手にはいつの間にか『チェンジ・マンティス』のカードが握られており、カリスラウザーを装着すれば何時でも変身できる体勢に入っていた。

その様子に慌てたのは青羽と弘貴の二人。

「ちよちよちよっ?! ストップノーマ、幾らなんでも怪我人相手に変身とかしちゃ駄目だって!!」

「姐さん落ち着いて! 喧嘩は駄目ッス、暴力反対!」

二人が必死にノーマを止めようとするが、身体能力で圧倒的に勝っている彼女を、ライダーとは言え常人の身体能力で抑えられるわけがない。そして真谷の方もやる気があるのか、オメガドライバーを腰に装着している。

これは流石不味いかと戒が仲裁の為にギャレンに変身しようかと考え出したその時、懷に手を入れていた真谷が驚愕の声を上げる。

「ッ!? メモリ、オメガメモリがない?! おい、メモリはどこにやった!?!」

「えっ？　メモリ？」

「黒いUSBメモリーみたいなヤツだ！　こんな感じの！？」

そう言って真谷はギジメモリの一つ、バットメモリを青羽達に見せる。だが四人はそれを見ても首を傾げるだけだった。

「あんなの落ちてた？」

「俺見てないツスよ」

「僕も見ただ覚えはないね」

「ノーマ？」

青羽、弘貴、戒の三人はいずれもオメガメモリを見た覚えはないと口にする。残るはノーマが隠してる可能性だが……

「私もそんな物を見た覚えはありませんね。あの場には貴方が腰に着けているそれ以外何もありませんでしたよ」

「本当か？」

「あれば真っ先にこの場に出して貴方が変身するライダーの情報を引き出す材料に出来たんですがね」

何処か残念そうな様子で言うと、興味を失ったかのようにカードを仕舞うノーマ。真谷に戦闘能力が無いと分かったからか、一気に大人しくなった。

「そねメモリって、そんなに大事な物なんですか？」

真谷のあまりの慌てように、青羽はそんな事を訊ねた。それに対して真谷はベッドから降りながら首を縦に振る。

「ああ大事だ。アレがないと、とんでもなく困る！」

「ん、それじゃあ――」

真谷の言葉に青羽は何事か考え始める。その様子に嫌な予感がしたノーマは急いで彼女を止めようとするが………

「あたし達も探すの手伝いますよ」

ニカッと笑って青羽がそう口にする方が早かった。

第60話 別れ、そして出会い（後書き）

と言う訳でコラボ第二話でした。

オメガ対サイズはまさかのオメガ敗北となりました。ブレイド系ライダーの利点って、一人でも色んな事が出来る点にあるんですね。電撃使って体を硬くしたり高速移動するブレイドみたいに。

白奈はここで一時退場です。退場と言っても別に死んだわけではなく単に青羽達とは別行動になっただけですから、伊達さんみたく後々登場するのでご安心を。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第61話 メモリ捜しとアンデッド封印（前書き）

どうも、黒服です。

遅れてすみません、軽くスランプになってたり風邪を引いたりして
たものですから（汗）

第61話 メモリ捜しとアンドッド封印

ダーティ・宿

メモリ探しを手伝う、そう青羽が口にした瞬間の室内に居た者達の反応は様々だった。

ノーマは疲れたと言いたげに額に手を当て――

戒は苦笑いを浮かべ――

弘貴はメモリに興味があつたのか賛成と言いながら手を挙げ――

そして今回の一番の当事者である真谷はと言うと、青羽の申し出に目を丸くしていた。

「そう言ってくれるのはありがたいが……俺が言うのもなんだが、よくそこまでしようと思えるな」

「彼と意見が合うのも癪ですがその通りです。今までの事から考えるに彼とは一期一会以上の関係にはなりえません。なのに何故そこまでするのですか？」

ノーマの言葉はかなり非情かもしれないが、ある意味的を射ていた。今まで彼女達の前に現れた異世界の住人は、いずれもそう時間が経つことなくこの世界から出ていった。となれば、真谷も元居た世界に帰るまでそう時間が掛かることはないであろう。

オマケに青羽達と真谷が出会ったのはつい先程。曲がりなりにも助けはしたが、逆に言ってしまうばそれ以上の繋がりはないしこれ以

上何かしなければならぬ義務もない。つまりぶっちゃけて言えば、このまま真谷の事に関しては知らんぷりしても構わないのだ。一応明確な目的が青羽達にはあるのだし、彼自身もう自力で動けるまでに回復している。

それらを理由に彼からは手を引こう、ノーマは青羽にそう告げようとした。

だがそれよりも早くに、青羽が言葉を紡ぐ。

「これが一期一会だって事は百も承知。ここで会ったのも何かの縁でしょ？　だったら探し物位手伝ったって良いじゃない」

青羽の言い分に即座に反論しようとするノーマだが、青羽は反論しようとするノーマを制して話を続ける。

「それにさ、そのメモリって朝月さんの大事な物なんですよ？　ならそれ見つけるまでは帰るに帰れないじゃない」

ノーマもそうでしょ、と言われて思わず押し黙るノーマ。確かに彼女自身カリスラウザーやカテゴリーAのカードを異世界で失ってしまったら、見つけるまで帰るわけにはいかない。

何故青羽はこうもこちらの痛いところを突けるのだろうかと思ふ不思議に思う。感性でモノを見ているから本能的に分かってしまうのだろうか？

「はあ、分かりました。こんな事で時間を潰すのも馬鹿らしいですし、やるならサッサとやりましょう」

「意見通しといてなんたけどゴメンね、無理矢理付き合わせたみた

いで」

「そう思うなら、もうちょっと理性的に物事を考えてください」

サングラスの奥からジト目を向けられ、乾いた笑い声を上げる青羽。ノーマはああ言っているが、実際はかなりこの二人はバランスが取れていたりする。論理ではなく感性でモノを見る青羽と、合理的思考のノーマ。お互いにアンバランスだが、だからこそお互いに足りないものを補いあっているのかもしれない。

そんな二人を見て、真谷は一言呟く。

「賑やかだな」

「ま、退屈はしないからいいんですけどね」

彼の呟きをいつの間にか近くに来ていた戒が聞いて、苦笑しながら相槌を打つ。

そのまましばらくの間、部屋にはノーマの小言と青羽の曖昧な笑い声が響いていたのだった。

数分後・街中

あれからしばらくして、青羽達は真谷と共に先程の路地裏へと向かっていた。もしかしたら見落としていただけかもしれないし、他に見当が付きそうな場所もなかったからだ。

「にしても不思議よねえ、その・・・ガイアメモリ、だっけ？ そんな小さい物で仮面ライダーに変身出来ちゃうなんて」

「俺から言わせれば、トランプみたいなカードで変身するお前達の

方が不思議だ」

真谷はこう言うが、実際のところ変身の際にカードを必要とする仮面ライダーはブレイド等の他にもディケイドや、変身に直接関わる訳ではないが龍騎などカードを使ってその力を引き出すライダーは意外と存在しているので強ち珍しくは無かったりする。

それはともかく、そうこうしている内に先程彼と出会った路地裏に到着した青羽達。早速真谷のガイアメモリを捜そうと意気込んだものの、いざ来てみれば彼が倒れていた所は殺風景の一言に尽き、ゴミ箱どころか小石の一つも落ちてはいなかった。

「無いっばい……ね」

「ねえ朝月さん、他に心当たりとかないの？」

青羽に訊ねられて、真谷は数秒考え込む。と言っても、ここになればあと考えられるのは彼には1か所しかない。

「昨日、あいつと戦ったあそこなら……もしかしたら」

思い起こすのは昨夜の事。偶然出会った仮面ライダーに苦い思いをさせられたあの場所である。あの時はあそこから離れる事を考えて必死だったので、もしかしたら変身を解いた際にうっかり落としていた可能性はあった。

「あいつ？」

「貴方に怪我を負わせた相手ですか？」

何気なく真谷が呟いたあいつという言葉。それを聞いて青羽達は初めて彼に何故路地裏で倒れていたのかを聞いていない事に気付いた。

「アンデッドにやられたんスか？」

「いや、仮面ライダーだ……多分な。死神みたいな大きな鎌を持った……」

「えっ!？」

真谷が口にした死神の様な仮面ライダー。青羽達を知る中でその特徴を持ったライダーは一人しかいない。戒は恐る恐る彼にそのライダーの特徴を訊ねた。

「それはもしかして、黒紫色のアーマ―の、女の子が変身してる……?」

「性別は声でしか判断できないが、喋り方や口調からして女だぞ。見た目は確かにその通りだが……」

「ッ!？ やっぱり……」

戒の問い掛けに対する真谷の答えに、青羽達は相手が仮面ライダーサイズⅡ利香であった事を悟る。

「その時、一体どうなったの？」

「詳しい事は省くが、別の見た事の無いライダーが乱入してきた隙について逃げだしたんだ」

見た事の無いライダーが一体どんなライダーなのかまでは流石に彼も覚えていない様だったが、恐らくこの世界に何人もいるライダーの一人だろうと青羽達は考えた。実際のところ彼とサイズの戦いに割って入ったライダーはこの世界に数多存在するライダーとは全く異なるライダーなのだが、その事を彼女達が知る術は無かったりする。

なにはともあれ、青羽達は昨夜真谷とサイズが戦っていた場所に辿り着いた。街の建物と建物の隙間に出来た所謂デッドスペース。先日 of 戦闘の後が生々しく残るその場所は、ところどころに破壊の跡が見られあちこちに瓦礫や無造作に放置されたガラクタの残骸が放置されている。

早速辺りをくまなく探す青羽達だったが、あるのは瓦礫やガラクタのみで真谷のガイアメモリは一向に見つからなかった。

「ん〜・・・ねえ、そっちはあった？」

「いえ、こちらには何も……」

「こっちにも無いね」

しばし辺りを捜し回るも、一向にガイアメモリは見つからない。話を聞いたところ真谷がこの世界に来てから動き回ったのは青羽達に連れられるまではこの路地裏に限定される。

と、言う事は……………

「もしかして、誰かが持ってっちゃったんじゃない？」

考えられるのはそれである。捜し回って見つからない以上、ガイアメモリはこの場に居ない第三者の手にあると考えた方がよい。

しかしそうなるのかなり面倒な事になる。何しろ誰が持っているかも分からないのだ。こうなると流石に探しようがない。

「おい桐沢、この世界にも交番とかはあるんだろ？ だったらまずはそこに行くべきじゃないのか？」

「う〜ん、あるにはあるんだけど……………ねえ？」

「場所が場所です。こんな所に足を踏み入れる様な人物が、そうするんなり交番に向かってくれるかどうか」

「下手すると、何処かのジャンク屋か質屋にでも売り飛ばされてるかもね」

戒の言う事はかなり辛辣だが、もしそれが本当だとすれば洒落にならない。まだ見た事もない珍しい機械として好事家の手に渡ったのならいいが、ガイアメモリの使い方を何らかの方法で知ってしまった者の手に渡るとかなりマズイ。真谷が持っているガイアメモリは特別なのでそれ単体では特別な効果を現さないが、もしもと言う事態がある。

こうなると流石の真谷も焦りを隠せない。どうしたものかと彼が頭を悩ませていると、突然ノーマが彼を突き飛ばした。

「ぐっ！？ 何を――」

突然のノーマの行動に真谷が混乱しながらノーマの方を見ると、彼が今しがた立っていた場所に異形が腕を振り下ろしているのが目に入った。予想外の光景に一瞬啞然としたが、次の瞬間には彼はノーマに窮地を救ってもらっていた事を理解する。

「怪我はありませんか？」

「お陰さまでな……一応礼は言っておく」

「結構です」

話しながら真谷はその場から距離をとる。今の自分がいては足手まといにしかない。

「不意打ちでこっちの動揺を誘おうとしたみたいだけど……」

運が悪かったね」

「ま、私相手にアンデッドの不意打ちは効きませんからね」

「飛んで火に居る夏の虫ッスね！」

「さして、行くわよ！」

真谷が十分に離れた頃合いを見計らって、青羽達は各々バックルなどを取り出した。だが腰に装着までするのは弘貴と戒の二人のみ。青羽とノーマが変身までする素振りを見せない事に、真谷は違和感を感じて彼女に声をかけた。

「おい、いいのか桐沢？ お前達は変身しなくて？」

「あの程度のアンデッドなら、別に4人で相手をする事もないでしょう」

「そうそう。それに弘貴が今一番持つてるカードの数が少ないしね」

そうこうしている内に、アクス・ギャレンと熊の様な姿をしたアンデッドーベアーアンデッドーとの戦いが始まった。アクスは早速ベアーアンデッドに突撃していき、渾身の力を込めてアクスラウザーを振り下ろす。

「ぬりゃあああああつ！」

アクスの渾身の一撃は、しかしベアーアンデッド相手に容易く受け止められる。それどころか、異様に太い剛腕からなる振り下ろしを喰らってしまった。

「ぐえっ?!」

防御力が自慢のアクスにこの攻撃が致命傷になる事は無かったが、圧倒的に戦闘の経験値が低い弘貴は咄嗟の事態に反撃まで頭が回ら

ないのか一瞬その場で棒立ちになる。その隙を見逃さずベアーアンデッドが再び腕を振り降ろそうとしたその時、無数の銃弾がその身に突き刺さった。

「弘貴、ボーっとしてる暇は無いよ？ 早く次の攻撃をしないと」

「りよ、了解ッス！」

ギャレンの言葉を受け、再びアクスはベアーアンデッドに向かっていく。その様子を見て青羽は軽く溜息をついた。

「なくんて言うか、ちょっと突撃に頼り過ぎて感じかしらね？」

「まあ、彼の場合そうするのが一番自身の特性を活かせるというのもあるんでしょうけどね」

「そうは言っても、やっぱり攻撃にばかり目を向け過ぎよ」

実際、アクスの戦い方はひたすら相手に突撃してラウザーを振り下ろすと言うどちらかと言えばワンパターンな戦法が目立つ。ベアーアンデッドもそこに気付いたのかアクスの攻撃を防ぎ、動きが止まった瞬間を狙うようになってきた。

「あの櫻羽って奴は、ちゃんと戦闘訓練とか積んでるのか？ なんかいやに動きが稚拙だが」

「してないんじゃない？ 多分何処かの協会でライダーになって、そのまま旅してるってところだと思うわよ」

青羽の言葉に真谷は呆れと驚きの混ざった表情をした。一応移動中にこの世界では誰でも仮面ライダーになれると言う話は聞いていたが、まさかロクに戦闘訓練もしないで戦いに赴く者が居たとは思ひもしなかったのだ。

「いいのか？ ハッキリ言って無謀だぞ？」

「ん〜、まあほとんどの人は他のライダーとパーティー組んで行動したりしてるみたいだから、そこまで心配する事もないと思うわよ」

そう言っていると、再び攻撃を受け止められたアクスの隙についてベアーアンドッドが攻撃を仕掛けようとしていた。しかしそれはギャレンの銃撃により阻まれ、ベアーアンドッドは已む無くアクスから距離をとる。

「はあ、はあ、くっそお・・・パワーには結構自信あったのに」

どうやらこれまで何度となく攻撃を防がれた事に、彼自身焦りを感じているらしい。そんな時、ギャレンがアクスに声をかける。

「弘貴、押してダメなら・・・なんだったっけ？」

「へっ？」

唐突過ぎるギャレンの言葉に、アクスは一瞬ポカンとなる。ギャレンが何を言いたいのかがイマイチ分からないのだ。アクスがギャレンの言葉の意味を考えていると、銃撃が止んだ事で再びベアーアンドッドが向かって来た。

「ぬおっ!？ (え〜っと、なんだっけ？ 押してダメなら？ 押してダメならって、ええ〜・・・)」

アクスはベアーアンドッドの攻撃を受け止めながら、ギャレンの言葉を思い返す。彼の口ぶりから察するに、押してダメ、の後に何か言葉が続く筈である。

（押してダメなら、ええっと・・・引いてみるだっけ？　でも引いてみるって・・・）

ベアーアンデッドと鏑迫り合いになりながら必死に頭を働かせるアクス。その様子を見ていた青羽達はギャレンの思惑を見抜いてなるほどと頷いていた。

「なかなかいいアドバイスですね」

「何だかんだで戒も面倒見はいいからねえ」

「だが・・・あっちの櫻羽の方は大神の意図をちゃんと理解できるのか？」

青羽とノーマがうんうんと頷く隣りで、真谷が心配そうにそう口にした。彼の言葉にやや不吉な物を青羽達も感じないではなかったが、流石の弘貴もそこまで馬鹿ではないだろうと自分に言い聞かせる。

その時、アクスが遂に行動を起こした。

「押してダメなら、引いてみる。引くつもりしかして・・・こういう事ッスか？」

そう言うときアクスは徐に鏑迫り合いの状態を維持したまま・・・・ベアーアンデッドの腕を引っ張った。

（（いやそうじゃないって・・・））

それを見た青羽達は同時に額に手を置いた。ギャレンが言っていたヒントは、早い話が前に向かって押すだけでなくあえて後手に回って相手の出方を伺う、若しくは押し合いになったら力を抜いて相手の体勢を崩せと言うモノだった筈である。しかしアクスは何を勘違

いしたのか文字通り“相手を”押さずに引っ張ってしまった。

だが結果としては悪い行動ではなかったかもしれない。何故ならパワーが自慢のアクスに突然引っ張られた事で、ベアーアンデッドはそのままアクスの後ろに投げ飛ばされてしまったからだ。

「弘貴、チャンスだ!!」

投げ飛ばされた際に体勢を崩したベアーアンデッドは隙だらけであった。それを見た瞬間ギャレンの言葉が飛び、アクスは腰のカードケースから2枚のカードを取り出してラウズする。

《Slash Lightning》

「うおおおおおっ!!」

《Lightning Slash》

「いっけえええっ!!」

アクスの必殺技『ライトニング・スラッシュ』が倒れたベアーアンデッドに炸裂。数瞬苦しんだ後、ベアーアンデッドは腰のバックルを開いて動かなくなってしまった。

バックルが開いたベアーアンデッドは即座にアクスが封印。アクスが封印されたカードを見ると、カードにはスピードのマークと数字の4、そして『シェイク・ベアー』という文字が描かれていた。

「ふいふい、何とか封印出来た・・・どうツスカ、兄貴?」

「ん、ま、倒せた訳だし結果オーライかな」

ギャレンはアクスの行動にやや渋い顔をしながら、とりあえずOKを出した。何にしろ彼が押すだけの戦い以外の戦い方を知る事が出

来たのだし、ギャレンとしては結果オーライである。

一先ず戦いを終えてホッと一息つく一同。アクスとギャレンも変身を解除して青羽達の下に近付いていった、その時――

濃厚な殺気がその場の全員を包み込んだ。

「ッ!?!? な、なに?!」

「この感じ・・・まさかっ!?!」

突然の殺気に慌てながら、覚えのある殺気に青羽達も真谷も周囲を見渡す。すると、出し抜けに頭上から降ってくる人影があった。

それに気付いた真谷が上を見上げると、忘れようもない死神の様なライダーの姿が。

「みーつけたぁ・・・また会えて嬉しいわ」

降り立った死神・・・仮面ライダーサイズは、殺気を撒き散らしながらその場の全員を嘗める様に見渡していた。

第61話 メモリ捜しとアンデッド封印（後書き）

と言う訳で第61話でした。

今にして思えば、カード以外で変身するライダーに青羽達が出会ったのは最初にコラボして頂いたエンジェルさんの小説の十兵衛Ⅱクウガ以外では初めての事かもしれません。それ以外だと皆カードを使って変身してた。

次回か次々回辺りでコラボも終了予定となります。サイズも出てきた中でどうなるのか、楽しみにしていただきますい。

あと、亀鳥虎龍さんが執筆されている小説『銀魂ライダーデイケイド』とのコラボにて、そちらにも青羽達が出演しています。亀鳥虎龍さん、ありがとうございます！

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第62話 奪還と決着（前書き）

どうも、黒服です。

今回でユートピアさんとのコラボ小説も終了になります。

第62話 奪還と決着

ダーティ

青羽達は油断なく構えていた。まさかこんな所でサイズに出くわすとは思ってもみなかったのだが、真谷の話でこの街に居る事自体は既に分かっていた。とはいえこんな早くに出てくるとは思っていなかったが。

何にしても目の前にサイズが居るのは変わらない。となると、青羽達のすべき事は一つ、サイズを止める事である。

現状弘貴は若干消耗しており、真谷も変身できないので青羽・ノーマ・戒の3人で迎え撃たねばならないのが厳しいところであるが。

「青羽、変身したら即座にアブゾーバーを使ってください。あれならサイズとも対等以上に戦える筈です」

「オッケー、任せて！」

ノーマの冷静な状況判断で、青羽は即座に変身してジャックフォームになるうとする。しかしサイズの放った言葉で青羽は動きを止められる事になった。

「ちょっと待った。私さっきこんな物拾ったんだあゝ……これ、何だか分かる？」

「ッ!？」

サイズが取り出したのは一つの黒いUSBメモリーのような物だった。青羽はそれに首を傾げていたが、真谷は見間違えようの無いそれに

息を飲む。

「俺のオメガメモリ!? お前が持ってたのか!」

「えっ?! アレがっ!」

真谷の言葉に青羽達が驚く中、サイズは仮面の下で嫌らしい笑みを浮かべながら口を開く。

「私これの使い方全然分からないから、良かったら返してあげようかな」って思うの。でも物事等価値交換が基本よね?」

サイズはそこで一旦言葉を区切ると、衝撃的な言葉を発した。

「あなたが持つてるラウズアブゾーバー、あれと交換でこれを返してあげるわ。嫌ならいいのよ? 断ればこれ壊しちゃうから」

「なっ?!」

さも何でも無い様に口にするサイズに対し、青羽は唇を噛んだ。真谷にとってあのガイアメモリは決して失いたくないモノなのだろう、それは彼の様子を見れば分かる。となればここでサイズの要求を飲まない選択肢は無い。無いのだが……同時にそれは青羽のラウズアブゾーバーをサイズに受け渡す事を意味していた。

（これは父さんが使ってたアブゾーバー、それをあいつに渡すなんて……）

父・信司から受け継いだ形になるアブゾーバーを手放すのは青羽にとってこの上ない抵抗感がある。だが真谷にとってのガイアメモリがどれほど大事なのかも分かる。その二つで青羽は葛藤していた。

「青羽、悩む必要などありません。渡したって必ずサイズがメモリとやらを返す保証は無いのですから、ここは変身して力尽くで取り返すべきです」

しかしノーマはそうではなかった。彼女は真谷のメモリにそこまで深い関心が無かったからか、それとも彼女なりの考えがあったからかとにかく変身して戦うべきと口にする。

メモリを蔑にする様な言い方のノーマに真谷が渋面を作るが、それ以上強く言ったりしないのは彼も青羽の様子から彼女にとってのアブゾーバーの存在の意味に気付いたからだろうか。

「ほらほらどうしたの？ 私あんまり気が長い方じゃないんだけど・・・」

一向に答えを口にしない青羽に業を煮やしたサイズが催促の言葉を口にする。あまり時間をかけ過ぎると痺れを切らして強硬手段に出るかもしれない。そうなる最悪真谷のガイアメモリを破壊してしまう可能性もある。

悩みに悩んだ末、青羽は結論を下す。

「・・・分かったわ、アブゾーバーは渡す。だから朝月さんの持ってたメモリは返して」

「ちよっ、青羽!？」

「桐沢、いいのか?!」

青羽の言葉にサイズは満足そうに頷き、戒と真谷は驚愕の表情を浮かべる。

「正直、あんまり良くはないわ。でも他に手もないし……」

そう言って青羽はアブゾーバーを取り出す。ただし取り出しただけで、そこから先へと進もうとはしなかった。

「交換は同時、一緒に相手に物を投げるって事でどう？ それならフェアでしょ？」

「……他の人達には下がっててもらえる？ 変な行動起こされても困るし」

サイズの言葉に青羽が目配せすると、渋々ながら他のメンツはその場から距離をとる。ただサイズから死角になるところで青羽が軽くウイंकをし、それに対してノーマがほとんど分らないくらい小さく頷いたのに気付く者は誰もいなかった。

「……これでいい？」

「ええいいわ。それじゃ、早速交換と行きましょう」

二人はタイミングを見計らうと、ほぼ同時に手に持っていたガイアメモリとラウズアブゾーバーを相手に投げた。メモリとアブゾーバーは綺麗な放物線を描いて飛んでいき交差する。

その時、出し抜けにノーマが動き出した。

「ッ！」

ノーマは手に持っていた物……コモンブランクを素早く投擲し、サイズに飛んでいく途中のアブゾーバーにぶつけた。その瞬間青羽は自身のアブゾーバーに向かって走り出し、サイズへ向かう方向から外れたそれに手を伸ばす。

「ッ！？　させない！」

「くうううっ！？」

青羽は必死になって手を伸ばすが、位置的にサイズの方が近い為間に合わない。サイズが伸ばした手がアブゾーバーを掴み取ろうとした、その瞬間目の前に飛んで来た別の何かにサイズの目は釘付けになった。

「こ、これはっ！！？」

「取った！」

サイズの目が逸れている隙に、青羽は見事アブゾーバーを掴みとった。一方のメモリの方も、真谷がしっかりキャッチしている。

「残念だけど、やっぱりこれは渡せないわ」

「そう……でもこれは迂闊だったかもね」

勝ち誇って言う青羽に、逆に満足そうな口調で答えるサイズ。青羽が訝しげな顔をしていると、サイズは手に持っていたカードの絵柄を見せてくる。

「これで、私の必要なカードは揃ったわ」

「ッ！？　それ、ノーマの？！」

サイズが手に持っていたのは、以前青羽がノーマに渡したカテゴリーJ『フュージョン・ウルフ』のカードだった。青羽の驚愕の表情に満足したのかサイズはさっさとカードをしまうとラウザーを構える。

「アブゾーバーも私が貰うわ。元より力尽くで貰うつもりだったんだし」

そう言って腰を落とすサイズに青羽は気を取り直してカードを装填したバックルを腰に装着する。見ればノーマに戒、弘貴はおろか真谷も各々ツールを腰に装着していた。

「昨日の借り、返させてもらうぜ」

「利香、ここで止める」

「自分でやった事ですけど、カードは返して貰います」

「2連チャンだけど、やって見るツスよ!」

明らかにやる気満々な面子に、青羽は心底頼もしさを覚える。

「さくで、行くとしますか。変身!」

《Turn up》

「「「変身!」」」

《Turn up》

《Change》

《OMEGA》

ブレイド・カリス・ギャレン・アクス・オメガが一堂に並ぶ。その圧巻とも言える光景を前にしてなお、サイズは余裕そうな態度を崩さない。

「いいわ、全員まとめてかかってきなさい。皆細切れにしてあげるから」

「やれるもんなら・・・やってみなさいよ!」

言うが早いのか、ブレイド・カリス・アクスの3人は一斉にサイズに

向かって駆けていき、ギャレンとオメガは銃撃を浴びせる。二人の銃撃にサイズが足止めされている隙に、接近した3人が同時に得物を振り下ろした。

「ふっ！」

3人の同時攻撃はしかし容易くサイズに受け止められ、逆に近距離からの薙ぎ払いを喰らってしまう。3人が離れた隙についてギャレンとオメガが銃口を向けるが、それより早くサイズが斬り飛ばしたアクスの襟首を掴んで盾にした。

「なっ?! 弘貴!!?」

「どう? お仲間があなた達に撃てる?」

「卑怯な真似しやがって、クソッ!」

悔しげな声を上げるも、二人は大人しく銃を下げた。流石にアクス諸共サイズを撃ち抜くなどと言う真似は彼らにはできない。体勢を立て直したブレイドとカリスもその光景に動きを止めている。

「し、しまった……弘貴が」

「く、くう……」

「さ、もう一度交渉と行こうかしら。今度はこの子とアブゾーバーの交換よ」

アクスを餌にブレイドにアブゾーバーを差し出させようとするサイズ。しかも念の入った事に彼の首にはサイズラウザーの刃が圧しつけられていた。今度は流石に迷う余地がないのかブレイドも素直に左腕からアブゾーバーを外してサイズに差し出そうとする。

一方、サイズに人質に取られているアクスは何とかこの状況から抜

け出そうと頭を働かせていた。

（やべえやべえ！？ どうしよう・・・って、俺もちょっとでも動けば首切られそうだし・・・）

彼が悩んでいる間にもブレイドはアブゾーバーを持って近付いてくる。このままではサイズの手にラウズアブゾーバーが渡ってしまうのは時間の問題である。

そして遂にブレイドがサイズの前に辿り着いた。

「これでいいんでしょう？ 早く弘貴を・・・」

「まあ慌てない慌てない」

満足そうにサイズが呟くと、アクスの首に当てていた刃をブレイドの首に付き付けた。

「アブゾーバーはあなたを始末してから頂戴するとするわ。あなたは厄介だからね」

「くっ！？」

ブレイドは仮面の下で顔を歪めるが、アクスを人質に取られている現状迂闊に抵抗する事も出来ない。後ろの方でカリス達は何やら喚いているが、サイズはそれに構うことなくラウザーを振りかぶる。

「さようなら、仮面ライダーブレイド」

サイズがそう言って振りかぶった刃でブレイドの首を撥ねようとしたその瞬間――

「今だッ!!」

「なっ?! こいつ!!?」

それまでジツとしていたアクスが突然動き出して、ブレイドに振り下ろされようとしていたサイズラウザーをその手で掴んだ。サイズはこの行動に驚き必死にアクスの手を外そうとするが、力自慢のアクスはそう簡単に振りほどけない。

「今ッス姐さん!!」

「っ!!? ハアッ!!」

「ガッ?!」

サイズの意識がアクスに向いた瞬間ブレイドは強烈な蹴りを放ち、さらにオメガが援護射撃をしてサイズをさらに遠ざける。ブレイドの蹴りを受けた瞬間にアクスから手を離していたサイズはそのまま集団から距離を取らされてしまった。

「サンキュー弘貴、助かったわ」

「へ、へへ・・・」

ブレイドはアクスの肩を軽く叩きながらそう言うと、改めてアブゾーバーを腕に装着してサイズに相對した。

「万策尽きたわね。今度こそ決めさせてもらおうわよ」

「俺も付き合うぞ」

アブゾーバーから2枚のカードを取り出したブレイドに、金色のUと書かれたメモリを持ったオメガが並ぶ。

「俺はあいつに借りがある。それに、メモリを取り返して貰ったの

にただ見てるだけなんて情けないにもほどがあるからな」

《ULTIMATE》

「……オツケー、なら派手に行こうじゃないの!!」

オメガの言葉にブレイドは軽く笑みを浮かべると、改めてアブゾーバーに2枚のカードを使用した。同時にオメガもオメガドライバーからオメガメモリを引き抜き、代わりに金色のメモリを装填する。

《Absorb Queen Fusion Jack》

《ULTIMATE》

ブレイドが2枚のカードを使うと、胸部と頭部が金色に輝く3対のマントの様な翼をもったブレイド・ジャックフォームに……

オメガが金色のメモリ・アルティメットメモリを使うと、U字のアンテナを持ちΩ型の肩アーマーと膝まで伸びたマントを持ったオメガアルティメットに変化した。

「殺す……全員殺す!?!」

「殺せるもんなら殺してみなさいよ!!」

殺気を惜しげも無く放つサイズにJブレイドは翼を広げて飛翔し、一気に高速で斬りかかる。一方のオメガUは金色の装飾が入った剣を取り出してサイズに向かっていく。

「アルティメットカリバー! ハアッ!!」

「くっ?!」

Jブレイドの攻撃を受け止めていたサイズは何とかオメガUの攻撃に反応すると、ギリギリのところでそれを回避する。だが次の瞬間

には空中を移動して背後に回ったJブレイドの斬撃が襲ってきた。

「今度は逃がさないからね！」

「ふざけるなッ!!?」

サイズは背後のJブレイドに向かってラウザーを振るうが、風に舞うような動きのJブレイドには容易く避けられる。逆にサイズは無防備な背をオメガUに斬りつけられた。

「があっ?! このおっ!!」

《G r i p》

オメガUに斬りつけられた事で一瞬よろめくサイズだったが、すぐに体勢を整えると振りかえり様に『グリップ・フライキャッチャー』をラウズしてオメガUの頭部を鷲掴みにした。

「甘く見たわね、このままあなたの頭を・・・ッ!？」

オメガUの頭部を握り潰そうとしたサイズは驚愕した。頭部を掴んでいた手が引き剥がされていったのだ、他の誰でもない、オメガU自身によって。

「甘く見たのは・・・お前の方だ!!」

「うあ、がはっ?!」

サイズは腕を掴まれたままオメガUに振り回され、壁に向かって放り投げられてしまう。恐ろしいまでのパワーで投げられた事でサイズもすぐに体勢を整える事は出来ず、壁に体重を預けていた。

「これで、終わらせるわよ」

《Slash Thunder》

「さあ、絶望のカウントダウンを数えろ」

「だ、誰が・・・」

《Slash Dark Wave》

二人は再び並び立つと、Jブレイドは2枚のカードをラウズしオメガUはアルティメットメモリをドライバーから引き抜き右腰のスロットにセットする。

《Lightning Slash》

《OMEGA MAXIMUM DRIVE》

《Darkness Scissors》

「いけええええっ!!」

「アルティメットセイバー! はあああああっ!!」

「あああああああああっ!？」

Jブレイドの『ライトニング・スラッシュ』とオメガUの『アルティメットセイバー』が、サイズの『ダークネス・シザース』とぶつかり合う。一瞬二人の技とサイズの技が拮抗したが、次の瞬間にはサイズの技が破られJブレイドとオメガUの技がサイズを捉えた。

「あああああああああああああああっ?!」

サイズはラウザーごと二人の必殺技を喰らいその場で絶叫を上げる。だが完全に倒すまでには至らなかったのか、よろけながらもその場から逃げようとしていた。『ダークネス・シザース』つぶつかり合った事でギリギリのところまで持ち堪えられたのだろうか。

「逃がさない!」

即座にＪブレイドが飛びかかろうとするが、サイズは半壊したラウザーに『スモッグ・スキッド』をラウズして煙幕を張りその場から逃げていってしまった。

まんまと逃げられた事にＪブレイドは肩を落とすが、気を取り直して変身を解除すると同じく変身を解除した真谷に近付いていた。

「ありがとう、一緒に戦ってくれたおかげでサイズにも勝てたわ」

「それはお互い様だ、お前のおかげでメモリを取り返す事が出来た」

そう言うとき真谷は青羽に手を差し出してくる。握手を求めているそれに青羽も笑みを浮かべると、彼の手を握り固い握手を交わした。

と同時に、その場に灰色のオーロラが現れた。相変わらず突然の出現に一瞬驚く一同だが、青羽はすぐに肩から力を抜く。

「お別れみたいね、これを通ればきっと元の世界に戻れるわ」

「そうなのか？」

「多分ね」

青羽の頷きに真谷はオーロラを見据えると、真っ直ぐそちらに向かって歩いていく。だがオーロラの直前で足を止めると、振り返って青羽達に声をかけた。

「最後にもう一度礼を言うぞ、ありがとう」

「こっちこそ、朝「真谷だ、青羽」・・・ありがとう真谷！ またね！！」

真谷の言葉に青羽が満面の笑みで手を振ると、真谷も軽く笑みを浮かべながら手を振り、改めてオーロラの中へと消えていった。それ

と同時に灰色のオーロラも色を失っていき、完全に消えた時辺りには静けさが戻っていた。

「行っちゃった・・・」

「そうですね」

「・・・あっ！　そう言えばノーマ、真谷と仲直り出来た？」

不意に青羽は真谷とノーマの仲が微妙に悪かった事を思いだした。何気に二人の中が少々陰悪だった事を懸念していたのだ。

だが当のノーマはそんな事何処吹く風と言った具合で青羽に返す。

「別にそこまで気にするほどではありませんよ。青羽が思っているよりは、幾分かマシになってましたよ」

「そう？」

青羽はノーマと真谷が未だに仲が悪いままだと思っているが、実際のところ彼が元の世界に変える直前の時点ではそこまで陰悪な物でもなくなっていたりする。お互い何処となく素っ気無い態度を取っていたりするが、あれも一種のコミュニケーションだ。察しの良い真谷はノーマの人となりを理解した瞬間、反応が素っ気無くとも彼女が心の底では多少なりとも相手の事を考えていると理解していた。ノーマも同様だ。

「それより、今はサイズの方が先決です。アレだけのダメージを受けて遠くへ行く事は不可能でしょう、今が好機のはず」

「姐さんのカードも取り返さないといけませんしね」

頭を切り替えたノーマは話題をサイズの方に向け、その場から離れていく。弘貴と青羽もそれに続き、戒もその場を去ろうとした時、

不意にサイズが居た所に何かが落ちているのに気付いた。

「？ あれは・・・ッ!？」

戒が落ちている物に近付くと、それは1枚のラウズカードだった。もしやノーマのカードを落としたのかと期待して拾い上げ、次の瞬間驚愕に目を見開く。何しろそれは予想外にも程があるカードだったのだから。

「これは・・・ダイヤの……」

彼が拾い上げた物、それは見紛う事なきダイヤスートのカテゴリー
Q 『アブゾーブ・サーペント』だったのだ。

第62話 奪還と決着（後書き）

と言う訳で第62話でした。

青羽はギリギリのところであブゾーバーを守りましたが、代わりにノーマのカテゴリJがサイズの手に渡ってしまいました。彼女があのだイミングでカテゴリJを投げつけたのには理由があるので、そこは次回にと言う事で。

今回でコラボ小説も終了となります、ユートピアさん、ありがとうございました。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第63話 強奪・見えてきた希望の光（前書き）

どうも、黒服です。

今回、ある意味恐れていた事態が現実になってしまいます。サイズの手にあるが・・・

第63話 強奪・見えてきた希望の光

ダーティ・高架下

日も落ちかけた頃、ダーティの街の外れ近くにある高架下に数人の人影があった。ただし立っているのは一人だけで、後の数人は全員地面に倒れ伏している。

「さて、どうしたものかしらね・・・」

物憂げにそう言うのは、大鎌を持った黒紫の仮面ライダー。死神を思わせるそのライダーは、今しがたここに集まって来たライダー達を始末したばかりの仮面ライダーサイズである。そのサイズの視線の先には、壁に礫にされたアンデッドの姿があった。

「折角餌を用意したのに、来るのはどいつもこいつも雑魚ばかり・・・あの子たちも全然来ないし」

サイズはアンデッドを半殺しの状態で封印せず、このアンデッドを狙ってやってくるであろうライダーを仕留めていたのだ。目的は勿論青羽達で、彼女がやってきたら隙を突いてアブゾーバーを奪うつもりでいた。しかし肝心の青羽達が来ず、特に狙ってもいないダガー達ばかりがやってくるのだ。

「もういいや、別の手を考えよう」

そう言うサイズは徐にコモンブランクを投げ、アンデッドを封印。封印したカードは手元に戻ってくるが、特に捜している訳でもなかったカードークラブの6・『ファイア・フライ』一だったので、

興味なさそうにその場に捨てる。

そこに、新たなライダーが現れた。

「こ、これ……ッ!？」

「ん？」

驚愕の声にサイズが振り向くと、そこには彼女が知る仮面ライダーブレイドに非常に良く似た赤いブレイドの姿があった。

「あら、何処かで会った事のある顔ね」

「あんたは……あっ！ あの時の!？」

サイズの姿に最初は訝しげな目を向けていた赤いブレイド……Cブレイドだったが、大鎌と言う特徴的な武器を使うライダーという事ですぐに思いだした。以前彼女がある人物と行動を共にしていた時に出会った上級アンデッドが連れていたライダーだ。

「これは、あんたがやったの？」

「ええ、そうよ」

「あのアンデッドの命令？」

「ん……？ あんなの知らないわ」

臨戦態勢をとるCブレイドに対して、サイズは自然体で受け答える。そんな彼女の目に、Cブレイドが腕に付けている物が目に入った。

「それは……フフッ、あなたも持ってたんだ」

サイズはCブレイドの腕に装着されたラウズアブゾーバーを見てほ

くそ笑んだ。狙っていた物とは違うがそんな事は関係ない。最大の目標はラウズアブゾーバーなのだ。

対するCブレイドは相手の視線から彼女がアブゾーバーを狙っている事に気付く。

「人の物を狙うなんて、随分と横着な考えね」

「あら、合理的な考えよ。自分が持っていない物は、他人から奪えばいいの。それが一番手っ取り早いからね」

「人の物を横取りしようとする時点で、あんたの程度も知れるってもんよ」

「何とでも。とにかくあなたが持つてるアブゾーバーは・・・」

サイズは構えたラウザーを大きく振りかぶる。Cブレイドも何時でも迎撃できるように構え、両者が一瞬膠着した後――

「私が貰う!!」

「させるか!!」

同時に駆けだして、己の得物を振り下ろした。

先制したのはサイズの方だ。武器の長さが圧倒的に勝っているのだからそこは当然である。

「くっ!？」

Cブレイドはサイズのラウザーを受け止めるが、相手のパワーもなかなかの物で押し返す事が出来ない。しかし長物の弱点は至近距離での戦いである事を理解していた彼女は、そこままだ距離を詰めて勝負に出ようとする。

しかし、その弱点はサイズ自身理解していた。そして彼女は、何を思ったのかラウザーを思いっきり自分の方に向かって引っ張った。

「ガッ?!」

突如背中に走る痛みにも、Cブレイドも思わず体勢を崩してしまう。倒れたCブレイドの背には、真新しい大きな斬撃の跡が付いていた。

「ウッフ、読みが甘かったわね」

サイズの言葉にCブレイドは仮面の下で悔しそうに顔を顰める。サイズラウザーは巨大な鎌、例えば柄の部分で受け止めたとしてもその刃は依然として自分の方を向いているのだ。同じ長物でも槍とはまるで違う。

しかしCブレイドもさる者で、すぐに体勢を立て直すと咄嗟にスピードの6をラウズした。

《Fire》

「ハッ!」

ラウザーから突如放たれる炎に、サイズは思わず顔を腕で守ってしまう。その瞬間Cブレイドは一気に接近すると、スピードの2をラウズしたラウザーで斬りかかった。

《Slash》

「フッ!」

「グッ?!」

流石のサイズも反応しきる事は出来ず、胸部に一撃貫ってしまった。勿論これで勝負が決まるなどと言う事はあり得ないのだが、ともあれこれでお互い相手に一撃加えた事になる。

「あんた、卑怯な事する割にはなかなかやるじゃない」

「あなたもなかなかよ。でも、これはどうかしら！」

サイズはそう言って1枚のカードを取り出してラウズしようとする。それにCブレイドは背筋に悪寒が走り、咄嗟にオープントレイから1枚のカードを取り出してラウズした。

「くっ!？」

《Mach》

《Capture》

一瞬早くCブレイドの方がラウズし、高速でその場を退避する。その直後、彼女が居た場所を無数の蜘蛛の糸が絡め取っていた。

「ふーん、良い勘してるわね」

サイズは感情を殺した声でそう言うが、内心で激しく舌打ちしていた。彼女に対してこのカードを使うのは初めての筈、なのにCブレイドは本能的にそのカードの危険性を察知して絶妙なタイミングで『キャプチャー・アラクネ』の拘束から逃れてしまう。ここで無駄に手札を見せてしまった事は大きなマイナスであった。

一方Cブレイドも内心で冷や汗を流していた。まさかこちらを拘束するカードを持っているとは思わなかったのだ。今のは良く反応で来たものだと自分で自分を褒めたくなる。

「厄介なカードを持ってるのね。でもそのカード、動いてる相手には効果ないでしょ？」

そして今の一瞬で、Cブレイドは相手のカードの弱点を見抜いた。

『キャプチャー・アラクネ』は相手を捕縛するカードだが、その効果は発動した瞬間相手が立っていた場所に限定される。つまり、動いている相手だと捉えきる事が出来ないのだ。

とはいえ物はアンデッドの力を封印したラウズカード、多少動き回る程度であれば逃れる事は出来よう筈もない。だが流石に『マツハ・ジャガー』程の高速移動ともなれば捉えるのは至難の技と言えるだろう。

「そう言う訳だから、悪いけどここからは一方的にやらせてもらうわ」

《Absorb Queen Fusion Jack》
「くっ!？」

弱点さえ分かれば厄介なカードであつても攻略は可能だ。Cブレイドはジャックフォームになり、絶えず高速で動き回ってサイズを攻撃する。常時『マツハ・ジャガー』を使用している時と同等の速度で行動可能なJCブレイドは、反撃の隙を与えずサイズを攻撃していく。

「うあっ!？　ぐう、がっ?!」

攻撃力の弱いJCブレイドの攻撃でも、一方的に何度も受ければ大きなダメージになる。サイズの装甲は次第にボロボロになっていた。

「さくで、こいつでトドメよ！」

《Slash Rapid Mach》

「うぐ・・・くっ!? (まずい、このままじゃ……そうだ!)」

一気に決めようとコンボを発動するJCブレイドに、サイズは必死にこの状況を打開する策を考える。そして彼女の目に、ある物が飛び込んできた。

(アレを使えば・・・)

《Machinegun Slash》

「ハアアアアッ!!」

サイズがそれに手を伸ばしたと同時に、JCブレイドの必殺技『マシンガン・スラッシュ』が発動する。『マシンガン・スラッシュ』・・・以前発動した『マシンガン・ブラスト』の斬撃バージョンである。これが決まれば如何にサイズと言えども一溜まりもあるまい。

そう・・・サイズに決まっていれば。

「なあっ?!」

「ふ、ふふふ・・・」

JCブレイドの斬撃が届く直前、サイズは近くの倒れていたライダーの死体を自分と相手の間に構えて盾にしたのだ。まさか死体を盾にするとは思ってもいなかったJCブレイドは、死体を斬りつけてしまったと言う事も含めて一瞬動きを止めてしまう。そしてそれはサイズの思い描いた通りの状況であった。

《Capture》

「あ、しまっ!？」

反応した時には既に遅く、JCブレイドは無数の蜘蛛の糸で絡め取られて身動きできなくなってしまった。

「くっ！ この、放しなさいよ!？」

「ふふふ、残念だったのはあなたの方ね」

サイズは肩で息をしながら勝ち誇ったように言うと、JCブレイドの左腕に手を伸ばして装着されているラウズアブゾーバーを取り外してしまう。

「こいつ、返せ！ それはあたしのよ!」

「残念、これはもう私の物・・・あなたにはコレをあげるわ!！」
《Dark》

アブゾーバーが外されたJCブレイドは、元のCブレイドに戻ってしまう。そして未だ身動きが出来ないCブレイドに対し、『ダーク・クロウ』による闇を喰らわせた。

「うぐ、ああああああああああっ?!」

「ふふ、じゃあね・・・」

悲痛な叫びをあげるCブレイドをそこに残し、サイズはその場から離れていく。本当であればトドメを刺してしまいたかったのだが、先程のダメージが思いの外酷い為そこまでする余裕がない。仕方なくサイズはトドメを刺さずにその場を後にしていった。

「ふふふ、これで私も・・・」

そう言って笑みを浮かべたサイズは、手の中にあるアブゾーバーを

うつとりした様な目で見つめていた。

翌日

異世界からの訪問者、仮面ライダーオメガこと朝月 真谷との邂逅と、その後やって来た通算3人目のディケイドである神地 剣護の一行との出会いを経てから早数日……

「……ねえノーマ、これって……」

「十中八九、サイズの仕業でしょうね。随分と派手に暴れているよ
うで」

青羽は宿の部屋で新聞の一面に書かれた記事に顔を顰めていた。そこには『複数の仮面ライダー惨殺される！？ 新手のアンデッドの仕業か？』といった見出しと、街の外れにある高架下の写真があった。

青羽達は未だこの街に留まり、サイズとの決着を付けようとしていた。最近の戦いでは青羽達はサイズに勝ち続けている。流れは確実に青羽達に傾いている、このまま一気にサイズとの因縁にケリを付けてしまおうと考えていたのだ。

しかし、ここで問題が一つ……

「でも、倒すだけじゃ多分駄目だ。利香をカテゴリーAから解放しない」と

そう、今まで何度もサイズには大ダメージを与えてこれた。だがそれでもなお、操られている音無 利香の心が表に現れる事はなかった

ただ。それはつまり、ただ単に倒すだけでは最悪利香を殺すだけの結果にしかないと言う事である。

「でも解放って言ったって、前例がないんスよね？ 一体どうするんスか？」

「そこよね問題は・・・」

弘貴の放った言葉に、青羽は新聞をテーブルの上に置いて人差し指でこめかみを押さえる。何だかんだで今までサイズとの戦いは一方的になる事が多く、サイズを退ける事の方に目が行ってしまっていた為どうやって利香の心を解放するかが考え付いていないのだ。事が事だけに前例もなく、ノーマも戒もまともな対処法を見いだせずにいる。

「あゝあ、こう言う時思うのよねえ。タイムマシンみたいなのがあったらな〜って。そうすればいっその事、戒がカテゴリーAを封印する前まで戻って何とかできるかもしれないのに」

「そんな夢物語を言ってる暇があるなら、何か良い案でもか・・・かんが・・・え・・・」

青羽が目の前に突き出された難問に若干現実逃避するかのような言葉を紡ぎ、呆れたノーマがそれに対して苦言を呈そうかとしたその時、ノーマの脳裏に稲妻の様な閃きが走った。一方の青羽達は突然言葉を途切れさせて黙りこんだ彼女に何事かとそちらに目を向ける。

「ノーマ？ 急に黙ってどうかしたの？」

「姐さ〜ん？」

戒と弘貴が試しに彼女の目の前で手を振るが、ノーマは小声で何かをブツブツ呟きながら考え事に没頭しているらしくまるで反応を示

さない。これはもう何を言っても駄目だろうと戒が肩を竦めてその場を離れた直後、徐にノーマが口を開く。

「青羽……」

「ん？ なに、ノーマ？」

「……貴女天才です」

「は？ 天才？ どゆこと？」

いきなり天才と言われても何の事だか分からない青羽は困惑した表情をするばかり。だがノーマはそんな青羽を一顧だにせず次々と言葉を紡いでいく。その様子はまるで分からない問題が解けて少し興奮しているようにも見えた。

「青羽ですよ、天才です。何故この事を考え付かなかったんでしよう、こうすれば全て丸く収まります」

「ちょっと待ってくれノーマ！ 一人で納得しないで、どういう事なのか僕らにも説明してくれ」

流石にこのまま放置していても何が何だか分からない。戒は意を決してノーマに説明を求めてみると、彼女は漸く落ち着きを取り戻して詳しく離し始める。

「要はカテゴリーAと利香さんの関係を、サイズが生まれる前に戻せばいい訳です」

「だからそれってどういう事よ？」

「鍵は一つ、青羽が持っている『リモート』のカードです」

ノーマが青羽の腰に付いているカードケースを指差しながら答えた。それに視線を自身のカードケースに向けた青羽は、複数のカードの中からクラブの10『リモート・タイプ』のカードを取り出す。

『リモート・タイプA』は、カードに封印されたアンデッドを解放し意のままに操る事が出来るカードである。使い方によってはかなり強力なカードであり、相手がカードを使おうとするタイミングで使えばそのカードに封印されているアンデッドを自分の手駒として扱う事が出来るので、形勢逆転を狙う時などに使うと非常に効果的となっていた。

しかしながら扱いを間違えると危険な上ライダー同士の勝負の場においては数の差などで公平さが失われてしまうので、仮面ライダー同士の公式試合では使用が禁止されていたりする。

そんな訳でいろいろと扱いが難しいカードである『リモート・タイプA』であるが、当の持ち主である青羽はこのカードの存在を最近半ば忘れてしまっていた。嘗てノーマとの戦いに敗れた後ライダーに変身しての鍛錬をしなくなってからは使う必要が無くなったので、今ノーマに言われるまでほとんどお守り状態だったのだ。

「このカードが、どうかしたの？」

「いいですか、今のサイズはカードに封印されたカテゴリーAがライダーシステムと言う名のロープで利香さんと繋がっている状態です」

ノーマは難しそうな顔をしている面々に、紙に簡単な模式図を書いて説明する。

「人間がアンデッドに干渉するにはカードにしてライダーシステムを介する他にありません。通常この人間とアンデッドの関係は不可逆でアンデッド側から能動的に人間に干渉が行われる事はありません」

早い話が、人間が働きかけてアンデッドの力を使役する事は出来ても、アンデッドが働きかけて人間に何かしらの影響を与える事はあり得ないと言う事である。勿論装着者の心の状態でスペックが大きく変動す様な事はあるが、あれはどちらかと言うとアンデッドからの干渉と言うよりはライダーシステムからの干渉であろう。

しかしそれは青羽達とて理解している。約1名ほど理解できていないだろう者が居るが・・・

「でも確かサイズのライダーシステムって・・・」

「そう、サイズのライダーシステムはリミッターを外してその不可逆性を廃しています。それが原因で利香さんが操られる事になったのです」

「それは前に寧々さんから聞いたから分かるよ。でも、だからどうすればいいんだい？」

長い前置きに戒が若干苛立ちを含ませた声をあげる。それを聞いたノーマは彼を諭す様にしながら結論を口にした。

「つまり、人間とライダーシステムとアンデッドを封印したカード、この3つの繋がりが今の状態を引き起こしている訳です。ならば逆にそのどれか一つを断ち切ってしまえば、利香さんを解放する事が出来るかもしれないと言う事です。そして、『リモート』のカードでカテゴリーAを完全に開放してしまえば・・・」

「ッ！？ カテゴリーAから利香を解放できる!!」

「そっか、その手が・・・」

ようやく見えてきた希望に、青羽達は歓声を上げる。しかし、そんな場に水を差す人物が一人・・・

「ん、何か良く分かんないッスけど、本当に上手く行くんスカ？」

弘貴は甚だ疑問だと言いたげに首を傾げながらノーマに訊ねた。確かに確証はない、だが同時に他にいい考えがないのもまた事実である。ならば、可能性が少しでもあるならそれに賭けるしかない。

そうと決まれば話は早い。青羽は勢い良くその場に立ち上がり、その手を力強く握りしめた。

「何事もやってみなきゃ分からないわ。今は何を考えても駄目で元々、ならやるっきゃないっしょ！」

「青羽の言う通りです。それに、決して可能性は低くはないと思います」

「姐さん方がそこまで言うなら、俺も頑張るッス！」

漸く見えて来た一筋の希望の光、恋人である利香を救いだせる可能性に行きついた戒は、思いを新たに拳に力を込めたのだった。

「利香……待っててくれ」

第63話 強奪・見えてきた希望の光（後書き）

と言う訳で第63話でした。

とうとうサイズがアブゾーバーを手に入れてしまいました。紅羽もなかなか善戦しましたが、こう言う卑劣な手段と言う頭脳プレーはサイズの方が一枚上手です。

一方で、青羽達はようやく利香をカテゴリーAから解放する方法を見つけました。話の中では封印されたアンデッドと人間の関係は不可逆なんて言ってますが、原作だと虎太郎がクラブのカテゴリーAに引かれたりしてますから、必ずしもそうとは限らないんですね（^^;）。でも何でスパイダーアンデッドだけがあんな芸当出来たんでしょう？ 同じカテゴリーAのビートルやスタッグは大人しかったのに・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第64話 対決直前（前書き）

どうも、黒服です。

いよいよサイズとの対決が迫ってまいりました。今回は対決の前の最後の準備と言ったところです。

第64話 対決直前

ダーティ・街中

サイズから、いやカテゴリーAから利香を解放する指針が決まった青羽達は、早速街中に出て男女に分かれて捜し回っていた。連絡はこまめに取り合っているもので、どちらかに何かがあれば即座に片方に異常が伝わる様になっている。

「サイズ、まだこの街に居るかな？」

街中を歩きまわっている最中、不意に青羽がノーマに話しかけた。その声には若干の不安も感じ取る事が出来る。サイズと戦うことへの不安と言うよりは、言葉通りこの街にサイズが留まっているかどうかへの不安だろう。

「難しいですね。ライダー達が襲われたのは街の外れでした、と言う事は街から出ようとしたサイズと運悪く鉢合わせしてしまったと考えるのが最も普通です」

「でもさ、やられた人の数って一つのパーティーにしちゃ多過ぎない？」

青羽の言う通り、昨夜犠牲になったと思われるライダーの数は10人近くであった。通常仮面ライダーが複数人でパーティーを組む場合、その人数は多くても精々6人程度。犠牲者の数から考えると少なくとも2組のパーティーが犠牲になった事になる。

ここで疑問なのは、果たして2組のパーティーがそう都合よく同じ場所に集まるであろうかと言う事だ。何かしら競っている事があれ

ばそう言う事があってもいいかもしれないが、ノーマはこれが単なる偶然にはとてもではないが思えなかった。

「……考えても仕方ありません。今は出来る限り情報収集をしましょう」

ノーマの答えに、青羽は何処かしっくりこない物を感じつつもとりあえず頷いて搜索を再開しようとする。

その時、不意に彼女の携帯が鳴りだした。携帯を開くとかけてきているのは戒の様だが、彼女はこの着信に眉をひそめる。時計を見てみれば先程定時連絡をしてからまだそう時間は経っていない。

と言う事はつまり、彼らの方で何かトラブルがあったと言う事だ。

青羽は言い様の無い不安を感じながら通話ボタンを押した。

「もしもし、どうかしたの？」

『青羽、大変だ！ 君の双子の姉妹、紅羽だっけ？ 彼女が道端で倒れてた、それもボロボロの状態で！』

「えっ！？ 紅羽が！！？」

戒の話によると、紅羽は既に街の病院に搬送されらしい。青羽はそれを聞くとノーマに事情を話して一目散に病院へと向かった。た。

病院

青羽とノーマが病院に付くと、入口の所に戒と弘貴が待っていた。青羽は二人を見つけると戒に掴みかかって捲し立てる様に紅羽につ

いて訊ねる。

「ねえ戒、紅羽は？ 怪我は酷いの？ 今どうしてる？」

「落ち着いて青羽、そんな一遍に聞かれてもすぐには答えられないよ」

血相を変える青羽をノーマと弘貴が抑え、戒の言葉で漸く冷静さを取り戻す。彼女が落ち着いた頃を見計らって、戒は紅羽の現状について説明を始めた。

「とりあえず命に別状はないって。大分消耗してはいたみたいだけど、今はもう意識も取り戻してるから大丈夫だよ」

戒がそう言うのと、青羽は心底安心したのかへたり込んだりはしなかったものの全身から力が抜けてしまう。

そして青羽が落ち着くと、戒は彼女とノーマを紅羽の病室へと案内していった。

病室に着くと、そこにはベッドに腰掛けた紅羽の姿がある。あの紅羽が病院に運ばれたと言うほどだったのでどれほどの怪我かと思っていた青羽だが、実際に見てみるとそこまで酷いと言うほどのものでもない。少なくともこうして服を着た彼女を見ている限りでは怪我をしたようには見えなかった。

「紅羽、大丈夫？」

「ん？ ああ、青羽・・・別にこれ位どうってことないわよ」

「起きてても大丈夫なのですか？」

「入院するほどじゃないわ。医者も今日中に退院して良いって言うてたし」

紅羽は何でも無いと言いたげにそう言うが、隠しきれないダメージが表情に若干表れている。表に出ていないだけでやはり彼女が受けたダメージは決して少ないモノではないのだ。

「何があつたの？」

青羽が紅羽に訊ねると、彼女はあからさまに言いづらそうに眉間に皺を寄せて視線を反らせた。プライドの高い彼女にとって、自身の黒星を晒すことは遠慮したいことなのだろう。だが真っ直ぐ向けられる青羽からの視線に耐えきれなくなったのか、軽く溜息を吐くと観念したようにここに至るまでの経緯を話した。

「・・・昨日、協会でアンデッドの反応があつた場所に行ったのよ。街外れの高架下に・・・」

「えっ！？ 君、あそこ行つてたの？」

高架下と言えば、新聞にも載っていた複数のライダーが殺害されていた場所である。まさか彼女があそこに行っていると思っていなかった青羽達は驚愕の目を向けた。

全員からの視線を受けるも、紅羽はそれを務めて気にしない様にして話を続ける。

「あたしが行つた時は、もう何人も仮面ライダーがやられた後だったわ。でもそこに一人だけ無傷で立ってる奴が居たのよ。覚えてる？ 前にあずさが変身するディケイドとかが来た時に出た、サイズって仮面ライダー」

「ッ！？ やっぱり・・・知ってるも何も、あたし達もサイズとは因縁があるわ」

これで確信が出来た。新聞に乗っていた事件の犯人はやはりサイズだったのだ。しかも紅羽の話から察するに、サイズは何らかの方法で他のライダーを誘いだしていた。

紅羽が到着した時点でサイズは囷にしていたアンデッドを封印してしまったので、その方法を彼女達が知る術はもはや存在しないのだが……

さらに青羽達が紅羽に詳しく話を聞こうとした時、彼女はそれまでとは打って変わって暗い雰囲気醸し出した。その様子は何処か悔しさを押し殺そうとしているようにも見える。

「……………あたし、負けたわ」

「えっ？」

しばらくして漸くポツリと呟いた紅羽、彼女のその言葉に青羽達が反応すると、彼女は額に手を当てながら言葉を紡いでいった。

「あいつ、近くに倒れてたライダーを盾にしたのよ。あたしがそれに驚いて一瞬動きを止めた隙に、サイズが持ってたカードで身動き封じられて……………アブゾーバー取られちゃった」

「あ、アブゾーバーを取られたんですか!？」

紅羽がアブゾーバーを持っていたのは、以前ルークスで共闘した時に装着していたのをチラツと見ていたので知っていた。だがまさかそれを、しかも紅羽ほどの実力の持ち主が奪われてしまっていたとは…………

「……あの、こんな事言える立場かどうか分かんないツスけど、

あまり気にしない方が良いツスよ？ まさか、死体を盾にするなんて……」

「弘貴の言う通りです。並みの感性を持っている人物なら、そんな事をするとは普通考え付きません。ある意味、今回の事は……」

やや落ち込んだ様子の紅羽を慰める様に言う弘貴とノーマ。彼女もそこは理解しているのか渋面を作りながらもそれに頷く。

「言われなくても分かっているわよ。ただあんな手を平気で使うあいつがイラつくだけ」

そう言うのと紅羽は大きく溜息を吐いて、前髪を軽く掻き上げた。その様子からはもう落ち込んだ様子も見られないので、とりあえずは大丈夫だろう。

だがそれで安心してはいられない。何しろサイズがアブゾーバーを手にしてしまったのである。と言う事は、上級カテゴリーを2枚揃えているサイズもジャックフォームになれると言う事。青羽が持っていた、ジャックフォームによるスペック上の優位が無くなってしまったのである。

「ねえ紅羽、あんたもジャックフォームなれんの？」

「当たり前でしょ。“あんたも”って事は、あんたも？」

「うん、まあね。それで、前にウルフのカテゴリーJ持ってるって言ったわよね？ それ使ったジャックフォームってどんな感じなの？」

ノーマが持っていたカテゴリーJはウルフアンデッドを封印したものだ。対して青羽が持っているカテゴリーJはイーグルアンデッドを封印したもの。ジャックフォームは使用したカテゴリーJの

タイプによってその特性が大きく異なる為、これに関しては聞いておかねばならない事であった。

「あたしのジャックフォームは一言で言えば高速移動タイプね。パワーと装甲はないけどとにかくスピードで勝負するのに向いてるわ」「スピードってどれくらい？」

「最大で『マッハ・ジャガー』を使ってる時と同じくらいよ」

ジャックフォームは基本、青羽になる高機動タイプの“飛行型”と今紅羽が言った“高速型”、そしてこれらとは別に高速型と真逆の特徴を持つ“重量型”がある。無論これが全てとは必ずしも言い切れないが、現状ではこの3つが確認されている。その中でも高速型は紅羽が言った通りスピードで勝負する事を念頭に置いているのでパワーと装甲は弱く、どちらかと言うとクセのあるフォームであると言えた。

しかしそうなる少し面倒だ。相手が重量タイプであれば青羽のジャックフォームでもヒット&アウェイで十分に対抗できるだろうが、陸上を高速で移動する相手だとそれも上手くいきそうにない。青羽のジャックフォームは飽く迄“高機動戦”を得意としているのである。 “高速戦闘”までは対応していない。

おまけに紅羽のジャックフォームはやろうと思えば常時『マッハ・ジャガー』を使用した状態で移動できる。とてもではないが青羽のジャックフォームでは追いつけない。

「一応青羽も『マッハ』のカードは持ってるんだよね？」

「持ってるけど、あれは制限時間あるのよ。時間が切れればこっちが不利になるわ」

考えれば考えるだけ状況の厳しさが浮き彫りになっていく。つい先程まで何とかなるかもしれないと思っていただけに、青羽達を感じている落胆は相当なものだ。それを肌で感じ取ったからか、紅羽が彼女達に頭を下げる。

「ゴメン、何かあたしがミスした所为で・・・」

「貴女は気にする必要ありませんよ。ま、サイズ相手にそう上手く事が運ぶとは、正直な話思っていますでしたし」

「それもそうね。とりあえずやるだけやってみよっか！」

そう言うとき青羽達は病室から出ていく。それを見て紅羽も後に続くようにするのだが・・・

「待って、あたしも、いっっ?！」

「ああっ!?! 無理しちゃ駄目よ、あんたまだサイズにやられたダメージが残ってるんでしょ」

「ここは私達に任せてください。貴女のアブゾーバーも必ず取り返して見せますから」

紅羽はノーマの言葉を受けつつ、青羽によってベッドに座らされた。彼女はそれに不甲斐なさを感じていたが、今の自分が行っても足手まといにしかならない事は彼女自身が理解しているので何も言えない。

だがこのまま何もしないでいるのも紅羽のプライドが許さない、せめてもの選別にと彼女は青羽にアドバイスする事にした。

「青羽、一つだけ言っておくわ。サイズとの戦いではとにかく動き回って」

「えっ?」

「サイズは相手を拘束するカードを持つてるわ。でもそれは発動の瞬間相手が居た場所に限定されるの。だからとりあえず引っ切り無しに動き回れば捕まる事はないから。『マツハ・ジャガー』なら確実に捕まらないわ、覚えておきなさいよ」

「紅羽……分かった！」

青羽は紅羽のアドバイスに表情を引き締めて頷くと、改めて病室から出ていく。

「いい、アレに捕まったら一巻の終わりよ。生半可なパワーじゃ抜け出せないから、サイズがカードを使おうとしたらそれが来ると思っって行動しなさい！」

「分かったわ紅羽、ありがとう。行ってくる！！」

再度紅羽から掛けられた言葉に、青羽は力強く頷くと軽く手を振りながらその場を立ち去っていく。

そして全員が病室を出ていくと、一人取り残された紅羽は自身の持つカテゴリAのカードを取り出してそっと己の額を当て祈る様に目を瞑るのだった。

第64話 対決直前（後書き）

と言う訳で第64話でした。

現状この世界で確認されているジャックフォームは全部で3種類です。空を飛ぶ高機動型と素早く走りまわる高速移動型、そして高速移動型と真逆の能力の重量型です。重量型の下になるアンデッドは、言うまでもありませんがエレファントアンデッドみたいな重くて力のあるアンデッドですね。

敗北は必ずしも悪いことばかりではありません。今回の紅羽のアドバイスみたいに、負けたからこそ見える“穴”みたいなものもありますし。

次回は遂にサイズとの対決、果たしてどのような戦いになるのか・
・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第65話 死神との決着（前編）（前書き）

どうも、黒服です。

今回は遂に長く続いたサイズとの戦いに決着が付きます。まずはその前編です。

第65話 死神との決着（前編）

ダーティ・街中

青羽達はサイズと決着を付けるべく、病院を飛び出していった。

サイズは今現在何処に居るのか分かっていない。なので少々危険だが二人ずつに分かれてサイズを搜索し、見つけたら連絡をしてどちらかがそちらへ向かう・・・という手筈になる予定だった。

「あ、あれ……………ッ!？」

街中に繰り出して、さあ二手に分かれようと言う時、青羽達の前に利香が現れたのだ。一瞬だったが確かに彼女の姿が見えた。

利香は一瞬だけ姿を見せると、角の向こうに姿を消してしまう。青羽達が離れまいと追いかけると、また別の角を曲がっていく。

（罨……………ですか？）

利香の行動にノーマは直感的にそう思った。おそらく彼女の目的は邪魔が入らないところに青羽達を誘導して、不意打ちか何かで一網打尽にしようと言うのだろう。

他の面子もその事に気付き始めたが、彼女達にとってそれは望むところであった。青羽達もサイズとは決着を付けようと思っていたし、邪魔が入らないⅡ周囲に人の居ない所に移動してくれるのであれば願ったり叶ったりである。

そうしていると次第に周囲に人氣が無くなって行き、遂には郊外に出てしまった。郊外と言っても周囲には倉庫などの建物がちらほらとある。そして青羽達がそこに出ると同時に忽然と姿を消す利香。

「これは・・・」

「うん、来るね」

何となくだが周囲の雰囲気の変化からそんな事を察する青羽達。バックルを片手に周囲を警戒して、いざ変身しようとしたその時・・・

《Capture》

「ッ!? ヤバッ!」

「くっ!?!」

突然カードをラウズする電子音が周囲に響き、青羽は全身に鳥肌が立つのを感じてその場から前に飛び出す。一方他の3人もその音には気付いていたが、弘貴は反応が遅れノーマは咄嗟に戒を突き飛ばした結果、二人は突然周囲から伸びて来た蜘蛛の糸に絡め捕られてしまった。

「どわあああ、何すかコレ?!」

「迂闊でした、これは・・・ッ!?!」

身動きが取れない状況に慌てる弘貴と、必死に引きちぎろうとするノーマ。だが彼女がいくら力を込めても、糸は切れるどころかさらに絡まってくる。まさに蜘蛛の糸であった。

「ノーマ待ってて、今「青羽ッ!」何よ、今・・・」

「それどころじゃないみたいだよ」

青羽が二人を助けようとした矢先、あらぬ方を向いていた戒が彼女の行動に待ったをかけた。何事かと青羽が戒の見ている方を向くと、そこには何時の間に居たのかサイズの姿が。

「あれ、二人だけか。もっと捕まえられると思ったんだけど……まあいつか」

サイズはそう言うのとゆっくり青羽達に近付いてくる。それを見て青羽もサイズの方に体を向けて腰にバックルを装着した。

「やられたわね、まさかこう来るとは……」
「こうなったら、僕ら二人でやるしかないよ」

青羽と戒はそう言って頷き合うと、覚悟を決めてサイズとの戦いに臨む。正直二人だけでは些か不安だが、かと言ってノーマと弘貴を助けている余裕はない。見捨てるつもりはないが、今はサイズとの戦いに専念せねば。

「「変身！」」
《《Turn up》》

二人はブレイド・ギャレンに変身し、ラウザーを静かに構える。だが決してすぐに突っ込んで行ったりはしない、相手が相手である為何を仕込んでいるか分からないのだ。これまでの戦いで一番学んだ事は、サイズを相手に迂闊な行動は禁物だと言う事である。

「こないの？ だったら……私の方から行くわよ！」

二人が来ないと分かると、自分から二人に向かって斬りかかる。ブ

レイドは咄嗟に出てサイズのラウザーを受け止め、同時にギャレンがラウザーを向けて引き金に指を掛けた。

「フフッ」

瞬間サイズがブレイドに向かって手を伸ばしてくる。しかし彼女の方も相手がこう来るだろう事を予想していたのでお互いの武器がぶつかり合った次の瞬間にはその場から飛び退いていた。空を掴むサイズの手と、ギャレンラウザーから銃弾が放たれたのはほぼ同時。だがサイズはギャレンの射撃を難無く避けてしまった。

「へえ……」

ブレイドの対応に感心した様な声を上げるサイズ。全く予想していなかった訳ではないがこうも容易く躲されるとは思っていなかった。とはいえこの程度の事は些細な問題である。ジャックフォームを得た今唯一の強敵であったブレイドともほぼ互角。それにいざという時はとっておきの切り札を使えば万事上手くいく。

（この勝負……私の勝ちね）

サイズは心の中でそうほくそ笑むと、腕に装着したアブゾーバーから2枚のカードを取り出してジャックフォームにフォームチェンジする。

「遊びはこれでお終い……」

《A b z o r b Q u e e n F u s i o n J a c k》

「さあ、見せてあげるわ。これが私のジャックフォームよ」

2枚の上級カテゴリーのカードでサイズがジャックフォームにフォームチェンジする。ラウザーには大きな変化はないが、頭部と胸部のアーマーが鈍い銀色に変化し首にはマフラーが巻かれていた。

ジャックフォームに変化したサイズにブレイドは一瞬体を強張らせたが、すぐに気を取り直して自分もジャックフォームになるべくアブゾーバーに手を掛けた。

「望むところよ、相手になるわ!」

《A b z o r b Q u e e n F u s i o n J a c k》

ブレイドはジャックフォームになると即座にその場から空中に飛び上がった。紅羽の話ではサイズがなるであろうジャックフォームは高速機動型だろうとのこと、つまり地上での二次元的な動きには強くて空中を取り入れた三次元的な動きにはついてこれない筈。

そう考えて飛び上がった瞬間、Jブレイドは盛大に背中を地面に打ち付けた。

「えっ………?」

一瞬何が起こったのか理解できなくて呆然となるJブレイド。だが直後に襲ってきた痛みが彼女を現実に戻した。

「が……はっ?! ぐ、うう……」

「あ、青羽ッ!」

遅れてやってきた痛みにはJブレイドが悶える中、ギャレンは彼女を助け起こそうとその場を動きだす。しかし彼もまた“高速で動く”

ジャックフォーム
Jサイズによって大きく弾き飛ばされてしまった。

「ぐああああっ?!」

「げほ、く・・・これが、サイズの……」

ここにきて漸くJブレイドもこれがJサイズによるモノであると理解した。まさに目にも止まらぬ高速移動、しかし流石に飛び上がった直後に高速で動くJサイズに叩き落とされるとは……………対抗するには『マッハ・ジャガー』の力が不可欠であろう。

「そう、これが私のジャックフォーム。なかなかいいでしょ? 相手が動くよりも速く、それも一方的に相手を攻撃できるんだから」

自慢するように口にするJサイズにJブレイドは内心で何を偉そうにと言った。アブゾーバーは紅羽が手に入れた物だし、カテゴリーJは自分が手に入れてノーマに渡した物だ。サイズが自力で手に入れた(と思われる)のはカテゴリーQのみである。それなのに全てを自分の力の様に言われるは、彼女にとっても気分のいい事ではなかった。

一先ず、体勢を立て直す意味も込めてJブレイドは『マッハ・ジャガー』をラウズし、Jサイズのスピードについていこうとする。

《M a c h》

Jブレイドが超高速でその場から飛翔すると同時に、Jサイズも超高速で駆けだした。先程はJブレイドが反応が追い付かなかった為にJサイズに叩き落とされたJブレイドだったが、同じヘマは2度もしない。今度はこちらも超高速状態になっているのだ、こうなれば条件は互角どころか空にも移動できる分自分の方に分があった。

「はあああっ！」

Jブレイドは上空から地上を俯瞰しJサイズの姿を確認すると、一気に降下してラウザーを振り下ろす。当然と言うべきかその攻撃は防がれてしまうが、Jブレイドは即座に上昇すると次の瞬間には再びJサイズに斬りかかって行く。Jサイズも反撃しようとするが、元々空中戦に強い訳ではなかったので補足されない様に絶えず移動し続けるのがやっとであった。

その後もしばらくJブレイドはJサイズに対してヒット&アウェイの戦いを続けていた。

一方、取り残された形になったギャレンはというと、超高速で動く二人の戦いについていくのは無理だと判断。ここはノーマ達を助けるようにした方が賢明と考えてそちらに向かっていった。

「二人とも、大丈夫？」

「何とも言えませんね、相変わらず身動きは取れませんし」

「んんんっ！ んんんん」

どうやら抜けだそうとして動き回った結果糸がさらに絡みついたからか、弘貴はほとんど芋虫のようになっていた。ノーマは下手に動く弘貴の二の舞になると判断して抵抗する事を止めている。

ギャレンは一瞬二人を助けるために糸に手を掛けようとしたが、ミイラ取りがミイラになる可能性を考えてその手を止め代わりにラウザーを糸に向けた。

これで切れてくれれば問題ないのだが・・・

「切れると思いますか？」

「さあ、どうだろう？」

あまり期待せず引き金を引くギャレン。案の定銃弾は糸に当たるも、衝撃を全て吸収されてその場に虚しく落下してしまった。予想してはいたが、この糸はこと物理的な力に対しては滅法強いらしい。この様子だとブレイドが斬りつけてもあまりいい効果は得られないであろう。

「なら、これでどうかな」

そう言うのとギャレンは1枚のカードをラウズした。

《Fire》

「弘貴、息止めて！」

言うが早いかギャレンは芋虫状態になっている弘貴に炎を浴びせかける。炎は弘貴を瞬く間に包み込むと、彼を捉えている糸を残さず焼き払っていった。

「~~~~ッ!? だあああ、アチャチャチャッ!?!?」

「思った通り、こう言うのには弱いみたいだね」

体を束縛していた糸が無くなると、弘貴は熱さに慌ててその場で転げ回る。尤もギャレンも弘貴が火傷を負ったりしないよう火力などは調整して焼いていたので、彼のリアクションに反してその体には火傷による傷はないのであるが。

弘貴はノーマと一緒に拘束されていたので、彼を焼いた炎は当然ノーマにも振りかかっている。だが流石に彼女は熱さに悶える事はな

く、寧ろある程度自由に動く箇所の糸を炎で炙って積極的に焼き切っていた。

それから数秒と経たない内に自由になったノーマと弘貴。

「大丈夫かい、弘貴？」

「あちち、何とか・・・」

「戒、助かりました」

3人はそう言うのとJブレイドが戦っている場所に向かっていく。流石にJブレイド一人では同じくジャックフォームを手に入れたサイズ相手に荷が重い。急がなければ。

だが3人がそちらに向かった時、状況は先程とは一変していた。

数分前

JブレイドはJサイズ相手に辛うじて互角な戦いを繰り広げていた。何故辛うじてなのかと言えば、Jサイズがこちらの動きを読んだ行動を始めたのだ。Jブレイドの方も動きがワンパターンにならない様に攻め方をいろいろと変えてはいるが、相手が次第に対応の仕方を心得て来たのだ。

それでも自身の攻め続ける状況を維持し続けたのは、青羽の成長度合いを示すものであるだろう。嘗ての彼女であれば、恐らくここまですぐに喰いついていく事は出来なかった筈だ。

しかし・・・

「いい加減このやり取りも飽きたわね。という訳で・・・」

《S m o g》

「そろそろ反撃させてもらうわ」

Jサイズがカードをラウズした瞬間、周囲に煙幕が立ち込める。斬りかかろうとしていたJブレイドはそれを見て咄嗟に再度上昇した。地面が見えない状況で高速で降下してしまえば最悪地面に頭から突っ込んでしまいかねない。

煙幕が辺りを包みこむ間、Jブレイドは上空で煙が晴れるのをジッと待つ。幸いにも煙幕はすぐに晴れたが、再び地面が見える様になった時Jサイズの姿は何処にも見当たらなかった。

「えっ！？　ど、何処行つたのよ？」

慌てて周囲を見渡すJブレイドだが、何処を見てもJサイズの姿は影も形もない。隠れられそうな場所と言えば倉庫やそこらに生えている気などくらいしか存在しないが、そこに隠れている様子はなかった。となると、一体Jサイズは何処に行つたのだろうか？

見落としている所が無いかと地上を見降ろし続けるJブレイド。そんな彼女がふと自身の真下に目を向けると、ある違和感に気付いた。

（え・・・影が、二つ？……………ッ！？）

最初それを見た時は鳥か何かだと思っていた。だがその影は横に移動するどころか、自分のすぐ近くで徐々に大きくなっている。普通ただの鳥がそんな動きをするだろうか、そこまで考えてJブレイドはその影が鳥などではない事に漸く気付いた。

だがしまったと思ったその時にはもう遅い、次の瞬間Ｊブレイドはその身にＪサイズのラウザーの一撃を受けて地面に落下してしまう。

何故ＪサイズはＪブレイドの上から降って来たのか。それは酷く単純な理由で近くにある倉庫の壁を駆け上った上で上空に飛び上がったのだ。普通に考えればその程度でＪブレイドの上まで飛び上がる事は出来ないが、今のサイズは超高速で走る事が出来る。そのスピードと脚力を生かせば、これほどの事は出来なくはない事だったのだ。先程煙幕を張ったのは、Ｊブレイドの攻撃を中断させるだけではなくこの行動を悟られない為でもあった。

「あがつ?!　ぐ、あ、ああ・・・」

Ｊサイズの一撃に再び地面にたたき落とされたＪブレイドは、斬撃と落下のダメージでうつ伏せに倒れたまま身動きできない。それでも何とか立ち上がろうとするＪブレイドだったが、その背を着地したＪサイズが踏みつけた。

「グッ!?!」

「うふふふ」

足蹴にされたＪブレイドを見てサディスティックな笑い声を上げるＪサイズ。一頻り立ち上がろうともがくＪブレイドの姿を楽しんだＪサイズは、彼女の肩を掴んで無理やり仰向けにする。そして手に持ったラウザーを大きく振りかぶった。

「さようなら」

Ｊサイズは余計な間をおかずにラウザーを振り下ろす。見た目の通り死神の鎌が、一直線にＪブレイドに向かって振り下ろされて行っ

た。

第65話 死神との決着（前編）（後書き）

と言う訳で第65話でした。

サイズはやっぱり苦戦する相手です。ジャックフォームのブレイドでも一筋縄ではいきません。まあ今回は相性の問題も多分にあったんですけどね（^^;）

それでは。

第66話 死神との決着（後編）（前書き）

どうも、黒服です。

今回は連続投稿でお送りします。

第66話 死神との決着（後編）

ダーティ・郊外

「さようなら」

JサイズのラウザーがJブレイドを切り裂かんと振り下ろされる。だがその鎌がJブレイドの首と胴体を泣き別れさせる事はなかった。

「させるか！」

ギャレンがJサイズに向かってラウザーの引き金を引く。銃弾は真っ直ぐJサイズに飛んでいき、彼女の頭部に命中。流石にこれですうにかなる様な事はないが、その一撃をくらったせいでJサイズの行動は止まってしまう。その隙を逃さずカリスが『ドリル・シエル』をラウズして錐揉みキックを放った。

「ハアッ!!」

「チッ!？」

Jサイズは装甲が薄い。先程のギャレンの攻撃は一発だけだったのでもうここまで問題にする程の事ではないが、これをまともに喰らってしまったのは流石にただでは済まないだろう。そう考えたJサイズはJブレイドから足を退けると、急いでその場から離れた。

「青羽、大丈夫ですか？」

「う、ぐ……何とか」

全身を苛む痛みには耐えながら、Jブレイドは何とか立ち上がる。カ

リスはＪブレイドが立ち上がるのを支えつつ彼女に『リカバー・キヤメル』を手渡した。Ｊブレイドはそれをラウズして傷と体力を回復させる。

「ありがとう、助かったわノーマ」

「お気になさらず。それよりも・・・」

「うん、強いわね」

彼女達は改めてサイズの強さを痛感した。例え追い詰めようとも何かしらの方法で自身の不利を覆してしまう。それはつまり決定打を与えられないと言う事なので、攻める側からすれば非常に厄介と言うほかはなかった。

「あゝ、もう動けるようになったの？　もう、しょうがないなあ・・・」

一方Ｊサイズはカリスとアクスが動けるようになった事に声を上げる。尤もその内容に反して声は楽しそうな響きを持っていたが。

「どうせなら一人ずつゆっくり相手してあげる予定だったんだけど・・・いいわ、全員まとめて相手してあげる」

Ｊサイズはそう言ってラウザーを構えた。それを見てＪブレイドは再び『マッハ・ジャガー』のカードをラウズする。

「あたしが喰らい付いてサイズの動きを止めるわ！　だからその間に皆で攻撃して！！」

Ｊブレイドはそう言うとかリス達の反応を待たずに超高速でＪサイズに突撃していく。今度は上空に飛び上がる様な事はせずに低空で

飛行し、時折足で地面を蹴って小回りを利かせながらJサイズに斬りかかって行った。

Jサイズもそれに対抗し、超高速でJブレイドに斬りかかって行く。しかし流石に今度はJブレイドも小回りを利かせた動きをして来たので、得物の関係もあってJサイズは足止めされてしまう。大鎌と言う大振りな武器は、こと小回りが利く相手とはとことん相性が悪い。

「いやあああああつ!!」

「く、ハッ!」

Jブレイドの斬撃を凌ぎつつ反撃するJサイズだったが、彼女はJブレイドだけに集中する訳にはいかない。今度は4対1という状況なのだ。迂闊なことをすれば背後から攻撃されてしまう。

「フッ!」

案の定Jサイズの間隙を見つけたカリスがアローで斬りつけて来た。Jサイズはそれを弾き返すが、そのまま追撃せず後方に飛ぶ。今度はギャレンの銃撃が襲いかかって来たからだ。しかもご丁寧に彼女が避けた先ではアクスが待ち構えている。これを狙ってやったのかどうかは分からないが、ここでアクスの攻撃を受ければただでは済まない。今のJサイズはパワーも落ちているのだ、流石にアスクと打ち合えば押し負けるのはまず間違いないこちらである。

だがJサイズは軽く舌打ちした程度で慌てる様な事はしない。ギャレンの銃撃から逃れつつアクスを見据えると、彼の攻撃を避けつつ飛び上がった。

「イテッ?!」

Jサイズはアクスを飛び越えるだけでなく踏み台にして背後に回ると、駄目押しに背中を斬りつけてすぐに超高速に入る。Jブレイドが追撃して来たのだ。

地上を走るJサイズに低空飛行するJブレイド、両者は一步も譲らず同等のスピードで移動しながら斬り付け合う。一見すると互角に見える戦いだ、その実Jブレイドの方は焦りを感じていた。

(AP・・・持つかな?)

そう、常時超高速まで速さを調整できるJサイズとは違ってJブレイドは超高速する際にはカードを使わなければならない。だがカードを使えばその分APを消費してしまうのだ。現在ブレイドはジャックフォームになっている恩恵もあってAPの上限は上昇しているが、『マツハ・ジャガー』の消費APも決して少なくはない。何度も使っていればAP切れを起こして肝心な時に何も出来なくなってしまうかねなかった。

どうすればいいか、そんな事を彼女が考えている間にJサイズが1枚のカードをラウズする。同時にJブレイドは上空に飛翔してその場から離れた。半ば勘の様な物だったが、その判断は間違っていないと直後に理解する。

《Capture》

この場に来てから最初に奇襲された時と同じ電子音が響く。それと同時にJブレイドが居た所を無数の蜘蛛の糸が襲った。

（これね、紅羽の言ってたカードは！？）

Jブレイドは動き回りながら紅羽の言っていた事を思い出す。絶えず動き回れ、彼女は確かにそう言っていた。その理由がこれなのだろう。実際Jサイズはこちらが動いていないと見るや躊躇いもせずにあのカードを使って来た。全く油断ならない。

Jブレイドは一先ずカリス達と合流し、考えた作戦を口にする。あまり長々と話してはまたあのカードを使われてしまうかもしれないので、早々に内容だけを伝えた。

「ノーマ、サイズからアブゾーバーを奪い取るわ」

「えっ！？ 青羽、それは・・・」

流石に無謀ではないか、カリスはそう言おうとした。確かにアブゾーバーを奪ってしまえばジャックフォームは強制的に解除されるだろうが、相手がそれを許すとは到底思えない。

「分かってる。でもこのままじゃ確実にジリ貧になるわ。マッハの効果だって無限じゃないもの。なら、今は少しでも思い切った行動に出ないと――」

Jブレイドがそう言った瞬間、Jサイズが彼女達に向かって突撃して来た。彼女達の話の内容が聞こえたからか、それとも単純にこれ以上作戦を考えさせない為か、とにかくその所為で2人の会話は一時中断させられる。ギャレンがJサイズに向かって銃撃するが、素早い動きのJサイズにはなかなか当たらない。『スコープ・バット』を使ってみるも弾膜が薄い為躲されてしまう。

これはマズイとJブレイドとカリスが前に出ようとした、その時で

ある。

「ハアアアアッ！」

「なッ?!」

「えっ?!?!」

突然横からCブレイドが超高速で突っ込んで、Jサイズの行動を妨害した。

「あたしのアブゾーバー、返せえッ!!」

「しっこいわ、ね！」

組み付いてくるCブレイドを振り払うようにJサイズはラウザーを振るう。元々サイズとの戦いのダメージが残っていたからか、Cブレイドはその攻撃を受けて大きく弾き飛ばされ、Jブレイドの前に倒れ込んでしまう。

「がっ?!」

「ちよっ、紅羽!?!」

一方のJブレイドもいきなり現れたCブレイドの存在に度肝を抜かれてしまう。病院で療養していると思っていた彼女がこんな所に、それも変身して現れるなど完全に想定外の事態である。

「あんた何無茶してんのよ!?! まだ完全に治った訳じゃないんでしょ！」

倒れたCブレイドを抱き起こしつつ、Jブレイドはそう言った。流石にこれは無茶にも程がある。この相手はちよっとやそつとのこととで倒せるような相手ではないのだ。戦うつもりであるならば、それ

なりに準備と言うモノをしなくてはならない。

対するCブレイドは、肩を竦めつつ手に持った何かを差し出しながら口を開いた。

「あたしにだってね、どうしても我慢ならない時ってのがあるのよ。必要があれば、あたしはいくらでも無茶してやるわ」

「だからって……ちょっと待って、紅羽、それ……」

Jブレイドが凝視している物は、Cブレイドの手に握られた1枚のカード。狼の絵柄が描かれたカテゴリーJのカードだった。CブレイドはそれをJブレイドに手渡す。

「こいつ使って。こいつのジャックフォームならあれにも十分対抗できる筈よ」

「でも、これは……」

「勘違いしないで、ただ貸すだけだから。事が終わったら、ちゃんと返してよ」

そう言ってCブレイドは無理やりJブレイドにカテゴリーJのカードを持たせた。Jブレイドは一瞬何か言いたげな様子を見せたのだが、Cブレイドから……姉妹から託されたそのカードを見て言葉を飲みこみ大きく頷いた。

「分かった、あんたのアブゾーバー……必ず取り返すから」

Jブレイドはそう言うと、Cブレイドから渡されたカテゴリーJをアブゾーバーにラウズした。

《Fusion Jack》

ラウズすると同時にJブレイドが光に包まれる。そして次の瞬間には、オリハルコンウィングを失った代わりに首の後ろにマフラーを付けた、銀色の装甲のジャックフォームブレイド（高速機動Ver）になっていた。

Jブレイドは一頻り自分の体を見渡して具合をチェックする。特に問題はなさそうだ。

視線をJサイズの方に向けると、カリス達を相手に遊んでいるJサイズの姿が確認できた。Jブレイドはその様子を見て超高速でJサイズに近付き斬りかかる。

「ハアッ！」

「ッ！？ あ、あんた、それっ?!」

Jサイズは斬りかかって来たJブレイドの姿に驚愕する。銀色のアーマーにマフラーと己と共通した姿、それは間違いなく高速機動型のジャックフォームであった。

驚愕に一瞬動きを止めるJサイズ、対するJブレイドはそれに構わずさらにラウザーを振るいJサイズを追い詰めて行く。

「紅羽のアブゾーバー、返して貰うわよ！」

「誰がッ!？」

Jサイズは抵抗するが、小回りを利かせて動くJブレイドの動きを捉えきる事が出来ない。例え捉えきる事が出来ても、攻撃は全て受け止められてしまい決定打を与えられなかった。

しかもJブレイドは心の中で一線を越えてしまったからか、先程とは動きがまるで違う。Jサイズは見る見る内に追い詰められ、遂にキツイ一撃を喰らってしまった。

「ガハッ?!」

「貰ったぁ!」

大きく体勢を崩すJサイズ、Jブレイドはその瞬間一気に相手に組み付いてその腕に装着されたアブゾーバーを強引に取り外してしまう。

「しまっ……!?!」

慌てるJサイズだがもう遅い。アブゾーバーが外された瞬間元の姿に戻ってしまうサイズ。

これでもう勝負は決したと言っていいだろう。ブレイドは未だジャックフォーム、そして他のライダー達もまだある程度の余裕を持っている。対するサイズは大分消耗しており、出来る抵抗などたかが知れていた。

有体に言えば詰みと言ったところだろうか。

「これで終わりね。さ、その子の体を返して貰うわよ」

Jブレイドはサイズにラウザーの切っ先を向けて声を掛ける。周囲にはカリスやギャレン、アクスもいる為逃げる事は叶わない。普通の相手であればここで諦めるだろう。

相手が……普通であれば――――

「まだ・・・まだよ、まだ終わっていない!？」

《Dark》

サイズはまだ抵抗の意思を失っていなかった。『ダーク・クロウ』のカードをラウズして闇を周囲に発生させ、その闇を使ってJブレイド達をその場から遠ざける。

この期に及んでまだ抵抗するのかと呆れ半分、関心半分で再びサイズに攻撃を開始する4人のライダー。ギャレンの銃撃がサイズの足止めをし、カリスが怯ませてJブレイドが羽交い絞めにする。そしてトドメとばかりにアクスがラウザーを振り下ろした。

これが決まれば流石にサイズもダウンする筈、その隙に変身を解除させてカテゴリーAを解放してしまえば・・・全てが終わる筈であった。

だが・・・

「ふっ・・・」

サイズは何処までも狡猾だった。アクスの一撃が決まる直前、サイズは自分から変身を解除。音無 利香の姿に戻ってしまった。

「ゲッ!？」

「弘貴ストップ!!？」

慌てて振り降ろそうとしたラウザーを止めるアクス。流石に生身の人間相手にラウザーを振り降ろしたりすれば、相手は簡単にミンチになってしまいかねない。

ギリギリ攻撃をキャンセル出来たアクスだが、次の瞬間利香は自身を抑えつけていたJブレイドをアクスに叩きつけてしまう。

「これあげるわ！」

「うわっ!？」

「ぐえっ?!」

Jブレイドとアクスはもつれ合って倒れ、その間にサイズは悠々と再変身してしまう。そして間髪入れずに再び『ダーク・クロウ』のカードをラウズした。

《Dark》

「ああああああああああっ?!」

「ぐう、ぎ、があああああっ!？」

Jブレイドとアクスはサイズの生み出した闇により防ぎようの無いダメージを受けてしまう。あっという間に形勢逆転、その光景を見たカリスとギャレンは己の読みの甘さをまざまざと思い知らされた。死体を盾に使うような相手である、このような行動に出る可能性だっ

て十分にあった。

「ハッ、セイッ！」

「くっ!？」

サイズはそんな2人にお構いなしにラウザーを振るい、カリスを大きくその場から弾き飛ばしてしまう。

「これ以上は……っ！」

残されたギャレンが必死に抵抗するが、近く中距離ではサイズの方が強い。瞬く間に追い詰められてしまったギャレンは、最終的に膝をついたところで首にラウザーを突き付けられてしまった。

「く、利香……」

「残念ね。いい所まではいったんだけど」

絶体絶命のギャレンだが、Jブレイド達は何もできない。サイズは彼女達の動きを見張っている。ちよつとでもおかしな動きを見せればその瞬間ギャレンの首は切り落とされてしまうだろう。

尤も、このまま何もしなくても切り落とすだろうが。

「一つ良い事を教えてあげる。この体の持ち主の利香って子の精神だけど……もう壊れちゃったわよ」

「なッ!? !?」

突然のサイズの言葉にギャレンは驚愕の声を上げる。

「ちよつと前からだけど、この子の心を感じなくなったのよね。その前まではなんか抵抗してた感じなんだけど……」

「そんな……利香が……」

ギャレンは呆然と呟く。嘘だと言いたかった、こちらを惑わす為の虚偽の言葉だと。

だが受けた衝撃が大きすぎた為、思考が働かない。

そのギャレンに向けて、サイズはラウザーを振り降ろそうとした。

「大丈夫よ、死んじゃえば悲しみも忘れるわ」
「戒ッ!？」

今にも殺されそうな様子のギャレンに、慌てた声を上げるが助けようにも間に合わない。

「じゃあね、戒」

ギャレンに向かって振り下ろされるラウザー。Ｊブレイド達は一瞬首を切り落とされた未来を想像してしまったが――

「えっ………?」

その瞬間、サイズは何が起こったのかまるで分からなかった。たった今殺される寸前だったギャレンも、傍から見ていたＪブレイド達も同様だ。

ギャレンに向かって振り下ろされたラウザーが、外れたのである。

一瞬Ｊブレイド達は態と外したのかと思った。敢えてギリギリのところを外して、精神的にギャレン達を追い詰めて遊んでいるのかとだがサイズの反応を見るに態とではなく、それどころかサイズにとっても理解できない事態であるらしい。

しかし一体何故？

あまりの事態にサイズですら呆然としたその時――

「何で？ 今、私ちゃんも『戒、今!！』ッ!?!?!？」

サイズの口から、明らかにサイズの物とは異なる言葉が紡がれた。
サディスティックさすら感じさせる、カテゴリーAの物とは明らかに違う真実人間の放つ言葉である。それが意味する物は・・・

「あんた、どうしてッ!!?」

「まさか・・・ッ!? 今だッ!!」

サイズが驚愕している間に、ギャレンはサイズのバックルに手を伸ばして強制的に変身を解除させる。サイズの口から紡がれたサイズ以外の言葉、それはその体の持ち主である音無 利香本人の言葉に他ならない。そう、彼女はまだ生きているのだ。カテゴリーAに押さえつけられその心を侵食されながらも存在し続け、サイズを止めようとするJブレイド達を手助けする最大のチャンスを待っていたのである。

「あぁっ?!」

変身を解除され利香の姿に戻る。ギャレンはそのままサイズバックルからカテゴリーAのカードを取り出してJブレイドに向かって放り投げた。

「青羽ッ!!」

「オッケー!!」

《Remort》

「ついでにこれでッ!!」

『リモート・テイピア』の効果で放り投げられたカテゴリーAからアンデッドが解放された。さらにギャレンは念には念をとバックルに銃撃を加えて完全に破壊する。これで完全に繋がりが断てる。

「あ．．．．」

「利香ッ!？」

アンデッドが解放された瞬間、糸が切れた人形のようにその場に倒れる利香。ギャレンはそんな彼女を支えて必死に呼びかけた。精神が生きている事は分かったが、肉体的に大丈夫かまだ分からない。直に彼女が無事かどうかを確認できなければ、安心はできなかった。

「利香、しっかりしてくれ利香ッ!」

激し過ぎない程度に揺すって呼び掛けるが、利香は死んでしまったかのように反応を見せない。まさか手遅れだったのでは、そんな不吉な想像が脳裏を過った矢先、彼女の瞼がピクリと動いた。

「う、ん．．．」

「利香ッ!! 大丈夫?」

「か、い．．．．?」

ギャレンの呼び掛けにゆっくりと目を開く利香。彼がその様子に内心で歓喜し、しかし表面上は優しく呼び掛けると彼女はぼんやりとだがハッキリと彼の名前を口にした。

「ああ、そうだ。僕だ、戒だよ!」

「かい．．．戒、戒ッ!!」

次第に意識がはっきりしたのか利香はしっかりと彼の名を呼ぶと、目に涙を浮かべながらギャレンに抱き付いた。それは間違いなくカテゴリーAの呪縛から解放されたと言う事。ギャレンもそれを察して仮面の奥で涙を流しながら彼女の体を抱きしめる。

「よかった、本当に・・・本当に良かった」

「戒・・・ゴメン、あたし・・・」

「いいんだ、気にしなくても。君が無事ならそれで」

漸く取り返した恋人を優しく抱きしめながら言葉を掛けるギャレン。その彼の耳に、カテゴリーAの唸り声が聞こえて来た。見ると解放されたカテゴリーAが利香を求めるかのように手を伸ばしている。

そうはさせないとギャレンが立ち塞がった時、彼の前にJブレイド・カリス・アックスの3人がさらに立ち塞がった。

「おゝっと、もう彼女はあんたの操り人形じゃないわ。大人しく諦めなさい」

各々武器を構えるJブレイド達。今にもカテゴリーAに飛び掛からんとする彼女達だったが、ギャレンがそこで待ったをかけた。

「待ってくれ青羽、ここは僕一人にやらせてくれ」

「えっ!?! でも・・・」

「それと、アブゾーバーも貸してほしい。今度こそ徹底的に封印したいんだ」

「ちよっと待ってよ! 貸すって言ったって、そもそも戒は上級カテゴリー・・・」

Jブレイドが知っている範囲でギャレンが持っているカードには、上級カテゴリーはJしか存在しない。それではアブゾーバーがあっても意味ないだろうとJブレイドが言おうとした時、ギャレンがカテゴリーJとカテゴリーQのカードを取り出した。

「はっ!?! ちよっ、何時の間にそれッ?!」

「この間、朝月って人が来た時のサイズと戦った後、偶然拾ったんだ。多分サイズが持ってたカードを落としたんだと思う。これなら僕もジャックフォームになれるんだ。今回だけでいい！」

ギャレンの言葉に、Jブレイドはやれやれと言いたげに肩を竦める。果たして彼はここまで熱意のある人物であっただろうか。いや、恋人の前だから何時もより気合が入っているだけかもしれない。

「分かったわ。今回だけだからね」

「ありがとう、青羽」

ギャレンはJブレイドからアブゾーバーを受け取った。Jブレイドは瞬間通常のブレイドの姿に戻り、ギャレンはそのブレイドの前で自身の腕にアブゾーバーを装着する。

そして迷うことなくカテゴリーQをアブゾーバーに装填し、カテゴリーJをスラッシュした。

《A b z o r b Q u e e n F u s i o n J a c k》

ギャレンが持っているカテゴリーQ『アブゾーブ・サーペント』とカテゴリーJ『フュージョン・ピーコック』の力でギャレンの姿がそれまでの物とは異なるものに变化していく。胸部と頭部の装甲は金色に輝き、その背にはJブレイドの物とは色と形状が違うオリハルコンウィングが3対装着される。ラウザーは銃口の下から金色の刃『ディアマンテ・エッジ』が出現した専用の強化ラウザーに変化し、Jギャレンになった。
ジャックフォーム

「これが・・・よしッ！」

Jギャレンは強化変身が完了すると、ラウザーをカテゴリーAに向けて引き金を引いた。次々と吐き出される銃弾がカテゴリーAの分厚い表皮を削り取っていき、着実にダメージを与えて行く。さらにJギャレンは銃撃しながら接近すると、銃身の先に付いた刃で斬り付けた。

「ハッ！」

刃自体は短いので致命傷を与える事は難しそうだが、接近戦が強化されたのは大きな利点である。Jギャレンも強化された自身のライダーシステムに満足そうに頷く。

「今までよくも利香の体を使って好き放題してくれたね。まずは・・」

《U p p a r》

「お前に傷付けられた多くの人達に分ッ！」

Jギャレンの強力なアッパーがカテゴリーAの顎を捉え、上空に吹き飛ばす。それだけで済まず筈が泣く、Jギャレンはさらにカードをラウズした。

「次にこれは、お前に今まで痛い目に遭わされた青羽達に分ッ！」
《B u l l e t》

空中のカテゴリーAに寸分違わぬ精度で撃ち出される強化弾。強力な銃弾がその身に突き刺さり空中で苦悶の声を上げた。

「最後にこれは――」
《D r o p》

そしてトドメにJギャレンは空中に飛び上がると、オープントレイから2枚のカードを取り出す。

「お前に今まで操られて望まない戦いをさせられて来た――」

《Fire》

繰り出すは必殺のコンボ技。現在彼が出せる中で最強の威力を持つ、最大の必殺技。

「利香の分だッ!?!?」

《Burning Smash》

カテゴリーAのさらに上、上空から必殺の蹴りを放つJギャレン。炎を纏った足が見る見る内にカテゴリーAに近付いていき……

「セリヤアアアアアッ!!」

Jギャレンの放った『バーニング・スマッシュ』が見事にカテゴリーAに決まり、空中で爆発を起こした。爆炎からは即座にJギャレンが飛び出しゆっくりと地面に着地し、遅れてバツクルが開いたカテゴリーAが落下してくる。Jギャレンはそれを見てコモンブランクを取り出すと、何も言わずにカードを投げて封印した。

眩い光と共に封印されるカテゴリーA。封印が完了して手元に戻って来たカードを見て、Jギャレンは徐に口を開いた。

「僕らの勝ちだ。人間を嘗め過ぎたね」

そう言うとJギャレンは変身を解除しながら踵を返し、同じく変身を解除して喜んでいる青羽達の下に歩いていった。

第66話 死神との決着（後編）（後書き）

と言う訳で第66話でした。

まさかの青羽ブレイドがウルフでジャックフォームです。超高速で動き回る相手との戦いでは同じように超高速で動き回るか、相手の一撃を受け止めて反撃するの二つがあります。今回は前者ですね。

決着は操られていた利香からの支援が決め手となりました。そこはかとなく劇場版・さらば電王のワンシーンをイメージしてます。

サイズは見事に撃破し、利香も無事。結果はハッピーエンドとなりました。これにてサイズは退場となります。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第67話 来るべき別れ（前書き）

どうも、黒服です。

最近COD MW3に嵌ってます。あの映画の登場人物になったかのような臨場感が堪らなく面白い！

第67話 来るべき別れ

ダーティ・西側出入り口

遂にサイズとの戦いに決着を付けた青羽達。助け出された利香はカテゴリーAを封印した後、安心したのか気を失ってしまった。戒が急いで病院に連れて行った所、どうやら体力的・精神的な消耗が激しかったが命に別状はないとのこと。数日入院していれば問題ないレベルと聞いて全員ホッと一息ついた。

そして翌日・・・

「そっか、やっぱりここでお別れなんだ」

「うん。こればかりは流石に………ね」

街の西側から出る出入り口に青羽達は集まっている。ただしバイクを用意しているのは青羽、ノーマ、弘貴の3人のみであり、戒だけは旅支度も何もせず街の入り口に佇んでいた。

理由は一つ、彼はここで青羽達と別れる事になったのだ。

考えてみればそれは当然の事、戒の旅の目的は恋人である利香を助け出す事である。それもただ助け出すだけではなく彼女を家まで送らねばならない。

別に青羽達がそれに付き合ってもいいのだが、数日はこの街に釘付けにされてしまう。自分の都合だけで彼女達を何時までもこの街に縛り付ける事を戒は良しとしなかったのだ。故に彼はここで青羽達に別れを告げる事にした。

「なんだか寂しくなるわね。ここでお別れってのも・・・」

「兄貴、なんなら俺等も付き合うッスよ？俺ら別にそこまで明確な目的地がある訳でもないんですし・・・」

「ありがたい、弘貴。でもこれは僕の問題なんだ。僕の都合に何時までも君達に付き合わせるのも悪いからね」

恐らくこのまま共に居続けては、また何処かで必ず青羽達に頼ってしまう。彼としては利香を助け出せただけで十分であり、これ以上彼女達に頼るのは心苦しい所もあったのだ。何より、利香を送り届ける位は自分の力で成し遂げねば男が廢る。

「そう言う訳だからさ、青羽達は青羽達の旅を続けてよ」

「戒・・・うん、分かった。縁があったらまた会うかもしれないし」

そう言うのと青羽は戒に手を差し出す。それが何を意味しているのかを察した戒は、笑みを浮かべながら自分も手を出して彼女の手を握り握手した。

「いつか・・・また会おうね、戒」

「うん。また・・・いつか」

二人は固い握手を交わすと、お互い背を向けてその場を離れて行った。いずれ必ず、また出会うと信じて。

街道

ダーティを離れてから早数時間、青羽達3人は今のところ問題なく

旅を再開していた。その最中、ノーマがふと思い出したように青羽の姉妹、紅羽の事を口にする。

「そう言えば、紅羽さんはどうしたんですか？ 昨日アブゾーバーとカードを返した後姿が見えませんでしたか？」

「紅羽ならあの後荷物まとめて、今日朝一で街出てっちゃった」

あの後、青羽は紅羽に借りていたカードを取り返したアブゾーバーと共に返していた。その後彼女は青羽達と別れ、それ以後青羽達の前に姿を現さなかったのだが、青羽にだけは顔を見せていたらしい。

「何だかんだで今回の事はちょっとは堪えたんじゃないの？ あの子どもプライド高いし」

そんな他愛の無い事を話しつつ一行は先へと進んでいく。

その頃……………

青羽達が走っている街道に向かうように飛んでいるヘリがあった。黒塗りされた機体の下部には機銃が搭載され、一目でそれが民間の物ではない事に気付く。

そのヘリの中で、一人の男がぼやいた。

「まったく、面倒な事になりやがったなあ」

「おや、恭司さんは困難な仕事の方がお気に召す方と存じておりましたか？」

「面倒事と面倒な仕事じゃ、意味が違うんだよ」

ばやいた人物は黒木 恭司、そしてヘリの中にはおなじみの晃と怜奈の姿もある。

彼らが乗っているヘリは専用カスタムされたステルスヘリであり、必要とあれば消音機能でローター音を無音に近いレベルで消す事が可能となっている。彼らは時に隠密行動も求められる任務をこなす為、このような装備が非常に充実しているのだ。

彼らがこのヘリに乗っていると言う事は、即ち彼らは何かしらの任務を帯びていると言う事である。だがそれにしては恭司が乗り気でないのが気になる。彼はなんだかんだ言いつつ仕事にはプライドを持って接し、どんな任務でも確実にこなす事を信条としているのでこの様な事は非常に珍しかった。

「技術研究部の馬鹿共の尻拭い、どうなるか分からない実験を強行して失敗したからその後始末をやれてんだぞ？　こんな軍隊の仕事だろうがよ、俺等に回す様なもんじゃねえっての」

「……………止める？　燃料……………まだ」

愚痴る恭司の様子にそれまで黙って（と言ってもいつも黙っているが）操縦していた怜奈が首を傾げながらそんな事を呟いた。彼女としては別に任務がどうなろうと知った事ではなく、ただ恭司と一緒にいらればそれで良いのである。ある意味では隠密調査部一の問題児と言えるかもしれない。

対する恭司は、彼女の言葉にしばし考え込む振りをする。恐らくここで彼が止めると言えば、彼女は本気でこのまま引き返してしまうだろう。それはつまりそれだけ愛されていると言う事でもあり嬉しいのだが、生憎とそれにすんなり頷く事が出来ないのも事実であった。

「……そう言う訳にもいかねえだろ。曲りなりにも正式な任務として言い渡されたんだ。なら、やる事はちゃんとやらねえとな」

何だかんだ言いつつ、『任務』と言われてやれと言われたら、やらねばどうにも気が済まない。これが自身の仕事に対するプライドによるモノなのか、はたまた単なる職業病か。まあ彼の性格を考えれば恐らくは前者であろうが。

「それより、尻拭いって俺等具体的に何すりゃいいんだっけ？」

「簡単なお仕事ですよ。実験施設から逃げ出したサンプルを始末する。で、始末した後何か残った物があればそれを回収してくる、たったこれだけ」

恭司の言葉に、晃が答える。内容は確かに簡単そうだ。やる事は大体彼らが何時もやっている事とそう変わらない。

ただ恭司には一つ気になる事があった。彼らが相手するべき存在の事である。

「サンプル？　なんだそりゃ？　エイリアンでも捕まえてたのか？」

普通、実験施設から逃げ出したと言えば被検体とかそういう言い方をする。それがサンプルという言葉を使うと言う事は、彼らが相手にしようとしている者は一体何なのか？

訝しげな顔をする恭司に、晃は予め渡されていた資料に目を通しながら補足を加えた。

「えーっと、どうやら科学者さん達はライダーシステムに新しい可

能性を見出そうとしていたようですね。バックルにアンデッドとは関係ない物を組み込んで、その状態で変身させようとしたみたいですよ」

「で？」

「その後は御想像の通り、変身した人が大暴れして施設から逃げ出したそうです」

晃の言葉に恭司は盛大に溜め息をつく。結局頭でっかちな科学者が全ての発端である。彼らが問題を起こした事は今回だけではない、大なり小なり何度も彼らは厄介事を恭司達に押し付けて来たのだ。しかも内容は大抵しようもない事ばかりで、時に馬鹿らしく思えてくる事さえある。

恭司は晃から書類を取って流し読みした。案の定その内容は大したものない事ばかりであり、溜め息が出るのを押さえられなかった。精々が、実験に付き合わされた装着者が哀れだと思える程度である。飽く迄も思う程度、同情まではしない。

とその時、ふと彼は資料に書かれているサンプルとやらのある部分に注目した。今回相手にするサンプルとやらはどうもダガーバックルにあるものを組み込んで変身させた結果暴走したらしい。そして暴走を始めると目に入るもの全てに攻撃を仕掛ける化け物になったとか。

だがそんな事は関係ない。彼が気にしているのはバックルに組み込まれている物。それを見た時彼は妙に懐かしい物を感じていた。

夜・街道

その日の夜、青羽達は何時よりも少し寂しい夕食を取っていた。弘貴があまり料理のできないタイプの人間なので、地味に青羽達の負担が増えた事になる。

「戒、大丈夫かな？」

食べ終わって軽く寛いでいる時、青羽がふとそんな事を口にする。勿論彼の事だから大丈夫だろうとは思うが、離れると些細なことでも心配になったりするものだ。また厄介事に巻き込まれたりしていただければいいのだが・・・

「まあ心配するほどの事はないでしょう。どの道彼はしばらくあの街に留まるのですし、そうそう変な事にはなりませんって」

青羽の言葉にノーマがフォローを入れる。彼の實力は青羽達だって知っているし、街には彼だけではなくフリーのライダーも協会のライダーもいるのだ。また利香が攫われる等と言う事はそうそうないであろう。

彼女から励ましの言葉を受けた青羽はそれにある程度の元氣を取り戻し、同時にある事に気付いた。

「そう言えばさ、ノーマ結局持ってきたの？」

「当然です。こんなチャンスは滅多にありませんからね」

そう言ってノーマは2枚のカード・・・彼女が本来持っていたカテゴリーJのカードに加えて、サイズが持っていたカテゴリーQのカードを取り出す。

「あんたもちゃっかりしてるわよね、実質持ち主の無くなったカー

ドを漁って必要な物持ってっちゃうんだから」

「おや、そんなにおかしい事でしたか？」

「ううん、そんなことないわ。正直上級カテゴリーのカードはもったいなかったからね」

実はサイズが使っていたカードに関しては、今ノーマが持っているカテゴリーQ以外は全て協会に売り払ってしまった。あのままほったらかしにしても仕方がないし、カテゴリーQに関してはかなり魅力的なカードだったからだ。

カテゴリーAも同様に協会に売り払っている。問題があったのはバツクルの方でありカードには問題はない。ならば売ってしまった方が金銭面でもかなり楽になると言うモノだ。

「そう言えば、俺等次何処に行くんスカ？」

ここで弘貴がふと思い出したように口を開いた。思えば特に行き先等を考えずに街を出たため、このまま行くと何処に着くかなど全く考えていなかった。ノーマは彼の言葉に荷物から地図を取り出すと、現在地から次に辿り着くだろう街を探し出す。

「このまますすんでいく、と……ああ、多分ここですね」

次に辿り着く街を見つけたノーマは、二人にも地図を見せながら次の街を指差した。青羽は何気なくその街の名前を口に出す。

「セント……ヴィーン、ねえ」

青羽が何気なく呟いたその街で、彼女達は運命的な出会いを果たす事になるが――――

彼女達はまだその事を………知らない。

第67話 来るべき別れ（後書き）

と言う訳で第67話でした。

戒とは今回でお別れです。元々青羽達と戒は利害の一致で旅を共にしていた訳ですしね。でも飽く迄一時的なモノなので、いずれ再び登場する予定です。

次に青羽達が向かう場所はセントヴィーン。さてそこで何が待っているのか？ キバ編にも名前が出てきた街ですが・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3207/>

仮面ライダー剣&キバ 青く輝く炎

2011年11月21日17時04分発行